

日本美術年鑑

昭和 3 1 年 版

美術研究所



安井曾太郎 「秋の城山」

(37.5×45.5 Cm)

序

日本美術年鑑は東京国立文化財研究所美術部、即ち美術研究所が、従前からその調査研究事業の一部として計画従事していたもので、昭和十一年より発行を開始し、今年ここに昭和三十一年版を刊行する運びとなつた。

この年鑑の調査と編輯とは、主として当研究所の第二研究室がこれに当り、古美術関係の項目は第一研究室と資料室とが担当した。

この年鑑の編輯に当つては、諸官庁や美術関係の公私機関をはじめ、多くの学者作家等の御助力を煩わしたが、殊に文化財保護委員会事務局、文部省社会教育局藝術課、日本藝術院、国立近代美術館、東京・京都・奈良の各国立博物館、各地の諸新聞社、雑誌社、美術館、研究所、学校、美術団体の御援助に待つところが多かつた。更にまた大蔵省印刷局は、この年鑑の体裁上印刷技術の困難な点多きにかかわらず、今年も引続きこれを快諾された。ここにこれらの諸機関に対して深く感謝の意を表する。

なおこの年鑑の編輯については常に意を注いで、記事採択の適正と記事内容の充実とに努めているが、その中に思わぬ過誤や不備の点がないとも限らない。これに対しては一般識者の叱正と御教示とを切に希望する次第である。

昭和三十一年一〇月

東京国立文化財研究所長

田 中 一 松

凡 例

一、本年鑑は、昭和三〇年一月から同年十二月に至る一年間の美術界の主要な出来事を掲載した。

一、本年鑑の内容は、「図版」「本欄」「附録」の三部に大別し、「図版」には右期間中に発表された注目すべき作品の写真を主として掲載し、「本欄」は、わが国美術界の全般について、全体の展望、主要な事件、展覧会、物故者、発表された文献などを記載した。

「附録」は、便覧として美術関係の法規、諸施設、団体、美術家及美術関係者名簿などを集録した。便覧の性質上この欄は原則として現在の記録(昭和三十一年一〇月)に従っている。

一、本年鑑であつかう美術の範囲は、一般に行われる狭義の解釈に従い、絵画、彫刻、工藝、および建築に限っている。絵画のうち、日本画と洋画の区別は困難な場合もあるが、だいたい現代の慣習に従った。建築はわれわれの注意をひく範囲にとどめた。

一、人名を記す場合は、すべて敬称をはぶいた。

一、美術文献目録、および美術家及美術関係者名簿についてはそれぞれ項目の初めに凡例を記した。

目次

口 繪……………一

序……………一

凡 例……………三

目 次……………四

本 欄

昭和三〇年美術界概観……………一

現代美術……………一

古 美 術……………九

昭和三〇年美術界年史……………一三

附 表……………一九

新指定国宝一覽……………一九

新指定重要文化財一覽……………二七

重要無形文化財指定保持者認定一覽……………四三

文化財保護委員会昭和三〇年度補助金交付一覽……………四四

昭和三〇年度国立美術館、博物館新収品目録……………五一

第一一回日本美術展覧会、出品、入選、陳列点数表……………五五

第一一回日本美術展覧会審査員一覽……………五五

各大学美術関係講義題目……………五六

主要美術雑誌色刷一覽……………五八

美術展覧会……………六四

物 故 者……………一五〇

美術文献目録……………一五九

凡 例……………一五九

目 次……………一六〇

定期刊行物所載文献……………一六一

現代美術・西洋美術……………一六一

東洋古美術……………一八三

単 行 図 書……………二〇一

現代美術・西洋美術……………二〇一

東洋古美術……………二〇四

附 録 (便覽)

美術関係法規……………二〇七

文化財保護法……………二〇七

文化財専門審議会令……………二二九

文化財専門審議会議事規則……………二二〇

文化財専門審議会常任委員会設置規則……………二三一

文化財専門審議会諮問事項等取扱規則……………二三一

文化財保護委員会事務局内部組織……………二三四

東京国立博物館組織規程	三三	美術関係学会	二五九
京都国立博物館組織規程	三六	美術教育施設	二六〇
奈良国立博物館組織規程	三九	学 校	二六〇
東京国立文化財研究所組織規程	四〇	実 技 研 究 所	二六三
奈良国立文化財研究所組織規程	四〇	美術観覧施設	二六六
文部省社会教育局藝術課	四一	東京画廊一覽	二七七
国立近代美術館	四一	名古屋画廊一覽	二七六
日本芸術院	四三	京都画廊一覽	二七六
日本美術展覧会	四六	大阪・神戸画廊一覽	二七六
正倉院評議会規程	四八	美術団体一覽	二七六
帝室技芸員	四九	美術家及美術関係者名簿	二九
武力紛争の際の文化財の保護のための条約	四九	美術関係定期刊行物一覽	三五
美術関係研究施設	五		

目 次

1 鶉(3回成和会展)	宇田 荻 邨
2 浅春(3回成和会展)	小野 竹 喬
3 五月の畑(7回読売日本アンデパンダン展)	長 崎 莫 人
4 曙(3回成和会展)	福田平八郎
5 晨光(3回成和会展)	金 島 桂 華
6 夜の樹(5回新興美術院展)	小林菓居人
7 若竹(1回松竹梅展)	川 合 玉 堂
8 紫昏図(1回松竹梅展)	川 端 龍 子
9 溪澗(5回未更会展)	山 田 申 吾
10 双龍争珠(1回松竹梅展)	横 山 大 観
11 鉄線花(15回日本画院展)	望 月 春 江
12 二匹の仔犬(5回未更会展)	高 山 辰 雄
13 かんむりづる(3回国際美術展)	稗 田 一 穂
14 金の鍵銀の鍵(3回国際美術展)	堂 本 印 象
15 氷(3回国際美術展)	福 田 平 八 郎
16 牛(3回国際美術展)	丸 木 位 里
17 金魚(8回彩交会展)	中 村 岳 陵
18 まり藻と花(8回彩交会展)	山 口 蓬 春
19 朝顔(7回清流会展)	鎭 木 清 方
20 風蕭々分易水寒(40回日本美術院展)	横 山 大 観
21 壁(40回日本美術院展)	岩 橋 英 遠
22 鴻門会(40回日本美術院展)	安 田 鞆 彦
23 蕾(7回清流会展)	小 林 古 径
24 月(40回日本美術院展)	小 倉 遊 亀

25	遙拜(40回日本美術院展)	中村貞以
26	宵(40回日本美術院展)	清原齊
27	巖山と椿山(40回日本美術院展)	太田聰雨
28	M先生(40回日本美術院展)	堅山南風
29	出をまつ(石橋)(40回日本美術院展)	前田青都
30	冠鶴(40回日本美術院展)	馬場不二
31	城(40回日本美術院展)	奥村土牛
32	暮秋(40回日本美術院展)	今野忠一
33	私の花(27回青龍社展)	丹青子
34	銀屏風(27回青龍社展)	安西啓明
35	黒い太陽(27回青龍社展)	小島鼎子
36	月城(27回青龍社展)	山崎豊
37	小鍛冶(27回青龍社展)	川端龍子
38	鼠ヶ岡の女(27回青龍社展)	堀口幸子
39	おんな(19回新制作展)	朝倉撰
40	陶土の丘(19回新制作展)	麻田鷹司
41	たそがれ(19回新制作展)	野崎貢
42	水鳥屏風(19回新制作展)	吉岡堅二
43	駈ける(19回新制作展)	加山又造
44	滝(19回新制作展)	福田豊四郎
45	山の思い出(19回新制作展)	堀文子
46	大原女(19回新制作展)	広田多津
47	北濤(19回新制作展)	山本丘人
48	瀑(11回日本美術展)	杉山寧
49	宋磁(11回日本美術展)	伊東深水
50	桜島(11回日本美術展)	西山英雄
51	飛鴨(11回日本美術展)	麻田辨次
52	虹鱈(11回日本美術展)	川本末雄
53	薄(11回日本美術展)	徳岡神泉
54	海浜(11回日本美術展)	大山忠作
55	光昏(11回日本美術展)	東山魁夷
56	仔馬(11回日本美術展)	山口華楊
57	六世歌右衛門(11回日本美術展)	橋本明治
洋画		
58	脱出(7回読売日本アンデパンダン展)	利根山光人
59	西方の人(5回モダンアート展)	朝妻治郎
60	病室(5回モダンアート展)	中井幸一
61	朝(15回美術文化展)	清川泰次
62	休む人(5回モダンアート展)	勝呂忠
63	作品(5回モダンアート展)	小松義雄
64	「顔」連作の内受難者(15回美術文化展)	土井俊生
65	鳥(15回美術文化展)	笹川由為子
66	ことも(個展)	小山田二郎
67	闘争(41回光風会展)	笹岡了一
68	雪余(41回光風会展)	小糸源太郎
69	一の谷新緑(41回光風会展)	辻永
70	漁港(41回光風会展)	山喜多二郎
71	コートの婦人像(41回光風会展)	森田元子
72	無題(14回創元会展)	鈴木千久馬
73	少女座像(14回創元会展)	中野和高
74	風景(32回春陽会展)	田中岑
75	ひとつの椅子(32回春陽会展)	藤井令太郎
76	蟹と遊ぶ娘達(32回春陽会展)	三雲祥之助
77	嫁(32回春陽会展)	中谷泰
78	新しい現実(29回国画会展)	須田剋太
79	幻覚A(32回春陽会展)	南大路一
80	ヴェニス落陽(29回国画会展)	益田義信
81	牛を屠す(32回春陽会展)	水谷清
82	動く森(29回国画会展)	宇治山哲平
83	山羊(29回国画会展)	香月泰男
84	靴屋(3回国際美術展)	海老原喜之助
85	古い巴里の街角(個展)	平賀亀祐
86	マジヨリカ壺(個展)	中川一政
87	しのめ(3回国際美術展)	井上長三郎
88	捧げもの(3回国際美術展)	岡鹿之助
89	燃える人(3回国際美術展)	岡本太郎
90	浮游する群(3回国際美術展)	杉全直
91	白の上に(3回国際美術展)	村井正誠
92	母子(3回国際美術展)	森芳雄
93	顔(3回国際美術展)	福沢一郎
94	構成(黄)(3回国際美術展)	山口長男
95	あらそい(3回国際美術展)	脇田和
96	裸木と海(3回国際美術展)	高島達四郎
97	孤独者のすまい(3回国際美術展)	山口薫
98	形態B(3回国際美術展)	鶴岡政男
99	ヨットハーバー(個展)	野口弥太郎
100	集(40回二科展)	多賀谷伊徳
101	浜(40回二科展)	吉井淳二
102	鬼とゆかた(40回二科展)	桂ユキ子
103	女Ⅹ(40回二科展)	芥川紗織
104	ふるさと(40回二科展)	鷹山宇一
105	土(10回行動美術展)	江見絹子
106	待つ人(10回行動美術展)	佐藤真一
107	大雪山と山峡(10回行動美術展)	田辺三重松
108	ハムレットに於ける芥川比呂志(10回行動美術展)	向井潤吉
109	現実A(10回行動美術展)	津高和一

134 133 132 131 130 129 128 127 126 125 124 123 122 121 120 119 118 117 116 115 114 113 112 111 110

柳(10回行動美術展)……………田中阿喜良
 地に座す人達(10回行動美術展)……………山中春雄
 海と漁船(1回一陽会展)……………鈴木信太郎
 海三題ノ内C(1回一陽会展)……………高岡徳太郎
 星座(1回一陽会展)……………野間仁根
 埴輪に依る作品F(7回立軌会展)……………榎戸庄衛
 サンタ・マリア・デルフォーレ(7回立軌会展)……………飯島一次
 クレインの風景(7回立軌会展)……………牛島憲之
 牛を売る(7回立軌会展)……………須田寿
 読書婦人(17回一水会展)……………木下孝則
 初秋の阿蘇山(17回一水会展)……………田崎広助
 水車(17回一水会展)……………木下義謙
 北方の港(17回一水会展)……………中村善策
 水(19回新制作展)……………萩太郎
 ニューヨークの冬(17回一水会展)……………石井柏亭
 働く人と家族(19回新制作展)……………小磯良平
 作品A(19回新制作展)……………川端実
 はらつば(19回新制作展)……………宮脇公実
 少女(19回新制作展)……………内田武夫
 神々の争い(19回新制作展)……………赤穴宏
 浮標(19回新制作展)……………田中田鶴子
 山湖(23回独立展)……………小林和作
 愛犬の死(23回独立展)……………居串佳一
 漁港入口(23回独立展)……………鈴木保徳
 女と花(23回独立展)……………児島善三郎

155 154 153 152 151 150 149 148 147 146 145 144 143 142 141 140 139 138 137 136 135

窪八幡(23回独立展)……………須田国太郎
 見高浜(23回独立展)……………林武
 鳥(23回独立展)……………高周惣七
 座婦(23回独立展)……………山本正
 顔をかくす女(23回独立展)……………鳥海青児
 秋華(9回二紀会展)……………佐伯米子
 雨の海(9回二紀会展)……………鍋井克之
 たたかい(19回自由美術展)……………難波田龍起
 人間群像(9回二紀会展)……………宮本三郎
 架(19回自由美術展)……………糸園和三郎
 秋(東大構内)(9回二紀会展)……………栗原信
 プロヴァンスにて(野)(19回自由美術展)……………末松正樹
 ミギルギツチョコ(19回自由美術展)……………小野忠弘
 アトリエにて(11回日本美術展)……………鬼頭鍋三郎
 運河(11回日本美術展)……………国領経郎
 赤いブラウス(11回日本美術展)……………中村琢二
 発走迫る(繋駕)(11回日本美術展)……………中畑艸人
 窓辺の像(11回日本美術展)……………中村研一
 道化は檻から出られない(11回日本美術展)……………上田哲農

版 画

若木(個展)……………長谷川 潔
 草の中のとかけ(32回春陽会展)……………古川 龍生

174 173 172 171 170 169 168 167 166 165 164 163 162 161 160 159 158 157 156

門(29回国画会展)……………斎藤 清
 柳緑華紅頰・万朶韻板画屏風(部分)(3回国際美術展)……………棟方志功
 西瓜(3回国際美術展)……………浜口陽三
 白鳥(29回国画会展)……………関野準一郎

回顧・遺作展

晩江獵漁図(鉄斎展)……………富岡鉄斎
 海岸の子供(朝雲展)……………山崎朝雲
 唐様三部作(藤島展)……………藤島武二
 生々流転(部分)(大観展)……………横山大観
 酔物(劉生展)……………岸田劉生
 天保歌妓(松園展)……………上村松園

商業美術

ポスター(5回日宣美展)……………広橋桂子
 ポスター(グラフィック55展)……………山城隆一
 ポスター……………山名文夫
 ポスター……………早川良雄
 ポスター(5回日宣美展)……………清水和久
 ポスター……………大橋 正

海外作家国内展

赤い西瓜(JAN・クリティック賞展)……………パパール
 色の中に飛び込む人たち(三人展)……………レジェ
 戸棚、寝椅子(三人展)……………ペリアン

194 193 192 191 190 189 188 187 186 185 184 183 182 181 180 179 178 177 176 175

黒いバックに三人の女流音楽家
たち(綴織)(三人展)……………コルビュジェ
イタリア(現代イタリア美術
展)……………シロロニ
馬の頭(3回国際美術展)……………シケイロス
海浜のテント(3回国際美術
展)……………ピユツフエ
坐像(3回国際美術展)……………グレコ
港(3回国際美術展)……………スコット
大砲(3回国際美術展)……………カルズ
作られた仔馬(3回国際美術
展)……………ファッツィニ
員を持つ少年(3回国際美術
展)……………サエツテイ
花売り女(メキシコ展)……………リヴェラ

彫 塑

祈り(5回モダンアート展)……………木村賢太郎
オブジェ(個展)……………植木茂
坐女(9回新橋会展)……………山本豊市
座る(3回国際美術展)……………佐藤忠良
顔(1回一陽会展)……………植木力
クハンダ(40回日本美術院展)
……………辻晋堂
薫園(4回創型会展)……………中野四郎
アフリカの木(1)(10回行動美術
展)……………向井良吉
座像(40回日本美術院展)……………山崎脩
女人群像(10回行動美術展)……………篠井欽治

214 213 212 211 210 209 208 207 206 205 204 203 202 201 200 199 198 197 196 195

蹲る(40回二科展)……………淀井敏夫
駄々つ子(19回新制作展)……………本郷新
貌(10回行動美術展)……………建畠覚造
ひと(40回二科展)……………乗松巖
ひな(ゴイサギ)(19回新制作
展)……………山本常一
萩原湖太郎(19回新制作展)……………舟越保武
父子像(19回新制作展)……………豊福知徳
友人の像(19回自由美術展)……………峯孝
傘をさしている人(11回日本美
術展)……………水船六洲
若い女(11回日本美術展)……………朝倉響子
首(11回日本美術展)……………安田周三郎
大聖不動明王(11回日本美術
展)……………沢田晴広

長崎平和祈念像(四分一雛形)
(11回日本美術展)……………北村西望
麦(11回日本美術展)……………木島正夫
古の話(11回日本美術展)……………円鏝勝二
大木君の顔(11回日本美術展)……………畝村直久
友(11回日本美術展)……………朝倉文夫

工 藝

シヤトル国際見本市出品デイス
プレイハウス……………産業工藝試験所
モデルルーム食堂(産業工藝試
験所デザイン展)……………産業工藝試験所
吹ガラス花瓶(個展)……………淡島雅吉

234 233 232 231 230 229 228 227 226 225 224 223 222 221 220 219 218 217 216 215

伝統の近代化のテーマによる試
作品(産業工藝試験所デザイン
展)……………産業工藝試験所
玄窓叢花瓶(11回日本美術展)……………清水六兵衛
籠胎漆器、花器と盛器(4回創
作工藝展)……………高橋節郎
黒釉渦文大皿(2回日本伝統工
藝展)……………辻晋六
条文花器(11回日本美術展)……………清水洋
册に依る花入(11回日本美術
展)……………高村豊周
藻(11回日本美術展)……………岩田久利
青銅壺(11回日本美術展)……………西大由
漆棚(11回日本美術展)……………榎本盛
かんざし構造による居間セット
(19回新制作展)……………小林保治、他

建 築

箱根町役場……………中村登一建築事
務所
国際文化会館……………前川、坂倉、吉
村各建築事務所
長崎国際文化会館……………佐藤武夫
サンパウロ万国博日本館……………堀口捨巳
清水市役所庁舎……………丹下健三、他
京都地方貯金局……………郵政大臣官房建
築部
広島平和会館本館……………丹下健三、浅田
孝
八雲小学校……………仲威雄、他
中尊寺収蔵庫……………山下寿郎
愛知県立美術館……………小坂秀雄

240	山口蓬春アトリエ	吉田五十八
239	森村邸	レイモンド建築事務所
238	大石寺宝物館	横山公男
237	根津美術館	内藤多仲、今井兼次
236	明治大学新築大教室	堀口捨巳研究室
235	法政大学五五年館	大江宏研究室

古美術(新指定国宝)

241	詞梨帝母像	三寶院
242	秋景山水図	金地院
243	冬景山水図	金地院
244	金銅宝珠形舍利塔	西大寺
245	金剛般若経開題残卷(部分)	国(文化財保護委員会保管)
246	小野道風筆三体白氏詩卷(部分)	正木孝之
247	不動明王坐像	教王護国寺
248	太山寺本堂	太山寺

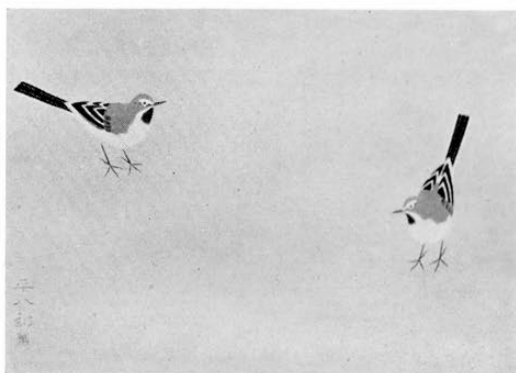
(新指定重要文化財)

249	狩野芳崖筆悲母観音像	国(東京藝術大学保管)
250	如意輪観音半跏像	石山寺
251	染焼黒茶碗光悦作銘雨雲	三井高公
252	北礪居簡墨蹟	正木孝之
253	金襴手下蕪花生	根津美術館
254	教王護国寺五重小塔	教王護国寺

图

版

日本画



4 曙 (成和会展) 福田平八郎



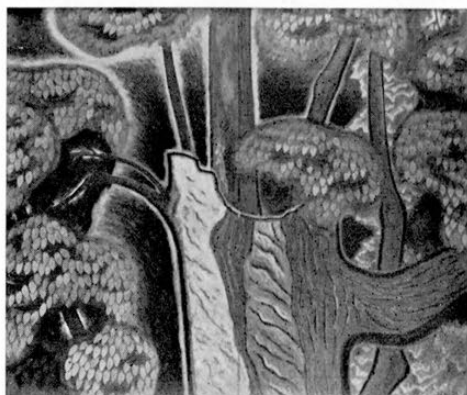
1 鶉 (成和会展) 宇田获郎



5 晨光 (成和会展) 金島桂華



2 浅春 (成和会展) 小野竹斎



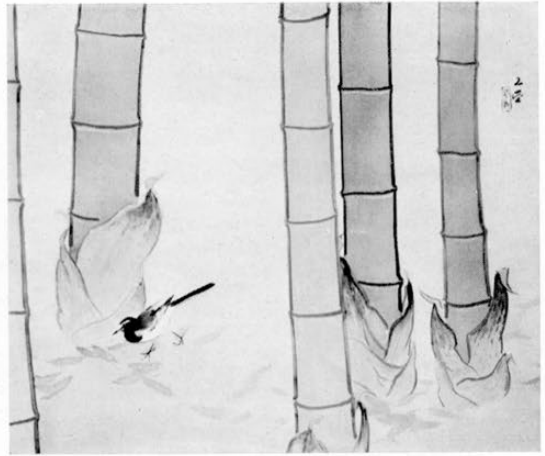
6 夜の樹 (新興美術院展) 小林巢居人



3 五月の畑 (靑壳アンデパンダン展) 長崎真人



10 双龍争珠 (松竹梅展) 横山大観



7 若竹 (松竹梅展) 川合玉堂



11 鉄線花 (日本画院展) 望月春江



8 紫昏圖 (松竹梅展) 川端龍子



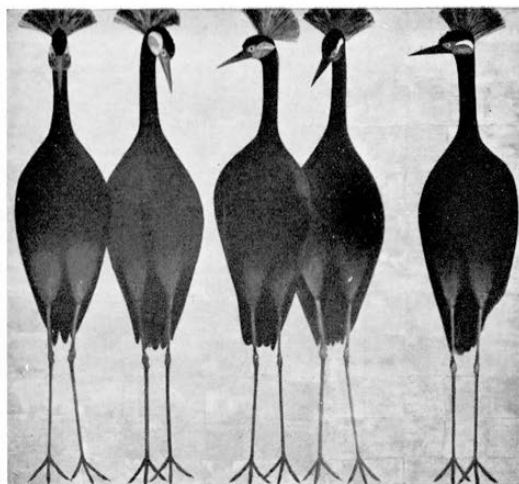
12 二匹の仔犬 (未更会展) 高山辰雄



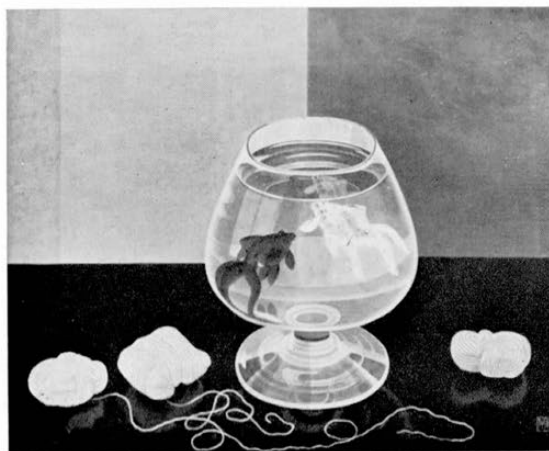
9 溪澗 (未更会展) 山田申吾



16 牛 (国際美術展) 丸木位里



13 かんむりづる (国際美術展) 碑田一穂



17 金魚 (彩交会展) 中村岳陵



14 金の錯銀の錯 (国際美術展) 堂本印象



18 まり藻と花 (彩交会展) 山口蓬春



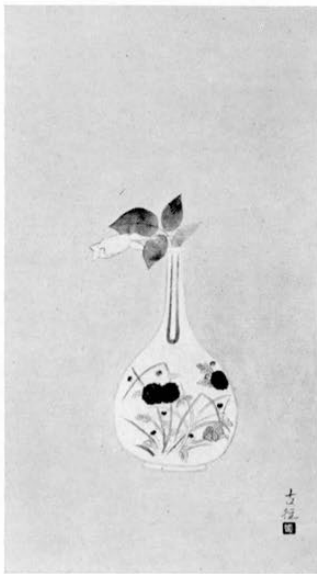
15 氷 (国際美術展) 福田平八郎



22 鴻門会 (院展) 安田覇彦



19 朝顔 (清流会展) 鎗木清方



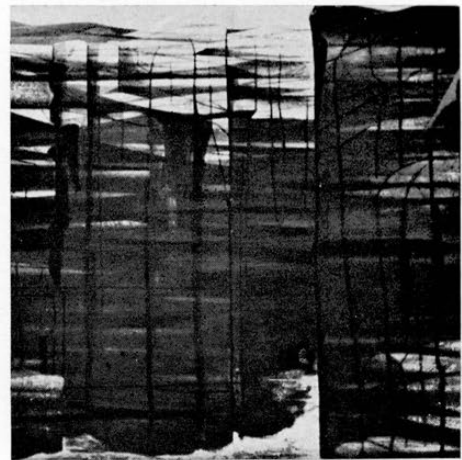
23 蕾 (清流会展) 小林古径



20 風蕭々兮易水寒 (院展) 横山大観



24 月 (院展) 小倉遊鶴



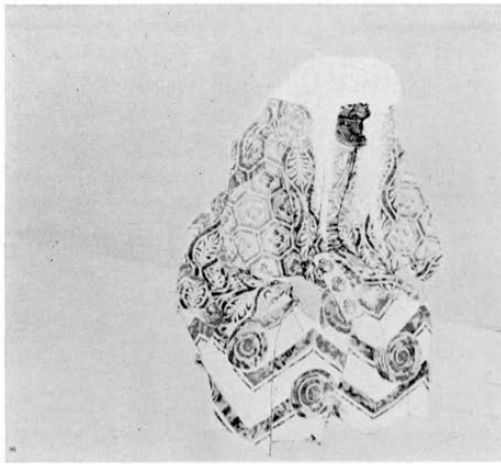
21 壁 (院展) 岩橋英遠



28 M先生(院展) 堅山南風



25 遙 拜(院展) 中村貞以



29 出をまつ(石橋)(院展) 前田青郎



26 宵 (院展) 清原 齊



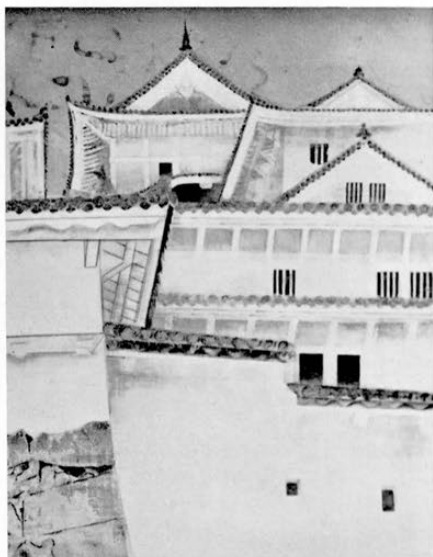
30 冠 鶴(院展) 馬場不二



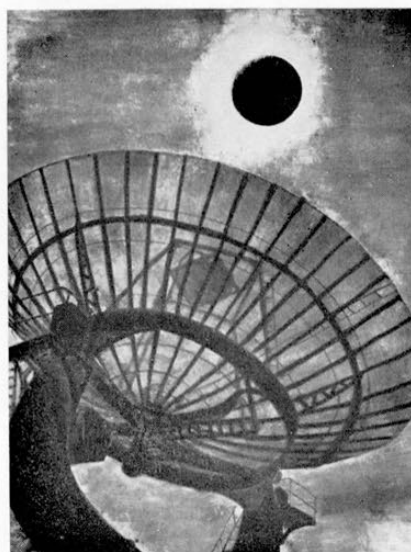
27 華山と椿山(院展) 大田聡雨



34 銀屏風 (青龍社展) 安西啓明



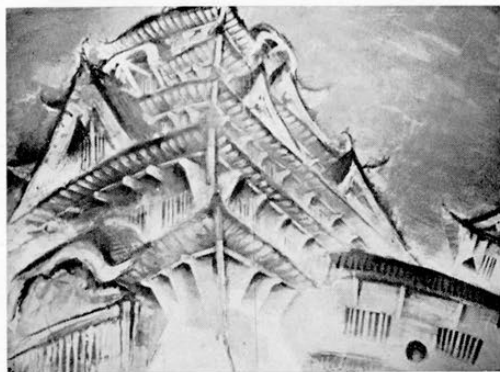
31 城 (院展) 奥村土牛



35 黒い太陽 (青龍社展) 小島耀子



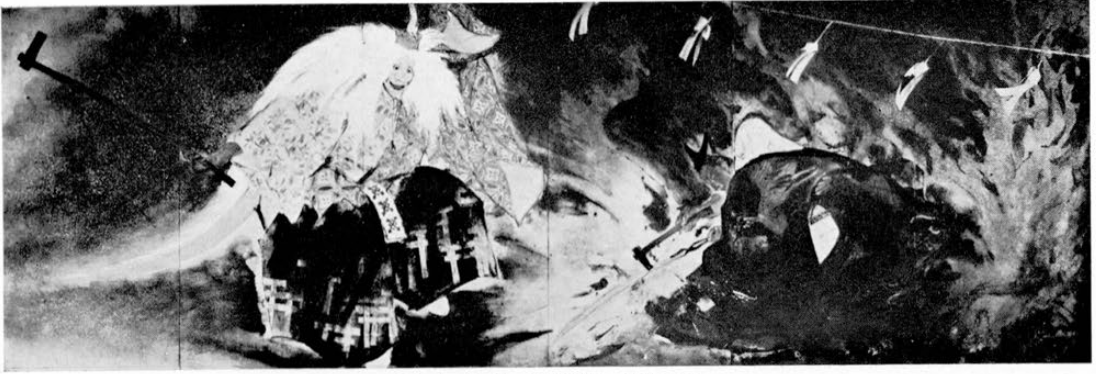
32 暮秋 (院展) 今野忠一



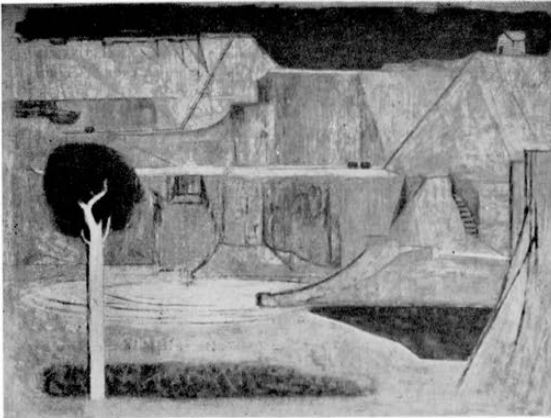
36 月城 (青龍社展) 山崎豊



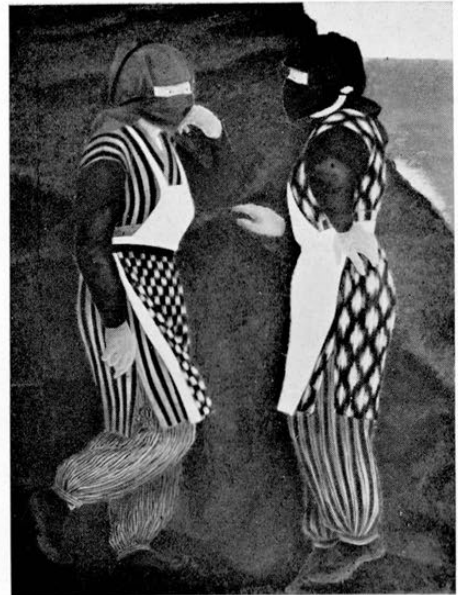
33 私の花 (青龍社展) 母青子



37 小 巖 治 (青龍社展) 川 端 龍 子



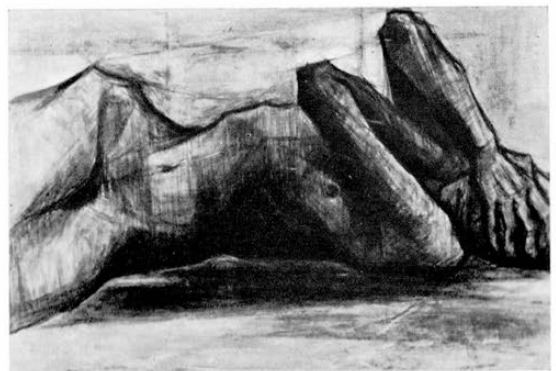
40 陶土の丘 (新制作展) 麻田鷹司



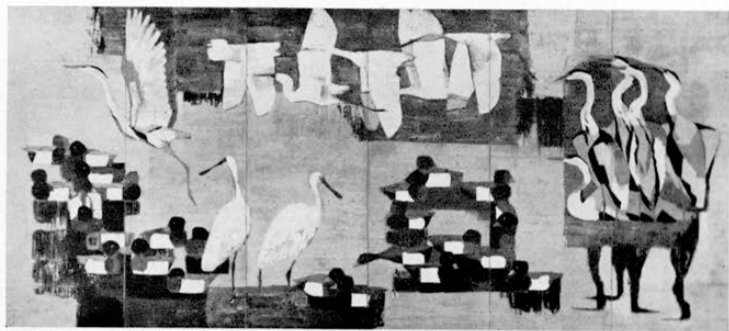
38 鼠ヶ関の女 (青龍社展) 堀口幸子



41 たそがれ (新制作展) 野崎 資



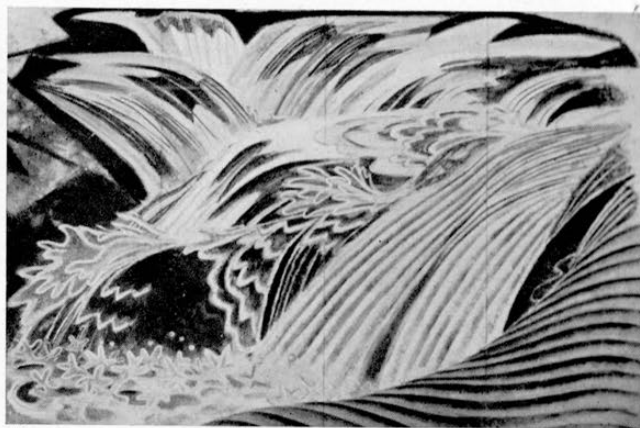
39 おんな (新制作展) 朝倉 振



42 水鳥屏風 (新制作展) 吉岡堅二



43 駆ける (新制作展) 加山又造



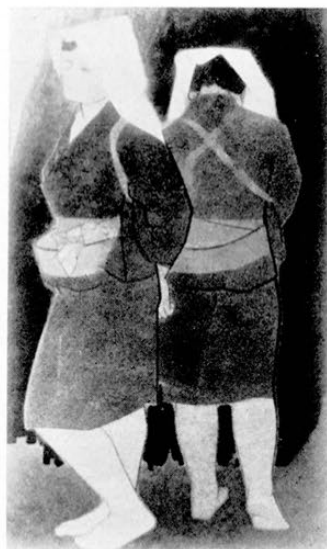
44 滝 (新制作展) 福田豊四郎



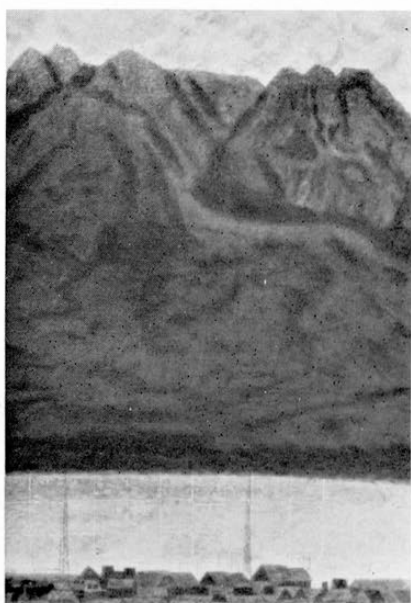
45 山の思い出 (新制作展) 堀文子



49 宋磁 (日展) 伊東深水



46 大原女 (新制作展) 広田多津



50 桜島 (日展) 西山英雄



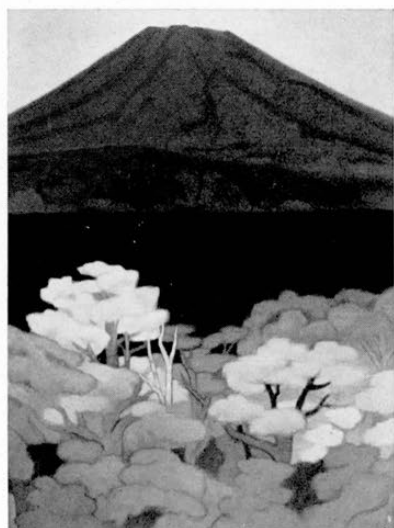
47 北窓 (新制作展) 山本丘人



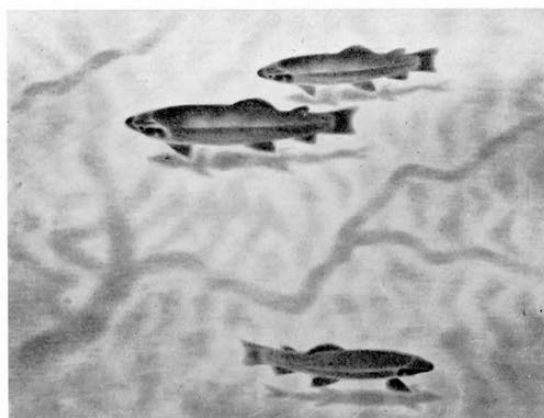
51 飛鳥 (日展) 麻田弁次



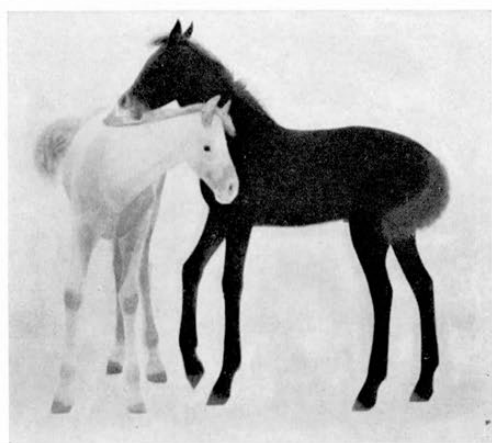
48 瀑 (日展) 杉山寧



55 光 昏 (日展) 東山魁夷



52 虹 鱒 (日展) 川本末雄



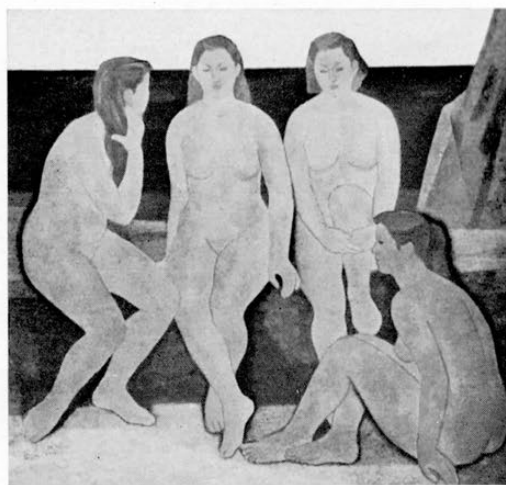
56 仔 馬 (日展) 山口華樹



53 葦 (日展) 徳岡神泉

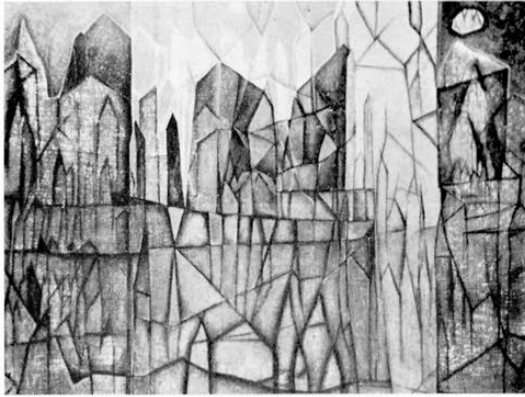


57 六世歌右衛門 (日展) 橋本明治



54 海 浜 (日展) 大山忠作

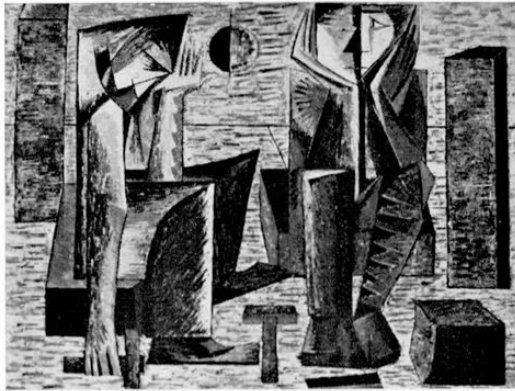
洋画



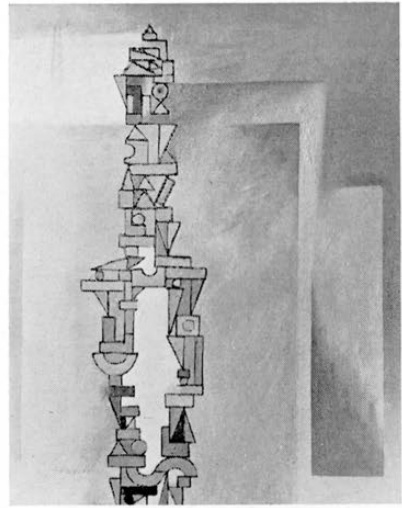
61 朝 (美術文化展) 清川泰次



58 脱 出 (読売アンデパンダン展) 利根山光人



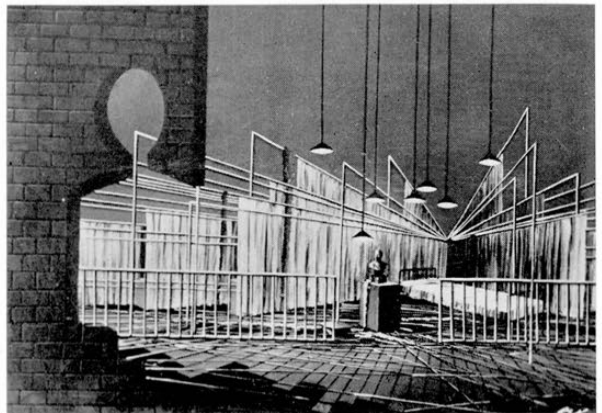
62 休む人 (モダンアート展) 勝呂忠



59 西方の人 (モダンアート展) 朝妻治郎



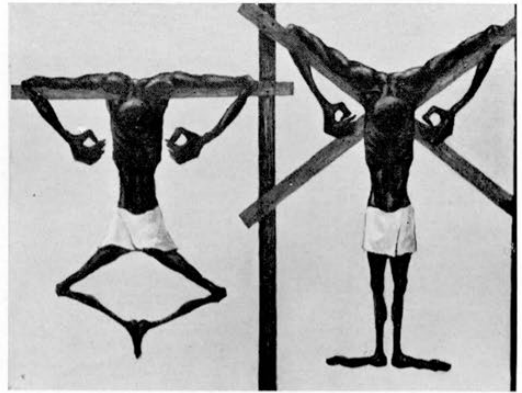
63 作品(一) (モダンアート展) 小松毅雄



60 病室 (モダンアート展) 中井幸一



67 闘 争 (光風会展) 笹岡了一



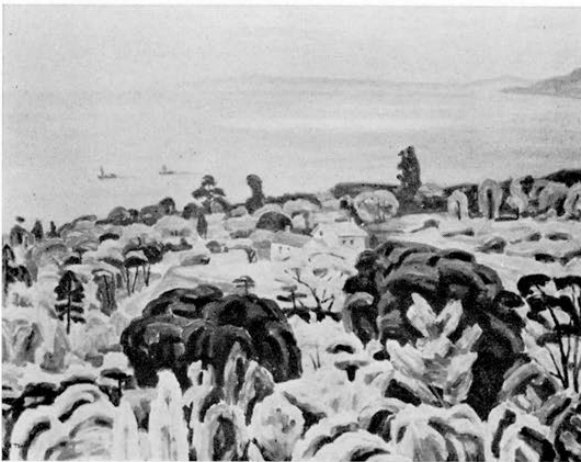
64 「顔」速作の内受難者 (美術文化展) 土井俊生



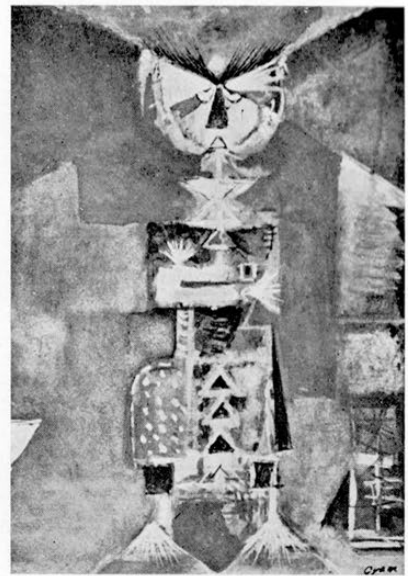
68 雪 余 (光風会展) 小鉢源太郎



65 鳥 (美術文化展) 笹川由為子



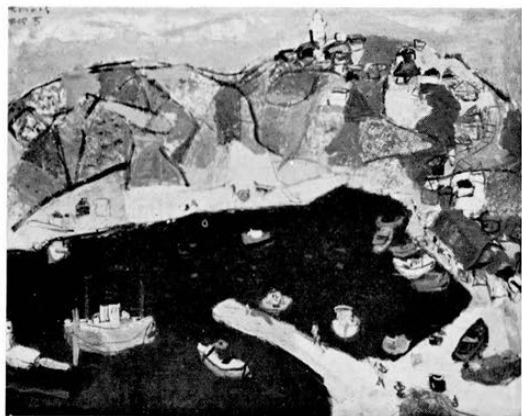
69 一の谷新緑 (光風会展) 辻 永



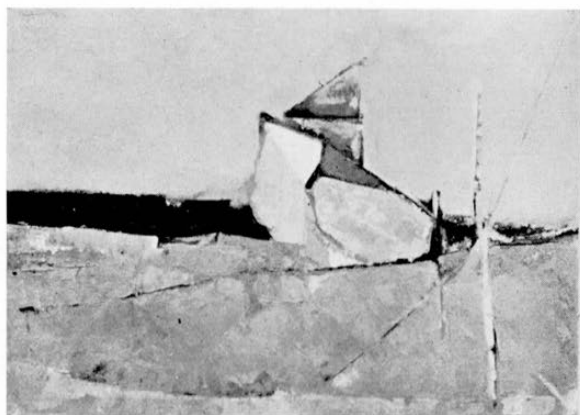
66 こども (個展) 小山田二郎



73 少女座像 (創元会展) 中野和高



70 漁 港 (光風会展) 山喜多二郎太



74 風 景 (春陽会展) 田中 岑



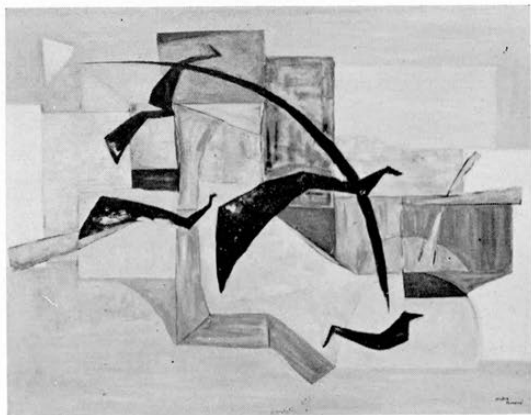
71 コートの婦人像 (光風会展) 森田元子



75 ひとつの椅子 (春陽会展) 藤井令太郎



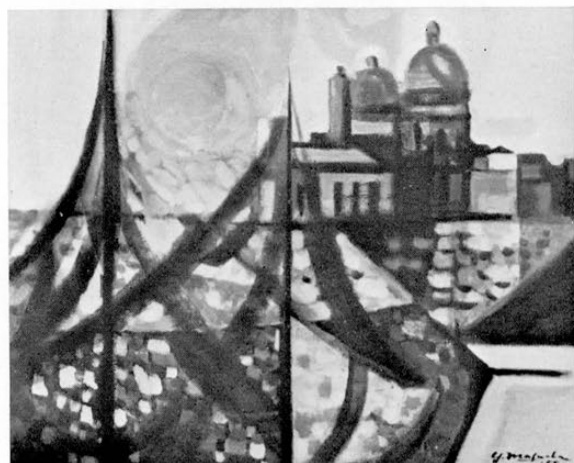
72 無 題 (創元会展) 鈴木千久馬



79 幻覚 A (春陽会展) 南大路 一



76 蟹と遊ぶ娘達 (春陽会展) 三雲祥之助



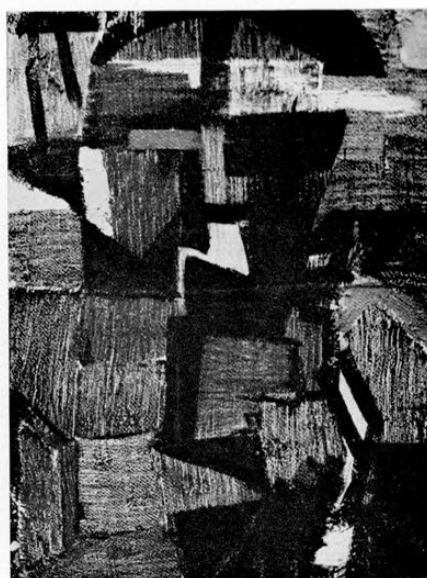
80 ヴェニス洛陽 (国画会展) 益田 義信



77 嫁 (春陽会展) 中谷 泰



81 牛を屠す (春陽会展) 水谷 清



78 新しい現実 (国画会展) 須田 勉太



85 古い巴里の街角 (個展) 平賀亀祐



82 動く森 (国画会展) 宇治山哲平



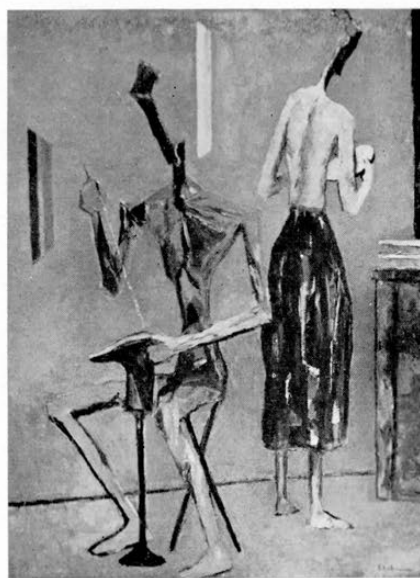
86 マジョリカ嬢 (個展) 中川一政



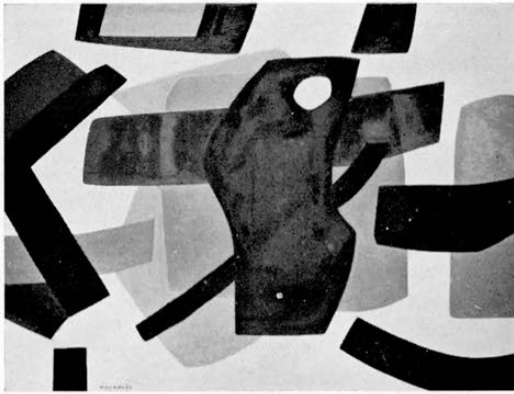
83 山羊 (国画会展) 香月泰男



87 しのめ (国際美術展) 井上長三郎



84 靴屋 (国際美術展) 海老原喜之助



91 白の上に (国際美術展) 村井正誠



88 捧げもの (国際美術展) 岡鹿之助



92 母子 (国際美術展) 森芳雄



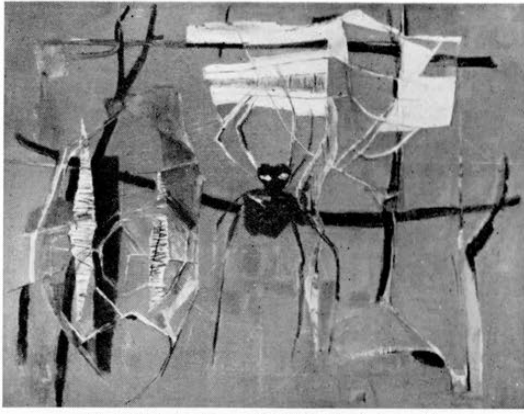
89 燃える人 (国際美術展) 岡本太郎



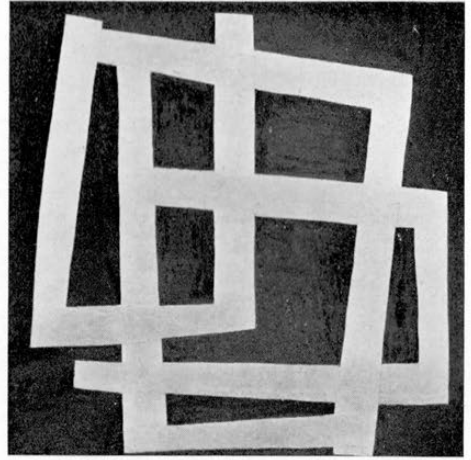
93 顔 (国際美術展) 福沢一郎



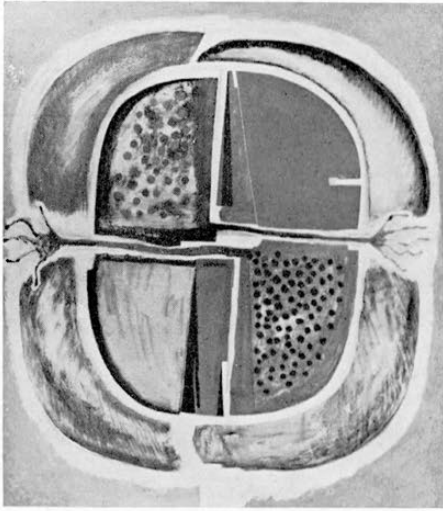
90 浮遊する群 (国際美術展) 杉全直



97 孤独者のすまい (国際美術展) 山口 薫



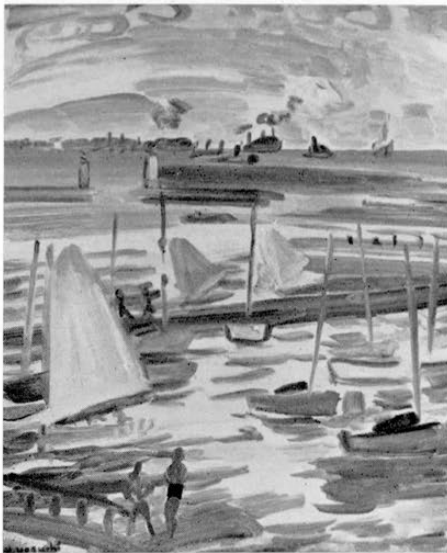
94 構成(黄) (国際美術展) 山口長男



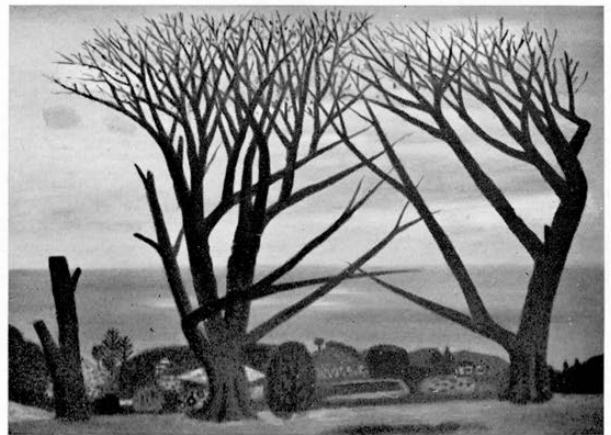
98 形態 B (国際美術展) 鶴岡政男



95 あらそい (国際美術展) 藤田 和



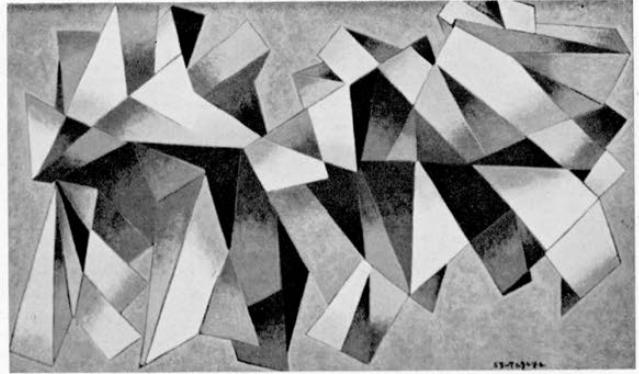
99 ヨットハーバー (個展) 野口弥太郎



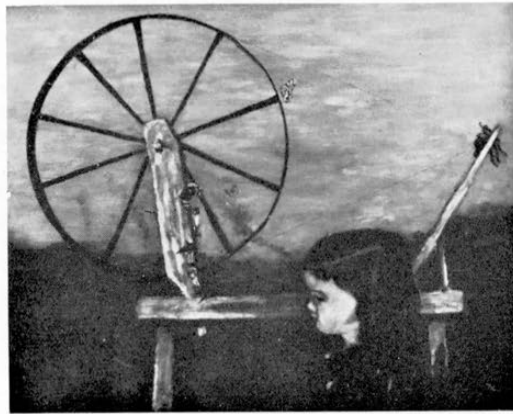
96 裸木と海 (国際美術展) 高橋達四郎



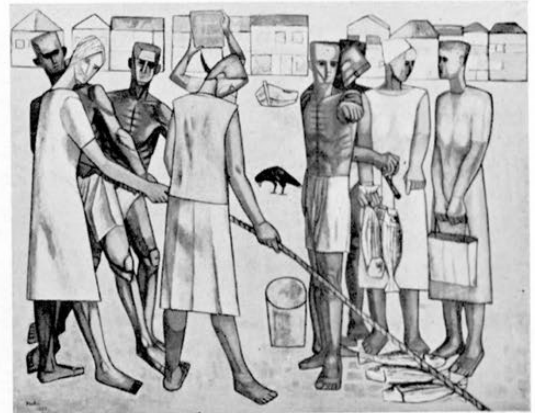
103 女 XII (二科展) 芥川紗織



100 集 (二科展) 多賀谷伊徳



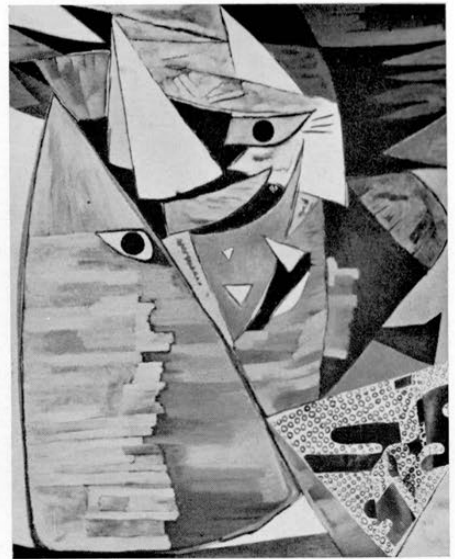
104 ふるさと (二科展) 鷹山宇一



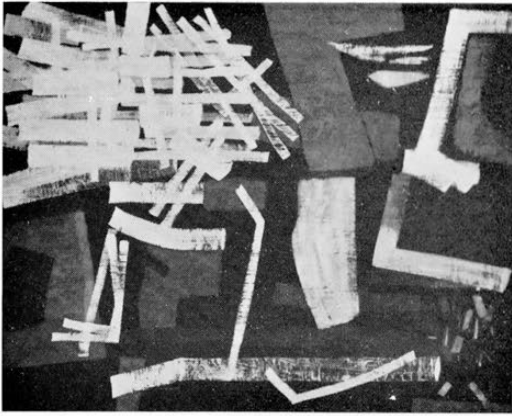
101 浜 (二科展) 吉井淳二



105 土 (行動展) 江見絹子



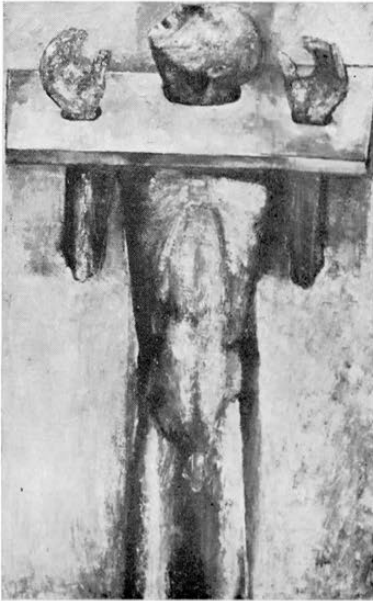
102 鬼とゆかた (二科展) 桂 ユキ子



109 現実 A (行動展) 津高和一



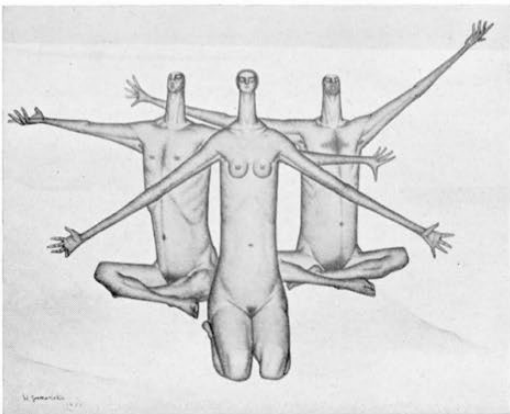
106 待つ人 (行動展) 佐藤真一



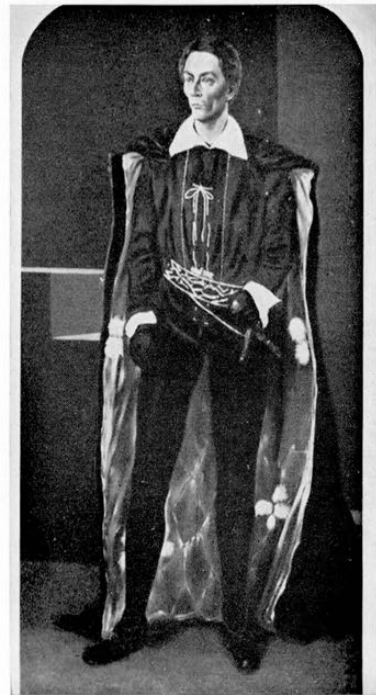
110 柳 (行動展) 田中阿喜良



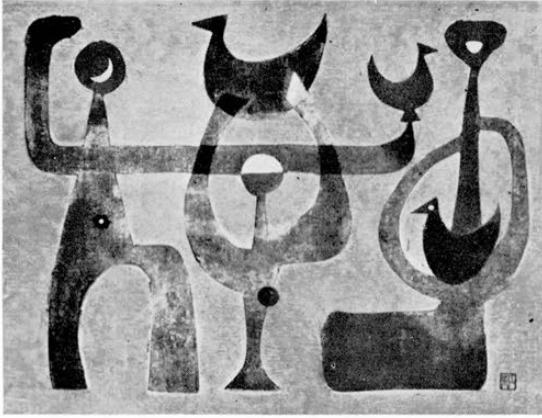
107 大雪山と山峡 (行動展) 田辺三重松



111 地に座す人達 (行動展) 山中春雄



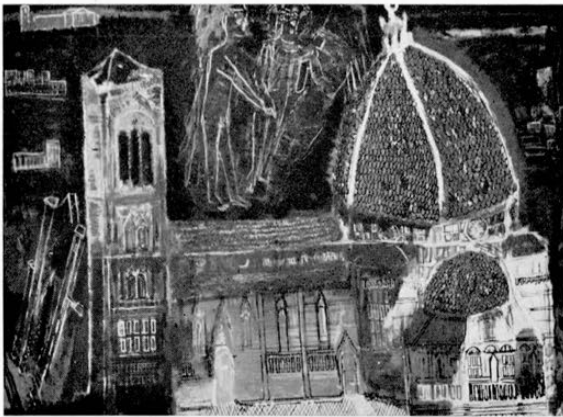
108 ハムレットに於ける芥川比呂志 (行動展) 向井潤吉



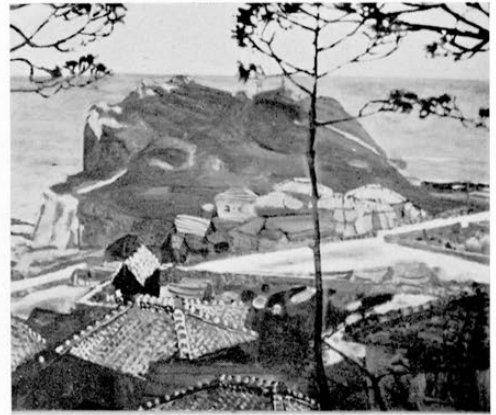
115 埴輪に依る作品F (立軌会展) 飯戸庄衛



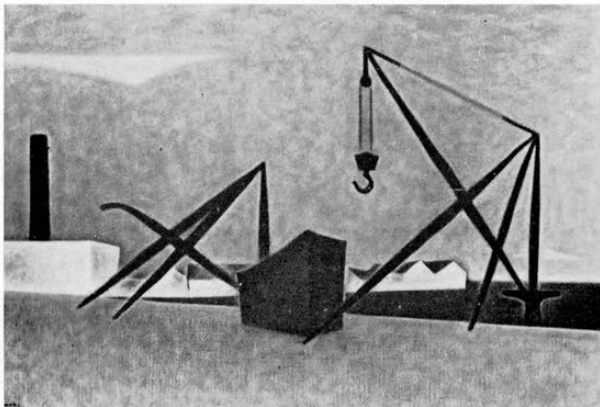
112 海と漁船 (一陽会展) 鈴木信太郎



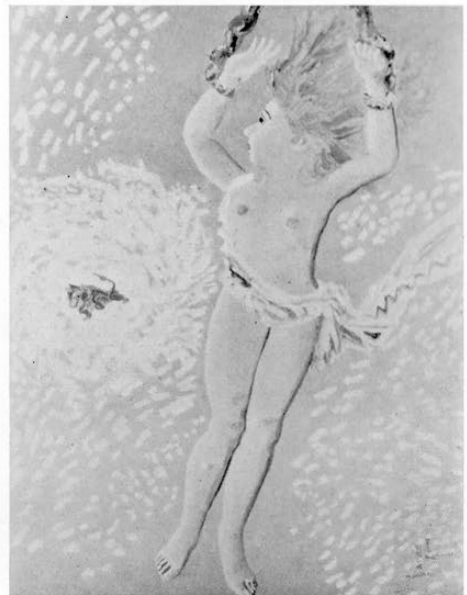
116 サンタ・マリア・デルフォーレ (立軌会展) 飯島一次



113 海三題の内C (一陽会展) 高岡徳太郎



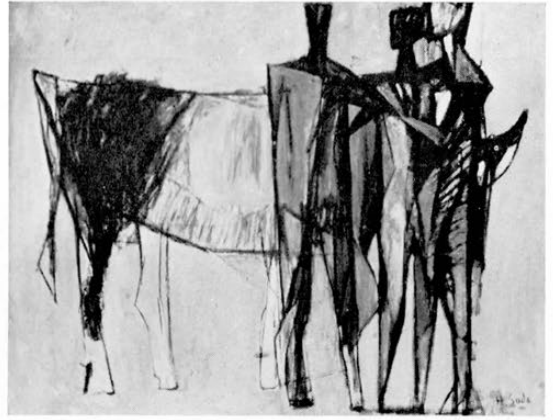
117 クレーンの風景 (立軌会展) 牛島憲之



114 星座 (一陽会展) 野間仁根



121 水車 (一水会展) 木下義謙



118 牛を売る (立軌会展) 須田寿



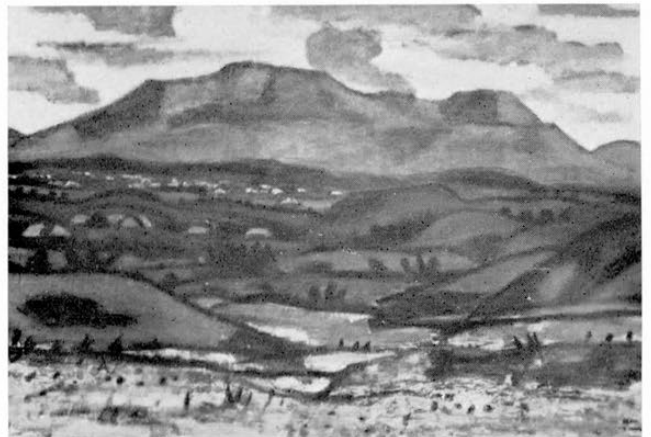
122 北方の港 (一水会展) 中村善策



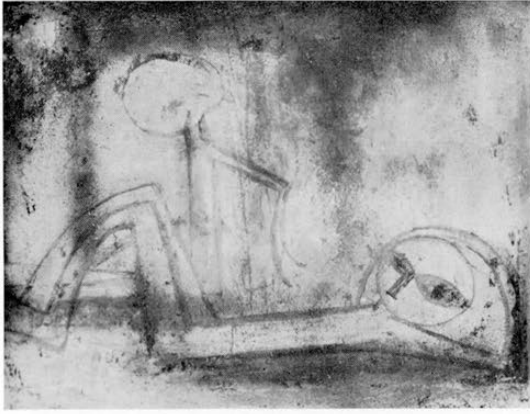
119 読書婦人 (一水会展) 木下孝則



123 水 (新制作展) 荻太郎



120 初秋の阿蘇山 (一水会展) 田崎広助



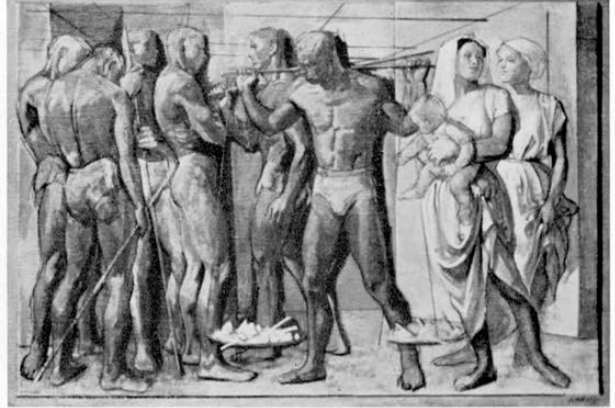
127 はらつば (新制作展) 宮脇公実



124 ニューヨークの冬 (一水会展) 石井柏亭



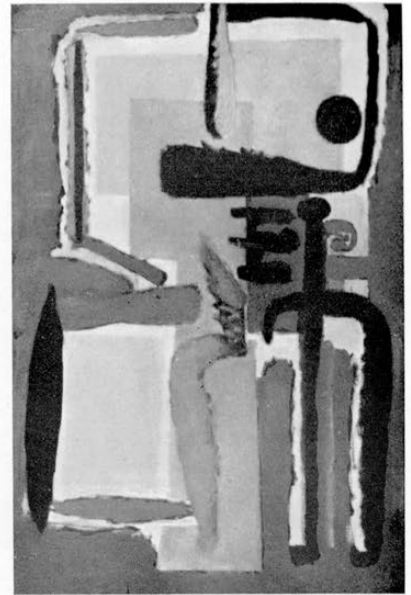
128 少女 (新制作展) 内田武夫



125 働く人と家族 (新制作展) 小磯良平



129 神々の争い (新制作展) 赤穴 宏



126 作品 A (新制作展) 川端 実



133 漁港入口 (独立展) 鈴木保徳



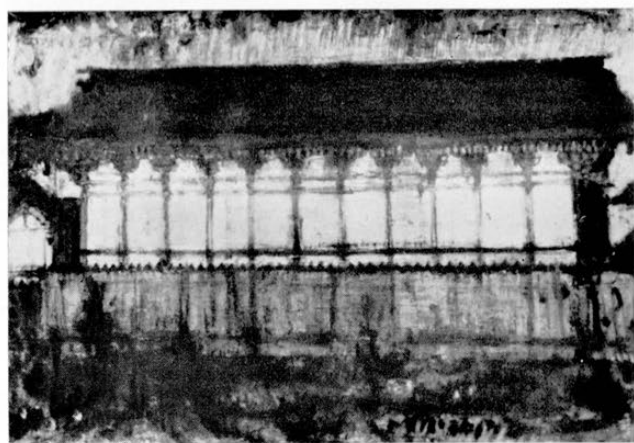
130 浮標 (新制作展) 田中田子



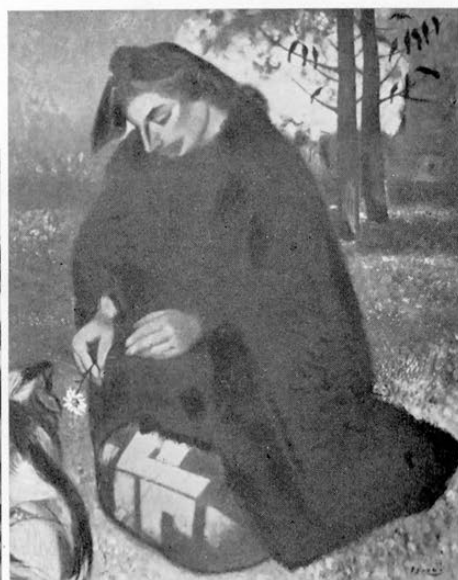
134 女と花 (独立展) 児島善三都



131 山湖 (独立展) 小林和作



135 寝入橋 (独立展) 須田国太郎



132 愛犬の死 (独立展) 児島善三都



139 顔をかく少女 (独立展) 島海青児



136 見高浜 (独立展) 林武



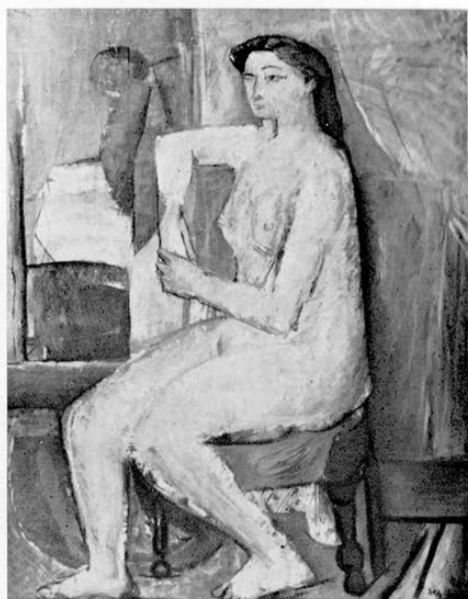
140 秋華 (二記会展) 佐伯米子



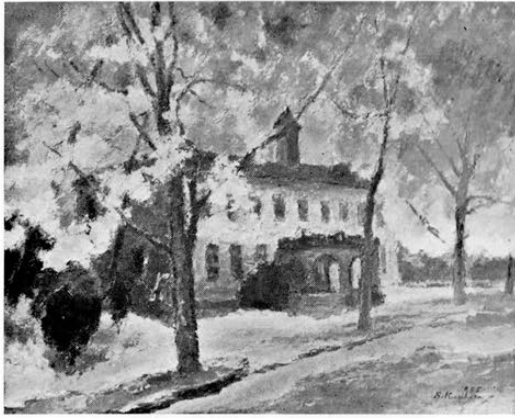
137 鳥 (独立展) 高岡惣七



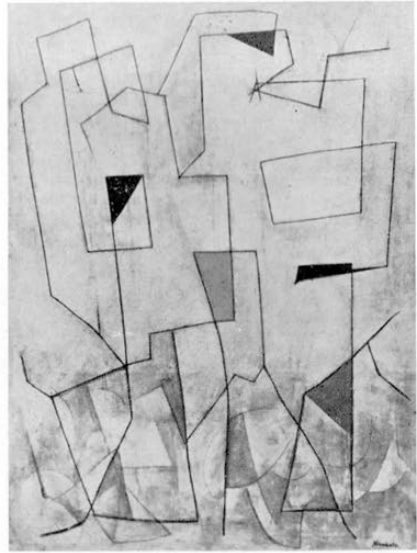
141 雨の海 (二記会展) 鍋井克之



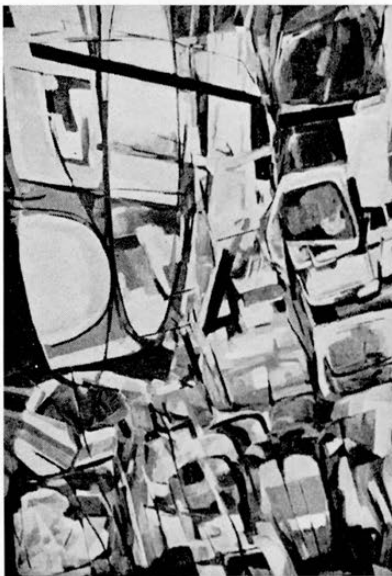
138 座婦 (独立展) 山本正



145 秋(東大構内) (二紀会展) 栗原 信



142 たたかい (自由美術展) 難波田龍起



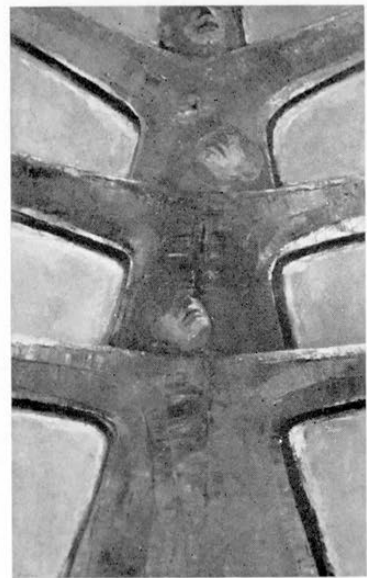
146 プロヴァンスにて(野) (自由美術展) 末松正樹



143 人間群像 (二紀会展) 宮本三郎



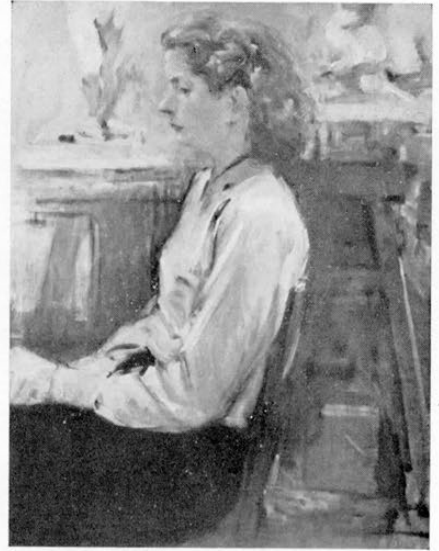
147 ミギルグツチヨ (自由美術展) 小野 忠弘



144 架 (自由美術展) 糸園和三郎



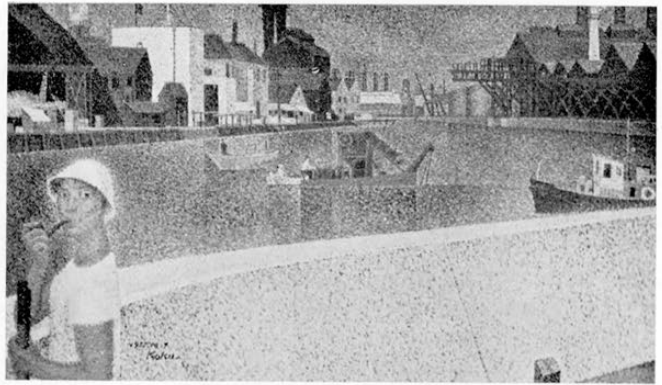
151 奔走迫る(駝駕) (日展) 中畑岬人



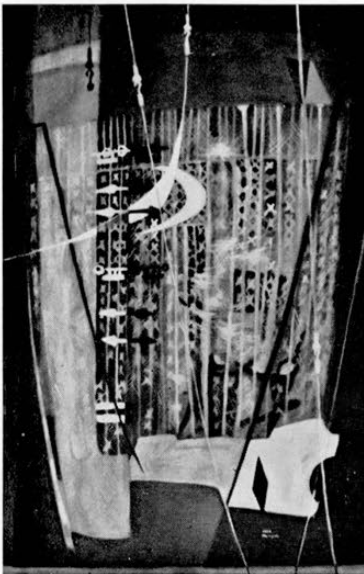
148 アトリエにて (日展) 鬼頭錦三郎



152 窓辺の像 (日展) 中村研一



149 運河 (日展) 国領経郎



153 道化は檻から出られない (日展) 上田哲農



150 赤いブラウス (日展) 中村琢二

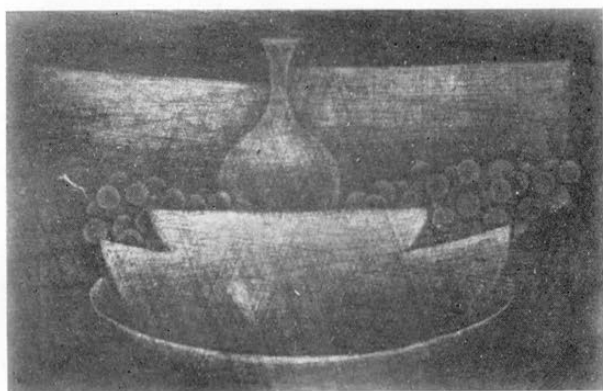
版 画



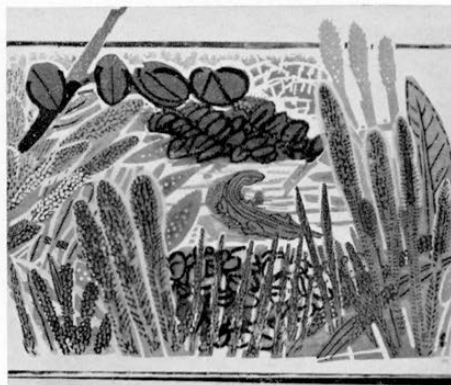
157 柳緑華紅頭・万葉圖板画屏風(部分) (国際美術展) 棟方志功



154 若 木 (個 展) 長谷川 潔



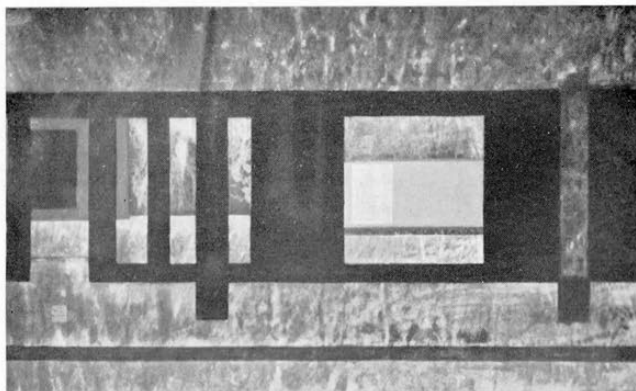
158 西 瓜 (国際美術展) 浜口陽三



155 草の中のとかげ (春陽会展) 古川 龍生



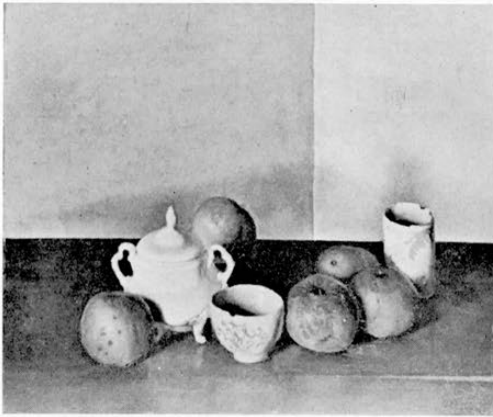
159 白 鳥 (国画会展) 関野準一郎



156 門 (国画会展) 斎藤 清



163 生々流転(部分) (大観展) 横山大観



164 静物 (劉生展) 岸田劉生



161 海岸の子供 (朝雲展) 山崎朝雲



160 江ノ川漁図 (鉄斎展) 富岡鉄斎



165 天保歌妓 (松園展) 上村松園

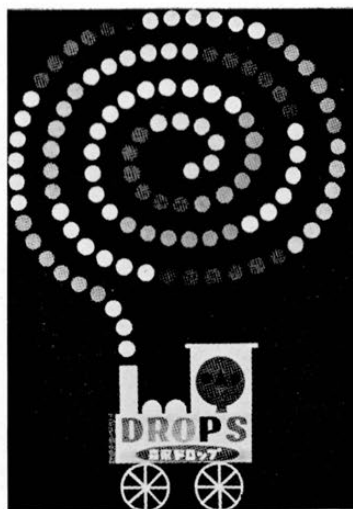


162 唐様三部作 (藤島展) 藤島武二

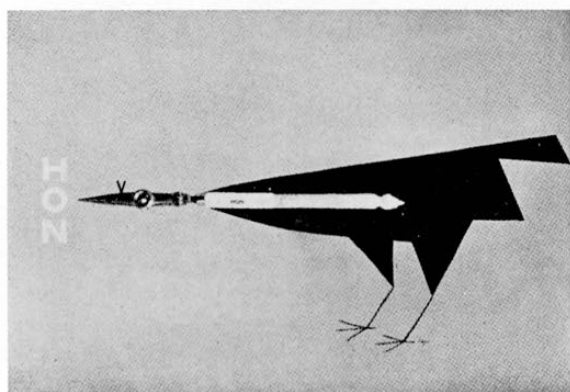
商業美術



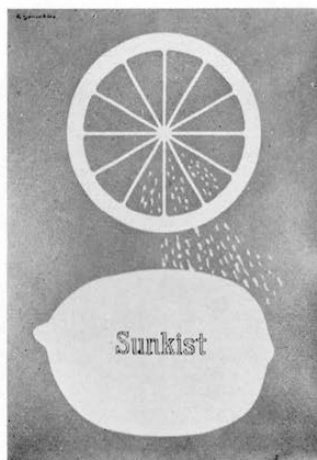
169 ポスター 早川良雄



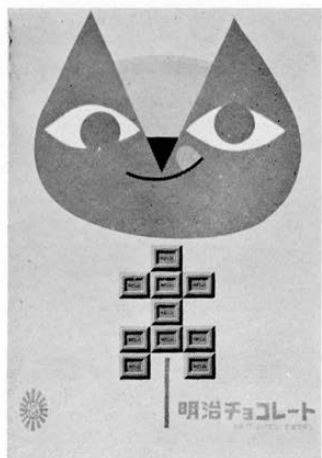
166 ポスター (日宣美展) 広橋桂子



170 ポスター (日宣美展) 清水和久



167 ポスター (グラフィック55展) 山城隆一



171 ポスター 大橋正

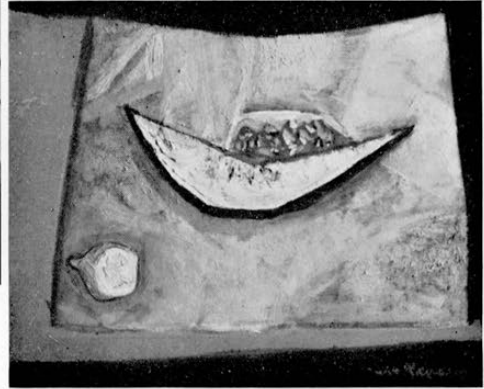


168 ポスター 山名文夫

海外作家国内展



175 黒いバックに三人の女流音楽家たち (三人展) コルビュジェ



172 赤い西瓜 (JAN・クリティック賞展) パール



176 イタリア (現代イタリア美術展) シローニ



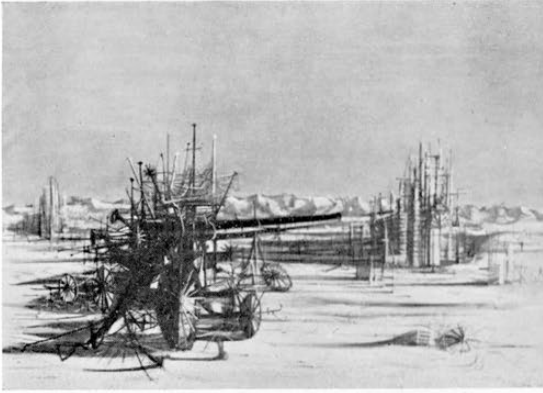
173 色の中に飛び込む人々(三人展) レジエ



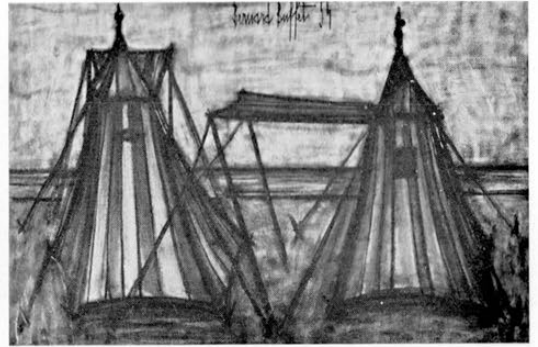
177 馬の頭 (国際美術展) シケイロス



174 戸棚、寝椅子 (三人展) ベリアン



181 大 砲 (国際美術展) カルズー



178 海浜のテント (国際美術展) ビュツフェ



183 貝を持つ少年 (国際美術展) サエツテイ



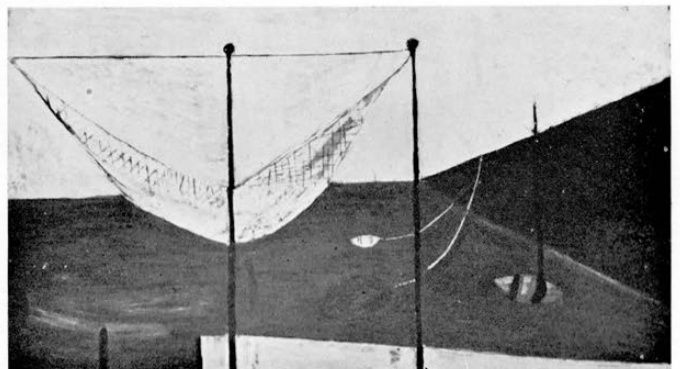
182 作られた仔馬 (国際美術展) ファウツィニ



179 坐 像 (国際美術展) グレコ



184 花売り女 (メキシコ展) リヴェラ

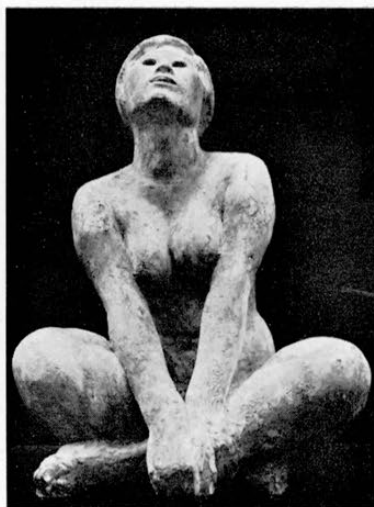


180 港 (3) (国際美術展) スコット

彫 刻



191 蕙 園 (創型会展) 中野 四郎



188 座 る (国際美術展) 佐藤 忠良



185 祈 り (モダンアート展) 木村賢太郎



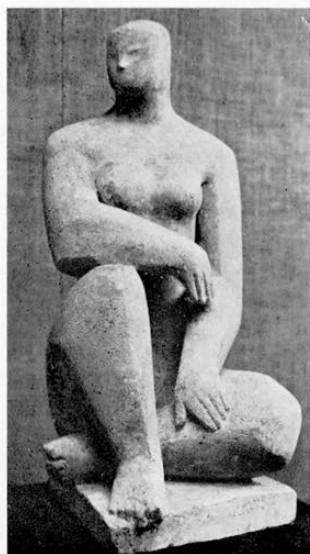
192 アフリカの木(1) (行動展) 向井良吉



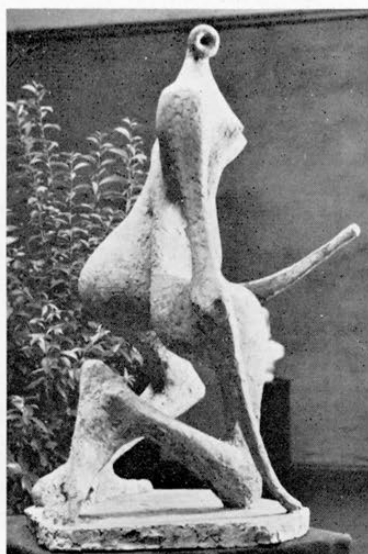
189 顔 (一陽会展) 植木 力



186 オブジェ (個展) 植木 茂



193 座 像 (院展) 山崎 信



190 クハンダ (院展) 辻 晋堂



187 坐 女 (新樹会展) 山本豊市



200 萩原朔太郎 (新制作展) 舟越保武



197 貌 (行動展) 建昌覚造



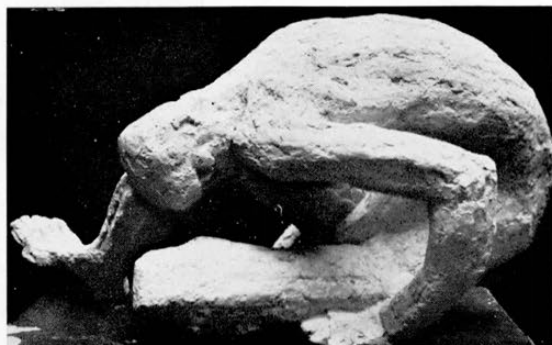
194 女人群像 (行動展) 篠井欽治



201 父子像 (新制作展) 豊福知徳



198 ひと(二科展)乗松 巖



195 蹲 る (二科展) 淀井敏夫



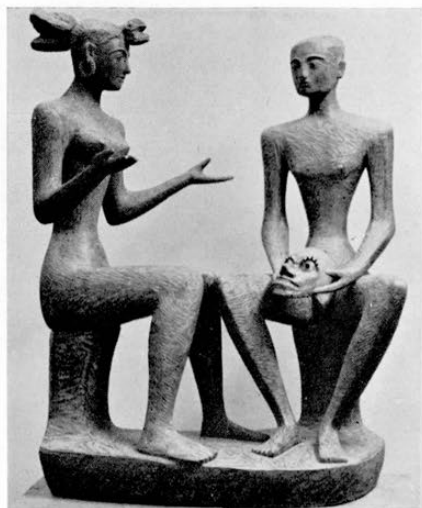
202 友人の像(自由美術展)峯 孝



199 ひな(ゴイサギ)(新制作展)山本 浩一



196 駄々つ子 (新制作展) 木郷 新



209 古の話 (日展) 円鸞勝二



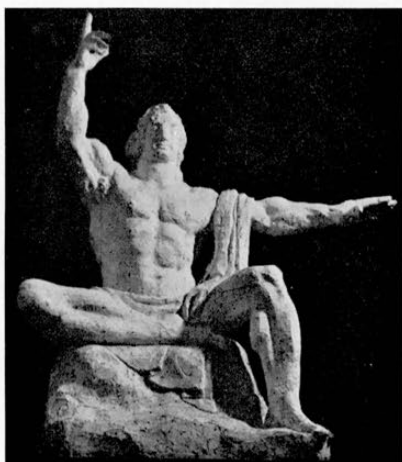
206 大聖不動明王(日展) 沢田晴広



203 傘をさしている人(日展) 水船六洲



210 大木君の顔 (日展) 斎村直久



207 長崎平和祈念像(雛形) (日展) 北村西望



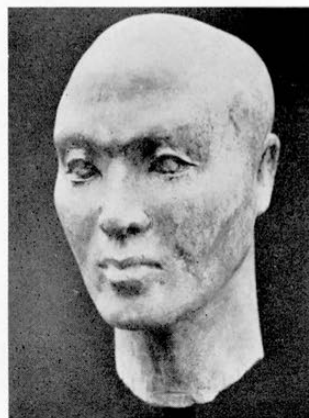
204 若い女(日展) 朝倉善子



211 友 (日展) 朝倉文夫

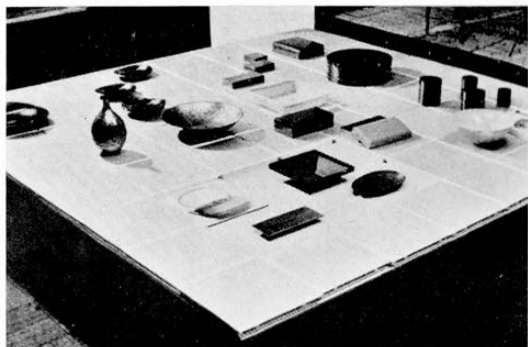


208 麦 (日展) 木島正夫

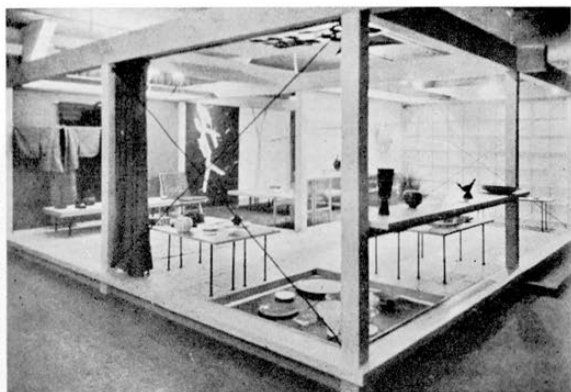


205 首 (日展) 安田胃三郎

工 藝



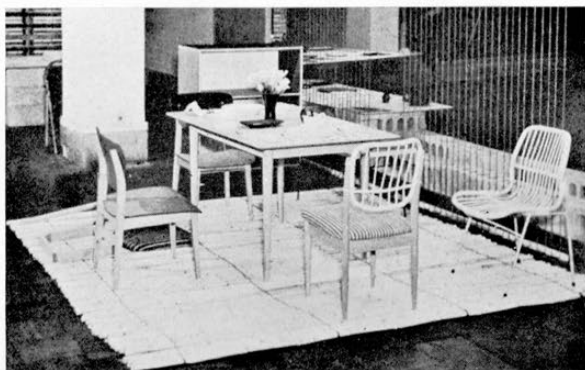
215 伝統の近代化のテーマによる試作品 (産業工芸試験所デザイン展)



212 シャトル国際見本市 デisplayハウス



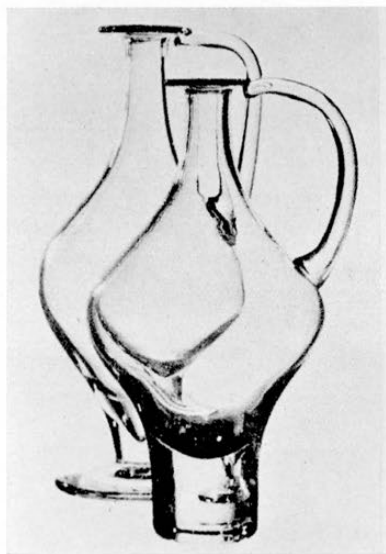
216 玄窓葎花瓶 (日展) 清水六兵衛



213 モデルルーム・食堂 (産業工芸試験所デザイン展)



217 籠胎漆器、花器と盛器 (創作工芸展) 高橋節郎



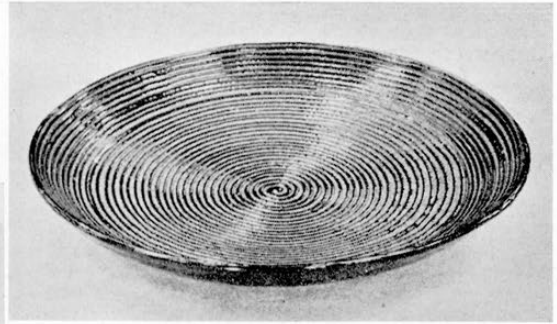
214 吹ガラス花瓶 (個展) 淡島雅吉



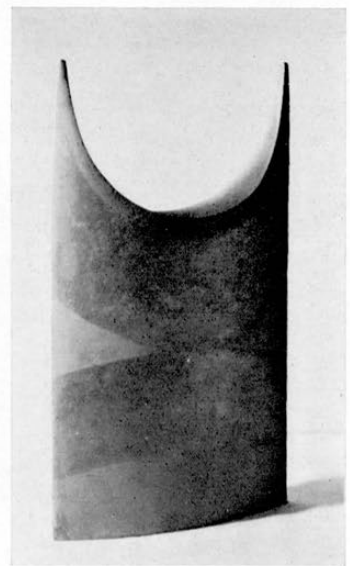
221 霏 (日展) 岩田久利



222 青銅壺(日展) 西大由



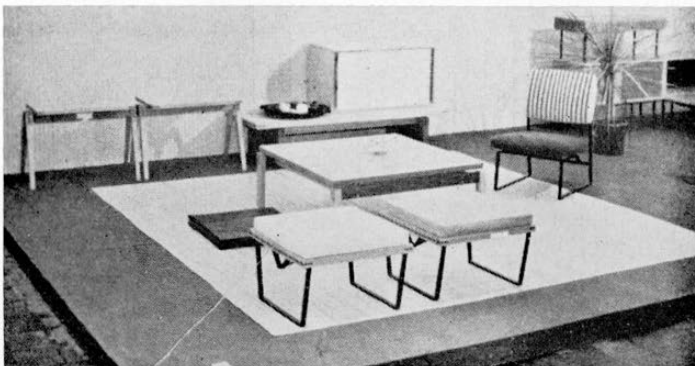
218 黒袖渦文大皿 (伝統工芸展) 辻晋六



219 条文花器(日展) 清水洋



223 漆棚(日展) 板木盛

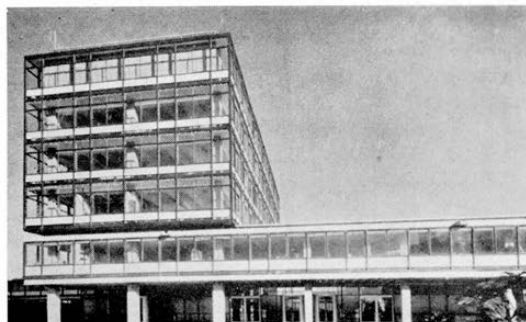


224 かんざし構造による居間セット (新制作展) 小林保治 他



220 髹による花入(日展) 高村豊周

建 築



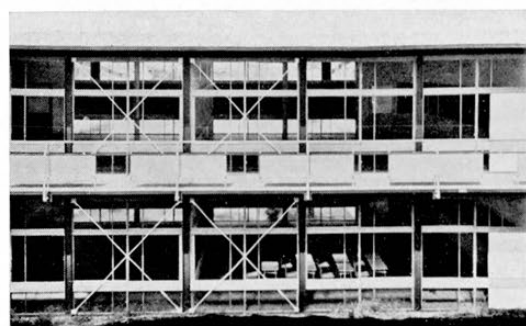
229 清水市役所庁舎 丹下健三、他



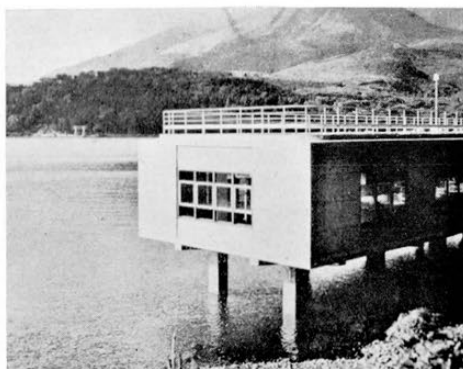
230 京都地方貯金局 郵政大臣官房建築部



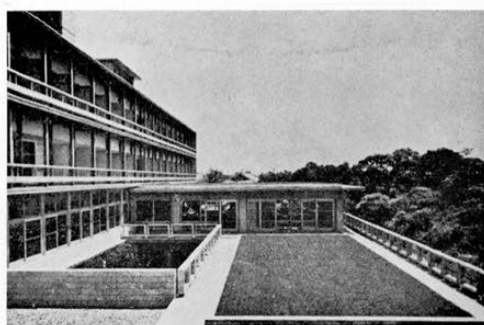
231 広島平和会館本館 丹下健三、浅田孝



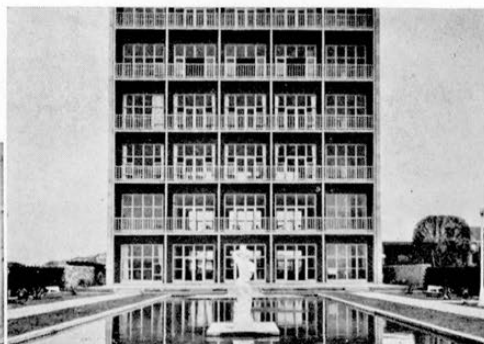
232 八雲小学校 仲 威 雄、他



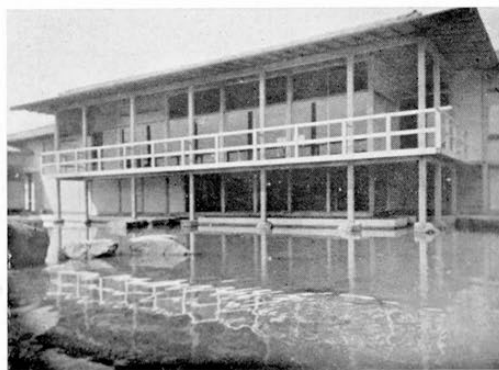
225 稲根町役場 中村登一建築事務所



226 国際文化会館 前川、坂倉、吉村各建築事務所



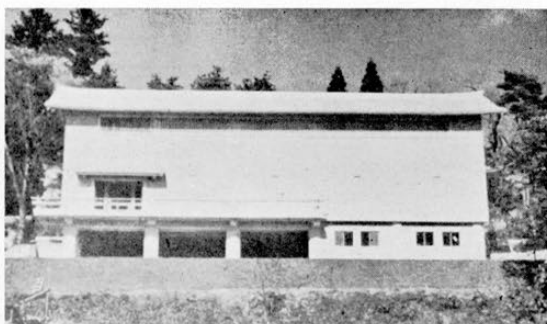
227 長崎国際文化会館 佐藤武夫



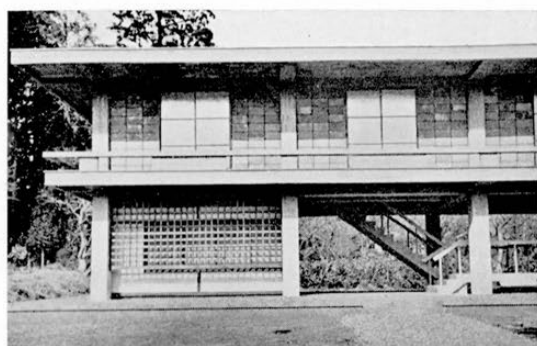
228 サンパウロ万国博日本館 堀口捨巳



237 根津美術館 内藤多仲、今井兼次



233 中尊寺取蔵庫 山下寿郎



238 大石寺宝物館 横山公男



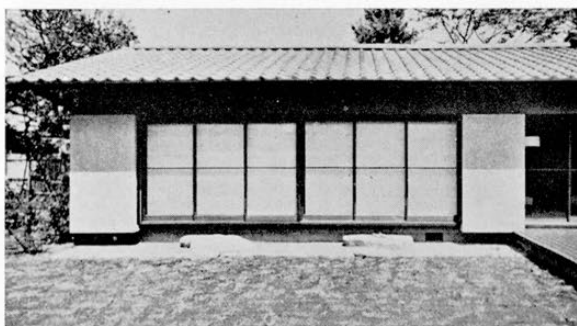
234 愛知県立美術館 小坂秀雄



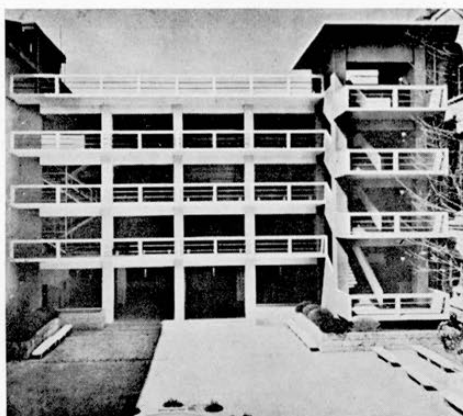
239 森村邸 レイモンド建築事務所



235 法政大学55年館 大江宏研究室

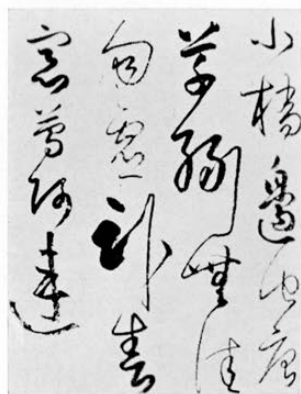


240 山口蓬春アトリエ 吉田五十八

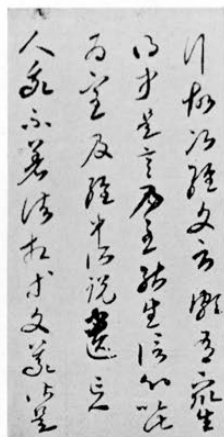


236 明治大学新築大教室 堀口捨巳研究室

古美術 (新指定国宝)



246 小野道風筆三体白氏詩卷(部分)
正木孝之



245 金剛般若經問題殘卷(部分)
国(文化財保護委員会保管)



241 割梨帝母像 三宝院



247 不動明王坐像 教王護国寺



243 冬景山水図 金地院



242 秋景山水図 金地院

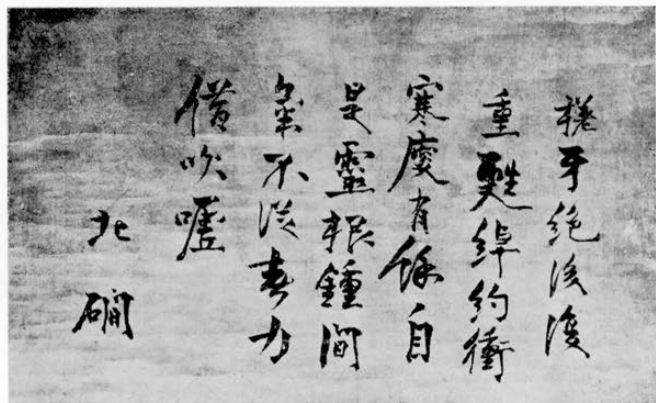


248 太山寺本堂 太山寺



244 金銅宝珠形舍利塔 西大寺

(新指定重要文化財)



252 北岡居簡墨蹟 正木孝之



249 狩野芳崖筆慈悲母銅菩薩像
国(東京藝術大学保管)



253 金襴手下蓮花生 根津美術館



250 如意輪観音半跏像 石山寺



254 教王護国寺五重小塔 教王護国寺



251 染焼黒茶碗光悦作銘雨雲 三井高公

本

欄

昭和三〇年美術界概観

現代美術

日本画

三〇年度の美術界はぜんたいから見ると戦後一〇年目というくぎりにな年であつたといえる。というのは、例えば戦後まもなくのマチス展あるいはピカソ展、さらに昨年度のルーヴル展といつたような特に派手な話題や騒ぎが見られなかつたからである。むしろこの間に大がかりなメキシコ展が開かれたり、一陽会が分れたりしたが、こうした出来事も思つたほどの反響を呼ばなかつた。一般の関心が次第に落ちついて、問題が質実な地味な方へ寄つてきたせいもあるであらう。

そのような傾向は、日本画壇の動きにも反映しており、活発な新風が目立つよりも、戦後の荒々しい動きがむしろ静まり、ちよつと一息をいれる状況が見られた。もつとも人氣のあつた展覧会が日本美術院回顧展であり、さらに大観米寿展、松園名作展、川端電子古稀展、晩期の鉄斎展などであつたことも、現代画壇が次の動きを待つ小休止の状態にある事実を示したものであらう。しかし、こうした中にわずかに汲みとれる新傾向として、東洋あるいは日本の伝統美術に対して、別方から新しい見方が誕生しかけた点が注目される。その極端な一つとして古い藝術とされていた書道と現代藝術が結びつこうとし、その実例が日米抽象美術展やヨーロッパ巡回の墨と書藝術展などで示されたが、一部からは伝統を乱すものとして反対されながらも、他の一部からは現代のスペキュレーションとしてかなりな興味をもつて注目された。戦後の日本画が近代洋画に追隨するのあまり、色彩造型に片寄りすぎ、本来の特長であつた墨と筆の効果を忘れ去つた状況にある

昭和三〇年美術界概観(現代美術)

ので、この別方からの新傾向は今後案外な展開をみせるかも知れない。すでに海外からは書藝術展に対する相当な好評が伝えられているし、国内においても前衛画家の中にかえつて積極的に墨の藝術に近づくものも出て来た。これは伝統藝術新解釈の一例で、成果如何は今後にまつほかはないが、いずれにせよ、このような従来とまるで違つた新伝統観の誕生がほのみえてきたのが本年度の特徴ともいえる。国立近代美術館の「現代の眼」展をはじめ、博物館の金銅仏展、高島屋の宋磁展などもこうした傾向にかなりな暗示を与え、むしろ従来の日本画壇の枠外で種々の胎動がきざざしていることは興味深い。日本画の小休止はこの方から破られる気配も感じられるようである。

さて、本年度の日本画壇の目ぼしい作品をいちおう展望しておく、その第一に挙げなければならぬのは秋の院展における前田青邨の「出を待つ」である。これは院展の新古典主義の一点に立つ作ともみられ、本年度文化勲章の受賞者にふさわしい出来栄を示すものであつた。これについて、院展では大観の「風蕭々兮易水寒」、安田靉彦「鴻門会」、奥村土牛「城」、堅山南風「M先生」、中村貞以「遙拝」などが手固いところであり、新探求をみせたものとしては岩橋英遠「壁」と小倉遊亀「月」が注目された。とくに岩橋の抽象味の濃い新作風は院展の最前衛として今後の展開が期待された。新人は馬場不二、清原齊、今野忠一、福王寺法林といつたところで、技術的には整いながら、意欲の点では先輩岩橋以上に出ていない点が惜しまれる。青竜社は春秋とも相変らず川端電子の独り舞台であつたが、社人では亀井玄兵衛が別のものを示し、新人として横山操、山口吉旺が目立つて来た。とくに横山は第二の電子といえそうな大型の素質を示している点が注目された。

新制作協会日本画部は例年ほどの問題作に乏しく、福田豊四郎の意欲的な「滝」、山本丘人のつよい「北濤」、吉岡堅二の「水鳥屏風」とあつたが、むしろ新人加山又造「馳ける」の方が目立つくらいであつた。ついでには麻田鷹司、野崎貢が新境を探りつつあり、もう一つ伸びきれない戦後派の中堅、稗田一穂、堀文字、岩崎鐸、朝倉摂らの奮起が期待された。

日展は例によつて作家の数では圧倒的で、かなり充実した作品を陳列し、平均値はもつとも高い観があつたが、とびきりの作品となると淋しかつた。注目を集めたものは、徳岡神泉「薄」、山口華楊「仔馬」、伊東深水「宋磁」をはじめ、山口逢春「盤中瀟」、小野竹喬「深雪」、中村岳陵「狭霧霽れゆく」、東山魁夷「光昏」、杉山寧「瀑」、そのほか金島桂華、田中以知庵、望月春江、橋本明治、加藤栄三、西山英雄、高山辰雄、森田沙伊、横尾深林人といつたところで、新人では関主税、大山忠作、尾山職、堂本阿岐羅などがあつた。大画面の力作ぞろいで壯観にはちがいないが、もう一步するべく掘り下げた作品が乏しいというのが大方の批評であつた。

以上が主要公募展の状況であるが、このほかでは長崎莫人「五月の畑」が目立つた読売のアンデパンダン、安孫子荻声や岩崎巴人らの粗々しい墨絵で特色を出している新興美術院展、福田平八郎の「氷」、福田豊四郎の「流れ」が出た毎日国際展、伊東深水「戸外は春雨」が出た日月社などが大きいところで、その他兼素洞をはじめ各デパート等の画商による小展観にも例によつて小品鑑賞画の佳作が若干見られた。なお小会ながら注目すべきものとして、京都の若い前衛的集団パンリアルの東京展や要樹平個展などが行われたが、これら京都その他地方在住作家の東京進出はしだいに頻繁になりつつあるようで、今後こころした中から別系統の佳作があらわれる可能性も期待できる。しかし、本年度のところは、まず全般に小休止気味の静けさというのがいつわらぬ日本画壇の現状だつたようである。

洋 画

この二、三年來の特徴である回顧展や個展の増加、或は海外美術の交流は、本年も引き続き盛んであつた。先づ美術交流について述べると、最も注目されたのは毎日新聞社主催の第三回国際美術展であつた。参加一二ヶ国に及び、いずれも中堅作家の力作を揃え、日本側もまた之に對し、前回よりは一層充実した作品を出品し、めづらしく力を入つた、生氣ある展覽會となつた。殊に本年から国際賞が設けられ、展覽會の国際性を増した事も注目された。外国賞では、カルズーのほかファッチニ、ニコルソン、

ルバルダが受賞し、国内賞としては最優秀賞に脇田和、佳作賞に海老原喜之助、村井正誠、高島達四郎、福田豊四郎等が選ばれた。総じて誠実な、力いつぱいの制作が多く、恒例の団体展にみられない新鮮な魅力があつたことが指摘されている。つづいて、美術集団JANの尽力によつて、フランス・クリテイク賞受賞の新進作家の作品が紹介され、その清新なエスプリと堅実な制作態度は同世代のわが国作家に少なからぬ感銘を与えたようであつた。同様に、鎌倉の近代美術館に於ける現代イタリア美術展もシロニーニ、カンピリ等、第一線作家の近作を伝えわが画壇に寄与するところがあつた。異色ある展覽會としては東京国立博物館で開催されたメキシコ美術展が、広く話題を投げた。メキシコ政府の全面的な後援になるこの展覽會はオロスコ、シケイロス、タマヨ等の油絵から玩具、土俗品にまで及んだが、いずれも西欧近代美術の影響をうけず、全く独自の民族藝術を強烈に發揮したものであつた。その他には国立近代美術館の日米抽象美術展、ブリヂストン美術館のヘンリー・ミラー水彩展、現代アメリカ版画展があり、コルビュゼ・レジェ・ペリアン三人展の絵画、タピスリー、陶板なども注目された。ことに後者は建築、絵画、室内装飾・工藝の綜合として、生活と藝術の高度な結合を提示した興味ある展観であつた。

以上の如く、海外作品展は、今日の欧米画壇の動向を伝えるものが多く、戦後のマチス、ピカソ等の有名大展覽會に比べると、展覽會の規模も小さく、次第に中堅、若手の作家に注意が向けられている。地味だが、それだけに、催物的な傾向を離れて、落着いた観賞、研究的な方向に向つて恒常化されてきた様子が今年あたりは感じられる。

一方国外への進出は、ニューヨーク、ブルックリンで開催の第一八回国際水彩展に招かれ、若い作家で前衛的な傾向という先方の希望に答へ、岡本太郎、村井正誠、田中岑等一二名が選ばれ作品を送つた。また、サンパウロ、ヴェイエンナーレ展には脇田和、荒井竜雄其他が出品し、棟方志功が版画部門最高賞を得た。近年日本文化、殊に藝術部門に對する欧米の関心は益々強く、各国から注目と好評をうけているが、今年初めて、書道展が海外で開かれ意外の反響をうけたのもその一つの現われであらう。近頃の書

が文字を離れ、抽象美術の領域に近づこうとしている一部の傾向は、こうした海外展の反響によつて益々著しくなることと思われる。

次に、各美術団体の展覧会であるが、いずれも充実した展観をみせず、今年もまた美術団体の現状についての批判、論説はきびしかつた。然し、これという解決案もみつからず、むしろ、自由で、既成の団体意識に捉われない若い世代の人々から新しい画界の動きを期待するより他にないという状態である。各団体は中堅層を中心に、小数の作家が着実な歩みを示し、新人は前衛絵画の分野に活発である。

春期の展覧会で好評の作品を二、三点づつあげると、近年形式化の傾向を辿るモダンアート展では村井正誠、朝妻治郎、小松義雄、芥川紗織。日本アンデパンダン展では中谷泰、小山田二郎、井上長三郎、吉井忠等の作品であつた。美術文化協会展は福沢一郎を迎えて再建にのり出したが、従来の超現実主義から、具象、抽象を含む作品が多くなつたのが目立つた。笹川由為子、幸寿、清川泰次などそれぞれ前進をみせたが、一般に、技術の軽視と造型觀念の通俗さが批評に上つた。光風会では辻永を初め小糸源太郎「雪余」、森田元子「婦人像」、中村研二「静物」、等で新人の拾頭はみられない。春陽会は三雲祥之助「蟹と遊ぶ娘達」、岡鹿之助「祝いの花籠」、中谷泰「嫁」等が批評に上つたが次の世代ともいへば藤井令太郎の椅子のシリーズ、田中岑の作品、南大路の神経シリーズ等がこの会の新しい方向を語つて注目された。国画会では香月泰男の「遊泳」、川口軌外の「作品」、宇治山哲平「動く森」、井上三綱等が中核となり、他に高田博厚のバリからの出品があつた。新樹会では朝井閑右衛門、大久保泰、大河内信敬、浜口陽三があげられよう。

二科会は秋の展覧会を前にして、鈴木信太郎、野間仁根、高岡徳太郎等の脱退、新団体の結成によつて二つに分裂した。二科会を財団法人組織にしよるとする東郷青児案に対して起つたのであるが、同時に従来の独裁に対する多数会員の不満がはしなくも明かにされ、二科会自体も一応運営委員による合議制として出発する事になつた。一方脱退組は一陽会を結成し公募展を行うこととなつた。こうした分裂直後だけに秋の二科展は注目され

たが、相変らず興行的色彩が強く、興行団体としての躍進と、制作自体の掘り下げとが反比例する現状に批判の声が多かつた。同展では岡本太郎の指導の下に集めた伝統の第九室の前衛絵画が活気をみせ、岡本のほか山本敬輔「決定された地点」、抽象絵画に移つた多賀谷伊徳の作品、藤沢典明等が評に上り、芥川紗織も今後を期待された。今回は二科以外の無所属作家の招待を試みている。一陽会も同時に高島屋で第一回展を開いたが、急場の為もあつてか中心会員の鈴木、野間、高岡や荻野康児等がそれぞれの持味をみせたにとどまつた。次の行動美術協会展では古家新「波野」、小出卓二「窓外風景」、田中忠雄「聖痕」、抽象傾向では津田和一、山中春雄等があげられたが、この会でも一般に、抽象、非具象的傾向の増加が目立つてきている。一水会は木下孝則の手なれた技術、田崎広助のフォーヴァ風な「初秋の阿蘇山」、或いは中村琢二「赤い帽子」、仲田好江の作品等この会の水準を伝えるが、技術を尊重する一水会に、年々技術の向上が感じられず、第一線作家につづく新人がみられない。新制作展は脇田和が好調のほか、川端実、石川滋彦、伊勢正義、田中田鶴子等がよく、赤穴宏の受賞作「神々の争い」も注目された。独立展では海老原喜之助の「傷身」、児島善三郎「女と花」、林武「見高浜」、須田国太郎「樽原」「窪八幡」、野口弥太郎「裸婦」、二紀会は宮本三郎「人間群像」、真鍋博「生活」、鍋井克之「薬師寺」、正宗得三郎の風景がとりあげられた。自由美術展では末松正樹の「プロヴァンスにて」、森芳雄「ひなた」、小山田二郎「ピエタ」等が誠実な努力をみせ、難波田竜起「たたかい」、絲園和三郎「架」は個性的な方向を進めた作品であつた。最後に日展は、田崎広助「武蔵野の早春」、小糸源太郎「港」、田村一男「アッシジの丘」、中野和高「少女」、中村善策「北海道風景」等が比較的好評であつたほか、気力のない作品が余りにも多かつた。なほ美術団体展ではないが、前記国際美術展は秀作も多く、一三三を挙げると、受賞作品(一五頁参照)のほか

に、安井曾太郎「阿倍能成」、高島達四郎「春雪」、鍋井克之「海岸を行く雲の影」、海老原喜之助「靴屋」、山口薫「孤独」、川口軌外の作品などが注目され、鎌倉の近代美術館の「新人展」も今後が期待される展覧会であつた。

次に個展についてその主なものを列挙すると、瑛九のフォトデッサン

展、三雲祥之助・小川マリ二人展、榎戸庄衛個展につづいて、パリのサロンで金賞を得た平賀龜祐の記念的な個展、力作を揃えた中川一政展、更に野口弥太郎、荻須高德、青山義雄、三岸節子の滯仏作品展、山口薫と脇田和、また鎌倉の近代美術館に於ける木下孝則、田辺至自選展等で、アートクラブの各個展も新人の真面目な制作で好感を与えた。回顧展と之に類する展覧会としては岸田劉生展、旧福島コレクション展、大原美術館近代日本油絵名作展、藤島武二特別展(ブリヂストン美術館所蔵品による)、明治初期洋画展、みづゑ五〇周年記念近代日本洋画展、巨匠の二〇代展等が主なものであつた。

彫 塑

今年の彫塑界は例年に比し、話題の多かつた年といえよう。まず最も印象的であつたのは、戦後エトルリア・ローマ的美しさを再現して世界の斯界から注目を浴びているイタリア彫塑界から二作家の作品が春の第三回日本国際美術展に招来されたことであり、我国作家に強い刺激を与え非常な関心を集めた。早速秋の展覧会にはその影響や亜流が現れるという有様であつた。次に八月八日、長崎の爆心地、浦上の平和公園にかねて北村西望によつて製作中であつた平和祈念像が、四年有半の精進の末、漸く完成除幕されたことである。更にこの年は団体展において彗星的に有望な二人の現れたことが特筆される。モダンアート展における抽象的な石彫の木村賢太郎と新制作展において特色ある木彫を出品し、授賞された豊福知徳がそれである。

慣例的だが、本年度開催の美術団体展から振返つてゆくと、モダンアート展の彫塑部は絵画部に比し格段の充実と生気を示し、この作家の世代が若いだけに種々の素材を果敢に試みている点、なかなか意欲的で、他の展覧会にみられない自由さと新鮮味が感じられた。伏木南國の特異な抽象の木彫や鉄板による構成に独自の作風を示す須賀通泰は注目せられ、前記、初出品の木村賢太郎の石彫数点は独自な個性的作品で観者を瞠目させた。中でも「トルソA」「祈り」など佳作であつた。日本美術会並びに説元

の両アンデパンダン展ではこれという作品は見当らず、恒例の日本彫塑家クラブ展では一ヶ月余の長期の開催で、前・中・後期に分ち、中期は三名が合同個展の形式で、橋本高昇、山本稚彦、名嘉地千鶴子等の作品群が總体的に注目された。他に全期を通じて佐藤静司「老僧の首」、佐藤助雄「友人の頭部」は佳作であつた。前述のようにグレコ「坐像」、ファッツィニ「作られた仔馬」のイタリア作家の出品があつた国際美術展の彫塑では、これら二作品に比して見劣りの感は免れなかつたが、日本側の作品もなかなか緊張した勉強ぶりをみせ、岡本庄三「立女」、西常雄「老木工」、佐藤忠良「座る」などはなかでも注目された。社会生活と彫塑との協和を念願する創型会展は会場構成に工夫をこらして鑑賞者に親近感を与えていたが、作品としては森大造「母子像」、中野四郎「蕪園」のセメント像が主なもの。新樹会展では相変らず彫塑の比重がかなり大きく山本、清水、木内等ベテラン会員が力量をみせた他、招待の土方久功の特異な作風が認識を新たにさせた。秋を迎えて第一陣の二科・行動・院展では、前二者は前年に比しその作風にあまり変化はみられなかつたが、院展は大分動いてきた。従来通りの写実的作風に加えて、半具象、抽象の作品がかなり現れて来た。従前の傾向を追うものうちでは山口信子「青年像」、荒川明照「女の首」、半具象の山崎脩「座像」、抽象の辻菅堂「クハンダ」、桜井祐以致「沈む地球」等が秀れ、幹部同人の石井鶴三「娘子」、大内青圃「薬叉神薬叉女」も夫々持味を活かした佳作であつた。二科展では乗松巖「ひと」、淀井敏夫「蹲る」、人造石による抽象の野口嘉光「作品」、行動展では、向井良吉「アフリカの木」、建昌「覚造」かお、篠井欽治「女人群像」が注目された。又今年新発足した一陽会展では植木力が孤軍奮闘のかたちだつたが、その作品「顔」は好評であつた。次の新制作展では、イタリア彫塑の影響が散見せられたが、若い世代が活気ある動きをみせた。会員では佐藤忠良「腰を下す女」、芥川永「馬」、本郷新「駄々子」、山本常一「ひな」、舟越保武「詩人の顔」等が注目せられ、既述の通り、全く新人の豊福知徳「父子像」は場中の白眉であつた。二紀会展ではベルギーで客死した同人故川上全次の遺作を陳列、才能豊かな作家の急逝が惜しまれた。同人の長野隆業の抽象作「二つの定点による空間の歪み」

が好評を受けた。自由美術展では峯孝の「斜像」及び「友人の像」が近來の秀作とされ、森川昭「白山」も注目された。

掉尾の日展は、その作品の傾向に於て、従前とさほど変りはないが、質量共に進展をみせた。殊に木彫作品が例年にも増し多量の進出を示した。沢田晴広「大聖不動明王」、円鋸勝二「古の話」、橋本朝秀「起信」、木島正夫「麦」等はその代表的佳作であり、塑造では朝倉文夫「友」、畝村直久「大木君の首」、安田周二郎「首」、朝倉響子「若い女」等主な佳作であり、水船六洲「傘をさしている人」は異色作として話題となつた。また、今年には池辺るり子「砂上」、羽柴小枝子「媚女」の二名の女流作家が特選となり、院展で最高の大観賞を受けた山口信子や本年度新人展に選出されて好評だつた若い藤田昭子と共に、至難とされたこの道にも女性の進出が目覚ましく、これも今年の大きな話題とすべきであろう。

以上定例の団体展のほか、年を追つて彫塑のみのグループ展、個展、或いは選抜作家展、回顧展も盛んとなり、前年よりも一層頻繁に開催されるようになった。

グループ展では、自由美術彫刻出品グループ展が会名の通り全員がよくまとまつて小品乍ら活潑な発表をなし、研究的な態度で好感が持たれ、恒例の日本陶彫会展、能彫会展、日本木彫会展、仏教美術展(彫刻)も年毎に充実し、個展では植木茂造型展や山本豊市個展は大規模な展覧会で内容外観共に注目され、流政之「空閑造型展」、同「火面展」や木村賢太郎石彫個展は新進の意欲を示し、畑正吉能彫展や池田勇八彫刻展は眷宿作家の久しぶりの発表で話題となつた。その他、戦後毎年連続開催する土方久功個展、大須賀力・黒田嘉治二人展、河内山賢祐彫刻個展など作家のたゆまぬ勉強ぶりを窺わせた。また現代作家の選抜的な意味の展覧会に、神奈川県立近代美術館の木内克・菊池一雄・清水多嘉示・山本豊市四人彫刻展(一月―二月)や今日の新人一九五五年展(一二月)があり、後者では木内岬、向井良吉、建島覚造、木村賢太郎、毛利武士郎、藤田昭子の新人が選ばれた。

国立近代美術館の「一九人の作家展(二月)」には三人の作家、佐藤忠良、

植木茂、昆野恒が戦後の動向を代表する作家として挙げられた。かような一年の創作活動を通覧すると、今年あたり、戦後育つた新人作家達の結実の兆しがみられ、彼等が主として追究してきた抽象傾向の作品にも見るべきものが生れてきたという感が深かつた。

回顧展には山崎朝雲遺作展が六月四日の一周忌を中にはさんで行われ、明治三一年作「母子」から歿前までの遺作四〇点が展示され、近代木彫界の先達であつた故人の偉大な業績が偲ばれた。また国立近代美術館の四人の作家展(一〇―十一月)には萩原守衛と橋本平八の我国近代彫塑界の両鬼才がとりあげられた。その他、外国から将来の展覧会では、日米抽象美術展(五月)やメキシコ美術展(九月)の各々彫塑作品が視野を広め、彫塑に關係深いアジア諸国のお面展やアジア・アフリカ珍奇人形展も興味深く観覧された。

この年戸外に建設されたモニュメントでは前記長崎の平和祈念像(年史参照)を筆頭に、主なものとして次のようなものが列挙出来る。

△大観音像(六月八日開眼供養) 原型製作・山崎朝雲 鉄筋コンクリート製 高さ七丈五尺 京都市東山区靈山町、高台寺境内 帝産オート社長石川博資建立。(年史参照)

△愛の像(二月一日除幕) 原型製作・横江嘉純 東京駅前 巢鴨遺書編纂会建立。(年史参照)

△自由の群像(二月三日除幕) 原型製作・菊池一雄 設計・谷口吉郎 東京都千代田区半蔵門千鳥ヶ淵公園内 日本電報通信社が創立五五周年記念行事として企画し、新聞界功労者を顕彰するもの、新聞の精神である自主・自尊・進取を象徴する高さ七尺五寸の男性三裸体の立像。

尚、ジャーナリズムにおいての彫塑家の発言として注目すべきものに、作家の生活白書ともみられる「彫刻家の裸像 等置季男」(日本経済新聞二月二三日)、木彫家の立場から「無形文化財に憶う―東洋藝術の根幹・木彫の場合― 沢田晴広(時事新聞三月二四日)、若い世代の新人から「現代の表現(彫刻)―あたらしい秩序と均衡を― 須賀通泰」(建築文化一〇七号)等があつた。

工 藝

昨年イタリアのミラノで開かれた第一〇回トリエンナーレ展、本年六月から八月までヘルシンボルク市で行われたスウェーデン国際建築意匠展等を契機として、共通の新しい動きが各国の工芸界に興りはじめられている。それは藝術と産業の協力による量産化の問題と、建築、彫刻、絵画、工芸、相互の結合を再認識し、更に生活への鞏固な結びつきを求めようとする動き等で、単に概念的な問題としてではなく、制作を通してその具体化への努力が試みられている状態である。

四月に東京で開かれたル・コルビュジェ、フェルナン・レジェ、シャルロット・ペリアンの三人展は海外におけるこうした新しい動向を示したという意味でも注目すべき展覧会であつた。「巴里一九五五年——藝術の総合への提案」という副題をもち、コルビュジェやレジェの絵画、タピスリー、陶板、ペリアンの机、本棚、戸棚、椅子等をはじめ多くの作品がペリアンの会場構成によつて印象的に展示された。絵画、綴織、家具、工芸品類の総合的な新しい調和を創造しようとする意欲が見出され、ことに生活と藝術の高度な結びつきを、フランスの伝統のうちに合理主義的に明快に提示した極めて示唆に富んだ展覧であつた。中でもペリアンの作品にはインダストリアルなものとクラフトによるものとの美しい統一が企図されているのが目立つた。こうした最近の動きはわが国の工芸界にも大きな感銘を与えたが、生活に根ざした総合的な新しい創造はまだ現われるに至っていない。伝統に則つた今後の動きが注目される現状である。

こうした国際間の交流は益々盛んで、前記スウェーデンの国際展をはじめ、第四回ワシントン州シャトル国際貿易見本市(三月)、カナダ、トロント市国際貿易博(五月)等へも日本から出品した。「人間生活の環境」というテーマによるスウェーデンの国際建築意匠展には予算の關係上建築關係の出品はとりやめとなつたが、産業工芸試験所の企画設計によつてモデル・ルームが設けられ工芸品と家具類が展示された。同所の試作品及び現在活躍中のデザイナーの作品と古くからある伝統的なクラフト製品等が選ば

れ、非常に好評を博した。しかし前述の新しい動きを提示したというものではなかつた。国内では中国見本市(於東京、一〇月)に陶磁器、漆器、七宝、象牙細工等の各種工芸品が、また東京国立博物館におけるメキシコ展(九月)には同地の珍しい土俗民藝品が展示された。海外との交流展は以上のようなものであつたが、そのほかにわが国にあるガラス器を集めた世界ガラス展(六月)が神奈川県立近代美術館で開かれ、エジプトから現代に及ぶ作品のうちで、特にローマ時代のガラス器等古い西洋のものが珍しく、興味が注がれた。

このような世界的視野の広がりによつて、わが国の工芸界にも少しずつ変化が起つて来ているのは見逃すことが出来ない。特にこれまでの手工藝的技術偏重に対する反省は著しいといえよう。

本年の目立つた現象としては、陶藝界に前衛的な傾向の作品が次々と発表されたことであろう。今までもこの種の傾向の作品が現われないわけではなかつたが、本年種々の個展等に発表されたものを見ると、従来になく空間的な構成を意識し、素材や手工藝の技法をより自由に駆使して抽象的な純粹造型の精神を陶藝に取り入れようとした作品が出はじめて来ている。

まだ実験の域を出ないものもあるが、今後の成果が期待される。その主なものを挙げると、徳田俊三陶器と細胞模様展(一月)、河合紀作陶展(三月)鈴木治・山田光二人展(七月)、叶敏個展(九月)、熊倉順吉個展(十一月)等で京都等伝統の強い地方に在住する若い作家が多いのも面白い現象である。この他に陶器の展覧としては内田邦夫個展(六月)、清水六和八〇歳記念回顧作品展(八月)、富本憲吉作陶四五年記念展(十一月)等があり、ことに富本憲吉記念展は数多くの陶磁、図案、写生帖等が出品され、大正以来のこの作品の足跡を伝える興味ある回顧展であつた。

その他の展覧会では、「しづくガラス」をはじめガラスの透明な美しさや光輝性を生かして単純な形態に日本的な感覚をみせた淡島雅吉新作ガラス展(四月)、新しいクラフトの創造を目ざして二、三年来清新な活動をしている創作工芸協会展(五月)、段々社工芸展(六月)、モダニズムの新作協会展(六月)等があり、これらに以て家具類の尖端をゆこうとする同建築

部の展観(九月)、新工藝協会展(一〇月)、工藝洋和会展(十一月)、精選された技術のきびしい美しさを見せた対象展(十一月)等が注目をひいた。今年の日展は相変らず多数の作品が技巧を競つたが、生活との結びつきがうすいのが感じられた。しかし西大由の「青銅壺」、清水洋「条文花器」のような新しい傾向の作品が特選や賞に選出される等、以前とは幾分変わった方向がうかがわれた。評判に上つた作品としては新しい感覚をみせた榎本盛「漆棚」、染川鉄之助「水呑み場の構成」、岩田久利「藻」等の他、高村豊圃「鼎による花入」、高野松山「縞模様木地蒔絵手箱」、山脇洋二「游亀」等の堅実な作品が挙げられる。

デザイン振興運動の一つとして毎年新日本工業デザイン、商業デザインの募集を続けて来た毎日新聞社では今年から毎日賞の中に新たに「毎日産業デザイン賞」を設定した。その年度間に発表された作品を通じて最も優秀と認められ、またわが国の産業デザインの向上に寄与した商、工業デザイナーに贈られるもので、本年度は特に第一回を記念し、過去に溯つて今日まで産業デザインを育成して来た功労者を特別賞として表彰した。受賞者は特別賞(工業デザイン部門)国井喜太郎、(商業デザイン部門)山名文夫、作品賞は(工業デザイン部門)小杉二郎、(商業デザイン部門)早川良雄であつた。

また今まで助成の措置を講ずべき無形文化財を選定して、伝える者の少い貴重な工業技術を保護して来た文化財保護委員会では、法令を改正して、新しく重要無形文化財として技術保持者を指定することになり、本年一月第一次を、三月第二次を発表した。第一次に石黒宗麿、小宮康助、松田権六等一八名、第二次に上野為二、音丸耕堂、海野清等一〇名と総合指定の団体一件がある。文化財保護委員会と日本工芸会共催の第二回日本伝統工藝展(一〇月)にはこれらの人々の作品も陳列され、高度な技術と古典作品に劣らない風格を賞讃されたが、一方では伝統が単に技術的な面にだけ残り、背後にあるべき精神的なつながりの断絶していること等が指摘された。

なお一二月に入つて、「伝統の上に立ち新しい時代の要請に応える世界的

視野を持つた生活造型の確立」を声明して岩田久利、音丸香、菱田安彦等若い工藝作家達が国際工芸美術協会を設立した。

建築

前年に引続き、本年も諸都市の復興は着実に進み、官公庁舎や商店街の建設が行われ、大都市では、ホテル、銀行、百貨店、映画館など商業的大建築の新、増築がしきりに行われた。官公庁舎建築では、丹下健三設計の東京都庁舎が着工されてはやくも話題をよび、その他清水市、伊丹市、下関市などの地方都市でも、面目を一新した近代的な新庁舎が完成した。また、学校建築にも神奈川大学、法政大学、明治大学、八雲小学校のよう近代様式に成る新校舎が建てられ、交通、通信関係では、羽田の国際空港ターミナル・ビルや東京放送会館の新館などがある。また、会館、会堂には、東京の著名三建築家の共同設計に成る国際文化会館をはじめ平和記念のための長崎の国際文化会館、広島市の平和会館本館、世界平和記念聖堂、中野区公会堂などがある。美術館や社寺の宝蔵庫の新設もいくつかあり、就中根津美術館、愛知県美術館、中尊寺、大石寺の宝庫が注目される。その他谷口吉郎、堀口捨巳による詩碑、墓碑などの記念建造物の建設がしきりに行われている。

なお本年は、海外の著名建築家数名が来日した。就中、返還確定の旧松方コレクションのための西洋美術館(仮称)設計を依頼されたフランスの巨匠ル・コルビュジェは一月来朝し、上野公園内の敷地を实地視察し、その設計への第一歩を踏み出した。また一〇月には、大規模なパイプ構造の創案者として知られるアメリカのイリノイ工科大学教授コンラッド・ワックスマンが来朝し、講演会や東大に於けるセミナーによつてわが建築学徒に多大の感銘を与えた。その他七月には、オーストリア系のアメリカ工芸建築評論家バーナード・ルドフスキーが来朝し、九月にはドイツ系のメキシコ建築家ホルスト・ハルトウングがメキシコ美術展を機会に来日、それぞれ各地を訪ねて日本建築を研究して離日した。

またブラジルのサンパウロ開市四〇〇年祭は前年から開かれたが、その

中心である万国博覧会には、日本からは堀口捨巳設計の日本館が送られて展示された。さらに、サンパウロ現代美術館主催の第三回ビエンナーレに於ける第二回国際建築学生作品展に早大グループが前年に引き続き再び一等賞を勝ち得た。かように、近年のわが建築界は内容的に向上を示し、漸く世界の一流水準に近づき、しかも、わが国の伝統的建築様式が海外建築家の注目をあび、現在及び将来の建築に大きな暗示を与えつつある。次に本年度の主な建築を列挙して置く。

- 伊丹市役所庁舎 設計 久米建設事務所
- 下関市役所庁舎 設計 田中誠ほか
- 清水市役所庁舎 設計 丹下健三ほか
- 箱根町役場 設計 中村登一建築事務所
- 法政大学五五年館 設計 大江宏研究室
- 明治大学新築大教室 設計 堀口捨巳研究室
- 八雲小学校 設計 仲威雄ほか
- 東京国際空港ターミナル・ビル 設計 松田、平田建築事務所
- NHK東京放送会館新館 設計 山下寿郎
- 国際文化会館 設計 前川、坂倉、吉村各建築事務所
- 広島平和会館本館 設計 丹下健三、浅田孝
- 世界平和記念聖堂 設計 村野藤吾、近藤正志
- 長崎国際文化会館 設計 佐藤武夫
- 東京産経会館 設計 竹中工務店
- 愛知県立美術館 設計 小坂秀雄
- 根津美術館 設計 内藤多仲、今井兼次
- 大石寺宝物館 設計 横山公男
- 中尊寺収蔵庫 設計 山下寿郎
- 京都地方貯金局 設計 郵政大臣官房建築部
- 丹下邸 設計 丹下健三、田島良明
- 森村邸 設計 レイモンド建築事務所
- 吉坂邸 設計 吉坂隆正
- 山口蓬春アトリエ 設計 吉田五十八

古美術

建築

昭和三〇年における古建築の保存と修理については別項記載の国宝七件、重要文化財二二件の指定と、多数の実施中の修理工事がある。そのうち三月に松江城天守が復旧落成し、八月に十輪院本堂・南門が落成し、さきに解体されていた平等院鳳凰堂が再び組立てに着手され、醍醐寺五重塔が根本的修理のために全部解体される段取となつたことが注目される。鹿苑寺金閣は昭和二五年焼失のあとをうけて再建され、本年九月に竣工して金色もあざやかな姿に復原された。修理報告も多数出版されたが、法隆寺国宝保存工事報告書のうち聖霊院と五重塔の分ができ、松本城(解体・調査編)が出たのが目立っている。

建築遺跡の発掘調査も前年にひき続いて盛んに行われた。一月からは中山修一らによる長岡宮跡の発掘、二―三月と七―九月には山根徳太郎らによる推定難波宮跡の発掘、八月には奈良国立文化財研究所による平城宮朝堂院跡の発掘が行われ、奈良時代ごろの宮城の研究の進展に貢献した。寺院関係では七月に文化財保護委員会と大阪府教育委員会による四天王寺金堂跡・南大門跡の発掘が行われた。これは三箇年計画の第一次調査である。八月には伊東信雄らによる陸奥国分寺跡の発掘、一〇月には浅野清らによる興福寺食堂跡の発掘と藤島亥治郎らによる平泉毛越寺・観自在王院の発掘、一月には石田茂作らによる出雲国分寺跡の発掘が行われ学界に新知見を加えた。発掘報告書としては平出遺跡調査会編「平出」が第一におされる。またこの年四月に川上貞夫によつて鳥取県出石美郡岡益の「石堂」(石塔残欠であらう)のような珍しい遺構が調査されたことも附記すべきであらう。

研究成果の公表としては野地修左の「日本中世住宅史研究」の大著をはじめ、小倉強の着実な労作「東北の民家」、森籙の「桂離宮」が主要なものとし

昭和三〇年美術界概観(古美術)

てあげられる。

彫塑

本年も、東洋彫刻史の研究は、堅実な歩みをつづけている。その主な論文を見ると、研究の動向は、貞観彫刻の研究、金銅仏の研究、鎌倉彫刻史の掘り下げ、新資料の紹介、地方彫刻史の研究、中国、朝鮮、インド彫刻史の研究、及び仮面の研究等にしぼることが出来る。

近時盛んになつた貞観彫刻史の研究は、いまだ、系列的研究は少く、個々のものの検討という段階であるが、その成果は著しい。これには、丸尾彰三郎「教王護国寺西院不動明王像」(美術研究一八三)や、毛利久の「安祥寺五智如来像考」(仏教藝術二四)、堀池春峰「法華堂の旧不動明王像に就いて」(大和文化研究一四)、久野健「黒石寺薬師如来像」(美術研究一八三)等がある。また、一月に東京国立博物館で行われた日本金銅仏展は、ほとんど全国的に散在する金銅仏を一堂に集めて展覧したところに大きな意味があり、学界に益するところが大きかつたが、それに刺戟されて、発表されたものとして、千沢楨治「日本の金銅仏」(ミュージアム五六)、金子良運「日本の金銅仏」(みづる六六四)、同「金銅仏の構造」(ミュージアム五六)や、本間正義「上代の鋳造素材について」(国華七五九)等がある。

一方、関西の学界では、鎌倉彫刻についての研究が着々と進んでいるが、毛利久「運慶快慶と高山寺十輪院」(史迹と美術二五五)や小林剛「解脱上人貞慶と明恵上人高辨と興正菩薩教尊につながる釈迦如来像」(大和文化研究一四)等は、その成果の代表的なものである。

新資料の紹介にも目ざましいものがあり、今日では、殆ど発掘品以外には期待出来なかつた白鳳彫刻の発見紹介が田岡秀逸「播磨国加西郡発見の白鳳時代の石仏について」(大和文化研究一三)により行われたり、一昨年発見された清凉寺の釈迦如来像の納入物のこまかな紹介が、塚本善隆「清凉寺釈迦如来像納入品」(美術史一五)で行われたりした。その他、平等院鳳凰堂阿弥陀如来像胎内納入物の調査研究や紹介が、美術研究一八二号及び一八三号や仏教藝術二五号に発表された。

その他日本彫刻史関係では、昨年より引つづき地方彫刻史の研究も盛んで、西川新次「三宅島の金銅仏」(博物館ニュース一〇二)、久野健「みちのくの古仏」(藝術新潮六ノ四)、天岸正男「泉佐野市長滝在石仏 其他について」(史迹と美術二五五)、城島正祥「肥前観喜寺の仏像」(史迹と美術二五七)等がある。

一〇月には京都国立博物館で、日本の仮面展が行われ、従来例のないほど、日本の仮面が総合的に展覧され、室町時代の能面の新資料もいくつか加えられ、学界に貢献するところが大きかつたが、その成果は、毛利久の解説がつけられ京都国立博物館編「日本の仮面」として発表された。また、石田茂作「正倉院伎楽面の研究」もこれとともに特記すべきものである。また、東京国立文化財研究所からは、八年間継続して行われてきた、X線、γ線による古彫刻の調査研究が「光学的方法による古美術品の研究」という題目で、総合的にまとめられ発表された。

中国彫刻に関する展覧会も、八月に鎌倉近代美術館に於て行われた。中国彫刻に関する論文としては、松原三郎「東魏・北齊の白玉半跏思惟像について」(美術研究一八一)や、同「北魏末東魏の半跏思惟像について」(美術史一七)、安藤更生「六朝彫刻雜記」(みづる六〇二)等が特記すべきものである。

その他のものとしては、中吉功「朝鮮三国時代の金銅仏」(ミュージアム五六)、高田修「インド東南アジアの金銅仏」(ミュージアム五六)、同「カニシニカ大塔及び舍利容器的再検討」(美術研究一八一)、野間清六「インドの仮面」(ミュージアム五七)等がある。

絵 画

本年(昭和三〇年一月—二月)も、古美術品の展覧は相かわらず各種の趣向を競つてにぎやかであつたが、日本絵画に関しては、昨年に比べ研究史、鑑賞史にのこるような作品は出陳されなかつた。比較的纏つたものとしては、「渡辺崋山展」(三・四月、東京国立博物館)が崋山の伝記資料

と主要作品とをあわせて展示し、秋には「絵巻物名作展」(十一月、東京松屋)が多くの関心をあつめた。特に後者は、院政期の重要遺品が出品制限をうけたため日本絵巻物の概観としては頭を欠く感があつたが、御物の絵師草紙、蒙古襲来絵詞の出陳もあつて鎌倉時代に関してはかなりの充実をみせ、展示法にも留意して絵巻物という独自の藝術形式を一般に親しませるのによい機会を与えた。このほか「南蛮美術展」(一月、三越)では旧池長コレクションを中心とする初期洋画の主要な遺品が久しぶりで纏めてみられたし、「高野山名宝展」(四月、伊勢丹)には問題の赤不動図が戦後二度目に東京で公開された。また一月から新築開館した根津美術館で那智滝図、光琳筆燕子花図をはじめ所蔵の名画類が記念陳列されたことも記憶される。東京以外では、愛知美術館(名古屋)における「日本美術史展」(上古—奈良・六月、平安—室町・一〇月)が絵画関係についても効果のいい展示法を試みたことと、「医学に関する美術資料展」(三・四月、京都国立博物館)に病草子(特に村山家断簡)が、藤田美術館(大阪)の第三・四回展覧(四月・十一月)に同家の阿字義や法相宗秘事絵詞などが出陳されたことに注意したい。

鳳凰堂壁扉面の模写事業は、三月で後壁および左右壁を完了し、四月に東京国立博物館で披露公開した。引続き扉絵にうつり努力がつけられている。この間、七月に上品中生両扉の押縁下から珍しい俗形人物の落書一三体などが偶然発見されたことは絵画史にとつては本年度最大の収穫であつた。その写真と内容は大森健三「平等院鳳凰堂扉絵の落書」(仏教藝術二六)として紹介されたが、平安時代絵画史の空白をうすめるべき資料的意義は大きい。

研究発表を世俗画関係から概観すると、小林行雄「弥生式土器に描かれた原始絵画」(美術史一五・一六)をはじめとして、平安時代については秋山光和「教王護国寺所蔵唐櫃とその絵画」(美術研究一七九)、むしやのこうじ・みのる「宇津保物語の画詞」(国華七五五)、小松茂美「源氏物語絵巻とその成立年代」(墨美四二)などがあり、鎌倉時代では森暢「信実に関する二三の問題」(国華七五四)、白畑よし「白描源氏歌合絵に就いて」(国華七五

六・八)などが興味ある新資料を提示した。仏画関係ではまず前年度に東寺で発見された三種の古本両界曼荼羅に関する調査概報「東寺と正系両界曼荼羅の相承」(仏教藝術二四)が注目され、宮次男「平家納経の構成と錯簡についての一試論」(美術史一八)も興味ある問題を提起している。一方また「絵解の絵画史的考察」との副題をもつ梅津次郎「五趣生死輪図に就いて」(美術史一五・一六)は、大陸における絵解きの展開を論じた力作「変と変文」(国華七六〇)やわが常楽寺蔵降魔図、志度寺縁起絵などの紹介と相俟つて、甚だ示唆に富み、今後の日本絵画史ことに絵巻物などの研究に重要な寄与をなすものである。なお中世の珍しい板絵として、石山寺多宝塔柱絵

(佐和隆研)、京都大報恩寺釈迦堂後壁画(佐和隆研・大森健二)、金沢称名寺金堂壁画(松下隆章)巖島神社五重塔壁画(同)などが纏めて紹介されたこと(仏教藝術二五・二六)も資料的に意義ふかい。肖像画については森暢「画像史上に於ける真言七祖像の影響」(美術史一五・一六)、裏辻憲道「新出の一遍上人像について」(美術史一七)、谷信一「実陸像の紙形——土佐光信考補遺」(美術史一七)などをあげうる。室町水墨画については発表が少く田中一松「武人画家の系譜」(美術史一四)、中村秀男「愚溪筆竹雀図とその年代」(国華七六二)、土居次義「曾我蛇足の歿年と真珠庵過去帳」(茶道雑誌一九ノ四)などをみるにすぎない。近世障壁画の研究も振わず、僅かに藤懸静也「桃山屏風の一考察——柳橋図屏風に就て」(国華七六一)、「彦根屏風とその類似作品に就て」(国華七六三)、田能村忠雄「新出の美福門院入内図について」(国華七六三)などの屏風絵の紹介をあげうる。江戸時代では大雅、玉堂、ことに展覧会の行われた関係もあつて崑山と、南画系統に発表が多かつた。なかで鈴木進「浦上玉堂について」(萌春二七)、吉沢忠「崑山の周囲と大塩事件」(国華七六四・五)などが纏つていた。また浮世絵関係では菱川師宣についての特輯(三彩六六)のほか渋井清「江戸と上方——浮世草子の挿絵にみる」(美術史一五・一六)が同じ時期を他の面から扱つた。

単行本としては、密教図像の概観に観音および不動の図像的研究をそえた佐和隆研「密教図像」(便利堂)が刊行された。また東京国立文化財研究所で多年進められてきた光学的鑑識法による古美術品の研究について、大部

の報告書(吉川弘文館)がまとめられたが、絵画の項(秋山光和)でも豊富な図版による説明がなされている。なお特殊な出版として、平安時代の研究に不可欠な年中行事絵巻の住吉模本(田中本)の全巻、二分の一大のコロタイプ複製が漸く刊行されたことは特筆されてよい。

中国画については、一月の茶道展に玉潤梁楷などの名物が、国立近代美術館の現代の眼展観に徽宗の桃鳩をはじめ各時代の名画が短期間ながら陳列される機会に恵まれた。また一〇月根津美術館の再開にも藏品が展観されたが、まとまつた展観としては一二月当研究所開設二十五周年記念の梁楷名作展があり、いわゆる経破り祖師図のほかは、定評ある作品を公開し得たことは幸であつた。

研究面にあつては、国華が米沢嘉圃、鈴木敬らによつて中国画新資料の紹介を努める他には、島田修二郎の「子庭祖柏筆石菖図」(美術研究一八〇)、松下隆章の「呉大素筆墨梅図」(美術史一八)、川上涇の「董其昌筆仿楊昇山水図」(美術研究一七一)の紹介が目立つ。また梅原未治の「戦国時代の彩画鏡」(美術研究一七八)は古代中国絵画史に新資料を加えるものである。

西域画については熊谷宣夫「ベゼクリク第八号窟寺将来の壁画」(美術研究一七八)、「ミイラアン第三及び第五古址将来の壁画」(美術研究一七九)の紹介などあつた。

書 蹟

平凡社、河出書房出版の書道全集は、夫々引きつづき出ている。その他には藤田経世編輯の「書」が伝統藝術講座の一として河出書房から出た。かかる出版物の中で特筆さるべきは田山方南著「禅林墨蹟」(秋葉啓出版)である。墨蹟については、以前当研究所より墨蹟資料集が出版され、その第三まで出て中絶されているが、このたび田山方南によつて日華禅林の墨蹟が集大成された。古筆方面にはこの種のものは沢山あるが、墨蹟界では本書がはじめてである。墨蹟研究の好指針である。研究論文或は資料発見ではそれほどのものは見当らないが、神田喜一郎の「黄山谷書伏波神詞詩卷」(大和文化一七号)の紹介と、岩崎家より趙子昂筆中峯明本宛尺牘の再発見が

目立つ。

工 藝

工藝の分野に於て活潑な動きの見られたのは陶磁工藝である。その一つは宋瓷名品展(高島屋四月二六日―五月一日)で、陶磁協会創立十周年を記念して開催され、わが国の代表的宋磁をもうらし、又アメリカ、クリーヴランド美術館からの出陳も得、総数一四〇余点に及ぶ宋磁の展観としてはかつてない大きなものであつた。研究者、愛好者にとつて益するところ非常に多かつたし、又、一般にも予想外の関心を呼んだ。

他は九州上野窯の発掘調査で、陶磁協会、地元などの協力によつて五月大々的に行われた。「釜の口窯」の大きな窯趾が完全に地上に掘出され、江戸初期朝鮮より移された窯の構造が明らかとなり、その他岩谷窯趾の確認、皿山の発掘など大きな成果を挙げ、陶磁史研究上貴重な資料を提示した。又一般美術の全集の盛行と並んで、世界陶磁全集(座右宝刊行会全一八巻)が発行されはじめたが、図録と研究を兼ね、従来にない大部なもので、斯界に喜ばれている。

他の部門に於ては取立てて目立つほどのものは少ないが、漆工藝に關しては、昭和二八年より行われた宮内庁委嘱による正倉院漆藝の調査研究が一先づ終り、従来末金鏤と称していた技術が蒔絵であるなど、技術方面についで明らかとなつた点が多いと聞く。

染織工藝については、山形上杉神社の謙信所用と伝える服飾品が前年展観され、関係者の注目をひいていたが、本年その全部に互つて調査がなされた。小袖、胴服、装束類など七〇点近くが纏まつてあり、保存も極めて良く稀有な例とされ、しかも遺品少ない桃山以前のものであることが明かとなり、染織工藝史上非常に貴重な資料を加えることとなつた。

その他、昨年正倉院曝涼の折、唐櫃から発見されたベッコウの断片が南倉の和琴に關係あるものとして、林護三によつて調査されていたが、和琴にはつてあつた絵の断片であることがわかつた。そして復元の結果、山水、花鳥画を表わしており、ベッコウの裏から顔料をニカワで溶いて描い

たもので、ガラス絵の手法がその頃、既にわが国にあつたことが明かとなつた。

国際關係としては東京国立博物館蔵品によつてホノルル美術館が二月から日本美術展を開催した。また東京国立博物館は二月フランス国立博物館との考古資料交換として縄文土器、土偶、弥生式土器、埴輪などを贈り、大阪市立美術館は四月イタリア国立先史民俗博物館からおなじく交換資料としてエトルスク及びローマの土器等の寄贈を受け、具体的な文化交流が行われた。七月京大美術探検隊がアフガニスタン、パアミヤンを訪れ、石窟及び大仏の調査に従事したことが伝えられた。

また、六月九日わが美術界に親しみ深いランドン・ウォナーがマサチューセッツ・ケムブリッジで逝去したので、七月鎌倉、奈良で同氏の追悼会が営まれた。

昭和三〇年美術界年史

一月

○兵庫県で最古の石仏発見 兵庫縣文化財保護委員岡香逸らは、六日北条町の観音堂から鍔葺行基葺の石造厨子と白鳳と思われる石仏を発見した。竪一〇二種、横七二種の石にほられた三尊仏で、中尊は倚坐する。

○南窓美術展開催 池長孟の収集になる神戸市立美術館所有の南窓美術を、毎日新聞社の主催により一日から三日まで日本橋三越に於て展覧した。鎮国時代長崎を通じて行われた西洋文化渡来の歴史を物語る美術遺品が、東京ではじめて系統的に陳列されたわけである。

○茶道名宝展開催 茶道関係の諸文化財を集め産業経済新聞社の主催により一日から三日まで、茶道名宝展が渋谷東横で開催された。門外不出の名品名器が一堂に集められた壯観は近來稀にみるものであった。(目録 六五頁)

○法隆寺修理完成 二八年一月以来解体修理中であつた法隆寺西園院新堂が竣工し、二三日落慶式を行つた。これにて二年間にわたつた、法隆寺昭和修理が一応終了し、わが国の建築保存事業が一つの山をこしたことになる。

○第一次重要無形文化財指定 文化財保護

昭和三〇年美術界年史

護委員会では、新に重要無形文化財の指定及び保持者の認定基準を設け、二十九日藝能関係一〇件二名、工藝技術関係一五件一八名、計二二件三〇名の第一次指定を行つた。(附表参照)

○ル・コルビュジェに旧松方コレクション美術館の設計を委嘱 旧松方コレクション受入れのため上野公園凌雲院跡に建設される西洋美術館(別名旧松方コレクション美術館)の設計は、文部省でフランス政府側及び日本建築界にその意向をはかつていたが、この程ル・コルビュジェを最適任とする事に、双方の意見がまとまつたので、同省では、その依頼を決定した。

○「リヴィングデザイン」創刊 デザインに関する月刊雑誌「リヴィングデザイン」が美術出版社から創刊された。

○毎日美術賞 昭和二九年度第六回毎日美術賞は該當作なく授賞はとりやめとなつた。

○愛知県美術館設立 講和記念事業として愛知県では文化会館の創設を計画したが、その一部として美術館が完成され一日開館式が挙行された。

○第三回「新日本工業デザイン」入賞決定

二月

産業興隆と輸出振興促進の目的を以つて毎日新聞社の主催する同審査の課題六品目による入賞が三日左の通り決定した。

特選一席富士自動車組合セタナおよびイリス、建築総合研究所(代表者)山口文象。特選二席新明和興業ポインター・オートスクーター、水谷文平。特選三席積水化学工業プラスチック家庭用品四点、栄久庵遠司、鴨志田厚子、中村次雄。

○新水彩作家協会改名 新水彩作家協会は会名を「二軌会」と改めた。

○フランス国立博物館へ考古品を寄贈 東京国立博物館ではフランス国立博物館よりの要望に応え、日本文化の源流である考古資料の縄文、弥生式土器から古墳時代の埴輪などに及ぶ三六件を選び一日フランス大使館に於て寄贈式を行つた。

○第五回上村松園賞 昭和二九年度は該當作品なく授賞は取やめとなつた。

○東京都文化財専門委員増員 東京都教育委員会では、都文化財専門委員を従来一二名のところ、その充実をはかるため二〇名に増員し、一日日左の七名に委嘱した。(補欠一名)

○ハワイで日本古美術展開催 ホノルル美術館では東京国立博物館との共催で一日四日から三月二日まで日本古美術展を開催した。陳列品は国宝一、重文七、重美五を含む掛軸三三、絵巻七、

画冊一、扇面五、屏風一〇双二隻で、平安時代から江戸時代にかけての絵画の主流を示すものである。

○毎日演劇賞 第七回毎日演劇賞の審査結果が二一日発表されたが、個人賞のうちの装置、照明効果の両賞を合せた「美術賞」は木村莊八(一月新橋演舞場上演の浜松風恋歌装置)に決定した。

○紫綬褒章受賞者決定 新たに制定された紫綬褒章の第一回受賞者七名が二一日発表された。この褒賞は学術、藝術の発達に関し事績著明なものに授与されるもので、美術関係受賞者は左の通りである。

吉田種次郎一早くから古代工匠技術の研究に専心し、古代建築技術の大宗たる規矩術を習得し、国宝建造物の修理によくその真価を示し、又後進の指導に當る等わが国文化財保護事業に貢献する所多い。

○外国美術品焼失 堺市浜寺の美術品蒐蔵家相馬金次郎は二一日類焼により、所蔵の外国美術品ロダンの「男の首」「手」ルドンの「女の横顔」等四〇余点を焼失した。

○大久保作次郎他六名旺玄会を脱退 旺玄会々員大久保作次郎並びに田沢八甲、吉村芳松ら古参会員を含む七名は、同会を脱退した。

○恩賜賞・藝術院賞決定 昭和二九年度(第一二回)恩賜賞並びに藝術院賞が決定し、二八日発表された。

恩賜賞 杉浦 非水 図案工藝に対し。

日本藝術院賞
第一部 美術
日本画

橋本 明治 第一〇回日展「まり千
代像」に対し
木彫
橋本 朝秀 第一〇回日展「華嚴」に
対し

鑄金
内藤 春治 第一〇回日展「青銅花
瓶」に対し
書道

西川 寧 第一〇回日展「れい書
七語聯」に対し

三 月

○日本美術院回顧展 朝日新聞社主催で
上野・銀座両松坂屋を会場に四日から
一六日まで日本美術院回顧展が開催さ
れた。

○国際見本市に出品 恒例のワシントン
州国際見本市の第四回展が一日から
二五日までシャツルを皮切り催され
たが、日本からも、海外貿易振興会、
産業工藝試験所等が中心となり、モデ
ル・ルームを作成、展示品と共に送ら
れた。

○第二次重要無形文化財指定 文化財保
護委員会では、第二次重要無形文化財
の指定を行い、各個指定、藝能関係二
件二名、工芸技術関係七件一〇名及び
総合指定藝能関係二件、工芸技術関係
一件を一六日発表された。

○旧松方コレクション 美術館建設敷地の
地鎮祭 旧松方コレクションを陳列す
るため、美術館建設計画がすすめられ
ているが、一七日建設敷地である上野
公園内凌雲院跡で、レヴィ駐日フラン
ス大使他関係者二〇〇名列席の下に、
地鎮祭が行われた。

○国宝・重要文化財新指定 文化財保護
委員会では一八日第八回国宝及び第七
回重要文化財の新指定を行い、同日発
表した。国宝として絵画七、彫刻五、
工藝品八、書跡一〇、考古一、建造物五
の計三十六件。重要文化財は絵画二二、
彫刻五、工藝品二七、書跡三四、考古
資料一〇、建造物二二の計一一九件
で、特に今回の指定では戦後三〇年以
上経過した作家の作品という基準を設
け明治時代の作品が初めて重要文化財
に指定されたことが注目された。

○渡辺華山展開催 東京国立博物館では
二〇日から四月一七日まで渡辺華山の
特別展を開催、貴重な新資料の出品も
あった。

○平等院壁面の模写完成 宇治平等院の
九品来迎図一五面の壁面のうち大壁三
面の模写が進められていたが二六日完
成、披露を行つて、文化財保護委員会
に引渡された。

○藝能選奨美術文部大臣賞決定 映画、
演劇、文学、美術などの部門で、昨年
優れた業績をあげたものを文部大臣が
顕彰する藝能選奨の昭和二九年度受賞
者が決定二八日発表された。美術部門
左の通り

日本画
小倉遊亀 昭和二九年第三九回院展
出品作日本画「裸婦」に対
して

彫刻
新海竹蔵 昭和二九年第一回現代日
本美術展出品作「少年」に
対して

書
松本芳翠 昭和二九年第一〇回日展
における「雄飛」に対し

建築
清家 清 日本住宅のデザインにお
いて高度の藝術味と日本
的な深味を含ませた住宅
形式に対して

四 月

○ル・コルビュジエ、レジェエ、ヘリアン
三人展開く 産業経済新聞社主催によ
り一日から日本橋高島屋で開かれ、「生
活と藝術との総合」を副題とした油絵、
壁掛、陶額、家具調度等二一〇余点が
展示された。

○文化財保護委員会委員に川北楨一任
命 文化財保護委員会委員一万田尚登
は、蔵相就任のため、後任として興銀
頭取川北楨一が一日付で任命された。

○松江城修理完成 二五年六月以来解体
修理を進めていた松江城がこのほど完
成、一日落成式を行つた。総工費五三
七五万円、延人員四万三千人、修復用
材は松材四千余石、瓦四万六千余枚。

○高野山名宝展開催 産業経済新聞社の
主催により七日から一七日まで、伊勢
丹に高野山名宝展が開催された。明王
院の赤不動を中心に一山の名宝約一〇
〇点の出陳があつた。

○新世紀美術協会結成 藝術院会員の和
田三造、川島理一郎を名誉会員に、旺
女会を脱退した大久保作次郎、吉村芳
松他、東光会、創元会等より参加して、
七日新世紀美術協会が結成された。

○法隆寺献納御物展開催 奈良国立博物
館では開館六〇周年を迎えるに当り、
その記念事業として、また戦前戦後に
わたつた法隆寺修理の完成をも記念し
て、一〇日から五月二〇日まで法隆寺
献納御物展を開催し、総数三百数十点
中から略一三〇点を展覧した。尚同博
物館では二八日記念式典を挙行政した。

○明治神宮再建に着手 戦災でその殆ど
を焼失した明治神宮は、仮本殿のまま
であつたが、漸く浄財が一定額に達し
たので、一八日地鎮祭を行い、起工し
た。なお完成は昭和三五年で、同三四
年一〇月には選宮を行つて予定である。

○日本陶磁協会新進作家表彰 日本陶
磁協会では三〇年度から毎年、その前
年の最優秀の新進陶磁作家を二、三名
選んで表彰することになった。今年は
数年來の成績も参照し、熊倉順吉、清
水卯一、加藤嶺男の三名に決まつた。

○現代イタリア美術展開催 現代イタリ
ア美術を代表する一〇作家八一点の作
品が、二六日から六月一二日迄神奈川
県立近代美術館で展覧された。

○宋磁名品展 日本陶磁協会創立一〇周年を記念して宋磁名品展が二六日から五月一日まで高島屋で開催された。宋代諸窯のうちでも特に重要な窯の代表的名作一四一点が選ばれ、米国よりの出品もあり、宋磁の展観としてかつてない優れたものであった。

○讀術蔵完成 中尊寺の宝物収蔵庫「讀術蔵」は近代科学の粋を集めて完成し、五月三日の落成式に先だつて、二八日から三日間、東北大学教授亀田孜の指揮のもとに一山の各寺堂に散在している宝物の収蔵を行った。

○日米抽象美術展開催 国立近代美術館では二九日から五月二九日まで「日米抽象美術展」を開催、絵画、彫刻、版画、書等一〇〇余点を陳列、抽象美術に対する親しみを深めた。

五月

○現代アメリカ版画展開催 ブリヂストン美術館では三日から一五日まで、アメリカ・フライデルフイア版画協会員二一名の作品、リトグラフ、セリグラフ、木版、エッチング等四〇余点を陳列した。

○ブルックリンで日・仏・米、国際水彩画展開く ニューヨークのブルックリン美術館で日仏米三国参加による第一八回「国際水彩画ビエンナーレ展」が四日から六月二日まで開かれ、日本から海老原喜之助、桂ユキ子、草間弥生他二六名七六点の作品が出品された。

昭和三〇年美術界年史

○東京都美術館三〇周年記念会 東京都美術館が故佐藤藤太郎の寄附によつて創建されて以来、三〇周年を迎え、五月一日多数の来賓を招いて盛大な記念祝典及び祝賀会が開催された。

○第三回国際美術展開催及び受賞 毎日新聞社主催による第三回国際美術展が二〇日から六月二日まで東京都美術館で開かれ、日本をはじめ、アメリカ、フランス等二ヶ国約六〇〇点の絵画、彫刻が陳列された。なお同社では国際賞「日本国際美術展賞」を新たに設定、二三日左の通り決定した。

外務大臣賞—ペリクレ・ファッチニ
(彫刻)イタリヤ
文部大臣賞—カルズー(油絵)フランス

東京都知事賞—ベン・ニコルソン(油絵)イギリス
毎日新聞社賞—ビーター・ルバルダ(油絵)ユーゴスラ

日本部
最優秀賞—脇田和(油絵)
佳作賞—海老原喜之助、村井正誠、高島達四郎(油絵)福田豊四郎(日本画)

○建築学会賞発表 日本建築学会では二一日春季大会を開催「昭和二九年度日本建築学会賞」を発表した。
論文—「日本住宅史の研究」太田博太郎、後藤一雄、原田有、平賀謙

六月

一、吉武泰水
作品—「神奈川県立図書館ならびに音楽堂」前川国男、丹下健三、清家業蹟—「沼津市防火建築帯の造成行政」松下喜一、小池新一、下出源七

○仏国政府より勳章贈らる 二日、フランス政府から日仏文化交流の功労者にレジョン・ド・ヌール勳章を贈る旨伝達があつたが、美術関係者では東京国立博物館長浅野長武にオフィシエール章、同次長田内静三にシュヴァリエ章が贈られることになつた。

○ヘンリー・ミラー水彩画展開く ブリヂストン美術館ではアメリカの文学者で水彩画もよくするヘンリー・ミラーの作品四〇点を七日から二六日迄陳列した。

○京都市東山に大観音像建立 東山高台寺境内に、高さ七丈五尺、鉄筋コンクリート製の大観音が建立され、場所柄賛否両論が沸いたが八日開眼式が挙行された。某実業家の建立になるもので、牧溪の白衣観音をモデルに山崎朝雲が製作にあつた。胎内に今大戦の戦死者二〇〇万の霊をまつる。

○国際警察美術展に入選 一〇日から一ヶ月間、パリで開かれた国際警察美術展に、日本の芹田英治書記の「夜の孤独」が四位に入選した。

○スウェーデンの国際デザイン展に出品

一〇日から二ヶ月半に亘つてスウェーデンのヘルシングボルクで開かれた「International Exhibition of Industrial Design, Housing, Home furnishings, Crafts」に、今年はじめて日本も招待をうけ、欧米諸国にまじつて、モデル・ルームを設けて工芸品と家具類を出品した。

○日本美術史展開催 朝日新聞社の主催により一日から七月四日まで愛知県美術館で日本美術史展が開催された。ルーヴル展の会場構成に刺戟された新しい立場から企図され、その設計には谷口吉郎、吉村順三、吉阪隆正の三人が当つた。第一期を上古から奈良朝までとし、第二期を平安から室町までとして九月二七日から一〇月二五日まで同館で開催された。

○東京都美術館々々長更迭 一五日付東京都教育庁異動により、東京都美術館々々長杉山司七は勇退し、早川治平が替つて就任した。

○ベルリンで現代日本木版画展開く 日本美術家連盟とドイツ藝術家協会との共催による「現代日本木版画展」が二六日から七月一七日までベルリンに於いて開催され、日本からの六作家六〇点の作品が陳列された。

七月

○第三回サンパウロ国際美術展開く ブラジルサンパウロに於ける第三回ビエンナーレ展は二日から開催され、日本

からも脇田和、山口長男、荒井竜男、岡田謙三、植木茂、昆野恒、恩地孝四郎、棟方志功等八作家五〇余点が出品された。なお版画部門で棟方志功の「湧然する女者達々」がメタルジカ・マタラツツオ賞を受けた。

○四天王寺遺構の発掘調査 文化財保護委員会と大阪府教育委員会では、大阪四天王寺の発掘調査を四日開始した。三ヶ年の継続事業として東京国立博物館石田茂作、東京大学藤島支治郎、東京国立文化財研究所福山敏男らが参加する調査団が当り、今年には現状実測図の作製、金堂跡、南大門跡の発掘を行い、八月二日その第一年度を終了した。

○鳳凰堂露絵の落書発見 修理の為解体中の平等院鳳凰堂の露絵の縁板の下から戯画が発見された。上品中生来迎図を主題とした正面右側の扉の内南側のふち板の下から発見されたもので、人物一人と花卉が描かれている。変化にとんだ姿態、風俗がいきいきと描かれ、同時代の下層階級の風俗資料の貴重な例として話題をよんだ。

○二科会員の幹部会員共同脱退を声明 二科会々員鈴木信太郎、野間仁根、高岡徳太郎の三名は、五日各人の脱皮を理由とする共同声明を発表し、二科会を脱退した。

○「一陽会」を結成 二科会を脱退した鈴木信太郎、野間仁根、高岡徳太郎の三名は新たに新団体「一陽会」を結成、一五日創立会員一七名を発表した。
○第一回毎日産業デザイン賞 我国産業

デザインの向上を目的として、「毎日賞」の中に新しく今年度から設定されたもので、年度内に於ける商工業デザインを通じて最も優秀と認められる作家および団体の顕著な業績に対し、毎年授賞される。今年度(昭和三〇年度)の受賞者は左の通りで二三日受賞式を行った。

特別賞 国井喜太郎(工業デザイン部門)、山名文夫(商業デザイン部門) 作品賞 小杉二郎(工業デザイン部門) 松田三輪トラック、蛇の目ミシンその他)、早川良雄(商業デザイン部門、「年間を通じての一連の作品」)

八月

○平城京跡発掘 平城京跡の発掘は、奈良国立文化財研究所を中心に一日から開始、一三日終了した。一〇年計画の第一年目で、本年度は朝堂院内大極殿跡東南の回廊角約一〇〇坪を調査し、大極殿東側回廊は梁間二〇尺、柱間一二尺の複廊であることが判明した。
○サンパウロ国際建築展に早大入賞 ブラジル、サンパウロの国際建築展に出品した早稲田大学建築科学生作品「三千人の勤労者の家族が一ヶ月間、休暇で過せるような水辺にある休養施設(課題作)は一等賞を獲得した。

○美術映画「広重」文部省選定になる 東京都教育委員会企画、北欧映画製作の美術映画「広重(四巻)は、英語版も製作され、最近欧米でも公開されているが、今度文部省選定、優秀映画鑑賞会

推薦となつた。

○平和祈念像除幕式 かねて四年有半を費して長崎に建設中の平和祈念像が原爆一〇周年記念日の九日を前に八日爆心地浦上平和公園で、各関係者参集の上除幕式が挙行された。この像は一三尺の台座に座る三丈二尺のプロンズ男像で、制作は北村西望による。

○「日本工芸会」発足 無形文化財に選定された京都在住の作家によつて結成された日本工人社が発端となり、この組織を全国的に拡大しようと、さきに同社を解散し、新たに社団法人組織として結実したものである。工藝家の統一組織としては初めてのもので、会員五九名。

九月

○文部省人事異動 文部省では六日寺中社会教育局長のバリ駐在文化使館転出を初め大幅の人事異動を発令した。
○メキシコ美術展開く 日墨文化協定成立を記念して、メキシコ美術院、東京国立博物館、読売新聞社主催で「メキシコ美術展」が一日から一〇月二〇日まで東京国立博物館で開催され千三百余点の作品が陳列された。

○日本の創作版画、米工芸デザインに使われる 米国の世界的クリスタルメーカー、ステューベン・グラスでは、製品のデザインに日本の三版画家、棟方志功、平塚運一、斎藤清の作品を使用

する事になり、ガラス器に版画を使用することははじめての試みであり、版画の新しい途への進出という意味で、わが国版画界の注目を集めた。

○欧州各地で「日本書道展」開催 最近の欧米に於ける日本書道に対する関心にこたえ、オランダ、アムステルダムを皮切りに欧州各地に「日本書道展」を開催した。一団体八九作家の作品一五五点がえらばれ、発送前八月二〇日から九月四日まで国立近代美術館で、欧州出品記念展が行われた。

○文化勲章選考委員決る 昭和三〇年度文化勲章ならびに文化功労者選考委員一〇名を二三日閣議で決定した。委員左の通り
国立近代美術館次長今泉篤男、慶応大学々長潮田江次、藝術大学音楽学部長加藤成之、東大教授茅誠司、大妻女子大学長河原春作、藝術院会員久保田万太郎、東京都立大学長柴田雄次、文化財保護委員会委員長高橋誠一郎、早大文学部長谷崎精二、東京慈恵医大学長寺田正中

一〇月

○雑誌「みづゑ」創刊五〇周年記念展 美術出版社発行の雑誌「みづゑ」が、明治三八年創刊されてから五〇周年を迎え、その記念に一日から同社主催で「日本洋画名作展」が日本橋高島屋に開催された。

○第三回名誉都民に川合玉堂まきまる 一日の都民の日に、第三回名誉都民が選

ばれ、日本画家川合玉堂もその一人として表彰された。

○松本城復元完成 松本城の修理工事が五年ぶりに完成、一日落成式典が行われた。天守二階の窓が五周連続のものとなり、渡櫓・乾小天主一、二階の西、北側にあつたガラス窓、月見櫓の縁の勾欄を復元し、乾小天主四階の西、北の窓を華頭窓に復元したことが、以前に比較して変つた点である。

○トウツチ博士来日 イタリヤ中亜極東学院長、ローマ大学教授ジュゼッペ・トウツチ博士が、よきよきに調印された日・伊文化協定にもとづき両国文化交流を促進するため四日来日した。又滞日中は各地で専門の東洋文化についての講演を行った。

○平泉文化遺跡発掘 東大教授藤島玄治郎を団長とする奥州藤原文化遺跡調査団の第三回學術発掘調査は毛越寺境内の大泉池を中心に五日から二日間行われた。

○日墨文化協定批准書交換 昨年一〇月調印された日本とメキシコの文化協定は、五日批准書が交換され、同時に発効した。

○文化勲章並びに文化功労年金受領者決定 昭和三〇年度、第一回文化勲章ならびに文化功労年金受領者一〇名が決定二五日発表された。美術関係では、文化勲章受領者に、日本画家前田青邨、文化功労年金受領者に洋画家山下新太郎が選ばれ、文化財専門審議会第一分科会会長和辻哲郎も文化勲章をう

けた。一月三日「文化の日」に授賞式が行われた。

○ヴェニス日本館建設に決定 ヴェニスのピエンナレに日本館を建設する問題は、イタリヤからその敷地の用意してある旨通知をうけて以来三年越しになり、資金難のため行きづまつていたが、このほど漸く話がまとまり、二六日、設計者も早大教授吉阪隆正に決定した。

○紫綬褒章受賞者決定 第二回紫綬褒章受賞者一五名が決定、二八日文部省から発表された。美術関係では小場恒吉、田中親美、西岡楯光等が選ばれた。

○現代日本版画、米国画画団体から招待 日本の現代版画、故郷地孝四郎、品川工、浜田知明、斎藤清、北岡文雄(在仏)、吉田政次ら一〇名、四〇余点の作品が、フィラデルフィア版画協会の招待によりアメリカに送られた。

○金閣寺復元 去二五年七月炎上した鹿苑寺金閣は再建成つて五年ぶりに秀麗な姿をみせ、一〇日盛大に落慶供養を行った。総檜造で一階は白木のまま、二・三層は内外とも金箔押し、屋上には金色燦然たる鳳凰がはばたくといふ創建当初の形に復元したものである。

一一月

○日本金銅仏展開催 東京国立博物館では秋の特別展として一日から三〇日まで日本金銅仏展を開催、飛鳥から室

町に至る日本の金銅仏、御物四十八体仏をはじめとする一四一点に、中国朝鮮のもの二七点を併せ陳列した。

○ル・コルビュジェ来日 フランスから返還される旧松方コレクション受入れの「西洋美術館設計のため、同国建築家ル・コルビュジェ氏が二日来日した。印度旅行の途次、現地視察や資料蒐集を行うため立ち寄つたもので、九日同地にむけ出発した。

○毎日出版文化賞きまる 第九回毎日出版文化賞一〇書と特別賞二書の一二点の入賞が決まり、三日同社で贈呈式が行われた。美術関係図書では、美術出版社発行の土門拳撮影、北川桃雄解説による「室生寺」が受賞した。

○根津美術館開館 財団法人根津美術館は戦災をうけ、倉庫を残して悉く焼失した。幸い美術品は罹災を免れたので戦後は仮建築により展覧を開いてきたが、二八年に新しい陳列館を起工して此程完成、四日開館再発足した。新陳列館は鉄筋コンクリート造、特に採光に工夫のあとがみられる。

○「日本生活文化紹介展」開催 日本の生活文化の實際を米国画全土に知らせるため、ニューヨークのジャパン・ソサイエティーでは「日本生活文化紹介展覧会」を来年一月から二ヶ年の予定で計画し、国際文化振興会にそのあつせんを依頼してきたが、話が決まり同展出品第一陣として日本の織物衣裳など約三〇点が五日アメリカにむけ送られた。

○都の文化財新指定見送り 都の文化財指定は毎年「文化の日」に決められてきたが、保護費が少いため、逆に従来の指定を解除するため、再調査を始める実情で、新指定は来年まで見送りとなつた。

○ヴェニス日本館建設に寄附 一〇月にその建設が決定したヴェニス日本館については、美術家連盟を中心に「ヴェニス日本館建設準備会」が発足し、資金の調達に奔走していたが、政府予算三〇〇万円の他、二〇〇〇万円の民間側負担に行き悩んでいたところ、一四日石橋正二郎ブリヂストン・タイヤ社長はその民間資金の全額負担を申し出た。

○商業デザインの入選 毎日新聞社主催の第二三回商業デザイン作品公募に対し、応募作品を審査の結果、入選が左の通り決まつた。

△通産大臣賞 第一部(新聞広告)「マッドランプ」伏見文雄、第二部(出版物広告)「アドナ」亀倉英治、第三部(ポスター)「ピタ明治牛乳」藤平清次

△特別賞 アイディア賞「サントリウイスイキ」大坂康弘、技能賞「カルピス」芦立良輝、写真賞「第一生命」岸島隆、深野匡合作、サンデー毎日賞「ナシヨナルホームボンブ」藤原光生、毎日グラフ賞「ナシヨナルテレビ」安原茂男、津田勝三郎合作

他佳作賞、課題賞、日宣美奨励賞等

○「愛の像」除幕式 永遠の平和を祈念し

戦犯で刑死した人々の霊をなぐさめようと、栗嶋遺書編さん会が東京駅中央口前広場に建立した「愛の像」の除幕式が一日に行われた。栗嶋に拘留中の戦犯者たちの手になる「世紀の遺書」の印税により建てられたもので製作は横江嘉純があつた。

○**絵巻物名作展** 朝日新聞社の主催により、国宝重要文化財絵巻物名作展と銘うつて、一二日から二八日まで銀座松屋に開催、古今の代表的絵巻物四二点を陳列した。選択もよく、又長い場面を見うる様に構成した努力も窺えてよい展観であつた。(目録一四七頁)

○**松方コレクション返還リスト届く** 松方コレクション受入れについては、日本側として着々準備を進めているが、このほどフランス政府から返還品三七六点のリストが届いた。約四〇〇点前後といわれるコレクションの殆どが返還されることになる。

○**国際公共建物の美術裝飾に日本美術家参加** ユネスコ国際造型藝術連盟ではユネスコ本部、国連本部等、国際的公共建物の美術裝飾を、世界各国の代表的藝術家の共同製作で行うことを計画、各国にそのリスト作成を要請していたが、同連盟国内委員会では、このほど日本画―横山大観、前田青邨他一名、洋画―梅原龍三郎、安井曾太郎他一名、彫刻―木内克、清水多嘉示他八名、版画―棟方志功、斎藤清他四名の四部門から合計四四名を決定した。

一二月

○**観心寺如意輪の手盜難** 観心寺では一日、秘仏如意輪観音の六臂のうち、右の数珠をもつた手首と左の蓮華をもつた手首及台座の蓮弁一枚が盗難にあつた。捜査中であつたが、三〇日犯人の自供により焚火跡から黒くげとなつて発見された。

○**安井曾太郎逝去** 明治、大正、昭和三代に亘る我が洋画壇に貴重な足跡をのこした洋画家安井曾太郎は一日逝去した。

○**薬師寺本尊移座** 奈良薬師寺金堂の薬師如来像が台座修理の為一六日仮台座へ移された。来春本格的な修理にかかり三二年春完成の予定で、その間種々の調査を行う。

○**金桜神社全焼** 甲府市御岳の金桜神社は一八日未明出火全焼した。鎌倉末期に建立された中宮本殿と吉野時代の東宮本殿は共に重要文化財に指定されていた。

○**フランス国立博物館長らに叙勲** 多年日仏文化交流に貢献したフランス国立博物館長ジュールジュ・サール・エーフェル氏ら四名に天皇陛下からそれぞれつぎの勲章が贈られる旨二日発表した。

フランス国立博物館長ジュールジュ・サール・エーフェル―勲三等旭日章、フランス国立近代美術博物館々長ベルナール・ドリヴァル―勲四等瑞

宝章、パリ市立チエルヌスキー博物館々長ヴァレム・エリセエフ―勲五等旭日章、同博物館次長マドレーヌ・ロザリー・ダヴィッド―勲五等瑞宝章

○**藝術院会館の建設計画** 多年懸案の日本藝術院会館建設計画は、会員の間に積極的動きが起り、具体案もまとまつたので、高橋藝術院長らを中心に会館建設計画に着手した。なお総額四千万円で、国庫補助二千万円を予定し、残りを会員の年金天引、その他の方法によりきよ金する。

○**万国著作権条約批准** 終戦後日米間の著作権関係を暫定的に決めていた協定が、明三一年四月二八日まで失効するので、久しく出版、音楽等の関係者間で懸案となつていた著作権問題も、アメリカの加盟している万国著作権を批准することが望ましい意見が強く、急速に実現することになつた。なお同条約により保護の対象となるのは、視覚に認めらるるものに限られ、出版は第一発行の際(C)の記号を附するだけで自動的に著作権が保護される。

[附 表]

新指定国宝一覽

国宝目録 第八集

凡 例

一、この目録は文化財保護法(昭和二十五年五月三十日法律第二百十四号)により、昭和三十年三月文化財保護委員会において国宝指定の決定があつた物件を収録した。

一、この目録に収録した国宝の種類は絵画、彫刻、工藝、書跡、考古資料、建造物である。

昭和三十年三月
文化財保護委員会

絵画の部

名	称	員数	所 有 者
白描絵料紙理趣經	建久四年八月深賢奉受の奥書がある	一卷	東京都渋谷区大和田町九八 財団 大東急記念文庫
紙本著色当麻曼荼羅緣起	附寛政五年松平定信添書 一卷	二卷	神奈川県鎌倉市乱橋材木座 光 明 寺
絹本著色夏景山水図	「天山」の鑑蔵印がある	一幅	山梨県南巨摩郡身延町大字身 延 寺
絹本著色秋景冬景山水図	「天山」の鑑蔵印がある	二幅	京都府京都市左京区南禅寺福 地町 金 地 院
絹本著色五大尊像		五幅	伏見区醍醐東大路町 醍 醐 寺
絹本著色詞梨帝母像		一幅	同
絹本著色文殊渡海図		一幀	醍醐伽藍町 同 院

新指定国宝一覽(絵画・彫刻の部)

彫刻の部

名	称	員数	所 有 者
木造不動明王坐像(御影堂安置)		一軀	京都府京都市下京区四ツ塚通 大宮西入ル九条町 教王護国寺
木造兜跋毘沙門天立像(毘沙門堂安置)		一軀	同
木造釈迦如来立像(張延陵并張延慶作)	背板裏に「大宋国台州張延陵并弟 延慶雕」反花座表に「唐国台州開 元寺三僧保寧」の刻銘がある	一軀	同 右京区嵯峨藤ノ 清涼寺
蓮瓣普軸底に建保六年大仏師法眼 快慶修造の墨書銘がある	像内納入品一切	一通	
紙本墨書齋然入宋求法巡礼行並 瑞像造立記 僧鑿端書	齋然自署	一通	
紙本墨書入瑞像五臟具記捨物 注 齋然自署	齋然自署	一通	
附包紙(齋然封)	雍熙二年八月十八日奥書、 造像博士張延陵等列名 一紙	一紙	
紙本墨書細字金光明最勝王經 齋然自署	延曆二十三年三月五日書写奥書 附竹製八双残闕	一卷	
紙本墨書細字法華經	附一、表紙題簽	一卷	
一、銅製軸首	一、銅製軸首	一雙	
一、版本金剛般若波羅蜜經	雍熙二年六月刊記	一帙	
一、紙本版面靈山变相図		一枚	
一、紙本版面弥勒菩薩像 高文進画	甲申歲十月十五日刊記	一枚	
一、紙本版面文殊菩薩騎獅像		一枚	
一、紙本版面普賢菩薩騎象像		一枚	
一、紙本版面普賢菩薩騎象像		一枚	
一、紙本墨書義威齋然結緣手 印状義威齋然自署	天祿三年閏二月三日奥書	一通	

一、紙本墨書齋然繫念人交名帳 粘葉裝	一帖	
一、紙本墨書捨錢結緣交名記	一通	
雍熙二年八月十八日匠人張延皎等 輿書		
一、紙本墨書捨錢結緣交名記 斷簡	一枚	
一、紙本墨書齋然生誕書付(承平八年正月 二十四日云々)	一紙	
一、絹製五臟	一副	
背皮、雍熙二年八月初五日製五臟 一副云々墨書		
一、線刻水月觀音鏡像 絹紐付	一面	
紐墨書「台州女弟子朱□娘捨帶子 一條」		
一、菩提念珠	一釧分九十七顆	
一、婆羅樹葉片	一枚	
一、水晶珠	一顆	
一、瑪瑙製耳瑠	一箇	
一、方解石	一箇	
一、中国銅錢	百三十二枚	
開元通宝、乾元重宝、宋元通宝、 周元通宝、唐国通宝、天漢元宝、 漢元通宝等		
一、銅製鈴子	一箇	
一、銀製釧子	一枚	
一、玻璃器	二口分	
一、雲母製幢	一旒	
一、平絹片等	一拵	
平絹、秋羅、縹紗、紗、羅、纈纈、 綾、錦等		
大造雲中供養菩薩像(所在鳳凰堂)	五軀	
大造觀音菩薩立像(九面觀音)	一軀	
京都府宇治市宇治 奈良県生駒郡斑鳩町大字法隆寺 平 等 院 隆 寺		

工藝品の部		名	称	員数	所 有 者	
古神宝類(阿須賀神社伝来)						
一、袍	白小葵文固綾	一領			国(文化財保護委員会保管)	
一、单	淡紅幸菱文固綾	一領				
一、海賦裳	白遠菱文固綾	一腰				
一、表袴	白窠霞文二重織	一腰				
一、帶	香小葵文固綾	一条				
一、石帶	附赤地錦袋 一口	一条				
一、袈	白小葵文浮線綾丸文二重織	一帖				
一、袈	黄地浮線綾丸文唐織物	一帖				
一、義髻		一条				
一、冠	松喰鶴時繪冠箱 附赤地錦袋 一口	一合				
一、木笏	桐時繪笏箱	一合				
一、彩繪繪扇		一握				
一、(錦包)挿鞋	唐花時繪挿鞋箱	一合				
一、(唐花)時繪挿鞋箱		一合				
一、松喰鶴時繪御衣箱		一合				
一、唐草時繪衣箱		一合				
一、松椿時繪手箱		一合				
内容品						
一、白銅鏡	銀齒黒箱	二合				
一、銀白粉箱	銀鏡物箱	二合				
一、銀鑲	銀鍔	二合				
一、銀耳蛸	銀髮搔	二合				
一、銀眉作	銀齒黒筆	二本				
一、銀櫛	銀齒黒筆	二本				
一、白磁皿	銀齒黒筆	三口				
一、時繪櫛	銀齒黒筆	三口				
一、時繪櫛	松椿時繪櫛箱	一合				
一、附赤地錦袋		一口				

一、唐花双鶴文鏡 附黑漆平文箱 赤地錦袋	一合 一口	一面
一、松楓双鶴文鏡 附黑漆平文箱 赤地錦袋	一合 一口	一面
一、松竹双鶴文鏡 附黑漆平文箱 赤地錦袋	一合 一口	一面
〔直刀〕 黑漆平文大刀拵 附刀唐櫃	一口	
刀無銘則房	一口	
金銅宝塔 (金銅宝珠形舍利塔共) 文永七年六月一日、本願主西大寺沙 門叡尊、鐫物師友吉入道西珍等在銘		
古神宝類		
一、袍 萌黄浮線綾丸文固綾	一領	
一、直衣 白龍膽文綾	一領	
一、裃 蘇芳小花文銀欄	一領	
一、裃 香雲立涌文固綾	三領	
一、裃 萌黄小葵浮線綾丸文二重織	二領	
一、裃 経縹緯白小葵文固綾	一領	
一、裃 淡紅小葵文固綾	三領	
一、裃 萌黄小葵文固綾	七領	
一、裃 淡香小葵文綾	一領	
一、薄衣 萌黄幸菱文固綾	八領	
一、薄衣 白遠菱文固綾	一領	
一、薄衣 白幸菱文固綾	一領	
一、薄衣 淡紅幸菱文固綾	一領	
一、薄衣 白小葵文固綾	一領	

新指定国宝一覽(工藝品の部)

一基	茨城県鹿島郡鹿島町宮中
一口	鹿島 神宮
一口	東京都大田区田圃調布四ノ一 七四 篠原省三
	奈良県生駒郡伏見町大字西大寺
	和歌山県新宮市新宮町 熊野速玉神社

一、唐衣 緯白小葵文浮織	七領
一、唐衣 萌黄小葵文固綾	一領
一、唐衣 蘇芳蓮唐草文銀欄	一領
一、表袴 白窠霞文二重織	一腰
一、表袴 緯白椿唐草文綾	一腰
一、指貫 濃香雲立涌文固綾	一腰
一、海賦裳 白小葵文固綾	八腰
一、衾 朽葉人物花唐草文繡珍	一帖
一、衾 白小葵文固綾	一帖
一、衾 黄地浮線綾丸文唐織物	六帖
一、平裏 黄地浮線綾丸文唐織物	一帖
〔衣〕濃香小葵文綾 殘闕	一口
〔衣〕白遠菱文綾 殘闕	一口
一、衣 香小葵文綾 殘闕	一口
一、袴 紅平絹 殘闕	三口
一、袴 紅平絹 殘闕	三口
一、袴 紅平絹 殘闕	五口
一、袴 紅精好 殘闕	一括
一、両面打組紐 殘闕	六条
〔冠〕松喰鶴時絵冠箱	一合
一、挿頭華	三枝
〔木笏〕椰時絵笏箱	二合
〔玉佩〕桐時絵玉佩箱	二合
一、義髻	二大条
一、彩絵楡扇	十握
一、紅帖紙 附懷紙	三帖

建造物の部

番号	名称	員数	構造及び形式	所有者	所有者の住所	所在の場所
一	大善寺本堂	一棟	桁行五間、梁間五間、一重、寄棟造、檜皮葺 附 厨子 一間、入母屋造、向拝一間、入母屋造、妻入、本瓦形板葺	大善寺	山梨県東山梨郡勝沼町柏尾	山梨県東山梨郡勝沼町柏尾
二	清白寺仏殿	一棟	桁行三間、梁間三間、一重もこし附、入母屋造、檜皮葺	清白寺	山梨県山梨市後屋敷町三ヶ所	山梨県山梨市後屋敷町三ヶ所
三	金蓮寺弥陀堂	一棟	桁行三間、梁間三間、一重、寄棟造、正面一間通り庇、左側面後部二間庇、すがる破風造、檜皮葺	金蓮寺	愛知県幡豆郡吉良町大字饗庭	愛知県幡豆郡吉良町大字饗庭
四	太山寺本堂	一棟	桁行七間、梁間六間、一重、入母屋造、本瓦葺	太山寺	兵庫県神戸市垂水区伊川谷町	兵庫県神戸市垂水区伊川谷町
五	本山寺本堂	一棟	桁行五間、梁間五間、一重、寄棟造、本瓦葺 附 厨子 一間、春日厨子 三基、棟木の部分 一枚 正安二年庚卯月廿日の記がある。	本山寺	香川県三豊郡本山村大字寺塚	香川県三豊郡本山村大字寺塚

既に国宝に指定した物件に新たに未指定物件を附として追加し、名称及び員数を定めたもの。

彫刻の部

名称	員数	所有者
大造阿弥陀如来坐像(定朝作) 附(木板阿弥陀種子曼荼羅一面) 造蓮台一基	一具	京都府宇治市宇治平等院

国宝である建造物の一部を重要文化財及び国宝である絵画として取扱うこととしたもの。

絵画の部

名称	員数	所有者
板絵著色伝帝釈天曼荼羅(金堂来迎壁) 板絵著色鳳凰堂中堂壁扉画 (二十九年三月決定) 九品来迎(壁画) 日品来迎(壁画) 仏後壁観々画(扉画) (二十九年十一月決定)	一面	奈良県宇陀郡室生村大字室生寺
五重塔初層壁画 板絵著色阿闍梨茶羅(心柱板絵) 板絵著色阿闍梨茶羅(羽目板絵) 板絵著色眞言八祖像(羽目板絵)	七面	同京都市伏見区醍醐東大路町醍醐寺
板絵著色阿闍梨茶羅(心柱板絵) 板絵著色阿闍梨茶羅(羽目板絵) 板絵著色眞言八祖像(羽目板絵)	六面	京都府宇治市宇治平等院

なお既に同種の取扱いをうけているものは次の二件である。

新指定重要文化財一覽

重要文化財目録 第七集

凡 例

一、この目録は文化財保護法(昭和二十五年五月三十日法律第二百四十四号)により、昭和三十年三月文化財保護委員会において重要文化財指定の決定があつた物件を取録した。

一、この目録に収録した重要文化財の種類は、絵画、彫刻、工芸、書跡、考古資料、建造物である。

昭和三十年三月

文化財保護委員会

◎印は重要美術品等認定物件より重要文化財指定の決定があつたものを示す。

名	称	員数	所	有	者
絹本着色悲母観音像	狩野芳崖筆	一幀	国(東京芸術大学保管)		
附 函稿 一卷、三幅					
紙本着色不動明王図	狩野芳崖筆	一幅	同		右
紙本着色白雲紅橋図	橋本雅邦筆	一幅	同		右
絹本着色龍虎図	橋本雅邦筆	一雙	東京都港区麻布鳥居坂町二	岩崎孝子	
六曲屏風					
紙本墨画黄初平図	雪舟筆	一幅	神奈川県鎌倉市長谷一、六、四	川端康成	
(仿梁楷)					
絹本着色一休宗純像	寛正三年の自賛、かある(梅花像)	一幅	同	山ノ内四五三	英
紙本墨画洞庭秋月図	玉潤筆	一幅	石川県江沼郡片山津町	矢田松太郎	
自賛がある					
「北山文房之印」の鑑蔵印がある					
絹本墨画松梅図	具太素筆	一幅	山梨県甲府市古府中町	大泉寺	
絹本着色十一面観音像		一幅	京都府京都市上京区紫野大徳寺町	真珠庵	
宗峯妙超の賛がある					

新指定重要文化財一覽(絵画、彫刻の部)

名	称	員数	所	有	者
紙本墨画淡彩一休宗純像	紹仙筆	四幅	同		右
絹本着色一休宗純像	ある(梅花像)				
絹本着色一休宗純像	自賛がある				
絹本着色一休宗純像	(附与宗臨像)				
成化二十一年張應麟の賛がある					
絹本着色關提正具像	自賛がある	一幅	同	東山区大和大路通四条	院
紙本墨画聖一國師像	伝明兆筆(右上方像)	一幅	同	本町十五丁目	寺
絹本着色平田慈均像	観応二年の自賛がある	二幅	同	左京区南禅寺福地町	庵
絹本着色平田慈均像	自賛がある			天南	
紙本墨画淡彩聖一國師像	文永元年の自賛	一幅	同	同	右
絹本着色無闕普門像	図上に像主の偶がある	一幅	京都府京都市左京区南禅寺福地町	天授	庵
絹本着色約翁徳徳像	自賛がある	一幅	同	法皇	寺
絹本着色仁王経曼荼羅図		一幅	大阪府岸和田市池尻町	久米田	寺
絹本着色安東蓮聖像		一幅	同	同	右
元徳二年明極楚俊の賛がある					
絹本着色慈恩大師像	図上色紙形に讃文がある	一幅	奈良県奈良市登大路町	興福	寺
木造如意輪観音坐像(観音堂安置)		一軀	滋賀県大津市園城寺町	園城	寺
木造如意輪観音半跏像		一軀	同	石山寺辺	寺
木造淳祐内供坐像(所在御影堂)		一軀	同	同	右
木造阿弥陀如来坐像		一軀	同	坂本本町	寺
				延曆	

大造四天王立像
持国天像内に康治元年六月廿四日、
増長天像内に永治二年五月十七日の
造立供養の銘がある

二軀
滋賀県栗太郡栗東町大字荒張
金 鉢 寺

名	称	員数	所 有 者
短刀 銘吉光(名物厚藤四郎)		一口	国(東京国立博物館保管)
鉄錫杖 伝勝道上人所用		一柄	栃木県日光市山内 輪 王 寺
銅錫杖頭(雲文飾)		一柄	同
銅錫杖頭(鳳首飾)		一柄	同
太刀 銘行秀		一口	東京都中央区浜町一ノ二 本阿弥光博
染焼黒茶碗 光悦作 銘雨雲		一口	東京都港区麻布笄町四 三井高公
太刀 銘国信		一口	同
油滴天目鉢		一口	鳥居坂町二 岩崎孝子
金襴手下蕪花生		一口	財団法人 青山南町六ノ一二五 根津美術館
短刀 銘信国		一口	赤坂丹後町一〇 岡部長景
刀 無銘伝正宗		一口	同
葡萄酒文鏡 銘理忠明寿		一枚	同 三田豊岡町 大塚 肇
太刀 銘吉包		一口	同 渋谷区代々木上原町一二 七三 山内豊秋
古伊賀水指 銘破袋		一口	同
太刀 無銘古三原正広 光徳金象嵌銘大三原云々 (名物大三原)		一口	同 神奈川県鎌倉市丸橋材木座 高梨仁三郎 小田原市幸町一丁目 浅野長武

短刀 銘賀州住真景
貞治六年月日
折返銘備前助村

名	称	員数	所 有 者
太刀 銘包次		一口	同
犀角如意		一柄	同
金銅錫杖頭		一柄	滋賀県大津市下坂本比叡辻町 聖来迎寺
金襴手八角大壺		一口	大阪府泉北郡和泉町府中 森田一 顕
太刀 銘一		一口	兵庫県神戸市東灘区住吉町 財団法人 白鶴美術館
銅錫杖		一柄	同 芦屋市春日町三四 財団法人 黒川古文化研究所
大太刀 銘備後国住人行吉作		一口	奈良県生駒郡斑鳩町法隆寺 法隆寺
漆絵大小拵(陣刀) (小柄筋欠)		一腰	広島県佐伯郡宮島町 厳島神社
短刀 銘相州住秋広 永和二		一口	福岡県福岡市東露町五九 永藤 一

名	称	員数	所 有 者
本朝統文粹(金沢文庫本) 各卷文永九年北条実時奥書		七卷	国(内閣文庫保管)
法曹類林 卷第九十二断簡(金沢文庫本) 第百九十七断簡、第 二百、嘉元二年金沢貞顕奥書		三卷	同
宋版盧山記		五册	同
元版全相平話 至治建安虞氏刊		五册	同
天台山記		一册	国(国立国会図書館支 部)上野図書館保管

奥州御島頼憲碑 德治二年三月十五日
一山一寧撰并書

紫紙金字花嚴經卷第六十一

註楞伽經卷第七
(天平十二年五月一日光明皇后御願
經)天平勝宝七歲十月十四日重跋

土沙勸進記並別記明惠上人筆
別記安貞二年極月與書

祈雨日記 成賢筆

越前国田使解(桑原庄券第一)
天平勝宝七歲五月三日

月江正印墨蹟 鐵舟德濟送別偈
至正三年癸未立冬日

紫紙金字金光明經卷第七

山家心中集

論語集解

元応二年書写奥書

宋版太平聖惠方(金沢文庫本)
附慶長補写本 二十七冊
聖惠方正誤 二冊

紺紙金銀交書法華經

紺紙銀字法華經

微翁義亨墨蹟 言外号

德禪寺法度

応安元年微翁加筆証判
附至德元年德禪寺法度 一卷
正伝巻法度 一卷

微翁義亨墨蹟 遺誠并遺偈

南浦紹明墨蹟 法語

一休宗純墨蹟

一基	宮城県宮城郡松島町本松島寺	瑞殿
一卷	東京都渋谷区大和田町九八 財団 大東急記念文庫 法人	
一卷	同	
二卷	同	
一卷	同	
一卷	同	
一卷	同	
一幅	同 世田谷区玉川上野毛町 一二	
一幅	同 五島慶太	
一卷	同 神奈川縣鎌倉市腰越 今測正太郎	
一帖	同 石川県能美郡山上村大字宮竹 宮本長則	
十冊	同 愛知県 名古屋(蓬左文庫保管)	
二冊	同	
八卷	同 滋賀県大津市坂本本町 延暦寺	
八卷	同	
一幅	同 京都府京都市上京区紫野大徳寺	
一卷	同	
二幅	同	
一幅	同	
六點	同	

新指定重要文化財一覽(書跡、考古資料の部)

名	称	員数	所 有 者
一行書(諸惡莫作 衆善奉行)		二幅	
微翁示栄街徒法語(凡參禪学道)		一幅	
題微翁示栄街徒法語偈(李下從來 示会下徒之法語(凡參禪学道))		一幅	
遺 誠		一幅	
辭世頌		一幅	
紺紙金字一字宝塔法華經並觀普賢經		九卷	同寺町通今出川上ル二丁目
内証仏法相承血脉譜		一卷	同東山区東大路通渋谷下ル妙法院前側町
堂供養記(春記、大記)		二卷	同 妙法院
法華經(開結共)		十卷	同 泉涌寺山内町二七
卷第八後奈良天皇宸翰御跋		同	同 泉涌寺
宋版仏法大明錄		四冊	同 本町十五丁目
減翁文礼墨蹟 七言律詩		一幅	同 大阪府泉大津市忠岡町大字忠
北礪居簡墨蹟 七言絶句		一幅	同 正木孝之
註楞伽經卷第二・三		二卷	同 兵庫県神戸市東灘区住吉町
根本百一羯磨巻第五		一卷	財団 白鶴美術館
法華經卷第八(色紙)		一卷	同
紺紙金字華嚴經		五十六卷	同 廣島県佐伯郡宮島町
銅戈鏑范		一箇	同 国(東京大学保管)
福岡県遠賀郡岡県村大字吉木出土			
銅製美努岡方連墓誌		一面	同 国(東京国立博物館保管)
天平二年十月一日在銘			
奈良県生駒郡南生駒村大字萩原字			
龍王出土			

建造物の部

番号	名称	員数	構造及び形式	所有者	所有者の住所	所在の場所
一	善光寺本堂	一棟	桁行十一間、梁間七間、二重一階、檼木造、妻入、正面 向拜三間、軒唐破風附、両側面向拜各一間、銅板葺 附 厨子 一間 板葺 一間 棟札 一枚 天明五年乙巳秋八月二十五日上棟の記がある	善光寺	山梨県甲府市善光寺町	山梨県甲府市善光寺町
二	善光寺山門	一棟	五間三戸楼門、入母屋造、棧瓦葺 附 棟札 一枚 上棟明和第四年龍次丁亥閏九月十二 癸卯日の記がある	善光寺	山梨県甲府市善光寺町	山梨県甲府市善光寺町
三	佐野神社本殿	一棟	一間社流造、こけら葺	佐野神社	長野県下高井郡穂波村 佐野	長野県下高井郡穂波村 佐野
四	尾張大国霊神社楼門	一棟	三間一戸楼門、入母屋造、檜皮葺 附 棟札 三枚 再造寛文八年戊申五月十八日の記があるもの 重葺宝永五年戊子春三月十五日の記があるもの 補修正徳三癸巳三月の記があるもの	尾張大国霊神社	愛知県中島郡稲沢町大 字国府宮	愛知県中島郡稲沢町大 字国府宮
五	尾張大国霊神社拜殿	一棟	桁行五間、梁間三間、切妻造、妻入、檜皮葺 附 棟札 三枚 享保十四 乙酉年修復の記があるもの 再建天保八丁酉歳冬十一月七日之日の記があるもの 上棟天保九戊戌年冬十一月二日の記があるもの 重修拜殿記(檜板四枚綴) 一冊 天保九年戊戌十一月二日の記がある	尾張大国霊神社	愛知県中島郡稲沢町大 字国府宮	愛知県中島郡稲沢町大 字国府宮
六	延暦寺常行堂及び法華堂	二棟	常行堂 桁行五間、梁間五間、一重、宝形造、向拜一間、 銅板葺 法華堂 桁行五間、梁間五間、一重、宝形造、向拜一間、 銅板葺 附 廊下 桁行四間、梁間一間、一重、唐破風造、中央高屋根、 銅板葺	延暦寺	滋賀県大津市坂本本町	滋賀県大津市坂本本町

七	教王護国寺五重小塔	一基	三周五重塔婆、本瓦形板葺	教王護国寺	京都府京都市下京区四ツ塚通大宮西入ル九条町	京都府京都市下京区四ツ塚通大宮西入ル九条町
八	大安寺本堂	一棟	十八疊、十二疊、六疊、八疊、三疊(上段)、床、附書院、仏間、三面入側より成る、一重、入母屋造、本瓦葺	大安寺	大阪府堺市南旅籠町東三丁目	大阪府堺市南旅籠町東三丁目
九	海会寺本堂及び門廊	二棟	本堂 桁行四十尺八寸、梁間二十六尺四寸、一重、入母屋造、本瓦葺 門廊 折曲り桁行三間、梁間一間、一重、前面唐破風造、後部切妻造、本瓦葺	海会寺	大阪府堺市南旅籠町東三丁目	大阪府堺市南旅籠町東三丁目
十	教寺食堂	一棟	桁行十五間、梁間四間、一重二階(二階床を欠く)、入母屋造、本瓦葺	教寺	兵庫縣姫路市書写	兵庫縣姫路市書写
十一	円教寺常行堂	一棟	常行堂、中門、楽屋及び舞台より成る 常行堂 桁行五間、梁間五間、一重、入母屋造、向拜一間、本瓦葺 中門及び楽屋 桁行南面十間、北面九間、梁間二間、一重、中門切妻造、楽屋常行堂よりふきおろし、本瓦葺 舞台 桁行一間、梁間一間、一重、北面唐破風造、南面中門及び楽屋に接続、本瓦葺 附 棟札一枚 修復元祿五 申 歲霜月六日の記がある	円教寺	兵庫縣姫路市書写	兵庫縣姫路市書写
十二	円教寺護法堂 (天社及び若天社)	二棟	各一間社隅木入春日造、檜皮葺 附 厨子 二基 各宮厨子 四枚 棟札 造替上棟永祿二年己未八月三日の記があるもの 屋栋修理寛永八年辛未三月二十一日ヨリ同卯月十六日終の記があるもの 上葺修造承応二年癸巳年六月日の記があるもの 葺替元祿十四 辛巳年十月日の記があるもの	円教寺	兵庫縣姫路市書写	兵庫縣姫路市書写
十三	長尾神社本殿	一棟	一間社春日造、檜皮葺	長尾神社	奈良縣添上郡大柳生村大字坂原	奈良縣添上郡大柳生村大字坂原
十四	長岳寺庫裏	一棟	八疊三室、六疊二室、七疊半、三疊、床、書院、押入、縁側、女閤、台所、土間、物入等より成る、一重、寄棟造、茅葺、庇本瓦葺、女閤唐破風造、檜皮葺	長岳寺	奈良縣磯城郡柳本町大字柳本	奈良縣磯城郡柳本町大字柳本

十五	岡寺仁王門	一棟	三周一戸棧門、入母屋造、本瓦葺 一間社春日造、檜皮葺 附棟札 造宮永祿三年九月二日の記があるもの 造宮元和九年癸卯月十六日の記があるもの 造宮寛文七丁未年二月十五日の記があるもの 上葺宝永四丁亥四月廿七日の記があるもの 寛保元歲次辛酉九月修繕の記があるもの 造宮延享二乙丑五月初八日の記があるもの 上葺寛延二己巳八月下七日の記があるもの 上葺明和八年卯四月朔日の記があるもの 上葺寛政二年歲次正月十一日の記があるもの 造宮文化五戊辰歲二月十六日下遷宮上遷宮十二月四日当日上棟の記があるもの 造宮天保十一庚子年三月六日下遷宮正遷宮六月晦日の記があるもの 長三尺六寸一分、幅三寸(一部欠)のもの	岡寺	奈良県高市郡高市村大字岡	奈良県高市郡高市村大字岡
十六	白岩丹生神社本殿	一棟	上葺寛延二己巳八月下七日の記があるもの 上葺明和八年卯四月朔日の記があるもの 上葺寛政二年歲次正月十一日の記があるもの 造宮文化五戊辰歲二月十六日下遷宮上遷宮十二月四日当日上棟の記があるもの 造宮天保十一庚子年三月六日下遷宮正遷宮六月晦日の記があるもの 長三尺六寸一分、幅三寸(一部欠)のもの	白岩丹生神社	和歌山県有田郡鳥屋城村小川白岩谷	和歌山県有田郡鳥屋城村小川白岩谷
十七	屋島寺本堂	一棟	桁行五間、梁間五間、一重、入母屋造、向拜三間、本瓦葺 附厨子一基 一間厨子、入母屋造、妻入、正面軒唐破風附、本瓦形板葺	屋島寺	香川県高松市屋島町	香川県高松市屋島町
十八	金刀比羅宮表書院	一棟	桁行七十一尺八寸、梁間五十六尺、一重、入母屋造、正面軒唐破風附、檜皮葺	金刀比羅宮	香川県仲多度郡琴平町	香川県仲多度郡琴平町
十九	金刀比羅宮奥書院	一棟	六畳二室、三畳、八畳、十畳二室、十九畳、七畳半、入側、床、縁、土庇等より成る、一重、入母屋造、本瓦葺 庇棧瓦葺	金刀比羅宮	香川県仲多度郡琴平町	香川県仲多度郡琴平町
二十	常德寺円通殿	一棟	桁行三間、梁間三間、一重、入母屋造、本瓦葺	常德寺	香川県三豊郡仁尾町	香川県三豊郡仁尾町
二十一	宮崎宮鳥居	一基	石造明神鳥居 柱に慶長第十四太歳舎己酉季秋中旬の刻銘がある	宮崎宮	福岡県福岡市宮崎町	福岡県福岡市宮崎町

新指定重要文化財一覽(繪畫の部)

既に重要文化財に指定した物件に、新たに未指定物件を追加して名称及び員数を定めたもの。○印は今回追加したものを示す。

繪畫の部

名	称	員数	所有者
紙本著色天狗草紙(東寺、醍醐寺、高山卷及延暦寺卷) 附紙本著色天狗草紙模本(東大寺卷、興福寺卷)狩野養信筆		二卷	国(東京国立博物館保管)
絹本著色北条実時像			
絹本著色北条顯時像			
絹本著色金沢貞顕像		四幀	神奈川県横浜市金沢区金沢町寺
絹本著色金沢貞將像			
附絹本著色顯辨像 一幅			
名古屋城旧本丸御殿障壁面		三百三十二面	愛知県名古屋市
紙本金地著色竹林群虎図(玄関一之間) 襖貼付四、障子腰貼付四		八面	
附紙本金地著色花卉図(違棚天袋貼付)四面			
紙本金地著色竹林群虎図(玄関二之間) 襖貼付四、障子腰貼付六		十面	
紙本金地著色梅松禽鳥図(表書院上段之間) 附書院障子腰貼付四、襖貼付四、障子腰貼付二		十面	
附紙本金地著色花果図(違棚天袋貼付)四面			
紙本金地著色桜花雉子図(表書院一之間) 襖貼付八、障子腰貼付十二		三面	
紙本金地著色松楓禽鳥図(表書院二之間) 襖貼付八、障子腰貼付六		十四面	
紙本金地著色麝香猫図(表書院三之間) 襖貼付八、障子腰貼付十二		三面	

紙本著色風俗図(対面所上段之間) 附書院障子腰貼付四、襖貼付四、障子腰貼付二		十面	
附紙本淡彩蘆雁図(違棚天袋貼付)四面			
紙本著色風俗図(対面所次之間) 襖貼付八、障子腰貼付四		三面	
紙本著色山水花鳥図(対面所納戸一之間) 襖貼付四		四面	
紙本著色山水花鳥図(対面所納戸二之間) 襖貼付四		四面	
紙本著色帝鑑図(上洛殿上段之間) 帳台構貼付二、襖貼付八、狩野探幽筆		十面	
紙本著色帝鑑図(上洛殿一之間) 襖貼付十六		六面	
紙本著色琴棋書画図(上洛殿二之間) 襖貼付十四		四面	
紙本淡彩四季花鳥図(上洛殿三之間) 襖貼付十八		六面	
紙本金地著色松花鳥図(上洛殿松之間) 襖貼付四、障子腰貼付六		十面	
紙本金地著色藤山吹図(上洛殿納戸之間) 帳台構(裏面)貼付二、襖貼付二		四面	
紙本金地著色菊図(上洛殿菊之廊下) 伝狩野探幽筆		二面	
紙本金地著色花鳥図(梅之間) 襖貼付二		二面	
紙本淡彩瀟湘八景図(黒木書院一之間) 襖貼付七		七面	
紙本淡彩雪中柳鷺図(廊下) 襖貼付四		四面	
紙本淡彩四季耕作図(黒木書院二之間) 襖貼付十三		三面	
紙本淡彩及著色雪中柳鷺梅花雉子図(黒木書院三之間廊下) 襖貼付八		八面	

紙本著色花鳥図(上御膳所上段之間) 襖貼付六	六面
紙本著色花鳥図(上御膳所上之間) 襖貼付六、障子腰貼付四	十面
紙本金地著色松竹花鳥図(御湯殿書院) 上段之間	五面
襖貼付五	
紙本淡彩扇面流図(御湯殿書院一之間) 襖貼付八、障子腰貼付六	十四面
襖貼付六、障子腰貼付四	
紙本淡彩岩浪鴛鴦図(御湯殿書院二之間)	十面
襖貼付六、障子腰貼付四	
著色杉戸絵	六十六面
竹虎図二、竹虎図二、虎図二、麝香猫 図二、蝙蝠図二、楡図二、竹鶏図二、 松山鳥図二、蘇鉄図二、芍薬図二、横 雉子図二、柏梟図二、芍薬図二、楡図	

既に重要文化財に指定した物件の一部を解除したものの。(東照宮御供所が昭和三十年一月九日焼失したため)

番号	名称	員数	構造及び形式	所有者	所有者の住所	所在の場所
一	東照宮	六棟	<p>桁行三間、梁間二間、一重、入母屋造、向拜一間、楡皮葺</p> <p>桁行三間、梁間二間、一重、入母屋造、向拜一間、楡皮葺</p> <p>桁行二間、梁間一間、一重、背面切妻造、前面拜殿に接続、楡皮葺</p> <p>一間一戸平唐門、楡皮葺</p> <p>各折曲り二十二間、楡皮葺</p> <p>桁行一間、梁間一間、一重、切妻造、生子板葺、水盤を含む。</p> <p>附 石柵折曲り延長二百五十二尺六寸</p> <p>石燈籠二基</p> <p>各卒に慶安四年辛卯九月十七日の記がある</p> <p>板札一枚</p> <p>慶安四年の卯四月吉日の記がある</p> <p>棟札三枚</p> <p>造宮慶安四年辛卯曆九月十七日の記があるもの</p> <p>修覆明和乙酉年三月の記があるもの</p> <p>修覆天保四癸巳年六月の記があるもの</p>	東照宮	愛知県南設楽郡鳳来寺村大字門谷	愛知県南設楽郡鳳来寺村大字門谷

工 藝 品 の 部			
名	称	員数	所 有 者
金銅密教法具			神奈川県鎌倉市極楽寺
金銅五鈷鈴	銘文極楽律寺建長七年九月日	一口	
金銅五鈷杵	僧清賢大工橋宗近	一口	
金銅独鈷杵		一口	
二、竹図三、紫垣図二、松梅図二、滝 山水図二、棕栢蔞蔽図三、雪松図二、 吹々鳥図二、芦舟図二、竹図二、葡萄 図二、花車図二、花桶図二、葡萄 圖二、梅図二、芦図二、桜図二、 蘭図二、椿図二			

新指定重要文化財一覽(建造物の部)

既に重要文化財に指定した二件の物件を、改めて統合の上一件とし、新たに未指定物件を追加指定したものの。(○印は今回追加指定の分)

番号	名称	員数	構造及び形式	所有者	所有者の住所	所在の場所
一	東照宮十三棟			東照宮	静岡県静岡市根古屋	静岡県静岡市根古屋
○末社日枝神社本殿 (旧本地堂)	○末社日枝神社本殿 (旧本地堂)		桁行三間、梁間三間、一重、入母屋造、銅瓦葺			
○廟所宝塔	○廟所宝塔		石宝塔、基壇周囲石柵附			
○末社日枝神社本殿 (旧本地堂)	○末社日枝神社本殿 (旧本地堂)		桁行三間、梁間三間、一重、入母屋造、向拝一間、銅瓦葺			
○神庫	○神庫		桁行五間、梁間三間、一重、入母屋造、銅瓦葺			
○神樂殿	○神樂殿		桁行五間、梁間三間、一重、入母屋造、妻入、銅瓦葺			
○神樓	○神樓		桁行三間、梁間二間、榜腰附、入母屋造、銅瓦葺			
○神門	○神門		桁行三間、梁間二間、一重、切妻造、妻入、木瓦葺			
○樓門	○樓門		三間一戸楼門、入母屋造、銅瓦葺、左右袖塀附			
○燈籠	○燈籠		廟所參道 廟門以内石敷參道、石鳥居及び石柵附 銅燈籠 二基			
棟札	棟札		各竿に元和三年丁巳四月十七日の刻銘がある			
上棟宝永元甲申年十二月十五日の記があるもの	上棟宝永元甲申年十二月十五日の記があるもの					
修営宝永元甲申年十二月十七日の記があるもの	修営宝永元甲申年十二月十七日の記があるもの					

新指定重要文化財一覧(建造物の部)

番号	名称	員数	構造及び形式	所有者	所有者の住所	所在の場所
五	大泉寺 観音堂	一棟	桁行三間、梁間四間、一重、寄棟造、向拝一間、茅葺 ○附 肘木 文仁六年五月廿一日の記がある	大泉寺	新潟県中頸城郡米山村 大字大清水	新潟県中頸城郡米山村 大字大清水
六	富士山本宮浅間神社本殿	一棟	桁行五間、梁間四間、二重、浅間造、檜皮葺 ○附 棟札 檜皮御大工寛政八丙辰年六月二十三日の記がある 三間社流造、檜皮葺 棟札 四枚 造天正十八年七月九日の記があるもの 再興寛永拾五年三月吉日の記があるもの 修覆安永四歳乙未十二月十三日の記があるもの 再建立文政十二己丑歳五月十四日の記があるもの	富士山本宮 浅間神社	静岡県富士宮市大宮	静岡県富士宮市大宮
七	富士浅間宮本殿	一棟	○附 棟札 修覆元祿元年太才十月十二日の記がある 在戊辰	富士浅間宮	静岡県磐田郡袋井町国本	静岡県磐田郡袋井町国本
八	本興寺本堂	一棟	○附 棟札 修覆元祿元年太才十月十二日の記がある 在戊辰	本興寺	静岡県浜名郡鷺津町大字鷺津	静岡県浜名郡鷺津町大字鷺津
九	教王護国寺大師堂 (西院御影堂)	一棟	○附 棟札 上尊寛永拾三年二月十六日の記があるもの 上尊明和九年壬辰三月七日の記があるもの 一	教王護国寺	京都府京都市下京区四ツ塚通大宮西入ル九条町	京都府京都市下京区四ツ塚通大宮西入ル九条町
十	円教寺金剛堂	一棟	○附 棟札 上尊寛永拾三年二月十六日の記があるもの 上尊明和九年壬辰三月七日の記があるもの 一	円教寺	兵庫県姫路市書写	兵庫県姫路市書写
一喜客多院	喜多院	六棟	桁行八間、梁間五間、床、違棚及び仏間附属、一重、入母屋造、こけら葺 附 渡廊 一棟 桁行三間、梁間一間、戸棚附属、一重、両下造、こけら葺	喜多院	埼玉県川越市小仙波	埼玉県川越市小仙波

既に重要文化財に指定した物件の名称、構造及び形式等を改めたもの。

三 日 枝 神 社 本 殿 一 棟	隨 身 門	鳥 居	拜 殿 及 幣 殿	瑞 垣	唐 門	二 東 本 照 殿 宮	山 門	鐘 樓 門	慈 眼 堂	庫 裏 院	
<p>三間社流造、銅板葺 附 宮殿 一基 一間宮殿、宝形造、板葺</p>	<p>八脚門、切妻造、棧瓦葺 附 棟札 一枚 造立寛永十七庚辰年林鐘十七日の記がある</p>	<p>石造明神鳥居 柱に寛永十五年九月十七日の刻銘がある</p>	<p>拜殿 桁行三間、梁間二間、一重、入母屋造、向拜一 間、銅瓦葺 幣殿 桁行二間、梁間一間、一重、後面入母屋造、前面 拜殿に接続、銅瓦葺</p>	<p>一周延長三十間、本瓦葺</p>	<p>一周一戸平唐門、銅板葺</p>	<p>三間社流造、銅瓦葺 附 宮殿 一基 円形宮殿、板葺</p>	<p>四脚門、切妻造、本瓦葺 附 棟札 一枚 建立寛永九壬申載霜月吉日の記がある</p>	<p>桁行三間、梁間二間、袴腰附、入母屋造、本瓦葺 附 銅鐘 一口 元祿十五年歲次壬午冬十二月十五日の刻銘がある</p>	<p>桁行三間、梁間三間、一重、宝形造、背面一間通り庇 附 本瓦葺 附 厨子 一基 一間厨子、向唐破風造、木瓦形板葺</p>	<p>桁行六間、梁間五間、床、床脇及び押入附属、一重、一 部中二階附、寄棟造、こけら葺 母屋 桁行十間、梁間四間、一重、一部中二階附、一端 入母屋造、他端寄棟造、とち葺形銅板葺 食堂 桁行四間、梁間三間、一重、一端寄棟造、他端母 屋に接続、とち葺形銅板葺 附 女閤、玄閤広間、波廊及び接続室 一棟 桁行東面三間、西面五間、梁間四間、一重、一端 寄棟造、前後する破風附、他端母屋に接続、と ち形銅板葺</p>	
日 枝 神 社						東 照 宮					
埼玉県川越市小仙波						埼玉県川越市小仙波					
埼玉県川越市小仙波						埼玉県川越市小仙波					

四	法華經寺五重塔	一基	三間五重塔婆、瓦棒入銅板葺	法華經寺	千葉縣市川市中山町二丁目	千葉縣市川市中山町二丁目
五	鳳來寺觀音堂	一棟	桁行三間、梁間三間、一重、寄棟造、茅葺	鳳來寺	千葉縣市原郡加茂村吉沢	千葉縣市原郡加茂村吉沢
六	笠森寺觀音堂	一棟	四方懸造、桁行五間、梁間四間、一重、寄棟造、銅瓦葺、階段及び踊場を含む	笠森寺	千葉縣長生郡水上村大字笠森	千葉縣長生郡水上村大字笠森
七	竜正院仁王門	一棟	入脚門、寄棟造、茅葺	竜正院	千葉縣香取郡下総町滑川	千葉縣香取郡下総町滑川
八	神野寺表門	一棟	四脚門、切妻造、茅葺	神野寺	千葉縣君津郡秋元村鹿野山	千葉縣君津郡秋元村鹿野山
九	石堂寺本堂	一棟	桁行四間、梁間三間、一重、寄棟造、妻入、茅葺、向拝一周、棧瓦葺	石堂寺	千葉縣安房郡丸村石堂	千葉縣安房郡丸村石堂
十	弥彦神社境内末社十柱神社社殿	一棟	桁行三間、梁間三間、一重、入母屋造、妻入、茅葺、向拝一周、板葺	弥彦神社	新潟縣西蒲原郡弥彦村大字弥彦	新潟縣西蒲原郡弥彦村大字弥彦
十一	浄光寺薬師堂	一棟	桁行三間、梁間四間、一重、入母屋造、茅葺	浄光寺	長野縣上高井郡小布施町大字雁田	長野縣上高井郡小布施町大字雁田
十二	靈山寺仁王門	一棟	三間一戸門、寄棟造、茅葺	靈山寺	静岡縣清水市大内	静岡縣清水市大内
十三	教王護国寺北大門	一棟	三間一戸八脚門、切妻造、本瓦葺	教王護国寺	京都府京都市下京区四ツ塚通大宮西入ル九条	京都府京都市下京区四ツ塚通大宮西入ル九条
十四	教王護国寺慶賀門	一棟	三間一戸八脚門、切妻造、本瓦葺	教王護国寺	京都府京都市下京区四ツ塚通大宮西入ル九条	京都府京都市下京区四ツ塚通大宮西入ル九条
十五	教王護国寺北総門	一棟	四脚門、切妻造、本瓦葺	教王護国寺	京都府京都市下京区四ツ塚通大宮西入ル九条	京都府京都市下京区四ツ塚通大宮西入ル九条
十六	教王護国寺東大門	一棟	三間一戸八脚門、切妻造、本瓦葺	教王護国寺	京都府京都市下京区四ツ塚通大宮西入ル九条	京都府京都市下京区四ツ塚通大宮西入ル九条
十七	教王護国寺南大門	一棟	三間一戸八脚門、切妻造、本瓦葺	教王護国寺	京都府京都市下京区四ツ塚通大宮西入ル九条	京都府京都市下京区四ツ塚通大宮西入ル九条
十八	教王護国寺宝蔵	一棟	桁行三間、梁間三間、校倉、寄棟造、本瓦葺	教王護国寺	京都府京都市下京区四ツ塚通大宮西入ル九条	京都府京都市下京区四ツ塚通大宮西入ル九条

十九	教王護国寺講堂	一棟	桁行九間、梁間四間、一重、入母屋造、本瓦葺	教王護国寺	京都府京都市下京区四ツ塚通大宮西入ル九条町	京都府京都市下京区四ツ塚通大宮西入ル九条町
二十	灌頂院 東 北 教王護国寺灌頂院門	三棟	桁行七間、梁間七間、一重、寄棟造、本瓦葺 四脚門、切妻造、本瓦葺	教王護国寺	京都府京都市下京区四ツ塚通大宮西入ル九条町	京都府京都市下京区四ツ塚通大宮西入ル九条町
二十一	円教寺大講堂	一棟	桁行七間、梁間六間、二重一階、入母屋造、本瓦葺	円教寺	兵庫県姫路市書写	兵庫県姫路市書写
二十二	円教寺鐘楼	一棟	桁行三間、梁間二間、袴腰附、入母屋造、本瓦葺	円教寺	兵庫県姫路市書写	兵庫県姫路市書写

重要無形文化財指定保持者認定一覽

(昭和三〇年五月二日現在)

一、各個指定 (三四件、四二名)

(一) 藝能の部 (二二件、一四名)

略

(二) 工藝技術の部 (二二件、二八名)

名称	氏名	藝名雅号等	生年月日	住	所	指定
鉄釉陶器	石黒宗磨		明治 三、四、四	京都府京都市左京区八瀬近衛町七一四		第一次
志野	荒川豊蔵		明治 七、三、三	岐阜県可兒郡久々利村大萱		第一次
瀬戸黒	荒川豊蔵		明治 七、三、三	岐阜県可兒郡久々利村大萱		第一次
民藝陶器	浜田象二	浜田庄司	明治 七、三、九	栃木県芳賀郡益子町益子三三七		第一次
色絵磁器	富本憲吉		明治 九、六、五	東京都文京区上野公園		第一次
江戸小紋	小宮定吉	小宮康助	明治 五、九、九	東京都葛飾区上平井町二二七		第一次
長板中形	清水幸太郎		明治 三、一、六	東京都葛飾区西篠原町一		第一次
伊勢型紙突	松原定吉		明治 三、二、四	東京都江戸川区西小松川二ノ一八六七		第一次
伊勢型紙縞	南部芳松		明治 七、九、三	三重県鈴鹿市寺家町二八〇四		第一次
伊勢型紙縞	兒玉博		明治 三、一、三	三重県鈴鹿市白子町築地六一七三		第一次
伊勢型紙縞	六谷紀久雄		明治 四、三、五	三重県鈴鹿市寺家町二八九五		第一次
伊勢型紙縞	中島秀吉		明治 一、六、九	三重県鈴鹿市寺家町二六六九		第一次
伊勢型紙縞	中村勇二郎		明治 三、九、三	三重県鈴鹿市寺家町二五五一		第一次

名称	氏名	藝名雅号等	生年月日	住	所	指定
伊勢型紙糸入れ	城之口みえ		大正 六、一、二	三重県鈴鹿市白子町山中町六五〇五		第一次
友禪	上野為二		明治 三、四、六	京都府京都市中京区猪熊通三条上ル姉猪熊町三一五		第二次
友禪	木村文二	木村雨山	明治 二、三、三	石川県金沢市横山町二番丁三四		第二次
友禪	田畑喜八		明治 二、八、六	京都府京都市中京区小川通竹屋町下ル下丸屋町四五三		第二次
友禪揚子糊	中村勝馬		明治 七、九、八	東京都渋谷区代々木大山町一〇四六		第二次
正藍冷染	山田栄一		明治 三、三、七	愛知県愛知郡鳴海町神明六四		第二次
時繪	千葉あやの		明治 三、二、四	宮城県栗原郡栗駒町文字下文字下鍛冶屋九八		第二次
時繪	松田権六		明治 元、四、三	東京都台東区上野公園		第一次
時繪	高野重人	高野松山	明治 三、五、二	東京都文京区高田老松町七六		第一次
彫漆	音丸芳雄	音丸耕堂	明治 三、六、五	東京都文京区駒込追分町九二		第二次
沈金	音丸得二	音丸大峰	明治 三、二、〇	石川県輪島市河井町一部一三六		第二次
銅羅	魚住安太郎	魚住為楽	明治 元、三、三	石川県金沢市長町五番丁六四		第一次
彫金	海野清		明治 七、二、八	東京都文京区駒込動坂町三二七		第二次
日本刀	高橋金市	龍王子貞次	明治 三、四、四	愛媛県松山市道後石手一		第二次
衣裳人形	平田恒雄	平田郷陽	明治 三、二、五	東京都台東区上野桜木町五四		第一次
衣裳人形	山田松枝	堀柳女	明治 三、八、五	東京都品川区五反田五ノ七八		第一次

二、総合指定（三件）

（一）藝能の部（二件）

略

（二）工芸技術の部（一件）

重要無形文化財		重要無形文化財の保持者	
名称	要件	保持者代表者の氏名 雅号等	所属する機 関又は団体
越後縮	<p>一 苧麻を手りみした糸を使用すること。</p> <p>二 拵模様をつける場合は、地白極文のほか、手くびりによること。</p> <p>三 いざり機で織ること。</p> <p>四 しぼとりをする場合は、湯もみ足ぶみによること。</p> <p>五 さらしは、雪ざらしによること。</p>	<p>山本つね（菅うみ）</p> <p>小川よの（菅うみ）</p> <p>和田金蔵（拵つくり）</p> <p>山口初治（拵つくり）</p> <p>目略よし（いざり織）</p> <p>一之谷たか（いざり織）</p>	<p>新潟県小千谷市小千谷公民館内</p> <p>小千谷縮技術保存協会</p>
			第二次

文化財保護委員会昭和30年度補助金交付一覽

昭和30年度補助金交付一覽

總 括 表

目	昭和30年度 補助額	備 考
1. 国宝其他建造物保存 修理費補助金	206,000,000	
2. 国宝其他宝物類保存 修理費補助金	10,000,000	
3. 日光二社一寺国宝其 他保存修理費補助金	23,100,000	
4. 平等院鳳凰堂建物保 存修理費補助金	9,100,000	
5. 藥師寺藥師三尊等保 存修理費補助金	5,900,000	
6. 史跡名勝天然記念物 保存修理費補助金	9,300,000	
7. 常盤公園保存修理費 補助金	7,800,000	
8. 国宝其他防災施設費 補助金	35,500,000	
a 建造物防災施設	25,028,000	
b 宝物防災施設	450,000	
c 宝物保存施設	4,033,000	
d 史跡名勝天然記 念物防災施設	430,000	
e 史跡名勝天然記 念物保存施設	4,629,000	
f 埋藏文化財取蔵 庫	930,000	
9. 興福寺取蔵庫建設費 補助金	7,400,000	
10. 無形文化財助成金	2,400,000	
計	316,500,000	

文化財保護委員会昭和三十年補助金交付一覽

1. 国宝重要文化財建造物保存修理費補助金

番号	府県別	種別	名 称	所 在	補 助 額	備 考
1	宮 城	重	瑞巖寺廻廊及び庫裡	宮城郡松島町字町内	1,600	
2	秋 田	シ	古四王神社本殿	大曲市字古四王際	210	
3	山 形	シ	観音寺観音堂	西置賜郡白鷹町深山	3,280	
4	シ	シ	出羽神社五重塔	東田川郡羽黒町大字手向	1,400	
5	福 島	シ	薬師堂(田子)	大沼郡新鶴村大字新屋敷	3,760	
6	シ	国	阿弥陀堂(白水)	内郷市白水町	1,200	
7	茨 城	重	鹿島神宮摂社奥宮	鹿島郡鹿島町宮中	350	
8	栃 木	シ	地藏院本堂	芳賀郡益子町大字上大羽	7,100	
9	埼 玉	シ	喜多院慈眼堂外二棟	川越市小仙波	4,240	
10	シ	シ	福德寺阿弥陀堂	入間郡東吾野村	2,642	
11	東 京	シ	根津神社本殿及び幣殿	文京区根津須賀町	7,500	
12	神奈川	シ	三溪園(第二期工事)臨春閣第1.2屋外二棟	横浜市中区本牧三之谷	7,000	
13	新 潟	シ	蓮華峯寺金堂及び弘法堂	佐渡郡小木町	4,976	
14	シ	シ	魚沼神社神輿舎	小千谷市大字辻川	1,360	
15	石 川	シ	那谷寺三重塔	江沼郡那谷村字那谷	2,319	
16	福 井	国	明通寺三重塔	小浜市門前	1,600	
17	山 梨	重	雲峰寺本堂	塩山市上萩原	5,120	
18	シ	シ	雲峰寺庫裡	シ	2,000	
19	シ	シ	東光寺本堂	甲府市東光寺町	5,083	
20	長 野	シ	遠照寺釈迦堂	上伊那郡三義村山室	1,670	
21	シ	シ	新海三社神社三重塔	南佐久郡田口村大字田口	3,300	
22	シ	シ	白山神社本殿	下水内郡岡山村	210	
23	岐 阜	シ	日竜峯寺塔婆	武儀郡武儀村下之保	2,802	
24	愛 知	シ	長光寺地藏堂	中島郡稲沢町六角堂	492	
25	シ	シ	甚目寺三重塔	海部郡甚目寺町	7,500	
26	シ	シ	竜泉寺仁王門	守山市吉根	1,300	
27	三 重	シ	猪田神社本殿	上野市大字猪田	1,305	
28	シ	シ	大村神社宝殿	名賀郡青山町阿保	870	
29	滋 賀	シ	延暦寺転法輪堂(釈迦堂)	大津市坂本本町	8,200	
30	シ	シ	彦根城天秤櫓及太鼓門	彦根市金龜町	7,000	
31	シ	シ	西明寺本堂	犬上郡東甲良村大字池寺	230	
32	シ	国・重	園城寺毘沙門堂及び観学院客殿	大津市園城寺町	3,370	
33	シ	重	長寿寺弁天堂	甲賀郡石部町大字東寺	600	
34	京 都	シ	教王護国寺大師堂及び宝蔵	京都市南区九条町	5,004	
35	シ	シ	教王護国寺灌頂院及附四脚門	シ	3,000	
36	シ	シ	高台寺靈屋	京都市東山区八坂鳥居前下ル下河原町	3,060	
37	シ	国	醍醐寺五重塔	京都市伏見区醍醐伽藍町	9,000	
38	シ	シ	二条城二の丸御殿	京都市中京区二条通	4,265	
39	シ	重	醍醐寺開山堂	京都市伏見区醍醐伽藍町一番地	2,400	
40	シ	シ	東福寺二王門	京都市東山区本町15丁目	800	
41	大 阪	シ	多治速比売神社本殿	泉北郡泉ヶ丘町和田	1,400	
42	兵 庫	シ	円教寺大講堂	姫路市書写	9,492	
43	シ	シ	石峯寺塔婆	美囊郡上淡河村神影	2,872	
44	シ	シ	弥勒寺本堂	飾磨郡夢前町	1,000	

番号	府県別	種別	名 称	所 在	補 助 額	備 考
45	兵庫	重	朝光寺鐘楼	加東郡社町畑	500	
46	奈良	シ	十輪院本堂及び南門	奈良市十輪院町	860	
47	シ	シ	松尾寺本堂	大和郡山市山田町	1,114	
48	シ	シ	福智院本堂	奈良市福智院町	4,150	
49	シ	国	春日大社本殿共10棟	奈良市春日野町	4,450	
50	シ	重	法華寺鐘楼及び南門	奈良市法華寺町	4,647	
51	シ	国	般若寺楼門	奈良市般若寺町	567	
52	シ	重	正蓮寺大日堂	橿原市小綱	1,520	
53	シ	国・重	法隆寺	生駒郡斑鳩町大字法隆寺	3,500	
54	シ	重	天皇神社本殿	天理市備前	210	
55	シ	シ	天神社本殿(北野)	添上郡東山村大字北野	378	
56	シ	国	唐招提寺金堂	奈良市五条町	360	
57	鳥取	重	不動院岩屋堂	八頭郡若桜町岩屋堂	1,120	
58	岡山	シ	岡山城月見櫓	岡山市山下	3,974	
59	シ	国・重	吉備津神社本殿拜殿、北随神門	吉備郡真金町	1,600	
60	広島	シ	厳島神社昭和30年度	佐伯郡宮島町	6,400	
61	シ	重	不動院鐘楼	広島市牛田町	2,650	
62	香川	シ	高松城二之丸月見櫓外2棟	高松市内町	7,000	
63	愛媛	シ	大山祇神社拜殿	越智郡大三島町宮浦	1,854	
64	高知	シ	高知城廊下門、詰門、東多聞(第2期工事)	高知市丸の内	5,000	
65	徳島	シ	丈六寺三門及び観音堂計	徳島市丈六町	1,646	
					197,382	

2. 国宝其他宝物類保存修理費補助金

番号	府県別	所 有 者	所 在 地	対 象 物 件	補 助 額	備 考
1	福井	妙楽寺	小浜市野氏	木造千手観音立像	224,000	
2	静岡	本興寺	浜名郡湖西町鷺津	紺紙金字法華經	254,000	
3	シ	修福寺	賀茂郡竹麻村漆	大般若波羅密多經	400,000	
4	愛知	田原町	渥美郡田原町	渡辺崋山資料	189,000	
5	滋賀	聖衆来迎寺	大津市下坂本比叡辻町	六道絵	364,000	
6	シ	摠見寺	蒲生郡安土町	木造力士像	37,000	
7	シ	延暦寺	大津市坂本本町	唐草蒔絵経箱	81,000	
8	京都	歓喜光寺	京都市東山区五条上ル遊行前町	一遍上人絵伝	414,000	
9	シ	神護寺	シ 右京区梅ヶ畑高雄町	十二天像屏風	318,000	
10	シ	高山寺	シ 〃 〃 〃 榎尾町	明恵上人像(絵)	70,000	
11	シ	妙法院	シ 東山区妙法院前側町	千手観音	3,040,000	
12	シ	善願寺	シ 伏見区醍醐南里町	地藏菩薩像	214,000	
13	シ	平等院	宇治市	阿弥陀像	155,000	
14	シ	教王護国寺	京都市南区九条町	毘陀殺袈裟・横被	319,000	
15	シ	陽明文庫	シ 右京区宇多野	猪熊岡白記	400,000	
16	大阪	金剛寺	河内長野市天野山	腹巻	275,000	
17	シ	住吉大社	大阪市住吉区住吉町	住吉神代記	100,000	
18	山梨	大泉寺	甲府市古府中町	絹本墨画松梅図	63,000	
19	奈良	法隆寺	生駒郡斑鳩町	孔雀明王像絵外	148,000	
20	シ	般若寺	奈良市般若寺町	笠塔婆	189,000	

番号	府県別	所 有 者	所 存 地	対 象 物 件	補 助 額	備 考
21	奈 良	興 福 寺	奈良市登大路町	經典外	150,000	
22	シ	西 大 寺	シ 西大寺町	金銅宝塔、鉄宝塔	128,000	
23	シ	金 峯 神 社	吉野郡吉野町	金峯山経塚出土品	217,000	
24	和歌山	金 剛 峯 寺	伊都郡高野町	金銀字一切経（中尊寺経）	260,000	
25	シ	シ	シ	紺紙金字一切経（荒川経）	740,000	
26	鳥 取	学 行 院	岩美郡成器村	木造薬師如来及両脇侍像	224,000	
27	島 根	佐 太 神 社	八束郡鹿島町	胴丸	207,000	
28	愛 媛	大 山 祇 神 社	越智郡宮浦村	胴丸	87,000	
29	徳 島	八 鉢 神 社	那賀郡富岡村	大己貴命、男神立像	203,000	
30	福 岡	東 長 寺	福岡市上山町	木造千手観音	50,000	
31	シ	宗 像 神 社	宗像郡支海町	木造狗犬	80,000	
32	シ	普 門 院	朝倉郡杷木町志波	木造十一面観音	160,000	
33	シ	善 導 寺	三井郡善導寺町	木造善導大師像	110,000	
34	シ	シ	シ	木造大紹正宗国師像	130,000	
			合 計		10,000,000	

3. 日光二社一寺国宝其他保存修理費補助金

番号	府県別	種別	名 称	所 在	補 助 金	備 考
1	栃 木	国	東照宮廻廊、本殿、拜殿	日光市山内	11,550	
2	シ	重	二 荒 山 神 社 本 殿	シ	2,310	
3	シ	シ	輪 王 寺 三 仏 堂	シ	9,240	
			計		23,100	

4. 平等院鳳凰堂建物保存修理費補助金

番号	府県別	種別	名 称	所 在	補 助 金	備 考
1	京 都	国	平 等 院	宇治市宇治蓮華	9,100	

(30年度起工のもの)

番号	府県別	種別	名 称	所 在	補 助 額	備 考
1	栃 木	重	綱 神 社 本 殿 外 一 棟	芳賀郡益子町大字大沢	440	
2	東 京	シ	敵 有 院 靈 廟 勅 額 門	台東区上野桜木町	110	
3	神奈川	国	如 庵 附 露 地	中郡大磯町西小磯	190	
4	山 梨	重	塩 沢 寺 地 蔵 堂	甲府市湯村町	600	
5	シ	シ	山 梨 岡 神 社 本 殿	東山梨郡岡部村字鎮目	240	
6	三 重	シ	地 蔵 院 護 摩 堂	鈴鹿郡関町大字新所町	500	
7	京 都	シ	大 福 光 寺 多 宝 塔	船井郡丹波町字下山	850	
8	大 阪	シ	積 川 神 社 本 殿	岸和田市積川町	500	
9	シ	シ	降 井 家 書 院	泉北郡熊取町大久保	700	
10	奈 良	シ	元 興 寺 極 楽 坊 東 門	奈良市中院町	662	
11	鳥 取	シ	穉 谷 神 社 社 殿	鳥取市上町87番地	500	
12	山 口	シ	月 輪 寺 薬 師 堂	佐波郡徳地町	500	
13	愛 媛	シ	祥 雲 寺 観 音 堂	武智郡岩城村	500	
14	高 知	シ	鳴 無 神 社 々 殿	須崎市浦の内	500	
15	熊 本	シ	青 井 阿 蘇 神 社 社 殿	人吉市上青井町	630	
16	シ	シ	青 蓮 寺 阿 弥 陀 堂	球磨郡多良木町大字黒肥地	696	
			計		8,618	

5. 薬師寺薬師三尊等保存修理費補助金

県別	名称	所有者	所在地	補助額	備考
奈良	薬師寺薬師三尊等	薬師寺	奈良市西ノ京町	5,900,000	

6. 史跡名勝天然記念物保存修理費補助金

番号	府県別	指定別	名称	所在地	補助額	備考
1	北海道	特史	五稜郭跡	函館市	500,000	
2	宮城	史名	旧有備館及び庭園	玉造郡岩出山町	450,000	
3	福島	名	会津松平氏庭園	会津若松市徒之町	500,000	
4	栃木	特史	日光杉並木街道	日光市	150,000	
5	長野	史	松本城	松本市	800,000	
6	愛知	特史	名古屋城跡	名古屋市	2,000,000	
7	京都	名	渉成園	京都市下京区烏丸通七条下ル常葉町	1,500,000	
8	〃	史	岩倉具視幽棲旧宅	〃 左京区岩倉門前町	200,000	
9	大阪	特史	大阪城跡	大阪市	600,000	
10	兵庫	〃	姫路城跡	姫路市	600,000	
11	山口	史	明倫館水練池及有備館	萩市	200,000	
12	長崎	〃	出島和蘭商館跡	長崎市	600,000	
13	熊本	特史	熊本城跡	熊本市	446,000	
14	愛媛	史	松山城跡	松山市	754,000	
			計		9,300,000	

7. 常磐公園保存修理費補助金

県別	種別	名称	所在地	補助額	備考
茨城	史名	常磐公園	水戸市	7,800,000	

8. 国宝其他防災施設費補助金

a (建造物防災施設)

番号	府県別	名称	所在地	補助額	備考
1	青森	最勝院	弘前市銅屋町	110,000	
2	岩手	中尊寺	西磐井郡平泉町	380,000	
3	栃木	東照宮	日光市山内	2,415,000	
4	〃	輪王寺	〃	2,231,000	
5	〃	二荒山神社	〃	594,000	
6	〃	西明寺	芳賀郡益子町	630,000	
7	山梨	金桜神社	甲府市御嶽町	680,000	
8	〃	雲峰寺	塩山市	100,000	
9	長野	善光寺	長野市元善町	2,000,000	
10	静岡	富士山本宮浅間神社	富士宮市大宮町	1,263,000	
11	愛知	大恩寺	宝飯郡御津町	450,000	
12	奈良	橿原神社	橿原市	1,430,000	
13	兵庫	円教寺	姫路市書写	80,000	
14	和歌山	道成寺	日高郡川辺町	180,000	
15	島根	出雲大社	簸川郡大社町	1,650,000	
16	〃	松江城	松江市	2,100,000	

番号	府県別	名 称	所 在 地	補 助 額	備 考
17	広島	嚴島神社	佐伯郡宮島町	2,190,000	
18	愛媛	松山城	松山市	1,530,000	
19	愛媛	興隆寺	周桑郡円原町古田	280,000	
20	奈良	法隆寺	生駒郡斑鳩町	4,735,000	
		小計		25,028,000	

b (宝物防災施設)

番号	府県別	名 称	所 在 地	補 助 額	備 考
33	京都	智積院	京都市東山区東山七条東瓦町	450,000	

c (宝物保存施設)

番号	府県別	名 称	所 在 地	補 助 額	備 考
21	神奈川	影向寺	川崎市野川	358,000	
22	三重	太子寺	鈴鹿市三日市町	190,000	
23	〃	田宮寺	度会郡玉城町	450,000	
24	京都	養源院	京都市東山区三十三間堂廻り町	73,000	
25	鳥取	取学行院	岩美郡大成村	952,000	
26	島根	根仏谷寺	八束郡美保関町	750,000	
27	徳島	八鍬神社	那賀郡富岡町	240,000	
28	香川	荻原寺	三豊郡荻原村	200,000	
29	〃	法蓮寺	三豊郡高瀬町	350,000	
30	愛媛	大山祇神社	越智郡宮浦村	100,000	
31	福岡	聖福寺	福岡市御供所町	100,000	
32	〃	宇美町	粕屋郡宇美町	270,000	
		小計		4,033,000	

d (史跡名勝天然記念物防災施設)

番号	県 別	種別	名 称	所 在 地	補 助 額	備 考
1	宮城	史名	旧有備館及庭園	玉造郡岩出山町	430,000	

e (史跡名勝天然記念物保存施設)

番号	府県別	指定別	名 称	所 在 地	補 助 額	備 考
1	北海道	特天	釧路のタンチョウ及びその繁殖地	釧路郡釧路村、川上郡標茶村、阿寒郡阿寒村	50,000	
2	青森	名	盛美園	南津軽郡尾上町	100,000	
3	福島	〃	須賀川の牡丹園	須賀川市	100,000	
4	群馬	特史	金井沢碑	多野郡八幡村	200,000	
5	新潟	史	春日山城跡	高田市	100,000	
6	山梨	天	富士山原始林	山梨県	100,000	
7	京都	名	孤篷庵庭園外	京都市北区紫野大徳寺町外	100,000	
8	大阪	史	いたすけ古墳	堺市	2,500,000	
9	奈良	特史	石舞台古墳	高市郡高市村	250,000	
10	山口	天	八代村ツル渡来地	能毛郡八代村	50,000	
11	香川	名	城山	坂出市	250,000	
12	高知	天	土佐のオナガドリ	高知県	50,000	

番号	府県別	指定別	名 称	所 在 地	補 助 額	備 考
13	宮 崎	史	西 都 原 古 墳 群	児湯郡西都町	500,000	
14	シ	天	湯 の 宮 座 論 梅	シ 新田村	50,000	
15	福 岡	シ	黒 木 の 藤	八女郡黒木町	129,000	
16	鹿 児 島	特天	鹿 児 島 県 の ツ ル 及 び そ の 渡 来 地	出水市、阿久根市、出水郡高尾野町、江内村、野田村	100,000	
	計				4,629,000	

f (埋蔵文化財収蔵庫)

番号	県 別	種別	名 称	所 在 地	補 助 額	備 考
1	千 葉	(仮史)	金 鈴 塚	木更津市	430,000	
2	長 野	特史	尖 石 石 器 時 代 遺 跡	諏訪郡茅野町	500,000	
				計	930,000	

9. 興福寺収蔵庫建設費補助金

番号	府県別	名 称	所 在 地	補 助 額	備 考
1	奈 良	興 福 寺	奈良市登大路町	7,400,000	

10. 無 形 文 化 財 助 成 金

番号	府県別	名 称	種別	交 付 先	補 助 額	備 考
1	秋 田	紫 根 染 茜 染	工 藝	栗山文次郎	140,000	
2	東 京	能 楽 三 役	藝 能	楽三役養成会	400,000	
3	シ	文 楽 (合 同 公 演)	公 開	財団法人演劇研究会	75,000	
4	シ	郷 土 藝 能	シ	シ 日本青年館	100,000	
5	シ	指 定 工 藝	シ	社団法人日本工藝会	50,000	
6	岐 阜	志 野、瀬 戸 黒	工 藝	荒川豊蔵	160,000	
7	三 重	伊 勢 型 紙	シ	伊勢型紙業組合	300,000	
8	大 阪	文 楽	藝 能	因会、三和会	500,000	
9	シ	文 楽 (合 同 公 演)	公 開	大阪府教育委員会	75,000	
10	香 川	蒔 繪、存 清	工 藝	香川県 シ	600,000	
				計	2,400,000	

金欄手水指	支那窯	一箇
仙人像染付色繪獅子鈕香炉	成化年製ノ文字アリ	一箇
吳洲色繪鉢	支那窯	一箇
紫沙壺	姑蘇留瓊製ノ刻銘アリ	一箇
壺式風炉	支那窯	一箇
魚子手玻璃蓋物	製造地不詳	一箇
渋紙鍍金入玻璃麦酒盃	製造地不詳	一箇
切子玻璃小皿	製造地不詳	五枚
群梨子地菊笹金高蒔絵角切重箱		二箇
朱地浪千鳥金銀蒔絵杯并台	鶴下善兵工作	一具
黒地萬曆龍模様色蒔絵食籠	長寛作	一箇
黒地草木果実折枝色蒔絵菓子盆	作者不詳	五枚
朱漆松葉摺吸物椀	半四郎作	一〇箇
黒漆厚面螭龍彫書棚	堀田瑞松作	一箇
梅花模様鎌倉彫菓子盆		一枚
人物図青貝欄干付卓	支那製	一箇
曲輪軸盆		一箇
水晶玉		一箇

奈良国立博物館

春日宮曼茶羅図	一幅
役行者	一幅
鍍金透彫光背	一個
金峯山經塚発掘遺物 (鏡及御正体断片)	一四個
菊花散梨地蒔絵鏡箱	一個
木固紫檀双六局(正倉院御物模造)	一基
鶏埴輪	一個

第一回日本美術展覽會出品、入選、陳列点数表

科 別	一般申込	無 鑑 査	総申込数	入 選 数	内新入選	陳 列 総 数
日 本 画	609	90	699	254	21	掛替48を含めて 344
洋 画	1,837	190	2,027	409	68	599
彫 塑	276	80	356	163	15	243
工 藝	842	119	963	261	41	380
書	1,150	62	1,212	375	136	掛替129を含めて 437
計	4,714	541	5,257	1,462	281	2,003

第一回日本美術展覽會

審査員一覽

○印 審査員長

第四科(美術工藝)

柳村平手田関炭内赤相
田上尾島中野山田羽沢村
泰三孤右塊香南鶴雲庭洋
雲嶋往卿堂雲木雲庭洋台

第一科(日本画)

○(院長)高橋誠一郎
(会)小野竹喬
(会)野田九浦
(会)福田平八郎
(会)山口蓬春
(会)伊東深水
(会)徳岡神泉
(会)服部有恒
(会)森部白甫
(会)山口華楊
(会)我妻元宇
(会)奥田碧宋
(会)嶋谷自然
(会)曲光男
(会)山田申吾
(会)吉田登毅

第三科(彫塑)

(会)藤井三雄
(会)吉田三郎
(会)雨宮治郎
(会)北村正信
(会)清水嘉示
(会)橋本朝秀
(会)松田尚之
(会)畝村直久
(会)木村圭二
(会)黒田嘉治
(会)安田周三郎
(会)分部順治

第二科(西洋画)

(会)有島生馬
(会)石井柏亭
(会)川島理一郎
(会)辻弘永
(会)中沢光
(会)中村研一
(会)山下新太郎
(会)石川寅治
(会)伊原宇三郎
(会)伊原鍋三郎
(会)寺内萬治郎

第五科(書)

(会)尾上柴舟
(会)豊道春海
(会)江川碧潭
(会)園湖城

(会)岩田藤清
(会)海野豊周
(会)高村豊六
(会)松田正彦
(会)香取正彦
(会)楠部弥一
(会)福沢健夫
(会)三井義夫
(会)宮之原謙
(会)稻木東千
(会)大坪重周
(会)岡部達男
(会)岡本玉水
(会)加藤土師
(会)鹿島宗一
(会)河内宗光
(会)小松芳明
(会)佐野芳孟
(会)談議所栄二
(会)土肥刀泉
(会)蓮田脩吾
(会)番浦省吾
(会)丸浦端堂
(会)丸山不堂
(会)丸山不堂
(会)宮坂房衛
(会)森嘉光
(会)吉野嘉光
(会)六角穎雄
(会)六角穎雄

第一回日本美術展覽會出品、入選、陳列点数表 第一回日本美術展覽會審査員一覽

各大学美術関係講義題目

〔国立〕

岩手大学

〔文学部〕「藝術学原理、美術の価値評価論」教授田辺彦太郎、「美術工藝史」講師森口多里、「美学直観、美的感動」講師千葉運孝、「西洋絵画史」講師藤原徳太郎、「東洋絵画史」講師栗本良

東北大学

〔文学部美学美術史学科〕「西洋美術史講義、西洋美術史演習」「美学演習」教授村田潔、「美学講義、美学演習」助教授西田秀穂、「考古学」教授伊東信雄

〔文学部東洋藝術史学科〕「東洋藝術史普通講義、日本美術史、奈良—平安時代」「東洋藝術史特殊講義、水墨画の世界」「東洋藝術史演習、日本の画論二」教授亀田孜、「東洋藝術史特殊講義、印度美術史」講師高田修

千葉大学

〔日本美術史〕講師檜崎宗重、「西洋美術史」講師三輪福松、「美術概論」講師神保常彦、「考古学概説」講師藤田亮策

東京大学

〔文学部美学美術史学科〕「美学概論」「藝術の種類」〔Hegel: Ästhetik〕教授竹内敏雄、〔Wölfflin: kunstgeschichtliche Grundbegriffe〕講師大成龍雄、「西洋音楽史」講師野村良雄、「日本音楽史」講師吉川英士、「西洋中世美術史」〔B. Berenson: Italian Painters of the Renaissance〕「美術史」西洋古

典」教授吉川逸治、「日本美術史概説、近世」「日本美術史演習、作品鑑賞」助教授山根有三、「水墨画研究」教授米沢嘉圃、「日本上代絵画史研究」講師松本崇一

〔考古学〕「考古学概論」「東亜古代の壁面」教授駒井和愛、「日本考古学」「考古学演習」講師八幡一郎、「野外考古学」助教授関野雄、「西南アジア考古学」講師杉勇

東京学藝大学

〔文学部〕「日本美術史概説」「日本美術史特殊講義」「日本美術鑑賞」「美学概説」教授中野勇、「西洋美術史概説」「西洋美術史特殊講義」「西洋美術鑑賞」教授久富貢

東京藝術大学

〔文学部〕「批評精神史」「美学演習、現代に於ける美学上の諸問題」教授村田良策、「美学概論」「美学演習、ウォーリンガー、抽象と感情移入」助教授西本順、「西洋美術史概説」「西洋工藝史」「演習、エトルリヤの美術史」「演習、エリック・ニートン、ヨーロッパの絵画と彫刻」教授新規短男、「イタリヤ中世の美術」〔ボッティチネリ〕教授摩寿意善郎、「日本美術史概説」「日本美術史演習」教授脇本十九郎、「東洋美術史概説」「水墨画について」演習、宗及茶日記について」教授谷信一、「東洋工藝史」「工藝論」演習、明治、大正工藝史」助教授前田泰次、「西洋一七、一八世紀の絵画」演習、テオドル・デュレ、印象派の画家達」非常勤講師吉川逸治、「美術比較研究」学長上野直昭、「美術解剖学」「人体美学」教授西田正秋、「色彩学」「色彩形態論」非常勤講師上原之節、「日本文様史」非常勤講師毛利登、「構成原理」非常勤講師水谷武彦、「図案概論」教授須藤雅路、「漆工史」非常勤講師吉野富雄、「美術印刷」非常勤講師大江恒吉、「建築概論」助教授

吉村順三、「西洋建築史」非常勤講師蔵田周忠、「日本建築史」非常勤講師伊藤要太郎

東京教育大学

〔教育学部〕「西洋美術史特別講義、レオナルド研究」「藝術学演習」「洋書講読」「論文指導」「博物館学」教授沢柳大五郎、「日本美術史概説」「東洋美術史特別講義」「インド美術史」「藝術学概論」助教授町田甲一、「美学史」講師船本治義

横浜国立大学

〔文学部〕「美学概説」「現代の美学」「東洋画論研究」「美学演習」助教授山本正男、「近世日本絵画史」講師渡江二郎、「西洋工藝史」講師阿部公正

京都大学

〔文学部美学美術史学科〕「美学序論」教授井島勉、「藝術における表現」(主として言語表現問題)講師河本敦夫、「演習、美学美術史の諸問題」教授井島勉、「Dichtung: Das Erlebnis und die Dichtung」講師梶野服、「演習、美学研究上の諸問題」「藝術作品と作風の諸問題」教授井島勉、「仏教美術の源流としてのインド美術の展開」教授上野照夫、「ロマネスク絵画」講師吉川逸治、「西洋古代美術史」講師新規短男

〔考古学〕「考古学五十年」教授梅原末治、「日本考古学の発達」講師小林行雄、「日本先史時代土器の研究」講師山内清男、「考古学英書講読」助教授有光教一、「考古学実習」講師小林行雄、「朝鮮考古学の諸問題」助教授有光教一

京都学藝大学

〔美術科〕「絵画学概論」教授伊谷賢蔵、講師須田国太

郎、「構成学概論」教授霜島正三郎、「工藝学概論」教授岡山守五、「西洋美術史概説」「日本美術史概説」「美術史特別講義」助教授中村二柄、「建築学概論」講師元良敷

「特修美術科」「西洋美術史概説」「日本美術史概説」「美学特別講義」「美術史特別講義」助教授中村二柄、「美術概論」講師井島勉、「西洋美術各論」講師河本敦夫、「建築学概論」講師元良敷

京都工芸纖維大学

「美学概論」「美学特論」「西洋美術史」「美学演習」「工藝美学特論」教授河本敦夫、「日本美術史」「美術史特論」「東洋美術史」「美術史演習」教授土居次義、「工藝美学」講師元井能、「日本建築史」「西洋建築史」「建築史特論」「建築史演習」教授藤原義一

神戸大学

「文学部」「藝術学概論・世界藝術史」「藝術学・藝術史講読及演習」教授小林太市郎、「日本美術史概説」「東洋美術史特殊講義」「藝術学・藝術史講読及演習」教授谷信一、「藝術学特殊講義」「藝術ジャンル論」「藝術学・藝術史講読及演習」教授辻部政太郎、「藝術学講読」講師岩山三郎

「教育学部」「美学・美術史」「美術概論」教授黒田英一郎、「彫塑・工藝」「色彩学」助教授大塚尚武、「絵画・美術理論」助教授兼行武四郎、「絵画・保育絵画」助教授安藤敷、「工藝・工藝理論」講師砂原久

九州大学

「文学部美学美術史学科」「美学演習」「中国美術史」「東洋美術史演習」「仏教美術入門」「西洋絵画史」教授谷口鉄雄、「東洋陶磁史」講師小山富士夫、「西洋中

世美術史」講師吉川逸治
「考古学」「原始日本の葬制」「古代集落の諸問題」「考古学演習」助教授鏡山猛

〔公立〕

金沢美術工芸大学

「東洋美術史」教授秋山光夫、「西洋美術史」教授板垣應穂、「日本工藝史」教授北出塔次郎、教授小松森作、「紋様史」助教授米田重博、「美術概論」助教授森嘉紀

京都市立美術大学

「日本美術史概説」「作風の問題」「日本上代美術論」「彫刻史」教授佐和隆研、「美術史概説」講師上野照夫、「東洋美術史概説」「東洋美術史特別講義」講師下店静市、「西洋美術史概説」「彫刻史」助教授堀内正和、「建築工藝概論」助教授向井正也、「工藝の鑑賞」教授富本憲吉、「工藝概論」「藝術思潮史」「陶磁器工藝史」教授谷田岡次、「形態構成論」助教授長崎盛輝、「書道、書道史」教授中田勇次郎、「工藝意匠学」「近代建築工藝史」教授上野伊三郎、「抽象と再現」「日本美術史演習」講師木村重信、「文様史」講師明石国助、「南画論」講師人見勇市、「建築史」講師村田治郎、「家具沿革史」講師吉村午郎、「染織工藝史」講師龍村謙、「古代オリエントの美術」講師新規矩男、「藝術学概論」「藝術の問題」講師井島勉

大阪市立大学

「美術史」「西洋美術史」講師西垣雄太郎、「美術史」教授辻合喜代太郎、「藝術論」「宣伝藝術論」「宣伝藝術論演習」講師下店静市、「藝術論」講師張源祥、「考古

学概論」教授角田文衛、「伝承学」助教授平山敏治郎、「博物館学」「美術工藝史」教授望月信成

〔私立〕

日本大学

「藝術学部」「美学」「美術学」助教授中山公男、「東洋美術史」講師秋山光和、「藝術思想史」教授湯川制、「考古学」講師八幡一郎、講師久下司

早稲田大学

「文学部」「美術概論」「西洋美術史」「美術演習、西洋」教授坂崎坦、「考古学」講師駒井和愛、「美術考古学」教授滝口宏、「美学」「美術概論」「美術研究」「美術批評研究」助教授青柳正広、「日本美術史」「美術演習、日本」「日本美術研究」教授安藤正輝、「東洋美術史」「美術演習、東洋」教授小杉一雄、「東西美術研究」講師富永愨一、「工藝美術研究」講師中川千咲、「建築美学」教授今和次郎

多摩美術大学

「西洋美術史概説」教授板垣應穂、「西洋絵画史」講師坂崎坦、「西洋彫刻史」講師中山公男、「西洋工藝史」教授三輪福松、「東洋美術史概説」教授逸見梅栄、「東洋絵画史」講師吉沢忠、「東洋工藝史」教授渡辺素舟、「考古学」「人類学」教授大場磐雄、「美学概論」教授青柳正広

慶応大学

「文学部」「美術概論」「西洋近代美術」「西洋美術史演習、W. Müseler: Die Kunst der Welt」原典講読、H. Münsterberg: Twentieth Century Pain.

「Jung」教授守屋謙二、「美学特殊講義、ヘーゲルの藝術学」講師竹内敏雄、「美学演習、アリストテレス、詩学」講師高橋巖、「東洋美術史演習、日本絵画史上の名著」講読、等伯画説、七佛寺巡礼私記」講師松下隆章、「日本美術史概説平安時代以降」講師菅沼貞三、「浮世絵審美論」講師池井清

「考古学」「日本考古学」講師藤田亮策、「考古学演習、日本先史文化の諸問題」助教授清水潤三

明治大学

「文学部」「美術」「日本美術史」教授藤懸静也、「西洋美術史」教授岡本謙次郎、「考古学概説」「考古学各説Ⅱ」教授後藤守一、「考古学各説Ⅰ」「考古学研究法」「考古学演習」教授杉原荘介、「考古学特説」講師鈴木尚、「西洋考古学」教授杉勇、「東洋考古学」教授島田正郎

女子美術大学

「美学概論」講師中山公男、「藝術学」講師沢柳大五郎、「西洋美術史、ルネッサンス以降現代」講師坂崎坦、「西洋美術史」「西洋美術史特別講義、現代作家論」講師富永愨一、「西洋美術史、近代絵画史の成立」講師中山公男、「日本美術史、藤原時代的美術」講師久野健、「日本美術史、飛鳥時代より室町時代まで」講師永井信一、「書道史」講師麻生秀一、「考古学」講師後藤守一、「人体美学」講師西田正秋、講師中尾喜保、「工藝理論、現代造型理論」講師柳宗理

同志社大学

「文学部」「美学概論」「美学」教授園頼三「考古学実習」教授酒詰伸男、「西洋美術史概説」「藝術学概論」「美学史」教授金田民夫、「日本美術史」講師小川光暢、「日本美術史概説」講師土居次義、「工藝概論」講

師谷田閑次、「藝術思潮」講師河本敦夫、「東洋美術史」講師下店静市、「美術史特論」「西洋美術史」講師村田敦之亮

関西学院大学

「文学部」「美学概論」「美学研究演習Ⅰ」教授張源祥、「藝術史、推古時代以降」「美学講読演習Ⅱ、世阿弥、花鏡」「美学研究演習Ⅱ」「美術論」教授源豊宗、「藝術史、ギリシヤローマの造形藝術」「美学講読演習Ⅰ、W. Woringer: Abstraktion und Einfühlung」「美学講読演習Ⅲ、H. Read: Art and Society」「美術史」助教授今井清、「考古学」教授梅田良忠

主要美術雑誌色刷一覽

現代及西洋美術

作者	画題	雑誌名	号数
巖光	蝶	美術手帖	一〇三
青井辰雄	群衆の階段	美術手帖	一〇二
青木繁	海の幸(部分)	美術手帖	一〇三
青山義雄	アルプス遠望	美術手帖	一〇五
芥川紗織	イザナギノミコトの国造り	美術手帖	一〇三
浅井忠	山羊の居る風景	美術手帖	一〇三
我妻碧宇	少女	美術手帖	一〇二
石川滋彦	日比谷附近完成図	美術手帖	一〇三
伊東深水	宋磁	美術手帖	一〇二
井上長三郎	戸外は春雨	美術手帖	一〇二
猪熊弦一郎	しののめ	美術手帖	一〇二
今井俊満	さかなをとる女	美術手帖	一〇五
今村紫紅	作法	美術手帖	一〇五
宇田萩	祇園の雪	美術手帖	一〇三
梅原竜三郎	浅間の山心	美術手帖	一〇六
海老原喜之助	ナポリ風景	美術手帖	一〇五
靴屋	ボンネット	美術手帖	一〇四
江見絹子	土屋	美術手帖	一〇〇
岡鹿之助	祝いの花籠	美術手帖	一〇四
岡本太郎	コンポジション	美術手帖	一〇六
墮天	使	美術手帖	一〇六
森の掟	笑	美術手帖	一〇六

福田豊四郎	齒	染三彩	六〇七	脇田和	西瓜と貝殻	藝術新潮	六〇四	クレイ	絵模様の	藝術新潮	六〇三
福田平八郎	曙	藝術新潮	六〇四	鳥追	あらし	六〇〇	六〇七	近郊の公園	静物(最後の作品)	鳥の生氣	六〇三
多	遊鮎	心	八〇七	アトラン	鏡に向ふ東洋女	美術手帖	九〇四	グレイヴ	黄金の流れに立つ鳥	藝術新潮	六〇七
多	写生帖より三図	みづゑ	六〇三	エルンスト	鳥たちの記念像	美術手帖	六〇二	グロメール	作	みづゑ	六〇〇
多	春	雪	六〇三	アンソール	クリスト(部分)	藝術新潮	六〇二	ゲリエン	タビチの女	藝術新潮	六〇八
前田 青邨	風神・雷神の内(風神)	藝術新潮	六〇五	アイス	氷片火	六〇四	六〇四	ゴッホ	糸	アトリエ	三三三
多	京名所八題の内	六〇七	六〇七	エルンスト	愛の夜	六〇二	六〇二	ゴッホ	庭	みづゑ	五九八
多	牟礼高松	六〇七	六〇七	エルンスト	軍隊をひきいるコル	美術手帖	一〇五	ゴッホ	庭	みづゑ	五九八
多	三雲祥之助	裸	六〇三	カルツ	大	藝術新潮	六〇六	ゴッホ	庭	みづゑ	五九八
多	三岸 節子	白い家への白い道	美術手帖	オロス	テス(ホセ・クレメン	美術手帖	一〇五	ゴッホ	庭	みづゑ	五九八
多	安井會太郎	蟹と遊ぶ娘たち	みづゑ	カルツ	大	藝術新潮	六〇六	ゴッホ	庭	みづゑ	五九八
多	安井會太郎	足を洗う女	美術手帖	カンデン	赤	美術手帖	九〇四	ゴッホ	庭	みづゑ	五九八
多	安田 靱彦	紅	六〇二	カンデン	こまを遊ぶ人	藝術新潮	六〇六	ゴッホ	庭	みづゑ	五九八
多	矢野知道人	王昭君(部分)	六〇五	カンデン	休息所のある室内	美術手帖	九〇七	ゴッホ	庭	みづゑ	五九八
多	山口 薫	三津の秋	六〇三	カンデン	彫刻のある室内	美術手帖	六〇〇	ゴッホ	庭	みづゑ	五九八
多	山口 華楊	季節の哀歌	六〇四	カンデン	彫刻のある室内	美術手帖	六〇〇	ゴッホ	庭	みづゑ	五九八
多	山口 蓬春	仔馬	六〇三	カンデン	彫刻のある室内	美術手帖	六〇〇	ゴッホ	庭	みづゑ	五九八
多	山下新太郎	雪	六〇二	カンデン	彫刻のある室内	美術手帖	六〇〇	ゴッホ	庭	みづゑ	五九八
多	山本 丘人	断	六〇四	カンデン	彫刻のある室内	美術手帖	六〇〇	ゴッホ	庭	みづゑ	五九八
多	山田 仙草	北	六〇八	カンデン	彫刻のある室内	美術手帖	六〇〇	ゴッホ	庭	みづゑ	五九八
多	横山 大観	あじさい	六〇五	カンデン	彫刻のある室内	美術手帖	六〇〇	ゴッホ	庭	みづゑ	五九八
多	吉岡 堅二	雛	六〇四	カンデン	彫刻のある室内	美術手帖	六〇〇	ゴッホ	庭	みづゑ	五九八
多	萬 鉄五郎	日傘の裸婦	六〇三	カンデン	彫刻のある室内	美術手帖	六〇〇	ゴッホ	庭	みづゑ	五九八
多	枯れた花の静物	みづゑ	六〇三	カンデン	彫刻のある室内	美術手帖	六〇〇	ゴッホ	庭	みづゑ	五九八

ンケイロス	社会的完全なる保障 と全メキシコ人のた めに(壁画)部分	みづゑ	六〇四
シヤガール	銅版作	美術手帖	三三
シヤルダン	銅の鍋	美術手帖	三六
ジュ・ド・ラ・トウ	燈火の前のグラナダ のマリヤ	美術新潮	六〇七
シローニ	人物	美術手帖	六〇六
イタリ	イタリア風景	美術手帖	六〇六
イタリ	イタリア	美術手帖	五九九
スティーン	玩具をもつた少年	美術新潮	六〇四
スコット	港	美術手帖	六〇〇
スパツァハ	聖人の顔習作	美術新潮	六〇六
セイグル	風景	美術手帖	五九六
セザンヌ	サン・ヴィクトアール	美術手帖	三四三
大	水浴	美術手帖	九九
橋と木	(水彩)	美術手帖	九九
タマヨ	眠っている女音楽家	美術新潮	六〇〇
震える女	美術手帖	九七	
労働のリズム	美術手帖	一一〇	
今日のメキシコ	美術手帖	六〇三	
ダンテの神曲より	美術新潮	六〇一	
大道の薬売り(部分)	美術手帖	六〇九	
デュシャン	処女の花嫁への通路	美術新潮	六〇三
デュファイ	黒い船	美術手帖	三三六
ドラン	少女像	美術新潮	六〇五
ニコルソン	作品	美術手帖	六〇七
ニブシエル	ウイスコンシンのパ ロリの村	美術手帖	三三六
バウマイス	赤い背景の黒い岩	美術新潮	六〇七
ター	美術手帖	九七	
バゼーヌ	作品	美術新潮	六〇三
パパール	赤い西瓜	美術手帖	五九六
ピユッフエ	海辺のテント	美術手帖	六〇〇
ピエロ・デ イ・コシモ	シモネッタ・ヴェス プツチ像	美術新潮	六〇九
ピカソ	人間の喜劇	美術手帖	六〇一
三人の音楽家	美術手帖	六〇九	
女の顔	美術手帖	九三	
夫婦	美術手帖	一〇三	
デッサン	美術手帖	五九九	
若き婦人の像(VIII)	美術手帖	六〇三	
子供と男	美術手帖	九七	
ガール	汽船とオーディンシ 2	美術手帖	六六
フェルメール	ダイヤナを囲むニン フ	美術手帖	三四三
ブラック	青い敷物	美術手帖	六〇〇
ブラスコ	闘牛	美術新潮	六〇四
ブルート	月の中の山	美術手帖	六〇〇
ベラルール	人物(赤いきれを持 男)	美術手帖	九四
ポッシュ	乾草車の行列	美術新潮	六〇一
枯草の車と地獄の部 分	美術手帖	一〇三	
ポナール	地中海	美術新潮	六〇八
ボワロー	祭の日	美術手帖	九九
マリニ	馬にのる人	美術新潮	六〇二
マリニ	小舟と緑の海	美術手帖	六〇三
マルシアン	紅鶴のいる池	美術新潮	六〇〇
ミノオ	野に立つ狩人	美術手帖	六〇一
ミラー	夢みる人(水彩)	美術新潮	六〇七
ミラー	作品	美術手帖	六〇一
コンポジション	美術手帖	九	
女・鳥・星	美術手帖	一〇三	
ムンク	叫び	美術新潮	六〇五
ヤンケル	案山子	美術手帖	九三
ユバック	森	美術新潮	六〇三
リヴェラ	犬と楽器マトラー	美術手帖	六〇〇
粉をこねる女	美術手帖	一一〇	
テウアンテベックの 浴女	美術手帖	六〇〇	
リオペール	作品の部分	美術手帖	九
リオペール	作品	美術手帖	一〇三
ルドン	日の花(パステル)	美術新潮	六〇〇
若き仏陀	美術手帖	九	
マダム・ルドン	美術手帖	五九四	
白樺	美術手帖	九	
若き仏陀	美術手帖	九	
風景	美術手帖	五九五	
十字架のキリスト	美術手帖	九	
ルノアール	習作	美術手帖	三
レイモンド	ホモ・セピアン	美術手帖	九
レジエ	ステンドグラス (オーダングールの 教会)	美術手帖	三
人々と水	美術手帖	九	
色の中に飛びこんだ 人々	美術手帖	五九六	
陶彫	歩るく花	美術手帖	九
Ia Lectur	左手に羽を持った少 女座像	美術手帖	一〇三
クリストをおとしい れんとするパリサイ 人たち	美術手帖	六〇一	
ボルジュ	ポース地方のベスト	美術新潮	六〇三
ロンパール	松	美術手帖	五九六

エチプト絵画 藝術新潮 六ノ二
 亜麻の収穫、部分 一八王朝BC二四〇頃
 テーベス・ナークトの墓 美術手帖 九

パピルスにて 一八王朝BC凡そ二五〇一
 四五〇-テーベス・ア
 メネマート墓 九

福音史家シ聖マテオ
 十二世紀前半 ユー
 トットガルト国博 九三

シラザロサン・ク
 レメンテ・デ・タウ
 イ教会壁画 パルセ
 ロナのカタルーニヤ
 美術館 九

秘儀社の壁画 デイ
 オニソス宗の結婚秘
 儀の一景(部分) 九四

ポソペイの壁画
 シヤルトル本寺のス
 テンド・グラス聖母
 子(部分) 一二世紀
 中葉 九六

ラスコーの壁画 主
 洞右壁第四番目の牡
 牛の頭部(部分) 一〇三

写タルクイニヤ、
 戦車の墓 五五五

儀式に踊る男女の踊
 子タルクイニヤ
 牡獅子の墓 五

エジプトの壁画 か
 もしかをかづく人
 テーベ・メントの墓
 より 五

エジプト壁画 楽士
 たち(テーベ・ナク
 トの墓より) 五
 サン・マルタン・ド・
 フノヤール教会堂の
 ロマネスクの壁画部
 分 五九九

(よきサマリヤ人、
 シヤルトル大会堂の
 ステンドグラス
 アジャンタの壁画 六〇五)

東洋古美術

絵画

椿椿山筆水野忠啓像 楠崎宗重藏 国華 七五四
 関恩筆平沙落雁図(部分) 住友寛 七五五
 一藏
 池大雅筆山水図(部分) 出川茂藏 七五八
 冷泉為恭筆年中行事図(二月) 品 七五七
 川忠藏藏

玉瀾筆四季山水図(部分) 細見静 七五九
 藏
 駒井源琦筆遊雪梅図 小笠原千 七六一
 代子藏
 敦煌出土回鶻仏教画巻断片 天理 七六〇
 図書館藏

金剛歌菩薩図 七六一
 雲谷等の筆秋草に兎図 七六二
 東福門院入内図(部分) 三井高公 七六三
 藏

竹雲筆歲寒三友図(部分) 荻原安 七六五
 之助藏
 菱川師宣筆蹴鞠図 三彩 七六六
 見立半若淨瑠璃姫 七六七

渡辺崋山筆市川米庵像(部分) 七六八
 四州真景図(潮来花柳) 七六九
 所観校書 七七〇

客座掌記 七七一
 稚兒大師像 鳥海青児藏 七七二
 董其昌筆做楊昇没骨山水図 程琦 七七三

熾燁壁面釈迦説法図断片 フォツ 七七四
 美術研究 一八〇

吉備大臣入唐絵詞(部分) ポストン 美術研究 一八三
 美術館藏
 東寺古曼荼羅A本胎藏界(部分) 仏教藝術 二四
 不空成就如来図(石山寺多宝塔柱
 絵) 二六

大雅筆洞庭赤壁図巻(部分) ミュージ 四
 館保管
 嶺山筆鷹見泉石像 東京国立博物 四
 館保管

虚空藏菩薩像(部分) ミュージ 五
 鈴木春信画水辺 五
 婦女遊楽図(松浦屏風)部分 大和 五
 文華館藏 一六

稲葉忠次郎夫人像(部分) 雑華院 一七

彫刻

鳳凰堂本尊胎内納置阿弥陀大小児
 月輪及び蓮台(部分) 平等院藏 美術研究 一八二
 鳳凰堂 甘露呪シ 仏教藝術 二五
 ハツダの仏頭 東京国立博物館藏 アム 五

阿弥陀如来及び両脇侍像 東京国
 立博物館保管 五
 伎楽面迦楼羅(旧法隆寺献納御物) 五

工藝
 伝小早川秀秋所用猩々緋違鎌紋羅
 紗陣羽織 東京国立博物館保管 ミュージ 四
 色絵唐草紋長角皿 四
 楽茶盤 光悦作 銘不二山 五
 唐草螺鈿膳 明月院藏 五
 汝窯青磁蓮華唐草文瓶 大和文華 五
 館藏 二六

細金細工飾金具 大和文華 二六
 紅地黄彩龍濤文壺 二七
 青銅彩画扁壺 ポストン美術館藏 二七
 青銅彩画鐘 二七
 青銅彩画鈎 二七

主要美術展覧会 索引

一 月	田辺至・中村岳陵・木下孝則自薦展……………六四
	秀作美術展(第6回)……………六四
	茶道名宝展……………六五
	フランス美術展(京都)……………六五
	ブルックリン国際水彩画展日本出品
	国内展示……………六六
	跌九フオト・デッサン展……………六六
二 月	モダンアート協会展(第5回)……………六六
	藤島武二遺作展……………六六
	日本アンデパンダン展(第8回)……………六六
	一九人の作家展……………六七
	大原美術展……………六七
	小出楯重回顧展……………六七
	美術文化協会展(第15回)……………六七
	水彩連盟展(第14回)……………六七
	第3回ビェンナーレ国際美術展日本
	出品作品国内展示会……………六九
	写楽名作展……………六九
三 月	日本アンデパンダン展(第7回)……………六九
	JAN・現代フランスクリティック賞
	絵画展……………七〇
	日本美術院回顧展……………七〇
	藤田嗣治作品特別陳列……………七二
	産業工藝試験所デザイン展……………七三
	春の青龍展……………七三
	渡辺崋山展……………七三

新制作協会日本画展……………七三	
明治初期洋画展……………七三	
光風会展(第41回)……………七四	
四 月	コルビュジェ・レジェ・ペリアン三
	人展……………七五
	白鶴美術館春季展……………七六
	新指定国宝・重文特別展……………七六
	旧福島コレクシヨン展……………七六
	法隆寺献納御物特別展……………七六
	岸田劉生展……………七六
	春陽会展(第32回)……………七六
	国画会展(第29回)……………七八
	日月社展(第6回)……………七八
	平賀亀祐滯仏記念作品展……………七八
	中川一政新作展……………七八
	現代イタリヤ美術展……………七八
	日伊交換「エトルスク・ローマの壺」
	展……………八八
五 月	現代アメリカ版画展……………八八
	日本画院展(第15回)……………八九
	上村松園名作展……………八九
	大観米寿記念展……………八九
	清水六和八〇歳記念展……………九〇
	日本国際美術展(第3回)……………九〇
六 月	川端電子古稀記念展……………九六
	ヘンリー・ミラー水彩画展……………九六

女流画家協会展(第9回)……………九七	
前衛美術会展……………九七	
日本水彩画会展(第43回)……………九七	
巨匠の二〇代展……………九七	
世界ガラス展……………九七	
野口弥太郎個展……………九七	
山本豊市個展……………九八	
七 月	大平洋画会展(第51回)……………九八
	湖日会展(第24回)……………九八
	荒井竜男帰朝個展……………九九
	ブラジル現代絵画展……………九九
	日米水彩画展……………九九
八 月	ユトリロ、ヴラマンク巴里風景版画
	展……………九九
	新橋会展(第9回)……………九九
	日本宣伝美術会展(第5回)……………一〇一
	中国彫刻展……………一〇一
	清水六和八〇歳記念回顧展……………一〇一
	青龍社展(第27回)……………一〇三
九 月	二科会展(第40回)……………一〇三
	一陽会展(第1回)……………一〇九
	院展(第40回)……………一一〇
	行動美術協会展(第10回)……………一一二
	晩期の鉄斎展……………一一二
	立軌会展(第7回)……………一一四
	メキシコ美術展……………一一五
	大観米寿記念「日本画の歩み」展……………一一五
	現代イタリヤ美術展……………一一五
	石井柏亭外遊作品展……………一一五
	遷宮記念春日大社宝物展……………一二五

新制作協会展(第19回)……………一二五	
一水会展(第17回)……………一二〇	
一〇 月	荻須高徳個展……………一二三
	みつる五〇周年記念日本洋画名作
	展……………一二三
	平野コレクシヨン展……………一二四
	伝統工藝展(第2回)……………一二四
	独立美術協会展(第23回)……………一二四
	第二紀会展(第9回)……………一二八
	自由美術家協会展(第19回)……………一二九
	青山義雄滯仏作品展……………一二三
	四人の作家展(観山、碌山、平八、
	鬘光)……………一二三
	難波田竜起個展……………一二三
	グラフィック55展(第1回)……………一二三
	日展(第11回)……………一二三
一一 月	日本金銅仏展……………一二四
	旧松方コレクシヨン展……………一二七
	絵巻物名作展……………一二七
	山口薫個展……………一二七
	脇田和個展……………一二七
	三岸節子滯仏作品展……………一二八
	富本憲吉作陶45年展……………一二八
一二 月	「現代の眼」展(アジアの美術史から)
	……………一二八
	今日の新人一九五五年展……………一二八

静 物 佐野繁次郎
 高 原 の 花 佐伯米子
 裸 婦 二 重 像 宮本三郎
 秋 の 湖 栗原信
 ナ ポ リ 田村孝之介
 静 物 中谷泰
 薊 (版画) 長谷川潔
 人体抽象(版画) 北岡文雄
 壊わされなかつた礼拝堂 岡 鹿之助
 風 景 中川一政
 船を造る人 海老原喜之助
 川 沿 い の 家 鳥海青児
 花 核井浜江
 芥 子 須田国太郎
 秋 山 早 雪 小林和作
 ネットカチーフの少女 林 武
 カイユウと麒麟 児島善三郎
 草 オランダ坂にて 野口弥太郎
 む ど ほ り 井上長三郎
 ジブシー(版画) 浜口陽三
 落下する人体 鶴岡政男
 風 景 麻生三郎
 野 蕃 人 小山田二郎
 水 の 上 難波田龍起
 風景(版画) 浜田知明
 赤き橋の見える風景 安井曾太郎
 夏の阿蘇山 田崎広助
 枯木のある雪景 高田 誠
 赤 と 黄 中村琢二
 残 雪 広瀬 功
 東大風景 小野 末

静 物 仲田好江
 アタミ山手 鈴木栄次郎
 室 内 森田元子
 高原に藤匂う 辻 永
 雪 山 田村一男
 鳥 く も り 小糸源太郎
 裸 ヲダの汚辱 寺内万次郎
 ヲダの汚辱 田中忠雄
 支笏湖の秋 田辺三重松
 生活の河 向井潤吉
 爆 発 津高和一
 港 の 展 望 古 家 新
 憩 中谷ミユキ
 ベロナの噴水 矢橋六郎
 少 年 村井正誠
 銅 色 の 月 山口 薫
 母 子 像 勝 呂 忠
 人 朝妻治郎
 石 坂本繁二郎
 交響春の祭典 利根山光人
 肖 像 漆原英子
 千 人 び な 小牧源太郎
 さまよえるオランダ人 泉 茂
 りんご物語 シ 加藤 正
 閉ざされた季節 愛し合う二人は 殺された 榎 戸 庄衛
 発 (彫刻) 榎 戸 庄衛
 エチユード 山本豊市
 女 顔 石井鶴三
 少 年 新海竹蔵
 測 量 清水多嘉示

MARY HUSTED 安田周三郎
 54.7 村岡三郎
 作 品 C 番匠宇司
 作 品 植木 茂
 プラスチックのオブジェ 向井良吉
 黒 い 女 野崎一良
 若 い 女 佐藤忠良
 サ ー カ ス 本 郷 新
 生長の形態No.1 昆野 恒
 N 嬢 の 首 峯 孝
 見つけたポーズ 木内 克
 池田勘治郎、小野岩太郎、赤尾 長二郎三人展 11-16 大
 阪・阪急
 2 回 回 栗 会 俳 画 展 11-16 大
 阪・阪急
 アルファ 藝術陣結成展 13-19
 村松ギヤラー [批] 時事 19
 津高和一個展 13-17 資生堂
 [批] 美術手帖 3 月 (植村鷹 千代)、みづ多 3 月 (瀬木慎 一)、美術批評 4 月 (東野芳 明)
 米子美術家協会展 13-15 米 子市公民館
 茶道名宝展 14-23 渋谷・東 横 [記] 時事 22 (横川毅一 郎)
 ◎ 国宝 ◎ 重文
 ◎ 清拙正澄禅師墨蹟
 ◎ 墨蹟

◎ 茂古林禅師墨蹟
 ◎ 盛堂智愚禅師墨蹟
 ◎ 南堂清欲禅師墨蹟
 ◎ 南楚師說禅師墨蹟 送別語
 ◎ 虎関師鍊禅師墨蹟
 ◎ 大燈国師墨蹟
 古 筆
 ◎ 高野切
 ◎ 小野道風筆三体白氏詩卷
 ◎ 藤原行成筆白氏詩卷
 ◎ 一品経和歌懐紙 西行筆
 ◎ 熊野懐紙 寂蓮筆
 ◎ 熊野懐紙 雅経筆
 ◎ 熊野懐紙 家隆筆
 絵 画
 ◎ 寒山拾得図 因陀羅筆
 ◎ 山市晴嵐図 玉潤筆
 ◎ 高士観月図 伝馬麟筆
 ◎ 寒江独釣図 伝馬遠筆
 ◎ 山水図 伝周文筆
 ◎ 山水図 伝周文筆
 ◎ 李白吟行図 梁楷筆
 ◎ 遠浦帰帆図 伝牧谿筆
 ◎ 平沙落雁図 伝牧谿筆
 ◎ 秋冬山水図 雪舟筆
 ◎ 仿李唐牧牛図 雪舟筆
 ◎ 山水図 祥啓筆
 ◎ 布袋図 正信筆
 ◎ 八ッ橋図 乾山筆
 ◎ 茶道具
 ◎ 井戸茶碗「筒井筒」

◎ 油滴天目茶碗
 ◎ 井戸茶碗銘「越後」
 ◎ 長次郎黒楽茶碗銘「大黒」
 茄子茶入 漢作
 ◎ 片輪車螺鈿詩絵手箱
 武者小路実篤日本画展 14-20
 新宿・伊勢丹
 西山英雄、浜田観、麻田弁次日 本画三人展 14-19 東京・ 大丸
 フランス美術展 15-2月10
 京都市美術館
 新春撰技画家展 16-20 日動 画廊
 英国名画複製展 17-22 中央 公論社画廊
 行動四人展 (深見隆・前川佳 子、田中稔之、朝比奈隆子) 17-22 養清堂 [批] 美術手 帖 3 月 (針生二郎)、美術批評 4 月 (東野芳明)
 サラ (S.A.R.G.) 六人展 18-22 美松画廊
 6 回 水 彩 展 (小山良修、丸山東 美男) 18-22 資生堂
 現代洋画大家クレバス展 18- 23 上野・松坂屋
 2 回 フォール (Foil) 展 18-22 日本橋・丸善 [批] アトリエ 3 月 (舟木日夫)
 矢野鉄山個展 18-23 日本 橋・三越

沢野井信夫エッチング展 18

20 大阪・大丸

富本憲吉作品展 18—23 大

阪・阪急

ブルックリン国際水彩画展日本

出品国内展示会 19—21 プ

リヂェストン [批]時事22、読

充19(徳大寺公英)、アトリエ

3月(舟木日夫)

廻潮会展 19—23 東京都美術

館

謙慎書道展 19—24 東京都美

術館

中島弘二漫画展 19—24 三省

堂

2回長谷川潔創作版画展 20—

29 サエグサ [批]美術手帖

3月(岡本謙次郎)、みづゑ4

日(瀬木慎一)

5回安孫子萩声個展 20—24

日本橋・白木屋

フートン会油絵展 21—25 村

松ギヤラリー

現代名作品展 21—25 日動画

廊

草間弥生個展 21—31 タケミ

ヤ [批]読売2月2(植村鷹

千代)、アトリエ3月(舟木日

夫)

日本バステル画会展 21—26

文房堂

鉄斎展 21—26 東京・大丸

草光信成個展 22—27 文房堂

坂井正胤個展 22—25 大阪心

斎橋・御門

徳田俊三個展 24—29 中央公

論社画廊

薔薇会六人展 (山本丘人、杉山

寧、高山辰雄、岡鹿之助、山

口薫、脇田和) 24—31 資生

堂

ルノアール小品展 24—2月5

求龍堂 [記]東京30(岡本謙

次郎)

中山まさ子個展 24—29 養清

堂

関野準一郎版画展 25—30 日

本橋・高島屋

2回むつき会日本画展 25—30

上野・松坂屋

石瀧、八大人展 25—29 壺

中居

東京都児童作品展 25—31 東

京都美術館

書道藝術院展 25—31 東京都

美術館

瑛九フォト・デッサン展 25—

30 日本橋・高島屋 [批]読

売2月2(植村鷹千代)、美術

批評4月(瀬木慎一)、美術手

帖4月(植村鷹千代)、みづゑ

4月(東野芳明) [記] 朝日

29

1回土門拳写真個展 25—30

日本橋・高島屋 [批]東京29

(金丸重嶺)

1回赤青黄展 25—29 日本橋・

丸善

イヴォンヌ・マリ・デルボワ、

北シゲトシ二人展 25—30

大阪・阪急

初春掛軸と茶器展 25—30 大

阪・阪急

7回潮会洋画展 26—31 日動

画廊

フランス児童画展 26—30 日

本橋・白木屋 [記]朝日30

旺玄会三人展 26—31 三省堂

小野道風千六百年記念名家短冊

展 27 新宿・伊勢丹

女子美術第56回生作品展 27—

31 村松ギヤラリー

1回珊瑚光会日本画展 28—2月

2 東京・大丸

京都新鋭作家陶藝展 29—2月

6 新宿・伊勢丹

近作三人展 (鈴木信太郎、中川

紀元、鈴木保徳) 31—2月5

中央公論社画廊

平井進個展 31—2月5 養清

堂 [批]美術批評3月(瀬木

慎一)、美術手帖4月(東野芳

明)

二 月

5回モダンアート協会展 1—

14 東京都美術館 [批]朝日

、4東京6(岡本謙次郎)、毎

日9(瀬木慎一)、時事12、日

経13(福島繁太郎)、みづゑ4

月(植村鷹千代、瀬木慎一)、

アトリエ4月(舟木日夫)

藤島武二遺作展 1—27 プリ

ヂェストン [批]時事2 [記]

朝日夕刊25

春季染々会展 1—6 日本橋・

高島屋

植原成二個展 1—5 フォル

ム

集団双声作品展 1—4 資生

堂

長浜塾染色展 1—6 上野・

松坂屋

帰帆会展 1—7 東京都美術

館

野火グループ展 1—10 タケ

ミヤ

光風会会員展 1—15 光風会

館

1回一草会展 1—15 草土舎

世界各國宣伝美術作品展 1—

7 東京芸大陳列館

和田三造版画展 1—6 日本

橋・高島屋

アルゼンチン児童画展 1—15

なびす [記]朝日30

谷文晁遺墨展 1—12 渋谷・

東横

毎日商業美術展 1—6 日本

橋・三越

京都新鋭作陶展 1—6 新宿・

伊勢丹

駿雲速個展 1—10 タケミヤ

[批]美術批評4月(東野芳明)

美術手帖4月

三雲祥之助、小川マリ子二人展

2—5 日本橋・丸善 [批]

東京3(岡本謙次郎)、毎日4、

美術批評4月(岡本謙次郎)、

美術手帖4月(柳亮)、みづゑ

4月(針生一郎)

8回日本アンデパンダン展 2

—14 東京都美術館 主催日

本美術館

長岡忠三郎油彩展 2—6 日

本橋・白木屋

佐藤一章作品展 2—6 岡山・

天満堂

勅使河原蒼風展 3—13 日本

橋・高島屋 [批]読売5、東

京10(柳亮)、読売16(植村鷹

千代)、みづゑ4月(瀬木慎

一)、新建築4月(今和次郎)

デザイン構成展 3—8 京都・

朝日画廊

グラフィック集団展 4—9

銀座・松屋

山上文個展 4—5 東電サ

ビスセンター

鶴田吾郎亞欧旅の回顧展 4 |

9 東京・大丸

2 回甲陽会洋画展 4 | 8 京

都府ギヤラリー

一九人の作家展(海老原喜之助、

福田平八郎、福沢一郎、稗田

一穂、東山魁夷、川口軌外、

小牧源太郎、昆野恒、村井正

誠、小倉遊亀、佐藤忠良、徳

岡神泉、鶴岡政男、植木茂、

脇田和、山口薫、山口長男、

山本丘人、吉岡堅二) 5 |

3月13 国立近代美術館

[批]毎日22(土方定一)、三彩

66 日曜版画研究会会員展 5 | 10

文房堂

無名会日本画展 5 | 10 大

阪・三越

松雲会水墨展 6 | 10 日本

橋・白木屋

茶道名家筆蹟展 7 | 12 中央

公論社画廊

治田武個展 7 | 12 養清堂

[批]美術批評4月(瀬木慎一)

3 回成和会展 8 | 11 兼素河

[批]産経夕刊10、三彩66

梶原貫五個展 8 | 13 日本

橋・高島屋

西山英雄・浜田親・麻田弁次三

人展 8 | 13 大阪・大丸

堂本印象挿絵展 8 | 13 大

阪・大丸

中川力個展 8 | 13 大阪・大

丸

高倉一二・斎藤俊夫・水野友行

洋画三人展 8 | 13 日本

橋・三越

刑部人個展 8 | 13 高岡市・

大和

鈴木亜夫個展 8 | 13 大阪・

阪急

詩と造型展 8 | 12 大阪・大

丸

珮光会日本画展 8 | 13 大

阪・大丸

富岡鉄斎・富田漢仙展 8 | 13

京都・大丸

8 回京都工芸美術展 8 | 13

京都・大丸

中道信喜油絵展 9 | 13 美松

画廊

伊藤善油絵個展 10 | 14 資生

堂

「今日の日本のデザイン」展 10

産業工芸試験所

自由美術作家六人展 11 | 20

タケミヤ

3 回目月社小品展 11 | 16 銀

座・松阪屋

大原美術展 11 | 23 東京・大

丸 [批]東京16(岡本謙次郎)

上地瑛一郎日本画個展 11 | 19

銀座・松屋

橋本閨雲遺作素描展 11 | 16

東京・大丸

いけばな美術展 11 | 20 渋

谷・東横

8 回全日本こども美術展 11 |

16 銀座・松屋

独立美術京都研究所展 11 | 15

京都府ギヤラリー

1 回中展 12 | 17 文房堂

矢野鉄山日本画展 12 | 17 大

阪・三越

小出橋重回顧展 13 | 20 大

阪・梅田画廊

アルコブレイ展 13 | 14 京

都・アメリカ文化センター

沢田哲郎洋画展 14 | 19 中央

公論社画廊

宮原克美個展 14 | 19 美松画

廊

松島正人個展 14 | 19 養清堂

[批]時事18

15 回美術文化協会展 15 | 27

東京都美術館

[批]

朝日19 福島繁太郎

日経19

時事23 岡本謙次郎

東京24 瀨木 慎一

毎日25 瀨木 慎一

東京タイムズ3月6

柳 亮

みづゑ4月 瀨木 慎一

アトリエ4月 植村鷹千代

舟木 日夫

[受賞]

美術文化賞—井上市三郎、田

中亜木男

協会奨励賞—藪島庸二

新会員—井上市三郎、米田三

男之介、田中亜木男、石井

国義

主要出品目録

堆積・苦惱 早瀬竜江

知性の盲点

日常茶飯事

のぞみありや

おびえたるもの

冬 眠 田 中 昇

群 像

快 楽 入 来 天

プ ラ ス A

火 鳥 末 路

癡 者

狂 詩 曲 A 龍 山 恭 輔

追憶の風景 谷口克巳

昨日のポートレ

ト

今日は踊る

生 岩 間 正 男

戦 慄

死 境

悲 境

胞 鳥 香 川 勇

胞 樹

く も 小 原 勉

人 B A

人 間 A 小 原 勉

結 婚 浅 利 篤

思 春 期

作 品 A B

リンゴの里 内田慎蔵

黒 の 花

杉にかこまれた

私の村

太陽のある街

川 陽 有 都 市

女をよんでいる 太田一男

あの人はまだ立

つている

一りんの花

森の中でわ 猪飼重明

黄土の上

ふ せ よ

しまつた

漂泊された旗

作 品 B 浅 野 弥 衛

昨日のポートレ

ト

今日は踊る

生 岩 間 正 男

戦 慄

死 境

悲 境

胞 鳥 香 川 勇

胞 樹

く も 小 原 勉

人 B A

偶 像

六七

IAN・現代フランスクリチツク賞絵画展 4-23 日本橋・白木屋

朝日6(福島繁太郎)

毎日8(土方定一)

時事9

東京13(岡本謙次郎)

東京タイムズ17(嘉門安雄)

日経夕刊18(河北倫明)

朝日5、9、11、12、15、16

出品目録

プロヴァンス風 景(油絵) パブーレン
南仏の農家(黒インク素描) シ
モンチエルヌフの寺(油絵) ソーゾー
冬の風景(油絵) ベルソオ
風景(素描) シ
闘牛(油絵) プラスコ・マ
闘牛師(ペン素描) シ
ラ・ゾース風景(油絵) ボアテル
納屋(ペン素描) シ
山羊の頭(油絵) ボンゾー
アダムとイヴ(木炭素描) シ
運送船と貯蔵庫のある風景(油絵) ブーキヨン

木橋と渡漕船(黒インク素描) ブーキヨン
ラスカッス(笠子類の魚)(油絵) カルメット
ラスカッス(木炭素描) シ
リボンを結んだ少女(油絵) ガ
蜜蜂と起重機(黒インク素描) シ
ロース河岸(油絵) コッタゾオ
うつむいた裸婦(鉛筆素描) シ
ヴェニスのとばり(油絵) ダイエ
コトヒールわかしと魚(紙に油彩) シ
イル・ド・フランス風景(油絵) ジュニイ
風景(ホルドール近傍)(グワッッシュ) シ
兎(油絵) ゲリエ
鯉(色付リトグラフ) シ
肖像のある静物(油絵) ゴンザレ
鳥(黒インク素描) シ
肉屋(油絵) クロール
植物学者(ピュラン) シ
ゴレム(油絵) マリヤン
ゴレム(ペン素描) シ
積み藁(油絵) コロス・ヴァ

ブルターニュ風景(ペン素描) コロス・ヴァ
かながしら(油絵) ル・ダ
娘の肖像(木炭素描) シ
松林(油絵) ロンパール
セーヌ河の船舶修理所(素描) シ
寺院(油絵) マイエ
道(黒インク素描) シ
二人のモデル(油絵) マルゼル
ビビュムの馬場(グワッッシュ) シ
アヒルのある静物(油絵) モツテ
裸婦(鉛筆素描) シ
赤い西瓜(油絵) パパール
室内(黒インク素描) シ
やどりぎの球(油絵) シエンク
母性愛(グワッッシュ) シ
ラ・ロシエルのヨット(油絵) ヴアニエ
ノトリコの港(水彩) シ
ノルマンディ風景(木炭素描) ヴェッスロウ
イル・ド・フランス風景(木炭素描) シ
案山子(油絵) ヤンケル
船(紙に油彩) シ
絵画(油絵) セイグル
風景(グワッッシュ) シ

教会(油絵) セピール
三人の男(油絵) グログ
テーブル(色鉛筆) シ
パレリナーナ(作品(写真)) 荒木剛
風景と運動(作品(写真)) 秋山庄太郎
影と光(水彩) シ
ふたつの椅子 藤井令太郎
新しい道 福井敬一
作品(写真) 藤本四八
真夏の活気 古川昌一
千網と魚 五味秀夫
作品(写真) シ
魚 萩原英一
海 橋本義夫
雪 日原晃
台 風 広瀬通秀
帆 平松輝子
洪 水 井上孟
十字 架 伊藤禎朗
闘 争 今関一馬
二人 人 加藤文生
仲 間 鎌田和子
プロメテ 村瀬静孝
笛を吹く人 武藤久
機械体操をする子供と煙 松村禎夫
禅庭 中村道
KINDLE 斎藤正夫
グリフォンと闘う男 笹岡了一
仲 間 佐分利良夫

朝のテラス 佐々木進吉
あ い 田中 岑
風 景 筒井 丘
静 物 山下鉄之輔
オルガン 横地康国
米倉寿仁個展 4-9 東京・大丸
古玩百選展 4-13 上野・松坂屋
近世西欧工芸展 4-10 日本橋・白木屋
Uクラブ展 4-9 大阪・そごう
オリエント美術展(漢碑拓本展) 5-4月17 鎌倉・近代美術館
現代版画秀作展 5-10 新宿・伊勢丹
1回無頼派展 5-9 日比谷画廊
日本美術院回顧展 5-16
第一会場―上野・松坂屋
第二会場―銀座・松坂屋
〔批〕
東京12(久富寛)
〔記〕
毎日夕刊4
朝日8(河北倫明)
時事9
東京タイムズ10(菊地芳一郎)
毎日11(横山大観)
時事11(横川毅一郎)
朝日夕刊9(野間清六)

朝日夕刊(河北倫明)	11(野間清六)	12(河北倫明)	13()	14(野間清六)	16(河北倫明)	龍	武	水	屈	閣	御殿女中()	春秋花鳥()	秋	たそがれ()	暁	修羅道繪卷(明治33)	水	長	元祿美人()	蘇李訣別(明治34)	春宵	迷	山	横	焚	ベニスの月(明治37)	木の間の秋()	賢首菩薩()	阿房劫火()	捕われたる()	重衛
第一会場	第一会場	第一会場	第一会場	第一会場	第一会場	龍	武	水	屈	閣	御殿女中()	春秋花鳥()	秋	たそがれ()	暁	修羅道繪卷(明治33)	水	長	元祿美人()	蘇李訣別(明治34)	春宵	迷	山	横	焚	ベニスの月(明治37)	木の間の秋()	賢首菩薩()	阿房劫火()	捕われたる()	重衛
大毘古命(明治40)	流燈(明治42)	小倉山()	魔障(明治43)	四季山水()	說法()	政宗()	山	護花鈴()	五柳先生(明治45)	近江八景()	瀟湘八景()	夢殿()	霜月の頃()	松並木(大正2)	遊刃有余地(大正3)	白狐()	熱国の巻()	御産の禱()	異端()	聰幽(大正4)	弱法師()	阿弥陀堂()	乳藥供養()	京名所八題(大正5)	春雨()	らくだ()	いでゆ(大正10)	修学院村()	雪中の鹿()	訶利帝母()	
古徑	大観	観山	春草	紫紅	紫紅	大観	紫紅	大観	紫紅	大観	紫紅	大観	大観	大観	大観	大観	大観	大観	大観	大観	大観	大観	大観	大観	大観	大観	大観	大観	大観	大観	大観
樹下石人談(大正8)	京の舞妓()	茶々()	災神を焼く()	残雪の夜()	天心先生画稿(大正11)	生々流転()	夕風()	日食()	江角港()	奈良の家(昭和2)	供身像()	宵宮の雨()	鶴と七面鳥()	母子鳥韻(昭和3)	居醒泉()	洞窟の頼朝(昭4)	髪()	虫魚画巻()	海島秋来(昭和7)	菖蒲()	お座()	御室の核(昭和8)	伝書鳩()	野の花(昭和11)	牡丹花肖柏()	山頂の春(昭和12)	夏の客()	孫子勲姫兵()	海十題の中()	山十題の中()	朝暉()
芋錢	御舟	恒富	三良	大観	芋錢	大観	青樹	御舟	恒富	大観	恒富	古徑	千観	靱彦	青樹	青樹	古徑	芋錢	土牛	聴雨	溪仙	大観	草風	千観	遊亀	靱彦	大観	大観	大観	大観	
黄瀬川の陣(昭和16)	遅日()	人形と文五郎()	王昭君(昭和22)	郷里の先覚()	筆()	桃()	方広会の夜()	被褐懷玉()	大観先生()	菖蒲()	仙石原村()	或る日の太(昭和27)	平洋()	夕顔()	立秋()	猫()	美術部にて()	美術部にて()	海島秋来(昭和7)	菖蒲()	お座()	御室の核(昭和8)	伝書鳩()	野の花(昭和11)	牡丹花肖柏()	山頂の春(昭和12)	夏の客()	孫子勲姫兵()	海十題の中()	山十題の中()	朝暉()
靱彦	土牛	映月	靱彦	青樹	大観	大観	大観	大観	大観	大観	大観	大観	大観	大観	大観	大観	大観	大観	大観	大観	大観	大観	大観	大観	大観	大観	大観	大観	大観	大観	大観

橋崎鉄香個展	7-12	中央公論社画廊	1回飯田弥生個展	7-10	資生堂	三水公平個展	7-12	美松画廊	浅野竹二版画展	7-12	養清堂	9回三光会日本画展	8-13	日本橋・三越	4回棟方志功藝業展	8-17	渋谷・東横	松竹梅展(大観、玉堂、竜子)	8-12	兼素洞(批)東京10(久富貴)、日経11(河北倫明)、三彩67	藤田嗣治作品特別陳列	8-4	月3ブリヂストン(記)朝日夕刊22、毎日30(石原龍一)	古城弘油絵展	8-12	フォルム	第二紀会春季展	8-13	日本橋・三越	池田憲二個展	8-13	日本橋・高島屋	落穂察知恵のおくれた子らの作品展	8-13	渋谷・東横	杉本哲郎即座の古典画展	8-13	大阪・阪急	小西安夫油絵展	8-13	大阪・阪急	1回尚院会展	8-13	京都・大丸
--------	------	---------	----------	------	-----	--------	------	------	---------	------	-----	-----------	------	--------	-----------	------	-------	----------------	------	---------------------------------	------------	-----	------------------------------	--------	------	------	---------	------	--------	--------	------	---------	------------------	------	-------	-------------	------	-------	---------	------	-------	--------	------	-------

名取明德・片山芳樹二人展 8

12 サエグサ

阿部武久・久保庭栄二小品展

8-4月8 新宿・ヴェルテ

無声会同人南画展 8-13 日

本橋・三越

3回瀨美芙蓉門日本画展 8-13

13 新宿・三越

9回行動美術移動展 8-13

新瀨・小林百貨店

椿貞雄個展 9-12 日本橋・丸善

良寛和尚墨跡展 10-14 産経画廊

日曜画家展 10-20 大阪市立美術館

1回以白会表装展 11-23 東京・大丸

3回多摩美大卒業制作展 11-16 銀座・松屋

斎藤哲爾瀧川作画展 11-20 銀座・松屋

銀座・松屋〔批〕朝日16(瀨木慎一)東京17(岡本謙次郎)

〔記〕朝日18、アトリエ5月(舟木日夫)

植木茂造型展 11-16 銀座・松屋

松屋〔批〕東京15(今泉篤男)、みづゑ5月(植村鷹千代)、アトリエ6月(舟木日夫)

院展受賞者展 11-16 銀座・松坂屋

自由美術六人展 11-15 資生堂

鳥会同人展 11-16 東京・大丸

燦光会展 11-16 銀座・松坂屋

広田剛郎海洋スケッチ展 11-15 日比谷画廊

吉仲太造個展 11-20 タケミヤ

白光会油絵展 12-14 東電サービスセンター

清環会日本画展 12-17 大阪・三越

嵐知重瀧米作品展 12-16 日本橋・白木屋

張替真宏個展 14-20 美松画廊〔批〕アトリエ5月(舟木日夫)

土屋幸夫瀧吹スケッチ展 14-19 養清堂

古賀肇個展 14-19 中央公論社画廊

嫩葉会日本画展 15-21 東洋美術館

産業工藝試験所デザイン展 15-20 日本橋・三越

竹谷富士雄個展 15-19 サエグサ

グサ〔批〕毎日17(瀨木慎一)東京17(岡本謙次郎)、アトリエ6月(舟木日夫)

春の青龍展 15-27 日本橋・三越

〔批〕東京23(久富寛)毎日25(河北倫明)、三彩67

出品目録

夕風 川端龍子

三白 岡田

河童腕白 加納三楽

漁港 加納三楽

銀四 山崎豊

宵四 山崎豊

三子 安西啓明

T子 三容

川越志義町(連作の十四)

華の 小島鼎子

冬の 海時田直善

風の 亀井文兵衛

直石 実琴塚英一

千手 佐藤土筆

雪 佐々木邦彦

連山 結城天童

老の洞 大塚香緑

青の洞 門内未明

残中 渡辺不二根

府中 林心耳

終電 後水島裕

彩房 入江北幸

集団 渡会伊良子

千曲 川高山晴雄

毛糸の 立高

冬木 崎古野新生

大木 崎古野新生

長崎 崎古野新生

朝崎 崎古野新生

十文 横山操

裸婦と猫 堀口幸子

冬 田丹羽長春

春 光武市政輝

彩流 谷野敬一郎

食欲 白杵一穂

ゆき 鈴木光英

山 富田保和

寂 竹内広吉

谷 三浦打魚

街路 石崎昭三

うらら 岡信孝

べにがら 里見公軌

門 皆川久代

河 中島晃輪

金太郎 山口吉旺

中二階の喫茶室 英賀田憲二

早春 河本正

N埠 大塚達夫

砂底 高頭信子

雨丘 高頭信子

惜秋 高田晃瑠

土偶 村田祐彩

ガド 藍木清

白蓮 坐光寺信祥

断層 山岡鏡夫

三越 弥生会洋画展 15-19 弥生画廊

4回婢子会人形展(東京女流作家)15-20 大阪・阪急

牧野千里染色展 15-20 大阪・阪急

阿波野青龍個展 15-20 大阪・高島屋

橋本関雲素描展 15-20 大阪・大丸

高橋周桑個展 15-20 日本橋・高島屋

木下孝則個展 15-20 上野・松坂屋

1回豊島区美術展 15-21 豊島区振興会館

草間章単彩画展 15-30 神田・美鈴

「松方コレクション」国立美術館建設協賛展 16-20 国立近代美術館

代美術館 孫伯諒個展 16-17 銀座・東電サービスセンター

田中佐一郎油絵個展 16-19 日本橋・丸善

橋本次郎個展 16-19 資生堂

〔批〕みづゑ5月(植村鷹千代)、美術手帖6月(瀨木慎一)

佐野猛夫染色工芸展 16-20 京都府ギャラリー

沈雁冰歌作品展 17-21 大阪・梅田画廊

5 回美術コース展 17—21 東

京都美術館

京々会展 17—19 壺中居

8 回京都工藝美術展 18—23 東京・大丸

1 回エホック・アール油絵展 18—23 銀座・松屋〔批〕

アトリエ6月(舟木日夫)

藤田高日子日本画個展 18—22 日本橋・白木屋

院展絵画受賞者展 18—27 銀座・松坂屋

7 回三軌会展 19—28 東京都美術館

8 回示現会展 19—31 東京都美術館

5 回一線美術展 19—31 東京都美術館

31 回白日会展 19—28 東京都美術館

ロード美術展 19—31 敦寄屋橋公園

京都女流日本画展 19—24 大阪・松坂屋

9 回行動美術移動展 19—23 高岡市美術館

瀬戸陶藝作家新作展 19—31 渋谷・東横

野村東山個展 19—24 大阪・三越

子春会日本画展 19—24 大阪・美術展覧会(3月)

三越

渡辺華山展 20—4月15 東京国立博物館〔記〕東京4月6

造形版画小品展 20—24 三省堂

武蔵野美術学校卒業制作陳列 20 同校舎

黄芽会展 21—24 日本橋・丸善

古家新油絵個展 21—25 資生堂

大園章夫個展 21—26 養清堂

斎藤龍九水墨画展 21—27 銀座・松屋

鍋井克之水墨個展 22—26 中央公論社画廊〔批〕東京24

桃雄

小山田二郎個展 22—31 タケミヤ

新制作協会日本画展 22—27 日本橋・高島屋〔批〕毎日25、

朝日25、時事26(岡本謙次郎)、

森野照子個展 22—26 サエグ

五泉会洋画展 22—27 新宿・

伊勢丹

成井弘文滞欧作品展 22—27 大阪・阪急

時代瓦と拓本展 22—27 大阪・阪急

サンシユマン油絵展 22—27 日本橋・高島屋

武者小路実篤十年間の作品個展 22—26 壺中居

4 回さくら会洋画展 22—27 上野・松坂屋

樹音会展 23—31 光風会館

青尚会日本画展 23—26 弥生画廊

京都アンデパンダン展 23—31 京都市美術館〔批〕美術批評

山喜多二郎水墨画展 23—30 名古屋・丸栄

リヴィングトン女子絵画作陶展 24—28 日本橋・白木屋

3 回草人社展 24—29 日本橋・丸善

林鶴雄新作油絵個展 25—30 東京・大丸

美術文化関西グループ展 25—30 大阪・そごう

明治初期洋画展 25—4月24 国立近代美術館〔記〕朝日夕

刊25、朝日4月1、東京4月

9(岡本謙次郎)、毎日15(徳大寺公英)

河村俊子作品展 25—31 資生堂

〔批〕美術手帖6月(瀬木慎一)、美術批評6月(植村鷹千代)

現代一流美術家名士作品即売展 26—28 銀座・松屋

関西総合美術展 26—4月24 大阪市立美術館

新制作物故作家展(野田英夫、今村俊夫、中西利雄、内田巖)

藝大所蔵明治・大正名作展 27—31 東京藝大

東京藝術大学美術学部卒業制作展 27—31 東京藝大

島良一個展 27—31 日比谷画廊

3 回三枝会展 28—4月2 エグサ

草間弥生個展 28—4月2 求龍堂

宮脇公実個展 28—4月2 兼素洞

芳明、美術手帖6月(針生一郎)、美術批評6月(岡本謙次郎)

河合紀陶展 28—4月1 中央公論社画廊

建築6月(浜村順)

柳緑会人形展 28—4月3 銀座・松坂屋

レティア・グループ展 28—4月3 美松画廊

中筋幹彦グワッシュ展 28—4月5 サエグサ

10 回日本美術院小品展 29—4月6 日本橋・三越

日4月5(河北備明)

医学に関する美術資料展 29—4月10 京都国立博物館

5 回日本漆工藝会展 29—4月3 日本橋・高島屋

現代名匠茶道具展 29—4月3 新宿・伊勢丹

大河内夜日本画展 29—4月3 日本橋・三越

柳々会日本画展 29—4月3 上野・松坂屋

水谷川紫山作茶證と油絵近作展 29—4月3 大阪・阪急

1 回黒潮会展 29—4月3 京都・大丸

双全会日本画展 29—4月3 大阪・大丸

5 回未更会展 30—4月2 兼素洞

〔批〕東京4月1(久富實)

鶴岡政男作品展 30—4月5 日本橋・白木屋

〔批〕毎日4月1(瀬木慎一)、東京4月3、

アトリエ6月(舟木日夫)

6 回芸会展 30-4月2 壺中居

武林敬吉個展 30-4月2 日

本橋・丸善 [批]みづゑ5月

(田近憲三)、アトリエ6月(舟木日夫)

詩と油絵五人展 30-4月2

兼素河

41 回光風会展 31-4月15 東

京都美術館

[批]

時事4月4

日経4月5(福島繁太郎)

朝日(植村鷹千代)

毎日4月8(嘉門 安雄)

東京13 (久富 貢)

読光13 (瀬木 慎一)

美術手帖6月(徳大寺公英)

[受賞]

絵画 光風会展-国領経郎

工藝 光風工藝賞-市川芳子

工藝賞(宮入袈沙雄)

(大樋 年郎)

主要出品目録

(絵画)

古い通り(巴里)

ムーフエタル通 阪倉宜暢

二 人 西村 愿定

北 の 国 西村 愿定

退屈なふくろり 由里 明

鯛鳥の春 争笹岡了一

関

上野公園 山喜多二郎太

鳥籠新道 繁

ふくろ時計の室 金子徳衛

I 嬢 松本 正人

新宿駅附近 伊藤 四郎

街物 A 藤 四郎

夕暮 B 原 晃

花と裸婦 西尾善積

折れたラット 杉村 悳

こわれた時計 浅井 光男

椅子を配する 高宮 一栄

雪国の 小寺 健吉

雪の東山温泉 小寺 健吉

多摩川 小寺 健吉

秋 花 河井 清一

舞 花 河井 清一

もれ 大河内 信敬

手鏡 小林 真二

裸婦 寺内 萬治郎

一ノ谷新緑 辻 永

雪 小糸 源太郎

月の上る頃 有馬 三斗枝

波切風景 服部 亮英

青いトッパ 山田 新一

奈良飛火野 中沢 弘光

寄せくる波 中村 研一

静物 耳野 卯三郎

静物 耳野 卯三郎

ランブと面 牧野 司郎

カレドニア 和田 香苗

漁村風景

北朝の馬白川一郎

紫の着物 江藤 純平

三宝柑などの静物 安達 真太郎

パンなどの静物 秋元 松子

静物 A 秋元 松子

静物 B 岡平 蔵

函館港 A 舟木 徳重

函館港 B 舟木 徳重

裸婦 伊藤 悳三

画家の像 田中 実一

漁港の朝 溝江 勘二

早車 土佐 林豊夫

糸車 土佐 林豊夫

山荘 山口 猛彦

椿と壺など 笹鹿 彪

坂 樽松 正利

丘 朝比奈 文雄

人形 A 朝比奈 文雄

砂山 石橋 武治

庭の春 坂田 虎一

庭の春 坂田 虎一

庭の春 坂田 虎一

庭の春 坂田 虎一

庭の春 坂田 虎一

庭の春 坂田 虎一

庭の春 坂田 虎一

庭の春 坂田 虎一

庭の春 坂田 虎一

庭の春 坂田 虎一

庭の春 坂田 虎一

庭の春 坂田 虎一

庭の春 坂田 虎一

「粧裸婦に抱る」 柳瀬 俊雄

熱海の町 岡田 又三郎

伊豆早春 名渡 山愛順

紅型を被ぶる 庄司 栄吉

赤い帽子 南 政善

黒いタイツ 大沢 海蔵

庭内 森田 元子

コートの人像 森田 元子

婦人像 島野 重之

ヨット 島野 重之

S嬢 山下 忠平

布良早 山下 忠平

城 山下 忠平

山荘 山口 猛彦

街頭 小川 博史

パレリーナ A 小川 博史

パレリーナ B 小川 博史

パレリーナ C 小川 博史

杜(もり) 西岡 義一

静物 中条 茂

猫と娘 藤 彦衛門

新秋 高木 春太郎

南の室 清原 重以知

室の内 中島 音次郎

ネックレス 竹沢 基

熱海風景 和田 清

山景 森 桂一

風景 A 森 桂一

風景 B 森 桂一

アトリエにて 妹尾 寿信

坐つてゐる女 水上 信雄

坐つてゐる女 水上 信雄

初秋 長原 坦

黄色のカデガ 根津 荘一

霽れ 梶原 貫五

造船所風景 野平 上

新緑の街 北浜 淳

漁夫立像 桜井 慶治

裸婦坐像 桜井 慶治

母と子 桜井 慶治

春(三部作) 桜井 慶治

モテル 上島 一司

針仕事 伊藤 応久

T氏の像 伊藤 応久

椅子と幼女 市ノ木 慶治

淵瀬 反町 博彦

風景 反町 博彦

残雪 松尾 正巳

母と子の坐像 高田 正二郎

祝盤 高田 正二郎

馬の山 米本 一郎

花の山 米本 一郎

晩冬 大倉 克次

街景 大倉 克次

昭和 大倉 克次

丘 西村 喜久子

白樺 西村 喜久子

花ある日 藤井 芳子

里子の像 藤井 芳子

肖像 藤井 芳子

肖像 藤井 芳子

肖像 藤井 芳子

肖像 藤井 芳子

肖像 藤井 芳子

一本 松 小林易夫
 児島の山 守屋千之
 たそがれ 女 松浦莫章
 鶏と 女 鳥居昇
 雪の大仏殿 黒衣 鳥居昇
 読書婦人 黒衣 鳥居昇
 りぼんをつける 少女
 スタート前 西村俊郎
 村の小川 相馬其一
 小寿 鶏 鮫島利久
 かけす 鮫島利久
 かじめ焼き 大河内信敬
 西石垣にて 大河内信敬
 霞沢池畔 山本彪一
 風景 A 山本彪一
 海 B 石河彦男
 冬 辺 石河彦男
 植木 鉢久本弘一
 静物 形足代義郎
 人形 形足代義郎
 ガラス器 三尾文夫
 灰色のドア 三尾文夫
 砂丘 金沢秀之助
 時計のある静物 熊沢欽三
 窓 熊沢欽三
 雪国の魚市 大原省三
 船上の静物 高橋道雄
 窓 幸島重雄
 窓 幸島重雄
 扮 粧 山村孝太郎
 高原にて 三輪孝
 鮭 白石隆一

獲物 鈴木三五郎
 静物 岡本由郎
 洋裁 岡本由郎
 練習 山中清一郎
 冬の漁村 古屋浩蔵
 室内 荒井邦朝
 台地を望む 荒井邦朝
 小松 星野正三
 庭 星野正三
 八ヶ岳 斎藤 斎
 静物 A 花 齋藤 斎
 B 花 齋藤 斎
 鹿沢風景 A 足立真晃
 B 足立真晃
 あみもの宇城時志
 静かな漁村 池野寿彦
 画室にて 伊藤鎗一
 特別陳列
 アタミ全望 鈴木栄二郎
 佐渡の寺にて
 信州金沢村の秋
 春分の頃
 伊那の春
 ふるさとの家
 バランガ戦跡
 相州真鶴港
 真鶴より熱海遠望
 三宅克己
 サンディエゴ
 セーヌ河(1)
 (2)
 Liege
 伊豆湯ヶ島

緑陰(小石川) 三宅克己
 (植物園) 三宅克己
 ハムステッドの朝
 伊豆多賀の景
 南仏カーニエ
 イタリー(シエナ)
 静かな村(南仏)
 Dorking
 カイロ
 尾瀬洩れ日 赤城泰舒
 志摩冬日
 ギター奏つる
 中支西湖(錦帯橋)
 桐の花
 朝鮮風景
 あたみ
 雪の築地河岸
 (工藝)
 花と縞馬 山形駒太郎
 初夏 松風栄一
 木花 中村董一
 銅盤「魚」 中村董一
 染村「大皿とんぼ」 福原達朗
 陶箱 華文
 鉄壁面花挿「蟹」 中村董一
 風呂先屏風 鷺田うめゑ
 漆器「パウル映光」 武内信弘
 銅器 西村英夫
 漆額面「ビルマの子」 三輪智一

硝子鉢「顔」 一噌元治
 陶漆「黒線文花器」 三輪智一
 燭台 中村俊介
 花文 壺 久保駒太郎
 染色 額 般若侑弘
 赤黒 岩田藤七
 月かげ 黒岩田藤七
 花のあと 宮之原謙
 陶器「鉄地形花瓶」 宮之原謙
 陶器「朝霧袖花瓶」 宮之原謙
 ガラス壁面 中田満雄
 硝子花挿 歡喜の 一噌元治
 舞あんでら 奥山堤
 四月
 コルビュジェ、レジェ、ペリア
 ン三八展 1-17 日本橋・高島屋
 (批)
 東京タイムズ7 植村鷹千代
 東京7 剣持 勇
 新建築5月 渡辺 力
 アトリエ6月 舟木 日夫
 (記)
 産経3月25 川口 軌外
 産経夕刊3月27 萩谷 巖
 朝日夕刊3月30 大河内信敬
 産経夕刊3月31 大久保 泰
 産経4月1 大久保 泰

産経夕刊4月3 林 武
 時事4月4 岡本 太郎
 毎日4月5 勝見 勝
 朝日4月6 勝見 勝
 毎日4月6 勝見 勝
 産経4月7
 ソヴィエト少年美術展 1-6
 大阪・そごう
 岸田劉生遺作展 1-7 大
 阪・梅田画廊
 多賀谷伊徳個展 1-6 銀
 座・松屋 [批] 読売4月11
 (瀬木慎一)、みづゑ6月(滝
 口修造)、美術手帖6月(植村
 鷹千代)
 荒井草雨日本画個展 1-5
 大阪・梅田画廊
 花谷時子個展 1-5 大阪・
 梅田画廊
 4回五水会展 1-10 渋谷・
 東横
 黄色人種グループ展 1-10
 タケミヤ [批] 美術批評6月
 (東野芳明)
 曙光展 1-9 サトウ [批]
 美術批評6月(瀬木慎一)
 初期肉筆浮世絵展 1-30 箱
 根美術館
 山元桜月新作日本画展 1-6
 東京・大丸
 吉井忠個展 1-6 資生堂
 [批] 読売11(瀬木慎一)、美術
 批評6月(針生一郎)、美術手

帖6月(針生一郎)

1 回草友會展 1-7 草土舎

中林松太郎裸婦タロッキー個展

1-15 銀座・コーヒークラ

ブ 真鍋博個展 1-3 新居浜市

朝日屋

伊谷賢蔵個展 2-6 京都府

ギャラリ

白鶴美術館春季展(河南省安陽

殷墟殷墓遺宝展) 3-5月29

神戸・白鶴美術館

14 回創元會展 3-15 東京都

美術館

[批]

毎日8 嘉門 安雄

東京13 久富 貢

読売13 瀨木 慎一

産経14

美術手帖6月 徳大寺公英

細田洋二油絵水彩個展 4-9

文房堂

光風會員花の絵展 4-16 光

風會館

安川愛子個展 4-9 中央公

論社画廊

八木沢茂夫個展 4-9 養清

堂

袖珍作品展 4-10 大阪・フ

ジカワ

今井纏入新作個展 5-9 サ

エグサ

新指定国宝・重文特別展観

5-15 東京国立博物館

旧福島コレクション展 5-5

月1 プリヂストン

[批]

東京21、22、27 大久保 泰

(記)

朝日夕刊8 嘉門 安雄

日経9 宮田 重雄

東京タイムズ12 日本橋・高

毎日12 日本橋・高

一采社展 5-10 日本橋・高

島屋

加賀茶道工藝新作展 5-10

日本橋・三越

清瓊会日本画展 5-10 日本

橋・三越

双彩余水墨画展 5-10 上

野・松阪屋

1 回三絃會展 5-10 大阪・

大丸

松井繁油絵展 5-10 大阪・

阪急

箕村照タイル画展 5-10 大

阪・阪急

高白會展 5-10 日本橋・高

島屋

素仙洞日本画展 6-13 新

宿・伊勢丹

3 回日本彫塑展 6-5日10

東京都美術館

高野山名宝展 7-17 新宿・

伊勢丹

橋・三越 (批)毎日12、みづ
ゑ6月(針生一郎)
生沢朗個展 7-12 資生堂
[批]朝日8(植村鷹千代)、読
売11(瀨木慎一)、美術手帖6
月(植村鷹千代)
宇治平等院鳳凰堂壁面模写完成
記念特別展観 8-15 東京
国立博物館
島成團美人画展 8-13 東
京・大丸
八木正風個展 8-12 日本
橋・丸善
青塔社素描展 8-12 京都府
ギャラリ
彫刻油絵二人展 8-10 京都
市美術館
F・M・E版画展 9-18 なび
す
春の青龍展 9-14 大阪・三
越
金光珠個展 9-14 大阪・梅
田画廊
木下孝則個展 9-14 大阪・
松坂屋
岡崎祇容水彩画展 10-16 美
松画廊
法隆寺献納御物特別展 10-5
月20 奈良県立博物館
互匠會展 10-11 京都・光悅
寺
蕭燦宝個展 11-16 養清堂
仲田好江デッサン展 11-16

東京画廊 [批]毎日夕刊12、
朝日15、みづゑ6月(岡本謙
次郎)
谷沢晃個展 11-20 タケミヤ
素心會作品展 11-17 銀座・
松坂屋 [批]東京14(岡本謙
次郎)
清尚會展 11-16 中央公論社
画廊
5 回荻野康児個展 12-17 日
本橋・高島屋
春潮會絵画展 12-17 上野・
松坂屋
田中以知庵日本画展 12-17
日本橋・三越
田之口青晃・梶喜一二人展 12
-17 大阪・大丸
七番館新工藝品展 12-17
大阪・阪急
1 回日本竹藝協会新作展 12-
17 日本橋・三越
双全會展 12-17 京都・大丸
5 回森々會展 13-19 日本
橋・丸善
独立美術會員春季展 13-17
日本橋・三越 [批]朝日16、
みづゑ6月(針生一郎)
アートクラブ・グループ展No.1
(ロジェ・ヴァン・エック、岡本
太郎、杉全直、利根山光人、
昆野恒) 13-19 サトウ
[批]朝日17、みづゑ6月
(針生一郎)

宮田武彦個展 13-16 資生堂
藤田美術館春季展 13-5月8
大阪・藤田美術館
自由美術會員春季展 13-17
日本橋・三越 [批]朝日16、
みづゑ6月(針生一郎)
岸田劉生展 15-24 銀座・松
坂屋
[記]
産経3月25
産経夕刊8、9、11、12、13、
14、15、16、17、20(椿 貞雄)
産経8 座談 河北倫明
榎 貞雄
武者小路実篤
松方三郎
産経16 パーナード・リーチ
毎日21 瀨木 慎一
時事22
出品目録
人物之部
少女の像 油彩 一九二二
少女の像 油彩 一九二二
少女の像 油彩 一九二二
裸婦立像習作 木炭 一九二三
裸婦(立像) 油彩 一九二三
裸婦 油彩 一九二三
裸婦 油彩 一九二三
裸婦の顔 油彩 一九二三
エターナル・ア 油彩 一九二四
イドール 油彩 一九二四
水浴エスキース 油彩 一九二四

コンボジション △福田庸一
 空への誘い △藤井令太郎
 ふたつの椅子 △藤井令太郎
 ひとつの椅子 △木本晴三
 塔 △木本晴三
 風景 △藤島清雄
 燈台 △藤島清雄
 台所にわたり △藤島清雄
 台所の静物 △今泉洋吉
 織物工場 A △今泉洋吉
 透視 B △今泉洋吉
 天使 △今泉洋吉
 壁 △今泉洋吉
 作品 △藤原信秀
 石膏 △長森敏
 鏡と蝶 △小泉倫之助
 屏風ケ浦の夕陽 △小泉倫之助
 洋墓地新緑 △高瀬保栄
 海とあじさい △高瀬保栄
 鳥・かごの中 △高瀬保栄
 鳥・にげる △田中岑
 三人の構成 △田中岑
 風景 △田中岑
 二人の構成 △伊藤善
 小太鼓 △伊藤善
 森 △伊藤善
 たんぼの花環 △日下昌三郎
 鶏舎の家族 △日下昌三郎
 小鳥と魚 △岩月吾郎
 垂水風景 △前田清子
 高架線のある風景 △前田清子

北洋船団 藤田周平
 少女座像 △藤野竜
 公孫樹 △藤野竜
 暁 △藤野竜
 花と少女 △高楠昭子
 林の橋 △月田美都子
 鉄の羊 △伊藤勲志
 山にわたり △伊藤勲志
 静物 A △山本英子
 船の対話 △中山弥郎
 帆の踊り △中山弥郎
 夏の静物 △佐藤規子
 卓上の静物 △佐藤規子
 緑と赤のたわむ △佐藤規子
 レントニン・
 ピンクと白と黒 △佐藤規子
 政治家 △南米のダンス
 南米のダンス △アラベスク
 アラベスク △口論
 いけ花 △談話
 ニューメキシコ △パリの並木道
 ホモセピアンズ △落書き
 物質主義の未来 △落書き(薄色)
 落書き(薄色) △マンダリンと果
 籠片岡 覚

魚とたまご △八木伸子
 食卓(赤) △八木伸子
 二匹のくんせい △岸葉子
 かがみ △岸葉子
 裸婦 △田中進
 海の亡骸 △田中進
 鯨 △田中進
 パイプと煙草 △古川竜生
 新聞紙と卵 △古川竜生
 卓上雑草 △古川竜生
 赤い卓上のコップ △古川竜生
 コップにさした △古川竜生
 雑草 △古川竜生
 草の中とかげ △古川竜生
 合飲の花 △古川竜生
 コップにさした △古川竜生
 草の中 △古川竜生
 卓上ダリヤ △古川竜生
 高道 △古川竜生
 二道 △古川竜生
 風景 △古川竜生
 屋地帯 △古川竜生
 工業地帯 △古川竜生
 新春童心 △古川竜生
 乙女 △古川竜生
 滞船 △古川竜生
 作品 △古川竜生
 夜の店内 △古川竜生
 幻想的静物 △古川竜生
 魚の家族 △古川竜生
 カプリス △古川竜生
 林の中の家 △古川竜生

海明 △岡田敬
 黎明 △武井吉太郎
 窓の華 △小林ドンゲ
 悪の私 △小林ドンゲ
 レイダ △小林ドンゲ
 泣いてる私 △小林ドンゲ
 真夜中の仕事部 △小林ドンゲ
 屋中 △小林ドンゲ
 スラム街 △前田藤四郎
 住吉祭 △前田藤四郎
 明石原人の海 △前田藤四郎
 夜の白鳥 △前田藤四郎
 花と明器 △前田藤四郎
 訪れる人 △前田藤四郎
 鳥と案山子 △前田藤四郎
 銀河系 A 伝承 B △前田藤四郎
 孤影 △前田藤四郎
 横斑 △前田藤四郎
 庭の一隅 △前田藤四郎
 花 △前田藤四郎
 友古 △前田藤四郎
 地(地上の終り) △前田藤四郎
 地の果て △前田藤四郎
 地の音 △前田藤四郎
 焰(地上の終り) △前田藤四郎
 弔歌 △前田藤四郎
 弔歌(地上の終り) △前田藤四郎
 狂乱(地上の終り) △前田藤四郎
 悲しみの日 △前田藤四郎
 記憶の色糸 △前田藤四郎
 記憶の糸 △前田藤四郎
 まくろの廃棄 △前田藤四郎
 晴間 △前田藤四郎

署名 △小穴竹豊
 静物 △中谷泰
 嫁果 △南城一夫
 無花 △南城一夫
 雨 △南城一夫
 砂 △南城一夫
 大漁 △南城一夫
 構内の馬 △中隆夫
 たけのこ △小柳秀太郎
 風景 △小柳秀太郎
 にわたりの静物 △小柳秀太郎
 炎えるポイラー △山本千香子
 ボイラーの憩い △山本千香子
 湯わかし △山本千香子
 にわとり B △寺下育雄
 火薬平場 △梁瀬武夫
 街頭 △小林博次
 マキ △南川郁雄
 貨車の居る風景 △佐野正隆
 植民地の工場 △日高万典
 働く子供達 △佐々木光以
 にわとり屋 △川上尉平
 少女像 △川上尉平
 子供の髪ゆり母 △川上尉平
 海難 △長岡一敏
 療養所の庭 △松谷美枝子
 ストープのある室内 △松谷美枝子
 五ヶ月 △松谷美枝子
 佐久間ダム △市川晃
 楽屋にて △渡辺一夫
 静物 △中村徳三郎

日 月 渡辺貞一
 波止場の幻影
 道化の世界
 工場風景 水野英夫
 作品 50月見里 茂
 立木 佐々木信好
 花の園 水上民平
 蝶のとんでる
 風景
 はたをり 井上三綱
 ないしよばなし
 作品 No. 1 石橋幸雄
 マ キ橋本三郎
 馬 橋本三郎
 遊 泳 香月泰男
 山 羊 田 發
 竹のむれ 庫田 發
 花の静物 久保 守
 樹 林 日向 裕
 溪谷 川 越 昭子
 と 川 越 昭子
 魚 卓 和 田 忠志
 ガラスたち
 医療室 岡崎清郷
 人 別 所 明 芳
 作 品
 赤いヴァイオリ
 ン 林 薫 子
 雪 野 松 登
 シ C 国 松 登
 シ B 登
 シ A 横 田 忠 子
 花 横 田 忠 子
 材木おき場 平 木 勇
 静 物 河 原 健 二

人物構成 馬場保美
 樹 成 蛭沢尚
 窓 佐々木節雄
 漁港の夜 難波淳郎
 赤色の空 野田好子
 青色の空 野田好子
 岩と橋 長野静司
 大 橋 長野静司
 路 上 本 田 克 巳
 首の無い群像
 サークラス 三橋 健
 錨 つくり 三橋 健
 一 隅 末 広 禎 三
 茎によるコムボ
 ジョン 伊 藤 忠 雄
 版 画
 鷹 芥 場 新 井 健 吉
 鳥 版 画
 魚 版 画
 日和山(城崎) 川 西 祐 三 郎
 平安神宮の池
 樹の下で プノワ
 丘の上の老木
 丸太のある道
 白 鳥 関 野 準 一 郎
 或る追悼
 牡鶏をいだけ少
 女(銅版画)
 手 品 川 西 英
 アイヌの部屋
 奥入瀬 A 笹 島 喜 平
 シ B 笹 島 喜 平
 シ A 笹 島 喜 平
 猫のお化粧 稲 垣 知 雄
 船 体 C 山 中 宏

庭の瓶 岩田覚太郎
 「作品No. 6」 粟 山 茂
 花 野 津 佐 吉
 鏡 若 山 八 十 氏
 歌舞伎の印象 塚 本 哲
 城連作 光 橋 本 興 家
 佐久の家 下 沢 木 鉢 郎
 冬風の窓(浅虫)
 安倍川の富士 平 塚 運 一
 さまよえるゆた
 や人 川 上 澄 生
 洋 燈 と 女
 墓 穴(眼) 金 守 世 士 夫
 窓と人影 中 尾 義 隆
 残 雪 玉 井 忠 一
 七面鳥(A) 黒 木 貞 雄
 作 品 B 岩 見 礼 花
 郷 愁 河 野 薫
 海の幻想 河 野 薫
 カント・ポイン
 ト 河 野 薫
 にはとりに
 瓶 コンポジション
 にはとりに
 ケットとバス
 にはとりに
 にはとりに
 館 斎 藤 清
 眼 斎 藤 清
 門 斎 藤 清
 怖いおとぎ 品 川 工
 鬼ごっこ 品 川 工
 選 返 伊 藤 勉

踊 子 達 伊 藤 勉
 抱 擁 伊 藤 勉
 新 興 宗 教 中 川 雄 太 郎
 作 品 3 小 橋 康 秀
 シ 5 小 橋 康 秀
 シ 1 小 橋 康 秀
 シ A 小 谷 祐 三
 静 物 佐 藤 宏
 作 品 佐 藤 宏
 い の り 河 原 健 二
 無 題 八 木 貞 吉
 日 輪 と 微 風
 寺 院 修 理 益 田 義 信
 巴 里 ノ ー ト ル ダ
 ム 益 田 義 信
 よころびの山 畦 地 梅 太 郎
 悲しみの山 畦 地 梅 太 郎
 樹 間 高 橋 信 一
 鮮 魚 高 橋 信 一
 絵 画
 糸車「土佐夜須」 眞 垣 武 勝
 絵 を 書 く 彩 子 椿 貞 雄
 富 士 山 眞 雄
 残 雪 辻 愛 造
 塩 津 愛 造
 漁 港 大 谷 房 吉
 静 物 大 谷 房 吉
 鯛 物 大 谷 房 吉
 パンジーと壺 杉 本 健 吉
 仏 像 杉 本 健 吉
 大 和 風 景 杉 本 健 吉
 サンプルイ晩秋 宮 田 重 雄
 恩師細谷教授像
 モンマルトル春
 昼 海 大 淵 武 夫
 太 海 大 淵 武 夫

朝 海 大 淵 武 夫
 波 日 葵 會 宮 一 念
 向 エニス落陽 益 田 義 信
 ヴエニス落陽 益 田 義 信
 ローマ夕照
 朝 富 士 柏 木 俊 一
 春 富 士 池 辺 貞 喜
 花 山 池 辺 貞 喜
 遊 蝶 花 宮 木 薫
 シクラメン A 馬 越 辨 太 郎
 リンゴ A 馬 越 辨 太 郎
 静 物 三 大 森 啓 助
 シ 一 三 大 森 啓 助
 シ 二 三 大 森 啓 助
 春の夢の海 長 谷 川 春 子
 滝 と 馬 松 木 満 史
 裸 婦 山 本 万 司
 銀行の廊下 原 奈 良
 雨 早 川 勲
 春 近 丘 石 野 隆
 少 女 河 内 忍
 或る風景 島 雄 た け し
 「キリスト」のあ
 る静物 藤 田 将 文
 はく製の鳥 高 木 国 蔵
 魚 福 井 勇
 F 嬢 原 精 一
 黒 衣 少 女 原 精 一
 裸 婦 原 精 一
 裸 婦 原 精 一
 女 と 竹 馬 吉 田 久 雄
 裸 婦 近 馬 治
 う し 加 藤 勝 造
 鳥 人 高 橋 美 則

さくらは山岡登喜男
 おたすけ坂田節夫
 小さいモデル吉田畔夕
 木八木常治
 光る道山崎一
 思考山田慶次郎
 流動物山
 山を下だる大山下喜久雄
 中勘助氏吉川富三
 跨線橋酒井嘉也
 静物広中久五郎
 裸婦と工場島常武
 日のめ淵上貞子
 動力西村赫
 神戸風景関口五郎
 ミシン宮沢歳男
 窓鬼海正夫
 高揚する不安栗橋正次郎
 伊勢港の朝中井脩
 春(雨馬)井口賀素己
 塚小畑忠男
 工場の風景松尾義美
 青池佐藤誠
 冬久保義春
 画像(己)久保生夫
 風景横光春実
 階上窓外人杉山昌三九
 野のり宮下明
 にわとり長沢久江
 裸婦安田誠道
 手袋森本三郎
 蒼氓野光
 散歩渡辺達雄

運河稲田俊志
 静物茂田滋夫
 尼山信一
 スタンドパニー溝山美智子
 案山子福井正治
 花重延瓊子
 雑木のかげ佐藤哲夫
 卓影山里永吉
 風影荻野和俊
 牛骨小田原龍生
 夜倉野本健一
 売地の倉保坂泰夫
 白い橋浜田羊
 萌春譜北村幸子
 風景小口俊司
 赤い土器山本貞
 工部風景小川悦子
 港工学部風景杉井清二
 屋根石田琴次
 作鏡の中の白い室吉留要
 内鏡の中の白い室菅原昭一
 裸婦村上保雄
 池仁平有美
 基地の建物川原美保子
 雪による作品矢岡勲
 芦屋風景中村米太郎
 段々畑春色鈴木坂治
 網々外風景張替正次
 郊の子供青木一美
 夜の布工場岡新市
 アマリリスのある静物山寺重子

牛と牛一二三富森坦二
 風倒木鹿毛正三
 風景景柏木房太郎
 海の幸黒原和男
 壺とごぼん中山尚子
 角の家野村真一
 風景森井孝敏
 視詰める福田隆三
 漁船砂丘宮本安
 鳥寄せ松田れい子
 鳥小屋の夜中島宣矩
 作品師石原宏策
 写真真師三原三丸
 作品品三戸了一
 風景品金子三蔵
 シ景B A
 シ寂のこされた二人妹尾昭
 シ桜は花ざかり小山田敏子
 シ海のの詩木村正
 シ少女とひまわり吉崎正己
 シ殺しした伏木田光夫
 シ坂上の街鶴田昌司
 シ老者の哲理関谷一夫
 シ影機の上は雑然と清水光子
 シ机の上は雑然と清水光子
 シ女たち浦野汎人
 シ春たち平田勝規
 自画像中村和子
 ビーチパラソル像林建樹
 と人

網を繕ふ人有馬周三
 静物北浦愛子
 魚羽田信弥
 残照中島つとむ
 開かない門櫛田勇
 精錬所高橋立
 住宅の群神原仁
 無指向な韻律丸本耕
 職を待つ人々梅宮馨四郎
 十字による作品山本耀也
 白い家と森有海庄門
 牛と女大貫梯二
 馬焼壁吉島鉄井
 白い焼壁吉島鉄井
 想春譜河村千代三
 セロ弾き吉村覆二郎
 漁師の死矢柳剛
 静物竹重弘
 静日平塚運一
 水槽石井照
 水槽B
 七面鳥渡川栄志
 水辺に遊ぶ岡島吉郎
 風室内人物土屋勝雄
 樹根尾畑洋子
 さまよえる屍毛利安夫
 静物南風原朝光
 魚藍(寧鳩)村上巖
 伽藍(斑鳩)村上巖
 二月堂

スツエルビーニ小林敏夫
 像(春装)女子大学
 風景津和野卓良
 兎のある静物衛藤寿一
 壺と花村上芳子
 南仏カーニユの島内きみ
 家ルクサンブル
 の並木
 パリの街角
 南仏カーニユの庭
 庭の広告塔
 パリの初冬
 パリの初冬
 モンパルナスの花屋
 南仏カーニユ
 パリの裏街
 ルクサンブル公園
 冬枯の梢宮芳平
 食卓の少女松本百司
 女北村綱義
 二人
 裸婦
 花の青木達弥
 春の花高島文子
 ガラスの静物市川晃子
 静物新宮基弘
 サークラス石井豊太
 ぼろく塚本新治
 知らぬ石井佐一
 何も云わない

爐 里三枝茂雄
 聖 夜 米山博子
 ラムプと針金 菅原和夫
 お化屋敷 花井八郎
 家 山口唯男
 静 物 小野通明
 コップの中の花 小林英吉
 北国の人 火遠藤未満
 野 火 藤未満
 雲と 芒 福留章太
 五輪塔 福留章太
 雉子 福留章太
 朝の鳩 小館善四郎
 冬の少女 小館善四郎
 撃れた海鳥 小館善四郎
 静 物 中村博
 肘 つく 女菊地辰幸
 S の 顔 赤川德行
 風 景 赤川德行
 ス ト ー プ 吉田勇
 ト ロ ッ コ 杉本賢司
 造 船 場 杉山茂
 魚 高瀬捷三
 フライパンのあ
 る静物 野田或男
 阪神パーク 亀井貞雄
 静 物 金子嘉一
 明るいアパート 渡辺律吉
 緑 景 富田民治
 雪 解 橋野富彦
 黒い円卓 辻清子
 アンドレアスV 福井敬一
 跡 誕生

あげしお。福井敬一
 野に立つ男。鈴木正二
 太陽と娘 鈴木正二
 ほた山と夫婦 細谷重雄
 白 い 壺。細谷重雄
 パイプのある静物 井上善教
 は な 井上善教
 と 静物 清水咲子
 石膏像のある静物 清水咲子
 二人の女 松本一夫
 菊の ある人物 木原義子
 鏡の ある人物 島川隆介
 花のある風景 松村孟
 木のある風景 百瀬勇
 二人ねむる 岩尾秀樹
 廃 墟 上田清一
 早春六甲 A。上田清一
 枯草と六甲 上田清一
 水田と六甲 上田清一
 研 山 秋 木下勤二
 コタンコルカム 能登正智
 イ 農 器 具 能登正智
 人 と 人 黒沢晋子
 盲 啞 院 竹内昭吾
 建物群像より作 品 竹内昭吾
 六甲 早春。沢野岩太郎
 雨前六甲 沢野岩太郎
 静 物 徳沢隆枝
 花とうさぎ 高野政志
 自 画 像 山野いく子
 静 物 富岡令子

物と影 (野原ニテ) 藤本俊子
 物と影 (静物) 藤本俊子
 白 い 船 日野原克磨
 夜 (黒い蛾) 原田成大
 貝ガラと赤い蛾 原田成大
 牛と遊ぶ子等。尾田 竜
 放 牧 尾田 竜
 静 物。二見利節
 タンポポ 二見利節
 静 物。小泉 清
 臥 裸 小泉 清
 裸 婦 小泉 清
 風 景 小泉 清
 月の話 第五話 田中美知子
 月の話 第二話 田中美知子
 ケ ー ス 江坂清作
 落 葉 林 一美
 空 景 渋谷円吉
 風 景 田口光男
 花 と 窓 田島茂
 建 物 鈴木愛子
 風 景 A 川村浩章
 太陽のある丘。音部幸司
 瀬 戸 音部幸司
 崖 戸 音部幸司
 石塊の 景 栗林今朝男
 庭 景 高橋佐太郎
 七輪など 持田享一
 南の島(真夜中) 松永市雄
 裸 婦 岡部 勇
 森田義男

小鳥と子供 渡辺真利
 切 株 斎藤光孝
 波 切 岩田和子
 山 (夏) 原田五郎
 鶏小屋の美亜子 中原元次郎
 鳥 禽 凶 淵上 巍
 人 物 中村英子
 静 物 大倉昭吾
 枯れた向日葵。宗像逸郎
 赤 い 実 多賀勝代
 岩 木本博己
 ハリスト教会 大隅永智
 裸 婦 石川秀太郎
 春の善福寺風景 川田一文
 夜の 静物 内ヶ崎光枝
 東方緞通展 19 | 5月22 京都
 国立博物館
 春の青龍展 19 | 24 京都・大
 丸
 3 回人形博覧会 19 | 24 日本
 橋・高島屋 (記) 産経 3月25
 大内田茂士個展 19 | 24 日本
 橋・三越
 光風会員の風景展 19 | 30
 光風会館
 6 回日月社展 19 | 24 日本橋・
 三越
 村田實史雄個展 19 | 22 資生
 堂 (批) 朝日 22、美術手帖 6
 月 (瀬木慎二)、みづゑ 6月 (徳
 大寺公英)
 高須鞆子個展 19 | 24 三省堂

(批) アトリエ 8月 (中山巍)
 徳力兄弟版陶藝展 19 | 24
 日本橋・高島屋
 小川千鶴、清原齊日本画二人展
 19 | 24 上野・松坂屋
 岡本為治新作陶展 19 | 24 日
 本橋・三越
 クロイド岡本作品展 19 | 24
 日本橋・高島屋
 斎藤徳三郎個展 19 | 23 サエ
 グサ
 梶喜一個展 19 | 24 東京・大
 丸
 関西水彩画協会会員展 19 | 24
 大阪・阪急
 土方久功彫刻個展 20 | 23 日
 本橋・丸善 (批) 朝日 22、美
 術手帖 7月 (岡本謙次郎)、み
 ゑ 6月 (宇佐見英治)
 6 回彩尚会展 20 | 23 壺中居
 平賀龜祐滯仏記念作品展 20 |
 28 プリヂェストン
 (批)
 毎日 26 今泉 篤男
 (記)
 東京 20
 朝日 21 原 勝郎
 日経 25 嘉門 安雄
 時事夕刊 25
 春の野外制作彫刻展 20 | 5月
 10 日比谷公園
 獲人会展 20 | 25 米子・駅前
 ギャラリー

現代新人展 20-27 銀座・折込ビル
 方君壁絵画展 20-26 京都・朝日ギャラリー
 3回羽藤馬佐夫個展 21-25 産経画廊 [批]アトリエ7月 (舟木日夫)
 自由美術九人展 21-30 タケミヤ
 六大浮世絵師名作展 21-30 日本橋・白木屋
 現代の油絵六人展 21-5月1 酒田・本間美術館
 アート・クラブ・グループ展 No.2 (吉仲太造、河原温、加藤正、池田竜男、須賀通泰)
 22-28 サトウ [批]みづゑ 8月(滝口修造)
 全国陶藝展 22-29 東京都美術館 [批]日本美術工藝6月 (観塔楼)
 3回龍土会展 22-27 銀座・松屋
 ウェルデール・ペアー個展 22-25 兜屋
 イタリア・ベネチアン・ガラス展 22-30 和光 [記]朝日 25
 黒田重太郎個展 22-26 京都府ギャラリー
 古川昌一個展 23-26 銀座・資生堂
 宇治山哲平展 23-28 フォル

ム [批]アトリエ7月(舟木日夫)
 直原玉青日本画個展 24-28 大阪・三越
 利根山光人リトグラフ展 24-30 文房堂 [批]みづゑ8月 (針生一郎)
 永田力個展 24-30 美松画廊
 つちかい展 24-30 草土舎
 3回造型集団展 24-29 村松ギャラリー
 9回流形派遣造形展 24-28 日比谷画廊
 福原達朗作陶展 25-26 東電サービスマスター
 東山魁夷新作展 25-28 兼素洞 [批]東京26(久富寛)、日経26(河北倫明)、毎日28(鈴木進)、三彩67
 角浩個展 25-30 養清堂
 中川一政滞欧スケッチ展 25-30 サエグサ [批]朝日29(河北倫明)、東京29(今泉篤男)
 ムーア・アルムキスト二人展 25-30 中央公論社画廊
 新制作選抜展 26-5月1 渋谷・東横 [批]朝日28、新建築7月(杉準一)
 2回レアララウンド油絵展 26-5月1 大阪・阪急
 朔日会々員展 26-30 産経画廊

宋磁名品展 26-5月1 日本橋・高島屋
 武者小路実篤作品展 26-5月 1 上野・松坂屋
 中川一政新作展 26-5月1 日本橋・高島屋 [批]朝日29(河北倫明)、東京29(今泉篤男)
 清水良雄遺作展 26-28 藝大陳列館
 15回日本木彫会展 26-5月1 日本橋・高島屋
 伊東翠陶藝展 26-5月1 日本橋・三越
 現代イタリア美術展 26-6月12 鎌倉・近代美術館 [批]朝日11(土方定)、東京23(岡本謙次郎)
 今井繁三郎個展 27-30 銀座・資生堂
 アルファ中部連合展 27-5月 1 名古屋・愛知県美術館
 日本人形美術院展 28-5月3 新宿・伊勢丹
 1回六合会展 28-5月3 大阪・高島屋
 新しいポスター展 28-5月3 日本橋・丸善
 淡島雅吉ガラス個展 29-5月 4 東京・大丸 [記]読売29、毎日30
 日米抽象美術展 29-6月12 国立近代美術館 [批]朝日6

(植村鷹千代)、東京20(岡本謙次郎)、産経6月3(三輪福松)、新建築7月(浜村順)
 行動美術全関西展 29-5月8 大阪市立美術館
 青桐会日本画展 29-5月8 渋谷・東横
 日伊交換「エトルスク、ローマの壺」展 29-5月19 大阪市立美術館
 京展 29-5月18 京都市美術館
 五月
 A・G展 1-3 美松画廊
 麗麗社展 1-12 東京都美術館
 童研展 1-6 日比谷画廊
 岩佐又兵衛展 1-15 箱根美術館
 日本初期洋画展 1-5 大阪・フジカワ
 荒井草雨個展 1-5 大阪・梅田画廊
 デモクライト展 1-5 大阪・梅田画廊 [批]美術批評8月 (中村義二)
 小溝一二郎彫塑個展 2-7 文房堂
 浜田信ハルビン風景個展 2-4 日本橋・丸善 [批]東京タイムズ1

古川吉重個展 2-7 サエグサ [批]美術手帖7月(東野芳明)
 中川藤次郎滞欧作品展 2-5 資生堂
 2回片谷隼子個展 2-7 養清堂 [批]みづゑ8月(東野芳明)
 小玉光雄個展 2-7 中央公論社画廊 [批]美術手帖7月(徳大寺公英)、みづゑ8月(東野芳明)
 武蔵野会展 3-8 日本橋・三越
 現代アメリカ版画展 3-15 ブリヂストン [批]朝日7(嘉門安雄)
 9回豊心会日本画展 3-8 上野・松坂屋
 2回サンシュマン展 3-8 日本橋・高島屋 [批]東京6(岡本謙次郎)
 佐原公明水彩画展 3-8 大阪・阪急
 宮川富佐子小品展 3-8 大阪・阪急
 忘れられた子らの作品展 3-8 渋谷・東横
 8 渋谷・東横
 群青会展 3-10 東洋美術館
 絵更沙展 3-11 銀座・松屋 [記]毎日11
 世界学童美術展 3-13 酒田・本間美術館

岩田藤七新作硝子器展観 3

8 日本橋・高島屋〔記〕
読売6、時事夕刊9(大島隆一)

6 回画入展 4-17 東京都美術館

15周年記念日本画院展 4-18

東京都美術館〔批〕時事夕刊11、東京タイムズ12(田近憲三)、東京14

七人展 4-7 美松画廊

21回東光会展 5-18 東京都美術館〔批〕時事夕刊11、東京タイムズ12(田近憲三)

和田徹、館石昭、宮原武三人展

5-9 銀座・村松画廊

「小さい画家たちの家」の展覧会

5-10 日本橋・丸善

吉村益雄個展 5-10 小倉・マヤ画廊

1 回形象派美術展 5-7 名古屋・愛知県美術館〔批〕美術手帖11月(植村鷹千代)

アイトクラブ・グループ展No.6

(藤沢典明・平井進・中井幸一、三井永一、建島寛造) 6-12

サトウ〔批〕朝日10、読売11

(瀬木慎一)、美術手帖7月(瀬木慎一)、みづゑ8月(徳大寺公英)

春季日本画展 6-11 東京・大丸

石井弥一郎個展 6-10 産経

画廊

2 回東京アド・アイト・デイレクターズクラブ展 7-10 資生堂

木竹工藝・瀬戸陶藝展 7-13 新宿・伊勢丹

現代日本美術工藝展 7-15 日本橋・三越〔批〕毎日10、産経10、時事夕刊12

日本伝統工藝無形文化財展 7-15 日本橋・三越〔批〕産経10、東京13(岡田誠)

併今昔展 7-12 日本橋・白木屋

5 回欧米商業美術展 7-15 日本橋・三越〔批〕東京タイムズ7(勝見勝)、朝日12

アンデルセン生誕記念童話の本と童画展 7-15 新宿・伊勢丹

双彩会水墨画展 7-12 大阪・松坂屋

猪熊弦一郎個展 8-15 名古屋・丸栄

光風会展 9-16 大阪市立美術館

オノサト・トシノブ展 9-14 美松画廊〔批〕アトリエ8月(舟木日夫)

古沢岩美個展 9-14 養清堂

矢野景川志野茶碗展 9-4 東京画廊

佐野猛夫染色工藝展 9-16 大阪・高島屋

中川一政新作展 10-15 大阪・高島屋

八木一夫新陶藝展 10-15 大阪・梅田画廊

12 回東丘社展 10-15 京都・大丸

17 回連袖会展 10-15 日本橋・三越

大森商二個展 10-14 フォルム

モダンアート研究会選技展 10-18 文房堂

フランス児童画展 10-15 新宿・三越

福島コレクション展 10-30 倉敷・大原美術館

谷野圭一個展 10-15 京都・大丸

楢原健三個展 11-14 資生堂

〔批〕朝日14

小山田チカエ個展 11-20 タケミヤ〔批〕美術手帖7月(瀬木慎一)、みづゑ8月(滝口修造)

後藤豊彦個展 11-14 日本橋・丸善

日本民藝展 11-21 上野・松坂屋〔批〕毎日13

日本民藝館展 13-18 東京・大丸

二科会京都作家展 13-17 京都府ギャラリー

上村松園名作展 14-22 渋谷・東横〔記〕朝日夕刊13、毎日夕刊15、東京18

大観米寿記念展 14-29 銀座・松屋

〔批〕

産経17 横川毅一郎

朝日17 河北倫明

東京21 久富寛

読売6月8 今泉篤男

〔記〕

毎日夕刊15

朝日15 (天声人語)

朝日夕刊22

4 回創作工藝展 14-21 和光

横田仁郎タイ・インド風景風俗画展 14-18 日本橋・白木屋

〔記〕産経16(横田仁郎)、産経11

1 回ひこばゆ展 15-21 美松画廊〔批〕朝日20、みづゑ8月(針生一郎)

アジア・アフリカ珍奇人形展 15-6月11 産経会館6階

〔記〕産経16(西沢笛敏)

桃山美術展 15-29 酒田・本間美術館

7 回島会展 16-21 日本橋・丸善

宗達水墨画展 16-21 壺中居

アイトクラブ・グループ展No.7

(オノサト・トシノブ、川端実、北代省三、宇治山哲平、青井辰雄) 16-21 サトウ

〔批〕朝日20、みづゑ8月(瀬木慎一)

中川力個展 16-17 丸の内・工業倶楽部〔批〕朝日20

晴日会展 16-19 資生堂

石井彦雄個展 16-21 養清堂

〔批〕美術手帖7月(瀬木慎一)、アトリエ8月(舟木日夫)

1 回灘波淳郎小品展 16-21 横浜・喫茶店ハワイ

浮世絵と現代木版画展 17-22 渋谷・東横

朝倉摂・佐藤忠良・中谷泰三人展 17-21 サエグサ〔批〕朝日20、みづゑ8月(針生一郎)

光風会会員事務所展 17-22 光風会館

日本広告展 17-22 日本橋・三越

木内広個展 17-21 フォルム

〔批〕朝日20、美術手帖7月(瀬木慎一)

加藤溪山作陶展 17-22 日本橋・高島屋

長谷川昇個展 17-22 日本橋・高島屋〔記〕産経17

日本美術協会展 17-22 日本橋・三越

宇田弥郎京洛八題日本画展 17-22 日本橋・三越〔批〕産

経21

彩光会染色展 17—22 上野・松坂屋

清水六和八十才記念工芸美術展 17—22 京都・大丸

日比野近三染色工藝展 17—22 日本橋・高島屋

鳥同人展 17—18 東電サービ

スセンター

10回燦燦社記念展 19—22 浜松市立図書館

3回日本国際美術展 20—6月 東京都美術館

12 東京都美術館

毎日19 植村鷹千代

20 宮本三郎

25 嘉門安雄

26 徳大寺公英

27 滝口修造

31 土方定一

6月1 富永惣一

2 田近憲三

3 阿部展也

7 今泉篤男

9 河北倫明

10 土方定一

14 三輪福松

15 福島繁太郎

産経26 植村鷹千代

日経31 植村鷹千代

朝日31 植村鷹千代

東京タイムズ31 和田定夫

時事夕刊6月1 今泉篤男

東京6月8 今泉篤男

毎日29—受賞批評 (記)

毎日4月4 福島繁太郎

4 福島繁太郎

13 福島繁太郎

14 福島繁太郎

27 福島繁太郎

29 福島繁太郎

5月2 福島繁太郎

6 福島繁太郎

11 福島繁太郎

12 福島繁太郎

18 福島繁太郎

19 福島繁太郎

20 福島繁太郎

21 福島繁太郎

22 福島繁太郎

23 福島繁太郎

24 福島繁太郎

25 福島繁太郎

26 福島繁太郎

27 福島繁太郎

28 福島繁太郎

29 福島繁太郎

6月1 福島繁太郎

2 福島繁太郎

3 福島繁太郎

毎日20 座談

植村鷹千代

富永惣一

土方定一

〔受賞〕

(日本の部)

最優秀賞 脇田和

佳作賞 海老原喜之助、村井

正誠、高島達四郎、福田豊

四郎

(外国の部)

外務大臣賞 ペリクレ・ファ

ツチニ

文部大臣賞 カルズ

東京都知事賞 ベン・ニコル

ソン

毎日新聞社賞 ピーター・ル

バルダ

出品目録

アメリカ

八角形の校舎

アンドリユ

・ワアイス

チャール・バ

ーチフイル

ドール

雨にうたれた柳

ハンズ・ホフ

マン

黄色い水差

ヤコブ・ロー

レンス

夜ごと

ルイス・ガリ

飛行家Zoo

ライデンにて

ウイリアム・

パーマー

幻想の風景

アドルフ・

ゴットフリ

テイスの世界

セリガ

黄金の流れに立

モリス・グ

つ鳥

レイヴス

西の空

マーク・トビ

イ

彼等は何か見付

ジョージ・グ

ロックス

けた

エドワード・

ホッパ

パメット河の家

ホッパ

松の木

グレゴリオ

プレストビ

ノ

風景

ルイス・シャ

ンカー

習作

ジョーン・ヘ

リカー

防波堤

インズ・ジョ

ニス トン

筆跡 Zoo

ジミー・エル

ンスト

太陽の枝

ジョーレン

フアレン

ハードハックか

静物

G・カミエ

漁船

ルイ・クレス

シュザンヌ

・コック

花台

ジュリアン

クレタンス

渴

ロベール・ク

老

ロー・ドラ

葵花色一緑

ロー

老嬢

レオン・ドヴ

オワ

ラドブ湾(アン

トワー)

J・J・オスレ

マドリッドの

ボーイ

マリイ・オ

ヴェ

作品 Zoo

アンリ・ケレ

ル

ブラハンソン風

シャルル・ル

景

アンリ・ロ

ローマ・ポポロ

広場の海

ジュラン

北の海

パロン・オプ

ベルギー

静物

G・カミエ

漁船

ルイ・クレス

シュザンヌ

・コック

花台

ジュリアン

クレタンス

渴

ロベール・ク

老

ロー・ドラ

葵花色一緑

ロー

老嬢

レオン・ドヴ

オワ

ラドブ湾(アン

トワー)

J・J・オスレ

マドリッドの

ボーイ

マリイ・オ

ヴェ

作品 Zoo

アンリ・ケレ

ル

ブラハンソン風

シャルル・ル

景

アンリ・ロ

ローマ・ポポロ

広場の海

ジュラン

北の海

幻想のモデル

メイルス

ゴシック風の橋

シャルル・ス

(マリンズ)

ウインコッ

フランダーズの

ヴァン・ド

招使

ジャン・ヴァ

鴨

ジャン・ヴァ

アラビア市場

ジャン・ヴァ

メンス

ブラジル

ジェラルド・パロス

彫刻家

ウイリアム・ギア

構図

アルド・ボナ

彫刻の構想

ギア

構図

アルド・ボナ

黒い幹

ギア

謝肉祭

ソ・アイレス

彫刻のある室内

ギア

二重写の形

サムソン・フレクソル

古い門柱

ギア

二重写のフォルム

サムソン・フレクソル

工業都市

ギア

ブルーの創作

ラムロ・マートインス

工業都市

ギア

構図

イヴァン・フェレイラ・セルバ

アンコートの歩道

ギア

等しい測定による構成

イヴァン・フェレイラ・セルバ

マーケット広場

ギア

サーカス

アレフレド・ヴォルピ

作

ギア

家屋

アレフレド・ヴォルピ

トレンクローム

ギア

魔術

リヴィオ・アブラモ

アカマリ

ギア

祭

リヴィオ・アブラモ

ムーンストーン

ギア

喪の家(1)

カール・ハイ

室内の日光

ギア

彫版

アルトゥール・トレド・ピザ

広場の

ギア

影版

アルトゥール・トレド・ピザ

原色の中のブルーの渦

ギア

夏

ウイリアム・ギア

色彩音楽

ギア

イギリス

ウイリアム・ギア

赤と緑の構図

ギア

庭

ウイリアム・ギア

患者の帰宅

ギア

夏

ウイリアム・ギア

誰のいる静物

ギア

イギリス

ウイリアム・ギア

アプストラクト

ギア

夏

ウイリアム・ギア

アプストラクト

ギア

イギリス

ウイリアム・ギア

アプストラクト

ギア

夏

ウイリアム・ギア

アプストラクト

ギア

イギリス

ウイリアム・ギア

アプストラクト

ギア

夏

ウイリアム・ギア

アプストラクト

ギア

美術展覧会(5月)

人 体 (赤と黒)

ウイリアム・スコット

海に面した黄色い部屋

ギア

恋の沙漠

ギア

版 画

ギア

打球

ギア

アンボアズの市場

ギア

電 光 者

ギア

版 画

ギア

版 画

ギア

版 画

ギア

版 画

ギア

版 画

ギア

版 画

ギア

版 画

ギア

版 画

ギア

版 画

ギア

版 画

ギア

版 画

ギア

版 画

ギア

版 画

ギア

版 画

ギア

版 画

ギア

版 画

ギア

版 画

ギア

版 画

ギア

版 画

ギア

版 画

ギア

構 図

ギア

構 図

ギア

構 図

ギア

構 図

ギア

構 図

ギア

構 図

ギア

構 図

ギア

構 図

ギア

構 図

ギア

構 図

ギア

構 図

ギア

構 図

ギア

構 図

ギア

構 図

ギア

構 図

ギア

構 図

ギア

構 図

ギア

構 図

ギア

構 図

ギア

構 図

ギア

構 図

ギア

構 図

ギア

構 図

ギア

構 図

ギア

構 図

ギア

構 図

ギア

構 図

ギア

構 図

ギア

構 図

ギア

構 図

ギア

構 図

ギア

構 図

ギア

構 図

ギア

構 図

ギア

構 図

ギア

構 図

ギア

構 図

ギア

構 図

ギア

構 図

ギア

構 図

ギア

構 図

ギア

構 図

ギア

構 図

ギア

構 図

ギア

構 図

ギア

構 図

ギア

構 図

ギア

構 図

ギア

構 図

ギア

構 図

ギア

構 図

ギア

15	作	「ヴェニス」	ブルーの階調	コロポレ	小さい家畜	月と鳥	あふれた貯水池	牧人の夜	町	一九五四年十月	雪中の水車	赤い山峡	月の中	蝶線のある構図	岩	赤い背景の黒い	風景	赤い背景の静物	青い背景の静物
54	品	「ヴェニス」	マックス・パ	ウ・ナイ	エルンスト・	ハンズ・ク	ゲッツ	ヴェルナー・	ヨハン・ゲ	ゲルハルト・	アレキザン	マンフレッ	ト・ブルト	マンフレッ	ウイリ・バ	マイスター	ウイリ・バ	バツハマン	ヘルマン
		マックス・パ	マックス・パ	ウ・ナイ	エルンスト・	ハンズ・ク	ゲッツ	ヴェルナー・	ヨハン・ゲ	ゲルハルト・	アレキザン	マンフレッ	ト・ブルト	マンフレッ	ウイリ・バ	マイスター	ウイリ・バ	バツハマン	ヘルマン

待	詩	氷	岩	母	化	鳥	王子と奴隸	村人	静	第一回独立記念	日行列	おお、母よ	コンポジション	牛	人	青	小さい風景	形	運動の象徴	星と水晶	寄	菓への足跡	氷の森のつゆ
人	境	山	歌	子	室	女	人	人	物	念	列	よ	ン	間	島	島	景	(A)	(I)	虫	跡	つゆ	つゆ
人	境	山	歌	子	室	女	人	人	物	念	列	よ	ン	間	島	島	景	(A)	(I)	虫	跡	つゆ	つゆ

街	の	夕	暮	夜	祭	沐	粉	ゴ	牛	風	犬	鎌	田	貝	静	太陽	コ	古い	道	ノ	聖	花	春	ア	ト
街	の	夕	暮	夜	祭	沐	粉	ゴ	牛	風	犬	鎌	田	貝	静	太陽	コ	古い	道	ノ	聖	花	春	ア	ト

死	働	希	負	涙	前	射	風	混	ト	セ	作	坐	海	細	心	空	目	レ	ト	ラ	目	死
死	働	希	負	涙	前	射	風	混	ト	セ	作	坐	海	細	心	空	目	レ	ト	ラ	目	死

漁	娘	有	動	色	虎	肉	震	馬	聖	紙	人	擊	全	踊	漁	娘	有	動	色	虎	肉	震	馬	聖	紙	人	擊	全	踊
漁	娘	有	動	色	虎	肉	震	馬	聖	紙	人	擊	全	踊	漁	娘	有	動	色	虎	肉	震	馬	聖	紙	人	擊	全	踊

庭園
ワルター・サウテル

静物
エルペール・トリラー

ジュネーヴの雪
アロア・キャリジェ

シルトの騎士
アロア・キャリジェ

道化役者
テオ・オット

綾取り(糸遊び)
テオ・オット

山里の雨
ヴィクトル・ツルベッ

モンブラン
ヴィクトル・ツルベッ

ベックスの近く
ハンス・ファイ

漁夫
ハンス・ファイ

白い魚
ハンス・ファイ

漁群
マルゲリット・アンマン

冬の景色
キエノ・アミエ

赤い罌粟
ハンス・ファルク

少年(木炭)
ハンス・ファルク

花
E・ヨシダー

冬(テンペラ)
E・モルゲン

母と子
ターラー

頭と花びん
マクス・トゥルニガー

マヤ
アドリアン・オーリー

休息
ユーゴスラヴィア

栗の枝
オットン・グ

クレスのオソル
リハ

ロシニ島風景
バルダ

馬
バルダ

モンテネグロの夜
バルダ

トルコの傷兵
バルダ

(コソヴォの部分画)
バルダ

魚
エド・ムルテ

地中海
イク

消火音
イク

雄鶏
マリイ・プレ

子供のいる風景
マリイ・プレ

着物を着る婦人
マリイ・プレ

青い室内
マリイ・プレ

夕
ミオドラク

静物
ペプロテイク

静物
ペプロテイク

静物
ペプロテイク

日本
飛躍
伊藤継郎

壺
井上長三郎

裸婦群像
井上三綱

裸婦になる
猪熊弦一郎

裸婦と馬
猪熊弦一郎

浦安の運河
石川滋彦

忘却
伊藤久三郎

星女
林武

無象(裝飾的な)
長谷川三郎

京橋原勝郎

隣家の浜口陽三

魚と果物
浜口陽三

裸婦原精一

裸婦原精一

裸婦原精一

裸婦原精一

裸婦原精一

裸婦原精一

裸婦原精一

裸婦原精一

水浴する人たち
川口軌外

夏の浜にて
川上澄生

南蛮(木版)
川上澄生

静物(薄)
加山四郎

秋の寺(版画)
川西英

虎の威をかりる
桂ユキ子

母と子
吉原治良

作品
吉原治良

二
吉岡憲

若い漁婦
吉岡憲

とらわれびと
吉岡憲

屋外静物
吉岡憲

阿蘇山の新緑
田崎広助

狩勝の印象
田辺三重松

然別
田村孝之介

白馬
田村孝之介

水売
田村孝之介

芍薬
田村孝之介

クロッキ
田村孝之介

裸木と海
高島達四郎

遊蝶・花
山宇一

孤獨
山宇一

土人(竈だし)
竹谷富士雄

土人(竈だし)
竹谷富士雄

土人(竈だし)
竹谷富士雄

土人(竈だし)
竹谷富士雄

土人(竈だし)
竹谷富士雄

土人(竈だし)
竹谷富士雄

土人(竈だし)
竹谷富士雄

土人(竈だし)
竹谷富士雄

土人(竈だし)
竹谷富士雄

土人(竈だし)
竹谷富士雄

土人(竈だし)
竹谷富士雄

土人(竈だし)
竹谷富士雄

土人(竈だし)
竹谷富士雄

土人(竈だし)
竹谷富士雄

土人(竈だし)
竹谷富士雄

土人(竈だし)
竹谷富士雄

土人(竈だし)
竹谷富士雄

土人(竈だし)
竹谷富士雄

白の上
村井正誠

白の上
村井正誠

白の上
村井正誠

白の上
村井正誠

白の上
村井正誠

白の上
村井正誠

白の上
村井正誠

白の上
村井正誠

白の上
村井正誠

白の上
村井正誠

白の上
村井正誠

白の上
村井正誠

白の上
村井正誠

白の上
村井正誠

白の上
村井正誠

白の上
村井正誠

白の上
村井正誠

白の上
村井正誠

白の上
村井正誠

白の上
村井正誠

リンゴ園村岡平蔵
 斜陽の家向井潤吉
 二鳥籠と少女内田武夫
 曠原宇治山哲平
 黒い森牛島憲之
 タンクの風景
 家の星座野間仁根
 春の星座野間仁根
 双魚野口弥太郎
 黒と黄(裸婦)野口弥太郎
 舟と人野村守夫
 落陽野見山眺治
 ベルギーの炭坑
 町と道納富進
 山と道織田広喜
 道化師の群像
 風景織田広喜
 燃える人岡本太郎
 捧げもの岡鹿之助
 棕櫚のもと大沢昌助
 人と花太田忠
 ビルの裏町太田忠
 北国の雪大野五郎
 崖下の家々大野五郎
 女物小川マリ子
 静物A小川マリ子
 静物B小川マリ子
 水と萩太郎
 洗濯女萩太郎
 或る高台の風景久保守
 東京栗原信
 新潟湯

静物桑田道夫
 花束のある静物黒田頼綱
 二つの椅子安井曾太郎
 安部能成君像山本正
 森と路山口薫
 峠孤独者のすまい山口薫
 白痴の愛(あやこ)山口長男
 構成(赤)山口長男
 吹溜り(黄)山本敬輔
 季節について藪内正直
 モードへの記念
 碑山口正城
 鬼の執心矢橋六郎
 鬼の变心矢橋六郎
 作品A(音楽の時間)矢橋六郎
 作品B(鳩と大)松島正人
 海の倉庫松島正人
 榎木立益田義信
 ノートルダム暮益田義信
 色南仏風景松本弘二
 ブルヴァール(午前)松本弘二
 (午後)和
 平和前田藤四郎
 昆虫和
 雪景真下慶治
 長崎(A・B2)古沢岩美
 (殉誌)

顔福沢一郎
 Xのファンタジ藤川栄子
 アの人藤井令太郎
 二不安定な椅子藤井令太郎
 室古風な椅子藤井令太郎
 不安定な椅子藤井令太郎
 浅間山夕月小林和作
 峡流小林和作
 海畔小糸源太郎
 湖上小磯良平
 地二人の女小磯良平
 ハヂチ・プリン(新興宗)小牧源太郎
 ヤムリ(新興宗)小牧源太郎
 教・その一)小牧源太郎
 鳴種鳥小泉清
 向日葵小泉清
 裸すらい高野三三男
 さすらい高野三三男
 椿と海児島善三郎
 工場と海小出卓二
 はりつけ小山田二郎
 こわす者小松義雄
 作品E小松義雄
 靴屋海老原喜之助
 出土第三号榎戸庄衛
 古墳発掘寺田竹雄
 Figure寺田政明
 樹の木寺田政明
 夜の樹木寺田政明
 人体操阿部展也

奇しきヘロデ王朝井園右衛門
 の怒りとサロメ
 日本神話(その四)朝妻治郎
 飯装赤松俊子
 鳩ぶえ赤松俊子
 竹ぶえ青柳暢夫
 どくだみの花青柳暢夫
 静物青柳暢夫
 母と子齋藤義重
 稲取港(伊豆)齋藤義重
 波止崎齋藤長三
 昇天A(版画)齋藤清
 B(版画)齋藤清
 藤の花桜井浜江
 静物佐伯米子
 牡丹佐伯米子
 白尾銅山佐田勝
 足尾銅山佐田勝
 高松炭礦三田康
 春の窓三田康
 五月の窓三田康
 高原地帯の村々木下義謙
 分譲地新開木村荘八
 向う丘宮本三郎
 水がめ持つ裸婦宮本三郎
 箱根宮本三郎
 ヴァロリス宮田重雄
 ヴァロリス宮田重雄
 我武者羅な踊り三雲祥之助
 失楽園三雲祥之助
 屠殺者水谷清
 朝夜南大路一

樹と雪島岡実
 浜の雪廣瀬功
 岩間の杉日向裕
 谷間の杉日向裕
 夕月子森芳雄
 母子子森芳雄
 箱衣夫人森田元子
 黒衣夫人森田元子
 白のネッカチー
 フ無邪気な世代全田たけを
 農夫達鈴木保徳
 農夫達鈴木保徳
 漁港鈴木保徳
 新緑鈴木保徳
 紫陽花鈴木保徳
 紫陽花須田国太郎
 杉花須田国太郎
 追想須田国太郎
 魔園須田国太郎
 現代の作曲須田国太郎
 掴まえた近代須田国太郎
 静物菅野恵介
 犬吠崎杉本健吉
 奈良風景杉本健吉
 大和風景杉本健吉
 集景杉本健吉
 浮遊する群杉本健吉
 日本画
 紫陽花伊東深水
 手品師岩崎鐸
 子供と天使西山英雄
 苔寺の庭西山英雄
 山の鍵銀の鍵堂本印象
 金の鍵銀の鍵堂本印象

古稀記念展観「竜子の歩み」

1-12 日本橋・高島屋

朝日4 河北倫明

東京5 久富 貢

時事夕刊6

毎日8 福田豊四郎

読売8 今泉 篤男

産経11 北川 桃雄

三彩67

(記)

東京日々1

産経2

東京タイムズ4

朝日夕刊10

秋野卓実個展 1-10 タケミ

ヤ [批] 美術手帖8月(東野

芳明)

竹見義雄、品川工、望月鏡一展

1-10 文房堂 [批]朝日11

島田洗耳日本画展 1-8 銀

座・松屋

現代洋画二五人展 1-12 酒

田・本間美術館

海の風景展 1-15 光風会館

白流会展 1-4 弥生画廊

段々社工展 1-11 和光

春の青龍展 1-8 名古屋・

松坂屋

1回デモクライト展 1-5

大阪・梅田画廊

11回北美洋画展 1-5 武

生・公会堂

1回TACグループ展 1-15

銀座・イワタ喫茶店

松木満史個展 3-6 資生堂

2回不同社日本画展 3-8

銀座・松坂屋

アートクラブ・グループ展

Zo's(松沢宥、真島健三、古

沢岩美、小牧源太郎、東俊二)

3-9 サトウ

7回陶藝家クラブ展 3-7

京都府ギャラリー

洋画十二傑作品展 3-9 産

経画廊

関西新制作展 4-12 大阪市

立美術館

6回主潮社展 4-12 大阪市

立美術館

墨心会日本画展 4-9 大阪・

松坂屋

関書・華岳二人展 5-25 神

戸市立美術館

6回降旗俊三郎水墨個人展

6-11 壺中居

ザッキン新作絵画展 6-11

中央公論社画廊 [記] 朝日

6

グループ・ポアン展 6-10

美松画廊 [批] 美術批評7

月(針生一郎)

田村玄一郎油絵小品展 6-8

銀座・三共ビル八階

梅原龍三郎近作小品展 6-12

大阪・フジカワ

木村百木個展 6-9 日本橋・

丸善

中村光哉、広川青五二人展

6-11 養清堂

ヘンリー・ミラー水彩画展

7-26 プリヂェストン

[批]

東京11(岡本謙次郎)

産経17(大久保康雄)

毎日21(徳大寺公英)

[記]

朝日5

時事夕刊9

東京タイムズ10

日経18

本田克己個展 7-18 フォル

ム [批] 美術手帖8月(徳

大寺公英)、みづる8月(針生

一郎)

灰野文一郎個展 7-11 サエ

グサ

田中桑山子日本画展 7-12

日本橋・三越

服部正一郎個展 7-10 資生

堂

北斗会展 7-12 上野・松坂

屋

時代ガラス器展 7-12 日本

橋・高島屋

友野一郎個展 7-11 サエグ

サ

日本木彫会展 7-12 日本橋・

高島屋

河野通紀油絵展 7-12 大阪・

阪急

田中塊堂、土田星郎、梅舒適三

人展 7-12 大阪・阪急

上口愚朗新作陶盤展 7-12

大阪・阪急

幸寿作品展 7-12 福岡・岩

田屋

横田仁郎水彩スケッチ展 8-

14 産経画廊

琉球民藝展 9-13 たくみ

[記] 東京11、日経11、読売

行動美術新人展 10-15 大阪・

そごう

郷土教学館 10-30 名古屋・

徳川美術館

高間惣七新作油絵展 10-15

東京・大丸 [批] 毎日14(柳

亮) 朝日17(植村鷹千代)、み

づる8月(柳亮)

「金沢文庫本」特別展 10-30

鎌倉・国宝館

大須寛力、黒田嘉治彫刻展

10-14 日本橋・丸善

3回生活工芸展 10-15 銀座・

松坂屋 [記] 産経14、16、

東京日々17

橋本高鳳日本画個展 10-15

銀座・松屋

浮世絵名作展(北斎、広重、清

親) 10-22 銀座・松屋

中畑伸人油絵個展 10-15 大

阪・そごう

中井千津子個展 10-16 大阪・

淀屋画廊

筵上会展 11-14 資生堂

日本美術史展 11-7月4 名

古屋・愛知県美術館

第8回美術展(米内山コレク

ション、中国古陶磁) 11-

13 東大教養学部

曾我英彦個展 11-15 美松画

廊

丹彫会展 11-17 新宿・伊勢

丹

前田常作個展 11-19 タケミ

ヤ [批] 美術手帖9月(針

生一郎)

清水六兵衛展 11-16 名古屋・

丸栄

春泥社展 11-16 大阪・三越

4回日本陶藝展 11-16 名古

屋・松坂屋

日本画新作展 12-16 日本橋・

白木屋

3回ニッポン展 12-25 東京

都美術館 [批] 美術批評7

月(針生一郎)、アトリエ8月

(舟木日夫)

シャガール複製画展 13-18

中央公論社画廊

片山昭弘個展 13-18 養清堂

6回創藝協会展 13-24 東京

都美術館

三井寿雄日本画展 13-18 文

房堂

前衛美術展 13—25 東京都美術館

駿馬同人展 13—19 日比谷画廊

アートクラブ・グループ展 No.1 (恩地孝四郎、吉田政次、品川工、福島秀子、山口勝弘、芥川紗織) 13—18 サトウ

〔批〕朝日17(植村鷹千代)

9回女流画家協会展 14—25 東京都美術館

〔田近憲三〕、産経23(荒城季夫)、朝日23(徳大寺公英) 美術批評7月(針生二郎)、みづゑ8月(植村鷹千代)

43回日本水彩画会展 14—25 東京都美術館

内田邦夫陶藝展 14—19 日本橋・高島屋

〔批〕産経17(横川毅一郎)

畑勇隆油絵個展 14—19 渋谷・東横

9回彫像会展 14—19 日本橋・三越

伊藤清永個展 14—19 日本橋・高島屋

〔批〕産経16、時事夕刊17、朝日17(植村鷹千代)、みづゑ8月(大河内信敬)

中村善策個展 14—19 大阪・大丸

野口弥太郎個展 14—19 日本橋・高島屋

新しき村展 14—19 日本橋・三越

方君壁繪画展 14—19 大阪・阪急

青甲社展 14—19 京都・大丸

京都朝日新人展 14—19 京都・高島屋

〔批〕美術批評8月(中村義一)

3回鑑賞展 15—18 日本橋・丸善

2回アトリエ・ド・R・ヴァン エックグループ展 15—20 三省堂

青柳鴨夫個展 15—18 資生堂

〔批〕東京タイムズ15、美術手帖8月(柳亮)

秋紳道人会津八一近墨展 15—19 上野・松坂屋

8回京都劇場美術展 15—19 京都市美術館

岩田藤七ガラス展 15—19 大阪・大丸

花の絵展 16—30 光風会館

室内工芸の会展 16—21 日本橋・白木屋

巨匠の二十代展 16—7月24 国立近代美術館

〔批〕産経7月7 毎日8 朝日10 東京10

〔記〕日経21 朝日夕刊22

1回黒潮会展 17—22 東京・大丸

新制作協会会員展 17—22 銀座・松坂屋

〔批〕朝日21、美術批評7月(針生二郎)

薔園会人形展 17—22 銀座・松坂屋

ユイゴスラビヤ美術展 17—29 なびす

広本森雄個展 17—23 松村ギヤラリー

〔批〕アトリエ8月(舟木日夫)

墨人公募展 17—19 京都府ギヤラリー

津田青楓書画展 18—19 井之頭公園内・志賀宗雲邸

サロン・ド・ジュワン展 18—22 日本橋・三越

〔批〕朝日21、美術批評7月(針生一郎)、美術手帖9月(東野芳明)

富岡厚川喜寿展 18—23 大阪・松坂屋

7回北斗会展 18—24 名古屋・松坂屋

世界ガラス展 19—7月31 鎌倉・近代美術館

倉・近代美術館 4回創型金彫製展 19—29 東京都美術館

白鶴夏期特別展 (アジヤンター、シーギリヤ壁画模写、杉本哲郎仏画、青磁・染附陶磁器) 19—7月24 神戸・白鶴美術館

門脇正一個展 20—22 東電サービスセンター

森治樹個展 20—23 資生堂

欧米商業美術展 20—26 銀座・折込広告社ビル

神谷信子個展 20—25 養清堂

〔批〕みづゑ9月(植村鷹千代)、アトリエ8月(舟木日夫)、美術手帖9月(徳大寺公英)

鈴木猛人個展 20—25 中央公論社画廊

春陽会展 20—30 大阪市立美術館

新美術協会展 20—30 大阪市立美術館

立美術館 県会展 21—26 日本橋・高島屋

日曜画家ぼんびえ作品展 21—26 大阪・阪急

好美会日本画展 21—26 大阪・大丸

三耀会展 21—26 日比谷画廊

江森礫個展 21—25 フォルム加藤嶺男陶器展 21—25 日本橋・丸善

新制作協会会友展 21—26 渋谷・東横

木村鉄雄個展 21—30 タケミヤ〔批〕美術批評8月(東野芳明)、美術手帖10月(徳大寺公英)、アトリエ8月(舟木日夫)

枇杷会日本画展 21—26 上野・松坂屋

3回福田翠光日本画展 21—26 日本橋・三越

河合卯之助新作陶展 21—26 日本橋・三越

〔記〕産経25 野口弥太郎個展 21—26 日本橋・高島屋

〔批〕毎日23(嘉門安雄)

東京24(今泉篤男)

日経24(福島繁太郎)

東京タイムズ25 朝日26 産経26

鍋井克之水墨画展 21—26 大阪・高島屋

震島社展 21—26 京都・大丸

因藤寿油絵個展 21—26 札幌・丸善画廊

水田竹園個展 21—26 京都・大丸

アートクラブ・グループ展 No.6 (朝妻治郎、勝田寛一、小松義雄、村井正誠、須田剋太、津高和一) 22—28 サトウ

小泉繁個展 22—27 三省堂

新制作日本画展 22—26 京都市美術館

1回江戸健個展 23—29 美松画廊

日本墨画展 23—27 日本橋・白木屋
 これでも展 23—27 産経画廊
 尚美展 24—29 銀座・松坂屋
 1回々々会展 24—29 銀座・松屋
 宮田重雄遊欧小品展 24—28
 兜屋 [批]産経62、毎日28 (森岩雄)
 薄心齋画展 24—28 銀座・松屋
 6回檀会展 24—30 資生堂 [批]
 東京27 (岡本謙次郎)
 朝日29
 美術批評8月(東野芳明)
 みづゑ9月(今泉篤男)
 動人展 24—29 大阪・そごう [批]美術批評8月(中村義一)
 新鋭作家陶藝硝子花器展 25—7月3 新宿・伊勢丹
 9回旺玄会展 26—7月8 京都美術館
 7回自主連立展 26—7月8 東京都美術館
 恩地孝四郎版画小品展 27—7月2 中央公論社画廊
 1回グループ六日展 27—30 文房堂 [批]アトリエ8月 (舟木日夫)
 末永胤生個展 27—30 日本橋・丸善

山内タタコ個展 27—7月2 養清堂
 11回現代美術協会展 27—7月8 東京都美術館
 伊藤昭二、迫田潤二二人展 28—29 東電サービセンター
 1回山本豊市作品展 28—7月8 プリジストン [批]
 産経29
 東京29 柳 亮
 朝日30
 毎日7月1 富永 惣一
 東京タイムズ7月4
 日経7月3 嘉門 安雄
 美術手帖8月 柳 亮
 みづゑ9月 今泉 篤男
 東郷青児新作展 28—7月2 日動画廊
 グループ実在者展 28—7月2 フォルム
 小杉放庵茶掛展 28—7月3 上野・松坂屋
 荒木由三、高須国之作品展 28—7月3 大阪・阪急
 川西英近作版画展 28—7月3 神戸・大丸
 彩交会日本画展 28—7月4 日本橋・三越 [批]東京7月 1(久富貢)
 1回全国漆藝展 28—7月3 日本橋・三越

好美会展 28—7月3 京都・大丸
 堀内規次滯仏作品展 29—7月3 日本橋・白木屋 [批]美術手帖9月(針生一郎)
 4回現代工藝美術展 29—7月4 日本橋・高島屋
 田辺竹次個展 30—7月3 美松画廊
 7月
 7回清流会展 1—6 兼素洞 [批]東京4(久富貢)、朝日5 藤間清個展 1—10 タケミヤ [批]美術批評8月(針生一郎) 美術手帖9月(徳大寺公英) 三雲祥之助個展 1—5 資生堂
 自由美術彫刻出品者グループ展 1—7 なびす
 一よう会和染展 1—6 東京 大丸
 わかたけ会染色展 1—6 上野・松坂屋
 アートクラブ・グループ展(藤沼朝保、堀内正和、小川孝子、神谷信子、中村真、藤松博) 1—7 サトウ [批]美術手帖9月(瀬木慎一)
 立花一花作品展 1—5 日本橋・丸善

2回青陶会展 1—6 銀座・松坂屋
 川原舜個展 1—6 兜屋 [批]毎日6
 金山平三近作発表展 1—7 大阪・美友社
 2回Fグループ展 2—6 大阪・梅田画廊
 佐々木邦彦個展 2—7 大阪・三越
 流政之空間造型展 4—10 美松画廊 [批]朝日9、美術批評9月(宇佐見英治)、美術手帖9月(植村鷹千代)、アトリエ10月(舟木日夫)
 米原二郎個展 4—9 養清堂
 GAMINGグループ展 5—9 サエグサ
 7回工彩会工藝展 5—10 日本橋・高島屋
 岩田藤七硝子工藝展 5—10 日本橋・三越
 欧亜古代美術展 5—9 壺中居
 米良道博個展 5—9 産経画廊 [批]産経9
 瀬戸陶藝展 5—10 日本橋・三越
 墨土会洋画展 5—10 大阪・阪急
 糸田芳雄・井上躰二人展 6—9 日本橋・丸善

3回今中素友個展 6—11 東京サービセンター
 黏土新作陶展 8—13 東京・大丸
 大聖寺古郷水墨展 8—14 銀座・松坂屋
 24回朔日会展 9—20 東京都美術館 [批]産経15、東京18 アトリエ10月(舟木日夫)
 51回太平洋画会展 9—20 東京都美術館 [批]産経15、東京18、産経22
 加藤土師蒔陶板展 9—15 名古屋・松坂屋
 米沢蘇峰新作陶展 11—17 日本橋・三越
 3回日下部道寿南画展 11—17 日本橋・三越
 斎藤清、平田康版画二人展 11—16 養清堂
 合田小三郎、斎藤正夫二人展 11—14 資生堂
 アートクラブ・グループ展(斎藤愛子、多賀谷伊徳、土屋幸夫、鶴岡政男、笠置季男、勝呂忠) 11—16 サトウ
 3回飯田善国作品展 12—16 サエグサ
 1回リャン油絵三人展 12—16 文房堂
 相生会工藝展 12—17 上野・松坂屋
 まはに工藝展 12—17 日本橋・丸善

竹杖会作品展 12—17 京都・大丸

西八郎、栄永大治郎油絵展 12—17 大阪・阪急

楠木沙弥郎注染布展 13—17 たくみ

国際美術展 13—26 名古屋・愛知県美術館

中村舜油画、素描展 14—17 日動画廊

二見利節素描展 14—19 東京・大丸

一水会委員展 14—20 大阪・美交社

中島保彦個展 15—19 資生堂

佐々文夫デザイン・クリスタル硝子展 15—20 銀座・松坂屋

インド児童美術展 15—19 兜屋

JAN現代フランス、クリティック賞絵画展 15—27 大阪・そごう

荻野康児、森柱一、矢野雄蔵三人展 16—21 新宿・伊勢丹

田中岑個展 17—22 大阪・梅田画廊

奥村正三郎版画展 17—22 大阪・梅田画廊

4回藤沢典明、勝田寛一、東俊二三人展 18—23 文房堂

〔批〕美術批評8月(針生一郎)アトリエ10月(舟木日夫)

倉田三郎個展 18—24 美松画廊

荒井竜男帰朝展 18—23 プリヂストン

〔批〕毎日21(瀬木慎一)、産経22、東京22(岡本謙次郎)、朝日22、美術批評8月(藤井昇)、アトリエ9月(舟木日夫)、美術手帖10月(東野芳明)

3回中神潔個展 18—23 日本橋・丸善

〔批〕美術批評9月(針生一郎)、美術手帖10月(東野芳明)

峰村リツ子個展 18—23 養清堂

5回日本陶彫会展 19—25 日本橋・三越

3回北村明道大和絵展 19—24 上野・松坂屋

福永晴帆水墨画展 19—24 日本橋・高島屋

5回沼田一郎ガラス絵個展 19—23 日本橋・高島屋

清希卓個展 19—24 大阪・阪急

岩田藤七新作ガラス器展 19—24 大阪・阪急

9回日本南画院展 21—25 東京美術倶楽部

新具象グループ展 21—31 ケミヤ

〔批〕朝日29、美術批評8月(針生一郎)、アトリエ10月(舟木日夫)

26回第一美術展 21—31 東京都美術館

〔批〕産経27 加山四郎水彩画展 22—27 銀座・松坂屋

ブラジル現代絵画展 (3回日本国際美術展出品の中) 22—27 銀座・松屋

〔批〕毎日27 (荒井竜男) 静岡県グループ展 22—24 浜松市立図書館

葺我会小品展 23—28 京都府ギャラリー

4回平和美術展 23—8月3日 大阪市立美術館

〔批〕美術批評10月(中原佑介) 長谷川利行遺作展 25—30 サトウ

棟方志功板画自選展 25—30 中央公論社画廊

鈴木治、山田光二人展 25—31 美松画廊

〔批〕朝日29、美術手帖10月(浜村順) 新象会展 25—28 名古屋・丸善

独立十人の会展 26—31 日本橋・高島屋

日米水彩画展 26—8月14日 立近代美術館

〔批〕朝日夕刊29、朝日8月6日(岡本謙次郎)、日経8月7、大口登個展 26—30 資生堂

荻野康児個展 26—31 大阪・高島屋

10回東邦展 26—31 渋谷・東

横 中井重男油絵展 26—8月1日 大阪・阪急

11回武石勇、河合匡造漆画漆藝展 26—31 大阪・阪急

14回双台社油絵展 27—31 日本橋・三越

4回示風会展 27—31 日本橋・三越

スイス陶器展 27—31 たくみ

〔記〕日経28 シャルウル・ラタント洋画同人展 日本橋・丸善

高橋由郎個展 27—31 札幌・富貴堂画廊

〔批〕美術批評9月(東野芳明) 創造美術個人展 28—8月3日 新宿・伊勢丹

世界の児童画展 28—29 世田谷小学校

佐藤正己漆絵個展 29—31 資生堂

日本バステル画会展 29—8月3日 銀座・松坂屋

1回洋々水彩画展 29—8月3日 創造美術同人会展

3 東京・大丸 新宿・伊勢丹

村瀬隆、吉川伸近作展 29—31 名古屋・丸善

八月 3回長谷川善四郎個展 1—4 美松画廊

実証展 1—6 サトウ

〔批〕美術批評9月(藤井昇) ヌトリロ、ウラマンク巴里風景版画展 1—27 プリヂストン

上田宇三郎日本画個展 1—4 資生堂

9回新樹会展 2—7 日本橋・三越

〔批〕東京4 朝日4 産経6 毎日7 東京タイムズ7

アトリエ10月 舟木 日夫

みづる11月 岡本謙次郎

出品目録

彫刻 山本豊市

座女 A 小品 木内 克

シ B 小品

こしかけた裸婦 おとな(トルン) 裸婦

裸 手をつく女

裸婦 小品 A

シ C B

シ D C B

シ E D C B F

- 会員 清水多嘉示
 裸婦習作 久保寺恭
 ジョージ・オリック夫人 首
 裸女座像 招待 渡辺利尅
 こしかけた女 おどり
 招待 桜井祐一
 弟の首 招待 千野茂
 裸婦 招待 土方久功
 南洋にての作(南洋材)四枚
 原始
 夏のうた
 宿命の歩み
 伝説
 パラオ連作 四枚
 うつくしき日
 真昼の夢
 ゆうべのアンニ
 ユーイ
 何かきこえる
 サテワヌ島一連 四枚
 孤島
 島の心
 いれずみ
 曇から飲む子供たち
 ユーモレスク一連 五枚
 二人一久調、二人同じように成育していた
 二人一まのぬけ
 二人仲好し
 やんちゃ子像

- いたずら少年像
 俳優座劇場の為のヒニール浮彫
 I 片方の長靴
 II 手をもつ女A
 III 坐つた女
 IV らずくまる裸婦(永遠の母性)
 V ダナイド
 仰向けの二人の裸婦
 R・S氏の肖像
 マドモアゼルA(現実的な肖像)
 詩人の像
 R氏とK嬢
 少女X(非現実的な肖像)
 強羅の冬
 二 人
 まるまげの女
 裸婦と馬
 裸婦二人
 馬を御す
 素描
 夜景
 招待 飯田善国
 1
 2
 3
 4
 5
 6
 7
 8
 夜景(The dark is light enon-

- 希望 招待 永瀬義郎
 失意
 原娼の罪
 旅路の果 水墨
 空かけるもの 油
 白い太陽
 花
 森の花
 招待 中千枝子
 群像 水彩
 二人
 三人
 室内 内
 自画像
 招待 山本蘭村
 山
 海
 人
 鯨 デッサン
 招待 広本森雄
 作品五五ノ二(奇怪な雲)
 (おとえ切れない)
 作品A(天翔けるもの)
 作品B(天翔けるもの)
 招待 小川原脩
 狩猟時代
 鬮と仔馬
 男
 犬
 立ばなし 招待 武田邦雄
 窯場
 貝と船

- 弓を持つ男 会員 原勝郎
 風景 A
 自然公園 B
 自然公園 会員 大河内信敬
 鳳来峡湯谷溪流
 初島にて
 安茂里の春
 湯沢温泉残雪
 伊良湖岬日之出石門
 薔薇 会員 大久保泰
 少の女
 母の像
 少年 会員 朝井閑右衛門
 硝子台鉢 A
 スカパンとクリスパン B
 ばら A
 作品 A
 作品 B
 首かざりの女 会員 南政善
 O夫人
 椅子にかける少女

會員 南 政善
青いコスチューム

西瓜 銅版色刷
西瓜 銅版
メロンと筆
魚と果物

立石春美個展 2-7 日本橋・高島屋
示現会々員展 2-7 日本橋・三越
2回仏教美術展 2-7 上野・松坂屋

日野耕之祐個展 2-7 上野・松坂屋
松坂屋〔批〕時事夕刊5(嘉門安雄)、産経6(荒城季夫)、みづゑ11月(嘉門安雄)

外国名画と撰抜十画家作品特別展 2-13 産経画廊
全関西版画展 2-8 大阪・阪急
加藤金一郎洋画個展 3-6 日本橋・丸善〔批〕美術手帖10月(瀨木慎一)、アトリエ10月(舟木日夫)

秋季染色繡作品展 4-5 京都・平安神宮寶資館客殿
5回日本宣伝美術展 5-10 銀座・松坂屋〔批〕東京9(剣持勇)、朝日9、東京タイムズ9、アトリエ10月(舟木日夫)、美術手帖11月(瀨木慎一)

〔受賞〕
美術展覧会(8月)

美術展覧会(8月)

日本宣伝美術会賞—粟津潔
特選—大高猛、島弘三、清水和久、広橋桂子、細谷巖
奨励賞—沖沢利雄、河野道久、白井正治、中谷善三郎、中条正義

倉石隆個展 5-9 資生堂
〔批〕美術批評9月(藤井丹)、美術手帖10月(針生一郎)、みづゑ11月(瀨木慎一)
二紀会女流六人展 5-10 銀座・松坂屋
権会油絵展 5-10 東京・大丸

西川敬一個展 5-7 三省堂
三装会舞台美術展 5-9 美松画廊
中国彫刻展 6-9月25 鎌倉・近代美術館〔記〕東京25(本郷新)、新建築10月(白井晟一)
2回グループ「実在者」展 8-13 村松画廊〔批〕美術批評9月、美術手帖10月(東野芳明)、アトリエ10月(舟木日夫)

モダンアート研究会選抜展 8-13 サトウ
現代フランス前衛七人展 8-13 村松画廊
趣味の染色工藝展 8-17 銀座・松屋
日本水墨派美術展 9-14 日本橋・三越
坂口一草、金子万太郎二人展 9-13 日本橋・丸善

モリソン個展 9-14 日本橋・高島屋
25回関西バステル画会展 9-15 大阪・阪急
今関一馬個展 10-13 資生堂〔批〕美術批評9月(東野芳明)、美術手帖10月(岡本謙次郎)
池辺一郎個展 10-15 日本橋・白木屋〔批〕朝日12
近世名家扇面画展 10-21 新宿・伊勢丹
眞原正夫個展 10-14 美松画廊〔批〕アトリエ10月(江川和彦)

三軌会水彩8人展 12-17 東京・大丸〔批〕産経14、時事16
1回日本山林美術展 12-17 銀座・松坂屋
平和美術展 12-20 東京都美術館〔批〕毎日18、朝日19、時事夕刊20、東京タイムズ21
美術批評9月(針生一郎)、アトリエ10月(舟木日夫)

新世紀美術協会創立展 13-21 日本橋・高島屋〔批〕時事夕刊16、産経17
吉村益信個展 14-20 村松画廊
現代美術協会新人展 14-20 村松画廊
4回三輪孝個展 15-18 資生堂

シヤクンタラ・ラオ女史印度風景画展 15-21 美松画廊
富井政文個展 15-20 サトウ〔批〕美術批評9月(東野芳明)、アトリエ10月(舟木日夫)

竹田長年、陰山光義二人展 15-20 大阪・フジカワ
3回光陽会會員展 16-20 文房堂
カトリック美術展 16-21 日本橋・三越
9回紅土会油絵展 16-21 日本橋・三越
藝術院會員作品展 16-31 産経画廊
2回造形教育センター展 17-22 なびす〔批〕朝日19
9回白鷺会作品展 17-21 大阪・阪急
繪巻物展 17-21 大阪・阪急
1回児玉三鈴日本画個展 19-24 銀座・松屋
清水六和八十才記念回顧作品展 19-24 東京・大丸〔批〕朝日23、時事夕刊23、東京23
2回高瀬捷三油絵個展 19-23 資生堂
伊藤竜雄バステル画展 19-24 銀座・松坂屋
日本山岳協会展 19-24 銀座・松屋

現代日本の書・墨の藝術展 20-28 国立近代美術館
日本水彩展 20-24 名古屋・愛知県美術館
南風会展 20-24 名古屋・愛知県美術館
新倉喜作個展 21-26 村松画廊〔批〕美術批評10月(藤井丹)
アイト前衛展 21-31 タケミヤ
岡本公夫個展 22-27 中央公論社画廊〔批〕美術批評9月(東野芳明)

日本宣伝クラブ絵画・写真部会展 22-27 日本橋・丸善
石塚六男、福井昭雄、高田宏、浜谷政彦四人展 23-27 文房堂
3回LETTIAGROUP展 23-28 美松画廊
小山田二郎個展 23-30 サトウ〔批〕美術批評10月(東野芳明)、みづゑ11月(針生一郎)

木村斯光日本画展 23-28 日本橋・三越
久本弘一油絵展 23-28 大阪・阪急
富山妙子個展 24-27 資生堂〔批〕美術手帖11月(瀨木慎一)
9回京都市民美術展 25-9月 京都・丸物

現代美術協会新人展 14-20 村松画廊
4回三輪孝個展 15-18 資生堂

四十三人展 26-31 銀座・松

坂屋 [批]アトリエ10月(舟

木日夫)、美術手帖11月(浜村

順)

富田通雄水彩画展 26-31 銀

座・松屋

5回新興美術院秋季展 26-31

銀座・松屋

モタンアイト展 26-30 京都

府ギャラリー

画壇新人展並びに壬辰連作展

26-28 名古屋・愛知県美術

館

現代版画秀作展 26-30 日本

橋・白木屋

吉城弘個展 27-9月1 銀座・

松屋

益田義則個展 27-9月1 銀

座・村松画廊 [批]美術批評

10月(藤井昇)

伊原通夫作品展 29-9月3

美松画廊

石垣栄太郎素描展 29-9月3

中央公論社画廊

武田邦雄個展 29-9月1 日

木橋・丸善 [批]美術批評10

月(藤井昇)

佐藤正巳漆画個展 29-31 資

生堂

グループリヴィヴァン展 29-9

月2 文房堂

郡山三郎個展 29-9月4 荻

窪・フジタ工房

27回青龍社展 30-9月11 日

本橋・三越

[批]

毎日9月1

産経 4 北川桃雄

日経 5 嘉門安雄

東京タイムズ9月7

東京9月8 瀬木慎一

毎日 8 今泉篤男

朝日 8 鈴木進

時事夕刊9月9 河北倫明

三輪 鄰

[記]

東京タイムズ8月24

毎日8月25

産経9月4

15

[受賞]

奨励賞-丹青子、大塚達夫、

駒田好子、横山操、岡信孝

出品目録

小 鍛 冶川端龍子

かつばと穂藻

稲 荷 山加納三楽

花 火 城山崎 豊

月 城 山崎 豊

緑 藤 市野 亨

銀 屏 風 安西啓明

花 屏 風 安西啓明

連作の十五

熱海海岸通

黒い太陽 小島册子

漁 港 時田直善

鏡 亀井玄兵衛

木 挽 琴塚英一

ずいき 御興 琴塚英一

谿 佐藤土筆

北 岳 佐々木邦彦

国 賀 佐々木邦彦

妹 搔 牛結城天童

藤 背 三幅対 大塚香緑

華 藤 竹内未明

埴 輪 渡辺不二根

飛 瀑 水島 裕

水 牛 入江北宰

嵐 山 雨 後 渡会伊良子

魚 降 森 高山晴雄

紅 雷 加藤輝三

落 賀 茂 中川佐風路

上 影 生 重 定

松 浴 池田洛中

水 薇 酒井白澄

紅 薔 薇 酒井白澄

対 話 横山 操

鼠ヶ関の女 堀口幸子

子供と鳥籠 浜出青松

阿波の藍 堀江大白

鳶 丹羽長春

裸 翁 武市政輝

生 態 谷野敬一郎

鱒 石井昭二

泊 舟 内堀吉兆

炎 庭 白杵一穂

夏 野 鈴木光英

新樹と海 富田保和

赤目溪谷 三浦打魚

冷 泉 岡 信孝

私 の 花 丹 青子

醜 造 場 土屋輝雄

青 夜 里 見 公軌

六 郷 皆 川 佳子

渡 船 場 中 島 晃輪

牛 若 丸 山 口 吉旺

山 道 河 本 正

滯 船 大 塚 達夫

池 畔 高 田 晃瑠

瀬 戸 風 景 安 藤 心象

槍 中 村 恵 一 郎

山 茂 川 合 誠 司

栗 栖 山 上 島 義文

奥入瀬の秋 小山内尚城

カ ン ナ 駒 田 妙子

タンクのある風 後藤圭祥

景

目録外出品 四国遍路(第六

回)草描 十三点 川端龍子

ピエンナレ受賞記念棟方志功

板業展 30-9月4 渋谷・

東横

一茶遺作展 30-9月4 上野・

松坂屋

欧米商業美術展 30-9月4

大阪・阪急

東急記念文庫初公開展 31-9

月11 渋谷・東横

美術文化九州展 31-9月4

鹿児島市立美術館

九 月

40回二科展 1-19 第一会場

上野・松坂屋(1-18)

[批]

毎日1

東京4 岡本謙次郎

読売5 瀬木慎一

毎日6 土方定一

日経6 福島繁太郎

東京タイムズ7 田近憲三

朝日7 河北倫明

時事夕刊7

産経9 荒城季夫

東京10 本間正義

産経14 三輪福松

美術批評10月 針生一郎

美術手帖11月

[記]

毎日8月18

東京タイムズ8月20、8月21

東京8月21

東京タイムズ8月22

東京タイムズ1

産経3、6

[受賞]

二科賞

藤沢典明(絵画)、森田成男

(漫画)、竹内和夫(商業美

特待

中村瑠璃子、狩野守、中井勝郎、片岡洋一、鈴木義治、芥川紗織(以上絵画)、須賀野子イ、東村正久、奥田秀雄、平野秀一、石田史郎(以上彫刻)、西島伊三雄、鏡光男(以上商業美術)

会員努力賞
桂ユキ子(絵画)

会友賞
金原昌平、堀越隆次(以上絵画)

新会員
山本不二夫、浪江勘次郎、吉村勲、佐々木良三、多賀谷伊徳(以上絵画)、松下隆治、平川正道、日高正法(以上彫刻)、赤羽喜一、石川茂、西村伊三雄(以上商業美術)

新会友
西村千太郎、藤田金之助、田川寛三、吉田一夫、鈴木幸雄、小島結治、関谷陽、天野三郎、起谷繁造、田中君子、吉仲太造、早川昌(以上絵画)、藤林重治(彫刻)、高橋春人、石川夏男、新井信二、関山金市、檜枝幹夫、松岡誠造、森周平(以上商業美術)

写真受賞十五名

美術展覧会(9月)

出品目録

第一会場
。印会員、△印会友

絵画部
むかしばなし B △吉村 勲
A △中井勝郎
作 品 中井勝郎
黒 い 港 田川寛三
樹 令 △田川寛三
街に生きる人々 △寺田竹雄
断 想 △山本不二夫
山のいのち △
野のなやみ △
黄色い組立 △山口長男
四角い構成 △
創るものと壊す △森田信夫
もの △織田広喜
丘 像 △田中喜
群 像 △宮川富佐子
やまたのおろち △
国の出来た夜 △
鯛 漁 △松本弘二
満 潮 △大沢昌助
みつめる顔 △
開かれた扉 △錦義一郎
ア トリ エ △服部正一郎
あ し か 島 △
海 門 △伊庭伝治郎
水 授 庵 △
天 庭 △伊庭伝治郎
真 昼 △松井 正
夜 物 △山宇一
森 静 △
髪 物 △山宇一
群 蝶 △

ふるさと △鷹山宇一
夜の街 △佐藤吉五郎
裸婦 △藤川栄子
裸婦達 △
厨房で読書 △
おどろきの人達 △桂ユキ子
傘と靴 △
鬼とゆかた △
な ぎ さ 能 間 弘
少 年 △清水刀根
群 像 △
あ お い 目 △野村守夫
L と い ふ 街 △
昆 虫 △井上賢三
飛べない鳩 △星野美雄
夜の花園 △藤井二郎
赤い花園 △
苔 の 花 田 中 君 子
海 の 林 △
淡 路 島 △福島金一郎
五 月 の 山 △
庭 逃 げ て ゆ く 男 △東郷青児
ク ア ル テ ッ ト △
京 風 △
作 品 B △佐々木良三
織布の人達 △
ある日の肖像 △吉井英二
D Painture △松葉清吾
A △

牙 決定された地点 △山本敬輔
浜 かな た へ △伊東俊平
電気碍子と三人 △斎藤三郎
変圧器と二人 △
電気碍子と一人 △
作 品 R △かやの木昭一
街 景 △片岡洋一
黒 と 私 △阿部金剛
犬 と 中 △中村瑠璃子
赤い風車 △
馬 乘 り △伊藤研之
騎 乗 者 △
立ち上る馬 △
静かなる夜勇士 △中原 実
救へ △
園 争 △安藤幹衛
黄 昏 の 丘 △青山龍水
海 と 猫 △
月 と スポーツマン △高橋寿重男
貿易白書 △
多感なる窓 △浪花勘次郎
露の干ぬ間 △
紫 紺 △
流 転 △伊東静尾
激 動 △
不安定家族 △西村千太郎
青 春 △
飛 ぶ △鶴岡義雄
都 会 △
洗 滌 物 △

母 と 子 △堀越隆次
罰 族 A △
家 族 △坂本国夫
花 び ら △藤陸郎
機 械 と 人 △棚橋諠彦
た の し み △青木一利
家族の散歩 △
核島の女 △
宇宙の一隅 △伊賀勇高
裏町人生 △
ニハトリとカシヤト △萩原寛子
作 品 81 △赤羽恒男
街の母子像 △狩野 守
吾妻はや △
血液の喜び △中林栄三
夢 路 △根本茂子
葛 藤 △金原昌平
夢 藤 △
わ かれ 道 △高橋悦男
怒 る 泉 △
貝 の 踊 り △岡本信次郎
孤 独 同 志 △
ヴァイオリニス △
パンジー(紫) △仁戸田秀吉
ヒ ナ ゲ シ △
作 品 林 △敏明
花 品 △村井新治
喪 車 △長谷川彰一
一 輪 △
若き農夫 △野村正三郎
壁をぬる人 △高柳種行
風の中を △鈴木幸雄
日 ざ か り △

コンクリートミ キサー	伊地知正明	ウミムシ	西田良三	くらしの中で	春田安喜子	彼らは藝術家だ	村田耕	生	新田稻実
BATH ROOM	桂 龍雄	いきものK	吉仲太造	死の風景	辻本敬三	大きな家が建つ	加藤正一	小供歳時記	高根沢政子
自画像 I	鈴木義治	三人の善人	沢田哲郎	母子仰ぐ	花谷時子	川口の町	和田一男	広場のある街	渋谷光典
海	辺南 真雄	三人の善人	沢田哲郎	群像	石橋宏一郎	孤	仙名秀雄	憑れている	杉 英治
作	品 玉置吉郎	ドグマの少年	渡部弘喜	救ひを求め	石橋宏一郎	具	岡本一	魚	末金富美子
花火の好きな子	越智 靖	麦島の少年	織田リラ	人々	石橋宏一郎	平和のはなし	小野和伸	黒への出発	辻 三郎
子供	マンボの好きな	花屋の窓	三つのオレンヂ	作	品 吉原治良	獅子	藤田慎治	霞ヶ浦	川崎吉男
独	多賀谷伊徳	双生児連弾	桑原 実	祭	の 神 酒見敏雄	馬	鈴木理介	風	山本博之
集	サムフランシ	甲	花	働く人々の歌	賢三	馬	岩田安郎	静なる対決	長谷川陽三
無	板本忠士	昼	花	科学者の手帳	賢三	馬	寺田健一郎	陶	三谷雄一郎
作	品 小久保晴行	作	品 高田 稔	枯	れ 勝野浩一	馬	山田 広	紅	大城皓也
作	品 藤沢典明	作	品 藤成 一	叫	び 山田 康	馬	石橋 幸	ひきさくもの	渡 辺 弘
脱	出 藤沢典明	作	品 藤成 一	葛	藤 本 孝 康	馬	杉浦 正美	囚はれの	金子 茂
賭	間 塩越義範	球	乗 山尾 薫 明	海	浜 秋 山 巖	窓	竹島 俊夫	運命の想い	岩波 泰夫
人	間 藤川 宏	新月の集い	山尾 薫 明	限られた眠り	小 玉 光 雄	ありし日の思い	増田 勉	盆 おどり	岩館 千松
道	化の華	ノートルダム月	半沢 克己	海底の悲劇	小 川 清	島	沢山 卓爾	古びてゆく者	西川 敬一
は	れもの	影	半沢 克己	どこへゆく	郭 仁 植	暗	猪田 七郎	帽子をかぶる	皆川 実
黒	い境界	快	案 吉田 正雄	町工場のバラ	藤野 一友	黒いキャビネ	篠田 正之	愛	友永 マリ
火	夜	夜	今長谷 巖	すてられた舟	安井 芳香	若人の夢	榮 建 二	作品 55	古川 益弘
火	夜	夜	今長谷 巖	三枚	越谷 繁造	若人の夢	榮 建 二	逃	栗辻 博
瞬	間 岡本 太郎	朝	不協和音	結	磯部 光兼	若人の夢	榮 建 二	夕	近藤 正史
パンチ	エール	夜	不協和音	結	磯部 光兼	若人の夢	榮 建 二	おとぎばなし	橋上 よし子
コンボ	ジョン	夜	不協和音	結	磯部 光兼	若人の夢	榮 建 二	退屈町の夏の午	高野 謙
女	女	夜	不協和音	結	磯部 光兼	若人の夢	榮 建 二	月	吉田 一夫
女	女	夜	不協和音	結	磯部 光兼	若人の夢	榮 建 二	月	吉田 一夫
女	女	夜	不協和音	結	磯部 光兼	若人の夢	榮 建 二	月	吉田 一夫
ヴァ	グ	夜	不協和音	結	磯部 光兼	若人の夢	榮 建 二	月	吉田 一夫
ヴァ	グ	夜	不協和音	結	磯部 光兼	若人の夢	榮 建 二	月	吉田 一夫

新入選

一点 二点

一点 安藤孝一 石村正太郎 関山光司 木島武雄 木村武司 岩田好太郎

二点 北園有利 工藤恵 塚本和吉 斎藤八郎 栗木茂 毛利博年 阿部至克 山田富士雄 安川恵子 銭谷陽之介 岡悦次 井口進 坂部假子 大河原元 金井彦治 中野敏明 京田信太良 岩永佳久 小峯龍天 結城正美 笠岡好 島口信一 演野一雄

漫画部
カルカチア。近藤日出造
稿。清水 昆

入門は虫の内 九里洋三
抜け道 宮下 森
富士に立つ影 横井蛙平
色を求めて 清水昭治
モデル娘の夢
模範サラリーマン
宇宙旅行 坂本 一
手品師 杉 一
感謝でのむ酒 柿木八郎
巡礼記 シムラ 光
田國の憂鬱 森田成男
要 求 近 忠
ゲームセット 今 三喜
中村武士像 若林カズヲ
平和は彩られて 柿木八郎
無 題 シムラ 光
日本横丁 大場ひろし
恋する生物 今 三喜
砂田構 想 岩田クチオ
怪 岩田クチオ
元気がいい 近 忠
戦後十年 小泉紫郎
ユダはいないか シムラ 光
豊 年 末田時夫
空とれない所 清水昭治
へいぎたい 清水昭治
日本の顔 近 忠
四巨頭会談 清水昭治
給料日 森熊 猛
四巨頭会談 森熊 猛

第二会場
絵画部
男の像 大沢昌助
作品(B) 吉原治良
花蝶 A 鷹山宇一
女 景 織田広喜
風 服部 正一郎
船 伊庭 伝治郎
静 松本 弘二
巖 斎藤 三郎
女 斎藤 三郎
ホ テ ア テ
リ 野村 守夫
小 阿部 金剛
女 岡本 太郎
海 福島 金一郎
観 清水 刀根
解 放 安藤 幹衛
丘の静物 青山 龍水
粧 Oeuvre 松葉 清吾
粧の子 山本 敬輔
山 吉井 淳二
寂 伊藤 研之
寂 伊藤 研之
厨 房 藤川 栄子
鳩とリボン 東郷 青児
海 幸 幸
山 幸 幸
橋上にて 桑原 実
海辺の親子 桑原 実
顔 あげ 鶴岡 義雄

三人 山尾 薫明
裸 寺田 竹雄
おしやれなゲシ 桂 ニキ子
ゲシ 風 原 昌平
そよ 今 長谷 巖
朝 堀 越 隆次
罰 森 田 信夫
究られた海 沢田 哲郎
三人の善人 沢田 哲郎
母子 仰 谷 時子
断 想 山本 不二夫
かなし 石橋 宏一郎
むかしばなし B 吉村 勲
紫 紺 浪江 勤次郎
草 原 鳩 賢三
三つのオレンジ 織田 利ヲ
の恋 B 佐々木 良三
作 品 宮川 富佐子
日本創生記 宮川 富佐子
やまたのおろち 伊賀 勇高
むすめ 小園 井一郎
雪 小園 井一郎
バラード 木梨 アイネ
月夜の音楽会 村上 輝夫
風 景 金沢 幹雄
裸 婦 相沢 義和
作 品 A 古賀 耕児
降 品 A 古賀 耕児
ノイローゼ 上田 民子
港 A 深見 惺一
独り A 大石 隆
すだれ 池田 寅蔵
慈 大淵 寛蔵
欄の游泳 河村 久子

燈りのまど 佐藤 莊平
十字架のある風 上田 弘子
景 因 藤 寿
パベル 稻垣 智
やどり 木 加藤 孝一
水の太 萩原 寛子
春のうた 栗辻 博
怠情 小出 泰弘
クリスマスの夜 増田 善次郎
河 アダムとイザ 増田 善次郎
作 品 88 矢部 桂一郎
浜辺の均衡 園部 孝
灰色の空(A) 林 昭市
月の夜 宇野 藤雄
櫛の下の江 藤 進
作業と自画像 内藤 道広
牛・女・鳥 浅谷 道夫
敗北者 岡戸 寛
宝島の群鳥 森山 重信
緑の花と枯木 結城 靖夫
父 (2) 山田 安住
彫刻部
作 品 笠置 季男
子 品 長谷川 雅司
堅 品 長谷川 雅司
作 品 K 野口 嘉光
形 品 II 米倉 徳
少女の首 因幡 正義
黒い顔 加賀谷 武夫
意を決して 黒田 勝利
馬 野水 信

窓	桂俊夫	沖の島にて	寺田正
店番をする女	中川登志	阿波でこ人形の 楽屋にて	吉城正一
ほし	伊藤善雄	川開き・ぶらん	杉浦恒広
影	安村武男	スード・鳴門の 渦・石風呂の人々	湯本博
子供達・呼ぶ魚	浅野喜市	三人の童子・残	新田好
夜のバラダイス	加藤友一郎	雪	古沢邦男
おつとめがえり	平井太郎	温	安藤喜多夫
道中終つて	花田富士雄	ソバメ・夜の瀬	安野慎一
廃墟・上れ島	中村照夫	戸内海	渡部章正
土佐にて	山崎治雄	顔	井上孝治
白昼夢	的場勇二	ピーターハット	田島由紀夫
絵を描く子・自	小山田忠事	リンタク	土崎一
画像を描く子	泥かぶら	スードの群像	中尾勇次郎
夏の一日	木下欽一	大と子供・かつ	野口豊
日	重見照雄	ぎ屋	野田篤司
少林寺空手拳法	葛原茂樹	夜の交叉点	富重忠夫
風景	田賀久治	静かなコントラ	富重安雄
融けた雪だる	古徳博美	スト	富重柳陽
ま・網を干す人	浜の	朽	船越義雄
々・松の樹	子宮内広吉	飛べそうな犬	小尾広次
オルガン	神山典之	滝にうたれる女	西尾彪
ランプのある部	大坂幹枝	繩 飛び	佐藤正夫
屋	奥元次	水鳥・目立屋・	清川一州
子	三隅実誓	年輪	江口秀夫
雪を喜ぶ子供・	中村啓能	盲児と落	古川勝男
牛まつり	中村政太郎	ヌ	原田正
雨	村尾三郎	生き抜く道	大崎聡明
姉	安部剛	棚 模 様	
子供老夫婦		裏 長 屋	
夜の宇高船路・		歌	
夜の宇高船路・		港に戯れる老と	
魚市場のもめご		孤児	
		帰	

イノドの女	松原朝丸
蓮の茎	広瀬 奏
ピーコンパター	中島七光
ン・繩とサボテ	小松哲也
千	馬 北原洋一
無	題 正木三郎
廃船の顔	1-11 日本
橋・高島屋	
一回一陽会展	
〔批〕	
毎日1	福島繁太郎
日経4	岡本謙次郎
東京4	土方定一
読売5	田近憲三
毎日6	
東京タイムズ7	
時事夕刊7	
朝日8	河北倫明
産経9	荒城季夫
東京10	本間正義
産経14	三輪福松
美術批評10月	針生一郎
美術手帖11月	
〔記〕	
東京8月18	
東京タイムズ8月27	
東京8月28	
産経9月11	
〔受賞〕	
一陽賞—高根秀雄(絵画)	
青麦賞—楢戸 茂(絵画)	
新会員—棟方寅雄(絵画)、伊	
本淳(彫刻)	

新会友—近藤長三郎、松下明	
治、西山園二(以上絵画)、	
中村暉、根本勲、名塚樹也	
(以上彫刻)	
主要出品目録	
絵画	
窓	鈴木信太郎
林園園(A)	
真鶴風景(B)	
波と船	
波辺の村	
波と岩	
長崎の海	
踊三題の内(点	高岡徳太郎
紅(パレリーナ)	
シ(くわでさあ)	
海三題の内(A)	
シ(B)	
シ(C)	
星座アンドロメ	野間仁根
生 物 A	
シ B	
星座蛇つかい	
貝 殻	
双 魚	
海	
聖堂(山口市ザ	荻野康児
ビエル記念堂)	
追 憶(香港)	
NHONGKO	

街に想ふ(ホン	荻野康児
コントラスト	
幻影(台南開元	
寺)	
寂(台南孔子廟)	
卓上の花	米良道博
少女像	
二人の裸女	
日本風の金具と	
裸女	
壺の静物	
ダリヤと瓜	
三人の少女	
浅 間 山 鱸	利彦
群 像	
秋 空	
高原の夏	
ピカソ恋す山路真護	
受胎告知	
天使と貝殻	
一 隅	丹下富士男
台 所	
海 後	
食 後	
曲 馬	
明 暗	
海岸の断崖	由太郎
S 海 岸	
人 間 苦 中	田 豊
望 郷	
田園の家族	
聖 夜	
南方の園	

浴後	山谷 鏝一
愛撫	子
母と	濱辺の静物(青いリンゴ)
ス	長谷川三千春
ス	(魚)
ス	(流水)
彫刻	八月六日 浅野孟府
母と子たち	(木植木力)
少年坐像(石膏)	タ
母子(テラコッタ)	タ
顔(テラコッタ)	タ
少女(タ)	タ
臥婦(ビッチ)	タ
童女(タ)	タ
40回院展	1-19 東京都美術館
毎日1	(批) 北川桃雄
産経4	瀬木 慎一
東京タイムズ	7 嘉門安雄
日経7	朝日7 河北倫明
朝日7	東京8 今泉篤男
毎日8	時事9 鈴木進
東京10	三輪 鄰
産経14	本間正義
美術手帖11月	三輪福松
(記)	徳大寺公英
東京8月28、8月29	

産経9月5、9月12	朝日夕刊9月15
(受賞)	日本美術院賞・大観賞
羽石光志、清原齊、今野忠一、馬場不二(以上絵画)	山口信子(彫塑)
奨励賞・白寿賞	伊坂静雄人、島田訥郎、真野満、村田瑞枝、酒井重人、福王寺法林、岡本弥寿子、高橋玄輝、豊秋半次、松尾冬青、郷倉和子、須田洪中、菊川多賀子、船田玉樹、前田暉、内田土卵(以上絵画)、岡村康彦、土井要輔、茨木敏雄、三枝恭也、矢形勇、渡辺利尙、小柳津三郎、久保寺恭、松本勝弥、関長造、山崎修、荒川明照(以上彫塑)
出品目録	。印同人
山羊のゐる風景	津田 真
浜の人たち	莊司 福
薄	暮三村石邦
鳥と	女竹内幸枝
暮	秋今野忠一
泉(伊勢物語)	真野 満
五月のぶどう山	戸張節士
土師	部羽石光志
流れ	A.中島 清
ス	B.ス

馬	須田洪中
静寂	片岡球子
冠(無鑑査)	馬場不二
夕	大野重幸
登呂の女達	高橋玄輝
石と	島田訥郎
エジプトの空	豊秋半次
澄	松井牧牛
節	森本有泉
田園の白糸	尾形有載
滝	小林三季
春	大矢黄鶴
花と果	山田広吉
塩	寺本郷史
即現婦女身	小松 均
海	伊坂静雄人
夏	関口正男
梨	川辺菊久
六人の女が奏でる西部の歌	小谷津雅美
春	郷倉和子
風	飯田小枝子
妹	青仙波久栄
沼	花新井勝利
壁	岩橋英遠
異国人	鶴飼節夫
草花の群	川島余音子
埃及幻想	真道黎明
鷹	近藤千尋
牛と子	横山余禰
森	松尾冬青
月	小倉遊亀
安藝の涅槃山	船田玉樹
湖畔	森田曠平

建	物影山 勇
ピアのある室	三石紅樹
内	華山と椿山。太田聰雨
沖繩風俗	酒井三良
朝	郷倉千靱
出をまつ(石橋)	前田青郁
城	奥村土牛
鴻門	安田鞆彦
風蕭々兮易水寒	横山大観
M	生堅山南風
遙	中村貞以
山耕至天	中島多茂都
浜	千鳥村田瑞枝
醍醐の席	内田土卵
猫と娘たち	岡本弥寿子
暮れ六つ時	後藤純男
閑	前田 暉
佳	日松岡政信
樹	酒井亜人
窓	田中青坪
江島縁起(弁才天と九頭龍神の結婚)	小谷津任牛
朝	福王寺法林
宵(無鑑査)	清原 齊
初	富取風堂
婦女曼茶羅	北沢映月
湖畔の村	大河内三代女
貝	浜崎左髪子
舞	長谷川青澄
松	藤井白映
女	鎌倉秀雄

七	面鳥 神田浩二
石	井川 大矢 紀
植女(住吉御田植神事)	小川雨虹
川尻駅の貨車	大森真津夫
志摩の海女たち	藤田高日子
樹	塩出英雄
市	菊川多賀子
新	宮本青架
山	若林 卓
夏	たけなわ 横山善信
気	仙沼 小島一谿
残	雪松井宋鳩
楽団の出発	川上芳江
樹	斎藤俊文緒
浅	春平山郁夫
松林の見える丘	加藤勝重
子	等の春 江尻十五郎
田	室植 加藤将郎
午	後 大塚花御史
庭	牧野秀一
小	岩風景 西村雨北
集	マリちゃん猿 益井三重子
暖	冬 並木翠甫
T	父 堤徳次郎
雨	星野 楚人
小	峰 古西ゆり子
水	池田憲二
親	斎藤達雄
蓮	熊坂東以
露	甲斐巴八郎
夏	森 小沢道治

森を縫つて	江口正忠	潮を見る	月岡栄貴	村山	祭館岡栗山	土	蔵染谷祐通	坐つた女	渡辺利燿
海辺の裏町	寺門昭治	並木初夏	吉川朝衣	枯山	水里見米山人	花の子	店兒玉徹	男の首	茨木敏雄
山と湖と裸婦	松尾敏男	瀧声	池田栄子	休暇の一日	島田良祐	青	N常盤大空	Nさん	トソ辻
緑	高崎興	浴室	丸木スマ	漁村	浅田大穰	ヴァイオリン	戸牧野三生郎	クハルソ	クハルソ
さいはての北に	木間堯彩	簪	丸木スマ	婦人たち	赤井伸生	夏	日成神秋三	座りポーズ	古島実
働く女達	浅井金万	水の仙郷	大西瑤都	影	小市美智子	奥穂	高入江正己	学	徒青柳謹衛
春	日	麦の丘より	佐藤白鶴	冬	中村春泥	花	高浪勢以	或る女子大生	小林章
習作(鯉鱈)	対馬迪	傘	後藤杏鳩	夕	青木英夫	伊	豆池田龍太	白	古島実
吉祥悔過	中庭煖華	漢	堀川公子	高	原今井映方	牛	舎樋笠数慶	青年像(無鑑査)	山口信子
町	角小島丹彦	外	苑	伊那谷の清流	角桑原繁	彫塑	町南摩朱鳥	裸婦(無鑑査)	千野要輔
石と	水鈴太孝之	街	伊那谷の清流	松	上田畦草	座	山崎照彦	裸婦立像	土井要輔
老	内阪本皓楓	街	伊那谷の清流	朝	顔中出節子	無	山崎照彦	長倉夫人像	長浜虎雄
粧	杉番場春雄	街	伊那谷の清流	登	校高野常吉	習	山崎照彦	Z	胸像
暮	沼小野静以	蘇	内	初	花山口静恵	シ	沈む地球	水	遊
前	松村嘉夫	南	蘇	登	校高野常吉	習	山崎照彦	水	遊
爽	丘本多茂	水	蘇	初	花山口静恵	シ	沈む地球	水	遊
茶話	松崎直樹	参	蘇	初	花山口静恵	シ	沈む地球	水	遊
つゆあ	四田観水	鹿	蘇	初	花山口静恵	シ	沈む地球	水	遊
麦	刈大塚和	雪	蘇	初	花山口静恵	シ	沈む地球	水	遊
少	樹下孝太郎	慶	蘇	初	花山口静恵	シ	沈む地球	水	遊
園	西丸静園	風	蘇	初	花山口静恵	シ	沈む地球	水	遊
踏切	西沢周一	け	蘇	初	花山口静恵	シ	沈む地球	水	遊
岳	大塚堅二郎	け	蘇	初	花山口静恵	シ	沈む地球	水	遊
初	ラウラトルネ	け	蘇	初	花山口静恵	シ	沈む地球	水	遊
あねいもうと	津田時子	け	蘇	初	花山口静恵	シ	沈む地球	水	遊
運	河吉川重和	暮	蘇	初	花山口静恵	シ	沈む地球	水	遊
秋	高村草樹	暮	蘇	初	花山口静恵	シ	沈む地球	水	遊
夕	相沢義二	暮	蘇	初	花山口静恵	シ	沈む地球	水	遊
浜	顔小栗正	暮	蘇	初	花山口静恵	シ	沈む地球	水	遊
当	庭坊俊文明	暮	蘇	初	花山口静恵	シ	沈む地球	水	遊

裸婦 矢形 勇
 小林圃伯像(無鑑査) 三宅多喜男
 習 像 久保寺恭
 夏の 人 山本豊市
 Y 夫 人 山本豊市
 斎藤氏母堂像 関谷 充
 少女のトルソ 新海竹蔵
 仏母子像 大内青圃
 藥叉神藥叉女藥師十二願群像の心象悉除身 〃
 女 の 首 松本勝弥
 エチュード 〃
 滝沢氏寿像 黒崎 弘
 硯 岡村康彦
 崇 の 人 福士勝雄
 浜 の トルソ 小林尚雄
 女のトルソ 野原 東
 習 作 矢崎虎夫
 腰かける女 〃
 裸婦 〃
 女の胸像(無鑑査) 田中太郎
 鏡を持つ少女 〃
 少 女 像 三枝恭也
 青年座像 佐藤悦夫
 加藤与五郎先生寿像 長谷川豊雄
 裸婦坐像 小林三郎
 裸婦立像 清水正博
 A 嬢立像 大和作内
 裸婦立像 山本力吉
 父の像 長浜建樹

男 立 像 高橋友武
 胸 像 鎌田 博
 10回行動展 1-19 東京都美術館
 〔批〕
 毎日1 岡本謙次郎
 東京4 土方定一
 毎日6 田近憲三
 東京タイムズ7 時事夕刊7
 朝日8 河北倫明
 産経9 荒城季夫
 東京10 本間正義
 産経14 三輪福松
 美術手帖11月 中原佑介
 (記)
 東京8月21、8月24、
 東京タイムズ8月23、8月26、
 8月28
 (受賞)
 行動美術賞—田中阿喜良(絵画)
 会友賞—平川勇、増田悟郎(以上絵画)
 新人賞—深見隆、森口宏一(以上絵画)、高原慎悟(彫塑)
 奨励賞—伊藤清、松山治樹、鬼頭正人、伊原康雄(以上絵画)、篠井欽治(彫塑)
 主要出品目録
 捕われの人 高井寛二

母 子 高井寛二
 待 つ 人 佐藤真一
 歩む 人 〃
 聖痕二部作 田中忠雄
 橋 (A) 川原章二
 (B) 〃
 石 段 伊藤信夫
 ポプラある雪景 伊藤信夫
 河 畔 古家 新
 春雪の港 〃
 波 野 〃
 新緑の丘 〃
 港 内 小出卓二
 窓外風景 〃
 港 湾 展 望 〃
 燻 魚 河野通紀
 発 芽 〃
 脱ぐ 女 柏原覚太郎
 二人の女 〃
 ハムレットに於ける芥川比呂志 向井潤吉
 水辺人物 飯田清毅
 扇 覆倉省吾
 煙 〃
 父と子と母 下高原龍己
 大阪アベノ地下 〃
 母と子の対話 〃
 嵐峽の紅葉 福井 勇
 保津峽の黄昏 〃
 冬 家 族 田中勇次郎
 少年 達 〃
 少 女 坪内節太郎

晩夏(こども) 坪内 節太郎
 立石山早春 伊谷賢蔵
 別府朝焼 〃
 由布獄残照 〃
 人 斎藤真成
 降 架 西 阪 修
 湖畔の白樺 田辺三重松
 大雪山と山峡 〃
 大雪山と山峡 〃
 対 話 小林 武夫
 現 実(B) 津高和一
 現 実(A) 〃
 地に座す人達 山中春雄
 飛 ぶ 〃
 統 〃
 繋 〃
 土 〃
 作 品 伊藤久三郎
 空 港 村田實史雄
 海 浜 〃
 失なつた風景 〃
 プラカード 高橋 進
 白 い 雲 〃
 晴れた日 三芳 悌吉
 広場の片隅 〃
 親 舟 子 舟 田川 寛一
 奥多摩の哀愁 〃
 渦 潮 〃
 抽象と具象と 〃
 (A)三八度線 〃
 (B)アリラン峠 〃
 武蔵野抄 難波香久三

荒 野 高須 国之
 傷つける戦士 〃
 彫 塑
 若 い 女 林 是
 立 像 伊勢典賢
 座る形態 I 今村輝久
 牙 〃 II 〃
 中島快彦
 か お 建 嶋 覚造
 は に わ 〃
 赤いオブジェ 阿井 正典
 作 品 〃
 アフリカの木 1 向井 良吉
 2 〃
 島村達彦個展 1-6 資生堂
 光風会々員滞欧スケッチ展 1
 15 光風会館
 形象派展 1-11 名古屋・愛
 知県美術館
 内藤健一個展 1-10 タケミヤ
 石川勇個展 1-6 サトウ
 佐藤大寛東洋古典派画展 1-
 7 銀座・松坂屋
 恩地孝四郎遺作展 1-10 な
 びす
 富田溪仙展 1-15 神戸市立
 美術館
 3回生々々展 1-8 大阪・
 高島屋
 晩期の鉄斎展 1-10月9 国
 立近代美術館 (批)東京タイ
 ムズ13、東京25、26(中川一政)

作品目録

層層雨霽	紙本水墨	一八七	牧庵跨虎	絹本著色	一九〇七	鐘聲撞白雲	紙本著色	一九一七	楮公訓子	紙本淡彩	一九一三
層層積水	紙本淡彩	一八九	潤州丁卯橋	絹本著色	一九〇三	光如來面像	紙本水墨	一九一〇	普陀洛山觀世	紙本淡彩	一九一三
山山不盡	紙本淡彩	一八五	昇平瑞應	絹本著色	一九〇九	松栢	紙本墨面	一九一〇	音菩薩像	紙本淡彩	一九一三
山 水	絹本淡彩	一八五	梅華書屋	絹本著色	一九〇九	鯉 栽	紙本墨面	一九一〇	歲 朝	紙本淡彩	一九一三
消 閑 乘 事	紙本墨面	一八七	水墨山水	紙本淡彩	一九〇九	益 栽	紙本淡彩	一九一〇	閨窓倚竹	紙本淡彩	一九一三
遊戯可以消日	紙本淡彩	一八七	壽山福海	絹本著色	一九〇九	武陵桃源	絹本著色	一九一〇	静居對話	紙本水墨	一九一三
太田垣蓮月肖	絹本淡彩	一八七	夜 楸	紙本墨面	一九〇九	學士耕雨	絹本著色	一九一〇	天保九如章	紙本淡彩	一九一三
壳茶翁茶具	紙本淡彩	一八〇	青綠山水	絹本著色	一九〇九	呂僊翁自寫像	絹 本	一九一〇	牧溪山居	紙本淡彩	一九一三
卷	紙本淡彩	一八〇	送別詩圖	紙本著色	一九〇九	僊緣奇遇	絹本著色	一九一〇	瀛洲仙境	紙本著色	一九一三
老子 像	紙本淡彩	一八三	謝庵移居	絹本著色	一九〇九	蘭 石	紙本淡彩	一九一〇	青竜起雲	紙本淡彩	一九一三
松芝不老	紙本淡彩	一八三	陳元贊隱栖	絹本著色	一九〇九	乘槎浮海	紙本淡彩	一九一〇	武陵桃源	絹本著色	一九一三
心如工面師	紙本淡彩	一八六	安 樂 居	紙本著色	一九〇九	相 生 松	紙本淡彩	一九一〇	東坡煎茶	紙本淡彩	一九一三
古うつの葛の	紙本淡彩	一八六	不 尽 山 絕 頂	紙本墨面	一九〇九	梅華書屋	絹本著色	一九一〇	松 竹	金箋紙著色	一九一三
細道	紙本淡彩	一八六	弔芙蓉高士詩	紙本墨書	一九〇九	魚籃觀音像	紙本著色	一九一〇	匏 瓜	紙本淡彩	一九一三
三獸饗帝	紙本淡彩	一八六	石澗山水冊	紙本淡彩	一九〇九	朝晴雪	紙本淡彩	一九一〇	暮山歸樵	紙本淡彩	一九一三
青綠山水	絹本淡彩	一八六	梅山幽趣	絹本著色	一九〇九	鹿門騎驢	絹本淡彩	一九一〇	偃遊蓬萊	紙本淡彩	一九一三
十便十宜	紙本淡彩	一八六	和合万福	絹本著色	一九〇九	白隱訪白鬮子	紙本淡彩	一九一〇	古梅盛開	紙本淡彩	一九一三
景德陶窯卷	紙本淡彩	一八六	高士觀瀑	紙本墨面	一九〇九	東瀛神山	絹本著色	一九一〇	武陵桃源	紙本淡彩	一九一三
樂此幽居	紙本淡彩	一八六	晚江漁漁	絹本著色	一九〇九	天賜福壽	紙本淡彩	一九一〇	魁星 贊	紙本淡彩	一九一三
摩吒羅神祭	絹本著色	一九〇	模本沈石田花	紙本水墨	一九〇九	浮島原晴景	銀箋紙著色	一九一〇	追 離 之 贊	紙本著色	一九一三
山 水	紙本墨面	一九〇	卷 根	絹本淡彩	一九〇九	東坡笠履	紙本淡彩	一九一〇	東坡洗兒詩	絹本著色	一九一三
山 水	同上	一九〇	菜 根	紙本淡彩	一九〇九	東坡笠履	紙本淡彩	一九一〇	伏魔大帝闕雲	紙本著色	一九一三
十二支図贊	紙本墨面	一九〇	萬 歲 書	紙本墨書	一九〇九	癡 顛 圖 史	紙本淡彩	一九一〇	長像	紙本著色	一九一三
雪舟禪師軼事	紙本淡彩	一九〇	碧桃壽鳥	絹本著色	一九〇九	濱洲僊境	絹本著色	一九一〇	君山先生渡歐	紙本淡彩	一九一三
卷	紙本淡彩	一九〇	遠塵大師	絹本著色	一九〇九	讀書立志	紙本淡彩	一九一〇	送別詩	紙本淡彩	一九一三
蓬萊僊境	紙本著色	一九〇	卓氏当墟	絹本著色	一九〇九	小點大胆	紙本淡彩	一九一〇	青山万疊	紙本淡彩	一九一三
武陵桃源	紙本著色	一九〇	武陵桃源	絹本著色	一九〇九	遊宇治川詩書	紙本墨蹟	一九一〇	讀書船	紙本淡彩	一九一三
模嶺翁悼詩書	紙本墨書	一九〇	試筆虎	紙本淡彩	一九〇九	遊宇治川詩書	紙本墨蹟	一九一〇	金麟吐印	紙本水墨	一九一三
利市三倍	紙本淡彩	一九〇	鮎	紙本淡彩	一九〇九	六 貞	絹本墨面	一九一〇	山紫水明処	紙本水墨	一九一三
上下	紙本淡彩	一九〇	掃蕩俗塵	絹本著色	一九〇九	春の海	絹本淡彩	一九一〇	水郷清味	紙本淡彩	一九一三
梅溪春曉	絹本著色	一九〇	東瀛三神山	絹本著色	一九〇九	濃墨山水	紙本水墨	一九一〇	心遊僊境	紙本淡彩	一九一三
山 水	金地水墨	一九〇	幽溪歸樵	紙本淡彩	一九〇九	登州海市	紙本淡彩	一九一〇	福祿壽	紙本淡彩	一九一三

梅華書屋図	紙本著色	一九四
葡萄苑図	紙本淡彩	〃
山輝水媚図	紙本著色	〃
富而不驕図	紙本淡彩	〃
純君子図	紙本墨画	〃
鏡 棧 図	紙本著色	〃
源朝臣義経像	紙本淡彩	〃
翰林風月	紙本淡彩	〃
榮啓期図	紙本淡彩	〃
山莊風雨図	紙本淡彩	一九〇
洛西牛祭図	紙本淡彩	〃
山竹軼事帖	紙本墨画	一九七
慈悲大士像	紙本墨画	一九七
山上憶良卿像	紙本淡彩	一九七
并歌	紙本墨画	一九六
正気驅邪図	紙本墨画	一九六
源義家朝臣像	紙本淡彩	一九五
金銀泥梅花図	紙本金銀泥	一九六
牧 牛 図	絹本著色	一九〇
杏花村荘図	色紙淡彩	一九三
芳山勝概図	紙本淡彩	明治
孝女曾与像	絹本著色	明治
松尾芭蕉像	絹本著色	〃
群櫻羅漢図	紙本墨画	一九七
霞樵軼事	紙本淡彩	〃
清麿朝臣絵巻	紙本著色	一九六
武陵桃源図	紙本著色	〃
菅 公 像	紙本著色	一九三

迎福驅邪図	絹本著色	明治
能因法師	紙本彩色	〃
蓬萊山図	紙本彩色	〃
探幽法印愛玩	紙本墨画	〃
茶壺都返図	紙本墨画	〃
寿 老 人 図	紙本彩色	一九三
大石氏祇園遊	紙本彩色	〃
樂 園 図	紙本彩色	〃
富士山図	紙本木炭	一九四
草花册図	紙本淡彩	一九五
面塑一法図	紙本淡彩	一九六
山閣談禅図	紙本墨画	一九〇
曇徴作墨図	紙本墨画	一九四
山紫水明処	紙本水墨	一九四
耶馬溪真景図	紙本着色	一九七
野宮雪霽	紙本淡彩	一九六
西洋医祖程父	紙本淡彩	明治
菖蒲故事図	紙本淡彩	明治
木蘭代戌図	紙本墨画	一九九
蘇公戴笠図	紙本淡彩	一九〇
漁父獲印図	紙本淡彩	一九三
瀛洲偃境図	紙本淡彩	一九三
大西澄子水彩・染色個展	2	1
7 村松画廊	〃	〃
小川孝子、岩佐敏雄、服部宏三	2	6
人展	2	6
日本橋・丸善	〃	〃

[批] 朝日9	3 回国際印刷美術展	2-7
銀座・松屋	フランス出版美術展	2-7
銀座・松屋	太平洋画会染色部小品展	2-7
7 東京・大丸	4 回御々展	2-6
京都府ギ	ヤラリ	〃
サロンド・ジュワン展	2-1	〃
11 名古屋・愛知県美術館	20 回デッサン社展	5-10
中央公論社画廊	阪倉宜暢滞欧作品展	6-11
日本橋・三越 [批]	東京10	〃
(岡本謙次郎)	1 回秋高会日本画展	6-11
日本橋・高島屋 [批]	東京	〃
9 (久富貢) [記] 産経8	全日本産業工芸展	6-11
渋谷・東横 [記] 日経9	阪本雅城水墨画展	6-11
野・松坂屋	ヴォロンテ同人展	6-10
文	7 回立軌会展	6-11
日本橋・三越 [批]	東京8	〃
岡本謙次郎) 朝日9、毎日10、みづ	多11月(柳亮)	〃
出品目録	〃	〃
食 事 有 岡 一 郎	〃	〃
或る肖像	〃	〃

習 作	ベリグウのサン	飯島 一次
クロン	ニームの回想	〃
サンタ・マリア	デルフオーレ	〃
シヤルトル	マロニエとミュ	〃
ゲ	マロニエとリラ	〃
燈	白い倉庫	牛島憲之
白い倉庫	クレインの風景	〃
タンクの道	壇輪に依る作品	榎戸庄衛
A	壇輪に依る作品	〃
B	壇輪に依る作品	〃
C	壇輪に依る作品	〃
D	壇輪に依る作品	〃
E	壇輪に依る作品	〃
F	壇輪に依る作品	〃
G	壇輪に依る作品	〃
H	壇輪に依る作品	〃
I	壇輪に依る作品	〃
J	壇輪に依る作品	〃
白衣の人	大貫松三	〃
貝な	〃	〃
菖蒲	〃	〃
白い花	〃	〃
山の上の家	須田 寿	〃
牛を売	〃	〃
市場の女たち	〃	〃
マノロ・ロ	〃	〃
海の静物	〃	〃
馬と	〃	〃

風景	家族と人形	玉置弘三
母子A	かたぐるま	〃
母子B	子供	〃
子供A	子供	〃
子供B	子供	〃
静物	鳩を持つ女	藤橋正枝
ヴァイオリンのある静物	〃	〃
静物	〃	〃
二人	〃	〃
男	阿波の町	山下大五郎
港の水門	〃	〃
とうがんの静物	〃	〃
はすの実の静物	〃	〃
鉄塔の風景	〃	〃
青い家	若狭 暁男	〃
グワツシュ	〃	〃
黄色い家	〃	〃
白い家	〃	〃
緑の家	〃	〃
街の家	〃	〃
風景	〃	〃
51年協会油絵展	1-11	大阪
阪急	〃	〃
13 回有秋会日本画展	6-15	大阪
大阪市立美術館	〃	〃
関西水彩画展	6-15	大阪
立美術館	〃	〃

木村賢太郎彫像展 7-10

日本橋・丸善 [批]朝日9

宮河久個展 7-11 資生堂

4回遠藤琢郎個展 8-13 村

松面廊

高須芝山個展 9-15 新宿・

伊勢丹

大江戶情緒展 9-21 東京・

大丸

関谷一夫個展 9-13 美松面

廊

芝田耕個展 9-13 京都府ギ

ャラリ

メキシコ美術展 10-10月23

東京国立博物館

[批] 東京21

説光夕刊21

日経22

[記]

説光夕刊5

徳大寺公英

勅使河原蒼風

植村鷹千代

瀬木慎一

今泉篤男

土門 拳

佐藤春夫

奥野信太郎

福島繁太郎

野間清六

青野季吉

猪熊弦一郎

30 27 26 23 20 19 17 15 12 8 7 6

美術展覧会(9月)

10月4 安部公房

5 草野心平

7 益田義信

8 由起しげ子

10 利根山人

14 武者小路実篤

15 富永惣一

説光7

座談

M.レイトル

江上波夫

岡本太郎

説光7

時事夕刊15

朝日17

東京タイムズ18

毎日20

説光夕刊17

産経夕刊22

東京10月8

染織名作展 11-14

銀座・松

坂屋

菊地精二個展 12-15

資生堂

[批]美術手帖11月(柳亮)

ビエール・アルシンスキー個展

12-20 なびオ [批]美術批

評10月(東野芳明) [記]毎日

18(瀬木慎一)

13回青葉会展 13-18

日本橋・

三越

酒井抱一展 13-25

渋谷・東

大坪権治・仲村俊夫・吉川徹郎

三人展 13-17 サエグサ

井口啓油絵個展 13-17 文房

堂

大観米寿記念「日本の歩み」展

13-18 日本橋・三越

日本民芸協会「新しい生活民芸」

展 13-18 日本橋・三越

関口如水滂欧スケッチ展 13-

18 日本橋・三越

森川昭・松田博二人展 13-17

日本橋・丸善

桐絲会「剪糸」展 13-18

日本

橋・三越

入江令一、片山かず子二人展

13-18 大阪・阪急

平野古陶軒阪急開設記念古美術

展 13-18 大阪・阪急

馨香会同人展 13-18 日本橋・

三越

ヘンリー・ミラー水彩画展 13

20 大阪・フジカワ

5回デモクラート美術展 14-

20 美松画廊

現代イタリア美術展 15-10月

9 プリヂェストン [記]時事

夕刊17、朝日20、21、22

金子正明、石川量二二人展 15

19 村松画廊

裸婦展 16-30 光風会館

熊野俊一個展 16-20 資生堂

3回白鳥会洋画展 16-21 銀

座・松屋

連蝶会蠟染展 16-21 銀座・

松坂屋

創造美術協会展 16-28 大阪

市立美術館

小合友之助染色作品展 16-20

京都府ギャラリ

フランス名画複製と高校教育美

術展 16-21 横浜・松屋

明日の住宅建築展 17-27 銀

座・松屋

モダンアート協会秋季展 19-

10月6 樺画廊

4回葵会展 19-24 日本橋・

丸善

西村計雄個展 19-29 京都市

美術館

青木大乗日本画展 20-25 日

本橋・高島屋

石井柏亭外遊作品展 20-25

日本橋・三越 [批]朝日23

滝川武油絵個展 20-24 文房

堂

三愚集展(漱石、一茶、芋銭)

20-25 上野・松坂屋

一九五〇年協会展 20-24 日

本橋・丸善

遷宮記念春日大社宝物展 20-

25 大阪・阪急

三島茂司、中川時之介、河端亮

治油絵三人展 20-25 大阪・

阪急

明治・大正・昭和名作美術展

(文部省地方巡回展) 20-10

月3 福井県

平井進個展 21-30 タケミヤ

[批]朝日23、美術批評11月

(藤井昇)

田辺至新作油絵展 21-25 日

動画廊 [批]朝日23

李龍眼作品展 21-23 東京藝

大陳列館

19回新制作協会展 21-10月7

東京都美術館

[批]

産経夕刊27

朝日28

東京28

時事夕刊28

毎日29

東京タイムズ29

産経30

日経10月1

朝日10月5

美術批評11月

美術手帖11月

新建築11月

[記]

毎日8月26

東京14、17、19

[受賞]

協会賞

山東洋、赤穴宏(以上油

絵、五十嵐芳三(彫刻)

新作家賞

服部和益、綱谷義郎、橋

本武、飯田四郎、原田ミ

ナミ、糸田芳雄(以上油

絵)、近藤弘明、黒沢吉蔵、

野崎貢、加山又造、毛利

武彦、石木正(以上日本画)、阿部米蔵、豊福知徳、加藤昭男、大岡英代(以上彫刻)

新建築賞

小林保治、原田貞次郎、鈴木誠太郎、荒川清

新会員

玉置正敏、村尾隆栄、鈴木新夫(以上油絵)

出目録

印 会員

油絵

午後 海山東 洋

鳥の女

鳥と偶

雨 赤穴 桂子

伝 赤穴 桂子

発 赤穴 桂子

L I N E 青峰 重倫

女の風景 深尾 庄介

石器時代 田中 鶴子

浮 田中 鶴子

浮 田中 鶴子

石器時代 田中 鶴子

喜劇的 B A N S 玉置 正敏

過去への過程 西村元三朗

追憶 城口 幸男

作 品 鎌田 正蔵

異 邦 人 伊藤 継郎

子供の三体

鳥籠のある窓辺 岡屋俊彦

漁網 小関利雄

雪崩 小関利雄

審判 小関利雄

街景 小林義範

船渠風景 高田一郎

P・M・3 高田一郎

煙突つくり 久野 真

P L 3 X G E 1 D 久野 真

P L 3 X G E 1 S 久野 真

氷屋 高橋 昭

送 野中 進

ほりわり 名柄 禎子

貝がら 鈴木 新夫

赤い鉄骨 鈴木 新夫

ひるね 鈴木 新夫

六つの顔 今井 隆

作品 51 番 斎藤 誠一

晩 夏 松田 稔

ドックの船 野中 一三

ドックの附近 野中 一三

木工場 若松光一郎

捕えられた木の葉と虫 西田 信一

顔 西田 信一

糸 原田ミナミ

活 原田ミナミ

経 原田ミナミ

平和公園風景 三上正敏

赤い沼 石川 勇

靴磨き 服部 和益

木馬 中島 節子

親子像 中島 節子

作品 C 中島 節子

七口 真鍋 一男

たまねぎ A 会田 小三郎

猫をだくこ B 上野 卓

六つの顔 入江 利治

クスリ工場 陶山 寛義

滑走路 中尾 進

赤い椅子の夢 中尾 進

N O A N O A 大木 達雄

港の街 大木 達雄

港の街 大木 達雄

バレリーナ 三田 康

赤い衣 三田 康

めい衣 三田 康

くるまの唄 佐野 ぬい

こるまの唄 佐野 ぬい

失意の街 野中 弘三

港 岡田 正二

働く人と家族 小磯 良平

歩む男 丸山 正三

キオスク 丸山 正三

沼 今井 麗子

もやの中に 今井 麗子

北国の冬のおと 神門 四郎

静物(2) 古茂田 守介

少女(1) 伊勢 正義

横浜風景 A 柴田 善登

少女と鳥 中孝 昌

少 宇方 隆士

石 富岡 惣一郎

だんまり 村尾 隆栄

無題 村尾 隆栄

四つの自画像 中村 貞夫

生存競争 松浦 正雄

つみあげる 吉田 友三

雪 竹坂 井範一

横むく 人河 合房子

音 楽 関 光 昭

或る船 関 光 昭

海 船 関 光 昭

うきわ 関 光 昭

街工場 関 光 昭

重荷 関 光 昭

示路 関 光 昭

反歩 関 光 昭

独り歩き 関 光 昭

座 関 光 昭

立 関 光 昭

作 品 関 光 昭

唄とおどり 関 光 昭

舟作る人 竹谷 富士雄

裏 関 光 昭

机、椅子(A) 中西 喜一

鳥かご 矢島 金子

遠い街、近くの坂本 和男

九十九里海岸 石川 滋彦

網と舟 石川 滋彦

街、山羊、子供 草野 誠

発 生 加藤 金一郎

創 生 加藤 金一郎

モノマで聞いた クールな演奏 佐 善明

人の楽園 鶴見 雅夫

日陰の人 有安 隆

凧と人 近藤 茂

秋 1 平岩 幸郎

象形詩 B 志田 弥広

作 品 B 志田 弥広

作 品 B 志田 弥広

軌道 A 志田 弥広

鳥と横臥する女 脇田 和

水槽の鳥 脇田 和

鳥と住む 脇田 和

埋められる海 安保 健二

習作 牛窪 正

影 赤利 照

踊る男 赤利 照

狐の嫁入り 赤利 照

建 物 安宅 礼子

建 物 安宅 礼子

建 物 安宅 礼子

過去の人間 永江靖子
赤と黒のシルクハット 青木国雄
無題 小林徳三
鉄のつく日 須藤和夫
室内の構図A 須藤和夫
作 品B 小山タロ
花 長野たみ子
過去と現実 佐々門恭三郎
果樹園 竹本三郎
運ばれて行く 村上圭二
のぞいてた子 伊坂太良
廃滅(楽書の系譜) 井上 購
崩壊(シ) 井上 購
抽斗の兄弟 柴田 寿
騎士と竜角 柴田 寿
真夏の夜の夢 柴田 寿
カテドラル 柴田 寿
星座 柴田 寿
考え 佐藤亜土
フアンタジック 鈴木大典
な港 鈴木大典
作 品C 小本昌彰
白い溪谷 坪井英雄
炭俵 長尾 剛
ダムのある風景 太田 忠
池のある風景 太田 忠
木の顔 鈴木悦郎
少 女 鈴木悦郎
異 端 者 熊本利一

山羊と二人 荻 太郎
洗濯女 荻 太郎
水虫 池田 錦太郎
食し 椀内 誠二
あし 柴田 俊一
玩具 品B 中島利子
少年の鳥籠 内田武夫
絵を描く 内田武夫
少 女 内田武夫
鶏を抱く 大磐冷子
進場の夕 大磐冷子
工場の夕 大磐冷子
キカイトの太陽 宮脇公実
はらつば 宮脇公実
黒い花 延 樹
夕陽 延 樹
アミにかかった 大磐冷子
魚と打つ人 有賀良治
魚と埴輪と骨 大矢 宏
孤 独 三宅 幹一郎
五月の孤独 三宅 幹一郎
画 室 豊四郎
釣する人 豊四郎
作 品 太田 博
深海漁場 渋谷八郎
花はなび 西田 勝
朝 花 西田 勝
誘われる喪中の 内田光之助
女 近藤正一
磨 船 秋元利生

作 品A 近藤竜男
黒い魚船 松田 久
プンスの悲歌 松田 久
雪の郷 渡辺 三郎
叱られぼうず 片山 勉
鏡と絵を描く人 野村 敬二
受 難 寺 戸 恒 晴
鳥 寄 寺 戸 恒 晴
窮 寄 寺 戸 恒 晴
コンボジション 村上 安雄
金 魚 国 沢 和 衛
作 品 赤 溝 部 秀 夫
作 品 1 相 場 秀 夫
な ぎ 長 野 祥 三
き し み 丹 羽 和 子
成 長 丹 羽 和 子
馬と生命 斎藤 正夫
情 愛 斎藤 正夫
太陽と田園 牛田 操
午 下 加 治 屋 陸
退 化 し た 女 藤 岡 章
建 物 川 原 康 孝
室 内 道 工 博 子
起 重 山 崎 佐 一 郎
街 機 平 岩 郁 郎
生 産 的 構 成 内 田 安 彦
母 と 子 堀 江 恒 夫
丘の見える風景 坂 江 重 雄
仏の歌える 三 枝 守 正
一人の仏 三 枝 守 正
夜の歌 戸 田 綾 子
黎 明 戸 田 綾 子
漁 夫 細 野 荘 吉

ドイノの悲歌 石原 薫
その後に来るものために 石原 薫
あ ぼ り 和 田 徹
つ ぼ り 丸 山 東 美 男
窓 え 岡 本 信 治 郎
堪 え 岡 本 信 治 郎
競 輪 岡 本 信 治 郎
射 殺 石 川 満 寿 江
青空の中で(夏) 石 川 満 寿 江
とある日 石 川 満 寿 江
女の静物 五百住 乙
横 底 小 野 忠 重
海 底 小 野 忠 重
刷 版 小 野 忠 重
作 品 A 井 上 篤
作 品 B 井 上 篤
作 品 C 井 上 篤
夜 街 佐 々 木 一 良
夕 暮 の 鳥 小 宮 忠 行
窓 外 の 風 物 女 尾 一 夫
新 装 の 響 相 原 久 太 郎
船 着 場 相 原 久 太 郎
輝らし出されたもの 相 原 久 太 郎
運を掴む男 大 外 和 鐘 三
秋 品 後 藤 歌 子
作 品 C 佐 藤 平 七 郎
祭 品 山 中 清
歩 人 増 尾 昇 吾
人 と 鳥 早 川 正
鳥とひまわりと 桑 原 将 彰
静物 桑 原 将 彰

おどり子 相場 一夫
幻想から虚無への移行 熊 丸 謙 一
わきぼうず(1) 沖 野 清
素ぼくな椅子のある静物 羽 山 富 雄
街路樹のある風景 福 原 大 造
川 景 富 家 貞 男
昼 相 浦 利 祐
海を覗く 横 尾 嘉 良
立 像 鷲 尾 丁 未 子
アムブレラA 伏 屋 順 司
作 品 Z 西 尾 一 三
「パントマイム」よりパ・ド・カトル 西 川 孝
賭 夜 野 中 曜 子
月 夜 野 中 曜 子
充ちている 荒 井 茂 雄
鳥をたく 杉 浦 行 男
惨 殺 II 田 村 一 郎
工 事 場 A 水 谷 民 一
旺 迫 水 谷 民 一
電 氣 鋸 谷 上 信 博
虚無と神話の鳥 小 谷 英 夫
セ ッ プ 大 谷 克 己
作 品 1 国 吉 道 雄
芽 生 田 崎 昭 作
なわくぐり 青 木 外 司
ケルンB 鈴 木 淳 子
樹 貌 杉 谷 光 紀
昆 虫 美 水 光
た ても の 森 本 淳 子
不 吉 な 落 葉 山 野 一

首 a 阿部米造
 トルソ A 菅原安男
 S 夫人 菅原安男
 裸 牲 内田曙
 あか 村田勝四郎
 よろこび 山本常一
 ひな(ゴイサギ) 山本常一
 若いごいさぎ 常雄
 養老院の老人 西 常雄
 齒ノナイ老人 常雄
 そりかえる女 田畑一作
 立 山本格二
 N 氏の像 久保孝雄
 私 の 像 岡本庄三
 マサコの像 岡本庄三
 婦 山口幸子
 習 仲木道弘
 女 頭 像 菊池一雄
 自由の像(一部) 藤忠良
 腰を下す女 佐藤忠良
 失 題 城田孝一郎
 習 作 2 成瀬昭二
 首 B 成瀬昭二
 横たわる女 五十嵐芳三
 裸 婦 立 像 石場清四郎
 父 おんな 石場清四郎
 おん な 石場清四郎
 立 女 武次郎
 傾いた樹根 伊東 傀
 踊 る 芥川 永

萩原朔太郎 舟越保武
 歌々つ子 木郷新
 若い男の首
 馬の首
 怒りのうた
 童 女 小金丸幾久
 少 女 吉田芳夫
 青 夫 人 早川巍一郎
 は だ か 早川巍一郎
 群 像 明田川 孝
 家 族 山内 壯夫
 風の中の母子
 建築
 ユニット組合せ 剣持 勇
 家具 ユニットアレイジ
 a ユニット
 b タタミ・スツ
 l ル
 c L字型卓子
 風構造のイージ
 l セット
 セメント工場 谷口吉郎
 高田保の墓碑
 薄田泣董の詩碑
 印刷工場 丹下健三
 記念碑 中国作曲
 家ニエアル
 神奈川大学校舎 山口文象
 緑の家(図面)
 シ (模写)
 シ イス 試作 2 題 池 辺 陽
 シ 力学的曲面と人
 シ 間の動作との関
 係

小 崎 子 栄久庵憲司
 組立書 棚 泉 修二
 椅 子 加藤昌彦
 安楽椅 子 猶井正夫
 幼 稚 園 北川允昭
 S H I 西原清之
 試 作 A B 山本敏郎
 家 具 合田正再
 ユニット戸棚 渡部寿美子
 小住宅のための 山口勇次郎
 家具セット 島 崎 信
 解体出来る洋服 ダンス
 解体出来る家具
 a 松村勝男
 バイブとシート 佐々文夫
 による椅子四脚
 管構造による
 居間セット(9
 点)
 荒川 貞子
 鈴木誠太郎
 荒川 貞子
 ポクシングホー
 ル 植野正清
 17回一水会展 21-10月7
 京都美術館
 [批]
 朝日28 徳大寺公英
 東京28 富永惣一
 時事夕刊28
 毎日29 土方定一
 東京タイムズ 柳 亮
 産経30 荒城季夫
 日経10月1 福島繁太郎

朝日10月5 針生一郎
 美術批評11月 徳大寺公英
 美術手帖11月 柳 亮
 [記]
 東京14、17、19
 産経27、28
 [受賞]
 一水会優賞
 中谷龍一、田坂乾、甲斐仁
 代
 I 賞
 筒井広道、木下寿々子
 一水会賞
 中川藤次郎、鷺見憲治、徳
 田良仁
 新会員
 岡勇、北村巖、木下米子、
 田中春弥、笠置イヅ子、林
 貞子
 主要出品目録
 。印員委員、△印会員
 画室の静物△広瀬 功
 竹 物△柚木祥吉郎
 静 物△柚木祥吉郎
 水 辺△菅野矢一
 夏山(蔵玉)△菅野矢一
 冬山(蔵玉)△菅野矢一
 母と子△中谷龍一
 緑のブラインド△
 鏡と小供△兒島三吉
 赤い花△
 花柳昌子さんの。高野三三男
 羽衣

ひがた(瀬戸内)△尾崎正幸
 枯れたひまわり△
 肘(ひじ)をつく△筒井広道
 老松のある風景△
 雪の積葉△伊藤 正
 青 衣△
 立ち話△近岡善次郎
 ひるね△
 葦毛と栗毛△中畑 人
 暁の調教(淀)△
 黄 衣△中村 琢二
 ピアノトリオ△
 赤い帽子△
 造 船 所△山川勇一郎
 リベット打ち△
 三月堂内陣△松田忠一
 阿 修 羅△
 三月の静物△近藤吾朗
 青い服のノリ△
 冬の静物△丸野豊司
 黒卓の静物△与志美登野
 犀川秋近し△堀 忠義
 水かれる犀川△
 雲場の池△幸 雅二
 軽井沢風景△
 鳥 籠△荒井一郎
 風 景△
 冬の外房△天津鎮雄
 荒天吠岬△松田文雄
 波止場(神戸)△天津鎮雄

東京一 夕池辺一郎
 九十九里の若者
 東京一 朝夕景△木村辰彦
 井荻夕景△木村辰彦
 逆光の裸婦
 煙突のある雪景△高田誠
 村の入口
 春雪
 E 嬢 像△申斐仁代
 庭
 練瓦の家と橙の△吉原義彦
 木の海辺△片山芳樹
 北の街角(ハリ)△寺田春弼
 新開地(アルル)
 丘の家南仏キヤ
 I ニュ
 従姉妹△源川雪
 十字 架△黒田外喜男
 教 會
 果樹園初夏△木万寿三
 薬剤散布
 作 男△渡辺正一
 駒ヶ岳△狩野寿一
 伊那の溪谷△河上一也
 杉 林△高橋卯八
 埴輪断片△二宮雪夫
 海に臨む街△鈴木良三
 島の見ゆる春景
 熱海晩秋
 青衣の少女△金丸直衛
 白雲△石川真五郎
 春
 賑やかな連中△池部釣

奈良公園の藤△山下新太郎
 溺れんとす△有島生鳥
 Y 嬢 像
 浅間山遠望
 手賀沼初秋△末松勇
 A 嬢の肖像△小山敬三
 浅間山の風
 テイエリー君像
 ニューヨークの△石井柏亭
 冬
 カリフォルニア
 の秋
 水 車△木下義謙
 みさやまこらど
 風景
 諏訪 湖△高橋貞一郎
 山 曇る
 静 物△仲田好江
 赤い馬
 踊る人形
 「こいよん」の女△永井深
 よなべ
 壁 深沢紅子
 静 物
 帽子の少女
 八丈島にて(A)△矢野雄蔵
 (C)
 白い外套の女△安宅帛雄
 化粧
 秋の果物△田崎広助
 初秋の阿蘇山
 初秋の草花
 駒ヶ岳立秋△池谷寅一

讃 歌△木下寿々子
 夏 △三浦俊輔
 海の見えるアト
 リエ
 苔 と 砂△酒見恒平
 南禅寺山門
 くすみの像△泉治彦
 ガソリンステーション
 ショーン
 火 △高森捷三
 少 女
 奥多摩△松村三冬
 M氏の一家
 越前 堀△田坂乾
 隅田川の朝
 ネットン灯る頃△林鶴雄
 青いポト
 婦人 像△日塔笑子
 グラジオラス
 除雪夫たちの帰△小竹義夫
 路 女
 夜 北方の港△中村善策
 港 展 景△月大月源二
 八 座せる女△高橋庸男
 裸 からす瓜と花
 斜 陽△菊地秀一
 冬の陽
 めがね橋△納富進
 土器橋附近
 八幡岳
 千曲川に沿える△谷内俊夫

日 曜 日△高見耿太郎
 黒セーターの大学生
 六月の高原△三角嘉寿男
 田の草取り△裕三彩亭
 菜の花
 草花
 箒を持つ女
 試作辰砂金魚絵△木下義謙
 平造り瓢形捻巻
 輪差
 試作吹紅金魚絵
 刷毛目地鏤絵
 蒲穂絵
 藤花文大皿
 銀杏葉文
 松樹型
 童女絵染付
 こたつ△岡田高平
 窓 辺
 窓 人 像△菅沼金六
 四人姉妹△岡田行一
 ヨットハーバー△野村光司
 二ノ丸城跡△松田晃八
 河 原△小栗精
 雑 草△能勢真美
 街の屋根△金子博信
 池 畔△荻原孝一
 二宮風景△関戸伊三郎
 秋の山△佐藤功茂
 中学一年△大館健三
 T 嬢△安藤軍治
 足を立てた裸婦△田代光

読書夫人△木下孝則
 婦人 像
 雪解最上川△真下慶治
 冬 景
 鮭 △泉治作
 モンマルトル△弦田英太郎
 パリの事町
 輪 ヴェール
 静 物△常岡卯三郎
 麦の畑△本郷惇
 裸婦二人△森寅雄
 初秋上高地△等々力巳吉
 南信の夏△須山計一
 伊那の山村
 街頭の雪△朝倉力男
 さんまの静物△渡辺祐一郎
 母と子
 画室婦人像△鍋谷伝一郎
 坐 像△坂元一男
 神戸風景△伊藤立己
 五月の乗鞍△小平鼎
 鏡 △坂本正春
 前庭△多和与三
 造船所塗替△滝川太郎
 高遠風景△酒井精一
 眠る裸女△荒谷直之介
 花束を持てる
 柿若葉斎藤大
 北設の雪△萩原実
 晩秋△宮部進
 月に呼ぶ魚△上田哲農

ワルブルギスの △上田 哲農
 夜 八月の裸婦 △富田 通雄
 高原の新樹 △
 雨後の港 △岡崎 祇容
 アラビヤ農民の △千ヶ崎 梯六
 外出着 湖 △山中 仁太郎
 須広トネル風 △別車 博資
 夏 草 △不破 章
 丸 山 橋 △阜出 守雄
 信濃の 駅 △
 蝶 △田 辺 朋子
 新 △秋 新井 邦雄
 本を見る少女 △

鎌田和子、大野綾子二人展 21
 —25 美松画廊
 上品会染織展 22—10月2 日
 本橋・高島屋
 新美術展 22—30 サトウ
 美術と民芸展 22—30 大阪・
 日本工藝館
 以白会作品展 23—28 東京・
 大丸
 6回新工人展 23—28 銀座・
 松坂屋
 秋季特別名品展 23—10月10
 箱根美術館
 山田穂テッサン展 23—24 草
 土舎
 塗師次斎陶藝展 23—28 銀座
 ・松屋

全国陶磁器、漆器伝統工芸展
 23—30 新宿・伊勢丹
 墨東窯作陶展 23—28 銀座・
 松屋
 3回造形教育センター展 24—
 30 なびす
 備前窯陶展 24—29 大阪・三
 越
 美術文化八人展 25—30 村松
 画廊
 内堀勉個展 25—27 資生堂
 宇野三吾陶藝展 25—27 京都
 府ギャラリー
 1回青年画家クラブ展 25—30
 大阪・梅田画廊
 4回葵会展 26—10月1 日本
 橋・丸善
 柴田紗千夫個展 26—10月2
 美松画廊
 現代版画五人展 26—10月1
 中央公論社画廊(批)朝日10月
 1
 吉田政次個展 26—10月1 文
 房堂(批)朝日10月1
 木下孝則油絵展 26—30 日動
 画廊
 青龍社展 27—10月2 名古屋
 松坂屋
 5回日本板画院展 27—10月2
 渋谷・東横
 飯野農夫也版画展 27—10月2
 第一生命ホール
 山喜多二郎太水墨画展 27—10
 月2 日本橋・三越

叶敏前衛陶器展 27—10月2
 上野・松坂屋 (批)美術手帖
 12月(浜村順)
 松田穰、沢田重隆、上草卓三人
 展 27—10月1 サエグサ
 二葉会展 27—30 産経画廊
 本染草草展 27—10月2 たく
 み
 きぬた会展 27—10月2 日本
 橋・高島屋
 行動美術協会々員素描展 27—
 10月2 大阪・阪急
 生々会日本画展 27—10月2
 日本橋・高島屋
 喜多村知個展 28—30 資生堂
 永島勝介個展 29—10月1 東
 電サービスセンター
 行動展 29—10月11 大阪市立
 美術館
 富岡鉄斎、富田漢仙遺作展 30
 —10月5 東京・大丸
 古代朝鮮工芸美術品展 30—10
 月1 駒場・東大教養学部
 このはな会染色展 30—10月5
 銀座・松坂屋

一〇月

宮川久個展 1—4 資生堂
 アートクラブ・グループ展(未
 松正樹、利根山光人、加藤
 正、片谷隼子、吉田穂高、須賀
 通泰) 1—7 なびす (批)
 朝日6
 産経4

フランスのホスター展 1—15
 光風会館
 荻須高德展 1—20 鎌倉・近
 代美術館 (批)東京7(岡本
 謙次郎)、毎日7(今泉篤男)
 (記)朝日夕刊12
 西山英雄、佐々木邦彦二人展
 1—5 京都府ギャラリー
 アイリス商業デザイン展 1—
 5 村松ギャラリー
 清水光子個展 1—5 兜屋
 清野恒油絵展 1—10 タケミ
 ヤ (批)朝日6、美術手帖12
 月(植村鷹千代)
 はにわの顔展 1—30 大阪市
 立美術館
 白鶴秋季漆器展 1—11月13
 神戸・白鶴美術館
 南蛮美術展 1—25 神戸市立
 美術館
 日本洋画名作展(美術出版社主
 催)みづゑ五〇(年展) 1—16
 日本橋・高島屋
 (批)
 読売5 針生 一郎
 東京タイムズ 4
 朝日5 大久保 泰
 毎日6 嘉門 安雄
 東京9 今泉 篤男
 (記)

出品目録
 南 風 和田 三造 一九〇七
 川上冬崖像 小山正太郎 一八八二
 凱旋門 松岡 寿 一八八三
 グレーの洗 浅井 忠 一九〇二
 濯場 取 獲 一八八〇
 湖 書 黒田 清輝 一八八一
 裸 婦 久米桂一郎 一八八〇
 プレハの女 藤島 武二 一九〇六
 蝶 わだつみの 青木 繁 一九〇六
 いろいろの宮 (下図)
 天平時代 和 英作 一九〇四
 渡頭の夕暮 岡田三郎助 一九〇七
 ひなた 長原孝太郎 一九〇三
 百合園 山本森之助 一九〇八
 曲 浦 山下藤次郎 一九〇二
 やなぎ 大下藤次郎 一九〇二
 植物園 中村 不折 一九〇三
 裸 体 頃
 モデル台に 立つ西洋婦 人像
 新 月 吉田 博 一九〇七
 北国の冬 中川 八郎 一九〇八
 ゼラニウム 渡辺 与平 一九〇〇
 自 画 像 一八九二
 セイヌ河畔 三宅 克己 一九〇三
 冬の午後 畠 虎次郎 一九〇二
 ベコニヤの 畠 虎次郎 一九〇二

ヴィラ・デ 藤島 武二 一九二
 ステの池 一九二
 チョチャラ 一九八
 靴の女 山下新太郎 一九〇
 フランス風 斎藤 豊作 一九〇
 白き砂 赤城 泰舒 一九二
 滯り船 石井 柏亭 一九三
 足を洗う女 安井會太郎 一九三
 首飾り 梅原竜三郎 一九三
 フランス風 森田 恒友 一九四
 無花果畑 辻 永 一九三
 桃の林 岡田三郎助 一九七
 湖畔の雪景 山脇 信徳 一九七
 バラと少女 村山 槐多 一九七
 信仰の悲し 関根 正二 一九八
 エロシエン 中村 彝 一九〇
 コの像 一九〇
 女の顔 一九〇
 老母像 一九四
 サニーヤ 山本 册 一九七
 残雪 長原孝太郎 一九四
 おもいで 中沢 弘光 一九九
 水郷 小杉 放庵 一九二
 夕映の流れ 斎藤 豊作 一九三
 六月の日 南 薫造 一九七
 風景 岸田 劉生 一九三
 童女像 梅原竜三郎 一九三
 ナポリ風景 佐伯 祐三 一九五
 夜のノート 一九五
 ルダム 一九五
 ロシヤの少女 一九六

広告(ヴェルダン) 佐伯祐三 一九七
 老婦編物 坂本繁二郎 一九三
 歸鉄 清水 登之 一九五
 花下竹人(下図) 片多 徳郎 一九八
 吾家二娘 一九七
 ヒマラヤ山と石楠花 丸山 晩霞 一九四
 秋の風景 湯浅 一郎 一九三
 静物 万 鉄五郎 一九六
 裸婦 一九四
 湘南風景 前田 寛治 一九六
 二人の労働者 青山 熊治 一九六
 高原 一九三
 自画像 石井 柏亭 一九七
 牡丹 岡田三郎助 一九七
 あやめの衣 後藤 工志 一九七
 あざみ 山本 册 一九八
 芍薬 小出 楯重 一九九
 支那寝台の裸婦 一九九
 帽子を冠れる自画像 一九九
 裸女 古賀 春江 一九九
 無題 一九九
 煙火 牧野 虎雄 一九七
 へちま 八重げし 一九三
 二つの桃 国吉 康雄 一九三
 寝たる女 満谷国四郎 一九九
 自画像 一九九

緋毛氈 満谷国四郎 一九三
 江ノ浦 梅原竜三郎 一九六
 裸婦習作 有島 生馬 一九七
 木立 中西 利雄 一九三
 婦人帽子店 一九五
 和装 野田 英夫 一九七
 労働者 野田 英夫 一九五
 サークラス 三岸好太郎 一九三
 マリオネット 一九三
 トーケスト 一九三
 貧しき力 佐分 真 一九三
 フエの一隅 長谷川利行 一九三
 岸田国士の像 長谷川利行 一九三
 新宿風景 山本 册 一九四
 野菜 俊衛 一九八
 自画像 藤田 嗣治 一九九
 草丘 中村 研一 一九九
 猫 藤田 嗣治 一九九
 初秋 中村 研一 一九九
 止水 内田 巖 一九九
 野の光 梅原竜三郎 一九九
 長安街 藤島 武二 一九七
 紫禁城 一九四
 旭日照六合 藤島 武二 一九七
 上海蘇州河 一九四
 激戦の跡 鳥崎 鶏二 一九四
 竹 赤城 泰舒 一九八
 山村校庭 安井會太郎 一九九
 F夫人像 山下新太郎 一九五
 少女と屏風 須田国太郎 一九四
 歩む鷲 一九四

海 小林徳三郎 一九四
 椿 林 重義 一九三
 建物 松本 竣介 一九八
 運河 坂本 繁二 一九三
 眼のある風景 光 一九六
 景 坂本 繁二 一九七
 水より上る 坂本 繁二 一九七
 馬 浅井 忠 一九二
 風景 黒田 清輝 一九五
 グレー古橋 一九二
 自画像 黒田 清輝 一九五
 セブンスの上 一九五
 流 青木 繁 一九三
 自画像 青木 繁 一九三
 尾瀬沼 大下藤次郎 一九六
 ハムステッ ドの朝 三宅 克己 一九六
 アーチの坂 山本森之助 一九三
 琉球の燈台 中川 八郎 一九三
 妙高雪景 渡辺 与平 一九〇
 ネルの着物 赤城 泰舒 一九二
 上高地放牧 安井會太郎 一九二
 風景 山下新太郎 一九二
 裸婦 後藤 工志 一九五
 鈍日 岡田三郎助 一九六
 ヨネ桃の林 アルハンブ 児島虎次郎 一九九
 ラ宮殿 川上 涼花 一九三
 鉄道の風景 村山 槐多 一九七
 田舎の風景 村山 槐多 一九七
 湖と女 村山 槐多 一九七
 松と榎 関根 正二 一九九
 三つの顔 一九九

自画像 中村 彝 一九六
 男の像 一九〇
 静物 森田 恒友 一九三
 利根川畔 坂本繁二郎 一九五
 牛 坂本繁二郎 一九五
 縞子のある景 岸田 劉生 一九七
 静物 岸田 劉生 一九七
 村娘立像 佐伯 祐三 一九三
 自画像 佐伯 祐三 一九七
 自画像 片多 徳郎 一九七
 カーニエ風 小出 楯重 一九七
 六月の郊外 一九〇
 風景 林 俊衛 一九五
 無題 前田 寛治 一九六
 棟梁の家族 前田 寛治 一九六
 自画像 満谷国四郎 一九三
 自画像 満谷国四郎 一九三
 樹蔭 中村 研一 一九九
 裸婦 中村 研一 一九九
 裸体 有島 生馬 一九九
 熊谷守一像 倉田 白羊 一九九
 風景 倉田 白羊 一九九
 山居後園 三岸好太郎 一九三
 乳首 川島理一郎 一九五
 瀑 布 中西 利雄 一九六
 オリーブ樹 藤田 嗣治 一九五
 のある島 藤田 嗣治 一九五
 夢 藤田 嗣治 一九五
 関西モダンアート展 2-6
 京都市美術館
 青紀展 3-9 美松画廊
 井上三綱個展 3-8 養清堂
 (批)朝日6

中林松太郎個展 3-8 サト

平野コレクション展 4-13

渋谷・東横(記)朝日8(宮)

本三郎、東京タイムズ12

藤田嗣治作品目録

眠れる女 油絵 一九三三

室内の女二人 一九三三

町藝 人 一九三三

カーニバル祭 一九三三

五人女 一九三三

北京の力士 一九三三

自画像 一九三三

わが画室 一九三三

一九〇〇年 一九三三

那覇の女 一九三三

私の画室 一九三三

踊子 一九三三

ドルドーニユの 一九三三

台所 一九三三

新匠会十周年秋季展 4-9

日本橋・高島屋

磯部草丘日本画展 4-9

本橋・三越

青晴会展 4-8 フォルム

2回伝統工藝展 4-16

日本橋・三越(批)朝日11(岡田)

鳥取民藝協団新作展 4-13

渋谷・東横

日本水彩秋季展 4-9

橋・高島屋

一瀬茂治個展 4-8

サエグ

秋彩会日本画展 4-9

渋谷・東横

潮会洋画展 4-9

上野・松坂屋

岩崎巴人個展 8-12

日本橋・白木屋

3回丹桂会日本画展 8-15

新宿・伊勢丹

土屋幸夫個展 8-14

なびす

23回独立展 9-26

東京都美術館

東京8、9

産経14

毎日14

朝日14

東京タイムズ15

読売20

日経22

東京22

時事夕刊25

美術批評11月

針生一郎

美術手帖12月

柳亮

産経15

(記)

近藤嘉男油絵個展 6-10

兜屋

5回型生派展 7-12

銀座・松坂屋

奎星探塚展 7-16

樺画廊

林武小品デッサン展 7-12

東京・大丸(批)産経11、朝

日12、日経13(福島繁太郎)

備前焼石工作品展 7-12

銀座・松屋

1回グループ「目撃者」展 7-1

京都府ギャラリー(批)

11

美術批評11月(中原佑介)

出品目録

魚

夜の花

建物の街

新しい街

愛の手

足音

B音

煙突のある風景

作品の眼

蜻蛉の眼

鏡

さかな

と女

獅子と女

塔

傷身

そら

帰つた人

奏つた人

B歌

A物の間から作品

物の間から作品

静物

カンの織

古跡

雅楽

人

干場の人

千場の人

労働する人々(2)

古川吉重

鳥と人

鳥と人

デルタの女

鉄骨

人々

室内

茨のかけ

静物

干魚

ペリカン

幼い漁夫

風が逃げた

鳥が逃げた

鳥屋

窓辺

小卓

海に生く

コタンの伝説

愛犬

愛犬

漂像

群像

競馬場

海辺の家

静物

地下室

受難

灰燼

灰燼

灰燼

灰燼

灰燼

静物 A 梶谷寿雄
牧場の夢 S 小野教治
平和岡本信
微塵木下新
作業場米山信子
家のアルプス△妹尾正雄
夏のアルプス S 四方長夫
雪のアルプス S
パステーション S 西村伊勢松
眠つきの堀越鬼
春の畑喜一
牛と人吉田俊雄
月と光永井宏
作品 B 松山幾三郎
生野鉦山風景 高橋正武
浜山田貞実
回浦上正則
ひまわり寺尾半次郎
花咲く庭赤星信子
満月 S 木下嘉壮
風景 C 佐野久
水槽 S 小出三郎
青裸婦 S
立てる裸婦 S
長崎港末永胤生
北海道牧舎 S
樹海菅野愛子
風景 A 田中義太郎
家園紅葉 S 高島達四郎
梅園紅葉 S
静物 S

漁港入口 S 鈴木保徳
菘の日の S
炎暑の鳥 S 佐川敏子
白鳥 S 須田国太郎
夜八 S
雀 S
櫛 S
朝顔 S 鈴木亜夫
芋 S
朝顔 S
花顔 S 高須鞆子
荷揚場風景 稻森祐一
鶏 S B 寺沢宏三郎
夏の花 S 河村春
卓上静物 S
塔のある風景 S 足立襄
飾窓 S 大内のぶ子
山近 S 田中行一
夏座 S
童座 S
魚菜 S 高周惣七
二羽の鳥 S
鳥 S
川風 S 鳥居敏文
草笛 S
花の群像 B 吉浦摩耶
静物 I 深沢和一郎
人 S 菊地精二
イタリー娘 S
スペインの女 S

人物 B 菊地精二
壺を持つ S 岡部文之助
牧舎風景 S 狭間二郎
屋根 S
北国 S
木立 S 江田豊
浜品 S 佐藤辰治
作品 3 佐藤辰治
花壺 S 斑目秀雄
開墾 S
裸地 S
出来事 S 坂本善三
林麓 S 中尾彰
山麓 S
静物 S 藤原常次
線路風景 S 藤原常次
川治ひの工場 S 横山明男
葡萄 S 熊谷登久平
白町 S
帆船 S 吉岡憲
漁婦 S 子吉岡憲
母 S 藤井茂
工場の一隅 S 藤井茂
箱と布 S 竹重弘
にわとり S 山崎一英
風景 S 土井俊泰
紅殻塗の家 S 鳥海青児
家 S
顔をかくす女 S
風景 S 野口弥太郎
風 S
裸婦立像 S 花見島善三郎
女 S

見高 S 浜林武
婦人座 S
今井浜風景 S
出土器など S 中山巖
愛好家 S 佐々木隆
対話 S 泉田安治
はにわ S 水町千代子
夜の街 S 樋口加六
静物 B
花物 S
静物 A S
裸女と朴の実 S 田中佐一郎
静園 S 入木昌一
遊園地 S 中安徹
折場 S 森田修
工場裏 S 荒井勝子
帽子をかぶれる S 西村光郎
風景 S 西村光郎
漁師 S 吉岡一
煙突工 S
発工 S 幸形栄治
鶏と展 S 西さだ子
つと S 永野敏男
石切山脈 S 須永正道
鉄工 S 大久保正義
厨所 S 安川博
塔のある風景 S 白鳥三郎
部屋 S 片野八重
静物 S 筒井孝
庭物 S 吉田宗一
野鏡 S 浅田欣三
鳥 S 加藤陽

川辺の男 S 井出陽一郎
映画館街 S 井手誠一
糸を巻く人 S 広瀬通秀
鯨 S 松村薫
うさぎ S 森田喜昇
あおい鳥 S 千葉郁世
母子像 S 横地康国
オルガンを奏く S
山人 S
山湖 S 小林和作
通湖 S
静物 S 小島善太郎
狩野川風景 S
おもいで (コロシ) S
工場 S 平松清明
風景 S 松原久明
橋ぎわの家々 S 斎藤長三
諏訪渡村 S
深川木場 S
石の景色 A S 神原始更
鳥籠の静物 S 小沢卓
仏像 S 大久保三一
猫を抱く少女 S 瀬繁彦
窓 S 小倉宝海
大正橋 S 赤尾長二
焼跡に立つ人々 S 岡村芳男
立てる三人の裸 S
座せる三人の裸 S
窓外は緑雨なり S 妹尾正彦
聴けや人々 S
耕して余さず S
静物 C 秋田寅三

北の漁婦	斎田武夫	通勤電車	有馬良作	山川茂	セメント工場	丸山五郎	ガラス工場	中島哲郎
壺とひまわり	大内弘	風景	荒木絢子	斎藤あき子	ヴァイオリン	平田俊三	青磁色の壁	五木繁志
万華鏡と子供	平間誠治	静物	岡田克子	佐々木洋	静物	益田遠吉	化粧する裸婦	友近琢男
鳥物	(C) 荒井不可志	街	岡田克子	佐々木洋	静物	高山中舎密	河舟	細合仁一郎
森	A 勝俣泰蔵	漁船	佐野賢	黒住貞夫	夜の静物	北山茂	機を織る人	工藤和夫
川	江口賢一	五月の森	岡田勝彦	菅原稜三	作業場の人	岡フク	外苑樹間	斎藤実
樹	三浦照子	こらば	安田勝彦	藤原向意	B 対話	吉村哲夫	神龍	徳永豊
山	木戸史郎	あきは街道	河野剛	佐久間保雄	対話	横山了平	建	岩田弘行
農	湖斎藤紅一	奇怪なる魚	下平善三	松島砂子	静物	佐野益男	アダムとイヴ	宮前文平
の	(B) 斎藤求	白い牛の骨	長谷川常雄	高杉昭子	静物	池上三郎	水差しのある静物	原和子
作	品宮崎精一	建物と人々	米田持	野坂八重	静物	池上三郎	女	小瀬光子
か	わら	風景煉瓦工場	佐々木耕成	高野次郎	夜の路	鶴谷浩	鳥と少年	菅原尚
かい	がら	祭典	米原二郎	後藤可子	宵の路	正木智海	港	山川英夫
人	物	秋	古山直一	小野垣哲之助	煙突と屋根	土肥信一	風景	山下武夫
漁船のある風景	福島正治	ウクレレのある静物	長谷川善四郎	後藤快依	公園にて	大浦正江	魚市場	坂本保
パンガローA	原田一郎	春が来る	安部英夫	尾崎初男	放た念	鈴木英典	街	中井淳二
店	大沼亮之助	カイヤウ	西村雄一	横森政明	かま	古田安夫	アトリ	小田正春
静かな港	香會我部芳夫	静物	安部英夫	尾崎初男	裸婦	鈴木英典	魚市場	坂本保
少年たち	上野菊	静物	西村雄一	尾崎初男	裸婦	鈴木英典	魚市場	坂本保
卵のある静物	中富郁子	静物	西村雄一	尾崎初男	裸婦	鈴木英典	魚市場	坂本保
裸	志村計介	静物	西村雄一	尾崎初男	裸婦	鈴木英典	魚市場	坂本保
石を割る人	志村計介	静物	西村雄一	尾崎初男	裸婦	鈴木英典	魚市場	坂本保
鉄塔	加藤茂雄	静物	西村雄一	尾崎初男	裸婦	鈴木英典	魚市場	坂本保
詰所の隅	古賀猛	静物	西村雄一	尾崎初男	裸婦	鈴木英典	魚市場	坂本保
月と	藤川九郎	静物	西村雄一	尾崎初男	裸婦	鈴木英典	魚市場	坂本保
東	伊藤隆	静物	西村雄一	尾崎初男	裸婦	鈴木英典	魚市場	坂本保
雌	武田正人	静物	西村雄一	尾崎初男	裸婦	鈴木英典	魚市場	坂本保
鳥	奥田淳弼	静物	西村雄一	尾崎初男	裸婦	鈴木英典	魚市場	坂本保
港	川端義彦	静物	西村雄一	尾崎初男	裸婦	鈴木英典	魚市場	坂本保

美術展覧会(10月)

A.P.L. CO. LTD. 山川茂

牛と	浜の女	イスとピエロ	漁村	馬と	夜空	静物(マリモ)	親子	牽かれる家畜	工場C	貝殻	静物B	北の街	駅	庭の静物	A	下町のガス工場	カポチャの静物	作品58	人間(不安)	鉢とくたもの	小女	風景	ハス池	瓶	貯水池風景	立木	浅草楽天地	送油ポンプ	犬と友情	横たわる裸婦	卓上の魚	くさつた魚		
下川都一朗	森崎幸	伊東郁三郎	島津冬樹	松田忠三	大泉いかう	近藤幸次郎	板内忠男	国清勝美	砂田保	久保田明通	金沢謙太郎	萩原勇雄	稲田穎吾	福島瑞穂	西川武人	辻増雄	鈴木正彦	萩原卓也	大越宏純	近藤栄子	古川盛雄	太田啓介	町田京子	喜多健男	内田公雄	植松真治	春日部洋	小田原久生	金井滋	酒井陸治郎	山本鉄男			
修船場	道のB	教会の見える風景	待合室	坂道	フエニックスの	裸婦とひまわり	人	つるした肉	女と	港ノ市街	樹木の在る風景	サーカス団	牛	作	引水	折れた木D	魚市の女	陶工	男	朝市	風景	クレインのある	新	準備中の魚夜市	層	オホリック海A	ヤン	林	風	二人立像	一人			
長島常吉	米川勝衛	小田切正三	江島和男	砂田友治	大沼貞夫	佐野比呂志	森登谷正樹	森哲明	鶴川五郎	宮	高森	高森	高森	高森	高森	高森	高森	高森	高森	高森	高森	高森	高森	高森	高森	高森	高森	高森	高森	高森	高森	高森	高森	高森

水	家	夏	人	海	馬	静	夕	か	石	暗	石膏のある静物	駅	樹	た	島	晩	二	机	アダムとイヴ	船	静	農	消	牛	工	風	月	静	一	キ	或		
郷	山	平	小	市	江	黒	青	古	山	山	中	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山
山田康雄	山田康雄	山田康雄	山田康雄	山田康雄	山田康雄	山田康雄	山田康雄	山田康雄	山田康雄	山田康雄	山田康雄	山田康雄	山田康雄	山田康雄	山田康雄	山田康雄	山田康雄	山田康雄	山田康雄	山田康雄	山田康雄	山田康雄	山田康雄	山田康雄	山田康雄	山田康雄	山田康雄	山田康雄	山田康雄	山田康雄	山田康雄	山田康雄	山田康雄

兵士群像	後藤孝三	映画を観る人	黄色い花	西野久子	9回第二紀会展	9-26	東京	都美術館	産経14	三輪福松	毎日14	土方定一	朝日14	岡本謙次郎	東京タイムズ15	田近憲三	読光20	東野芳明	東京22	今泉篤男	時事夕刊25	福島繁太郎	日経26	針生一郎	美術批評11月	美術手帖12月	植村鷹千代	東京タイムズ9月2	東京9	二紀賞—真鍋博	同人優賞—山田等、岡田登志男	同人推挙—真鍋博、田中恒夫、三宅輝夫、中村健而、堀場良夫、大鹿重雄、丹羽康晴、坂上政克	主要出品目録	二つの像A	進藤信一
------	------	--------	------	------	---------	------	----	------	------	------	------	------	------	-------	----------	------	------	------	------	------	--------	-------	------	------	---------	---------	-------	-----------	-----	---------	----------------	---	--------	-------	------

老樹	樹切	水族館の魚	アプターイメー	橋本徹郎	色面分割の中の	円	仕事している人	佐野繁次郎	アルチザン	青い部屋	作部屋	佐々木孔	壇輪(岩壁)	山口操助	東	近藤嘉男	鐘	釣	話し相手	野	茶碗と水道	岡	夜	晴れた日	グルーブ	山田	寿	僕達の仲間	見玉幸雄	女と帽子掛	開墾する夫婦	人・魚・舟	鳥	「そらがめ」と	「白ひげわし」と	「えびかに」と子	供	裸婦横臥	戴野正雄	裸婦立像				
橋本健二	橋本健二	橋本健二	橋本徹郎	橋本徹郎	橋本徹郎	橋本徹郎	橋本徹郎	橋本徹郎	橋本徹郎	橋本徹郎	橋本徹郎	橋本徹郎	橋本徹郎	橋本徹郎	橋本徹郎	橋本徹郎	橋本徹郎	橋本徹郎	橋本徹郎	橋本徹郎	橋本徹郎	橋本徹郎	橋本徹郎	橋本徹郎	橋本徹郎	橋本徹郎	橋本徹郎	橋本徹郎	橋本徹郎	橋本徹郎	橋本徹郎	橋本徹郎	橋本徹郎	橋本徹郎	橋本徹郎	橋本徹郎	橋本徹郎	橋本徹郎	橋本徹郎	橋本徹郎	橋本徹郎	橋本徹郎	橋本徹郎	橋本徹郎

裸婦座像 藪野正雄
 卓上雀 三郎
 初秋 熊野俊一
 面影 熊野俊一
 少女 熊野俊一
 姉妹 熊野俊一
 港の人達 白銀功
 工場附近 白銀功
 涙の層 中西勝
 VOICE 中西勝
 結婚へのプロローグ 中西勝
 ねむかげ 森英
 人間群像 宮本三郎
 浜辺の歌 加藤敏子
 新聞を見る赤帽 西村功
 車を引く赤帽 西村功
 庭根 三浦和志
 フランスの田舎 成井弘文
 街の家 成井弘文
 教員の家 成井弘文
 キヤラバンの家 成井弘文
 箕掛島(大瀬吉子の浜) 正宗得三郎
 雀嶋(伊豆風景) 正宗得三郎
 磯馴松(仏浦) 正宗得三郎
 花東 水清公子
 楽屋の二人 東山紗智子
 安全地帯 秋保正三
 古い建物 秋保正三
 雨の海鍋井克之
 秋果静物 秋保正三
 薬師寺 秋保正三

みなと(浚渫) 坂本益夫
 パレの少女達 遠山陽子
 裸婦B 中谷ミユキ
 蓮池 黒田重太郎
 冬 黒田重太郎
 鳥籠のある静物 黒田重太郎
 網倉 大石俊彦
 港倉 大石俊彦
 破船 大石俊彦
 サンルームより 大兼実
 裸婦 勝四郎
 海辺 勝四郎
 群像 島田しづ子
 裸婦 島田しづ子
 花園にて 坂宗一
 大首(W+F) 峰岸義一
 シ(W+C) 峰岸義一
 白い馬 田村孝之介
 若きウイナス 田村孝之介
 北越海岸 栗原信
 秋(東大構内) 栗原信
 漁夫 中野安次郎
 高原紅葉 中野安次郎
 漁船 中野安次郎
 パレ 松田豊
 夜の花束 佐伯米子
 秋華 佐伯米子
 アンゼリウム 佐伯米子
 波切 加藤秋夫
 建物 加藤秋夫
 工場裏 加藤秋夫
 秋山田一雄

静物 11 吉田富士夫
 潜函工事 堀江万寿男
 母子 堀江万寿男
 鎔接所 堀江万寿男
 秋は近づく 安藤義茂
 伊良湖海景 井上安男
 樹間の大洋 井上安男
 岬端風景 井上安男
 剝製A 林健造
 多井畑風景 品川祐治郎
 風景 品川祐治郎
 恋ポスターの前の松岡寛一
 叫んでゐる子 松岡寛一
 デザイナーの部屋 崎元八十八
 魚屋 崎元八十八
 網 高山道雄
 裸婦 宮永岳彦
 無審判の椅子 宮永岳彦
 還る日 宮永岳彦
 浮草 宮永岳彦
 ギニョール 石川悦三
 休坑 松村三之
 町はずれ(ヘルピン) 松村三之
 赤いカーテン 伊東市太郎
 休日 久野修男
 船のある街A 小島真佐吉
 船のある街B 小島真佐吉
 順を待つ 鶴居玲

アトリエにて 斎藤慶
 エトランゼ 青木一夫
 働く人々 北村修
 望郷 鈴木猛人
 漁夫 内海九郎
 ひまわり 堀沢好一
 靴みがき 藤田禮
 恋愛 瀬尾進
 アマリリスと猫 国松伽郎
 閑寂 島あふひ
 港の風景 山本直治
 満願 山本直治
 父の書斎 西田静子
 機関車の月 山本秀臣
 山羊抱く女 森谷謙太郎
 山口B 神保俊子
 港口 藤井義晴
 いちぢく 藤井義晴
 精練工場 九樹長三郎
 チンパンジー 岩月虎雄
 別れ 宮島美明
 人類昇格 宮島美明
 電話する芝野武男
 赤い門 芝野武男
 赤い少女 中原四十二
 みどりのシャツ 石川元
 赤の少女 築山節生
 赤の静物 築山節生
 港風景 北島達夫
 作品(B) 高階重紀
 鳥と小女 岡田登志雄
 赤の朝 岡田登志雄
 鶴の朝 岡田登志雄
 ホロホロ鳥 岡田登志雄

花を持つ裸婦 津田周平
 庭の鳥籠 津田周平
 小鳥の庭 津田周平
 麦の丘 清水茂郎
 海浜 坂下清康
 杉土岐 国彦
 杉土岐 国彦
 二市野 長之介
 狩人 市野長之介
 春の窓 萩森久朗
 夜 萩森久朗
 暮の窓 萩森久朗
 彫刻 青木寿
 フルーツ 松村外次郎
 朝日先生 松村外次郎
 シャフト 中川為延
 作品A 中川為延
 作品H 中川為延
 作品I 中川為延
 女 八柳恭次
 トルソ 八柳恭次
 裸婦 菅沼五郎
 作品 菅沼五郎
 青年 滝川美一
 砂浜 滝川美一
 再建の人達 斎藤聖香
 聴心 斎藤聖香
 トルソ 真鍋忠
 19回自由美術展 9-26 東京
 都美術館
 (批)
 東京8
 産経14
 三輪 福松

毎日14	土方 定一	煙突	境野 一之	かぐろい座(彫刻)	小野 忠弘	斜 像(彫刻)	峯 孝	た かい	難波田 龍起
朝日14	岡本謙次郎	怪	中村 健二郎	No.4(シ)	森 堯茂	友人の像(シ)	富山 妙子	不安な時代	壊 富成忠夫
東京タイムズ15	田近 憲三	白山(彫刻)	森川 昭	No.8(シ)		ボタ	森 芳雄	崩 田中朝吉	破 田中朝吉
読売20	東野 芳明	酒を飲むボテ	松本 忠義	No.2(シ)		ひ		顔	顔
東京22	今泉 篤男	風	豊田 一男	試作(シ)	昆野 恒	空	井上 照子	荒	荒
時事夕刊25	福島繁太郎	地球劇場	川口 精六	顔 A	小山田 二郎	構	大野 五郎	作	作
日経26	針生 一郎	終	島 鉄生	B		赤と緑の風物	小野 忠弘	働	働
美術批評11月	岡本謙次郎	蛾	川合 喜二郎	道 路	井上 長三郎	入	山内 豊喜	村	村
美術手帖12月		樹	西村 保史郎	工 事	安太郎	ミギルギッチョ	山内 豊喜	コ	コ
〔記〕		卓	渡力敷 唯信	婦 奈知		化	山内 豊喜	キ	キ
東京タイムズ8月25		車	小山 寿夫	安太郎		い	山内 豊喜	丘	丘
主要出品目録		死	上原 二郎	男 の 像	倉石 隆	構	山内 豊喜	三	三
「ユメ」よりも一		バ	麻生 三郎	無 題	比田井 仁史	成	山内 豊喜	群	群
陽No.2(彫刻)	森川 昭	坐る人々	糸園 和二郎	太 陽	根岸 正	舟のある風景	山内 豊喜	不	不
青年像(シ)	木内 岬	肖 像	堀内 規次	鋼 菊地又男	又男	作	山内 豊喜	変	変
四ツの円	小林 良曹	打タレタ番号	堀内 規次	港	中島 保彦	切り残された木	今井 繁三郎	静	静
笑ひ外一点	文狭 克明	人のいる風景	中野 淳	鉦 鉄	池田 淑人	二	今井 繁三郎	溶	溶
アトラス	稲田 三郎	母 子	中野 淳	狗 犬	三木 弘	少	今井 繁三郎	大	大
二 人	佐田 政明	架	中野 淳	怒りの群衆	西良 三郎	赤	今井 繁三郎	木	木
さ かな	寺田 政明	ベルギー風景	中野 淳	鳥 と 人	西田 信一	ま	今井 繁三郎	無	無
波 と	野崎 南海雄	よびごえ	中野 淳	パレ	西田 信一	肩	今井 繁三郎	漸	漸
群 像	野崎 南海雄	窓	久保田 九一	鳥 と 人	西田 信一	窓	今井 繁三郎	女	女
魚 像	水谷 武彦	人 物	久保田 九一	鳥 と 人	西田 信一	窓	今井 繁三郎	勤	勤
M 氏 像	水谷 武彦	無	久保田 九一	鳥 と 人	西田 信一	窓	今井 繁三郎	T	T
機械と太陽	藤間 清	重	久保田 九一	鳥 と 人	西田 信一	窓	今井 繁三郎	U	U
工場の人	藤間 清	小	久保田 九一	鳥 と 人	西田 信一	窓	今井 繁三郎	U	U
麦 秋	塚益 男	追	久保田 九一	鳥 と 人	西田 信一	窓	今井 繁三郎	U	U
作品	清希 卓	追	久保田 九一	鳥 と 人	西田 信一	窓	今井 繁三郎	U	U
人	境野 一之	追	久保田 九一	鳥 と 人	西田 信一	窓	今井 繁三郎	U	U

頭江見 崇

プロヴァンスに 末松 正樹

(山) 佐藤 美代子

すすきのある花 塚谷 政義

鏡の 中々 長谷川 三郎

作 品 長谷川 三郎

加山又造個展 10-15 養清堂

I E C 展 10-15 中央公論社

名井万亀近作展 10-16 美松

山里久郎個展 10-15 サトウ

池田龍雄個展 11-20 タケミ

菊地良爾日本画展 11-16 日

日本水彩秋季展 11-16 日本

橋・三越 関口如水滞欧作展 11-16 日

本橋・三越 河合栄之助作展 11-16 日

橋本・三越 中国、朝鮮古美術展 11-16

上野・松坂屋 岡部敦作陶展 11-15 壺中居

近藤吾朗個展 11-15 サエグ

国松登油絵個展 11-15 フォ

ルム [批] みづゑ12月 (徳大

寺公英) 3回稀星会油絵展 11-16 日

本橋・高島屋 アントニオ・ブランコ、パリ島

スケッチ展 11-15 日動画

廊 名刀虎徹展 11-16 日本橋・

三越 2回鬼集会同人展 11-20 文

房堂 青山義雄滞仏作品展 11-20

ブリヂストン [批] 東京14

(岡本謙次郎、朝日15、時事夕刊

繁太郎)、毎日20(徳大寺公英)、読

売26(富永惣一) 佐伯祐三遺作鑑賞展 11-16

大阪・阪急 倉田三郎滞欧油絵展 11-16

大阪・阪急 27回青龍社展 11-16 神戸・

大丸 新制作協会展 12-25 大阪市

立美術館 3回片山昭弘個展 12-16 大

阪・梅田画廊 [批] 美術批評

手帖12月(東野芳明)

北国名宝展 13-15 石川貞織

維会館 [批] 日本美術工藝11

月 四人の作家展 14-11月23 国

立近代美術館 [記] 朝日夕刊

23、30 出品目録

下村親山 熊野親花 掛幅 絹本 一八九四

仏 誕 掛幅 絹本 一八九六

閣 維 掛幅 絹本 一八九九

元祿美人 二曲 紙本 一八九九

日蓮上人 掛幅 絹本 一九〇〇

修羅道絵巻 巻子 紙本 一九〇〇

大原の露 掛幅 絹本 一九〇七

木の間の秋 二曲 紙本 一九〇九

小倉山 六曲 絹本 一九〇九

魔障図 掛幅 紙本 一九一〇

鶴 六曲 金箔 一九一三

一休禅師 掛幅 絹本 一九一八

豊太閤 掛幅 絹本 一九一八

東坡先生 六曲 絹本 一九一九

老松白藤図 六曲 紙本 一九一三

楠 公 三幅 絹本 一九一三

俊徳丸 掛幅 紙本 一九一三

維摩默然 掛幅 絹本 一九一四

夕月 円窓 絹本 一九一五

雨後の朝 掛幅 絹本 一九一七

竹の子 掛幅 絹本 一九一七

写生図巻 紙本 一九一七

木の間の 稿 紙本 一九一七

秋鉛筆画稿 稿 紙本 一九一七

漁樵問答画 稿 紙本 一九一七

維摩画稿 稿 紙本 一九一七

荻原稼山 女の 胴 絹本 一九一七

坑 夫 絹本 一九一七

灰皿 絹本 一九一九

宮内氏像 絹本 一九二〇

女 像 絹本 一九二〇

銀 盤 絹本 一九二〇

橋本平八 猫 像 絹本 一九二四

ある日の少女 絹本 一九二四

成女 像 絹本 一九二六

裸形少年像 絹本 一九二七

石に就て 絹本 一九二八

弱法師 絹本 一九二九

三猿 A 絹本 一九三〇

花園に遊ぶ天女 絹本 一九三〇

馬 磨 絹本 一九三〇

達 磨 絹本 一九三〇

那 那 絹本 一九三〇

西王母 絹本 一九三〇

幼児表 絹本 一九三〇

鶯 像 絹本 一九三三

アナンガラガ 絹本 一九三三

のムギリ像 絹本 一九三三

鶯 像 絹本 一九三三

老 子 絹本 一九三三

鶯 像 絹本 一九三三

利 久 絹本 一九三三

緑 蔭 絹本 一九三三

維摩 詰 絹本 一九三三

出山 積 絹本 一九三三

兎 像 絹本 一九三三

良 寛 絹本 一九三三

牛 茶 絹本 一九三三

一 茶 絹本 一九三三

群 猿 絹本 一九三三

1日クラフティック55展(商業デ

ザイン) 25-30 日本橋・高

島屋 [批] 毎日27、朝日28、

産経11月2(滝口修造)、新建

築12月(浜村順)

八人の絵画展 25-30 村松

ギャラリ

山口勝弘ヴィトリノ又作品展

25-29 和光 [批] 朝日28、

アトリエ12月(東野芳明)

[記] 美術手帖31年2月(山口

勝弘)

第二紀会十二人展 25-30 日

本橋・高島屋

4回古美術展 25-11月27 大

阪・藤田美術館

加藤唐九郎作陶展 25-30 上

野・松坂屋

秋霜会日本画展 25-30 上野・

松坂屋

半弓会洋画展 25-30 大阪・

阪急

河内山賢祐彫刻個展 26-29

日本橋・丸善

佐藤慎一個展 26-30 大阪・

梅田画廊

二科会展 26-11月14 大阪市

立美術館

吉岡憲個展 27-31 日動画

廊 [批] 産経夕刊29

熊沢鷹二個展 27-11月2 松

島ギャラリ

素仙洞日本画展 28-11月2

銀座・松屋

佐藤大寛新作展 28-11月2

[批] 読売31(河北倫明)

勁草会展 28-11月1 京都府

ギャラリ

古備前古唐津展 29-30 日本

橋・高島屋

日本彫塑家クラブ展 29-11月

3

商業デザイン展 29-11月3

神戸・三越

11日回展 29-12月1 東京都

美術館

[批]

日経11月3 嘉門 安雄

東京 岡本謙次郎

ラッシュ 堀江 知彦

朝日 5 嘉門 安雄

東京タイムズ11月5

瀬木 慎一

日経11月7 福島繁太郎

毎日 8 土方 定一

産経夕刊11月10 横川毅一郎

東京11月10 本岡 正義

産経夕刊11月12 三輪 福松

東京タイムズ11月12

伊福部隆彦

東京11月14 岡田 謙

産経夕刊11月15 石井 柏亭

美術手帖12月 柳 亮

[記]

東京10月23、26、27

読売11月3 徳大寺公英

東京タイムズ11月4

朝日夕刊11月25

産経11月2、3、4、5、6、

7、15、16、17

(会) は日本芸術院会員の略

(参) は日展運営会参事の略

(審) は審査員の略

(依) は出品依頼者の略

(無) は無鑑査の略

(特) は特選の略

(買) は川合玉堂氏資金によ

り買入文部省寄贈作品

(白) は白寿賞の略

日本画

漁 港 沢野文臣

オーケストラ、永山富士太郎

ボックス 周 竹内一起

道 化 師(依)堂本元次

叢 畑(特)自尾山 轆

段 畑(無)特自堂本阿岐羅

海 浜(特)自大山忠作

訪 春(無)特自岡 主税

雨 池(依)浜田台児

瑤 池(特)自野村一生

谿 湖 加倉井和夫

教会のある港(参)曲子光男

湖 映(特)自浦田正夫

双 楽(特)自岡根雅雄

憩 映(特)自長繩士郎

疏安工場(無)山本知克

長 夜(依)伊東万耀

夕 アトリエ(依)立石春美

寓話(イソツ) 依野島青兹

ブ物語

家 族 三輪良平

少女 群像 中瀬 昂

実 験 室(依)村松乙彦

牛 梶 喜一

晨 鈴木由太郎

冬 池(依)佐藤太清

室 内 渡辺阿以湖

林 ヴアレー(依)田代正子

菜 園(無)倉光 博

白 秋(無)秋葉長生

夜 の 湖 白鳥映雪

岬 サボテン(依)山本倉丘

駝 鳥 有元一雄

鶴 苑(特)自陳 永森

大 仏 殿(特)自水野深草

白 鳥(参)吉田登毅

だ り や(参)望月春江

飛 鴨(依)麻田弁次

溪 の 漁村(無)三尾雄治

北 池(無)猪原大華

異 人 坂(無)下保 明

花、更紗(参)堅山南風

空 谷 泉 声(依)水田竹圃

沼 田 の 夕(依)田中以知庵

細 川 夫人(参)参部有恒

冬 瓜(参)金島桂華

山 稼 ぎ(依)参野田九浦

雨 後(依)松林桂月

夏 木(依)結城素明

赤日浪花人(依)菅 栞彦

大原寂光院(参)宇田 荻彦

盤 中 濤(依)参山口蓬春

深 雪(依)参小野野崎

狭霧霽れゆく(依)中村 岳陵

薄 (依)参德岡神泉

成 女(依)寺島紫明

生 活(依)堂本印象

六世歌右衛門(依)橋本 明治

私 の 夢(依)三谷十糸子

銀 砂 灘(依)池田透邨

旭 映 雪(依)参野橋村

牧 場(依)岩淵芳華

虹 立 つ(依)参森 白甫

宋 磁(依)参伊東深水

氷 川(依)参兒玉希望

仔 馬(依)参山口華楊

岳 麓 の 花 望 月 定 夫

丘 の 家(依)参三輪 晃勢

城 まわり(依)参川崎 小虎

雪 の 山 鈴 木 竹 柏

楊 貴 妃 森 村 宜 永

冬 木 立(依)参遠藤 桑珠

三 人 の 踊 子(依)参三 谷青子

杉 山 田 規 代

千 駄 ヶ 谷 ビル 是 永 仲 一

泉 池 田 恒 象

浦 富 の 魚 町 新 井 富 美 郎

造 船 所 岩 沢 重 夫

店 頭 宇 田 大 虚

伊 豆 永 山 十 志 夫

三 人 武 村 秀 水

緑	暮	立	静	草	瀑	虹	榕	蓮	街	海	蒼	七	印	五	湖	山	赤	池	風	カ	飛	花	樹	大	憩	夜	菜	立	夕	池	牡	巖	
衣(森田沙伊)	色(妻碧宇)	夏(奥田元宋)	潤(加藤長明)	に憩ふ(加藤長明)	(杉山寧)	鯉(川本末雄)	岩と核島(川本末雄)	多目煌星	樹(松本姿水)	女(奥田正治)	苑(奥田正治)	鳥(西野新川)	女(遠山唯一)	家の大宮俊興	畔樋口辰志	童子(江崎孝坪)	童(江崎孝坪)	中(田晃陽)	山(奥亀割隆)	越(都路華明)	ナ(都路華明)	雪(西沢笛歎)	女(奥田中針水)	立(奥山錦成)	岬(横江正義)	い(渋谷江津)	け(吉原以恭)	苑(斎藤清策)	秋(桑野博利)	辻(りつよ)	畔(下川千秋)	丹(橋口幾三郎)	壁(江守若菜)
静	物	か(く)や(姫誕生)	群	溪	波	影	食	雨	か	庭	茶	深	午	良	雲	溪	牛	山	馬	裸	川	網	新	樹	斜	砂	莒	午	桜	雲	光	石	
池田道夫	物	か(く)や(姫誕生)	雌(小岩井秀鳳)	流(羽毛田陽吉)	景(鈴木石甌子)	佐(藤永芳)	卓(佐藤永芳)	高(橋十三代)	北(村明道)	石(奥榎崎洙雀)	房(武田良三)	秋(奥水田硯山)	後(寺井重三)	夜(奥板倉星光)	岫(奥近藤浩一路)	音(奥近藤浩一路)	依(奥松元道夫)	湖(依岡慶樹)	年(奥森戸国次)	童(奥市瀬幸助)	岸(奥浜田昇兒)	魚(奥松浦満)	峡(奥河合健二)	冬(奥棚田泰生)	陽(奥中野蒼穹)	丘(奥白加藤東一)	後(奥高山辰雄)	島(奥西山英雄)	昏(奥東山魁夷)	庭(奥加藤栄三)	庭(奥加藤栄三)	庭(奥加藤栄三)	
岩	丘	桔	関	造	高	薄	街	岩	調	残	憩	ゆ	海	化	翳	小	漁	冬	港	叢	晚	林	戸	望	桜	工	紫	七	白	群	夏	た	
三河義太郎	三(上)巴(峽)	梔(原)佐(子)	井(上)正(志)	所(伊)藤(昇)	山(秋)元(清)治	春(太)田(龍)一	道(桑)原(清)明	日(比)野(嘉)徑	道(磯)田(又)一(郎)	照(水)野(陽)翠	皆(川)千(恵)子	浅(田)蘇(泉)	海(老)名(正)夫	室(中)野(草)雲	屋(今)井(守)彦	村(河)部(貞)夫	伊(東)隆(雄)	海(野)旭(世)	太(田)稻(吉)	秋(奥)富(取)風(堂)	景(奥)富(取)風(堂)	山(加)藤(美)代(三)	湖(木)村(広)吉	島(福)井(沢)太	裏(福)本(達)雄	花(黒)光(茂)樹	西(内)利(夫)	園(松)井(孝)二	鷲(野)々(内)良(樹)	日(藤)田(孝)正	村(山)徑	た(そ)が(れ)村(山)徑	
鏡	炭	神	月	少	山	河	大	ウ	登	伊	山	真	暮	鏡	潤	裸	北	葡	緑	調	雨	ふ	打	踊	た	孤	林	ほ	染	暮	雪		
武藤嘉亭	炭(礦)風(景)	苑(堀)史(明)	大(田)歳(夫)	前(田)礼(子)	湖(山)田(実)	山(奥)磯(部)草(丘)	女(利)倉(群)青	猪(田)青(以)	遠(峯)光(遙)	横(尾)深(林)	直(原)玉(青)	川(村)暢(洋)	夕(川)石(根)	丸(山)石(根)	戸(田)浩(堂)	東(堀)田(光)	街(望)月(美)	影(成)田(陽)	石(曾)根(貞)龜	後(奥)矢(野)鉄(山)	小(川)立(夫)	細(谷)達(三)	子(松)本(栄)	安(島)雨(晶)	道(谷)野(圭)一	苑(大)平(華)泉	苑(大)平(華)泉	苑(大)平(華)泉	橋(爪)堆(恩)	色(宮)内(英)好	色(竹)内(潤)哲	解(奥)勝(田)潤(哲)	
夕	秋	暮	厨	月	丘	谿	樹	平	冲	凍	東	浴	黄	断	洞	深	池	肉	春	カ	水	母	断	溪	崖	狩	花	雨	楣	秋	緑	浜	
月(今)尾(津)屋(子)	風(曲)葛(原)輝	色(伊)坂(公)完	房(由)里(本)景(子)	夜(米)陀(寛)	小(沢)春(子)	谷(宮)原(明)良	周(岡)田(青)慶	景(牧)野(雅)彦	女(具)志(堅)裕(雅)	林(奈)良(裕)功	景(加)藤(彩)華	後(田)中(千)恵	昏(小)井(土)定(夫)	層(木)村(卓)三	房(陳)山(科)杏(亭)	秋(山)科(杏)亭	畔(柳)榮	因(奥)中(谷)光(炎)	池(瀨)川(遠)久	カ(メ)	勝(谷)木(俣)	田(勝)谷(木)俣	子(大)岳(智)弘	崖(周)宮(正)	山(下)巖	人(佐)藤(美)雄	園(松)久(休)光	道(渡)边(隆)夫	景(今)田(青)宏	花(兒)玉(靈)津(衣)	藤(岡)村(房)柄	辺(篠)崎(之)男	

たいまつ祭(削
作木版画) 勝平得之

大 木 武藤完一

タンクのある風 中田幾久治

景 自画石版春(依)織田一磨

覆大阪中ノ島 船内田進久

漁 目やめ(板(参)審)伊之助

馬と子供(依)前川千帆

隅 田川平山 猛

祇園祭宵祭 朝井清

向日 葵 武田由平

漁 村 大久保坦

団 老 永瀬義郎

老 船 修理 東一雄

版画 黄八丈を 木和村創爾郎

織る(八丈島)

竹橋ノ門 長坂春男

博物館にて(版 馬淵 聖

龍安寺石庭 守 洞春

滝に打たれる人 泉田康治

馬頭観音 萩原 実

池畔の夕 東本貞治

高原の 駅 小松秀雄

滞 ハワイ風景 大崎善生

立 ビルの基礎工事 阿部広司

静 物(依)山本彪一

静 物(依)山本彪一

静 物(依)山本彪一

静 物(依)山本彪一

静 物(依)山本彪一

静 物(依)山本彪一

静 物(依)山本彪一

静 物(依)山本彪一

静 物(依)山本彪一

静 物(依)山本彪一

庭の雪景(依)渡辺義一

黄 流 衣 町田源三郎

塔のある建物 新井 茂

浅 帝 秋 風景 佐藤義太郎

修理する(無)酒泉 淳

廟 美ヶ原高原(審)小堀 進

ベットの少年(岡田貞新井邦雄

の少年(岡田貞新井邦雄

洞 爺 湖(依)故赤城泰舒

雨 秋 深き武蔵野(依)宮部 進

秋 島 深 し 富田通雄

水彩画教室 細島昇一

椅子による女(依)荒谷直之介

川岸風景(岡田貞)柴田裕作

雪 赤い屋根のある 原 郁

風景 赤い屋根のある 原 郁

家 赤いブラウス(依)中村琢二

吾妻小富士(参)斎藤与里

少年と鳩(参)寺内万治郎

紅 浅 間(参)小山敬三

鑑 戸の前(依)耳野卯三郎

武蔵野の早春(依)田崎 広助

戸浪ニ扮ス(参)審)長谷川 昇

戸浪ニ扮ス(参)審)長谷川 昇

戸浪ニ扮ス(参)審)長谷川 昇

戸浪ニ扮ス(参)審)長谷川 昇

戸浪ニ扮ス(参)審)長谷川 昇

戸浪ニ扮ス(参)審)長谷川 昇

戸浪ニ扮ス(参)審)長谷川 昇

戸浪ニ扮ス(参)審)長谷川 昇

戸浪ニ扮ス(参)審)長谷川 昇

戸浪ニ扮ス(参)審)長谷川 昇

戸浪ニ扮ス(参)審)長谷川 昇

戸浪ニ扮ス(参)審)長谷川 昇

春の日(会)巻辻 永

松本城(会)巻石井柏亭

巴里現代美(会)巻川島理一郎

術館の浮彫(会)巻川島理一郎

扇 室 内 婦 人(参)木下孝則

港 窓 辺 の 像(会)巻)中村研一

窓 辺 の 像(会)巻)中村研一

少 芭 蕉 葉 の 中(会)巻)有鳥生馬

少 女(参)巻)中野和高

風 景(依)安宅安五郎

アトリエに(参)巻)鬼頭鍋三郎

銚子の海(参)巻)石川寅治

魚 港(銚子)(審)池部 鈞

静かな卓(依)有馬三斗枝

写 生(無)山田説義

絵のある静物(依)黒田頼綱

マルセイユ(依)藤本東一良

猫 追分原の浅間 谷内俊夫

座 像(依)江藤 哲

庭 の 木 柏木治子

庭 の 前(依)山田新一

鶴 信 州 の 秋 樋口 哲

椅子による(依)田中繁吉

裸婦によるコ ムボジション(依)柳瀬俊雄

御 船 山(依)納富 進

陶 土 山 鈴木貞二

黄 衣 の 少 女 津田正毅

黄 衣 の 少 女 津田正毅

黄 衣 の 少 女 津田正毅

黄 衣 の 少 女 津田正毅

黄 衣 の 少 女 津田正毅

黄 衣 の 少 女 津田正毅

黄 衣 の 少 女 津田正毅

黄 衣 の 少 女 津田正毅

トランプのあ (依)高橋庸男

る静物 (依)高橋庸男

テニス・マン (依)田中実一

F氏 (依)田中実一

雨 後(依)柚木久太

雪の牧舎 伊藤 正

海の見える室(依)緒方亮平

風 浅 春(依)奥瀬英三

高 原(依)辻 朗

静かなる漁港(依)鈴木良三

ば 静かなる漁港(依)鈴木良三

S夫人像(依)中谷龍一

森の中の話(特)東海林 広

休み日の朝(依)河井清一

溪流裸婦(審)小寺健吉

河畔浅春(依)真下慶治

漁 港(依)山喜多二郎太

牧場の初秋(参)三上知治

商工会館風景 宮地 亨

親 子(審)堀田清治

マロニエ(依)小野彦三郎

秋の日だまり 松永敏太郎

静 物(依)伊藤四郎

二 人(依)佐藤一章

奥 入 瀬(依)佐藤 徳

黄色い服(審)江藤純平

初 秋(参)鈴木千久馬

二 アツシジの丘(依)田村一男

楽器と鳥籠(依)大沢海蔵

山 白 手袋(依)村岡平蔵

寸 白 手袋(依)村岡平蔵

寸 白 手袋(依)村岡平蔵

寸 白 手袋(依)村岡平蔵

寸 白 手袋(依)村岡平蔵

婦 人 像 伊藤利行

座 像 宮脇憲三

な が れ(依)土佐林豊夫

山 村 早 春(審)高田 誠

鏡を待つ(特)飯田弥生

曠 野(依)安藤信哉

厨 房 小 山 宇 司

漁 村 風 景(依)市ノ木慶治

六波羅密寺 岩田順三

赤い服の女(依)庄司栄吉

湖 畔(依)山口猛彦

M 先 生 像 鈴木貫司

横 臥 裸 婦(依)伊藤梯三

輛 三 人 の コ ン ポ(依)長屋 勇

う た た ね(依)高宮一栄

裸 婦 円 地 信 二

少 女 座 像(依)藤江理三郎

発 走 迫 る(緊(特)中知艸人

駕 速 歩(緊(特)中知艸人

桔 梗(依)矢島堅土

琶 琵 湖 の ヨ ッ(依)遠山 清

庭 木 村 八 郎

街 景(依)堀 忠 義

佐 世 保(依)舟木 徳 重

神 庫 鈴 木 和 利

諏 訪 湖 風 景(依)高橋貞一郎

サ ク ラ モ ン テ(依)高橋貞一郎

緑 蔭(依)鈴木三五郎

高 田 馬 場 三 浦 俊 輔

座 像(依)池辺一郎

座 像(依)池辺一郎

座 像(依)池辺一郎

座 像(依)池辺一郎

座 像(依)池辺一郎

池 豊 (依)西村喜久子
 柿 那 服 (依)和田香苗
 讃州志度 (依)関口隆嗣
 碓 船 大島 勲
 風 神 武 永 檳 雄
 遊覽道路の秋 (無)相井春雄
 港 高 橋 道 雄
 静 物 (依)広瀬 功
 朝 物 (依)胡桃沢源人
 埋立地の工場 (無)石河彦男
 ビルの中通り 野村光司
 男と山羊 (依)筒井広道
 ガードのある風 大倉克次
 景 岸 (依)石橋武治
 河 畔 (依)特田代順七
 河 畔 (依)特田代順七
 ピアノの前 寺島龍一
 蒸気クレイン (無)戸谷賀一
 猿 (賞) (依)岡田時田幸彦
 葉子の像 (依)藤井芳子
 初 秋 (依)河上一也
 秋 声 鶴 浦
 母子 像 (依)草光信成
 トレド風景 (依)深谷 徹
 小鳥を売る店 宇野 一
 オートバイの (依)渡辺祐一郎
 ある風景 先 (依)星野正三
 緑 架 谷 淵 正
 高 会 岡田又三郎
 教 頭 林 義 雄
 店 辺 川村精一郎
 海 隅 島 戸 繁
 一

室 都市の一隅 (依)河井達海
 土 工 (無)桑原福保
 はたおり 西川高次
 裸 婦 (依)大島士一
 滞船 (石炭船) 久原 弘
 淡路人形芝居 大 歳 敏 秋
 屋 卓 (無)由里 明
 賑かな軒組 留岡 彬
 雪の妙高 (無)西川信一
 工場 風景 塗師祥一郎
 裸 婦 (依)水上信雄
 登校日の朝 豊岡 稔
 立っている裸 (依)小泉 繁
 水門のある橋 (依)核田精一
 播洲 風景 武田政美
 坂 朝 (依)樽松正利
 朝 夏 光 (無)内山 孝
 晩 ヨットハーバー 川島 実
 裸 婦 (依)片岡銀蔵
 桃のある室内 吹上たか子
 北朝二馬 (依)白川一郎
 初 秋 磯 野 常 雄
 ボニーテイル (無)泉 治彦
 の少女 山 荘 にて (依)高田正二郎
 秋の静物 (依)福田義之助
 画室の静物 丸野豊司
 閑 日 (無)奈良岡正夫
 ピアノによる 山 名 武
 落 陽 (依)橋本はな

室 気仙沼港 (依)白石隆一
 室 冬の志摩 (依)高木春太郎
 室内 婦人像 徳田良仁
 静 物 (無)柳田 久
 城 趾 手塚義三郎
 婦 人 像 (依)妹尾春信
 山 麓 広井邦一
 沼 畔 (依)大沼静巖
 縞の 服 (依)袖木祥吉郎
 川 岸 瀬谷義男
 タム・コンス (依)鶴田吾郎
 トラクション
 (佐久間)
 菩薩形立像 松浦英章
 眠れる人達 (依)山本日子士良
 二 人 新延輝雄
 茶色リボンのジ ユニア 高見秋太郎
 樹 間 山口 武
 髻の濃い男 筒井茂雄
 い こ い 熊井 惇
 城へ行く道 林 泰二
 静 物 柴田幸彦
 壺 中 山 節 子
 水 門 滝川武雄
 イアリング 布尾良作
 得度の朝 嵯峨山純一
 石神井の朝 竹内梶夫
 花のある室内 皆吉志郎
 鮎下る 頃 桜井菊三
 待 合 室 大原省三
 庭屋に咲く花 渡辺晴巴

室 初秋のアトリエ 内 足立真晃
 室 成 寺 小 又 光
 道 斎 藤 広 司
 室 坂 本 幹 男
 部 屋 稽 古 (無) 戸 定
 早 春 の 路 畠 山 哲 雄
 裏 窓 林 鶴 雄
 樹 苑 能 勢 真 美
 外 輪 山 の 冬 楠 見 貞 男
 画室の一隅 滝川太郎
 繫 船 小 倉 正 純
 厨 房 岡 丸 山 豊 一
 鮭のある静物 丸山豊一
 西本願寺唐門 中川義憲
 書庫のS氏 坂元一男
 緑の上衣 (依)三尾文夫
 東寺の御堂 吉田光慶
 魚河岸の車 玉ノ内満雄
 研 秋 久 山 章
 田 植 家 永 騏 三 郎
 女 像 (依)足代義郎
 初 秋 の 女 (依)石本秀雄
 能 穴 焼 窯 堀 内 孝 恵
 浜 ゆ う 榎 本 白 華
 彼女とその部屋 井上速男
 室 内 片 山 安 子
 夏 空 桜 井 康 寿
 風 景 許 長 貴
 土蔵のある風景 川人正道
 黄 檗 小 景 岡 本 邦 二 郎
 建 築 場 竹 内 長 三 郎

キプロスの箱 秋元松子
 二 条 城 早 田 嘉 之
 踊り 子 (依)平通武男
 早春の丘 北村世志夫
 牛部屋の臭 (依)上野山清貢
 雨後 新 緑 万 羽 章
 窓 際 (無)金子千恵子
 婦 人 像 (依)小早川篤四郎
 静 物 花 敵 巖
 想 の 牧 場 山 上 文
 夏 の 牧 場 山 上 文
 男 児 誕 生 (依)近岡善次郎
 修 道 女 中 井 重 男
 海のある静物 (依)久本弘一
 花 森 川 光 子
 裸 婦 (依)金子徳衛
 鏡 の 前 武 内 和 夫
 浜 卷 島 友 治
 くさむら (依)上島一司
 網のある浜 辻 正 男
 初 雪 名 村 定 志
 卓 上 静 物 小 寺 明 子
 北 の 港 森 桂 一
 花 山 田 キ ミ
 口 ジヤングル・ジ 二重作龍夫
 ム 室 内 加 藤 淑 子
 ストープのある 北 川 威 夫
 室内 御 濠 端 (依)大津鎮雄
 連 峯 清 原 武 則
 溪流錦繡 (十) (依)刑部 人
 和田奥入瀬

半島の港 後藤武久
 鏡 (後)清原重以知
 天馬をつくる子 藤川光次
 供達 (後)溝江勘二
 坂道 (後)中条茂
 カンナ (後)和田清
 うみべ (後)安宅后雄
 花菖蒲と女 (後)佐藤房子
 初夏の河内 藤房子
 急湍 (後)清水敦次郎
 淡路町夜明 森清治郎
 静物 (後)岩井弥一郎
 婦人像 中村徳次郎
 鎌倉風景 (後)金沢重治
 瀬戸風景 武蔵原鐘二
 真珠 (後)能見三次
 八丈の浜 (後)里見明正
 エツエル塔 (後)中川力
 のみえる町 (後)山下繁雄
 野草双鶏 (後)角野判治郎
 庭の一隅 (後)安達真太郎
 椅子の静物 (後)椀原貫五
 少女 (後)梶原貫五
 浅春暮雪 (湯) (後)大河内信敬
 沢温泉 (後)菅沼金六
 三安茂里風景 (後)服部亮英
 青春 (後)広本了
 赤い実 (後)長原坦
 画室 (後)河野米子
 野道 (後)江口明
 縄文土器と秋の静物 田中春弥
 本をみる女 大道健治

東山風景 西尾為一
 ランブ等のある川田茂
 静物と子 北浜淳
 母と子 尾崎侃
 ガスタンクの見 奥田憲三
 える風景 尾崎侃
 黄色の部屋と青い部屋 奥田憲三
 坐像 松尾正己
 庭の庭 野平上
 画室の庭 八木茂雄
 貯木場 塚本張夫
 ひととき 岡田陸夫
 商船学校 岡田陸夫
 堀屋の裸婦 鳥屋尾孝吉
 画室の裸婦 若林稔
 室の内 花井善道
 朝顔と少女 上野雅信
 屋台 綾井秀宣
 路の上 戸田郁郎
 停船 石原義武
 朝顔 飯田実
 晩夏 中野恒
 壁とドラムカン 青井幸雄
 原り行く那須高 灰野文一郎
 部屋の一部 杉本貞一
 裸婦 中曾根信雄
 梅の頃 樽見盛衛
 山手雪景 村上鉄太郎
 河畔の森 沼本清
 書齋にて 原本虎雄
 樹間の部落 山川忠義
 絵馬 相川昭二
 大橋風景 高橋規矩治郎
 師崎風景 栗木勝美

アイロン台のあ 出口龍一
 夏のをわり 久米小夜子
 渡島の丘より 池谷寅一
 ホームの見える 三橋節子
 風景 三橋節子
 柿右衛門窯 田中太郎
 庭園 大槻達二
 塔を望む 荒井邦朝
 静物 藤野嘉市
 詩人金子光晴氏 金田新治郎
 取穂の頃 浅井政勝
 馬頭観音 手島貢
 裸婦 (岡田意根津莊一) 貢
 室の内 辻利平
 石段の路 平井俊男
 インコ 境保博
 室内 中島首次郎
 少女坐像 橋本正躬
 貨車のある風景 後藤孝屯
 別所 沼内藤定昭
 山村の残雪 加藤五郎
 冬の樹間 宮平清一
 奈良の森 中川計子
 節をもつ農婦 遊馬正
 婦人像 加藤久幹
 白い鳩舎 秋久多稔士
 堀川 松永純幸
 手芸する女 梶田英一
 窓 出口清一
 白い家 山尾平
 中山風景 今中英夫
 鶏 清原啓一

ひまわりを配せ 伊藤館一
 午陽 堀河池野寿彦
 窓 伊庭康雄
 浜のスポーツ・ランド 小泉元生
 下関風景 松野輝彦
 窓 藤田静加
 長椅子の婦人像 鳥居昇
 緑の如富岡忠夫
 室内静物 森富岡忠夫
 少女二人 橋本百合子
 玉島風景 大野昌男
 ガスタンクに於ける造型 御正伸
 晴れた港 猪瀬踏花
 港の一隅 滝珠清
 坂道 丸珠清
 小さな見舞客 水戸敬之助
 静寂(天龍寺庭園) 高倉一二
 夏 西出外信
 猫のいる静物 平島二郎
 東 宮島武男
 二月 橋恒雄
 自画像 吉田富美
 家 岡田高平
 足場 山田茂人
 紡績工場 杉山元輝
 雪景 飛塚安吉
 稽古のひとつとき 竹沢安基
 古秋の陶村 江原全秀
 晩秋の陶村 兼松三
 自転車屋 小林重三
 三春橋雪景 飛田昭喬

画室 島村剛生
 サンゲラス 島田四郎
 子供 海野経
 店 成田浩子
 裸婦 森谷重夫
 郊外風景 西尾毅
 アンテナと警備艇のある風景 石塚三郎
 丘 藤原昇一
 鮭 藤原昇一
 蔵とおみ 勝見謙信
 競馬場 渡辺稔
 厨馬場 説谷山朝典
 遠洋漁船 熊野礼夫
 河岸の家々 篠原薫
 長崎南山手 笠岡嘉一郎
 父と娘 三井滋雄
 尾道風景 藤原昭三
 月夜の浜港 岡野正樹
 座像 三宅次郎
 裏街 中口学
 母の像 津田克巳
 採果 瀬田忠司
 福林池 中村一郎
 三角港 竹本保
 黄色い帽子の婦人 伊藤応久
 風にそよぐすき 森喜久雄
 白い服の女 末原晴人
 丘 伊木市郎
 屋根の見える風 小林鮎子
 立てる裸婦 桐野江節雄
 A K O 柳沢淑郎

冷凍 室岩本隆善
入場の一隅 浅見嘉正
工場の小像 平沢定人
堀の風景 小川武雄
ガスタクのある風景 井口ふさ
壁(奈良地獄谷の石仏) 小路栄治
酒屋の一隅 梅津五郎
土蔵の前 植原利光
河べりの家 村上好
窯ノ島風景 水野一
篠ノ島風景 加藤晴男
裸婦 平野逸郎
門と水槽タンク 西田耕作
金富展望 西田元資
少頭 井上自助
頭漆梵天像 関口文雄
雨の後の菊池健蔵
母の学 神戸文子
丘の学校 石崎五郎
中道寺 大橋城
憩風 根岸秀雄
温割風 田中祐一
単衣 高橋和子
ねぐら 川村嘉久
食後 山川利夫
裸婦 松本富太郎
岩壁 栗林秀雄
海辺の職場 中島三雄
緑 山榊行雄
積材 山内悦世

卓上の静物 井上和
室内の静物 寺坂公雄
夏の一日 東惠美
ガード風景 大桃寛
画室の一隅 上野正行
燈籠の見える風景 和田貢
時計のある静物 熊沢欽三
陶都初秋 長谷川進
姉妹 進来哲
街かど 松本正人
白鷗 守屋千之
晩秋風景 善浪迪
雪の駅前 鷺見憲治
暮色 望月正男
船腹 岡崎勇次
石仏を刻む 川辺外治
梅雨の訪問者 小合保一郎
アトリエの姉妹 山口勝
扇風器のある静物 須藤波奈代
姉妹 工藤靖彦
家の教会 青山兵吉
平戸の教会 市山時一郎
教会の裏口 添田定夫
編物 藤井宏
八重洲口 坪内正
城東風景 河本一男
レストラン 筒井博
うさぎ小舎 長見昭夫
波切 上田祐司
父 石井実
伊豆風景 本多正勝
画家S子の像 沼倉正見

唱和 村山陽
二つの入口の店 寺崎善次郎
立つてゐる 井田重男
ランブと魚 江崎寛友
水辺の町 近藤正人
漁村の家 坂本正
公園風景 坂田憲雄
窓辺 小村平八
午後の後 鈴木武司
病院の午後 斎藤久子
母子集 斎藤久子
彫塑
牡鹿鳴く(依橋本高昇
古稀老(依石井鶴三
裸女微笑(依藤井浩佑
マドモアゼ
ル・カリー(依清水多嘉示
裸婦 依黒田嘉治
大木君の顔(依畝村直久
読書 依長江録弥
母子像(依吉田久継
媚子(依山本雅彦
ホモナ(依北村治禧
未(依長嶺武四郎
青春(依長嶺武四郎
裸像(依国方林三
相撲 依山口伊之助
立女(依瀬戸団治
木立(依阿部正基
鳩笛を持つ女 依尾形喜代治
七面鳥(依伊藤芳雄
腰かけた女(依片山義郎
吾等の青年(依雨宮治郎

裸婦 石原昂
十代 山脇正邦
若い女の首 田中昭彦
憩い(依宮地寅彦
視 依古川武治
ワイキキの印象 依服部仁郎
脚を支へる女(依堀進二
トルソ(依安永良徳
静ルソ(依井上昭三
O夫人像(依小笠原貞弘
鏡獅子(依関谷充
朝立 依長谷川昂
誕生のころ 依安達英生
高校 依西田秀
追想 依長田平次
若き 依鈴木基弘
若き 依宮田卓二
明地 依矢野秀徳
おんな 依大木祥作
海を見る女 依米林勝二
裸婦 依真海徳太郎
青年の立像 依藤川基
調音 依花田一男
若い人 依大村政夫
秋田 依大田晶彦
裸婦 依稲垣勝美
ポーズする女(依吉田鎮雄
支那服の女(依佐藤義信
陸の思ひ出 依木内礼智
踊子 依渡辺徹
丘 依草野睿三
ポーズする男 依樋川治之
布を纏ふ女(依佐藤助雄

若い女 依小原泰夫
語る人 依原田新八郎
裸婦立像(依小森邦夫
翳の男(依長谷川塊記
相(依三坂耿一郎
若イ男(依分部順治
イ(依杉本宗一
佇む女 依阪本良武
男(依番木村珪二
東(依小池藤雄
石狩の男(依森野円象
郷愁(依無渡辺弘行
年若き女(依番松田尚之
少(依中村喜平
少(依会審朝倉文夫
軍(依年(依一色五郎
裸婦 依立川金祿
馬(依高久茂雄
華鬘菩提像(依三井高義
飛天(依森山朝光
花音 依天(依森山朝光
羽音 依佐藤義重
裸婦立像(依池田勇八
前(依和(依田金剛
麦(依和(依田金剛
砂上(依特池辺るり子
水鏡 依斎藤吉郎
無題 依吉田曉禾
互いに(依中川清
夏 依門井俊夫
裸婦 依小田寛一

裸	湖	青	乙	立	蒼	弓	珠	再	習	習	イ	雄	朝	大	み	朝	青	対	裸	青	女	髮	レ	裸	投	座	明	和	母	深	男	
婦	音	年	春	像	像	を	持	生	作	作	デー	鹿	空	み	風	像	策	策	婦	首	優	の	の	踊	擲	つ	日	を	神	春	座	
佐	中	横	岸	小	志	横	富	今	緒	三	平	太	後	遠	内	中	梁	松	谷	湖	F	山	村	高	松	女	中	山	中	久	野	
々	島	山	崎	西	賀	山	田	川	方	木	野	田	藤	藤	堀	川	喜	口	田	野	潮	畑	高	野	三	野	野	本	野	久	野	
木	五	夜	竹	小	賀	山	田	川	方	木	野	田	藤	藤	堀	川	喜	口	田	野	潮	畑	高	野	三	野	野	本	野	久	野	
日	郎	光	太	西	賀	山	田	川	方	木	野	田	藤	藤	堀	川	喜	口	田	野	潮	畑	高	野	三	野	野	本	野	久	野	
出	敦	郎	太	西	賀	山	田	川	方	木	野	田	藤	藤	堀	川	喜	口	田	野	潮	畑	高	野	三	野	野	本	野	久	野	
雄	敦	郎	太	西	賀	山	田	川	方	木	野	田	藤	藤	堀	川	喜	口	田	野	潮	畑	高	野	三	野	野	本	野	久	野	
立	裸	座	裸	朔	新	姉	風	思	向	心	女	裸	さ	萌	若	若	七	O	裸	愁	黎	清	老	つ	浜	想	農	青	青	生	鉄	
女	婦	女	風	光	妹	惑	代	象	性	裸	さ	萌	若	若	七	O	裸	愁	黎	清	老	つ	浜	想	農	青	青	生	鉄	植		
名	金	立	求	宮	山	堤	加	遠	中	富	野	石	謙	渡	横	長	後	斎	明	小	純	爺	爺	池	久	夫	代	年	誕	難		
久	子	川	井	崎	脇	野	藤	山	村	岡	々	田	訪	部	山	谷	藤	斎	小	純	爺	爺	池	久	夫	代	年	誕	難	波		
井	直	義	不	辰	正	親	湖	静	博	泰	垣	里	与	星	豊	秀	俊	藤	原	野	神	爺	池	久	夫	代	年	誕	難	波		
十九	裕	明	忘	見	司	光	光	夫	直	泰	垣	里	与	星	豊	秀	俊	藤	原	野	神	爺	池	久	夫	代	年	誕	難	波		
三	力	正	雄	三	郎	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望
静	思	力	雄	三	郎	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望
思	力	雄	三	郎	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望
吉	力	雄	三	郎	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望
閑	力	雄	三	郎	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望
伊	力	雄	三	郎	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望
喜	力	雄	三	郎	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望
蔵	力	雄	三	郎	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望
蔵	力	雄	三	郎	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望
蔵	力	雄	三	郎	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望
蔵	力	雄	三	郎	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望
蔵	力	雄	三	郎	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望
蔵	力	雄	三	郎	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望
蔵	力	雄	三	郎	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望
蔵	力	雄	三	郎	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望
蔵	力	雄	三	郎	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望
蔵	力	雄	三	郎	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望
蔵	力	雄	三	郎	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望
蔵	力	雄	三	郎	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望
蔵	力	雄	三	郎	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望
蔵	力	雄	三	郎	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望
蔵	力	雄	三	郎	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望
蔵	力	雄	三	郎	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望
蔵	力	雄	三	郎	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望
蔵	力	雄	三	郎	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望
蔵	力	雄	三	郎	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望
蔵	力	雄	三	郎	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望
蔵	力	雄	三	郎	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望
蔵	力	雄	三	郎	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望
蔵	力	雄	三	郎	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望
蔵	力	雄	三	郎	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望
蔵	力	雄	三	郎	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望
蔵	力	雄	三	郎	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望
蔵	力	雄	三	郎	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望
蔵	力	雄	三	郎	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望
蔵	力	雄	三	郎	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望
蔵	力	雄	三	郎	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望
蔵	力	雄	三	郎	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望
蔵	力	雄	三	郎	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望
蔵	力	雄	三	郎	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望
蔵	力	雄	三	郎	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望
蔵	力	雄	三	郎	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望
蔵	力	雄	三	郎	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望
蔵	力	雄	三	郎	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望
蔵	力	雄	三	郎	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望
蔵	力	雄	三	郎	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望	望
蔵	力	雄	三	郎	望	望	望	望	望</																							

刺繡飾宮鶴 (參岸本景春) 刺繡文風呂先 (參吉田醇一郎) 屏風 紅葉文乾漆花 (依本岡薺華) 鑄金銀漆箔獅子狗一對 (依佐々木象堂) 爛漫 (依堀柳女) 花の棚 (參吉田源十郎) 彫金梅之花瓶 (依介川芳秀) 黒味銅彫金象嵌秋草文筥 (參二橋美衡) 銀壺 (參大須賀喬) 玄窓叢花瓶 (參清水六兵衛) 和、純銀打出 (參河内宗明) 水挿 彫金象嵌花器 (參三井義夫) 彩磁板草文水 (參板谷波山) 差 金胎花器 (參松田権六) 册に依る花 (參高村豊周) 青磁鶴首花瓶 (參清水六和) 花籃、黄緘 (參飯塚琅玕齋) 簞模椽木地時 (參高野松山) 繪手箱 (參高野松山) 農 (參香楠部弥式) 青銅花瓶 (參内藤春治) 宮詣 (參岡本玉水) 青銅 (海洋) 飾 (參丸谷端堂) 花器 魚文花器 (依海野建夫) 花瓶茶金甕 (參河村蜻山) 青銅花瓶 (參故杉田禾堂) 練上手前葱金 (參加藤土師萌) 欄大皿

三蛙銀花器 (依平松宏春) 鑄銅花瓶 (平和) 林万寿人朝 湖畔漆パネル (參小松芳光) 遊於天屏風 (參山崎覺太郎) (左登右夜) 流線鉢 (無井上治男) 緑 (參) 鉢 (參) 見隆三 彫漆飾宮 (依佐藤陽雲) 緑袖飛 (北斗貫) 無流 一夫鳥文壺 (參) 青銅花瓶 (依松崎福三郎) 線彩 壺 宮地 幸彦 乾漆壺萌生之 (依磯井如真) 点文滴木製盛 (參稻木東千里) 器 結晶釉花瓶 (依井上良齋) 菖蒲花瓶 (依伊東翠壺) 唐銅菱型花瓶 (依山本純民) 雪を越えて葉知 松本佐吉 染彩屏風桂離 (依皆川月華) 宮 長韻漆屏風 (特久保金平) 染三曲屏風 (特成竹登茂男) ひのあと (參) 漆器銀鷄屏 (參香福沢健一) 風 手織錦甕生図 (參山鹿清華) 壁掛 漆器・馬に乗る聖女・小屏 (參前大峰) 風色 染色壁掛蟬の (依山岸堅二) 声 想漁図漆衝立 (參番浦省吾) くま 公 (依小合友之助)

月と遊ぶ (參佐野猛夫) 鑄銅浮彫仁王 (參蓮田脩五郎) の印象 都会の歌 (依高橋節郎) 花器 田沼起八郎 屏風・緑の幻影 中村弘子 エウロペ 野口晴朗 向い鳥花瓶 (依信田洋) 魚譜陶製鉢鉢 (依北出塔次郎) 回想 (銀製) (特無帖佐美行) 彫金花器 (參) 棚 (參六角頼雄) 染屏風双木理 鶴飼 菁 白甕花瓶 (依米沢蘇峯) 鑄銅繩耳花瓶 (依北原三佳) 秋慶文盛器 (特宮下善寿) 花 籃 (無飯塚小玗齋) 和の壺 (參宮坂房衛) 春光 (花器) (參香取正彦) 輪花 (參森野嘉光) 鶏二曲屏風 板谷光治 游 亀 (依山脇洋二) 麗 日 (北斗貫) 大久保婦久子 泉 神成 滯 白釉花盛「晴」 小峠秀夫 モザイク草 (依板谷梅樹) スクリン四季 原 稻生 速作の「春」 白釉花器 八田 伸 トロフキ 田中 勇 陶たき花入 中里忠夫 青銅花瓶 (北斗貫) 中条青香 青銅 壺 (特西大由) クリスタル鉢 (參各務鉦三)

鑄銅花器 (依山室百世) 作品「丁」 宮川三喜重 語る「景置物」 大橋年郎 不死鳥紋花瓶 飯田美郎 条文花器 (北斗貫) 清水洋 雷鳥の図箱 (北斗貫) 寺井直次 人形水辺 宏きよ子 黒袖蝶壺 (依内田邦夫) 「壺」 今井政之 彫漆無花果手箱 塩田宏 置物 (ころ助) 小川正波 窠交「交歓」 (北斗貫) 浅葎 五十吉 花器 星座文盛器 大谷春彦 鳥染屏風 岸田宗三郎 神話 (依般若佑弘) 干瀉 (染色二) (依大坪重周) 曲屏風 夢よまろかなれ 宮田修平 楽 器 中村光哉 怪鳥と怪獸 (參岩田藤七) 林 スクリン 関 穂 漆 棚 (特榎木) 盛 白泥花器 (依安原喜明) (白夜) 鉄の花器 (依芳武茂介) 青い作品 船越次郎 青銅仙人掌花瓶 津田永寿 鍛鉄スクリーン 三橋国民 (魚) エニット花器 榎尾宗一 建築裝飾「陶板」 河本五郎 いちぢく花瓶 小川欣二 染屏風「濠」 青木滋芳

青い宝冠手織 (依中村鵬生) 鑄銅掛 彩漆衝立「陽炎」 上原茂 染付カンナ花瓶 新開 彩漆水盤 (粟) 上原清 鉄布目象嵌花器 橋本良介 朱乾漆華彫花器 東端真笹 印花紋花瓶 谷口良三 葎露ホロホロ鳥 とボケの図衝立 岡田章人 壺 長谷川勇 鑄銅花いけ 宮田宏平 パネル 阿部恒男 魚パネル 丹羽昭司 布目象嵌柳文 (參鹿島一谷) 水瓶 瓜 屏風 (依河合秀甫) 仙果文手付花 (參土肥刀泉) 踏 繪 大熊納子 かに青銅花器 (依会田富康) 象嵌磁「泰」 宮之原謙 山木「飾壺」 (參) 沙魚金具 (北斗貫) 大木秀春 春 宵 (特川上南甫) 曲水、彫金宮 亀倉蒲舟 推朱彩光紋無 (參吉田棟堂) 双風呂先 一文字釜 (依根来実三) 彫漆布袋文 (依音丸耕堂) 飾棚 サークスの曲馬 村田博三 海芋紋 棚 橋爪義雄 麿 風 景 中井貞次 蒔薺菖蒲飾棚 伊賀彰三 染屏風「豊漁」 中堂憲一

露	草	櫻村大六	罐	石川義夫	魚紋手文庫	大谷玲石	陶淵明歸園田居	今井凌雪	陶淵明作酬劉柴	吉田栖堂
綴壁掛「ひまわり」	信田礼子	暮	秋小松康城	乾漆盛鉢	增村益城	詩	無極	神田久吉	王維詩	安井寿泉
青織部繩文花器	加藤嶺男	象嵌消金蜻蛉文	有田利章	手織綴屏風「温室」	松井よし子	壽	無極	兼松泛香	司馬溫公勸學	無武市秀峯
花器	古瀬堯三	漆器「ベンギン小屏風」	泉篤彦	和染屏風「洞声」	春日井秀雄	禪月大師春晚閑居詩	安藤榻石	蘇氏の別業	蘇過山村	川上柏翠
鳥	堤浪夫	日釉扁壺	山崎昭	三曲衝立想園	伊藤裕允	漁父	歌	安原臯雲	吳錫麟詩觀荷值	津田翠岱
バネ	大須賀選	影嵌飾箱	べ(悠富)	岩ニ(悠無)	佐藤貞一	秋	夜	北村九臯	杜少陵五絶三	(悠鈴木汪亭
染色屏風「磯波」	(無喜多村栄太郎)	十三	夜綿貫萌春	おど	宮崎芳郎	高青邱	詩	三村秀竹	李白詩「江樓早秋」	弦巻松蔭
の丘	小林清	樹水文花瓶	古宇田正雄	彫漆「網」屏風	目黒順三郎	買	花	西村桂洲	水	渡
風景染二曲屏風	金丸水明	草花文彫漆手宮	山下楊哉	大	漁(悠山形駒太郎)	曹將軍	霜	細川墨水	業	根
白い花の壺	伊東奎	輪線紋花籃	田辺竹雲斎	硝子花器	高木茂	寒山	詩	小菅秩嶺	張籍詩永嘉行	(特藤岡正悟
緑釉鉢	清水卯一	彫金鴨臚銀花	(悠小川英鳳)	円舞	曲五味文郎	明高青邱七律	辻本郎鶴	良寛詩三首	陸放翁詩	三田清白
天龍峽の老松花瓶	中村雅臣	白磁深鉢	泉多須良	花	器	瑪瑙香炉	宅間正一	与高適詩同登慈恩寺浮圖	大	庭
呉須鶉丸紋花瓶	(悠岡本為治)	御車山二枚折	(悠山崎立山)	葉文クリスタル壺	吉田煥人	青陽	峽	田中海庵	拾遺和歌集抄	倉重天拜
刺繡衝立柘榴花	小泉竹雄	雲母華布屏風	伊良湖岬の印	器	黄銅地切嵌花	陸放翁小園詩	三原研田	醉古堂劍掃語	山家集抄	谷脇溪翠
雨端天然蛙硯	(悠雨宮静軒)	染二曲屏風「あぢさい」	原田清子	板金双羊花生	(悠中野惠祥)	張說の詩	浅野五牛	般若心經	古今和歌集抄	清水
陶器	べりかん	青銅花器	斎藤明	黒い花瓶	山本曠	日	月	天地	兼好法師集	岡田秋翠
置物	内藤義兼	景花	瓶(悠中村翠恒)	彫金花瓶	斉子邦平	看飛行樓	憶	(悠西脇吳石)	兼好法師集	岡田秋翠
「早苗」漆衝立	新村撰吉	花盛器	三浦勇	ひまわりの壺	安田友彦	久米仙人	懷	森岡峻山	兼好法師集	西井林亭
彫金	宮後藤学	藍い壺	加藤巖	枳文象篋壺	寺本美茂	陸璠詩	歲暮感	懷	柳宗元の詩	廣津雲仙
薄	暮吉田博	黄銅鍛金鉢	河内三郎	双筒ノ壺	市川広三	登	高	特	高橋蒼峰	南陽送客
彫漆	ほうらいし	盛銅鍛金鉢	河内三郎	ひまわりの壺	安田友彦	陸璠詩	歲暮感	懷	柳宗元の詩	廣津雲仙
よう手文庫	音丸謙	湖畔衝立	(悠竹園自耕)	彫金花瓶	斉子邦平	看飛行樓	憶	(悠西脇吳石)	兼好法師集	岡田秋翠
黒金流文花瓶	鈴木幸平	硝子釉盛器	寺池静雄	彫金花瓶	松原春男	南陽	送客	花	田峰堂	李太白詩
色紙短冊箱	(悠堂本漆軒)	花器	「和」市橋敏雄	織部花器	鈴木八郎	陸遊の詩	長歌行	秦	草洋	李太白詩
(瓜之図)		花器	「和」市橋敏雄	織部花器	鈴木八郎	陸遊の詩	長歌行	秦	草洋	李太白詩
初秋蒔絵飾盆	(悠三田村自芳)	花器	「和」市橋敏雄	織部花器	鈴木八郎	陸遊の詩	長歌行	秦	草洋	李太白詩
乾漆盛器	(悠中川哲哉)	花器	「和」市橋敏雄	織部花器	鈴木八郎	陸遊の詩	長歌行	秦	草洋	李太白詩
彫金銀打出花瓶	土屋杏平	花器	「和」市橋敏雄	織部花器	鈴木八郎	陸遊の詩	長歌行	秦	草洋	李太白詩
波漆飾棚	横山玉抱	花器	「和」市橋敏雄	織部花器	鈴木八郎	陸遊の詩	長歌行	秦	草洋	李太白詩
魚置物	香取宏臣	花器	「和」市橋敏雄	織部花器	鈴木八郎	陸遊の詩	長歌行	秦	草洋	李太白詩

小町の歌出口草露
 忠見集抄浮乘水郷
 新古今和歌集抄松田潔子
 残雪(懸松本直
 後撰和歌集抄黒野貞夫
 兼輔集岡田英範
 万葉拾珠石井鮮艸
 くさまくら(無合辺橋南
 紀貫之集抄中野斗南
 後撰和歌集春歌南東洞
 抄
 後撰和歌集猶原保昌
 古今和歌集抄古久保福馬
 古今和歌集卷第二宮柏龍
 十七・第十八
 紫式部集抄(特深山集洞(茂)
 初秋後藤温美
 あさぼらけ豊田文
 長塚節の歌有城英一
 伊勢集西谷卯木
 深森木風久
 御山跡源元芳子
 摩詰五律(参)辻本史邑
 袁中郎の句(参)西川寧
 拾遺和歌集抄小沢寿明
 心(参)江川碧潭
 万葉贈答歌(書)田中塊堂
 許渾詩題飛泉(依)大池晴嵐
 観宿龍池
 東鑑紀行(依)中村春堂
 放懐丘壑(参)柳田泰雲
 霞(参)安東聖空
 赤彦の童謡(依)津金雀仙
 平(調和体)安(依)松井如流

三誓偈(特阿部金正
 不二大観(審)内田鶴雲
 杜甫詩(審)赤羽雲庭
 山村夜(特)山崎大抱
 母(依)桑田笹舟
 万葉歌(依)宮本竹逕
 唐詩三首(審)炭山南木
 東坡居士七言(依)山崎節堂
 古詩
 「從容録」頌(特)泉原寿石
 澄(依)松本芳翠
 春日醉起言志(依)印南溪龍
 若寺奈良島ます
 草書真山民五(参)川村驥山
 詩
 五字額(依)青山杉雨
 き(依)高塚竹堂
 李攀龍五言古(審)村上三島
 詩
 山家集抄川北春江
 雲鶴(審)手島右卿
 疎籬不護花(参)鈴木翠軒
 李白詩七絶(依)審豊道春海
 草書
 雪(審)相沢春洋
 寒山詩(審)平尾孤徑
 壺中金鐘兒宗田周卿
 与汝樂之(依)松丸東魚
 隔靴搔痒水野東洞
 老子語、死(参)審中村蘭台
 而不亡者寿(依)審中村蘭台
 燈花照魚目(依)山田正平
 酒囊飯坑小松貫城
 洞達無方(依)生井子華
 有竹居(依)石井雙石

忠誠貫於金
 石、孝弟通於(審)岡野香雲
 神明(銅印)
 越人之射小林斗齋
 艸廬高臥内藤江月
 巫巫爾(依)梅舒適
 弱子戲我側井川嘲花
 癸上等願山田桃源
 離地分不倒(特)殿木春洋
 盪胸生層雲(依)保多孝三
 仙鶴呈寿佐藤桃巷
 嘯月吟華園与(無)高畑翠石
 多
 潤轍之鮒中村淳
 揮塵風流久保田大卿
 あらし山上田星郎
 春日山(特)天石隆子
 良寛の歌小野桂華
 重之集増田節堂
 古今和歌集抄西尾節鋒
 桜千(依)審尾上柴舟
 宗武の歌塩谷南荘
 宗武の歌塩谷南荘
 王維七言律詩(特)岡本白濤
 一首
 呉凝父詩(依)小坂奇石
 かはづ(依)日比野五鳳
 窮秋寄隱士(無)岡本松堂
 頼山陽詩藤田蒼碩
 秋(依)懷伊東參州
 書見補之所(無)近藤撰南
 藪与可画竹(依)審藤撰南
 臨水見魚(依)宇野雪村
 秋柳詩(依)殿村藍田
 白詩喜周天石東村

あきさめ玉城紅竹
 羈旅の歌鴨居道
 唐詩五律(依)森田翠香
 張船山心紅峽詩貞広春山
 王漁洋詩(無)木村知石
 雁(依)高木哲洲
 明沈石田安居(依)藤本竹香
 歌
 唐詩七律(無)中林子鶴
 思ふこと(依)羽田春埜
 松声無古今(依)徳野大空
 高青邱詩(依)近藤秋篁
 石川啄木の歌(依)鈴木梅溪
 李太白詩三首(特)小西翠山
 永寿墨菊菅原一広石盧
 其道幽遠(無)森田伝
 洗車雨吉野松石
 諦観伊熊憲一
 胸中無宿物伏見冲敬
 沙上無人月一痕酒井康重
 群而不党永野芳蘭
 傍人有眼山崎祠石
 有徳司契古川悟
 馮駟奔泉(依)内藤香石
 人中駟驥金山鏗斎
 糞土之墻新井貞磨
 常咬菜根佐佐木祥石
 将門有将杉本昭夫
 酒為書滴甲斐雄山
 開眼說夢吉益晃堂
 韋応物の詩二首加藤光城
 李白詩平井あや子
 飲中八仙歌森狭江

哀江頭佐山大業
 陳五昂詩奥村龍雲
 送秘書吳監還(審)日本(王維)
 種村司
 孟浩然之詩藤野南泉
 潮音斎賀雅峰
 問居自題杉原昇
 元遺山五言古詩河野如風
 後撰集の歌村上翠亭
 清高上松義山
 後撰和歌集卷第五
 唐詩、五言排律
 鄭審奉使巡檢
 兩京路種果樹
 事畢入秦因詠
 歌
 春日醉起言志中村与三治
 敏行集森昭子(玉苑)
 七言絶句三種成瀬映山
 高青邱詩二首石橋梅碩
 白秋歌集抄吉仲ふき
 劉方平七律市原秋芳
 唐詩五言古詩杉本長雲
 郎士元之詩山本公江
 後撰和歌集抄児玉明子
 靈陰寺細貝映州
 杜甫詩二首影山磐溪
 風雅和歌集抄松田英治
 歸田水嶋鶴山
 杜甫秋興四首の内一首太根啓山
 王維輞川園居真島雄山
 贈裴秀才迪大沢碧水
 蘇東坡太山下西奥鳴琴
 早行詩

題仙遊	觀岩谷長右衛門	望海樓の晚景	小森深美	西行の歌	井上青香	韜光窟詩二首	松田正夫	雨の詩	中島但溪
江南旅懷	堀田芳汀	元遣山詩	江口辰次	早發交崖山遷太	尾崎敏一	行路子	神崎紫峰	六居士之詩	清水天山
王維五言排律	黒田芳汀	杜詩閨山歌閨水	核井松居	室作	関岡雲林	高啓之詩	古谷蒼歆	頼山陽詩	高橋英子
贈江客	高尾泉石	良寛詩二首	堀江翠峽	源順詩「白」	大月海山	醉古堂劍掃語	阿部翠屋	唐詩王維之詩	青柳石城
白樂天之詩秋懷	岩間祥覆	植木翁酒瓶面贊	道岡香雲	李白詩	長谷川呼山	富	太平慎齋	和太常草主簿五	郎温泉寓目
元好問詩	神谷葵水	陶淵明詩	小出聖水	春望	木村雄一郎	古淵明詩	擬	張說詩二首	小川竹城
送友人	田中虛丁	吳宮怨	岡本雪麟	早發交崖山遷太	北垣元康	登錫山頂石仏洞	淺見錦龍	唐詩七絶	土田雲峯
幽居	水原春雄	良寛詩	森下南窓	室作	兎本淳子	杜甫の詩	中野白呂	寒山詩	井野大雲
秋日遊豪谷	林中町蒼原	妙法蓮華經觀世	番場敬華	頰山陽詩	永田鶴風	贈蘇味道	近藤碧峯	夜歸詩	沢田大暁
月下獨酌	川上清亭	音菩薩普門品五	蘇東坡の詩九月	李白詩二首	西橋香峰	唐詩五律	大坪藍海	宿登公禪房聞梵	小森秀雲
王右丞五言古詩	篠田一鳳	蘇東坡の詩九月	十五日觀月聽琴	山家集抄	久米七三子	劍掃之詩	十鳥靈石	孟浩然詩	仲田重總
五言古詩	谷口東峰	西湖示座客	古詩	良寛詩	佐々木如空	述	古	李太白詩	林雪骨
陶淵明の詩	水木愛堂	白居易詩	白居易詩	うけらが花恋	仲三千人	李太白詩二首	杉山紫水	王摩詰の詩	伊藤昌山
李太白詩	林孤石	白居易詩	白居易詩	五言二句	高野流居	雲居寺孤桐「白	穴戸東畝	宿雲門寺閣	須崎海園
中夜起望西園值	大橋富峯	白居易詩	白居易詩	杜甫秋興詩	高須翠雲	月下の独酌	吉田桂秋	李太白詩	重森翠溪
月上	村寄鴨畦	白居易詩	白居易詩	陶淵明詩	中川雨亭	過香積寺	野田白都	九華山人詩	荒井重蔵
劉基太公釣渭凶	川浪青漣	白居易詩	白居易詩	唐詩「白樂天」	南尚雲	閔雪松梅之詩	浅田蓬村	岑參詩	平野公桑
陶弘景語	倉持濤峰	白居易詩	白居易詩	陶淵明詩	中川喜代人	蘇東坡古詩	村上白山	秋日盧龍村舍	栗田溪州
早發交崖山遷	高畑雲汀	白居易詩	白居易詩	短歌行	小島碧雲	一休二首	喜代吉郊人	送王昌齡	早川青楓
太室作	黒沢春來	白居易詩	白居易詩	鳥夜啼	沖野恒壽	春歸	杜甫五言	謝惠連詩	秋懷
唐詩七律左遷	佐々木正昭	白居易詩	白居易詩	梁道一師蘭若宿	紺野一精	排律	田沼群峯	唐詩鐘	石川雲鶴
至藍関二孫孫	後撰和歌集抄	白居易詩	白居易詩	湖中对中酒作	鈴木虎之助	李太白詩	田中碧濤	述	関口芳岳
湘(錦愈)	吉田恵風	白居易詩	白居易詩	石壕吏	中村雨城	白樂天五言古詩	平野移暁	梵	河村素史
王維詩	新井古桐	白居易詩	白居易詩	李太白詩	高木天祐	放魚	大田佐享	安樂寓中吟	小野里静雲
誦山海經	梶本麦水	白居易詩	白居易詩	九日閑居	宗田明峰	雲居寺孤桐	秋夜宿僧院	高啓「知恥銘	花山春霞
李太白詩	福沢華雪	白居易詩	白居易詩	李白の詩	小野田湖洞	示程	孫	聖德太子憲法第	二条
録李青蓮月下独	長塚節歌集	白居易詩	白居易詩	陳子昂之詩	加藤梅香	贈	孫	聖德太子憲法第	二条
酌詩	高適醉後贈張	白居易詩	白居易詩	唐詩五言律二首	渡辺錦舟	李太白詩	長江左翁	聖德太子憲法第	二条
陶淵明詩二首	篤尾翠溪	白居易詩	白居易詩	真山民の詩	戸田提山	贈	孫	聖德太子憲法第	二条
唐詩	安藤秀川	白居易詩	白居易詩	月夜憶舍弟	昆布栖岳	白樂天客中月	新井霞亭	聖德太子憲法第	二条
雲仙岳登臨詩三	安永龍峯	白居易詩	白居易詩	劉	月夜憶舍弟	白樂天客中月	新井霞亭	聖德太子憲法第	二条
首	安永龍峯	白居易詩	白居易詩	劉	月夜憶舍弟	白樂天客中月	新井霞亭	聖德太子憲法第	二条

鳴門の詩	富永眉峰	早免交崖山遊	三宅劍龍
除夜宿石頭	武政北総	高青邨送雷文学	阿部鉄蕉
玉華宮	荻原暎筆	麟詩	阿部鉄蕉
唐五律二首	真鍋士鴻	唐詩	阿部鉄蕉
李白詩二首	沢井青楓	高叔嗣作詩	中塚宜風
杜甫秋興其三	阿閉晴堂	早免交崖山	寺坂古遷
白楽天五言古詩一首	堤素江	陸放翁之詩	武田玄林
飲中八仙歌	井手正風	南澗中題	米田玉泉
杜甫の詩	折野南峰	月下独酌	吉田豊照
漢代詩「西北有高楼」	鷲見清獄	穎州容舍姚撥詩	佐々木春芳
送ル鄭侍御謫関中	永倉洗石	無諸釣龍台懷古	德並方翠
李太白對酒行	相原墨峽	晚秋郊居	飯田秋光
唐詩	山口雨邨	南澗中題	関根薫園
蘇題詩	大岡皓崔	陶淵明詩	伊藤樵舟
白居易五言古詩	高井望山	宿雲門寺園	宮崎葵光
陶淵明詩	水崎素雲	王勃詩滕王閣	岡本静陽
張子壽詩	篠塚新峯	寒山詩	佐々木開庵
元遺山詩	田畑昭典	大智禪師偈頌	工藤愚庵
秋倪雲林語	大沢松亭	擬白楽天五言古詩	山本興石
菜根譚の一章	林秋馨	遊山西村	原納冬草
陸放翁詩	山内溪南	隸書五律	石井葉月
月夜与客飲酒杏花下	深尾月泉	白詩「養拙」	松田松畔
白楽天 南湖晚	児玉光堂	唐詩(七言絶句)送李侍郎赴常州	近江見讓
皇甫湜送周氏詩	田口水南	月下独酌	黒川研水
良寛詩	船橋碩城	袁牧の赤壁の詩	内田東水
五言古詩	野沢聖竹	高青邨 養蚕詞	弓矢孝蔭
許渾七言律詩	中川白麟	程明道詩「秋日偶成」一首	原田青邨
唐詩三首	中野蘭嶽	良寛之詩	山口流水
		白帝城懷古陳子昂詩	矢島大凶
		寒山詩	岡本静虚庵

送魏方之京	李野津	頌	野津閑水
游善卷碧仙巖	高田折桂	頌	野津閑水
白楽天詩「晚桃花」	岡村鬼城	頌	野津閑水
良寛の詩	石沢煌峯	頌	野津閑水
韓翃詩三首	広阪牧川	頌	野津閑水
春夏秋詩三首	川上南溟	頌	野津閑水
杜甫の詩「上白帝城」	渡辺錦虹	頌	野津閑水
不出門	菅公	頌	野津閑水
唐詩	飯田東籬	頌	野津閑水
雜興	窪田華雲	頌	野津閑水
江陰	望月祥堂	頌	野津閑水
靈隱寺	池田太然	頌	野津閑水
王維七律詩	務台霽洞	頌	野津閑水
春日醉起言志	松下芝堂	頌	野津閑水
李白	谷口雄山	頌	野津閑水
湖中对酒作	墨谷鶴村	頌	野津閑水
良寛詩	梶田東崖	頌	野津閑水
李太白古風詩	栗原蘆水	頌	野津閑水
夏完淳秋懷詩	伊藤天游	頌	野津閑水
白楽天送王十八歸山寄題仙遊寺		頌	野津閑水
パンリアル展	30-11月3	な	
びす	〔批〕美術批評12月	(東)	
野芳明			
2回草々展	30	産経画廊	
〔批〕産経夕刊29			
孫伯醇個展	31-11月2	中央	
公論社画廊			
守矢正男展	31-11月5	養清	
堂			
玄々社彫金工藝展	30-11月5		
和光			

サロンド・ジュワン秋季展	31-11月5	国際観光会館
ギャラリ		
菊池敏雄個展	31-11月5	サ
エグサ		
1回亜吐会展	31-11月6	美
松画廊		
小川宇鏡遺作展	31	茨城県立美術館
立美術館		
一一月		
2回中展	1-5	文房堂
安井曾太郎と前田青邨展	1	
15市立神戸美術館		
清川泰次油絵個展	1-15	新
宿・風月堂		
6回丹楓会展	1-6	日本
橋・高島屋		
清水敦次郎油絵個展	1-5	
日動画廊		
国際警察美術展	1-6	渋
谷・東横		
玄々社彫金工藝展	1-5	和
光		
VERA展	1-6	産経画廊
〔批〕産経5		
丹匠会大家工藝展	1-9	新
宿・伊勢丹		
早川昌、吉仲太造二人展	1	
8サトウ	〔批〕美術批評12	
月(東野芳明)、アトリエ12月		
(東野芳明)		
土味川独南近作展	1-7	樫
画廊		

田之口青晃日本画展	1-6	
日本橋・三越		
新制作展	1-15	京都市美術
館		
創元会油絵小品展	1-6	大
阪・阪急		
5回麗人展	1-5	日本橋・
丸善		
泉茂個展	1-10	タケミヤ
〔批〕美術批評12月(針生二郎)		
日本金銅仏展	1-30	東京国
立博物館	〔記〕朝日17	(山本
豊市)		
清方名作展	1-9	日本橋・
白木屋	〔批〕東京7	(河北倫
明)朝日8	〔記〕毎日3	(近
藤市太郎)毎日夕刊3	(川辺	
真蔵)		
工藝和洋会作品展	1-12	日
本橋・白木屋		
美術文化全国巡回展	1-6	
鹿兒島美術館		
成井弘文個展	1-5	大阪・
梅田画廊		
日本民藝館新作展	3-25	日
本民藝館		
2回万人の為の展覧会	3-10	
大阪・フジカワ		
錦繡美術織物展	3-6	日本
橋・高島屋		
野口染繡藝術衣裳展	3-6	
日本橋・高島屋		
明治・大正・昭和名作美術展		
(文部省地方巡回展)	3-17	

德島県
中原隆近作展 4—5 中央
公論社画廊
新制作京作家小品展 4—8
京都府ギャラリー
黒田重太郎個展 4—9 大
阪・梅田画廊
小磯真平新作展 4—9 東
京・大丸
錦虹会日本画展 4—8 東
京・大丸
関西モダンアート展 5—9
大阪・そごう
3回山田皓齋個展 5—10 大
阪・三越
4回造型集団展 5—11 村松
画廊
〔批〕美術批評12月(東野芳明)
5回潮会展 5—10 大阪・松
坂屋
朝妻治郎個展 7—12 養清堂
三岸黄太郎帰朝作品展 7—12
大阪・梅田
工藝洋和会作品展 7—12 和
光
11展 7—12 国際観光会館
三沢弘個展 7—12 中央公論
社画廊
日展特選工藝作家展 8—13
上野・松坂屋
日本陶窯展 8—13 上野・松
坂屋

白日会展 8—13 日本橋・高
島屋
五人展(小松・関口・福田・岡
島・藤野) 8—12 襟画廊
河井寛次郎新作陶磁器展 8—
13 日本橋・高島屋〔批〕朝
日10
中大70周年記念須磨コレクション
展 8—13 中大第二図書
館
春日大社遷宮記念名宝展 8—
30 奈良国立博物館
横地康国個展 8—12 サエグ
サ〔批〕東京タイムズ11、毎
日12
旧松方コレクション展 8—12
月4 ブリヂストン〔批〕
東京16(岡本謙次郎)、産経夕
刊19〔記〕朝日夕刊10、東京
タイムズ13
1回日本漆絵展 8—13 日本
橋・三越
東陶会新作陶展 8—13 日本
橋・三越
池田勇八彫刻展 8—13 浜
谷・東横
小久保晴行抽象絵画展 9—14
三省堂
要樹平水墨個展 9—12 日本
橋・丸善
日向祐油絵展 9—14 フォル
ム
線の造形展 10—15 なびす
1回凡樹会展 21—18 東京・
大丸

日本彫塑家クラブ関西支部展
11—15 京都府ギャラリー
松本弘二個展 11—16 大阪・
フジカワ
田原太郎・佐藤恵一作品展 11
—20 タケミヤ〔批〕アトリ
エ31年1月(瀬木慎一)
新制作協会彫刻展 11—15 日
動画廊
絵巻物名作展 12—28 銀座・
松屋〔記〕東京13(奥平英
雄)、朝日15(田中一松)、毎日
19、20
出品目録
○国宝 米重美
○重文 米重美
○松崎天神縁起 防府天満宮
絵因果経 箱根美術館
○地獄草紙 文化財保護委員会
○鐵鬼草紙 益田家
○馬医草紙 東京国立博物館
○華嚴縁起 高山寺
○当麻曼荼羅縁起 光明寺
○絵因果経 益田家
御物 絵師草紙
蒙古襲来絵詞
○後三年合戦絵巻 文化財保護委員会
○法然上人絵伝 増上寺
○伊勢新名所歌合絵巻 神宮司庁
○天狗草紙 東京国立博物館
○一遍上人絵伝 歎喜光寺
○石山寺縁起 石山寺
○男衾三郎絵詞 浅野長武

○東征絵伝 唐招提寺
○公家列影図 文化財保護委員会
○小野雪見御幸絵巻 東京芸術大学
○駒鏡行幸絵巻 静嘉堂
○長谷雄郷草紙 細川護立
○不動利益縁起 東京国立博物館
○住吉物語絵巻 静嘉堂
土蜘蛛草紙 東京国立博物館
○祭礼草紙 前田育徳会
○融通念仏縁起 清涼寺
米星光寺縁起 東京国立博物館
○福富草紙 春浦院
○道成寺縁起 道成寺
○百鬼夜行絵巻 真珠庵
米十二類絵巻 堂本印象
日蓮上人註画讃 妙覚寺
大江山絵巻 東京国立博物館
米西行法師行状絵詞 渡辺昭
○七難七福図巻 円満院
近世職人尽絵巻 東京国立博物館
横山大観 生々流転
山元春峯 塩原の奥
菱田春草 四季山水
箇木清方 朝夕安居
前田青邨 西遊記
中村岳陵 輪廻絵巻
金子真珠郎個展 12—17 村松
画廊〔批〕アトリエ31年1月
田中稔之個展 12—17 村松画
廊

王一亭遺墨展 12—16 品川・
留日香港華僑クラブ
西村愿定個展 14—19 中央公
論社画廊
2回MIYANAGA展 14—19
養清堂
山口薫個展 14—19 サエグサ
〔批〕朝日16、東京16(岡本謙
次郎)、日経18(福島繁太郎)、
毎日19、アトリエ31年1月
(瀬木慎一)、〔記〕美術手帖31
年2月(山口薫)
藤沢友一個展 14—20 美松画
廊
8回白寿会絵画展 15—20 日
本橋・高島屋〔批〕毎日19
秋季国展 15—20 日本橋・三
越〔批〕東京17(岡本謙次郎)
独立美術協会展 15—24 大阪
市立美術館
脇田和個展 15—20 求龍堂
〔批〕朝日16、東京18(岡本謙
次郎)、日経18(福島繁太郎)、
毎日19、アトリエ31年1月
(瀬木慎一)、〔記〕美術手帖31
年2月(脇田和)
9回丁亥会展 15—20 上野・
松坂屋
集団八人会展 15—22 文房堂
東郷青児小品展 15—20 上野・
松坂屋
楠部弥次作陶展 15—20 日本
橋・三越〔批〕朝日18、毎日
19

東西大家日本画展 15—27 渋谷・東横

飯島一次滞欧油絵展 15—20 日本橋・三越

1回6人展 (村田、尾内、村上、白井、菊地、須藤) 16—21 三省堂

五人展 (土味川、関根、坂、飯田、鈴木) 16—18 東電

熊倉順吉陶器展 16—21 フォールム (批)朝日18

アートクラブグループ展 (川端実、南大路一、三井永一、東俊二、昆野恒) 16—22 なびす (批)読売16 (植村鷹千代)、アトリエ31年1月(瀬木慎一)

本年度日展特選岡田賞受賞作家展 17—30 光風会館

建築と工芸グループ展 18—23 京都市美術館

京都商業美術展 18—23 京都市美術館

1回ドーン展 18—21 樺岡廊

新世紀展 18—22 大阪・梅田画廊

三浦景生染色工芸展 18—23 京都府ギャラリー

1回凡樹社展 18—23 東京・大丸

玄叡会日本画展 18—23 銀座・松坂屋

仙波均平個展 18—22 村松画廊

山下新太郎近作発表展 21—26 大阪・美交社

ノエル・クイン(米国水彩画家)個展 21—26 養清堂 (批)毎日26

藤井二郎個展 21—26 大阪・フジカワ

名古屋工芸技術試験場陶磁工芸展 21—26 和光

矢島甲士夫個展 21—26 サトウ

4回なにわ会現代々表作家展 21—27 大阪・梅田画廊

新世代展 21—27 美松画廊

三岸節子滞仏作品展 22—28 兜屋 (批)毎日23、東京24 (岡本謙次郎)、産経夕刊26、日経28(福島繁太郎)、アトリエ31年1月(瀬木慎一)

尚美展 22—26 壺中居 (批)三彩31年1月

青井辰雄個展 22—26 サエグサ

楽吉左衛門、永楽善五郎名盤会 22—27 上野・松坂屋

2回城所昌夫個展 22—30 ケミヤ

13回野水会日本画展 22—27 日本橋・高島屋

5回川端龍子奥の細道展 22—27 日本橋・三越 (批)毎日

26、産経夕刊26、三彩31年1月 (記)毎日夕刊22

美鳳会日本画展 22—27 新宿・伊勢丹

野水会展 22—27 日本橋・高島屋

川合修二個展 22—27 日本橋・高島屋 (批)三彩31年1月

現代鑄金工芸展 22—27 名古屋・松坂屋

古田十郎ガラス絵、油絵展 22—24 日動画廊

第二紀会展 25—12月4 大阪市立美術館

石川滋彦近作展 25—29 日動画廊

西村原定個展 25—29 大阪・梅田画廊

山田新一油絵展 25—29 京都府ギャラリー

川端龍子富士十題展 25—30 東京・大丸

1回草々展 25—30 産経画廊 (批)産経夕刊29

1回リアリズム美術家集団展 25—30 大阪・そごう

本年度院展受賞者展 25—30 銀座・松坂屋

独立美術展 26—12月5 京都市美術館

東山沙智子個展 28—30 東電

郭仁植個展 28—30 国際観光会館

実験工房作品展 28—12月3 村松画廊 (批)読売30(植村鷹千代)、朝日30、毎日12月3 (記)美術手帖31年2月 (福島秀子)

対象鑄金工芸展 28—12月3 和光 (批)朝日30

めとん会展(女流四人展) 28—12月3 中央公論社画廊

江藤哲個展 29—12月3 サエグサ

富本憲吉作陶四五年展 29—12月4 日本橋・高島屋 (批)毎日30(水原秋桜子)、産経夕刊12月1、朝日12月2、東京12月2(哈伊之助) 東京タイムズ12月3

1回日本染織作家集団展 29—12月4 日本橋・三越

2回新美術協会々員展 29—12月4 上野・松坂屋

井高煇山作陶展 29—12月4 日本橋・三越

加藤漢山青磁展 29—12月4 日本橋・高島屋

初霧会日、油、絵展 29—12月4 日本橋・三越

東西大家春掛小品日本画展 29—12月4 日本橋・三越

まはに工芸展 29—12月4 谷・東横

パンリアル展 30—12月4 京都市美術館

現代版画展 30—12月4 千代

田岡書館

前田藤四郎版画展 30—12月4 大阪・梅田画廊

中村徳三郎個展 30—12月4 大阪・梅田画廊

一二月

光風会工芸部展 1—7 光風会館

小山敬三個展 1—5 日動画廊 (批)産経2、毎日3

星崎孝之助近作展 1—6 兜屋

土屋幸夫個展 1—15 新宿・風月堂

現代の眼々展 1—31 国立近代美術館 (記)朝日3(河北倫明)、読売15(植村鷹千代)、産経21

野中曜子個展 1—10 タケミヤ (記)美術手帖31年2月 (野中曜子)

杉金直個展 1—6 フォールム (批)毎日3、読売3(植村鷹千代)、朝日8 (記)美術手帖31年2月(杉金直)

明治・大正・昭和名作美術展 1—15 栃木県

今日の新人一九五五年展 3—15 鎌倉・近代美術館

本年度出品者—梅藤哲郎、藤田昭子、木村賢太郎、木内

岬、毛利武士郎、向井良吉、須賀通泰、建島寛造、山口勝弘、赤穴宏、芥川紗織、福島秀子、藤沢典明、河原温、清川泰次、真鍋博、田中阿喜良、田中琴、玉置正敏、利根山光人、吉仲太造、漆原英子、石本正、加山又造、今野忠一、野崎貢、信太金昌、浜田知明、池田龍雄、泉茂、加藤正、森村惟一

〔批〕読売11(岡本太郎)、朝日15(岡本謙次郎)、朝日16(瀬木慎一)

大潮會展 3—18 東京都美術館

加藤八州版畫展 4—9 村松画廊

戸谷賀一洋画展 5—10 中央公論社画廊

1 回伍伸会油絵発表展 5—10 サエグサ 〔批〕東京8(岡本謙次郎)、毎日11

アートクラブ展 (桂ユキ子、土屋幸夫、福沢一郎、真島建三、建島寛造) 5—10 なびす

〔記〕美術手帖31年2月(桂ユキ子)(福沢一郎)

七大家新作画展 6—9 兼素洞 〔批〕日経8(河北倫明)、東京8(岡本謙次郎)、三彩31年1月

5 回芝英会絵画展 6—11 日本橋・高島屋 〔批〕毎日11、

三彩31年1月

荒谷直之介、小堀進二人展 6—10 日動画廊 〔批〕毎日11

矢部連兆個展 6—11 日本橋・高島屋

クリシタン史展 6—25 日本橋・高島屋 〔批〕読売21(長与善郎)

舟木道忠、研志父子展 6—11 渋谷・東横

9 回丁委會展 6—11 上野・松坂屋 〔批〕毎日11

浜田庄司新作陶展 6—11 日本橋・三越 〔批〕毎日11、三彩31年1月

中井幸一個展 6—12 サトウ 〔批〕朝日8、毎日11 〔記〕美術手帖31年2月(中井幸一)

ミニアチュール展 8—20 光風会館

畦地梅太郎、齋藤宝二人展 9—13 養清堂

眞波奈奈染色展 9—14 銀座・松坂屋 〔記〕読売12

栖鳳閣畫小品展 9—14 東京・大丸

四人展 (吉仲太造、河原温、芥川紗織、池田龍男) 10—14 美松画廊 〔批〕アトリエ31年3月(瀬木慎一)

5 回21世紀展 10—15 村松画廊

京都陶磁工藝展 10—20 大阪・フジカワ

新制作彫刻部会員彫刻作品展 11—15 日動画廊

東山魁夷、新潮、表紙原画展 11—15 日本橋・丸善

デッサンエスキース三人展 (田中岑、五味秀夫、齋藤正夫) 11—15 なびす

高島達四郎小品展 12—17 サエグサ 〔批〕朝日14 日経16(福島繁太郎)、東京16(岡本謙次郎)、毎日17

〔記〕美術手帖31年2月(高島達四郎)

石橋幸子油絵個展 13—16 兜屋

張大千個展 13—17 壺中居

宇田荻郎、山口華楊、上村松臺三人展 13—18 日本橋・三越 〔批〕毎日18、三彩31年1月

14 回青々會展 13—18 日本橋・三越 〔批〕東京16(久富貢)

9 回蹈青會展 13—18 日本橋・三越 〔批〕東京16(久富貢)

鬼塚金華展 13—18 日本橋・高島屋

生活工藝集團展 13—18 渋谷・東横

半弓会日本画展 13—17 大阪・阪急

朱富士會展 13—20 大阪・フジカワ

3 回京都陶藝博壇會展 13—18 銀座・松屋

井上良彦作陶展 13—18 日本橋・三越

5 回百二會展 14—17 兼素洞 〔批〕東京16(久富貢)、日経17(河北倫明)、朝日17、毎日18、三彩31年1月

淡藍会小品展(阿部展也、山口薫等) 14—18 養清堂

青のグループ展 15—19 美松画廊

石井柏亭瀟米作油絵水彩画展 16—20 日動画廊 〔批〕毎日18

造型版画六人展 16—20 村松画廊

日本美術家連盟主催「年末たすけあい展」 16—21 銀座・松坂屋

林二郎作品展 16—20 日本橋・丸善

1 回現代一流大家展 18—24 兜屋 〔批〕朝日21、読売22(植村鷹千代)、毎日24

4 回松山雅英作陶展 19—23 日本橋・高島屋

川端静子個展 19—26 樺画廊 〔批〕読売22(植村鷹千代)

北出塔次郎作陶展 19—24 和光 〔批〕毎日24

杉浦非水恩賜賞受賞記念新作日本画展 19—24 日本橋・三越 〔批〕毎日24

全工藝小品展 19—24 産経画廊

萌木会染色展 19—25 渋谷・東横 〔記〕読売22

小田茂銅版画展 19—20 東電

サーピスセンター

空田豊四郎個展 20—25 美松画廊

久野修男個展 20—24 サエグサ

白帆會展 21—25 文房堂

斎藤愛子、芥川紗織二人展 1—15 新宿・風月堂

赤塚徹個展 21—30 タケミヤ

上口愚朗・野陶秀作展 22—25 東京・大丸 〔批〕毎日24、産経25

5 回造型教育センター展 24—30 なびす

河合瑞豊、喜燕父子作陶展 25—31 日本橋・三越

2 回草々展 25—29 産経画廊

現代詩画展 26—30 美松画廊 〔批〕朝日29、読売29(植村鷹千代)

「物故者」 ページ (150～158 ページ)

個人情報保護のため非公開

Pages of the Articles of the Deceased (pp.150-158)

Cut for protection of the personal information

目次

〔定期刊行物所載文献〕

現代美術・西洋美術

総説	内容別順	一六
絵画	シ	一三
彫塑	シ	一五
工藝・デザイン	シ	一五
建築	シ	一七
時評	シ	一六
展覧会	シ	一六
教育	シ	一七
作家	人名別五〇音順	一七
身边雑記・随筆	シ	一七
物故作家	シ	一七
美術関係者	シ	一八
その他	内容別順	一八
東洋古美術		
総説	シ	一八
絵画	シ	一八
日本	シ	一五

書蹟・附篆刻・文房具

中国、其他……………一八

日本……………一八

中国……………一九

篆刻・文房具……………一九

彫刻

日本……………一九

朝鮮、中国、其他……………一九

建築・庭園

日本……………一九

朝鮮、中国、其他……………一九

工藝

総記……………一九

陶磁工……………一九

金工……………一九

木漆工……………一九

染織工……………一九

ガラス工、玉工……………一九

考古学関係

歴史関係・其他……………二〇

〔単行図書〕

現代美術・西洋美術	……………	二〇
東洋古美術	……………	二〇

定期刊行物所載文献

現代美術文献 西洋美術

総説

美術眼	亀井勝一郎	朝日	一・二六
美とニヒリズム	高坂 正顕	心	八ノ二
人間の空間のレアリ	灰地 啓	工藝ニユ	三ノ一〇
線の象徴性	小保内虎夫	シ	三ノ二
ルフェーヴルの美学	島本 融	春	三ノ二〇
理論から	レイナー・バンナム	国際建築	三ノ三
機械の美学	柳 亮	造形	一ノ一
写真と抽象	マグドナルド・ライト	美術批評	(二)
美学の彼方へ	J・J・トリヤ	日仏文化	一
美の感覚と科学研究	貝塚 茂樹	東京	一・三〇、三
伝統と革新	金原 省吾	日経	二・二九
個別的と一般的	久松 真一		
場を語る(座談会)	湯川 秀樹	墨	四
	平山亮太郎		
	井島 勉		
	吉川 逸治		
造型藝術の総合の場	今泉、芦原、建島、長谷川、渡辺	みづゑ	五八
(座談会)			
触感性(座談会)	須田、富本、井島、菊地	墨	美 四
詩の理法	ポール・エリュアール	美術批評	三

定期刊行物所載文献

近代藝術の問題

新具象その後	ジャン・カスパー	美術批評	(二)
アヴァンギャルドとリアリズム	針生 一郎	シ	(三)
シュールレアリズムと戦後	岡本、花田、瀬木、針生	シ	(四)
レアリズム藝術について	トリスタン・ツァラ	シ	三
新しい藝術の世界	モスクワ大學生	シ	(五)
作家・観衆・批評(冊談)	益田 義信	みづゑ	五六
藝術の古さと新しさ(対談)	安部、瀬木、針生	美術批評	三
ブリミティフについて	今泉 篤男	シ	(四)
現代ブリミティフの祖先(生きている中世藝術)	加藤 周一	シ	(三)
モダンアート四萬年	東野 芳明	シ	(二)
特集・古代美術	柳 宗玄	藝術新潮	六ノ五
古代美術の示唆するもの	江上 波夫	シ	六ノ七
エジプト	川喜田愛郎	みづゑ	五五
メソポタミア	江上 波夫	シ	
クレタ	深井 晋司	三輪 福松	
イーラーン	霜田 静志	萌 春	三ノ三
エトルリア	村田 教之亮	仏教藝術	三
エジプト美術への郷愁	吉川 逸治	みづゑ	五九
ギリシャ美術と宗教	加藤 周一	三輪 福松	美術史 八
中世の美術—ロマネスクとゴシック冊談			
ルネッサンスにおける「花のサンタ・マリア」			

大洋州の原住民の藝術

黒人民衆の藝術

ハイチの美術(ジャマイカ)	大熊 喜英	工藝ニユ	三ノ七
ゴールの藝術	トリスタン・ツァラ	美術批評	(八)
イタリアの現代美術	大宅 壮一	産経夕	九・九
現代ソヴィエトの美術	土方 定一	日経	三・三
現代インド美術の状況	本郷 新	美術新潮	六ノ二
インドの二つの美術	阿部 展也	国立近代美術館ニユ	一三
アメリカの生活と藝術	火野 葦平	藝術新潮	六ノ二
アメリカ藝術家の宿命	芦原 義信	美術手帖	七
(ニューヨーク) 便り	長谷川三郎	藝術新潮	六ノ四
(米國美術界)	山田智三郎	東京	二・一六、一七、一八、一三、一四
現代イギリス美術雜記	シマリノフ	美術批評	(九)
メキシコ・古代の美術	我妻 宏	大法輪	三ノ二
メキシコの古代美術	江上 波夫	ミュージアム	五
特集・メキシコの美術	土方定一、福沢一郎他	美術手帖	二〇
メキシコ美術の世界	林 文雄	萌 春	三ノ二〇
メキシコ美術の史的なもの	吉田遠志、吉田勉高、福沢一郎	藝術新潮	六ノ九
メキシコ—新しき藝術の国—	ルイエス・ヒル・タラ	国博ニユ	二〇
メキシコ美術・日本美術を語る			

第二次大戦末のヨーロッパにおける藝術の状況	ハーバー ト・リード	美術批評	三
伝統への復歸と反省 —ヨーロッパより歸つて—	清水多嘉示	朝日	二・三五
フランス美術だより 第二次エコール・ド・パリ(対談)	佐波 甫 末松 正樹 海藤日出男	藝術新潮	五・一九 六・二二
特集・世界現代美術の展望	山田智三郎	みづゑ	六〇〇
アメリカの現代美術について	ロバート・メルヴィル		
イギリスの現代絵画	ベルナー アル・ドリヴ ラル		
フランスの現代絵画	ラット・グ ラッシュ		
ドイツの現代美術	H・L・C・ヤッフエ		
現代オランダ美術の概観	R・C・グブ		
インド現代美術の状況	フォルチュ ナト・ペロ ンツイ		
イタリア絵画の現況	今泉 篤男		
現代日本絵画の位置	ホルヘ・J・クレスポ・デ・ラ・セル		
現代メキシコ美術鳥瞰	ロバート・トーマス・ストール		
スイス現代美術の動向	ミハイロ・S・ベトロフ		
ユーゴスラヴィアの現代絵画	碓 伊之助	国立近代美術館ニ ユース	三
新中国の美術みたま			
モダンアートの展開	柳 丹下	藝術新潮	六ノ五
現代美術の展望(座談会)	今泉、土方、富永、岡本		六ノ六
世界に於ける日本現代美術(座談会)	土方、富永、宮本、東山		六ノ二
日本文化の理解を妨げるもの	ドナルド・キーン	中央公論	五
雑種の日本文化の課題	加藤 周一		七
日本美術の民族性と世界性(1)	長谷川三郎	三彩	七〇
魅力的な日本の伝統美	ハーバー ト・リード	朝日	一・四
日本美術の印象	B・ドリヴ アル	藝術新潮	六ノ七
制作と発表(座談会)	麻生、利根 山、建島、藤 村、佐藤、植	美術手帖	二〇三
藝術運動について(座談会)	加藤、三島、岡本	藝術新潮	六ノ六
美術団体と美術運動(座談会)	今泉、船戸、徳大寺、針生	美術手帖	九
特集・摂取から交流へ	柳 亮		九〇
総説・パリ画壇と日本人			
アカデミズム・後期印象派の流れ	正宗得三郎		
巴里日記抄	伊藤 廉		
セザンヌからヴェラスケスへ	三雲祥之助		
零の遍歴	向井 潤吉		
模写の落し穴	鳥海 青兒		
はるかな垂流	中村 研一		
アンベル氏	柳 亮		
フォーヴの流れ			
ラ・ウイの表現「フォーヴ」	中山 巍	美術手帖	九〇
マチスに学ぶ	中川 紀元		
パリ今昔(座談会)	高野、益田、福島、宮田		
パリの悪童たち	岡 鹿之助		
コンカルノオ	大森 啓助		
伯林の国立美術学校	脇田 和		
真の自由を	猪熊弦一郎		
断層の歴史	滝口 修造		
分析と総合	川口 軌外		
ダダイズムと未来派	東郷 青兒		
ピカソに憑かれる	伊原宇三郎		
超現実主義との接触	福沢 一郎		
プリミティブから近代造形へ	山口 長男		
古い殻を脱ぎ捨て	岡本 太郎		
ロンバルディア	村井 正誠		
人生の休暇	森 芳雄		
遍歴の幾コマ	山口 薫		
アメリカ・メキシコに学ぶ	北川 民次		
素描のみ	井上長三郎		
イタリア紀行	川端 実		
国際交流の時代	植村鷹千代		
戦後派的雑感	田淵 安一		
戦後のパリに生きる	今井 俊満		
個展のことなど	荻須 高德		
彫刻の新しい息吹き	今泉 篤男		
パリ通信	建島、向井		

マイヨールをめざして
彫刻の本質を知る
山本 豊市 美術手帖 六〇

日仏美術交流
富永 惣一 日仏文化通信 一

日米抽象美術の比較
エリイゼ・グリイリ 国立近代美術館ニユース 七

随筆明治美術1-11
添田 達嶺 萌 春 三ノ二

日本美術院(対談)
野間 清六 河北 倫明 藝術新潮 六ノ五

再興日本美術院の歴史
横川毅一郎 萌 春 三ノ三

初期の日本美術院- 膠腕体を中心に-
吉沢 忠 萌 春 三ノ三

初期「白樺」頃の美術の思い出
鈴木信太郎 みづゑ 五三

大正期の新興藝術運動の思い出
神原 泰 萌 春 三ノ三

戦後日本美術の動向
富永 惣一 国立近代美術館ニユース 三

藝術日本一〇年(座談会)
今、花森、富永、戸板、吉田 藝術新潮 六ノ一

美術読本
文藝増刊 三ノ二五

東西美術論(五四-六五)
アンドレ・マルロオ・小松清訳 藝術新潮 六ノ一

美の行脚(対談)
小林 秀雄 河上徹太郎 萌 春 六ノ四

批評精神の行方(二〇世紀美術の方法・1-6)
瀬木 慎一 美術批評 三ノ二八

構成の基本1-6
小池岩太郎 リビングデザイン 一ノ六

形威力の差い1-6
小池岩太郎 リビングデザイン セノ三

観察の態度、対象、角度と方法、描写、形式の展開
井手 則雄 アトリエ 三〇〇

特集・藝術の骨と肉
描写の藝術から構造の藝術へ
高橋 忠弥 美術手帖 六三

錯倒した透視図法
「様式」の概念について
島田 勝次 日本建築学会研究 三

ラスキンの「ゴシックの性質」とモリスの裝飾論
白石 博三 萌 春 六ノ八

遺るもの滅びるもの(座談会)
久保 土方、岡本、岡本謙次郎 藝術新潮 六ノ八

人間像(アート写真版)解説
岡本 太郎 萌 春 六ノ二〇

日本のオヴジュ(アート写真版)
岡本 太郎 萌 春 六ノ二〇

私の認める前衛美術
富永・土方、岡本 萌 春 六ノ二

転換期の文学と美術(対談)
藤原 審爾 針生 一郎 美術批評 五

造形のための事典
針生 一郎 萌 春 三ノ八一

特集・色彩
市川津義男 針生 一郎 萌 春 三ノ八一

都市の美しさと色彩
田口湖三郎 工芸ニュース 三ノ二

都市美の造形要素
勝見 勝 萌 春 六ノ二

藝術家とアルチザンの問題(座談会)
岡本、清家、柳、土門、浜田、池田、山中、木内、河原、吉仲、針生 美術批評 七

新しい人間像にむかって(座談会)
針生 美術批評 七

前衛藝術の旗手(座談会)
岡本、勅使河原、花田 群 像 二二

美術界、新人展望
植村、岡本、田近 知 性 二二

現代の表現
あたらしい秩序と均衡を(彫刻)
須賀 通泰 河原 温 建築文化 二〇七

創造的構想力の現実性(絵画)
物質との対決を透して人間の回復へ(オブジュ)
勅使河原宏 萌 春 六ノ八

藝術家と二十代(座談会)
勝呂、朝倉、加藤、加山、伊原 藝術新潮 六ノ八

新しい藝術の方向
美術批評の問題
岡本 太郎 美術手帖 六

創造のための批評
奇妙な幕間狂言
金子 昭二 美術批評 五

オイディプス(アラゴンのピカソ論をめぐる)
針生 一郎 萌 春 六ノ二

宇佐見英治 萌 春 六ノ二

現代日本の絵画
現代絵画の危機(座談会)
嘉門 安雄 佐藤、田淵、関口、土橋 産経夕刊 二〇・七

特集・現代日本絵画の主題と方法
アレゴリー
岡本謙次郎 美術批評 二

比喩
象徴
ムーヴマン
記録性
テーマ性
繪画のレアリテについて
壁にぶつかつた抽象画
瀬木 慎一 東野 芳明 植村應千代 針生 一郎 吉沢 忠 ジェーン・ヴァール 多賀谷伊徳 藝術新潮 六ノ六

多賀谷伊徳 藝術新潮 六ノ六

藝術新潮 六ノ六

藝術新潮 六ノ六

藝術新潮 六ノ六

現代の神話—抽象絵画の問題—

中原 佑介 美術批評 (二〇)

洋画化の問題

久富 貢 萌 春 三ノ一

日本画の課題

岡本謙次郎 三ノ二

日本画について

三輪 福松 三ノ四

純日本画について

吉沢 忠 三ノ七

日本画と社会性

久富 貢 造 形 一ノ五

日本画の反省期

中村 秀男 三 彩 六

明治以後の日本画の動き—院展を中心として—

中田 宗男 三 彩 六

現代日本画と伝統—主として院展作家を例として—

北川 桃雄 三 彩 六

伝統と自然—今日の日本画について—

隈元謙次郎 国立近代美術館ニユース 五

近代リアリズムの出現

河北 倫明 三 彩 六

明治初期洋画の背景

富永 惣一 思想 三九

日本における洋画の受入れ方

河北 倫明 みづゑ 五三

日本洋画史の批評的展望

柳 亮 三 彩 六

日本物故洋画家生歿年表

植村鷹千代 三 彩 六

特集・日本近代洋画

船戸 洪 美術手帖 九一〇三

日本洋画の発展史—日本洋画名作展を観る—

宮本 三郎 美術新潮 六ノ七

戦後画壇史(山)—(19)

富永 惣一 美術新潮 六ノ七

近代絵画鑑賞の基礎

横山、細川、浅野 財 日本文化 三一四

画談(鼎談)一一二

浅野 財 日本文化 三一四

抽象絵画の見方

植村鷹千代 国立近代美術館ニユース 六

抽象絵画の秘密を探る

朝 日 二・三三

日本画修業の弁

ドロシア・パリス 美術新潮 六ノ八

絵画の本質と技法

霜田 静志 萌 春 三ノ五

花の写生(日本画(初歩1))

森田 沙伊 三 彩 六

動物の写生(2)

吉岡 堅二 三 彩 六

鳥の写生(3)

稗田 一穂 三 彩 六

技法・鉛筆画を描いてみよう

川口 軌外 美術手帖 九

技法・素描の自由さについて

脇田 和 三 彩 六

特集・モデルに依るデッサン入門

宮本 三郎 アトリエ 三三

特集・作例を見て学ぶデッサンの実技

安井曾太郎、向井潤吉 他 三三

特集・絵を描く方法—現代油絵の技法、ミニアチュール、蠟画、フレスコ、ガラス絵其他

難波田龍起 其他諸家 三三

技法・絵画の自由なメヂェ

村井 正誠 美術手帖 六

技法・海を描く

鈴木信太郎 三 彩 六

山を描く

高島達四郎 三 彩 六

(水彩)街を描く

石川 滋彦 三 彩 六

水彩のかき方と材料

小山 良修 国立近代美術館ニユース 九

特集・目で見る油絵の技法

高橋 忠弥 アトリエ 三三

特集・形と構成の新しい研究—図解—

岩中徳次郎 アトリエ 三三

特集・外遊スケッチ—戦後の世界—

諸 家 三三

デッサン(二考)(アイト写真版)

阿部 展也 美術新潮 六ノ二

特集・図説・洋画材料の研究—材料の扱い方とメヂェの研究—

寺田 春次 アトリエ 三三

素材の克服(1・絵具)—座談会—

岡、川口、東山、脇田 三 彩 六

スタイル画教室1—

長沢 節 リビング デザイン 五

近代版画に学ぶ—フランス美術展によって—銅版画の発達

益田 義信 読 売 三三

銅版画の復活

木村 重信 仏教美術 二四

新中国の版画

滝口 修造 みづゑ 五九

特集・版画の技法

裕 伊之助 美術手帖 九

技法・フロッター

平塚、恩地、他 アトリエ 三三

蠟画

山口 正城 美術手帖 九

オフセット版画

豊田 一男 三 彩 六

正しい版画教育の進路(座談会)

大田、羽場、武井、橋本、菊地 章一 美術批評 (七)

漫画について

横山、伊藤 編 美術新潮 六ノ二

世界の漫画

伊藤 逸平 東 京 八・三

日本漫画の横顔

伊藤 逸平 中央公論 (二)

漫画七十年変遷史(昭和廿年—卅年)

伊藤 逸平 中央公論 (二)

漫画読本2—6

文藝春秋 臨時増刊 六・二〇・二

友禪染由来記 長谷田桐翠 日 經 二〇・二

柴山(つくばね)焼 藤倉 孝吉 日本美術 三〇・六

絵と陶器 志賀 直哉 日 經 一・七

秘露に於いて最近発掘の古陶について 野上 敏一 古文化財 二

武器―日本と西洋― 谷川 徹三 毎 日 一・三

文楽のかしらについて 斎藤清二郎 日本工藝 三

切つた張つたの波世―表具師のよもやま話― 栗山弘三郎 日 經 一・元

和紙が国さ―いみじき手漉きのめでたさ― 成田 潔英 シ 二・四

現代日本の陶器―アメリカ陶工の見た― W・D・King 陶 説 三

新しさについて 柳 宗悦 東京タイムズ 一・二

生活工藝と民藝 シ 建築文化 二〇・八

民藝の値うち 柳 宗悦 産経夕刊 ニノ三六

特集・民藝 前田泰次他 リビング デザイン 三

メキシコの民藝品 福沢 一郎 民 藝 三

アイヌの彫刻文様 松野 庸子 国博ニユース 九

農民のデザイン 森口 多里 リビング デザイン 六

特集・ガラス 諸 家 シ 七

ヴェネシアン・グラス 大島 隆一 造 形 一ノ六

ベネチアンガラスについて 佐藤潤四郎 工藝ニユース 三ノ六

ヴェネツィア・グラス 亀倉 雄策 美術手帖 三

ガラス器のうつりかわり 淡島 雅吉 工藝ニユース 三ノ八

ガラスは藝術と生活を裸にする 洪井 清 美術手帖 九

デザインの心機械の美、茶の美 生田 勉 淡 交 七

夢のよきな工業デザイン 渡辺 力 工藝ニユース 三ノ三

渡辺氏の夢のよきな工業デザインに對して 安田 直良 シ 三ノ五

もう一度夢のよきな工業デザインについて 渡辺 力 シ 三ノ七

自動車をデザインする 村田勝四郎 藝術新潮 六ノ四

日本の自動車デザイン 小槻 寛一 新建築 三ノ三

わが国の自転車デザインとその変遷 島山 新一 工藝ニユース 三ノ五

三輪トラックのうつりかわり 広田長治郎 シ 三ノ七

時計のデザイン批判 柳 宗理 リビング デザイン 七

時計のはなし 青木 保 シ 八

ラジオのデザイン批判 小杉 二郎 シ 八

国産カメラの変遷意匠を中心として 北野 邦雄 工藝ニユース 三ノ二

国産アイロンの変遷デザインを中心として 山田 正吾 シ 三ノ四

工業デザインと機械 椎谷 浩一 シ 三ノ六

神奈川県工業デザインコンクール私見、特に秤を中心に― 燐光灯のデザインとメカニズム 畑 正夫 シ 三ノ三

機械文明に想う 吉中 道夫 新建築 三ノ三

特集・レース 和田 定夫 リビング デザイン 五

特集・玩具と工作 由良 玲吉 シ 八

特集・台所と用具 諸 家 シ 九

特集・靴 谷沢 甲七 シ 一〇

特集・家具 水之江忠臣 リビング デザイン 二

紙とストラクチュア 他 劍持 勇 デザイン 二

紙の彫刻と構成 山口 正城 工藝ニユース 三ノ九

ホテル・ラベル シ 桜井 雅輝 シ 八

ポスター美術史の一考察 福永 俊吉 人文 四

世界観光ポスター展に観る国々の表情 河野 鷹思 美術手帖 九

世界の観光ポスター 中井 一 リビング デザイン 六

「原子力を平和のために」―国際原子力平和利用会議のポスター― 勝見 勝 シ 一〇

カレンダーのアイディア 氏原 忠夫 シ 三

クリスマス・カードの近代感覚 大智 浩 シ 三

クリスマスをいろいろの工作 品川 工 シ 三

型紙で作るベニヤ板の椅子と机 三井 高進 シ 二

造形する子どもたち 藤沢 典明 シ 二

働く夫婦のための六畳一間の工夫 由良 玲吉 シ 七

こんにちのクラフトの問題(座談会) 勝見、芳武、辻、山口、吉、阪、山田、服部 工藝ニユース 三ノ四

オブジェを生む基盤 勅使河原宏 国際建築 三ノ二

人間を幸福にする美術―グッド・デザインと市民の眼― 勝見 勝 説 売 三・三

デザイン入門 浜村 順 リビング デザイン 六七

若い女性デザイナーは語る(座談会) 他 今 和次郎 シ 一

日本の近代建築雑感 和田 定夫 建築文化 一〇〇
 日本における近代建築の遺産 稲垣 栄三 シ

近代主義建築の存在価値は何か―建築の進化のために― 中村 登一 シ

現代建築断想 小坂 秀雄 シ
 戦後十年の住宅の歩み 清水 一 シ

特集、原爆下の戦後十年 日本人の建築と建築家 新建築 三〇ノ八

建築様式―この三十年― 石川 栄耀 東京日日 一八

日本近代建築の表現 神代雄一郎 建築文化 二〇一
 近代建築と商業主義 岡田 哲郎 シ

快樂主義への傾斜とたたからし住いといふ藝術の本質― すまい紹介 リビングデザイン 一三ノ六

昨日、今日、そして明日へ 山口 文象 新建築 三〇ノ二

新ホール採点 高城 重躬 藝術新潮 六ノ六
 砂上樓閣 狩野 春一 シ

伝統の木割から独自の木割へ 吉田五十八 国際建築 三〇ノ二

現代住宅の床面―建築家から家具デザイナーへ 浜口 隆一 工藝ニュース 三〇ノ九

建築の design に於ける Proportion の問題 Rudolf Witt-hower のルネッサンス研究― 河合 正一 建築史研究 三

デザインとヒューマニズム 阿部 公正 工藝ニュース 三〇ノ二

日本のデザインをめぐる討論 新建築 三〇ノ二

提案「日本のデザイン」といかに取りくむか 池辺 陽 新建築 三〇ノ二

批判 A 近代建築かどうかが問題なのだ 丹下研究室 シ
 B 日本の表現と近代技術の歪曲 MIDDO シ
 C 日本のデザインを意識する必要 DION シ
 D あまりに現象的ならえ方だ グループ シ

E 問題提起が作家的でない 清家研究室 シ

住宅デザインの停滞を切りひらくもの みねぎし・やすお 建築文化 二〇六

戦後のデザイン概観 今 和次郎 シ 二〇〇

最近のデザインの動き 吉阪 隆正 新建築 三〇ノ三

建築ジャーナリズムの歩み 蔵田 周忠 建築文化 二〇〇

時評

日展特選の問題 嘉門 安雄 藝術新潮 六ノ一
 クリテック賞の作品 富永、岡本、田近 シ 六ノ四
 (座談会)
 腰かけられる藝術 黛 敏郎 美術批評 五
 (美術家への提言)
 日本画家は何を描く 久保貞次郎 藝術新潮 六ノ七
 日本の絵画は世界性がないか 福島繁太郎 心 八ノ七

今日の問題を検討する(座談会) 小野、津高、長谷川、早川、浜田、瀬木 美術批評 二

色彩計画に客観性を Zoltan 村上 静男 国際建築 一四ノ一

若し知性に映るの(座談会)今日の書 瀬木・木村・片山 墨 美 兎

法隆寺はもう焼けないか(新潮雑壇) 嘉門 安雄 国博ニュース 三
 ある女流画家の反省(新潮雑壇) 岡田 謙 シ 三
 美術図書の出版熱 野間 清六 シ 三
 古典工芸に学ぶもの 奥平 英雄 シ 三
 古美術の活用 ニュケーション 三木 文雄 シ 三
 美術とマス・コミ 野間 清六 シ 三
 日本考古学 今日の問題 矢島 恭介 シ 三
 日本美術史学の問題 溝口 三郎 シ 三
 日本美術の新しい見方 山口 勝弘 朝日 一八
 古美術の普及 瀬木 慎一 朝日 二六
 美術資料の整備について 今泉 篤男 朝日 二七
 模写模造の問題 瀬木 慎一 朝日 二八
 恐るべき逃避家たち(戦後派の言葉) 瀬木 慎一 朝日 二九
 新人直言「美術」 瀬木 慎一 朝日 三〇
 美術界(各界の課題) 瀬木 慎一 朝日 三一
 半抽象絵画と感傷性 瀬木 慎一 朝日 三二
 日本藝術院賞に望む 瀬木 慎一 朝日 三三
 甘やかされた個展 瀬木 慎一 朝日 三四
 無形文化財に憶う 瀬木 慎一 朝日 三五
 無形文化財に憶う 瀬木 慎一 朝日 三五
 一東洋藝術の根幹・木彫の場合― 瀬木 慎一 朝日 三五
 人間国宝 河竹 繁後 東京タイムズ 四一〇
 長谷川路可を表彰せよ 嘉門 安雄 朝日 四二
 国際交流のエチケツト 植村鷹千代 朝日 四九

アメリカの日本建築
熱
反省する美術展
美術界の国際交流
上半期の画壇回顧
パリ画壇に新風
高岡・鈴木・野間三
君の二科脱退
日本の美術団体―ゆ
らく既成画壇と若い
世代の在り方―
二科会騒動の投げた
課題
美術団体の在り方
空想の画壇地図―美
術政策の貧困―
わが道を行く地方画
家たち
漫画の問題
秋の美術展への期待
秋の美術に望むもの
日本美術の海外進出
―実現させたい―ヴ
ェニス日本館―
貧乏国の文化外交―
欲しいインフォメー
ション・センタ―
二つの世代から見た
「美術の秋」の成果
成長する美術館
三つの秀作
新しい美術批評のあ
り方
美術の暴力主義時代

芦原 義信 産 五・八
勝見 勝 朝 日 五・三〇
田近 憲三 東京タイ
ムズ 六・二
柳 亮 六・三
海藤 記者 売 七・五
福島繁太郎 日 経 七・八
徳大寺公英 売 七・五
F 毎 日 七・〇

柳 亮 東京 七・二
土方 定一 毎 日 八・〇
福島 辰夫 東京タイ
ムズ 八・二
滝口 修造 売 八・四
岡本謙次郎 朝 日 八・三
植村鷹千代 東京タイ
ムズ 九・二
和田 新朝 日 九・六

山田智三郎 〇・三
河北 倫明 〇・三
瀬木 慎一 〇・三
土方 定一 売 二・二六
中河 与一 日 経 二・二六
針生 一郎 朝 日 二・二七
柳 亮 東京 二・二六

古典藝術の再評価
現代日本建築の進路
画壇
アンケート一九五五
年度美術界の収獲と
批判
一九五五年の回顧
現代美術界

瀧口 修造 売 二・三〇
浜口 隆一 日 経 二・二五
嘉門 安雄 〇・三
三・五、四・二、五・五、六・七、
一八・七・七、三、二四、八・六、二、一八
六、一〇・三、八、二〇、二一・〇、二・
九、三
批評家一〇 美術手帖 二〇三
嘉門 安雄 ミュージ
アム 七〇

世界の美術展
現代藝術は何処へゆ
く(座談会)トリエン
ナレ・ピエンナレ
レ展を通じて
トリエンナレの印
象(座談会)
ミラーノのトリエン
ナレ展
第10回トリエンナ
レ ミラノ市
トリエンナレ展
トリエンナレ展
ミ
ラノ

土方 定一 藝術新潮 六ノ一
佐藤、関口 みづゑ 五九四
清水、向井 建昌、柳原 五九四
芦原、大江、 工藝ニユ
亀倉、鈴木 一三ノ三
土方 定一 美術手帖 九

河合 正一 建築文化 二〇〇
山中 春雄 新建築 三ノ四
山 中 春雄 みづゑ 五六
三雲、森、 山本、柳、 五味、藤井、 横地

世界最大の国際博
覧(サンパウロ四百年
記念博)

荒井 龍男 藝術新潮 六ノ三

特集・第三回日本国
際美術展 総論 誌
上会場案内
第3回日本国際美術
展に出品して(アン
ケート)
国際美術展ベスト・
テン(座談会)
風土・体質・造形―
日本国際展を観る―
日本現代美術の海外
出品をめぐる(ア
ルプより岡本太郎へ
の手紙)
気を吐く日本水彩画
(ニューヨーク)
国際水彩画展―ブ
ルックリン美術館で
みる―
特集・現代のイタリ
ア美術館
現代イタリア美術
館出品作家の位置
展を観る(座談会)
展を観る(座談会)
イタリア美術の伝
統と現代美術展
伝統の国の作家たち
(現代イタリア美術
展を観る)
白と黒と灰色
日米抽象コンクール
(日米抽象美術展を
観て)
パリで見た展覧会
パリの展覧会から
メキシコ美術展東京
開催にあたって

瀧口 修造 美術手帖 七
植村鷹千代 七
作家二五名 美術批評 (五)

今泉、土方、 荒城 季夫 造 形 一ノ五
田近、岡本、 河北 田近、岡本、 藝術新潮 六ノ七
武山特派員 日経夕 五・二五
吉田 穂高 東京タイ
ムズ 五・二六
宮本 三郎 美術手帖 九六
森、脇田、 針生 三雲祥之助

須田 寿 みづゑ 五九
阿部 展也 藝術新潮 六ノ六
海藤記者 売 六・八
里見 勝蔵 東京 八・二六
ヴィクト
ル・M・レイ
アム 五

定期刊行物所載文献

一六九

メキシコ美術展を見る
豊田 三郎 国博ニユ 一〇一

メキシコ展(座談会)
福沢、土方 芸術新潮 六ノ二〇

メキシコ美術展をめぐつて(座談会)
滝口、花田、佐々木、末松、安倍、針生 美術批評 二〇〇

吾々はメキシコ美術をどうみる
新進二七作家 芸術新潮 六ノ二二

アンチ・メキシコ展
岡本謙次郎 国際建築 三ノ三三

ヘルシンボルク国際デザイン博(スウェーデン)
前田 泰次 藝術新潮 六ノ八

世界のガラス展
ソヴエト・アルゼンチン・ふたつの児童画展 松谷 彊 美術手帖 三三

インドの「世界児童画」展
久保貞次郎 藝術新潮 六ノ二

パリの家庭生活美術展
向井 良吉 美術手帖 九六

日米水彩展
石井 柏亭 国立近代美術館ニユース 九

ニューヨーク近代美術館における日本の書展に際して「アートダイジェスト」一九五四、八月号より 墨 美 聖

現代日本の書・墨の藝術展を語る(座談会)
今泉、井島、河北、徳大寺 美術批評 四

欧州巡回展について
松井 如流 書 品 益 四

欧州巡回書展を語る(座談会)
青山、今泉、宇野、岡部、西川、松井 美術批評 三

アジア美術の伝統と現代日本―現代の「眼」展の意義―
河北 倫明 国立近代美術館ニユース 三

現代の眼―日本美術史より―
河北 倫明 藝術新潮 六ノ一

現代の眼
谷川 徹三 国立近代美術館ニユース 二

近代美術館の「現代の眼」
吉阪 隆正 新建築 三ノ一

「古典への一照明」―現代の眼展を機会に―
瀨木 慎一 美術手帖 五

内部の貧困ということ―春季展覧会をめぐつて(座談会)
瀨木、徳大寺、東野、針生 美術批評 五

日本美術史展
R・V・エック 藝術新潮 六ノ八

植木茂設計子供のためめの遊べる立体展
河野 通祐 新建築 三ノ五

商業デザイン五人展によせて
西川 驍 建築文化 二四

世界の観光ポスター―日本美術院評―ある年少美術記者との対話―
勝見 勝 藝術新潮 六ノ八

院展を観て
柳 亮三 彩 九

新制作展の日本画
三輪 福松 萌 春 三ノ九

特集・日展
針生 一郎 三 彩 七

日展の日本画を見て
久富 貢 萌 春 三ノ二

日展の日本画の注目作
河北 倫明 三 彩 七

日展の日本画
北川 桃雄 三 彩 七

一九五五年の秀作ベスト・テン(座談会)
今泉、土方、富永、田近、岡本、河北 藝術新潮 六ノ三

西ドイツの工作教育
水谷 武彦 工藝ニユース 三ノ二

建築教育と建築家
大江 宏 建築文化 九

造形教育センタ―について
山口 正城 リビングデザイン 二

博物館の児童教育
関 忠夫 ミュージアム 四

作家
朝倉 撰 読 亮 八九

朝倉 撰 東京 八・三〇

朝倉 撰 朝 日 一・五

朝倉 撰 東 京 六・六

朝倉 撰 朝 日 三・三

朝倉 撰 朝 日 三ノ二

朝倉 撰 朝 日 一ノ六

朝倉 撰 朝 日 三・七

朝倉 撰 朝 日 三・二

朝倉 撰 朝 日 三・二

岩田専太郎氏(忙しい人)	東	京	三・二七	小山田二郎(人物メモ)	竹林	賢	美術手帖	三	古稀を迎えて	川端	龍子	造	形	一ノ六			
不老長寿の画家―石川寅治小論―	荒城	季天	造	形	一ノ六	小山田二郎の藝術	滝口	修造	みづゑ	五九	試作の歴史	川端	龍子	造	形	一ノ六	
私の歩んだ道	石川	寅治	シ	奥田元宋論	編	集	部	萌	春	三ノ八	物質化から人間化へ―河原温の作品を中心に―	佐々木	基一	美術批評	(五)	六ノ七	
恩師・石川画伯	田原	輝夫	シ	奥村土牛(近代日本画一〇人集)	河北	倫明	藝術新潮	六ノ〇	岸田劉生論―麗子像を中心に―	柳	亮	みづゑ	五九				
或る日の石川先生	橋原	健三	シ	堅山南風論	シ	三ノ三	月下奏勇(人物メモ)	竹林	賢	美術手帖	九六	木下	義謙	(美術人論断)	東	京	九・二七
牛島憲之(美術人論断)	東	京	四・二六	香月泰勇(人物メモ)	植村	鷹千代	シ	九	白樺の記念写真(わが青春記)	木村	莊八	シ	一・五				
梅原龍三郎(わが人物)	嘉門	安雄	日	桂ユキ子(現代作家小論)	桂	ユキ子	朝	日	二・二五	私の生ひ立と絵の話	熊谷	守一	心	八ノ六			
バリの梅原龍三郎君	高村	光太郎	みづゑ	桂ユキ子(わが人物評)	田近	憲三	日	四・二二	小磯良平(作家訪問)	竹中	郁	美術手帖	九二				
特集岡本太郎の全貌―藝術と生活―	岡本	太郎	シ	金島桂華(美術人論断)	東	京	四・五	児島善三郎論	荒城	季夫	造	形	一ノ一				
岡本太郎の藝術を語る対談	安部	公房	シ	亀倉雄策(第一線)	読	売	三・三〇	作家の言葉	児島	善三郎	シ	一ノ七					
著作家岡本太郎(人と作品)	朝	日	三・二二	鍋木清方の藝術(口絵解説)	河北	倫明	文藝春秋	三ノ七	児玉希望・序論	荒城	季夫	シ	一ノ七				
岡本太郎論	中原	佐介	美術批評	(七)	東京	タイ	ムズ	九・二	日本画の将来を卜す(児玉理念を機軸として)	幽林	逸士	シ					
張りきる岡本太郎	東	京	八・二六	こしかたの記(口絵)	鍋木	清方	中央公論	八・五・七	希望という人	小森	盛	シ					
大河内信敏(美術人論断)	大久保	泰	シ	鍋木清方氏のこと―奥さんの語る画伯の横顔―	鍋木	照	秀作美術	一	或る断面(師児玉希望について)	奥田	元宋	シ					
わが青春記	大森	啓助	シ	川合玉堂(時の人)	毎	日	九・二三	小杉放庵(美術人論断)	小杉	放庵	美術人論断	東	京	一・四			
大森啓助(美術人論断)	大森	啓助	シ	川端実(美術人論断)	東	京	七・五	小林古径の作品(口絵解説)	河北	倫明	文藝春秋	三ノ五					
わが青春地	土方	定一	みづゑ	川端龍子(人寸描)	朝	日	六・七	小林古径(近代日本画一〇人集)	小堀	進	(美術人論断)	東	京	二・三			
萩須高德論	和田	定夫	シ	川端龍子の藝術(口絵解説)	河北	倫明	文藝春秋	三ノ七	小山敬三	シ	二・三						
欧州人の萩須藝術観	ジュル	ジ	マン	ユ・ユイス	毎	日	二・二九	龍子小感	本間	久雄	富安	風生	久富	貢	横川	毅一郎	編集部
萩須藝術の位置	水沢	澄夫	三	彩	充	古稀讚	龍子古稀記念展を見て	若き日の龍子	川端	龍子論	編	集	部				
小倉遊亀―作家小論2―	小倉	遊亀	シ	朝	日	三・二九	東	京	二・八								
自作「月」について	小倉	遊亀	シ	朝	日	三・二九	東	京	二・八								
小倉遊亀(人寸描)	東	京	二・八														
小野竹喬(美術人論断)	東	京	二・八														

菅井汲の仕事 美術手帖 二〇三

杉浦幸雄(美術人論断) 東京 九・六

恩賜賞候補の杉浦非水翁 時事 二・七

藝術院恩賜賞受賞の杉浦非水(時の人) 毎日 二・五

杉全直(第一線) 読売 九・三

杉山寧(近作日本画一〇人集) 河北 倫明 藝術新潮 六ノ七

鈴木信太郎君 鈴木 保徳 造形 一ノ八

飾らざる藝術家―信さんの人気― 荒城 季夫 シ

作家の言葉 鈴木信太郎 シ

鈴木信太郎さん 尾崎 士郎 シ

鈴木信太郎(人寸描) 朝日 七七

鈴木信太郎画伯 産経夕刊 八・三

須田国太郎(美術人論断) 東京 一・五

須田 寿 一〇・四

會宮一念(美術人論断) シ

互井開一小論 荒城 季夫 造形 一ノ二

互井開一氏の画業 檀 一雄 シ

作家の言葉 互井 開一 シ

高岡徳太郎(美術人論断) 東京 七・三

高島達四郎(人物メモ) 竹林 賢 美術手帖 九七

高岡惣七(美術人論断) 東京 六・四

(作家訪問) 羽田 敏雄 美術手帖 九

(横顔) 藤懸 静也 産経夕刊 二〇・三

「文春漫面賞」の谷内六郎氏

私の十代 鳥海 青児 朝日 六・四

辻永の人と藝術 荒城 季夫 朝日 一・二〇

作家の言葉 辻 永 朝日 一ノ二

辻永画伯の七不思議 湯沢三千男 朝日 七・二〇

よき日の学生時代 辻 永 産経 五・三

青楓先生のこと 鈴木信太郎 産経 五・三

鶴岡政男(現代作家小論) 滝口 修造 美術手帖 九

(第一線) 説 売 四・七

東郷青児論 大宅 壮一 文藝春秋 三ノ七

小説東郷青児 竹田道太郎 藝術新潮 六ノ九

福井地方裁判所窓絵「楽園」を完成して 堂本 印象 朝日 三ノ八

徳岡神泉(近代日本画一〇人集) 河北 倫明 藝術新潮 六ノ二

中川一政の近作油絵 今泉 篤男 朝日 五・九

仲田好江(わが人物評) 田近 憲三 日経 四・三

私の十代 中村 研一 朝日 二・七

中村善策(美術人論断) 中村 秀男 朝日 二・二

父・岳陵のこと 中野 和 朝日 二・八

中野和高(美術人論断) 荒城 季夫 造形 一ノ四

鍋井克之寸描 宇野 浩二 朝日 二・二

愛説する人間―鍋井克之小論― 鍋井 克之 朝日 二・二

作家の言葉 竹中 郁 朝日 二・五

そはをたべぬ人(鍋井克之) 西沢笛歌(アトリエ訪問) 朝日 三・一

喜春を迎へた西山翠嶂 朝日 春 三ノ六

野口弥太郎(わが人物評) 嘉門 安雄 日経 二・六

新人の主張―絵画に生きる― 野田 好子 藝術新潮 六ノ九

野間仁根(人物メモ) 竹林 賢 美術手帖 九

わが青春記 野間 仁根 朝日 八・三

橋本明治論 大野 誠夫 朝日 三ノ二

(美術人論断) 田島 敬助 秀作美術 一

氏に訊く 原勝郎(美術人論断) 林 武 アトリエ 三・七

特集・林武の藝術と技法 林 武 朝日 二・八

林武(わが人物評) 嘉門 安雄 日経 二・八

私の十代 林 武 朝日 三・六

東山魁夷の作品 河北 倫明 朝日 三ノ五

の歩いた道 中村 秀男 朝日 三ノ二

(美術人論断) 東山魁夷(近代日本画一〇人集) 河北 倫明 藝術新潮 六ノ九

平賀亀祐―人と作品― フエルナ 造形 一ノ三

平賀画伯と私 佐藤 尚武 朝日 二・八

平賀亀祐君のこと 萩谷 巖 朝日 二・八

平賀画伯の横顔 武藤 仁叟 朝日 二・八

平賀亀祐氏の成功 植村鷹千代 美術手帖 九

平賀亀祐 佐野繁次郎 美術手帖 五・九

平賀画伯、五〇年ぶりに帰国 朝日、産経毎日、東京タイムズ、日経 四・〇

平賀亀祐(時の人) 朝日、産経毎日、東京タイムズ、日経 四・〇

平賀亀祐(時の人) 朝日、産経毎日、東京タイムズ、日経 四・〇

今浦島からチクリ(自伝) 平賀 亀祐 日 経 四・四
 平塚連一(美術人論) 東 京 一〇・三五
 福沢一郎(作家訪問) 瀬木 慎一 美術手帖 三
 福田翠光論 編集部 O 萌 春 三ノ七
 福田豊四郎(わが人物評) 嘉門 安雄 日 経 二・五
 作家小論3- 竹林 賢三 彩 七〇
 福田平八郎の藝術 今泉 篤男 みづゑ 六〇三
 福田平八郎(近代日本画一〇人集) 河北 倫明 藝術新潮 六ノ三
 藤井令太郎(作家訪問) 岡本謙次郎 美術手帖 六
 藤川栄子(わが人物評) 田近 憲三 日 経 四・二九
 藤田嗣治ードラブル時代 岡 鹿之助 みづゑ 五三
 藤田嗣治の絵に見る世界 荒城 季夫 造 形 一ノ〇
 フジタの画室など 蘆原 英了 みづゑ 六〇四
 歸化して半年パリの藤田画伯(会見記) 松田ふみ子 毎日夕刊 七・三六
 土蔵の中のフジタの壁画 山口 玄珠 藝術新潮 六ノ七
 古家新(美術人論断) 東 京 三・三九
 八十歳の寿を迎えた松林桂月翁 猪木 卓爾 萌 春 三ノ一
 特集・前田青邨文化勲章受賞 三ノ二
 前田青邨の世界(口絵解説) 河北 倫明 文藝春秋 三ノ一
 前田青邨(近代日本画家一〇人集) 藝術新潮 六ノ五
 前田青邨(わが人物評) 嘉門 安雄 日 経 二・九

前田画伯と喜多六平太氏 産 経 六・三
 円熟した青邨藝術(文化勲章を受ける人々) 河北 倫明 東 京 二〇・三
 前田青邨(文化功勞の人々) 時事夕刊 一〇・三
 前田青邨氏(文化勲章七人の受賞者) 毎 日 一〇・九
 丸木スマさん 産 経 九・五
 三岸節子滞欧作展(風景画開眼) 田近 憲三 藝術新潮 六ノ二
 三岸節子(わが人物評) 日 経 四・七
 三輪晃勢論 萌 春 三ノ一〇
 自分の歩いた道(ハル) 武者小路実篤 読 充 四・八一
 棟方志功(話題の人) 東京タイムズ 七・四
 (時の人) 毎 日 夕 七・三
 (人寸描) 朝 日 七・三
 の板画 岡本謙次郎 藝術新潮 六ノ八
 村井正誠(美術人論断) 東 京 六・三
 絵模様式絵画の抵抗 | 村井正誠・人と作品 関根 弘 美術批評 (五)
 望月春江(美術人論断) 東 京 二〇・二
 森田元子(作家訪問) 沢野 久雄 美術手帖 九
 森田元子(わが人物評) 田近 憲三 日 経 五・三六
 女のひとり歩き 森田 元子 一・二四
 安田鞆彦の藝術(口絵解説) 河北 倫明 文藝春秋 三ノ三
 安田鞆彦(近代日本画一〇人集) 藝術新潮 六ノ二

山口蕙(人物メモ) 竹林 賢 美術手帖 三
 私ノ十代 山口 蕙 朝 日 二・二
 山口蕙(第一編) 読 充 三・三
 山口蓬春(作家小論) 河北 倫明 三 彩 六
 山口蓬春(近代日本画一〇人集) 藝術新潮 九ノ六
 山口蓬春「まり藻と花」解説 鈴木 進 三 彩 六
 「まり藻と花」について 山口 蓬春 夕 夕
 帰つてきた山下清君の絵 毎日夕刊 七・二
 一途な山下新太郎氏の山下新太郎(文化功勞の人々) 東京タイムズ 七・三
 山名文夫(美術人論断) 東 京 八・三
 山田申吾論 編集部 O 萌 春 三ノ八
 山本丘人(作家訪問) 岡 鹿之助 美術手帖 九
 山本丘人(近代日本画一〇人集) 河北 倫明 藝術新潮 六ノ八
 山本武夫(美術人論断) 東 京 四・三
 横山大観の藝術(口絵解説) 河北 倫明 文藝春秋 三ノ二
 横山大観(話題の人) 東京タイムズ 五・三
 (時の人) 毎 日 夕 夕
 きよら八八誕生日の大観老 野間 清六 東 京 九・八
 横山泰三(わが人物評) 河盛 好威 日 経 二・三六
 横山隆一(忙しい人) 東 京 二・三五
 脇田和(時の人) 毎 日 六・九

自作を語る

三 彩 七

「歯架」について	福田豊四郎	伊東 深水	東山 魁夷	徳岡 神泉	河北 倫明	佐田 勝	杉全 直	村井 正誠	山口 薫	久保、河北、瀨木	A・I他	川原 舜	泉、瑛、上野、加藤、瀧野、浜田	河北 倫明	梅原龍三郎、関西美術院のころ	「北茂安村の一部」につき	岸田劉生	「南風」のことなど	安井會太郎	岡田三郎助、會山 熟のころ	思い出	黒田清輝、白馬会創立のころ	
					萌 春	美術手帖 九				藝術新潮 六ノ四	国立近代美術館 四	藝術新潮 六ノ九	国立近代美術館 七				坂本繁二郎	木村 荘八	和田 三造	津田 青楓	中沢 弘光	山下新太郎	佐野 昭

巨匠の二十代— ヨーロッパ (絵画・外国)

アトランの仕事について	今井 俊満	美術手帖 六
二人の新人—アレシンスキーとアベルについて	田淵 安一	美術批評 九
ヴラマンク訪問記	里見 勝蔵	藝術新潮 六ノ二
エクリチュールの線影 (アレシンスキー論)	林 特派員	毎日 三二〇
マチラ・アルミダの藝術	エドゥワール・ジャール	みづゑ 六〇四
カルズウの幻想	北川 民次	リディング デザイン 五
画家—世界のホープ	岡 鹿之助	みづゑ 六〇四
新進作家ゲリエの仕事	林 特派員	毎日夕刊 一・五
斎白石を見る	関口 俊吾	みづゑ 五九八
斎白石翁の随想	富永 惣一	彩 六九
斎白石のこと	今関 天彭	彩 六九
シケイロス—人と藝術	須磨弥吉郎	みづゑ 六〇四
ベン・シアーンの逆説	北川 民次	みづゑ 六〇四
子供たちの迷宮 (スライムベルクの線画)	瀬木 慎一	六〇三
ルーフィノ・タマヨに会う	土方 定一	美術手帖 六
ダリの藝術的実験	北川 民次	みづゑ 六〇三
ミノオ論	北園 克衛	藝術新潮 六ノ二〇
画人 (ヘンリー・ミラー)	田淵 安一	みづゑ 六〇二
ヘンリー・ミラーの文字と絵	福沢 一郎	藝術新潮 六ノ七
	徳大寺公英	美術手帖 九

文学者の水彩画	アンリ・ミシヨオの「ムーヴマン」	片山 敏彦	みづゑ 六〇三
二〇世紀に於けるピカソの位置	ピカソ・人間喜劇	滝口 修造	美術手帖 一〇三
企業家ピカソ	ピカソ「女の顔」(解説)	今井 俊満	九
ピカソの新作デッサン	ピカソの新作ピカソの二大回顧展と本年度の作品	岡本謙次郎	藝術新潮 六ノ一
黒の諧謔—ピカソ、アルプ論—	ピカソの新作デッサン	東郷 青児	藝術新潮 六ノ七
ピユッフエとかたる戦争の忙しさ—ピユッフエの近作について—	ピカソの新作ピカソ	三雲祥之助	美術手帖 九
ファイニンガー「汽船オーデイン」(解説)	ピカソの新作ピカソ	宇佐見英治	みづゑ 五九八
一黒人画家の信条	ピカソの新作ピカソ	勅使河原 蒼風	朝 日 七・三
マリタンとマルロオリヴェラの水道壁画	ピカソの新作ピカソ	神原 泰	みづゑ 六〇三
話題の異色作家リヴェラを訪う	ピカソの新作ピカソ	アンドレ・ブルトン	美術批評 五
五人の画家(ドラン、キリコ、ピカビヤ、エルンスト、ダリ)	ピカソの新作ピカソ	関口 俊吾	みづゑ 五九八
メキシコ通信、二人の新人作家(チェンテ・カステイヨ、ルイス・ニシザワ)	ピカソの新作ピカソ	ベルジェール	シ
メキシコの弟子たち(フエンシアノ、アマドール、マヌエル)	ピカソの新作ピカソ	阿部 展也	美術手帖 九
	ピカソの新作ピカソ	チャールズ・ホワイ	美術批評 二
	ピカソの新作ピカソ	信定 安郎	萌 春 三ノ三
	ピカソの新作ピカソ	北川 民次	美術手帖 七
	ピカソの新作ピカソ	北川 民次	みづゑ 五九八
	ピカソの新作ピカソ	ブルトレ・アンドレ	美術批評 四
	ピカソの新作ピカソ	北川 民次	美術手帖 九
	ピカソの新作ピカソ		藝術新潮 六ノ三

イタリヤの抽象画家 ジュゼッペ・カボグ ロッシイの作品から 素朴な画家たち 生きるよろこび—ア メリカの版画家たち (彫塑・日本)	朝倉文夫(時の人) わが青春記 植木茂(人物メモ) 饒舌でない藝術—植 木茂の木彫新作— わが青春記 平和祈念像成るまで (1)(2) 信念と力の藝術家北 村西望 私の自叙伝 佐藤忠良(美術人論 断)	火面と火あそび 本郷新(作家訪問) 山本豊市(シ) レリーフ記念塔にな つた「殉教者」 彫刻家の裸像 (彫塑・外国)	ジャコメッティ 人 と作品 構成主義 ナウム・ ガボとアントワー ヌ・ペウスナーの藝 術	構成主義論附録(ガ ボとレードの往復書 簡) 砂の彫刻家コスタ チノ・ニッオラ	リビニング デザイン 六 松本 亮 美術手帖 九 恩地孝四郎 みづゑ 五九 毎 日 五・七 朝倉 文夫 東 京 三・八 竹林 賢 美術手帖 九 今泉 篤男 シ 六・二 菊池 一雄 東 京 六・二 北村 西望 彫 塑 二・三 荒城 季夫 造 形 一・五 北村 西望 シ 二 流 政之 美術手帖 一〇三 徳大寺公英 シ 七 上島 長健 シ 九 海老原喜之 助・佐田勝 シ 七 笠置 季男 日 経 二・三	宇佐見英治 美術手帖 三 ハーバー 美術批評 (三) ト・リード	国際建築 三ノ五
---	--	--	---	---	--	--	----------

エチエンス・マルタ ン人と作品 マンゾーとマスケ リーニ マリノ・マリニ訪 問 素朴な彫刻家たち (ヨーロッパの彫刻 家を訪ねて) (工藝・日本)	伊藤憲治(美術人論 断) デザイナーとしての 猪熊弦一郎 重要無形文化財指定 の銅鑼製作者 魚住 安太郎 海野清(美術人論断) 川合修二(シ) 川喜多半泥子—半泥 子の陶器— 六和翁の作品 桑沢洋子さん 剣持勇(美術人論断) 高村豊周(シ) 丹司豊山と青磁天目 浜田庄司(美術人論 断)	無形文化財の「江戸 ゆかた」製作者松原 定吉さん 無形文化財の堀柳女 さん 火を通した土のオブ ジェー八木一夫の作 品 絵画から染色へ(新 人の出張)	益子 十志 美術手帖 九 土方 定一 みづゑ 五九 清水多嘉示 造 形 一・三 葺村鷹千代 植村鷹千代 東 京 二・三 日 経 二・三 東 京 三・三 淡 交 七 前 春 三ノ八 リビニング デザイン 一 東 京 七・六 シ 二・二五 日本美術 工藝 二〇五 東 京 二・二 産 経 三・三 東 京 二・三〇	柳田美代子 藝術新潮 六ノ二
--	--	--	--	----------------

渡辺力のイス(その ヒューマニズムにつ いて) 工藝界人物月旦 1 平田郷陽、堀柳女 工藝界人物月旦 2 松田権六、高野松山 工藝界人物月旦 3 富本憲吉、浜田庄司 工藝界人物月旦 4 香取正彦 愚朗の陶藝について 嶺男・順吉・卯一— 三人展に就いて 人間文化財 (工藝・外国)	サヴェニアクク ペン・シャーンの商 業美術 ノイトラのデザイン 思想 パウル・マッパの 人と作品 ジオ・ボンティの綜 合造形 リーチを囲む会(座 談会)	白井晟一論 原爆時代に抗するも の(白井晟一論序説) 清家清(時の人)	勝見 勝 新建築 三ノ一 前 春 三ノ一 シ 三ノ二 シ 三ノ三 シ 三ノ四 高橋邦太郎 淡 交 七 内藤 匡 日本美術 二〇七 小山富士夫 藝術新潮 六ノ三 杉原 信彦 伊藤 逸平 リビニング 二 原 弘 美術手帖 七 勝見 勝 工藝ニユ 三ノ二 剣持 勇 シ 三ノ六 勝見 勝 シ 三ノ五 B・リーチ 梅原、志賀 柳、浜田、心 剣持 勇 工藝ニユ 三ノ七 シ 三ノ七 リビニング デザイン 一	岩田 知夫 新建築 三ノ二 シ 三ノ四 毎 日 四・二
--	--	--	--	-----------------------------------

清家清とグロビウス 浜口 隆一 藝術新潮 六ノ二
 丹下健三の日本的性格 岩田 知夫 新建築 三ノ一
 丹下健三(第一線) 読 売 一・一九

新しい建築(私の話題) 丹下 健三 朝日夕刊 九・七
 広瀬鎌二の握つた鍵 灰地 啓 新建築 三ノ三
 堀口捨巳(美術人論断) 東 京 三・五

新しい建築の発展を願う(戦後派の言葉) 増沢 洵 朝 日 一・三〇
 女流建築家の弁 山田 雅子 藝術新潮 六ノ六
 吉阪隆正(時の人) 每 日 二・二
 村野藤吾論 岩田 知夫 新建築 三ノ二
 (建築・外国) 市田 鱒

ラルフ・アースキン(スウェーデン) 国際建築 三ノ一
 ル・コルビュゼとレジュエの作品 猪熊弦一郎 みづゑ 五九六
 レジュエとル・コルビュゼの近作 滝口 修造 美術手帖 六三
 ル・コルビュゼ、レジュエ、ペリアン三人展 吉阪、瀬木、中井 建築文化 一〇三

日本へ来るル・コルビュゼ 板倉 準三 朝 日 二・二
 ル・コルビュゼの見た日本 吉阪 隆正 二・二〇
 超現実主義の建築家(スヘイン)のゴウデイ 福沢 一郎 藝術新潮 六ノ六

イロー・サーリネン(アメリカ) アライン・B・ルーチ 国際建築 三ノ〇
 ハイム 国際建築 三ノ〇
 ファイリップ・ジョンソンと二三の住宅 H・R・ヒツ チョック 三ノ二

マツシウ・ノヴィツキ(アメリカ)の生涯と作品 ルイス・マシソンフォード 国際建築 三ノ五
 ペリアンに学ぶもの 水之江忠臣 三ノ六
 私の歩んだ道 A・レイモンド 美術手帖 九
 最近のJ・Mリチャーズ 桐敷真次郎 建築文化 一〇〇

身辺雑記・随筆 ミノル・ヤマサキ(アメリカ) 高瀬 隼彦 国際建築 三ノ七
 池大雅と西洋画 相見 香雨 中央公論 一〇〇
 「獄心狂」にて 青野 季吉 国博ニユ 一〇〇
 南仏随想 青山 義雄 みづゑ 六四
 興味深いピカソ論 朝倉 響子 産 経 二〇・七
 さわがしい色 朝倉 撰 リビング 二
 風流の筋金 朝倉 文夫 毎日夕刊 一・七
 ロンドンのバス 浅野 長武 文藝春秋 三ノ二七
 或る画幅の話 阿部 展也 読 売 一・四
 七頭高半と髪 荒井 龍男 東 京 七・三
 作陶ばやり 荒井 陸男 藝術新潮 六ノ八
 アフリカ散見 有馬三斗枝 朝 日 二・六
 外遊絵双六 石井 柏亭 朝 日 九・三
 年寄りのひや水 石川 栄耀 文藝春秋 三ノ一七
 欧米美術見たまま 石川 滋彦 造 形 一ノ四
 銅像建立 ヴェノス・アイレス 伊藤 薫朔 産 経 六・七
 の画歴 猪熊弦一郎 造 形 一ノ一
 舞台の写実 伊藤 直昭 国博ニユ 一〇〇
 猫の平和 上野 直昭 日 経 一〇・三
 博物館随想 某月某日 日 経 一〇・三

一流藝術の感銘 白井 吉見 読 売 四・三
 「フレンチ・カンカン」をみて 梅原竜三郎 朝 日 二・二四
 吾妻カブキ是非 今日この頃 円鏝 勝二 造 形 一ノ四
 蓬萊(床飾りの食積台など) 大河内信敬 時 事 一・二
 西芳寺遊記 西 造 形 一ノ二
 親子三代好きな道 大江 宏 建築文化 九
 色彩雑感 マンボと今日の藝術 岡本 太郎 読 売 七・五
 簡素美 岡部 長景 毎日夕刊 七・三
 私の肖像画の行方(岡田三郎助作「支那絹の前」) 岡田八千代 日 経 五・三
 台湾の生活を見る(絵と文) 荻野 康児 時 事 三・三
 オブジェばやり 小田仁三郎 リビング 一
 バレエとデザイン 貝谷八百子 デザイン 三
 テルメの美術館 香川 京子 中央公論 三
 色盲とデザイン 加藤 金吉 リビング 三
 私の美術遍歴(1)―(2) 亀井勝一郎 群 像 一ノ二
 イタリーの旅から 亀倉 雄策 造 形 一ノ三
 「明石町」対面(上下) 鶴木 清方 毎 日 二・二〇、二
 北欧の美神―ガンの想い出より 嘉門 安雄 ミニユーゼ アム 五四
 ヒステリー定義 加山 四郎 造 形 一ノ三
 私の木だな 河北 倫明 読 売 一・三
 鉄斎百二十年祭 川島理一郎 毎 日 八・三
 舞妓を描く 川端 龍子 三 彩 九
 四国遍路 北園 克衛 リビング 四
 花と詩

武蔵野の古仏 北川 桃雄 毎日 一九

斑鳩寺の春 木村 荘八 朝日 一〇四

新春冗説 読売 六三三

東京繁盛記(絵と文) 読売 九三〇

師走風俗帳(続)東京繁盛記(一三三) 読売 二二〇

ユイゴから帰つて 倉田 三郎 東京 三三三

セルビア通信 美術手帖 九三

奈良国立博物館開館六十周年を迎えて 黒田 源次 国博ニユ 九五

奈良国立博物館六十周年を迎へ思ひ出 亀田、松島、小林 国博ニユ 九六

長崎かぶれ 小糸源太郎 日経 九二五

梅雨と猫 小杉 放庵 毎日 六三三

山の暮し 児玉 希望 三彩 六一

私の油絵 駒井 和愛 毎日夕刊 一三七

城郭 スペイン通信 佐藤 敬朝 日経 五二四

挿絵のむづかしさ、味けなき 佐藤 泰治 産経 二二三

私の蒐集 沢田 晴広 造形 一〇一

旧友(マリニ、メツシーナ、キャンピリのこと) 清水多嘉示 毎日夕刊 二二三

日本の庭 エデイス・シモンズ リビングデザイン 四

人形に寄せて 鈴木信太郎 造形 一〇一

びつくりした「風景」 ドラン作に化けた私の作品 鱈 利彦 日経 二二四

トルチェロの一日 須田 寿造 形 一〇三

トレド紀行 須山 計一 リビングデザイン 五

薩摩路と日南海岸 高井 貞二 東京 三三〇

滞米画信 上、下 高井 貞二 東京 九六七

美術団体の名 高岡徳太郎 毎日夕刊 七二六

狩猟の季節 高岡 惣七 東京タイムズ 一〇二九

アトリエについて 高村光太郎 新潮 三

不思議について 高橋 忠弥 造形 一〇三

大和紀行(1)~(9) 竹山 道雄 藝術新潮 六〇一

人生計画 谷 信一 国博ニユ 九四

世相の表情 谷口 吉郎 朝日 六二五

ゴッホと写楽 田口湖三郎 文藝春秋 三ノ二

うなぎ釣 田崎 広助 造形 一〇二

門松昔ばなし 田中 一松 産経 二二三

ヨーロッパ旅行帖から上、中、下、 田村 一男 東京 五四七

ヨーロッパ紀行シャトル 建昌 覚造 美術手帖 九

石だたみ―忘れられ 田山 方南 国博ニユ 九

た参道― 丹下 健三 毎日夕刊 一〇〇

茶の間 ジュネーヴの田舎 弦田英太郎 造形 一〇五

花と造形 勅使河原 蒼風 日経 一〇二

京の舞妓 東郷 青児 毎日夕刊 八八

能すがた 土岐 善麿 日経 二二六

佐久間ダムへ行く(ルポルタージュ) 利根山光人 美術批評 二二

ハインの浮彫り 内藤 智秀 毎日夕刊 二二七

私の絵具箱 中谷 泰 美術手帖 九

我家の菓箱 中野 和高 造形 一〇五

人間文化財 中村 勝馬 毎日夕刊 四六

天気図 中村 研一 東京 三二九

阿寒湖の宿 中村 善策 造形 一〇六

レス・絵と文 中村 直人 東京 八二五

イタリヤ紀行 中村 光夫 日経 四二五

キエプロス島に行く(ヴァイナスの故郷、ゴシック回教寺院) 中村 光夫 東京 三三〇

大阪のお正月 鍋井 克之 毎日 一〇六

露の笹 野間 仁根 造形 一〇五

晶子の笑話 松原 正業 国博ニユ 一〇二

真贋 丸尾彰三郎 日経 九七

鳳凰のゆくえ 三岸 節子 藝術新潮 六〇八

パリで喰わざるの記 峰岸 義一 造形 一〇二

おかめはちもく 宮田 重雄 日経 一〇三

ブルターニユ日記抄 忘れたい自作 美術交友録 六〇八

愛情と色 宮良 当壮 日経 三

冬のフイレンツェ 三輪 福松 日経 一

永遠のギリシヤアテロポリスを訪ねて 向井 潤吉 時事 一〇三

古い旅での正月 伝承民家スケッチ蒐集に就て 武者小路 実篤 藝術新潮 六〇一

本ものの顔と嘘の顔 モダンアーチストの生活と意見 村井 正誠 日経 六〇四

スケッチ・ブック 森田 元子 造形 一〇八

思い出の法隆寺 ノサップ岬 橋本 明治 朝日 一〇三

スカイラインの美しさ 服部正一郎 造形 一〇六

おめでたいもの(半漫談) 浜口 隆一 日経 一〇九

陶片愛着 原田 淑人 読売 一〇二

熱海雑筆―展覧会のいろいろ 平塚 運一 造形 一〇八

滞日二十年の眼で 広津 和郎 東京 五二

ヤコブ・フ イツシヤ 群像 二二

竹久夢二の追憶 荒城 季夫 造 形 一ノ一
 亡友谷中安規 佐藤 春夫 日経夕刊 九・三
 土田麦櫻の藝術(口 河北 倫明 文藝春秋 三ノ九
 絵解説)

晩期の鉄斎 鉄斎の藝術と伝統 日本文化 七
 富岡鉄斎について 小高根太郎 国立近代 美術館ニ 二〇

鉄斎をめくつて 諸 氏 鉄斎「乗槎浮海図由 来記」(解説) 正宗得三郎 三
 富岡鉄斎 小高根太郎 前 春 三ノ一

中西利雄「青衣」(解 本岡 正義 国立近代 美術館ニ 九
 説) 雅邦素画集を見て 水原秋桜子 前 春 三ノ三
 速水御舟の藝術(口 河北 倫明 文藝春秋 三ノ三
 絵解説)

菱田春草の藝術(口 嘉治 隆一 心 三ノ九
 絵解説) 広島晃甫の思い出 安田岩次郎 造 形 一ノ六
 写生旅行の藤島先生 河北 倫明 前 春 三ノ四
 村上華岳の精進 嘉門 安雄 日 経 三ノ二

安井曾太郎(わが人 津田 青楓 みづゑ 五九三
 物評) 安井曾太郎君の滞歐 から帰朝まで 富永 惣一 朝 日 三・二五
 安井曾太郎氏を悼む 梅原、嘉門 産 経 三

安井さんの死 福沢 一郎 読 売 三
 安井曾太郎氏の藝術 柳 亮 東 京 三・二五
 安井曾太郎先生を悼 宮本 三郎 毎 日 三

安井曾太郎先生をし のびて 高島達四郎 日 経 三・二七

安井曾太郎の藝術 河北 倫明 朝 日 三・六
 安井曾太郎の人と藝 船戸 記者 毎 日 三・八
 術 安井先生の想出 東郷 青児 東京タイ 二・九
 ムズ

山本竹雲筆歳寒三友 橋崎 宗重 国 華 三・五
 図解 風景画家山本森之助 鈴木長三郎 藝 林 三ノ四
 の生涯と作品 万鉄五郎先生一断章 長谷川ハツ みづゑ 五九三

八人の画家(浅井、 今泉 篤男 三
 黒田、藤島、万、岸 田、藤田、安井、梅 原) 岡本謙次郎 三 六〇

巨匠の二〇代 (絵画・外国) マックス・エルンス 土方 定一 美術手帖 三
 ト人と作品 カンデインスキ 人 長谷川三郎 三 六四
 と作品 ジョットの尼寺(サ 須田 寿 藝術新潮 六ノ三
 ンタ・チエチリアの カバリニ)

クラナハとその裸婦 土方 定一 みづゑ 五九六
 クレエ「酩酊」(解説) 宇佐見英治 美術手帖 九
 ゴッホについて 武者小路 実篤 アム ミュージ 三

ゴッホの世界(アー 渡辺 勉 式場隆三郎 藝術新潮 六ノ二
 ト写真版) 解説 エミイ・ア ンドリーヌ 三

グロッタの画家たち 東野 芳明 美術批評 四
 「ゴヤの場合」 スペイン三大家の感 銘「グレコ」ヴェラ スケス、ゴヤー 宮本 三郎 造 形 一ノ一
 シャルダン「銅の鍋」 (解説) 伊藤 廉 美術手帖 三

セザンヌ「橋ノ木」 藤井令太郎 美術手帖 九
 (解説) ダヴィッドに関する 一試論 黒田重太郎 京都市立 美大研究 三

晩年のレオナルド・ ダ・ヴィンチ メレジゴフ 造 形 一ノ二
 テイエポロ「大道の 薬売り」(解説) 荒城季夫 訳 向井 潤吉 美術手帖 九
 ヴァインの想出(ア ープレヒト・デニエ ーラー) 加藤 周一 藝術新潮 六ノ三

グロッタの画家(ボ ッッシュの逆説) 東野 芳明 美術批評 三
 ボッシュ「枯草の車 地獄の都市」(解 瀨木 慎一 美術手帖 一〇三
 説) ボワロー「祭日」(解 宮本 三郎 三 九九
 説) マチスと写生帳 川島理一郎 毎日夕 一・五
 マチスの回想 青山 義雄 藝術新潮 六ノ一
 マチスの葬儀 今泉 篤男 美術手帖 三

ジオアン・ミロ 人 ミロ「コムボジシ ョン」(解説) 宇佐見英治 三 一〇三
 ムンクの出世 太田利三郎 造 形 一ノ七
 モネと印象主義 三輪 鄰 前 春 三ノ二
 ユトリロの死 佐伯 米子 藝術新潮 六ノ三

「郷愁」の画家ユトリロ 宮本 三郎 朝 日 二・八
 ユトリロを悼む エコール・ドパリ(ユ トレロの死によせ て) 植村鷹千代 読 売 三
 ユトリロの死 ユトリロの死 柳 亮 産 経 夕 三
 葬儀 関口 俊吾 三 二・八

一七九

ルノアール小品展 梅原竜三郎 美術手帖 三

オデイロン・ルドン 滝口 修造 九二

ルドンの色 岡 鹿之助 みづゑ 五五

対談 梅原、今泉 五九四

ルドン小惑 福島繁太郎 三

ルドン讃 中川 一政 三

オデイロン・ルドン 岡 鹿之助 三

片山 敏彦 三

河原、五味、藤松 美術批評 五

レジェエ急逝 富永 惣一 藝術新潮 六〇

レジェエの死と現代美術 富永 惣一 藝術新潮 六〇

レジェエ回想 海藤日出男 美術手帖 一〇三

フェルナン・レジェ 佐々木基一 みづゑ 六〇四

レジェエの死を悼む 川口 軌外 産 経 八・九

レジェエの思い出 海藤日出男 読 売 三

フェルナン・レジェの死 徳大寺公英 毎 日 三

レンブラント デッサンおぼえ書き 嘉門 安雄 みづゑ 六〇一

ロートレック断想 荒城 秀夫 造 形 一〇三

異色作家列伝 滝口 修造 藝術新潮 三

1 ポーシユ、2 アンソール、3

バウル・クレイ、4 スーティン、5

ムンク、6 グリユール、8 ゴッ

ト、7 ラ・トゥール、8 ゴッ

ギヤン、9 ピエロ・ディ・コシ

モ、10 ルドン、11 エルンスト、12

デュシャン

(彫 塑)

彫刻の先覚萩原守衛 石井 鶴三 国立近代美術館 二

萩原森山君のことな ど(一)朝 朝倉 文夫 彫 塑 三

橋本平八のこと 北園 克衛 国立近代美術館ニ 二

橋本平八「花園に遊ぶ 天女」(解説) 本間 正義 三

彫刻家ロダンの「少年 少女のために」 清水多嘉示 毎 日 四・三

山崎先生を偲ぶ(工 藝) 平権 田中 彫 塑 元

象谷の四男藤川藤樹 のこと 加藤 増夫 日本美術 三〇四

頭節天狗久と私 西沢 笛敏 日本工藝 三

美術関係者 石橋正二郎(横顔) 産経夕刊 二・九

(時の人) 毎 日 二・七

(話題の 人) 東京タイ ムズ 二・八

今泉篤男氏(忙しい 人) 東 京 二・四

上田桑鳩(美術人論 断) 毎 日 九・三

江上波夫(人寸描) 朝 日 九・六

(時の人) 毎 日 九・六

大原家二代(近代画 家群別録)(1)(2) 矢代 幸雄 藝術新潮 二

近代美術館長、岡部 長景氏の年頭抱負 東 京 一・六

奥田誠一氏を悼む 陶 説 三

偉大なる足跡 梅沢 曙軒 陶 説 三

奥田先生を悼む 広田不孤斎 陶 説 三

工藝史的陶磁研究 の草分 満岡 忠成 陶 説 三

奥田先生のこと 林屋 晴三 陶 説 三

奥田さんのことと も 余田 喜一 陶 説 三

奥田誠一先生追悼録 小山、久志、日本美術 三〇七

思い出の記 内藤、藤岡、工藝 三〇七

奥田誠一先生著述文 献目録 中川 千咲 三

奥田先生のおもいで 満岡 忠成 国博ニユ 一〇三

黒田源次氏のこと 駒井 和愛 東 京 八・三

わが青春記 駒井 和愛 国博ニユ 九三

小山富士夫氏のこと 杉山 司七 東 京 五

三〇周年を迎えた都 美術館 日 経 五・〇

美術の殿堂三十年 高橋誠一郎(わが人 物評) 嘉門 安雄 三

(話題の 人) 東京タイ ムズ 九・七

(時の人) 毎 日 九・七

コロンブスのタマゴ 花田 清輝 美術批評 四

滝口修造について 竹中 郁 東 京 八・〇

わが青春記 家永 三郎 朝 日 一〇・四

辻善之助氏の死を悼 む 坂本 太郎 毎 日 一〇・八

どろぞ安らかに―辻 善之助先生 毎 日 一〇・八

寺中竹雄(人寸描) 矢代 幸雄 藝術新潮 四

(話題の 人) 毎 日 九・九

(時の人) 東京タイ ムズ 九・九

原三溪(近代画家群 別録)(一)朝 矢代 幸雄 藝術新潮 四

早田雄二(美術人論 断) 東 京 三・三

コレクシヨンを初公 開した平野政吉(人 寸描) 朝 日 一〇・三

福井利吉郎氏のこと 国博ニユ 九六

福田勝治(美術人論断) 東京 九〇三

松方幸次郎(近代画家群別録1) 矢代 幸雄 藝術新潮 六ノ一

世にも不思議なコレクシヨン―松方幸次郎という男― 松方 三郎 文藝春秋 三ノ一

松本栄一氏のこと 国博 ニュース 九四

丸尾彰三郎氏のこと 源豊宗氏のこと 竹林 賢 美術手帖 二〇三

柳亮訪問 矢代 幸雄 藝術新潮 六ノ八

和辻哲郎氏(文化勲章七人の受賞者) ウォーナーを偲ぶ ウォーナー翁の逝去を悼む ウォーナー博士の思い出 矢代 幸雄 藝術新潮 六ノ八

ラングドン・ウォーナー氏の人と功績 津田 敬武 藝術新潮 六ノ八

エドワード・スタイケン 伊奈 信男 日経 八七

ルオーと福島一家 宮田 重雄 週刊朝日 別冊緑蔭 読物号

その他 中川 成夫 藝術新潮 六ノ一

北方文化博物館 田中 一松 藝術新潮 六ノ三

本間美術館 藤田 隆章 藝術新潮 六ノ四

愛知県美術館 船戸 洪 藝術新潮 六ノ五

徳川美術館 中村 秀男 藝術新潮 六ノ六

中尊寺讚衡藏 藤島支治郎 藝術新潮 六ノ八

近代美術館(対談) 関 忠夫 国博 ニュース 二〇二

根津美術館 今泉 土方 藝術新潮 六ノ九

田山 方南 藝術新潮 六ノ一〇

近ごろのアメリカ美術館の傾向(1)―(3) 石沢 正男 国博 九一九

博物館に望むもの 藤田 亮策 藝術新潮 九

欧米博物館の印象、対談 手塚 富雄 藝術新潮 九

パリ人類博物館 福田 恒存 藝術新潮 九

彫刻と古陶磁―欧米の博物館を見て― 福沢 一郎 藝術新潮 二〇〇

博物館の展示に関する諸問題 古屋 芳雄 日経 二六六

近代美術館買上げ品 河合 正一 新建築 三〇四

イギリスにおける歴史建造物保護事業(1)―関係機関とその事業― 真下 瞬 藝術新潮 六ノ二

洋画の医者裏ばなし(油絵の保存修理) 桐敷真次郎 建築史研究 三〇

伝説論序説 山下 登 日経 二五

百物語(北斎) 岡本 太郎 中央公論 三

生きた文化財の範囲 花田 清輝 美術批評 七

独立美術協会(グループ研究) 木々高太郎 日経 二〇〇

春陽会(グループ研究) 田近 憲三 藝術新潮 六ノ一

工藝指導研究所 今泉 篤男 藝術新潮 六ノ七

フランスの博物館附 勝見 勝 日経 三

欧州に於ける博物館 登石 健三 アム 三〇

附属美術研究所 古文化財 二

平常心のなかで―フランスの文化財保存― 秋山 光和 日本文化 一

ループル博物館実験室の紹介 岩崎 友吉 古文化財 二〇

美術家の村・グリニッチ・ヴェネツィア 古田 遠志 藝術新潮 二〇三

美術風土記・岡山県 吉田 宗一 藝術新潮 九六

福岡県 伊東 浩三 藝術新潮 九九

北海道 今田 敬一 藝術新潮 一〇三

秋田県 太田 桃介 藝術新潮 一〇三

風土と民藝 鈴木信太郎 リビニング デザイン 四

長崎の風物詩 西沢 篤 藝術新潮 四

長崎の郷土玩具 藤森 健次 藝術新潮 四

北欧の国フィンランドを語る 中村 琢二 藝術新潮 五

山形の郷土玩具 西沢 篤 藝術新潮 五

北海道風物詩 小川 マリ 藝術新潮 六

アイヌの民藝 西沢 篤 藝術新潮 六

特集・旧福島コレクシヨン 福島繁太郎 みづゑ 五七

私のコレクシヨンとベラルーのこと 伊藤、福島 藝術新潮 九四

福島コレクシヨン 益田、宮田 藝術新潮 九四

福島コレクシヨン 矢代 幸雄 藝術新潮 六ノ五

コレクシヨン回想の作品 福島繁太郎 藝術新潮 六ノ五

久保コレクシヨン 森 弥多丸 時 事 二九

松方コレクシヨンのその後 福島繁太郎 読 充 二・三

高い絵と貧しい画家―画廊主の所感― 富永 惣一 藝術新潮 六ノ八

日本人の貰った絵 鈴木里一郎 日経 八・三九

私の扱った名画 福島・石原、中村・西川、川辺・長谷 美術手帖 九

面商放談(座談会)

美術学校時代(座談会) 加山・野間・須田・杉全・美術手帖 三

うらかたのはなし(美術展) 谷中田・市川・山端・河原・浅尾 九四

美術記者というもの(座談会) 船戸・寺田・小川・竹田・上島 六六

素人藝術家時代 飯沢 匡 美術新潮 六ノ二

美術批評家の画 三雲祥之助 六ノ二

素人画について 青山 二郎 六ノ三

実技・技術 品川 工 二

身じかな材料で作る四つの表情 ト・デッサン 瑛 九 四

ろう染めの作り方 芥川 紗織 五

椅子をデザインする人のために 豊口 克平 五

七輪で焼く趣味の楽焼 朝妻 治郎 六

特集・雨季とくらし 乗松 巖 四

特集・戸外の生活 見庭のオブジェの発 吉村 巖 四

洋風庭のいろ／＼ 日本庭園の新しい考え方 佐野 且斎 五

私の庭 岡本 太郎 六

野外の彫刻・ブルイデルの作品 ヨーロッパの都市・日本の都市 石庭とアルプ 岡本 太郎 六ノ二

モダン・ダダと抽象彫刻の協同 上林 澄雄 美術手帖 一〇三

子供のための遊べる立体 植木 茂 リビングデザイン 五

映画・室町美術覚え書 溝口 三郎 国博ニユ 五

美術映画雑記 滝口 修造 美術批評 二二

映画の色彩美 宮本 三郎 東京 四・七

横山隆一氏の色彩漫 飯沢 匡 毎日 二・二六

大藝術の条件をみせる色彩映画「ピカソ傑作集」 植村鷹千代 美術手帖 一〇三

テレビの美術 三林亮太郎 国博ニユ 二〇一

十年の回顧さまざま 矢島 恭介 国博ニユ 二〇一

数とフォルム 佐藤敬之輔 工芸ニユ 三三ノ三

奇数の美 柳 宗悦 心 八ノ六

日本人の発見「タナー」美術史の縮図 ゴッホのモデルを訪ねる 里見 勝蔵 六ノ四

特集・藝術家のモデル 猪熊弦一郎 アトリエ 三九

美術辞典いろ／＼(美術閲覧室) 石川 公一 国立近代美術館ニユ 六

フランスの出版美術 大智 浩 デザイン 二〇

一外人の見た美術館の贋作 阿部 展也 美術新潮 六ノ二

世界美術批評家会議 グローマ 美術新潮 六ノ二

日本工藝会の創設に際して 西沢 篤敏 日本工藝 一

美術にあらわれた南と北(アート写真版) 東山 魁夷 美術新潮 六ノ三

エジプトの二つの顔 エティエンヌ・スヴェンツド 六ノ四

撮影 三輪 福松 考古学雑誌 四〇ノ四

解説 渡辺 弘 時 事 三・三

資料紹介、アテネの四ドラクマ銀貨 西沢 篤敏 美術手帖 九

ヒナ祭りの意義 益田 義信 美術手帖 九

マルジャン・ミスコヴァルツチのパレートを観る 谷 長二 リビングデザイン 一

イキ料について 勝見 勝 美術新潮 六ノ二

デザイン学校始末記 ハイブーフからヘップバーン迄(靴髪論) 今 和次郎 デザイン 六

シャンソン・モード・視覚 菊地 章一 美術批評 五

地方画壇に訴う 難波田龍起 美術新潮 六ノ二

地下鉄のショウ・ウインドウ 船戸 洪 美術手帖 一〇三

虫と鳥の話(座談会) 志賀・大原・熊谷・中川 心 八ノ二

初めて絵を売る 山下 清 美術新潮 六ノ九

特集・ちえのおくれた子らの作品 式場・岡山・久保他七氏 美術手帖 九五

ハリウッドの美術教室 芹沢 末夫 美術新潮 六ノ七

関西美術家の攻勢 村井 正誠 六ノ二

特集・所蔵作品紹介 今年歩み 国立近代美術館ニユ 三

文化勲章ものがたり 東京タイムズ 二・二

「文化勲章」をめぐる

日本の書道	アルシンス	朝	日	二・三
書・墨美の藝術	キー	藝術新潮	六ノ三	
ワクを飛出した「書道」	北園 克衛	日	經	九・二五
弘法も筆を選ぶ	篠田 桃紅	朝	日	三・二七
表装における配色	和田成一郎	日	經	四・二五
色を作る喜び(絵具のエピソード)	秋山 辰雄	造	形	一ノ二〇
色で苦勞する	三吉 勉	日	經	九・二九
	川上 元郎	日	經	八・二

東洋古美術文獻

總説

文化史としての美術史	石田 一良	文化史学	別冊一	
美の世界	保田与重郎	淡	交	八
伝統と自然	北川 桃雄	三	彩	六
意匠の成立	谷田 閔次	美	学	三
シ伝シの秘密	鈴木 進	藝術新潮	六ノ六	
美術にあらはれた南と北	東山 魁夷	日	經	六ノ三
新国宝抄	久野 健	日	經	六ノ二
新国宝抄(第八次指定の国宝)	鈴木 進	日	經	六ノ五
内部的文化財	高橋誠一郎	日本文化	一	
喪はれた文化財	船戸 洪	藝術新潮	六ノ二〇	
座談会 古美術の保存と復原	佐和・小林 太市郎・村田・蓮実・浅野・辻・上野・小林 剛	仏教藝術	二	
思ひのまま	浅野 長武	日本文化	二	

用語解説

宋磁の文様技法	林屋 晴三	ミュージアム	四
馬面	増田 精一	日	四
塗金	中野 政樹	日	四
強装束と装束束	日野西資孝	日	四
仏像・神像の姿勢	金子 良運	日	五
古筆	小松 茂美	日	五
仏像の印契	金子 良運	日	五
鹿子紋	日野西資孝	日	五
日本美の問題一、二	矢代 幸雄	日本文化	一、四
日本美術随想7-18	脇本楽之軒	藝術新潮	六ノ一
日本美術の流れ	野間 清六	アム	五
日本美術の民族性と世界性I	長谷川三郎	三	七
日本美術の印象	アル・ドリヴ	藝術新潮	六ノ七
外国人の眼-日本美術をどう見ているか	アム	ミュージ	五
伝統の再建	河北 倫明	日本文化	二
古代色感の背後的思想	野間 清六	アム	四
顔料を混合したときの色彩について	弘津友三郎	京都市立美大研究報告	二
宗教と藝術	小林太市郎	仏教藝術	三
仏教美術講座	金子 良運	国立博物館ニユー	九一九四
仏具について一	蔵田 蔵	日	九一九七
写経について一	堀江 知彦	日	九一〇一
仏画の変遷一-三	高崎富士彦	日	一〇一

仏教の藝術革命	岡本 太郎	大法輪	三ノ一
時宗藝術史の一、二の問題	赤松 俊秀	仏教藝術	三
禪と美術	久松 真一	墨	四
禪院の境致	玉村 竹二	仏教藝術	三
浄土変史概説	塚本 善隆	日	三
飛鳥奈良時代の美術	梅原 末治	飛鳥奈良時代の文化	三
工藝	松本 楯重	歴史教育	三
講座 奈良時代の美術	小林太市郎	仏教藝術	三
奈良朝の千手観音	池田 源太	大和文化研究	二〇
大安寺の僧道慈と天平仏教	松本 楯重	歴史教育	三
講座 平安時代の美術	松本 楯重	歴史教育	三
平安時代の陸奥開拓と平泉の仏教美術文化	亀田 孜	東北史の新研究	五
日本美術史における女性的なる美の根源とその内容について	天野 茂時	鳥根大学論集	五
藤原時代の美術-講座 鎌倉時代の美術	松本 楯重	歴史教育	三
貴族と室町藝術	森末 義彰	国文学解	三七
君台観左右帳記の研究(その1 諸本解題)	野地 修左	建築学会研究報告	三ノ二
文化財風土記	伊藤 祖孝	日本文化	一
山梨県	小倉 豊文	日	二
広島県	村松 益治	日	三
長野県	藤田 和夫	日	三
香川県	岡田怡三雄	日	四
宮城県	島田 清	日	五
群馬県			
群馬県			
兵庫県			

古寺巡礼

8 高貴寺と弘川 加藤三之雄 仏教藝術 三五

9 当麻寺 浅野 清 シ 三六

新古寺巡礼

20 大徳寺の孤蓬 林屋 晴三 ミュージ 四七

21 富貴寺大堂 矢島 恭介 シ 四七

22 近江の石山寺 鎌原 正巳 シ 四八

23 尾道の浄土寺 岡田 譲 シ 五〇

24 寂光院 嘉門 安雄 シ 五二

25 曹源寺 野間 清六 シ 五三

26 岡寺 関 忠夫 シ 五三

27 安楽寿院 金子 良運 シ 五四

28 学行院 千沢 植治 シ 五五

29 立石寺 石田 尚豊 シ 五五

30 道成寺 西川 新次 シ 五七

大和紀行 薬師寺の聖観音 竹山 道雄 藝術新潮 六〇一

白鳳 薬師寺金堂の三尊 浮彫と光沢 竹山 道雄 シ 六〇二

薬師寺の東塔 薬師寺の東塔 竹山 道雄 シ 六〇三

ネグロ人の梯子一 二一方法論について 竹山 道雄 シ 六〇四

ての反省 竹山 道雄 シ 六〇五、六

東大寺の三月堂 竹山 道雄 シ 六〇七

憤怒と微笑一代表 竹山 道雄 シ 六〇八

的把握面 竹山 道雄 シ 六〇九

天平の写実一興福 寺の八部衆と十大 弟子 竹山 道雄 シ 六〇九

アート写真 三村 幸一 日本美術 一九

乙訓の古寺 熊野 紀一 工藝 二〇五

神峰山寺 熊野 紀一 工藝 二〇五

妙心寺 三村 幸一 日本美術 二〇六

黄梅院一 大徳寺 熊野 紀一 工藝 二〇七

寺院風土記 後藤 興善 大法輪 三〇二

奥の山寺 鈴木 恒男 国学院雑 三〇二

志摩神島八代神社の 古神宝 誌 三〇二

京洛遺聞 神田喜一郎 ミュージ 三〇四

鳳凰堂修理一その後 岡 直己 国立博物 三〇五

仏像修理について 岡 直己 国立博物 三〇五

建築修理について 上原 昭一 シ 三〇六

剥落止について 立田 三朗 シ 三〇六

神護寺草創考 横田 健一 史泉 三〇七

古美術巡礼 斎藤 孝 史迹と美 二五六

大報恩寺とその附 近 斎藤 孝 史迹と美 二五六

正倉院の聖武帝遺品 和田 軍一 南都仏教 二

鑑真和上と奈良朝仏 教 石田 茂作 唐招提寺 二

絵画と工藝 田沢 坦 シ 二

Notes on the Tos-hodaiji monastery 田沢 坦 シ 二

大和円成寺光堂本尊 太田 古林 史迹と美 二五六

と南無仏太子像 堀池 春峰 南都仏教 二

金鐘寺私考 堀池 春峰 南都仏教 二

筑紫観世音寺考 裏辻 憲道 仏教藝術 二五

筑前国観世音寺史一 東大寺末寺となるま 竹内 理三 南都仏教 二

で 竹内 理三 南都仏教 二

グラフ 東洋の羊と西洋の 羊 ミュージ 三〇

城 その歴史と意 伊藤 延男 シ 三〇

匠 解説 中村 秀男 シ 三〇

芽生え 解説 中村 秀男 シ 三〇

渡辺崋山の作品 飯島 勇 ミュージ 四九

かきつばた 解説 高崎富士彦 シ 五二

夏の風俗 中村 秀男 シ 五三

舟の絵 解説 中村 秀男 シ 五三

読書 解説 高崎富士彦 シ 五四

日本の金銅仏 雪 松本 栄一 シ 五五

羊の話・石の話 小林 善雄 シ 五五

鯉と龍 北川 桃雄 財 三

庭・襖・墓 竹里館主人 陶説 三

仿偽と鑑定 川端 康成 国立博物 三

私の好きな美術品 野間 清六 シ 三

宗達「蓮池図」など 井上 靖 シ 三

雪舟の破墨山水図 杉山 司七 シ 三

夢殿のご本尊 好みな仏像 邑木 千以 日本美術 一六二

愛蔵あり 32岡本孝平 33村 邑木 千以 日本美術 一六二

山邦七郎 34中村 邑木 千以 日本美術 一六二

岳陵 35瀬川一 邑木 千以 日本美術 一六二

庵 36松永安左衛 邑木 千以 日本美術 一六二

門 37佐々木茂索 邑木 千以 日本美術 一六二

38尾崎海盛 邑木 千以 日本美術 一六二

美術品のいわゆる科 山崎 一雄 陶説 三

学的研究 山崎 一雄 陶説 三

人工照明の美術品に 登石 健三 古文化財 二〇

及ぼす影響に因する 登石 健三 古文化財 二〇

最近の議論 登石 健三 古文化財 二〇

文化財に対する防虫 森 八郎 シ 二〇

剤・防霉剤の薬害に 森 八郎 シ 二〇

ついて 森 八郎 シ 二〇

文化財に対する燻蒸 森 八郎 シ 二〇

剤の薬害について 森 八郎 シ 二〇

法隆寺壁面の合成樹脂硬化壁面に発生する「かび」の菌学的研究
吉井 宗平 天理大学 二六

美術思潮
嘉門 安雄 国立博物館ニュー 三

美術図書出版熱
岡田 謙 三

古典工芸に学ぶもの
野間 清六 九

古美術品の活用
野間 清六 九

美術時評
深見吉之助 五

博物館の陳列の限界
深見吉之助 五

美術とマス・コミュニケーション
奥平 英雄 六

日本考古学今日の問題
三木 文雄 七

日本美術史学の問題
野間 清六 九

日本美術の新しい見方
九

古美術の普及
九

美術資料の整理について
矢島 恭介 二〇

模写模造の問題
溝口 三郎 二〇

回顧によせて
嘉門 安雄 二〇

一九五五年の回顧
嘉門 安雄 二〇

古美術界
蓮実 重康 ミュージアム 五

東京国立博物館の展観と事業
深見吉之助 三

美術展覧会のあり方
松下・佐和 今泉・熊谷 土方・野間 嘉門・船戸 弘教藝術 三

アメリカで見た日本美術展
中谷宇吉郎 藝術新潮 六ノ八

日本美術史展
R・V・エツ フバートP ロバートP グリフイ ング ミュージアム 五

ホノルル展挿話
菊地 貞夫 三

ホノルル展の報告に代えて
鷹巢 豊治 五

武蔵と沢庵展―宮本武蔵の彫刻その他―
石井 鶴三 藝術新潮 六ノ三

美しき中国―美の風土と背景
三上 次男 淡交 八

中国美術の伝統
熊谷 宣夫 国立近代美術館ニユース 二

趙希鶴の洞天清緑集について
中田勇次郎 京都市立美大研究報告 二

唐代の救苦観音―放光菩薩の起源について―
小林太市郎 研究 六

資料「入唐求法巡礼行記」研究について
小野 勝年 大和文化 二〇

の概報
杉村 勇造 国立博物館ニユース 六

明代美術の回顧―主としてその工藝について―
岡田 清六 国立博物館ニユース 六

避暑山荘（熱河の思ひ出）
杉村 丁 ミュージアム 五

十六羅漢のチベットへの流伝について
羽田野伯猷 文化 一六六

インド美術の伝統
高田 修 国立近代美術館ニユース 三

ヒンドゥー教とその藝術
上野 照夫 弘教藝術 三

印度における密教尊像について
佐和 隆研 美術史 二四

カニシユカ大塔及び舍利容器的再検討―ガンダラ美術の展開における様式的指標として―
高田 修 美術研究 一八

アジャンタ紀行
阿部 展也 みづゑ 六四

ナインシュクとジュナル附近の仏教窟堂群
山本 智教 密教文化 三〇

日本画と社会性
吉沢 忠 萌 春 二四

五趣生死輪回に就いて―絵解の絵画史的考察その一―
梅津 次郎 美術史 一五、一六

変と変文―絵解の絵画史的考察その二―
植田 寿蔵 弘教藝術 二五

壁画論
古田 紹欽 日本美術工藝 二〇五

竺仙梵僊の画論
鈴木 敬 日本文化 五

講座 南画と文人画
中村 秀男 萌 春 一九

春の名作
鈴木 敬 三 彩 六

菊に因む名作
鈴木 敬 三 彩 六

画題解説
三聖吸酸図 虎溪三笑図 三聖図 本

彌生式土器に描かれた原始絵画
小林 行雄 美術史 一五、一六

瑠璃彩色墨画残欠
奈良国立博物館蔵
大和文化 二〇

金沢称名寺金堂壁画について
松下 隆章 弘教藝術 三

石山寺多宝塔の柱絵
佐和 隆研 三

釈迦堂の壁画について
大森 健二 三

大和の障壁画	松村政雄	ミュージ	五	鳥獸戲面断簡解説	田中一松	ミュージ	五	仏鑑無準禪師像解説	橋崎宗重	国	華	七五
叡島神社五重塔壁画	松下隆章	仏教藝術	二五	吉備大臣入唐絵詞解説	松下隆章	美術研究	一〇	東大寺所蔵の普一國師像	松村政雄	大和文化	研究	二
東寺と正系現図曼荼羅の相承	高田修	シ	二四	平治物語絵詞六波羅立博物館蔵	飯島勇	ミュージ	四七	一休和尚の画像	松下隆章	ミュージ	五	五
弥陀聖衆来迎図解説	大串純夫	国	七五	北野天神縁起弘安本	高崎富士彦	国立博物館	九	実隆像の紙形—土佐光信考補遺—	谷信一	美術史	七	七
新智恩院蔵	梅津次郎	シ	七〇	「子とつ子とつ」の古図—法然寺本地蔵験記絵補記—	梅津次郎	ミュージ	五〇	宗祇像	橋崎宗重	国	華	七五
降魔図(釈迦八相の内)解説	飯島勇	ミュージ	五〇	融通念仏縁起余聞	近藤喜博	シ	四	稲葉忠次郎夫人像	望月信成	大和文化	七	七
虚空蔵菩薩像解説	松下隆章	シ	五〇	歌仙絵と歌合絵(時代不同歌合絵に關して)	白畑よし	シ	五	禪画の本質	久松真一	仏教藝術	三	三
普賢菩薩像解説	田中一松	国	七五	歌仙斎宮女御図解説	森暢	シ	七五	明光筆唐天神像	白井信義	日本歴史	八〇	八〇
普賢十羅刹女像解説	藤懸静也	シ	七二	歌仙斎宮女御図解説	鈴木進	ミュージ	四八	愚溪筆竹雀図とその時代	中村秀男	国	華	七二
組田昌平氏蔵	秋山光和	美術研究	二九	白描源氏歌合絵に就いて上、下	森暢	シ	七五	會我蛇足の歿年と真珠庵過去帳	土居次義	茶道雜誌	二九	二九
金胎仏面帖の金剛歌菩薩図	蓮実重康	国立博物館	九	信史に關する二三の問題	鈴木進	ミュージ	四八	一卷識商山芝採図解説	藤懸静也	国	華	七五
教王護国寺所蔵唐櫃とその絵画	大森健二	仏教藝術	三	肖像画余録	森暢	シ	七五	雪裏三友図解説藤井徳義氏蔵	島田修二郎	シ	七五	七五
鳳凰堂の屏絵の落書	望月信成	宗教公論	二五ノ三	画像史上に於ける真言七祖像の影響	松下隆章	三	六九	雪舟筆秋冬山水図解説	熊谷宣夫	ミュージ	五〇	五〇
平等院鳳凰堂屏絵の落書	梅津次郎	国	七〇	雅兒大師像	亀田孜	仏教藝術	二四	雪舟筆秋冬山水図解説	中村秀男	シ	五	五
太子伝と行状絵図の一考察	有馬温泉寺絵縁起に就いて	シ	七〇	法相祖師像としての慈恩大師画像	松下隆章	国	七六	水墨画の富士—仲安真康筆—富士図を中心に—	田中一松	美術史	二四	二四
志度寺絵縁起に就いて	近藤喜博	国	七五	慈恩大師像解説	柳宗悦	大法輪	三ノ四	武人画家の系譜	飯島勇	ミュージ	五〇	五〇
有馬温泉寺絵縁起に就いて	宮次男	美術史	一八	福壽藏	小串侍	真宗研究	一	等伯筆松林図屏風解説	山根有三	国	華	七六
東大寺紺紙金字華嚴經見返絵解説	家永三郎	美術研究	一〇	鏡御影	裏辻憲道	美術史	七	雲谷等の筆秋草に兎	今東光	淡	交	五
平家納経の構成と錯簡についての一試論	むしやこう	国	七五	鏡の御影に就て	中村秀男	国	七四	雲谷等の筆秋草に兎	谷信一	日本文化	六	六
研究資料	じみのる	国	七五	新出の一遍上人像について	近藤喜博	ミュージ	五	大仙院方丈の換絵—元信画を中心として—	竹内尚次	ミュージ	四九	四九
絵巻物文献目録	山岸徳平	シ	三	日蓮聖人像解説	明恵上人樹上坐禅像の意味	シ	三	障壁画の鶴	土居次義	美	七	七
宇津保物語の画詞	隆能源氏絵巻の性格	シ	三	明恵上人樹上坐禅像の意味	近藤喜博	ミュージ	五	西本願寺書院の天井絵	土居次義	美	七	七
隆能源氏絵巻の性格	隆能源氏絵巻の性格	シ	三	明恵上人樹上坐禅像の意味	近藤喜博	ミュージ	五	西本願寺書院の天井絵	土居次義	美	七	七
隆能源氏絵巻の版画	隆能源氏絵巻の版画	シ	三	明恵上人樹上坐禅像の意味	近藤喜博	ミュージ	五	西本願寺書院の天井絵	土居次義	美	七	七

元秀筆京名所扇面解説	中村 秀男	ミュージ	兜	柳里恭筆楼閣山水図解説 今村千象氏蔵	楡崎 宗重	国 華	七五九
桃山屏風の考察柳橋図屏風に就て	藤懸 静也	国 華	七六一	池大雅と二人の友	青柳 瑞穂	日本文化	二
和漢図屏風解説	楡崎 宗重	シ	七五五	池大雅をめぐる	小高根太郎	萌 春	三五
彦根屏風とその類似作品に就て	シ	シ	七六三	池大雅と西洋画	相見 香雨	中央公論	(二〇)
観核舟遊風俗図解説	シ	シ	シ	池大雅筆山水図解説	藤懸 静也	国 華	七五六
遊楽風俗図解説	シ	シ	シ	池大雅筆楼閣山水図解説	鈴木 進	ミュージ	五〇
新出の東福門院入内図について	田能村忠雄	シ	シ	池大雅筆瀟湘八景図解説	楡崎 宗重	国 華	七六三
土佐光起筆源氏物語解説 脇野一郎氏蔵	楡崎 宗重	シ	七五八	玉瀾筆四季山水図解説 細見静氏蔵	吉沢 忠	シ	七六八
冷泉為恭筆年中行事図解説 品川忠蔵氏蔵	シ	シ	七五七	謝蕪村筆山水図解説	鈴木 進	萌 春	七六四
宗達の「松島図屏風」など	松下 隆章	ミュージ	四	浦上玉堂について	鈴木 進	日本美術	二〇三
伝統の再発見 光琳装飾性と思想性—光琳を中心に—	岡本 太郎	美術手帖	九	玉堂琴士私見	山中 蘭徑	工藝	二〇三
蘆舟筆花卉図解説	瀬木 慎一	萌 春	三	玉堂琴士伝拾遺	杉 鮫太郎	シ	一九七
信濃路の旅から—興以の観音龍虎図—	楡崎 宗重	国 華	七六三	玉堂琴士の画	矢田三千男	シ	シ
探幽の藝術	源 次義	茶道雑誌	一九ノ二	玉堂名画鑑賞	鈴木 進	シ	シ
兵庫県下の美術遺蹟と応挙に就て	源 豊宗	人文論究	六ノ一	浦上玉堂筆野橋抱琴図解説 出川茂氏蔵	三宅久之助	シ	シ
駒井源琦筆遊禽雪梅図解説 小笠原千代子氏蔵	長与 善郎	心	八ノ九	浦上玉堂年譜(未定稿)	楡崎 宗重	国 華	七六六
若冲の拓版画	相見 香雨	藝術新潮	六ノ九	渡辺崋山論	鈴木 進	工 藝	一九七
森狙仙筆月夜山谿猿図解説 金田嘉一郎氏蔵	楡崎 宗重	国 華	七五九	崋山の周囲と大塩事件上、下	吉沢 忠	国 華	七六四、七六五
南画帖にみる文人気質—亦復—乗—船窓小戯帖を中心に—	飯島 勇	ミュージ	四	日本南画における崋山の地位	鈴木 進	国立博物館ニュー	九四
柳沢淇園とその画系	植谷 元	大和文化	二四	崋山の人と藝術	飯島 勇	ミュージ	四九
	研究			崋山のレアリズム	柳 亮	ミュージ	四九
				崋山の肖像画	鈴木 進	三 彩	七六
				面人としての崋山先生	松林 桂月	萌 春	三〇

定期刊行物所載文献

広重と日本風景画の展開
展開 シカゴに於ける日本板画展
大津絵
南蛮美術
特輯 南蛮美術(故池長孟氏記念)
南蛮貿易図解説
南蛮と紅毛一民衆画のはじめ
高山寺 鹿の絵馬

十六羅漢図解説 清涼寺蔵
講座、下巻とその作品上、
吳太素雪梅図について
子庭祖柏筆石菖蒲図
趙子昂青綠桃源境図
黄子久秋景山水図
倪雲林山水図
方々壺煙雲山水図
元画羅漢図解説
文徵明一派について
文嘉筆少陵詩意山水図解説
内田基一氏蔵
関思筆平沙落雁図解説
住友寛一氏蔵
陸治の二つの山水図
董其昌筆傲楊昇没骨山水図解説
八大山人
禹之鼎筆周字図卷
大谷ミッシェン将来の女英三蔵画像二図解説
ミイラン第三及び第五古址将来の壁面概説
アジャンタの壁面概説
ラスコーの壁面解説

書の藝術的性格について
書の発生と展開
書の鑑賞一四
中国の書道と日本
欧州展に送られた古典作品
金閣寺所蔵の墨蹟

近藤市太郎 ミュージアム 五
渋井 清 五
中井宗太郎 日本史研究 六
長与 善郎 藝術新潮 六ノ三
日本美術工藝 二六
橋崎 宗重 華 七
小野 忠重 美術手帖 三
近藤 喜博 陶 三

米沢 嘉圃 華 五
鈴木 敬 日本文化 七
松下 隆章 美術史 一
島田修二郎 美術研究 一〇
久志 卓真 陶 三
米沢 嘉圃 華 三
中村 秀男 ミュージアム 五
米沢 嘉圃 華 三
米沢 嘉圃 華 三
中村 秀男 ミュージアム 五

多胡碑に見える「給羊」の新解釈
讚岐発見の瓦経
金石文としての寄進状の一資料
中金金石文に関する二三の発見
奥州雄島の類賢碑
宝蔵寺の嘉祿版大般若経
日本の古典解説
平安朝の文藝と書と古筆の美 八一—一〇
書の女性美上、中、下
聖武天皇宸翰雜集について
正倉院の仮名文書
仮名の発生と興隆
小野道風三体白詩巻に就いて
後嵯峨院本行成白氏詩巻について

中国、其他
天水神通私抄 前編
甌香館画跋一 揮南田
新中国で見た漢代の壁画と石刻
中国における寺塔壁画の起源—南朝を中心として—
北朝の寺塔壁画
新中国の敦煌ブーム
敦煌壁画釈迦説法図断片解説
敦煌出土回鶻仏教画卷断片解説 天理図書館蔵
新出現の宋拓華嚴入法界品善財参問变相経について 下
李公麟論考
古典から現代へ 徽宗
講座 院体山水画

文嘉筆少陵詩意山水図解説
内田基一氏蔵
関思筆平沙落雁図解説
住友寛一氏蔵
陸治の二つの山水図
董其昌筆傲楊昇没骨山水図解説
八大山人
禹之鼎筆周字図卷
大谷ミッシェン将来の女英三蔵画像二図解説
ミイラン第三及び第五古址将来の壁面概説
アジャンタの壁面概説
ラスコーの壁面解説

井島 勉 墨 美 一
神田喜一郎 茶道雜誌 一九ノ六
綾村 坦園 茶道雜誌 二〇
西川 寧 書 品 五
田山 方南 日本文化 六
原田 淑人 考古学雑誌 四〇ノ四
藤井 直正 史迹と美術 二五三
田中 稔 奈良国立文化財研究所学報 三
熊谷幸次郎 日本歴史 八七
近藤 喜博 書 品 五九
田村 吉永 史迹と美術 二五六
堀江 知彦 墨 美 四
綾村 坦園 茶道雜誌 一九ノ三
町 春草 淡 交 三一—八
平岡 定海 南都仏教 二
飯島 春敬 墨 品 五
田中 塊堂 華 品 五九

堂谷 憲勇 華 五
池田 醇一 彩 五
村雲大樓子 彩 五
伊之助 大和文華 二六
勝馬 大和文化 二〇
研究 東方古代 六
研究 藝術新潮 六ノ四
栄一 美術研究 二八
梅津 次郎 華 六〇
相見 香雨 大和文華 一六
岸田 勉 東洋史学 一四
小高根太郎 萌 春 七
鈴木 敬 日本文化 四

米沢 嘉圃 華 五
鈴木 敬 日本文化 七
松下 隆章 美術史 一
島田修二郎 美術研究 一〇
久志 卓真 陶 三
米沢 嘉圃 華 三
中村 秀男 ミュージアム 五
米沢 嘉圃 華 三
中村 秀男 ミュージアム 五

井島 勉 墨 美 一
神田喜一郎 茶道雜誌 一九ノ六
綾村 坦園 茶道雜誌 二〇
西川 寧 書 品 五
田山 方南 日本文化 六
原田 淑人 考古学雑誌 四〇ノ四
藤井 直正 史迹と美術 二五三
田中 稔 奈良国立文化財研究所学報 三
熊谷幸次郎 日本歴史 八七
近藤 喜博 書 品 五九
田村 吉永 史迹と美術 二五六
堀江 知彦 墨 美 四
綾村 坦園 茶道雜誌 一九ノ三
町 春草 淡 交 三一—八
平岡 定海 南都仏教 二
飯島 春敬 墨 品 五
田中 塊堂 華 品 五九

中国、其他
天水神通私抄 前編
甌香館画跋一 揮南田
新中国で見た漢代の壁画と石刻
中国における寺塔壁画の起源—南朝を中心として—
北朝の寺塔壁画
新中国の敦煌ブーム
敦煌壁画釈迦説法図断片解説
敦煌出土回鶻仏教画卷断片解説 天理図書館蔵
新出現の宋拓華嚴入法界品善財参問变相経について 下
李公麟論考
古典から現代へ 徽宗
講座 院体山水画

米沢 嘉圃 華 五
鈴木 敬 日本文化 七
松下 隆章 美術史 一
島田修二郎 美術研究 一〇
久志 卓真 陶 三
米沢 嘉圃 華 三
中村 秀男 ミュージアム 五
米沢 嘉圃 華 三
中村 秀男 ミュージアム 五

井島 勉 墨 美 一
神田喜一郎 茶道雜誌 一九ノ六
綾村 坦園 茶道雜誌 二〇
西川 寧 書 品 五
田山 方南 日本文化 六
原田 淑人 考古学雑誌 四〇ノ四
藤井 直正 史迹と美術 二五三
田中 稔 奈良国立文化財研究所学報 三
熊谷幸次郎 日本歴史 八七
近藤 喜博 書 品 五九
田村 吉永 史迹と美術 二五六
堀江 知彦 墨 美 四
綾村 坦園 茶道雜誌 一九ノ三
町 春草 淡 交 三一—八
平岡 定海 南都仏教 二
飯島 春敬 墨 品 五
田中 塊堂 華 品 五九

中国、其他
天水神通私抄 前編
甌香館画跋一 揮南田
新中国で見た漢代の壁画と石刻
中国における寺塔壁画の起源—南朝を中心として—
北朝の寺塔壁画
新中国の敦煌ブーム
敦煌壁画釈迦説法図断片解説
敦煌出土回鶻仏教画卷断片解説 天理図書館蔵
新出現の宋拓華嚴入法界品善財参問变相経について 下
李公麟論考
古典から現代へ 徽宗
講座 院体山水画

米沢 嘉圃 華 五
鈴木 敬 日本文化 七
松下 隆章 美術史 一
島田修二郎 美術研究 一〇
久志 卓真 陶 三
米沢 嘉圃 華 三
中村 秀男 ミュージアム 五
米沢 嘉圃 華 三
中村 秀男 ミュージアム 五

井島 勉 墨 美 一
神田喜一郎 茶道雜誌 一九ノ六
綾村 坦園 茶道雜誌 二〇
西川 寧 書 品 五
田山 方南 日本文化 六
原田 淑人 考古学雑誌 四〇ノ四
藤井 直正 史迹と美術 二五三
田中 稔 奈良国立文化財研究所学報 三
熊谷幸次郎 日本歴史 八七
近藤 喜博 書 品 五九
田村 吉永 史迹と美術 二五六
堀江 知彦 墨 美 四
綾村 坦園 茶道雜誌 一九ノ三
町 春草 淡 交 三一—八
平岡 定海 南都仏教 二
飯島 春敬 墨 品 五
田中 塊堂 華 品 五九

中国、其他
天水神通私抄 前編
甌香館画跋一 揮南田
新中国で見た漢代の壁画と石刻
中国における寺塔壁画の起源—南朝を中心として—
北朝の寺塔壁画
新中国の敦煌ブーム
敦煌壁画釈迦説法図断片解説
敦煌出土回鶻仏教画卷断片解説 天理図書館蔵
新出現の宋拓華嚴入法界品善財参問变相経について 下
李公麟論考
古典から現代へ 徽宗
講座 院体山水画

米沢 嘉圃 華 五
鈴木 敬 日本文化 七
松下 隆章 美術史 一
島田修二郎 美術研究 一〇
久志 卓真 陶 三
米沢 嘉圃 華 三
中村 秀男 ミュージアム 五
米沢 嘉圃 華 三
中村 秀男 ミュージアム 五

井島 勉 墨 美 一
神田喜一郎 茶道雜誌 一九ノ六
綾村 坦園 茶道雜誌 二〇
西川 寧 書 品 五
田山 方南 日本文化 六
原田 淑人 考古学雑誌 四〇ノ四
藤井 直正 史迹と美術 二五三
田中 稔 奈良国立文化財研究所学報 三
熊谷幸次郎 日本歴史 八七
近藤 喜博 書 品 五九
田村 吉永 史迹と美術 二五六
堀江 知彦 墨 美 四
綾村 坦園 茶道雜誌 一九ノ三
町 春草 淡 交 三一—八
平岡 定海 南都仏教 二
飯島 春敬 墨 品 五
田中 塊堂 華 品 五九

中国、其他
天水神通私抄 前編
甌香館画跋一 揮南田
新中国で見た漢代の壁画と石刻
中国における寺塔壁画の起源—南朝を中心として—
北朝の寺塔壁画
新中国の敦煌ブーム
敦煌壁画釈迦説法図断片解説
敦煌出土回鶻仏教画卷断片解説 天理図書館蔵
新出現の宋拓華嚴入法界品善財参問变相経について 下
李公麟論考
古典から現代へ 徽宗
講座 院体山水画

米沢 嘉圃 華 五
鈴木 敬 日本文化 七
松下 隆章 美術史 一
島田修二郎 美術研究 一〇
久志 卓真 陶 三
米沢 嘉圃 華 三
中村 秀男 ミュージアム 五
米沢 嘉圃 華 三
中村 秀男 ミュージアム 五

井島 勉 墨 美 一
神田喜一郎 茶道雜誌 一九ノ六
綾村 坦園 茶道雜誌 二〇
西川 寧 書 品 五
田山 方南 日本文化 六
原田 淑人 考古学雑誌 四〇ノ四
藤井 直正 史迹と美術 二五三
田中 稔 奈良国立文化財研究所学報 三
熊谷幸次郎 日本歴史 八七
近藤 喜博 書 品 五九
田村 吉永 史迹と美術 二五六
堀江 知彦 墨 美 四
綾村 坦園 茶道雜誌 一九ノ三
町 春草 淡 交 三一—八
平岡 定海 南都仏教 二
飯島 春敬 墨 品 五
田中 塊堂 華 品 五九

中国、其他
天水神通私抄 前編
甌香館画跋一 揮南田
新中国で見た漢代の壁画と石刻
中国における寺塔壁画の起源—南朝を中心として—
北朝の寺塔壁画
新中国の敦煌ブーム
敦煌壁画釈迦説法図断片解説
敦煌出土回鶻仏教画卷断片解説 天理図書館蔵
新出現の宋拓華嚴入法界品善財参問变相経について 下
李公麟論考
古典から現代へ 徽宗
講座 院体山水画

米沢 嘉圃 華 五
鈴木 敬 日本文化 七
松下 隆章 美術史 一
島田修二郎 美術研究 一〇
久志 卓真 陶 三
米沢 嘉圃 華 三
中村 秀男 ミュージアム 五
米沢 嘉圃 華 三
中村 秀男 ミュージアム 五

井島 勉 墨 美 一
神田喜一郎 茶道雜誌 一九ノ六
綾村 坦園 茶道雜誌 二〇
西川 寧 書 品 五
田山 方南 日本文化 六
原田 淑人 考古学雑誌 四〇ノ四
藤井 直正 史迹と美術 二五三
田中 稔 奈良国立文化財研究所学報 三
熊谷幸次郎 日本歴史 八七
近藤 喜博 書 品 五九
田村 吉永 史迹と美術 二五六
堀江 知彦 墨 美 四
綾村 坦園 茶道雜誌 一九ノ三
町 春草 淡 交 三一—八
平岡 定海 南都仏教 二
飯島 春敬 墨 品 五
田中 塊堂 華 品 五九

中国、其他
天水神通私抄 前編
甌香館画跋一 揮南田
新中国で見た漢代の壁画と石刻
中国における寺塔壁画の起源—南朝を中心として—
北朝の寺塔壁画
新中国の敦煌ブーム
敦煌壁画釈迦説法図断片解説
敦煌出土回鶻仏教画卷断片解説 天理図書館蔵
新出現の宋拓華嚴入法界品善財参問变相経について 下
李公麟論考
古典から現代へ 徽宗
講座 院体山水画

米沢 嘉圃 華 五
鈴木 敬 日本文化 七
松下 隆章 美術史 一
島田修二郎 美術研究 一〇
久志 卓真 陶 三
米沢 嘉圃 華 三
中村 秀男 ミュージアム 五
米沢 嘉圃 華 三
中村 秀男 ミュージアム 五

井島 勉 墨 美 一
神田喜一郎 茶道雜誌 一九ノ六
綾村 坦園 茶道雜誌 二〇
西川 寧 書 品 五
田山 方南 日本文化 六
原田 淑人 考古学雑誌 四〇ノ四
藤井 直正 史迹と美術 二五三
田中 稔 奈良国立文化財研究所学報 三
熊谷幸次郎 日本歴史 八七
近藤 喜博 書 品 五九
田村 吉永 史迹と美術 二五六
堀江 知彦 墨 美 四
綾村 坦園 茶道雜誌 一九ノ三
町 春草 淡 交 三一—八
平岡 定海 南都仏教 二
飯島 春敬 墨 品 五
田中 塊堂 華 品 五九

中国、其他
天水神通私抄 前編
甌香館画跋一 揮南田
新中国で見た漢代の壁画と石刻
中国における寺塔壁画の起源—南朝を中心として—
北朝の寺塔壁画
新中国の敦煌ブーム
敦煌壁画釈迦説法図断片解説
敦煌出土回鶻仏教画卷断片解説 天理図書館蔵
新出現の宋拓華嚴入法界品善財参問变相経について 下
李公麟論考
古典から現代へ 徽宗
講座 院体山水画

米沢 嘉圃 華 五
鈴木 敬 日本文化 七
松下 隆章 美術史 一
島田修二郎 美術研究 一〇
久志 卓真 陶 三
米沢 嘉圃 華 三
中村 秀男 ミュージアム 五
米沢 嘉圃 華 三
中村 秀男 ミュージアム 五

井島 勉 墨 美 一
神田喜一郎 茶道雜誌 一九ノ六
綾村 坦園 茶道雜誌 二〇
西川 寧 書 品 五
田山 方南 日本文化 六
原田 淑人 考古学雑誌 四〇ノ四
藤井 直正 史迹と美術 二五三
田中 稔 奈良国立文化財研究所学報 三
熊谷幸次郎 日本歴史 八七
近藤 喜博 書 品 五九
田村 吉永 史迹と美術 二五六
堀江 知彦 墨 美 四
綾村 坦園 茶道雜誌 一九ノ三
町 春草 淡 交 三一—八
平岡 定海 南都仏教 二
飯島 春敬 墨 品 五
田中 塊堂 華 品 五九

書蹟・附篆刻・文房具

書と東洋精神
久松 真一 墨 美 四

井島 勉 墨 美 一
神田喜一郎 茶道雜誌 一九ノ六
綾村 坦園 茶道雜誌 二〇
西川 寧 書 品 五
田山 方南 日本文化 六
原田 淑人 考古学雑誌 四〇ノ四
藤井 直正 史迹と美術 二五三
田中 稔 奈良国立文化財研究所学報 三
熊谷幸次郎 日本歴史 八七
近藤 喜博 書 品 五九
田村 吉永 史迹と美術 二五六
堀江 知彦 墨 美 四
綾村 坦園 茶道雜誌 一九ノ三
町 春草 淡 交 三一—八
平岡 定海 南都仏教 二
飯島 春敬 墨 品 五
田中 塊堂 華 品 五九

「東大寺の天平彫刻」 難考	小林 剛	南都仏教 二	研究資料 鳳凰堂本 尊納入修理関係資料	毛利 久	美術研究 一八三	風神・雷神像(京都 府妙法院蔵)	千沢 植治	ミュージ アム	四
唐招提寺の彫刻	城島 正祥	史迹と美 二五七	胎生寺の阿弥陀如来 坐像	岡 直己	ミュージ アム	吉備津神社の狛犬	小林 剛	大和文化 研究	二〇
肥前歡喜寺の仏像	影山 堯雄	大崎学報 一〇四	資料 了月院の阿弥 陀三尊像	小林 剛	大和文化 研究	楽面の種類	小椋 修	日本工藝 三	七
御本尊造像史―御本 尊形式の変遷につい て―	毛利 久	仏教藝術 二四	黒石寺薬師如来像	久野 健	美術研究 一八三	伎楽面断章	東野 芳明	三彩	七
安祥寺五智如来像考	太田 古朴	史迹と美 二五〇	大造観音菩薩立像	千沢 植治	ミュージ アム	伎楽面解説	千沢 植治	ミュージ アム	五
垂坂観音寺の木彫誕 生釈迦仏	久野 健	国立博物 館ニュー ス	半脚思惟像のこと	西川 新次	五	伎楽面 迦楼羅解説	野間 清六	六ノ六	五
藥師寺の誕生仏	塚本 善隆	美術史 一五、六	金剛弥勒半跏思惟像 法隆寺蔵納四十八 体仏の内解説	榎本 杜人	五	東大寺十六面解説	北川 桃雄	藝術新潮	二
清涼寺釈迦如来像納 入品	小林 剛	大和文化 研究	北陸の弥勒菩薩像	金子 良運	国立博物 館ニュー ス	面 のうごき	毛利 久	日本工藝	二
解脱上人貞變と明恵 上人高弁と興正菩薩 釈尊とつながる釈 迦如来像	手崎 淳	史迹と美 二五三	如意輪観音像解説 岡寺本堂安置	小川 剛	大和文化 研究	面 奈良東山の能 面	小林 剛	大和文化 研究	九
筑後安国寺釈迦如来 像	金子 良運	アム ミュージ 五	日光菩薩像	北川 桃雄	大法輪 研究	能面(晋)の小面の両 眼の構成―顔の左右 廻転に伴う眼の長さ の変化―	村上 鋭夫	日本工藝	三
阿弥陀如来三尊像解 説 東京国立博物館 保管	毛利 久	大和文化 研究	乾漆日光菩薩像	金子 良運	アム ミュージ 四	宋人石匠伊行末の作 品―新発見資料を中 心として―	斎藤清二郎	日本工藝	三
甘露呪とその蓮台― 鳳凰堂阿弥陀如来像 胎内納入―解説	佐和 隆研	仏教藝術 二五	日光菩薩像解説 教王護国寺西院不動 明王像	久野 健	五	播磨国加西郡発見の 白鳳時代の石仏につ いて―古法華三尊仏 と繁昌五尊仏―	川勝政太郎	史迹と美 術	二五七
平等院鳳凰堂本尊胎 内納置阿弥陀大小呪 月輪の調査	福山 敏男	美術研究 一八三	法華堂の旧不動明王 像に就いて	丸尾彰三郎	美術研究 一八三	泉佐野市長滝在石仏 其他について	田岡 香逸	大和文化 研究	二
鳳凰堂本尊胎内納置 の阿弥陀大小呪月輪 文様	秋山 光和	史迹と美 二	大威徳明王像につい て	望月 信成	国 華 七六	路傍の石彫	天岸 正男	史迹と美 術	二五五
鳳凰堂本尊胎内納置 の梵字阿弥陀大小呪 月輪考	高田 修	一八三	資料 大分永興寺の 毘沙門天像	伊藤由美子	大和文化 研究	波田の六地藏、青 面金剛仏、徳雲寺 の観世音	柳 宗悦	大法輪	三ノ七
鳳凰堂本尊胎内納置 の阿弥陀大小呪月輪 台座の楽書	伊東 卓治	一八三	十二神将立像(辰神)	倉田 文作	アム ミュージ 五	西京薬師寺仏足石	保坂 三郎	国 華	七五
			玉依姫女神像(吉野 水分神社蔵)解説	小林 剛	大和文化 研究	朝鮮・中国・其他	保坂 三郎	国 華	七五
			佐賀県下の中世神像 慈覚大師坐像(岩手 黒石寺蔵)	城島 正祥	一四	朝鮮三国時代の金銅 仏	中吉 功	ミュージ アム	五
			法隆寺金堂天蓋天人 像	小林 剛	史迹と美 術	中国の金銅仏	松原 三郎	五	五

中国の石仏
白井 晟一 新建築 三〇ノ一〇

六朝彫刻雜記
安藤 更生 みづゑ 三〇三

北魏金銅仏立像解説
松原 三郎 国華 五六

北魏末年青銅仏坐像
北野 正男 仏教藝術 二四

北魏末東魏の半跏思惟像について
松原 三郎 美術史 二七

東魏・北齊の白玉半跏思惟像について
谷口 鉄雄 美術研究 二八

隋代彫刻文集録上
副島三喜男 哲学年報 二七

成都万仏寺の石仏像
馮 漢 美術史 二〇

齊周の道教像
松原 三郎 仏教藝術 二二

中国彫刻展
山本 豊市 藝術新潮 六ノ二〇

マトゥラー派の仏像
岩崎 直澄 和歌山大学文学部紀要人文学部 五

インド・東南アジアの金銅仏
高田 修 アムニュージ 五

ハッダの仏頭解説
千沢 植治 シ 五

インドの仮面
野間 清六 シ 五

建築・庭園

建築史の教育について
建築史研究 一九

建築文化財
田辺 泰 建築文化 二〇三

古代の建築生産における技術と様式
渡辺 保忠 新建築 三〇ノ三

隋唐建築の日本に及ぼせる響影(長安城と平城京の都市計画について)
飯田須賀斯 文 化 二九ノ一

一九五五年建築界回顧
川上 治郎 建築雑誌 八元

日本

古建築への入門29
近藤 豊 史述と美術 二四九―二五九

講座 建造物 関野 克 日本文化 一一三

1 出雲大社本殿

2 唐招提寺金堂

3 円覚寺舍利殿

中世建築の統計的な見方について
太田博太郎 建築学会研究報告 三ノ二

建築遺跡発掘調査の諸問題
浅野 清 建築史研究 三

The Plastic and the Picturesque in Ancient Japanese Architecture
井上 充夫 横浜国立大学工学部紀要 四

天竺様・唐様の名称について
太田博太郎 建築史研究 三

本堂の起源について
井上 充夫 建築学会研究報告 三ノ二

校割の発達特に六枝掛斗拱の発生について
大森 健二 建築史研究 三

鍾構造の普及と歴史的背景
長谷川清衛 建築学会研究報告 三

支輪の名称と形の起源
村田 治郎 シ 三ノ二

中世末における熱田大工について
城戸 久 シ 三

桃山時代前後のモデル
伊藤要太郎 国際建築 三ノ二

伝統の再評価のために
伊勢神宮について
宮川 寅雄 新建築 三ノ一

伊勢神宮の随想
日本の民家(真理は目の前にある)
リチャード・ハーグ シ 三ノ二

正倉院
林野 全孝 建築史研究 三ノ三

内宮「心の御柱」の性格について
建築学会研究報告 三ノ二

伊勢神宮正殿の創立私考

伊勢神宮式年遷宮一周年周期についての雑感
飯田須賀斯 建築学会研究報告 三ノ二

伊勢神宮雑感
太田博太郎 建築文化 一〇〇

大社造の社殿間取について
朝山 皓 神道学 六、七

延喜式から見た遙宮時代の春日大社
森口奈良吉 大和文化研究 二〇

日光東照宮の装飾文様について
辻合 喜代太郎 建築学会研究報告 三ノ二

日光東照宮の装飾文様について
乙亥造営目録に見える作者について
横山 秀哉 シ

伊達家資料より見た日光廟元祿修營の内容
藤原 義一 人文 四

建築様式の地方伝播の一例―新潟県刈羽郡中通村多々神社本殿中宮の建築様式に就いて―
鏡山 猛 アムニュージ 四

沖の鳥祭祀遺跡の調査
藤島支治郎 大法輪 三ノ二

建築古寺巡り
藤島支治郎 大法輪 三ノ二

伽藍配置の問題―講堂の有無に関して―
田村 吉永 大和文化研究 二〇

四天王寺の地割について
高田 克巳 建築学会研究報告 三ノ二

古寺発掘―四天王寺調査随想―
藤島支治郎 国立博物館ニュース 九

史跡四天王寺伽藍跡発掘調査について
出口 順常 四天王寺 一八五

史跡四天王寺発掘調査について
斎藤 忠 シ

四天王寺金堂跡の発掘調査
福山 敏男 シ

南大門跡の発掘調査
藤島支治郎 シ

四天王寺金堂址発見の遺瓦―昭和三十年度の調査における―
藤沢 一夫 シ

南大門の出土遺物	内藤 政恒	四天王寺	一八五	大安寺の平城京移転年代と丈六釈迦像について	田村 吉永	史迹と美術	二五三	金園の復旧をめぐる一焼失より落慶まで(八座談会)	村田、赤松、後藤、松本、財	日本文化	六
四天王寺及び附近の地形	藤岡謙二郎	〃	〃	大園、村田、福山、浅野、杉山、鈴木、大岡、村田、福山、浅野、大岡、村田、福山、浅野、大岡、村田、福山、浅野	建築学会	〃	書写山円教寺の食堂について	野地 修左	建築学会	三ノ二	
四天王寺発掘の意義	石田 茂作	〃	〃	大岡、村田、福山、浅野、杉山、鈴木、大岡、村田、福山、浅野、大岡、村田、福山、浅野	建築学会	〃	尾道の河内寺	岡本 虎一	史迹と美術	二五三	
所感	関野 克	〃	〃	大岡、村田、福山、浅野、杉山、鈴木、大岡、村田、福山、浅野、大岡、村田、福山、浅野	建築学会	〃	長野県東筑摩郡明科町明科庵寺址について	原 嘉藤	信 濃	七ノ七	
想い出のまま	服部 勝吉	〃	〃	大岡、村田、福山、浅野、杉山、鈴木、大岡、村田、福山、浅野、大岡、村田、福山、浅野	建築学会	〃	初期唐様仏殿の建築計画に就いて	上田 虎介	建築学会	三ノ二	
四天王寺の想出	三宅 敏之	〃	〃	大岡、村田、福山、浅野、杉山、鈴木、大岡、村田、福山、浅野、大岡、村田、福山、浅野	建築学会	〃	曹洞宗伽藍配置の研究一	横山 秀哉	東北大学	三	
発掘の思いで	伊藤 延男	〃	〃	大岡、村田、福山、浅野、杉山、鈴木、大岡、村田、福山、浅野、大岡、村田、福山、浅野	建築学会	〃	禪院における客殿と書院一四世紀初より一七世紀にいたる両者の関係一	川上 貢	建築史研究	二〇	
庶民と四天王寺	上田 宏範	〃	〃	大岡、村田、福山、浅野、杉山、鈴木、大岡、村田、福山、浅野、大岡、村田、福山、浅野	建築学会	〃	安国寺輪蔵の裝飾について	辻合 喜代太郎	建築学会	三ノ二	
発掘白昼夢	堅田 直	〃	〃	大岡、村田、福山、浅野、杉山、鈴木、大岡、村田、福山、浅野、大岡、村田、福山、浅野	建築学会	〃	法華寺発見の木鼻	山本 栄吾	大和文化	二二	
四天王寺境内の発掘	斎藤 忠	〃	〃	大岡、村田、福山、浅野、杉山、鈴木、大岡、村田、福山、浅野、大岡、村田、福山、浅野	建築学会	〃	品川東海寺の伽藍について	横山 秀哉	建築史研究	二九	
四天王寺宝塔史	吉田 秀映	〃	〃	大岡、村田、福山、浅野、杉山、鈴木、大岡、村田、福山、浅野、大岡、村田、福山、浅野	建築学会	〃	媽祖堂からみた長崎唐寺の特性(第二報)	丹羽 漢吉	建築学会	三	
法隆寺昭和修理建造物の概説	忍 冬 会	〃	〃	大岡、村田、福山、浅野、杉山、鈴木、大岡、村田、福山、浅野、大岡、村田、福山、浅野	建築学会	〃	唐寺の特性(第二報)於ける鐘鼓楼への疑問一	加藤 泰	建築学会	三ノ二	
法隆寺昭和修理(座談会)	〃	〃	〃	大岡、村田、福山、浅野、杉山、鈴木、大岡、村田、福山、浅野、大岡、村田、福山、浅野	建築学会	〃	古代尺説による藤原京復原について(第二報付古代尺補説)	加藤 泰	建築学会	三ノ二	
法隆寺昭和修理の建築史学への寄与	村田 治郎	〃	〃	大岡、村田、福山、浅野、杉山、鈴木、大岡、村田、福山、浅野、大岡、村田、福山、浅野	建築学会	〃	平城京	斎藤 忠	国文学賞	三七	
法隆寺五重塔及び金堂の根本修理	本 正夫	〃	〃	大岡、村田、福山、浅野、杉山、鈴木、大岡、村田、福山、浅野、大岡、村田、福山、浅野	建築学会	〃	平城京跡の発掘にあたりて	浅野 清	国立博物館	九	
法隆寺五重塔及び金堂の構造補強	棚橋 道夫	〃	〃	大岡、村田、福山、浅野、杉山、鈴木、大岡、村田、福山、浅野、大岡、村田、福山、浅野	建築学会	〃	天平五年右京計帳の断簡	角田 文衛	史迹と美術	二九	
法隆寺金堂の火災と壁面の処理	浜田 稔	〃	〃	大岡、村田、福山、浅野、杉山、鈴木、大岡、村田、福山、浅野、大岡、村田、福山、浅野	建築学会	〃					
法隆寺の防災施設	桜井 高景	〃	〃	大岡、村田、福山、浅野、杉山、鈴木、大岡、村田、福山、浅野、大岡、村田、福山、浅野	建築学会	〃					
法隆寺収蔵庫及び金堂のドレンチャイ設計	竹島 卓一	〃	〃	大岡、村田、福山、浅野、杉山、鈴木、大岡、村田、福山、浅野、大岡、村田、福山、浅野	建築学会	〃					
法隆寺の防風防虫措置	竹島 卓一	〃	〃	大岡、村田、福山、浅野、杉山、鈴木、大岡、村田、福山、浅野、大岡、村田、福山、浅野	建築学会	〃					
法隆寺金堂の新補柱材の高周波乾燥	山本 孝	〃	〃	大岡、村田、福山、浅野、杉山、鈴木、大岡、村田、福山、浅野、大岡、村田、福山、浅野	建築学会	〃					
法隆寺金堂再建雑記	古西 武彦	〃	〃	大岡、村田、福山、浅野、杉山、鈴木、大岡、村田、福山、浅野、大岡、村田、福山、浅野	建築学会	〃					
法隆寺主要文献目録	〃	〃	〃	大岡、村田、福山、浅野、杉山、鈴木、大岡、村田、福山、浅野、大岡、村田、福山、浅野	建築学会	〃					
法隆寺政所并法頭略記(公刊)	福山 敏男	〃	〃	大岡、村田、福山、浅野、杉山、鈴木、大岡、村田、福山、浅野、大岡、村田、福山、浅野	建築学会	〃					

右京計帳断簡の考証
を讀んで
長岡古京
平安京
平安京の京程に關する疑問
平安京京程私家
純平安京の京程に關する疑問
平安京の街路及び地点指示法について
上、下
平安・鎌倉時代に於ける里内裡建築の研究
寛政内裏について(京都御所の研究12)
京都御所の紫宸殿の屋根について
京都御所の飛香舎代配の棟梁について
寛政度の仙洞御所について(仙洞御所・女院御所の研究その6)
仙洞御所について(仙洞御所・女院御所の研究その8)
江戶時代仙洞御所に於ける配置の性格(仙洞御所・女院御所の研究その7)
平安時代における貴族邸の概観
桂離宮印象記一人
桂離宮 伝統をふりかえる

修学院離宮造営に利用された建物と地形について(修学院離宮の研究(補遺))
寝殿造と室内調度
類聚雜要抄の作者について
満佐須計裝束抄の年代と筆者について
近衛第跡に就いて
文化財としての民家とその保存
民家の保存と都市計画の問題
日本上古時代の住居に關する二、三の所見
奈良朝の集落遺跡について
奈良における借屋の生成過程
日本火災全史の一環としての鎌倉回録史の研究
中世奈良に於ける屋敷価格表
近世初頭における書院の性格(上國武家住宅の場合)
三宝院表書院
本願寺と書院建築
西本願寺対面所私考
島原の角屋
長浜町の沿革(その成立と構成)
元祿期長浜町に於ける居住者集團の構成

例幣使街道の本陣の考察 境町宿本陣について
例幣使街道本陣の考察 大崎宿太田宿について
例幣使街道芝宿を中心として
民家研究の成果と課題II
民家の平面に就いて(その一)和歌山県伊都郡天野村民家
農家の変遷について
農家の住宅平面形式の発展
農家の土間形式の變化
信濃川流域農村住居とその水防施設
豊川流域における釜屋建民家について
飛驒と北陸の民家
六甲山北麓の民家について
岡山県北部農家の建築規模についての歴史的考察
広島県比婆郡北部の民家
吉井川流域のやな小屋について
すまいとして見た西芳寺湘南亭
茶室松花堂の意義
床の話 一五
茶室に於ける床の成立に關する一考察

史跡と美術
日本美術工藝
国文学解

奈良国立文化財研究所學報
国文学解
積と鑑賞

松崎力雄 建築学会
豊島 建築報告
太田 静六 建築史研究
伊藤・稲垣 建築史研究
大久保昌一 建築学会
横崎 正也 建築報告
渋谷 泰彦 建築報告
厨田 信 建築報告
城戸 久 建築報告
鈴木 楯 建築報告
清水 一 新建築
野地 修左 建築学会
松原 英男 建築報告
多淵 敏樹 建築報告
佐藤 重夫 建築報告
渋谷 泰彦 建築報告
中村 昌生 茶道雜誌
茶室松花堂の意義
床の話 一五
茶室に於ける床の成立に關する一考察

史跡と美術
日本美術工藝
国文学解

奈良国立文化財研究所學報
国文学解
積と鑑賞

松崎力雄 建築学会
豊島 建築報告
太田 静六 建築史研究
伊藤・稲垣 建築史研究
大久保昌一 建築学会
横崎 正也 建築報告
渋谷 泰彦 建築報告
厨田 信 建築報告
城戸 久 建築報告
鈴木 楯 建築報告
清水 一 新建築
野地 修左 建築学会
松原 英男 建築報告
多淵 敏樹 建築報告
佐藤 重夫 建築報告
渋谷 泰彦 建築報告
中村 昌生 茶道雜誌
茶室松花堂の意義
床の話 一五
茶室に於ける床の成立に關する一考察

史跡と美術
日本美術工藝
国文学解

奈良国立文化財研究所學報
国文学解
積と鑑賞

松崎力雄 建築学会
豊島 建築報告
太田 静六 建築史研究
伊藤・稲垣 建築史研究
大久保昌一 建築学会
横崎 正也 建築報告
渋谷 泰彦 建築報告
厨田 信 建築報告
城戸 久 建築報告
鈴木 楯 建築報告
清水 一 新建築
野地 修左 建築学会
松原 英男 建築報告
多淵 敏樹 建築報告
佐藤 重夫 建築報告
渋谷 泰彦 建築報告
中村 昌生 茶道雜誌
茶室松花堂の意義
床の話 一五
茶室に於ける床の成立に關する一考察

史跡と美術
日本美術工藝
国文学解

奈良国立文化財研究所學報
国文学解
積と鑑賞

松崎力雄 建築学会
豊島 建築報告
太田 静六 建築史研究
伊藤・稲垣 建築史研究
大久保昌一 建築学会
横崎 正也 建築報告
渋谷 泰彦 建築報告
厨田 信 建築報告
城戸 久 建築報告
鈴木 楯 建築報告
清水 一 新建築
野地 修左 建築学会
松原 英男 建築報告
多淵 敏樹 建築報告
佐藤 重夫 建築報告
渋谷 泰彦 建築報告
中村 昌生 茶道雜誌
茶室松花堂の意義
床の話 一五
茶室に於ける床の成立に關する一考察

史跡と美術
日本美術工藝
国文学解

奈良国立文化財研究所學報
国文学解
積と鑑賞

松崎力雄 建築学会
豊島 建築報告
太田 静六 建築史研究
伊藤・稲垣 建築史研究
大久保昌一 建築学会
横崎 正也 建築報告
渋谷 泰彦 建築報告
厨田 信 建築報告
城戸 久 建築報告
鈴木 楯 建築報告
清水 一 新建築
野地 修左 建築学会
松原 英男 建築報告
多淵 敏樹 建築報告
佐藤 重夫 建築報告
渋谷 泰彦 建築報告
中村 昌生 茶道雜誌
茶室松花堂の意義
床の話 一五
茶室に於ける床の成立に關する一考察

史跡と美術
日本美術工藝
国文学解

奈良国立文化財研究所學報
国文学解
積と鑑賞

松崎力雄 建築学会
豊島 建築報告
太田 静六 建築史研究
伊藤・稲垣 建築史研究
大久保昌一 建築学会
横崎 正也 建築報告
渋谷 泰彦 建築報告
厨田 信 建築報告
城戸 久 建築報告
鈴木 楯 建築報告
清水 一 新建築
野地 修左 建築学会
松原 英男 建築報告
多淵 敏樹 建築報告
佐藤 重夫 建築報告
渋谷 泰彦 建築報告
中村 昌生 茶道雜誌
茶室松花堂の意義
床の話 一五
茶室に於ける床の成立に關する一考察

史跡と美術
日本美術工藝
国文学解

奈良国立文化財研究所學報
国文学解
積と鑑賞

松崎力雄 建築学会
豊島 建築報告
太田 静六 建築史研究
伊藤・稲垣 建築史研究
大久保昌一 建築学会
横崎 正也 建築報告
渋谷 泰彦 建築報告
厨田 信 建築報告
城戸 久 建築報告
鈴木 楯 建築報告
清水 一 新建築
野地 修左 建築学会
松原 英男 建築報告
多淵 敏樹 建築報告
佐藤 重夫 建築報告
渋谷 泰彦 建築報告
中村 昌生 茶道雜誌
茶室松花堂の意義
床の話 一五
茶室に於ける床の成立に關する一考察

史跡と美術
日本美術工藝
国文学解

奈良国立文化財研究所學報
国文学解
積と鑑賞

松崎力雄 建築学会
豊島 建築報告
太田 静六 建築史研究
伊藤・稲垣 建築史研究
大久保昌一 建築学会
横崎 正也 建築報告
渋谷 泰彦 建築報告
厨田 信 建築報告
城戸 久 建築報告
鈴木 楯 建築報告
清水 一 新建築
野地 修左 建築学会
松原 英男 建築報告
多淵 敏樹 建築報告
佐藤 重夫 建築報告
渋谷 泰彦 建築報告
中村 昌生 茶道雜誌
茶室松花堂の意義
床の話 一五
茶室に於ける床の成立に關する一考察

史跡と美術
日本美術工藝
国文学解

奈良国立文化財研究所學報
国文学解
積と鑑賞

松崎力雄 建築学会
豊島 建築報告
太田 静六 建築史研究
伊藤・稲垣 建築史研究
大久保昌一 建築学会
横崎 正也 建築報告
渋谷 泰彦 建築報告
厨田 信 建築報告
城戸 久 建築報告
鈴木 楯 建築報告
清水 一 新建築
野地 修左 建築学会
松原 英男 建築報告
多淵 敏樹 建築報告
佐藤 重夫 建築報告
渋谷 泰彦 建築報告
中村 昌生 茶道雜誌
茶室松花堂の意義
床の話 一五
茶室に於ける床の成立に關する一考察

史跡と美術
日本美術工藝
国文学解

奈良国立文化財研究所學報
国文学解
積と鑑賞

松崎力雄 建築学会
豊島 建築報告
太田 静六 建築史研究
伊藤・稲垣 建築史研究
大久保昌一 建築学会
横崎 正也 建築報告
渋谷 泰彦 建築報告
厨田 信 建築報告
城戸 久 建築報告
鈴木 楯 建築報告
清水 一 新建築
野地 修左 建築学会
松原 英男 建築報告
多淵 敏樹 建築報告
佐藤 重夫 建築報告
渋谷 泰彦 建築報告
中村 昌生 茶道雜誌
茶室松花堂の意義
床の話 一五
茶室に於ける床の成立に關する一考察

史跡と美術
日本美術工藝
国文学解

奈良国立文化財研究所學報
国文学解
積と鑑賞

松崎力雄 建築学会
豊島 建築報告
太田 静六 建築史研究
伊藤・稲垣 建築史研究
大久保昌一 建築学会
横崎 正也 建築報告
渋谷 泰彦 建築報告
厨田 信 建築報告
城戸 久 建築報告
鈴木 楯 建築報告
清水 一 新建築
野地 修左 建築学会
松原 英男 建築報告
多淵 敏樹 建築報告
佐藤 重夫 建築報告
渋谷 泰彦 建築報告
中村 昌生 茶道雜誌
茶室松花堂の意義
床の話 一五
茶室に於ける床の成立に關する一考察

史跡と美術
日本美術工藝
国文学解

奈良国立文化財研究所學報
国文学解
積と鑑賞

松崎力雄 建築学会
豊島 建築報告
太田 静六 建築史研究
伊藤・稲垣 建築史研究
大久保昌一 建築学会
横崎 正也 建築報告
渋谷 泰彦 建築報告
厨田 信 建築報告
城戸 久 建築報告
鈴木 楯 建築報告
清水 一 新建築
野地 修左 建築学会
松原 英男 建築報告
多淵 敏樹 建築報告
佐藤 重夫 建築報告
渋谷 泰彦 建築報告
中村 昌生 茶道雜誌
茶室松花堂の意義
床の話 一五
茶室に於ける床の成立に關する一考察

史跡と美術
日本美術工藝
国文学解

奈良国立文化財研究所學報
国文学解
積と鑑賞

松崎力雄 建築学会
豊島 建築報告
太田 静六 建築史研究
伊藤・稲垣 建築史研究
大久保昌一 建築学会
横崎 正也 建築報告
渋谷 泰彦 建築報告
厨田 信 建築報告
城戸 久 建築報告
鈴木 楯 建築報告
清水 一 新建築
野地 修左 建築学会
松原 英男 建築報告
多淵 敏樹 建築報告
佐藤 重夫 建築報告
渋谷 泰彦 建築報告
中村 昌生 茶道雜誌
茶室松花堂の意義
床の話 一五
茶室に於ける床の成立に關する一考察

史跡と美術
日本美術工藝
国文学解

奈良国立文化財研究所學報
国文学解
積と鑑賞

松崎力雄 建築学会
豊島 建築報告
太田 静六 建築史研究
伊藤・稲垣 建築史研究
大久保昌一 建築学会
横崎 正也 建築報告
渋谷 泰彦 建築報告
厨田 信 建築報告
城戸 久 建築報告
鈴木 楯 建築報告
清水 一 新建築
野地 修左 建築学会
松原 英男 建築報告
多淵 敏樹 建築報告
佐藤 重夫 建築報告
渋谷 泰彦 建築報告
中村 昌生 茶道雜誌
茶室松花堂の意義
床の話 一五
茶室に於ける床の成立に關する一考察

史跡と美術
日本美術工藝
国文学解

奈良国立文化財研究所學報
国文学解
積と鑑賞

松崎力雄 建築学会
豊島 建築報告
太田 静六 建築史研究
伊藤・稲垣 建築史研究
大久保昌一 建築学会
横崎 正也 建築報告
渋谷 泰彦 建築報告
厨田 信 建築報告
城戸 久 建築報告
鈴木 楯 建築報告
清水 一 新建築
野地 修左 建築学会
松原 英男 建築報告
多淵 敏樹 建築報告
佐藤 重夫 建築報告
渋谷 泰彦 建築報告
中村 昌生 茶道雜誌
茶室松花堂の意義
床の話 一五
茶室に於ける床の成立に關する一考察

史跡と美術
日本美術工藝
国文学解

奈良国立文化財研究所學報
国文学解
積と鑑賞

松崎力雄 建築学会
豊島 建築報告
太田 静六 建築史研究
伊藤・稲垣 建築史研究
大久保昌一 建築学会
横崎 正也 建築報告
渋谷 泰彦 建築報告
厨田 信 建築報告
城戸 久 建築報告
鈴木 楯 建築報告
清水 一 新建築
野地 修左 建築学会
松原 英男 建築報告
多淵 敏樹 建築報告
佐藤 重夫 建築報告
渋谷 泰彦 建築報告
中村 昌生 茶道雜誌
茶室松花堂の意義
床の話 一五
茶室に於ける床の成立に關する一考察

史跡と美術
日本美術工藝
国文学解

奈良国立文化財研究所學報
国文学解
積と鑑賞

松崎力雄 建築学会
豊島 建築報告
太田 静六 建築史研究
伊藤・稲垣 建築史研究
大久保昌一 建築学会
横崎 正也 建築報告
渋谷 泰彦 建築報告
厨田 信 建築報告
城戸 久 建築報告
鈴木 楯 建築報告
清水 一 新建築
野地 修左 建築学会
松原 英男 建築報告
多淵 敏樹 建築報告
佐藤 重夫 建築報告
渋谷 泰彦 建築報告
中村 昌生 茶道雜誌
茶室松花堂の意義
床の話 一五
茶室に於ける床の成立に關する一考察

史跡と美術
日本美術工藝
国文学解

奈良国立文化財研究所學報
国文学解
積と鑑賞

松崎力雄 建築学会
豊島 建築報告
太田 静六 建築史研究
伊藤・稲垣 建築史研究
大久保昌一 建築学会
横崎 正也 建築報告
渋谷 泰彦 建築報告
厨田 信 建築報告
城戸 久 建築報告
鈴木 楯 建築報告
清水 一 新建築
野地 修左 建築学会
松原 英男 建築報告
多淵 敏樹 建築報告
佐藤 重夫 建築報告
渋谷 泰彦 建築報告
中村 昌生 茶道雜誌
茶室松花堂の意義
床の話 一五
茶室に於ける床の成立に關する一考察

史跡と美術
日本美術工藝
国文学解

奈良国立文化財研究所學報
国文学解
積と鑑賞

松崎力雄 建築学会
豊島 建築報告
太田 静六 建築史研究
伊藤・稲垣 建築史研究
大久保昌一 建築学会
横崎 正也 建築報告
渋谷 泰彦 建築報告
厨田 信 建築報告
城戸 久 建築報告
鈴木 楯 建築報告
清水 一 新建築
野地 修左 建築学会
松原 英男 建築報告
多淵 敏樹 建築報告
佐藤 重夫 建築報告
渋谷 泰彦 建築報告
中村 昌生 茶道雜誌
茶室松花堂の意義
床の話 一五
茶室に於ける床の成立に關する一考察

史跡と美術
日本美術工藝
国文学解

奈良国立文化財研究所學報
国文学解
積と鑑賞

松崎力雄 建築学会
豊島 建築報告
太田 静六 建築史研究
伊藤・稲垣 建築史研究
大久保昌一 建築学会
横崎 正也 建築報告
渋谷 泰彦 建築報告
厨田 信 建築報告
城戸 久 建築報告
鈴木 楯 建築報告
清水 一 新建築
野地 修左 建築学会
松原 英男 建築報告
多淵 敏樹 建築報告
佐藤 重夫 建築報告
渋谷 泰彦 建築報告
中村 昌生 茶道雜誌
茶室松花堂の意義
床の話 一五
茶室に於ける床の成立に關する一考察

金森宗和の建築業績 に対する反省	中村 昌生	建築学会 研究報告	三〇	南西諸島の住文化	野村 孝文	建築学会 研究報告	三〇	足利義教の造園と北 野社	竹内 秀雄	日本歴史	六
城の歴史一―二	黒板 昌夫	日本文化	七―八	近世の三条大橋	島田 武彦	研究報告	三〇ノ二	江州坂本來迎寺の庭	西村 貞	茶道雑誌	一九ノ二
丹波神尾山古城	竹岡 林	史迹と美 術	二四九	軒平瓦考―武蔵国分 寺出土の古瓦につい て上、下	石村 喜英	考古学雜 誌	四〇ノ 四、四 一ノ一	後水尾天皇の庭園建 築の遺構	藤岡 通夫	建築史研 究	二九
伏見城本丸御舎御対 面所(問題推定の資 料)	川上 貢	建築学会 研究報告	三〇	飾紋に「西寺」の文字 を記する端丸瓦―河 内船橋廃寺跡発見の 遺例―	藤井 直正	史迹と美 術	三五六	朝鮮世祖の仏寺造営 について	杉山 信三	建築学会 研究報告	三〇ノ二
伏見城本丸御対面所 の圍取について	〃	〃	〃	大和樺本町出土の垂 木瓦	梅原 末治	〃	三五〇	朝鮮文宗、端宗代に おける仏寺及び宮殿 の造営	〃	〃	三〇ノ二
元和年間の伏見城本 丸殿舎について	〃	〃	三〇ノ二	古瓦瑣事二則	鈴木 吉治	宗教公論	三五八	寶泉塔(中国に現わ れた阿育王塔婆)	村田 治郎	〃	三〇
二条城	〃	建築文化	一〇一	法隆寺金堂造瓦後記	川勝政太郎	史迹と美 術	三五三― 三五五	北京皇城に見られる 方九里九經九緯型都 城の古代尺地割によ る復原について	加藤 泰	〃	三〇ノ二
寛永建立の大坂城殿 館について	山田 幸一	建築学会 研究報告	三〇ノ二	摂津畑山神社多宝塔	中西 亨	〃	三五二	天壇について	白井 晟一	新建築	三〇ノ九
近世初期大名居館の 御対面所について	川上 貢	〃	三〇	常陸雨引祥光寺石造 宝塔	高井悌三郎	〃	三五	六朝の庭園	村上 嘉実	古代学	四〇ノ一
城下町と住居(その 一)身分制からみた 城下町の構成と武家 屋敷の規模)	西川 幸治	〃	三〇ノ二	立山地獄谷の宝篋印 塔	藤原 良志	〃	三五六	唐都長安の王室庭園	〃	人文論究	五ノ六
仙台藩に於ける武士 と農民の住居の圍取 について 登米郡登 米村における武士の 居住形式	佐藤 巧 佐々木信夫	〃	三〇ノ二	石燈籠通説16―21	川勝政太郎	茶道雜誌	一九ノ 一―二	唐代貴族の庭園	〃	〃	〃
江戸末期の三本木町 都市計画	小倉 強	〃	〃	常陸小田長久寺の石 燈籠	高井悌三郎	史迹と美 術	三五七	南シベリヤにおける 漢代の建築跡	護 雅夫	北方文化 研究報告	二〇
「丹生神社神職住居 と里坊」和歌山県伊 都郡天野村民家	大久保昌一 橋崎 正也	〃	三〇	常陸新治郡古來阿弥 陀三尊像板碑	吉永 義信	日本文化	四、五、七	オングウト族の都城 址「オロン・スム」	江上 波夫	ユース 研究会研 究報告	二
志方神社能舞台	藤原 義一	〃	三〇ノ二	講座 庭の形と心一 ―三	重森 三冷	藝術新潮	六ノ二〇	重要無形文化財(工 藝)について(座談 会)	柳 宗悦	藝術新潮	六ノ八
農村舞台考三一―六	松崎 茂 豊島 力雄	〃	三〇ノ 二―三 四	シニョルレアリスム と日本庭園	岡本 太郎	〃	〃	横川経塚遺宝拾遺 上・下	景山 春樹	史迹と美 術	三五七 三五八
博物館の校倉	石田 茂作	ミュージ アム	三	日本のオヴジエーア ヴァンギャルドの見 た日本の庭	佐々木利三	史迹と美 術	三五四	経塚並に酒器につい ての一考察	小野 正人	史学	二六ノ二
奄美大島の高倉	野村 孝文	建築学会 研究報告	三〇ノ二	積翠園の保護につい て―平安朝庭園の遺 構として―	吉永 義信	日本文化	六				

工 藝

総 記

おめでたい吉兆文様の考察 細見古香庵 日本美術 一九六

アイヌ工藝 八橋 一郎 ミニエジ アム 五五

アイヌの彫刻文様 松野 庸子 国立博物館 ニュー 九

陶磁工

講座 古陶磁一—三 小山富士夫 日本文化 一—三

雪とやきもの随想 田中 朔生 ミニエジ アム 五五

茶陶拝見記—藤田美術館展観— 満岡 忠成 茶道雑誌 一九ノ六

ちやわん抄 加藤義一郎 日本美術 一九六一—一九七

72 仁清色絵紅梅、73 了入黒筒 梅の絵、74 菊花天目 (中興名物、75 越中瀬戸 之奈謝可流、76 古刷毛目 銘緑葉、77 瀬戸出土天目、78 青井戸 山の井、79 山 ちやわん、80 柿のへた「大津」、81 絵唐津筒、82 高 取 遠州切形、83 九朗の志野

茶盃に關する十二章 佐々木三味 茶道雑誌 一九ノ二

筒花入 満岡 忠成 日本美術 一九ノ五

日本

日本の陶磁 田辺 撫松 藝林 三ノ四

日本古陶談片一—推 秦 秀雄 陶説 三

古の古陶— 奈良・藤原の古陶 シ 三

日本の壺 青柳 瑞穂 日本文化 七

常陸附近の壺—私の蒐集ノート— 藤倉 孝吉 日本美術 二〇二

美濃国発見の特殊大形須恵器について 岡山県寒風窯址出土の二三の遺物について 内藤 政恒 国学院雑誌 五ノ二

窯のある町 古き瀬戸 加藤唐九郎 淡交 七

古き瀬戸 新しき瀬戸 山内 寿夫 シ

古き美濃焼 新しき美濃焼 荒川 豊蔵 シ

古き備前—伊部焼 新しき備前—伊部焼 加納 陽治 シ

古き伊賀焼 新しき伊賀焼 金重 陶陽 シ

古き信楽焼 新しき信楽焼 北小路 寛 シ

益子窯 益子近々況 菊山当年男 シ

清水焼の伝統 新しき清水焼 藤山太郎吉 シ

九谷の伝統 今日九谷 上田 直方 シ

今日の唐津 唐津の伝統 平野 敏三 シ

有田の伝統 今日有田焼 佐久間藤太郎 シ

萩の伝統 新しき有田焼 棟方 志功 シ

現在の萩焼 萩の伝統 浅井五郎助 シ

立杭窯の伝統 立杭の日々 山田 龍平 シ

白い焼物の話 立杭の日々 北出塔次郎 シ

日本の白い焼物 古代末・中世初における瀬戸地方の作窯技術とその発達—瀬戸古窯の調査報告— 内藤 匡 日本美術 一九六

消えゆく古窯群—尾張・三河の窯址と愛知用水— 三上 次男 古代研究 二

愛知県猿投山西南麓の古窯址群 田中作太郎 ミニエジ アム 五五

灰釉蓮唐草文壺解説 織部割高台 岡田 宗毅 陶説 三

「伊勢天目」古窯跡発見記 粟田口焼新攷一—三 穂山 泰次 シ

仁清色絵紅梅香炉 乾山余瀛 中川 千咲 美術研究 一八〇

乾山の「佐野行」—「佐野乾山」の正体と乾山の江戸下り年代 梅沢 曙軒 茶道雑誌 一九ノ六

乾山の風懐—俳句と乾山について— 乾山を買うの記 満岡 忠成 日本美術 一九七

乾山の田楽箱 乾山の作品と陶器密法上、下 鈴木 半茶 陶説 二〇三

猪八乾山の作品と陶器密法上、下 江戶系統二代乾山次郎兵衛 相見 香雨 日本美術 二〇三

木米作 金欄手百仙人輪花鉢解説 新攷 仁阿弥道入 青柳 瑞穂 藝術新潮 六ノ三

新攷 仁阿弥道入 保田 憲司 茶道雑誌 一九ノ三

樂初二代は四人の作 磯野風船子 陶説 三

土佐国出土の細形銅劍新資料	岡本 健児	上代文化	二五
法隆寺の七星劍について	辻本 直男	美術史	二五、二六
正倉院御物金工品の調査報告	内藤 春治	書陵部紀要	五
正倉院御物「鏡」の製作技術の研究	鈴木 信一		三
正倉院御物金工品の技術的研究—白銅鏡の製作工程に就いて	山脇 洋二		三
正倉院御物研究報告	後藤 年彦		三
正倉院御物金工品の彫金的調査	三井安穂夫		三
正倉院御物の技術的調査報告—主として鍍金(鏡起・打出)について	細見古香庵	日本美術工藝	三〇〇
鏡から変遷した御正体と懸仏	木内 武男	アム	四六
金銅威奈大村骨蔵器解説	近藤 喜博	大和文華	七〇
春日舍利塔	蔵田 蔵	アム	四七
金銅能作生塔(奈良長福寺蔵)	板橋 倫行	日本歴史	九
法華説相銅版と長谷寺靈驗記	土井 実	大和文化	二、三
長谷寺法華説相銅版と大和逸事	坪井 良平		三
眼外に残る大和の古鐘	小林 剛		三
東大寺の無名鐘	坪井 良平		三
高野山延寿院銅鐘(和歌山 泉福寺蔵)	史迹と美術		三〇
梵字のある鐘銘の資料	坪井 良平		三〇
古鐘逸響年表稿	大和文化		二、三

雲版銘文集—長谷寺秀長公寄進の灯籠に就て	久保 常晴	銅鐸	二
梅竹透釣灯籠解説	大橋 宗舟	史迹と美術	二五
隅田八幡神社蔵画像鏡銘考	立田 三朗	アム	五〇
平泉千手院の鉄樹	藪田嘉一郎	史迹と美術	二五
「平泉千手院の鉄樹」補録	福山 敏男	アム	四六
おめでたい古い茶の湯釜	古 香 庵	日本美術工藝	一六
名釜眼福の記	細見古香庵	アム	三〇三
芦屋釜と天明釜	蔵田 蔵	アム	四七
芦屋釜私考上、下	保坂 三郎	国 華	七四、七五
名物「春日山」釜について	細見古香庵	日本美術工藝	一九
「貨幣の歴史」を読みつて(附歴代後藤の墨書と花押)	桑原羊次郎	アム	一六
短刀銘来国光、名物有楽来国光、石川県辻博治氏蔵	佐藤 貫一	アム	四七
中世の大太刀について	辻本 直男	日本歴史	八
につかり青江の史的考察	須見 裕	刀剣美術	三三
長曾禰虎徹研究の問題	佐藤 貫一	アム	三三
長曾禰虎徹の研究	国立博物館	刀剣美術	三三
虎徹のはなしいろいろ	加島 勲	刀剣美術	三四
一竿子忠綱に就いて	木元 武夫	アム	三三
鬼塚吉国に関する中間報告			

打刀考—春日大社蔵の製作打刀を中心として	辻本 直男	刀剣美術	三
加賀後藤の才次郎と右兵衛吉次	佐藤 貫一	アム	三三
鉄鐸の意匠と寓意(甲冑師及尾張透など)	服部 栄一	刀剣美術	三
「信家」の鐸に寄せて往昔抄と古今銘尽の關係について	辻本 直男		三
近世における刀剣書の研究二、三	村上 孝介		三、三四
書籍目録の剣書	村上 孝介		三五
魚妙と辨疑と其の異動	辻本 直男		三五
尾州赤池と正宗の話	岸本貫之助		三五
備前国刀匠熊野願文について	村上 孝介		三五
地誌に見る長船	藤田 亮策	大和文化	二、三
在日本新羅鐘の銘文—青丘遺文二—	梅原 末治	朝鮮学報	七
朝鮮鐘雜記	李 弘道		七
貞元廿年在銘新羅梵鐘	増田 精一	考古学雑誌	四〇一
鳥形鉸具雜考	梅原 末治		三
戦国時代の画像文銅卮			
中国出土の漢六朝の細金細工品に就いて		大和文華	二六
椴林府出土と伝へる一群の漢彩銅器			二七
漢三朝六朝紀年鏡綜目		考古学雑誌	四〇四
鼈鏡解説	矢島 恭介	アム	五〇
竜首水瓶解説	蔵田 蔵		三
鍍金七宝の仏像台座片(古銅過眼録其二)	梅原 末治	史迹と美術	二六

青森県女館貝塚発掘調査報告
私のノートから―
福田貝塚の注口土器

信濃南佐久郡海瀬村上ノ原出土の弥生式土器に就いて
長野西高等学校所蔵弥生式土器の首部殘欠

平出遺跡及びその周辺の考古学的調査
南信州谷遺跡出土の遺物について
長野県上伊那郡箕輪遺跡について

千葉県西之域貝塚の研究―
関東縄文式早期文化

静岡県における弥生式遺跡
長浜平野に於ける弥生式文化の展開―銅鑛出土の長浜市大辰巳遺跡を中心として

原 嘉藤 信 濃 七ノ六
藤沢 宗平 上代文化 三五
信 濃 七ノ二

千葉県城ノ台貝塚
貝塚出土の魚骨にみられた傷痕に就いて

丹後熊野郡に於ける弥生式土器底面の布目について(布目瓦の研究四)

長野県松本市笹賀地区神戸、塚原遺跡調査概報
長野県駒ヶ根市中央地区高見原遺跡調査概報

千葉県堀之内貝塚発見の硬玉製大珠

北海道音江の環状列石

長野県上高井郡小布施町中桑堀回古墳時代住居址調査報告
長野県南佐久郡穂積村崎田原遺跡調査概報

千曲川沿岸地方における晩期縄文式土器に就いて

北海道大曲洞窟出土の遺物について

亀型土製品の事例
龜之庄遺跡調査中間概要
奈良高校校庭発見の角井戸調査概報

縄文遺跡における埋葬施設の一例

北海道北見国相内村豊田遺跡略報

奈良高校校庭発見のI号丸井戸調査概報
瀬戸内海前島を中心とした遺跡

奈良文土器文化の展開

岩手県西磐井郡谷起高遺跡出土土器について

東日本弥生式文化に於ける墓製について
前方後円墳の起源

南九州出土の条痕土器―吉田村及び知覧町遺跡―

若松市第四中学校遺跡の遺物

前期後半の古墳に視はれる一様相―粘土柳成立に關する試論として―

弥生式文化研究上の諸問題

群馬県原市町築瀬瀬戸址調査報告

下津谷達男 国学院雑 誌 五ノ二

茨城県足洗発見の幼児葬に使用されていた弥生式土器について

東京都江古田泥炭遺跡発見土器の考察

岩手太田村蝦夷森古墳調査報告―附県内古墳出土品に就いての考察―

相模平沢出土の弥生式土器に就いて

道灌山遺跡

群馬県北山古墳

佐波に於ける後期弥生式文化の限界―特にその終末と土師器への展開―

相模大磯町愛宕山横穴調査報告

中山 淳子 駿台史学 五

長野県東筑摩郡広丘村高出北ノ原弥生式堅穴住居址について

長野県馬場平遺跡略報

小岩 末治 岩手史学 研究 二八

長野市小島出土の中期弥生式土器について

樋沢押型文遺跡

松島 透 駿台史学 五

江坂 輝弥 石器時代 二

磯崎 正彦 上代文化 三五

永峯 光一 史 想 二

野口 義磨 〃

永峯 光一 〃

藤沢 宗平 〃

西村・金子 〃

鈴木 照男 歴史教育 一九

永峰 光一 〃

芹沢・江坂 〃

小江 慶雄 京都学藝 大学学報 A七

五十嵐幹雄 〃

吉田 格 〃

大賀 一郎 古文化財 之科学 〇〇

藤沢 宗平 〃

金子 浩昌 〃

駒井 和愛 考古学雑 誌 四ノ一

樋口 昇一 石器時代 二

永峯 光一 〃

兒玉作左衛門、大場利夫 北方文化 研究報告 〇〇

伊達 宗泰 大和文化 研究 二三

吉田 格 海 二

北大調査団 〃

田中 一郎 考古学雑 誌 四ノ一

鎌木 義昌 〃

吉崎 昌一 石器時代 一

安井 良三 史 想 一

江坂 輝弥 史 想 二

鳥畑 寿夫 上代文化 三五

安井 良三 史 想 一

河川 貞徳 石器時代 一

中村 吾郎 考古学雑 誌 四ノ四

龜井 正道 国学院雑 誌 五ノ二

吉田 富夫 上代文化 三五

山崎 義男 石器時代 一

原田 淑人 聖心女子 大学論叢 六

伊東 重敏 考古学雑 誌 四ノ四

野口 義磨 〃

下津谷達男 国学院雑 誌 五ノ二

龜井 正道 上代文化 三五

東京郡荒川 区役所

原田 淑人 聖心女子 大学論叢 六

小出 義治 国学院雑 誌 五ノ二

中川 成夫 史 苑 三

小岩 末治 岩手史学 研究 二八

小松 虔 信 濃 七ノ八

戸沢 充則 〃

中山 淳子 駿台史学 五

横山 正 〃

戸沢 充則 〃

中山 淳子 駿台史学 五

桐原 健 〃

戸沢 充則 〃

中山 淳子 駿台史学 五

山城国古墳地名表 三上 貞二 史 想 一、二

応神、仁徳、履中三天皇陵の規模と營造 梅原 末治 要 書陵部紀 五

弘光寺さん針ヶ谷古墳 井伏 鱒二 藝術新潮 六ノ六

九州古墳墓の性格 樋口 隆康 史 林 一五二

石製模造祭器について 大場 磐雄 国学院雑 誌 五ノ二

松本市筑摩出土の火葬骨壺について 桐原 健 信 濃 七ノ四

はにわ考一 藪田嘉一郎 叢 考 二

埴輪女子立像(群馬県佐波郡植蓮村出土)解説 松原 正業 アム 五〇

大和土製馬考 土井 実 古代学 四ノ二

人物裝飾壺形土器その他 野口 義麿 アム 五

京都府船井郡須知町出土の陶質土面 小江 慶雄 考古学雑 誌 四ノ一

獸形土偶の一例について 乙益 重隆 上代文化 三

古墳出土の杖 佐野 大和 大和文化 一四

腰飾考―日本石器時代装身具の研究各論 樋口 清之 国学院雑 誌 五ノ二

モヨロ貝塚出土の骨角器 大場 利夫 北方文化 研究報告 二〇

朝鮮・中国・其他 有光 教一 史 林 一五四

南朝鮮土着文化の考古学的考察 東方学 二〇

朝鮮の初期鉄器時代文化についての考察―慶州邑南古墳群について 朝鮮学報 八

新建設に伴う考古学上の発見 鄭 振鐸 考古学雑 誌 四ノ四

オホツクの二つの文化圏 大場 利夫 石器時代 二

カムチャッカ考古資料の若干例―ソ同盟極東考古学研究の一端紹介にかえて― 平井 尚志 史 苑 三

歴史関係・其他 丸茂 武重 国学院雑 誌 五ノ二

原始型像研究序説―文化階梯の表現技術について― 佐野 大和 史 三

黄泉国以前 大谷 浩三 歴史教育 一九

原始時代の日本 後藤 守一 史 一九一三

講座 日本古代文化 中村 直勝 日本美術 一九九一

日本史の大概―一五 岡部 長章 工書 品 三〇

金印問題後日譚 羽田 亨 飛鳥奈良時代の文化 二

飛鳥奈良時代の文化 神田喜一郎 飛鳥奈良時代の文化 二

飛鳥奈良時代の文物 森 鹿三 飛鳥奈良時代の自然 科学 二

飛鳥奈良時代の自然 科学 二 藪内 清 那須国造碑攷釈 鈴木 吉武 国学院雑 誌 五ノ二

那須国造碑攷釈 鈴木 吉武 国学院雑 誌 五ノ二

耳梨行宮と香久山宮 田村 吉永 史迹と美 術 二五八

天平産金地私考 内藤 政恒 南都仏教 二

紀寺の奴―奈良時代に於ける私奴婢の解放問題― 角田 文衛 古代学 四ノ二

桓武天皇御宇という時代 上皇 今井 啓一 史迹と美 術 三五六

玉置山の神仏分離 佐藤 虎雄 大和文化 研究 三

文化史としての仏教 五来 重 文化史学 別冊一

日唐仏教文化の交流 塚本 善隆 歴史教育 三

飛鳥奈良時代の仏教について 石村 喜英 日本歴史 八

国分寺創建の年時に ついて 塚本 善隆 唐招提寺 教学 八

唐招提寺鑑真和尚の 初めに五台山に登つ 板橋 倫行 日本歴史 八

た日本僧 公慶上人伝記資料一 つ 近藤 喜博 大和文化 研究 三

小机の二つの寺 浅子勝二郎 史 学 三六ノ一

伊勢神宮式年遷宮起 源の問題 下出 積与 古代学 四ノ二

春日大社の詩趣 中村 直勝 日本美術 三〇四

桃山文化と茶道 磯野風船子 陶 説 二四

茶の本(茶の古典十 二選) 上野 照夫 淡 交 八

松屋茶記の成立―松 屋研究の三― 永島福太郎 茶道雑誌 一九ノ二

山上宗二記を究む七 桑田 忠親 史 一九ノ一

光悦と小袖屋瀬戸肩 樋口 清之 鈴木 半茶 史 一九ノ五

光悦と茶道 光悦と利休 史 一九ノ六

光悦と有楽 光悦と完旦 史 一九ノ七

光悦と遠州 乾山と茶道 史 一九ノ九

良寛と華岳の茶 史 一九ノ三

茶道藝術シリーズ 吳 山 楼 陶 説 三九

床の間 染織の美 漆藝の美 村田 治郎 淡 交 七

溝口 三郎 史 八

美術のためのしゝみ(三笠新書) 富水 次郎 三笠書房

女性の美学(河出新書写真編) 制作社編 河出書房

藝術にあらわれた女性美(河出新書写真真編) 座右宝刊行会編

色彩の心理(教養叢書) 西川 好夫 法政大学出版局

色の理解 遠藤 教三 造形藝術研究会

色彩論 稲村 耕雄 岩波書店

役立つ色彩 チエスキン 大智 浩 白 楊 社

美術教育図説 中谷 健次 岩崎書店

構成教育入門 武井 勝雄 造形藝術研究会

こどものための構成教育 間所 春 保 育 社

少年世界美術全集(2) 保 育 社

近代日本美術全集(6)(現代編) 今泉 篤男 東都文化出版株式会社

現代日本美術全集1、2、3、5、6、8 座右宝刊行会編

世界美術全集、日本5、索引 平 凡 社

世界美術大辞典2 河出書房編 河出書房

造形教育大辞典3-5 倉田三郎、町輝夫他編 不 味 堂

画題の辞典 中森 義宗 美術出版社

色名大辞典 和田 三造 創 元 社

絵画 内田 巖 角川書店

絵画読本(角川文庫) 内田 武夫 四季 社

絵を見る眼 嘉門 安雄 河出書房

絵画の見方(河出新書) 今泉篤男編 東都文化出版株式会社

墨の藝術 野間 清六

近代洋画の歩み(西洋と日本) 今泉篤男編 東都文化出版株式会社

日本画のながれ(近代美術叢書) 河北倫明編

近代画家群 矢代 幸雄 新潮社

現代の絵画(河出新書写真編) 河出書房

現代アメリカ絵画(アートブックス) 阿部 展也 講 談 社

アメリカ絵画史 フレクス 荒地出版社

一六の横顔-ポナールからアルプへ 森本清水訳 白 楊 社

若きピカソの戦い(一時問文庫) ガトル ド・スタイン、植村鷹千代訳 新潮社

ピカソ ポール・エリュアール 筑摩書房

ピカソの自画像 ゴッホ(一時間文庫) 式場隆三郎 新潮社

ゴッホの手紙 上 エミール・ベルナール 岩波書店

ゴッホの手紙(小林秀雄文庫) 小林 秀雄 中央公論社

炎と色-ゴッホの一生- ポラチエツク、式場隆三郎訳 現代社

ピカソ・ルオー・クレールなど-藝術論集 ハーバード 増野正衛訳 みすず書房

ドガ、ダンス・デッサン ヴァレリイ 吉田健一訳 新潮社

狩野芳崖 古川 北華 元々社

半古と楓湖 添田 達嶺 陸 月 社

川合玉堂 難波専太郎 美術探求社

大観米寿記念展 屏風と絵巻図録 松 屋

夢二画譜 リューベンス(2) 嘉門 安雄

奥の細道画冊 小杉 放庵 竜 星 閣

第三回日本国際美術展画集一九五五年 毎日新聞社 監修、美術出版社製作

藤島武二(画集と評伝) 隈元謙次郎 美術出版社

小出楯重(生涯と藝術) 黒田重太郎

山口薫(現代日本画家選) 須田国太郎(現代日本画家選)

山下清画集 式場隆三郎 新潮社

岸田劉生(角川写真文庫) 角川書店編 角川書店

上村松園名作集 上村松園監 株式会社東横

万花譜 辻 永 平 凡 社

浴泉譜 前川 千帆 竜 星 閣

古径(アート・ブックス) 野間 清六 講 談 社

松園(2) 小高根太郎

栖鳳(2) 竹内 逸

大観(2) 野間 清六

靱彦(2) 大久保 泰

ゴッホ(2) 大久保 泰

シャガール(2) 土方 定一

セザンヌ(2) 富永惣一

デュフィ(2) 大久保 泰

ドガ(2) 富永惣一

ピカソ(2) 富永惣一

ブラック(2) 久保貞次郎

ブリュッセル(2) 久保貞次郎

ポティチエリイ(2)

マティス(2) 今泉 篤男

モネリアニ(2) 田近 憲三

リュールベンス(2) 嘉門 安雄

ルオー(2) 福島繁太郎

ルノアール(アート・ブックス)

レオナルド(シ) 今泉 篤男 講 談 社

レンブランド(シ) 嘉門 安雄 シ

ロートレック(シ) 田近 憲三 シ

ピザンティン(原色) 柳 宗玄 シ

版美術ライブラリー) 須田国太郎 シ

南方バロック(シ) 沢柳大五郎 シ

初期ルネッサンス(シ) 摩寿意善郎 シ

ルネッサンス(シ) 高田 博厚 シ

印象派1(シ) 片山 敏彦 シ

印象派2(シ) 土方 定一 シ

メキシコ絵画(シ) シ

クレイ(シ) シ

セザンヌ(シ) 伊藤 廉 シ

ドガ踊子(シ) 小磯 良平 シ

ピカソ(シ) 岡本 太郎 シ

ブラック(シ) 宇佐見英治 シ

ポナール(シ) 片山 敏彦 シ

ルノワール(シ) 大久保 泰 シ

ピカソ人間喜劇(シ) 滝口 修造 シ

エコール・ド・パリ(シ) 田近 憲三 シ

マティス(シ) 富永 惣一 シ

ジオット(岩波写真文庫) 岩波書店 編

ゴッホ(角川写真文庫) 角川書店 編

聖書物語図録 制作社 編

現代絵画の四巨匠 読光新聞社 編

松方コレクション(図録) 同刊行会 編

デッサン全集第1期5 エイドリヤ 編

絵画療法 場隆三郎 式

油絵の描き方

水彩の技法

デッサンの技法

板画の技法

精薄児の幼児と絵が訴えるもの

幕末明治の浮世絵集成

彫刻(岩波写真文庫)

ミケランジェロ(シ)

ロダン

彫刻家萩原碌山

工 藝

工藝概論

陶工の本

デザイン大系第七巻

デザイン小辞典

ポスターのデザイン

デザイン用具と用法

レイアウト

世界模様図鑑3

中村 善策 教育美術振興会

中西 利雄 美術出版社

小磯 宮本 シ

鈴木 宝 文 館

関野準一郎 宝 文 館

宮武 辰夫 黎明書房

樋口 弘編 内外経済社

岩波書店編 岩波書店

集部編 シ

リルケ 人文書院

高安国世記 人文書院

東京藝大・石井教授研究室編 信濃教育会

前田 泰次 東京 堂

バーナー ド・リーチ 中央公論社

石川欣一訳 ダヴィッド社

滝口 河野、早川編 ダヴィッド社

千葉大学工業意匠研究室 美術出版社

大智 浩 ダヴィッド社

橋 弘一郎 印刷学会出版部

センイ意匠 河出書房 創作協会編

図案文字の描き方

続東西染織文

染ものの技法

商業色彩ハンドブック

こどもの工作 (UAI シリーズ)

こどものデザイン

こどものやきもの

インテリアデザインナイズ

日本建築の形と空間

建築家の画稿

随筆・その他

日本絵日記

青い目の日本のぞ記

モンマルトルの空の月

日本の憂愁

美の覚音

美術の裏窓

額装の話

画談三國志

東京国立博物館(角川写真文庫)

東京国立博物館(岩波写真文庫)

高橋 錦吉 美術出版社

江馬 進 帝都書院

野口 道方 美術出版社

チェスキン 大智 浩 白 楊 社

日本ユネスコ美術連盟 美術出版社

カウフマン 彰 国 社

宮島・生田 彰 国 社

今井 兼次 相模書房

バーナー ド・リーチ 毎日新聞社

柳 宗悦 朝日新聞社

ヴァン・エック 朝日新聞社

中川 一政 筑摩書房

恩地孝四郎 龍 星 閣

堂本 印象 人文書院

式場隆三郎 鱒 書 房

岡村 辰雄 岡村多聞堂

村松 梢風 新 潮 社

角川書店編 角川書店

岩波書店編 岩波書店

東洋古美術単行図書

総説・総録

世界美術全集 28 日本 V
世界美術大辞典 2

国宝(伝統藝術講座)

国宝図録 3

光学的方法による古美術品の研究

医学に関する古美術聚英

写真日本文化史 2、3、9、10

文化史論叢(奈良国立文化財研究所学報三)

岩波写真文庫 東京国立博物館 | 仏教美術 | 印度彫刻 | 鳥獸戯画、やきもの | 町 | 瀬戸 |

角川写真文庫 東京国立博物館 | 日本の絵画

校刊美術史料 58 | 69
美貌の皇后(創元選書)

飛鳥・奈良時代の文化

正倉院(創元選書)

正倉院御物図録 18

仏教と美術

密教美術論

唐招提寺
石籠寺

座右宝刊行会編

東京国立文化財研究所

京都国立博物館編

文化財協会編

奈良国立文化財研究所

岩波書店編

集部編

角川書店編

藤田経世編

亀井勝一郎編

羽田亨編

和田軍一編

東京国立博物館編

佐和隆研編

座右宝刊行会編

平凡社
河出書房

文化財協会

吉川弘文館

便利堂

日本評論新社

養徳社

岩波書店

角川書店

創元社

武田薬品工業株式会社

創元社

東京国立博物館

百華苑

便利堂

角川書店
石籠寺

鎌倉国宝館図録 3 彫刻篇 3

荘内文化財目録

山形県文化財一覽

福島県文化財調査報告書 4

栃木県文化財要覽

東京の史蹟と文化財

東京都文化財調査報告書 2 | 武蔵野の青石塔婆 |

神奈川県の文化財 2 | 国宝及重文 3 | 重文及県指定文化財

文化財の手引

大津の国宝

三重県文化財要覽

奈良県史迹名勝天然記念物調査抄 7

奈良県文化財目録

えひめの文化財

福岡県文化財調査報告書 18

佐賀県文化財調査報告書 4

鹿児島県文化財調査報告書 2

東洋美術史要説 上

稲村担元
豊島寛彰

東京都教育委員会

神奈川県教育委員会

大津市観光教育研究会

三重県教育委員会

奈良県教育委員会

愛媛県教育委員会

福岡県教育委員会

佐賀県教育委員会

鹿児島県教育委員会

吉川弘文館

町田晋一
深井晋一

絵画

講談社アートブックス

嶺山

豊国

歌麿

写楽

春信

北斎

清長

広重

宗達

日本の古典 1 | 尾形光琳

紅梅図 | 燕子花図 2

狩野長信 | 花下遊楽図

田中家所蔵 | 住吉如慶・具麿摸 | 年中行事絵巻 17 卷

親鸞上人絵伝の研究

浦上玉堂真跡集

煙霞帖

浮世絵(河出新書写真真篇)

幕末明治の浮世絵集成

南蛮屏風考

大風堂名蹟一 | 一四(張大千藏品目録)

八山人画冊

八山人と牛石懸

醉翁吟(八山人画卷)

書蹟

飯島勇講談社

菊地貞夫

近藤市太郎

高橋誠一郎

山口蓬春他

田中一松

七条憲三

美術出版社

法蔵社

美術出版社

聚楽社

河出書房

内外経済社

昭森社

便利堂

聚楽社

墨友荘

便利堂

河出書房

定本書道全集 2 漢
10 宋・元 17 平安時
代四

河出書房

重文天皇神社・小野篁神
社・道風神社修理工事報
告書

滋賀県教育委
員会

工 藝

前田 泰次 東京 堂

書道全集 11 日本二平
安 13 日本四平安 III
16 中国二宋 II

平 凡 社

重文延暦寺阿弥陀堂並書
院修理工事報告書

工藝概論
世界陶磁全集 6 江戸篇
下 7 茶器篇 8 中国上
代篇 10 宋・遼篇 11 元・
明篇 13 朝鮮上代・高麗
篇

河出書房

日本名筆全集一八、
一〇
静嘉堂文庫蔵 和漢朗詠
抄(複製)

平安書道研
究会編

国会図書館

重文延暦寺大講堂修理工
事報告書

同修理委員会

唐 5 日本江戸
中国の陶磁

美術出版社

禅林墨跡
昆嵐巻

田山方南編

禅林墨跡刊行
会

重文建仁寺勅使門修理工
事報告書

同修理委員会

茶陶名品図録

東都文化出版
株式会社

佛像写真集成一、二
仏像彫刻の鑑賞

小林 橋重
松本 剛

鹿 鳴 荘

法隆寺国宝保存工事報告
書 13 国玉法隆寺五重塔・
附図 14 国宝法隆寺聖靈
院修理工事報告書

法隆寺国宝保
存委員会

立杭窯の研究
統東西染織文
琉球染織名品集

日本美術工藝
社

彫 刻

菅原 通 濟

重文松尾寺本堂修理工事
報告書

同修理委員会

茶盃抄 1

便利 堂

日本の仮面
正倉院伎楽面の研究

石田 茂作

美術出版社

日本中世住宅史研究

同修理委員会

茶盃抄 1
立杭窯の研究
統東西染織文
琉球染織名品集

江馬 進 京都書院
明石 染人

建築史
出雲大社の本殿

井上 充夫

理工図書株式
会社

東北の民家
角 屋

野地 修左
日本学術振興
会

考古学の研究法
日本考古学図鑑
日本考古学講座 1 考古
学研究法 2 考古学研究
の歴史と現状 4 弥生文
化 5 古墳文化

斎藤 忠 吉川弘文館

重文八幡神社本殿(鹿兒
島県)修理工事報告書

福山 敏男

同修理委員会

修学院離宮(削元遺書)

藤岡 通夫 彰 国 社

日本考古学年報 3、4

河出書房

重文西本願寺阿弥陀堂修
理工事報告書

井上 充夫

同修理委員会

秋田の城

森 蘊 創 元 社

日本考古学
市立函館博物
館

誠文堂新光社

飛弾国分寺本堂
国宝金蓮寺弥陀堂修理工
事報告書

出雲大社

同修理委員会

三浦半島城郭史 上

井上 宗和 隆 文 館

函館市梁川町遺跡

市立函館博物
館

重文高田寺本堂修理工事
報告書

同修理委員会

重文二条城修理工事報告
書一

赤星 直忠

同修理委員会

同修理委員会

重文石山寺鐘樓修理工事
調査報告書

同修理委員会

重文松江城天守修理工事
報告書

同修理委員会

同修理委員会

同修理委員会

重文大通寺本堂及広間附
文閣修理工事報告書

同修理委員会

重文松江城天守修理工事
報告書

同修理委員会

同修理委員会

同修理委員会

重文高田寺本堂修理工事
報告書

同修理委員会

重文松江城天守修理工事
報告書

同修理委員会

同修理委員会

同修理委員会

重文石山寺鐘樓修理工事
調査報告書

同修理委員会

重文松江城天守修理工事
報告書

同修理委員会

同修理委員会

同修理委員会

重文大通寺本堂及広間附
文閣修理工事報告書

同修理委員会

重文松江城天守修理工事
報告書

同修理委員会

同修理委員会

同修理委員会

重文高田寺本堂修理工事
報告書

同修理委員会

重文二条城修理工事報告
書一

同修理委員会

同修理委員会

同修理委員会

重文石山寺鐘樓修理工事
調査報告書

同修理委員会

重文松江城天守修理工事
報告書

同修理委員会

同修理委員会

同修理委員会

秋田県考古資料

秋田考古資料社

吹浦遺跡

萩内古文化研究会

道灌山遺跡

荒川区役所

甲斐の古墳分布及び現状の基本的調査一

山本寿々雄

甲斐国出土弥生式土器図譜

平出

登呂の遺跡(日本歴史新書)

平出遺跡調査会編

登呂遺跡の再検討

駒井 和愛

京都府文化財調査報告21(山城における古式古墳の調査、竹野郡竹野産土山古墳の調査)

菊地 山哉

紀伊の古墳 1

京都府教育委員会

早水台

八幡 一郎

早水台

賀川 光夫

歴史・其他

国史大系二四 令集解後篇

吉川弘文館

大日本史料 五ノ一七、七ノ一三、九ノ一〇、一〇ノ八、一二ノ三七

史料編纂所

大日本古記録 梅津政景日記三 土井兼日記中

岩波書店

大日本古文書 家わけ一八 東大寺文書五 家わけ一九 醍醐寺文書一

東京大学

大日本近世史料 肥後藩人畜改帳一―五、唐通事会所日録一

東京大学

平安遺文6

竹内 理三

南無阿弥陀仏作善集

奈良国立文化財研究所 監修

東北史の新研究

古田良一博士還暦記念

文理図書出版株式会社

仙台市史1、2

仙台市役所

下伊那誌編纂会

下伊那史2

三穂村史料1、2

三穂村史編纂会

兵庫県史料集影1

田岡香逸編

甲陽文庫

芦屋市史 史料編1

芦屋市教育委員会

岡山県古文書集1、2

藤井 駿

岡山大学

国語・国文学論文総目録

水野恭一郎

弘文堂

五山文学(日本歴史新書)

安藤清衛編

弘文堂

中国古代理史概論

玉村 竹二

至文堂

宮崎 市定

ハーパー下・燕京・同志社東方文化講座委員会

大分県教育委員会

ハーパー下・燕京・同志社東方文化講座委員会

東京大学

岩波書店

東京大学

東京大学

東京大学

東京大学

東京大学

東京大学

東京大学

東京大学

東京大学

東京大学

東京大学

東京大学

東京大学

東京大学

東京大学

東京大学

東京大学

東京大学

東京大学

東京大学

附
録

便

覧

(昭和三十一年一月現在)

最近、電話局の新設、編成替え等が多く、記載電話の局名、番号に尚多少変動があることと思ひます。御了承下さい。

美術関係法規

文化財保護法 (昭和二十五年五月三十日 法律第二百一十号)

沿革

昭和二十六年二月二十四日法律第三一八号、二七年七月三十一日第二七二号、二八年八月一日第一九四号、一五日第一一三三号、二九年五月二十九日第一三一号、三一年六月二二日第一四八号改正

文化財保護法をここに公布する。

文化財保護法

目次

第一章 総則(第一条 第四条)

第二章 文化財保護委員会

第一節 総則(第五条 第十五条)

第二節 事務局(第十六条 第十九条)

第三節 附属機関及び事務局出張所(第二十条 第二十四条)

第四節 職員(第二十五条 第二十六条)

第三章 有形文化財

第一節 重要文化財(第二十七条 第五十六条)

第一款 指定(第二十七条 第二十九条)

第二款 管理(第三十条 第三十条 第四条)

第三款 保護(第三十四条 第二一四七条)

第四款 公開(第四十七 条の二 第五十三 条)

美術関係法規

第五款 調査(第五十四条 第五十五条)

第六款 雑則(第五十六条)

第二節 重要文化財以外の有形文化財(第五十六条の二)

第三章の二 無形文化財(第五十六条の三 第五十六条の九)

第四章 民俗資料(第五十六条の十 第五十六条の十八)

第五章 埋蔵文化財(第五十七条 第六十六条)

第六章 史跡名勝天然記念物(第六十六条 第八十四条)

第六款 補則

第一節 聴聞及び異議の申立(第八十五条 第八十五条の九)

第二節 国に関する特例(第八十六条 第九十七条)

第三節 地方公共団体及び教育委員会(第九十八条 第一百五一条)

第七章 罰則(第一百六条 第一百二十一条)

附則(第一百三一条 第一百三十三条)

第一章 総則

(一) 法律の目的

第一条 この法律は、文化財を保存し、且つ、その活用を図り、もつて国民の文化的向上に資するとともに、世界文化の進歩に貢献することを目的とする。

(文化財の定義)

第二条 この法律で「文化財」とは、左に掲げるものをいう。

一 建造物、絵画、彫刻、工芸品、書跡、典籍、古文書その他の有形の文化的財産であつて、我が国にとつて歴史上又は芸術上価値の高いもの及び考古資料(以下「有形文化財」という。)

二 演劇、音楽、工芸技術その他の無形の文化的財産であつて、我が国にとつて歴史上又は芸術上価値の高いもの(以下「無形文化財」という。)

三 衣食住、生業、信仰、年中行事等に関する風俗慣習及びこれに用いられる衣服、器具、家屋その他の物件であつて、国民の生活の推移の理解のため欠くことのできないもの(以下「民俗資料」という。)

四 貝塚か、古墳、都城跡、城跡、旧宅その他の遺跡であつて、我が国にとつて歴史上又は芸術上価値の高いもの、庭園、橋りょう、峡谷、海浜、山岳その他の名勝地であつて、我が国にとつて芸術上又は観賞上価値の高いもの並びに動物(生息地、繁殖地及び渡来地を含む)、植物(自生地を含む)及び地質鉱物(特異な自然の現象の生じている土地を含む)、我が国にとつて学術上価値の高いもの(以下「記念物」という。)

2 この法律の規定(第二十一条第二項第一号、第二十七条から第二十九条まで、第三十七条、第五十五条第一項第四号、第八十八条、第九十四条及び第一百五一条の規定を除く。)中「重要文化財」には、国宝を含むものとする。

3 この法律の規定(第二十一条第二項第十五号及び第十六号、第六十九号、第七十条、第七十一条、第七十七条、

第八十三号第一項第四号、第八十八号並びに第九十四条の規定を除く。)中「史跡名勝天然記念物」には、特別史跡名勝天然記念物を含むものとする。

(政府及び地方公共団体の任務)

第三条 政府及び地方公共団体は、文化財がわが国の歴史、文化等の正しい理解のため欠くことのできないものであり、且つ、将来の文化の向上発展の基礎をなすものであることを認識し、その保存が適当に行われるように、周到の注意をもつてこの法律の趣旨の徹底に努めなければならない。

(国民、所有者等の心構)

第四条 一般国民は、政府及び地方公共団体がこの法律の目的を達成するために行う措置に誠実に協力しなければならない。

2 文化財の所有者その他の関係者は、文化財が貴重な国民的財産であること自覚し、これを公共のために大切に保存するとともに、できるだけこれを公開する等その文化的活用に努めなければならない。

3 政府及び地方公共団体は、この法律の執行に当つて関係者の所有権その他の財産権を尊重しなければならない。

第二章 文化財保護委員会

第一節 総則

第五条 国家行政組織法(昭和二十三年法律第二十号)第三十二条第二項の規定に基いて、文部省の外局として、文化

二〇七

財保護委員会（以下「委員会」という。）を設置する。

2 委員会の委員は、独立してその職権を行う。

（任務）

第六条 委員会は、文化財の保存及び活用、文化財に関する調査研究その他第一の目的を達成するため必要な事務を行うことを任務とする。

（権限）

第七条 委員会は、その所掌事務を遂行するため、左に掲げる権限を有する。但し、その権限の行使は、法律（これに基く命令を含む。）に従つてなされなければならない。

一 予算の範囲内で、所掌事務の遂行に必要な支出負担行為をすること。
二 収入金を徴収し、所掌事務の遂行に必要な支払をすること。

三 所掌事務の遂行に直接必要な事務所等の施設を設置し、及び管理すること。

四 所掌事務の遂行に直接必要な業務用資材、図書その他研究用資材、事務用品等を調達すること。

五 職員任免及び賞罰を行い、その職員の人事を管理すること。

六 職員の厚生及び保健のため必要な施設をなし、及び管理すること。

七 所掌事務の監察を行い、法令の定めるところに従い、必要な措置をとること。

八 所掌事務の周知宣伝を行うこと。

九 委員会の公印を制定すること。
十 広く利用に供する適当な記録を整備すること。

十一 所掌事務に係る公益法人について許可若しくは認可を与え、又はその許可を取り消すこと。

十二 所掌事務に関する国庫支出金を割り当て、配分すること。

十三 所掌事務に関する物資の確保について援助すること。

十四 所掌事務に関する統計調査の資料及び結果を収集し、解釈し、及び刊行頒布すること。

十五 所掌事務に関する国家的又は国際的関心のある題目について会議、研究会、討論会等を主催すること。

十六 文化財の保護に関する法令案を作成すること。

十七 前各号に掲げるものの外、法律（これに基く命令を含む。）に基き委員会に属せしめられた権限

2 委員会は、その権限の行使に当つて、法律（法律に基く命令を含む。）に別段の定がある場合を除いては、行政上及び運営上の監督を行わないものとする。

（構成）

第八条 委員会は、五人の委員をもつて組織する。

（委員の任命及び欠格事由）

第九条 委員は、文化に関し高い識見を有する者のうちから両議院の同意を経て、文部大臣が任命する。

2 左の各号の一に該当する者は、委員となることができない。

一 禁治産者若しくは準禁治産者又は破産者で復権を得ない者
二 禁こ以上の刑に処せられた者

3 委員は、そのうち三人以上が同一政党に属する者となることとなつてはならない。

4 委員（委員長である委員を除く。）は、非常勤とする。

（委員の任期）

第十条 委員の任期は、三年とする。但し、補欠の委員は、前任者の残任期間在任する。

2 委員は、再任されることができる。

3 第一項の規定にかかわらず委員は、国会の閉会又は衆議院の解散の場合に任期が満了したときは、その後最初に召集された国会において両議員の同意を経て文部大臣が委員を任命するまでの間、なお在任するものとする。

（委員の失職及び罷免）
第十一条 委員は、第九條第二項各号の一に該当するに至つた場合及び既に委員中二人が所屬している政党にあらたに所屬するに至つた場合においては、その職を失う。

2 文部大臣は、委員が心身の故障のため職務の執行ができないと認める場合又は委員に職務上の業務違反その他委員たるに適しない行為があると認める場合においては、両議院の同意を経て、これを罷免することができる。

3 文部大臣は、両議院の同意を経て、左に掲げる委員を罷免する。

一 委員中何人も所屬していなかつた一の政党にあらたに三人以上の委員が所屬するに至つた場合、これらの者のうち二人をこえる員数の委員

二 委員中一人が既に所屬している政党にあらたに二人以上の委員が所屬するに至つた場合、これらの者のうち一人をこえる員数の委員

4 両議院は、前項各号に規定する事実があるとき認めるときは、同項各号の規定により罷免すべき員数の委員の罷免の同意を与えるべきものとする。

5 国会の閉会又は衆議院の解散のため、第二項又は第三項の規定による罷免につき両議院の同意を経ることができないときは、その後最初に召集された国会において両議院の承認を得れば足りる。

（委員長）
第十二条 委員会に委員長を置く。委員長は、委員の互選により定める。

2 委員長は、会務を総理し、委員会を代表する。

3 委員会は、委員長に事故があるとき、又は委員長が欠けたときにその職務を代理する委員を、あらかじめ、定めて置かなければならない。

（委員の給与）
第十三条 委員長及び委員は、別に法律の定めるところにより相当額の給与を受ける。

(會議)

第十四条 委員会は、委員長が招集する。二人以上の委員から請求があるときは、委員長は、委員会を招集しなければならぬ。

2 委員会は、委員の半数以上の出席がなければ会議を開くことができない。

3 委員会の議事は、出席委員の過半数で決し、可否同数のときは、委員長の決するところによる。

(文化財保護委員会規則)

第十五条 委員会は、法律(これに基づく政令を含む)で特に定める場合の外、その権限に属する事項を執行するため必要な手続について、文化財保護委員会規則(以下「委員会規則」という。)を定めることができる。

2 委員会規則は、官報で公布する。

第二節 事務局

(事務局)

第十六条 委員会に、その所掌事務を遂行するため、国家行政組織法第七条第四項の規定に従い、事務局を置く。

(事務局長及び次長)

第十九条 委員会の事務局に事務局長及び次長一人を置く。

2 事務局長は、委員長の指揮監督を受けて事務局の事務を掌理し、所属職員を指揮監督する。

3 次長は、事務局長を助け、事務局の事務を整理する。

第三節 附屬機関及び事務局出張所

張所

美術関係法規

(附屬機関)

第二十条 委員会の附屬機関として、文化財専門審議会、国立博物館及び国立文化財研究所を置く。

(文化財専門審議会)

第二十一条 文化財専門審議会は、委員会の諮問に応じて文化財の保存及び活用に関する専門的及び技術的事項を調査審議し、且つ、これらの事項に関し必要と認める事項を委員会に建議する。

2 委員会は、左に掲げる事項については、あらかじめ、文化財専門審議会に諮問しなければならない。

一 国宝又は重要文化財の指定及びその指定の解除
二 重要文化財の管理又は国宝の修理に関する命令
三 委員会による国宝の修理又は滅失、き損若しくは盗難の防止の措置の施行
四 重要文化財の現状変更又は輸出の許可
五 重要文化財の環境保全のための制限若しくは禁止又は必要な施設の命令
六 重要文化財の買取
七 重要無形文化財の指定及びその指定の解除
八 重要無形文化財の保持者の認定及びその認定の解除
九 重要無形文化財以外の無形文化財のうち委員会が記録を作成すべきもの

の又は記録の作成等につき補助すべきもの選択

十 重要民俗資料の指定及びその指定の解除
十一 重要民俗資料の管理に関する命令
十二 重要民俗資料の買取
十三 無形の民俗資料のうち委員会が記録を作成すべきもの又は記録の作成等につき補助すべきもの選択
十四 委員会による埋蔵文化財の調査のための発掘の施行
十五 特別史跡名勝天然記念物又は史跡名勝天然記念物の指定及びその指定の解除
十六 史跡名勝天然記念物の仮指定の解除
十七 史跡名勝天然記念物の管理又は特別史跡名勝天然記念物の復旧に関する命令
十八 委員会による特別史跡名勝天然記念物の復旧又は滅失、き損、喪失若しくは盗難の防止の措置の施行
十九 史跡名勝天然記念物の現状変更等の許可
二十 史跡名勝天然記念物の環境保全のための制限若しくは禁止又は必要な施設の命令
二十一 史跡名勝天然記念物の現状変更等の許可を受けず、若しくはその許可の条件に従わない場合又は史跡名勝天然記念物の環境保全のための制限若しくは禁止に違反した場合の

原状回復の命令

二十二 重要文化財の現状変更若しくは史跡名勝天然記念物の現状変更等の許可又はその許可の取消の権限の都道府県の教育委員会への委任

3 委員会は、前項各号に掲げる事項の外、文化財の保存又は活用に関する専門的又は技術的事項で重要と認めるものについては、文化財専門審議会に諮問するものとする。

4 前三項の規定により所掌する事項を分掌させるため、文化財専門審議会に分科会を置く。

5 文化財専門審議会及びその分科会の組織及び所掌事務並びに専門委員、臨時専門委員その他の職員については、他の法律(これに基づく命令を含む)に特別の定がある場合を除く外、政令で定める。

(国立博物館)
第二十二條 国立博物館は、有形文化財を収集し、保管して公衆の観覧に供し、あわせてこれに関連する事業を行う。

2 国立博物館の名称及び位置は、左の通りとする。

名	称	位	置
東京	国立博物館	東京	都
京都	国立博物館	京都	市
奈良	国立博物館	奈良	市

3 国立博物館の内部組織は、委員会規

則で定める。

(国立文化財研究所)

第二十三条 国立文化財研究所は、文化財に関する調査研究、資料の作成及びその公表を行う。

2 国立文化財研究所の名称及び位置は、左の通りとする。

名	称	位	置
東京国立文化財研究所		東京	都
奈良国立文化財研究所		奈良	市

3 国立文化財研究所には、支所を置くことができる。

4 国立文化財研究所及びその支所の内部組織は、委員会規則で定める。

(事務局出張所)

第二十四条 委員会は、その所掌事務の一部を分掌させるため、所要の地に事務局出張所を設置することができる。その名称、位置、所掌事務の範囲は、委員会規則で定める。

第四節 職員

(職員)

第二十五条 委員会に置かれる職員の任免、昇任、懲戒その他人事管理に関する事務については、国家公務員法（昭和二十二年法律第二十号）及びその特例に関する規定する法律の定めるところによる。

(定員)

第二十六条 委員会に置かれる職員の定員は、別に法律で定める。

第三章 有形文化財

第一節 重要文化財

第一款 指定

(指定)

第二十七条 委員会は、有形文化財のうち重要なものを重要文化財に指定することができる。

2 委員会は、重要文化財のうち世界文化の見地から価値の高いもので、たぐいがない国民の宝たるものを国宝に指定することができる。

(告示、通知及び指定書の交付)

第二十八条 前条の規定による指定は、その旨を官報で告示するとともに、当該国宝又は重要文化財の所有者に通知してする。

2 前条の規定による指定は、前項の規定による官報の告示があつた日からその効力を生ずる。但し、当該国宝又は重要文化財の所有者に対しては、同項の規定による通知が当該所有者に到達した時からその効力を生ずる。

3 前条の規定による指定をしたときは、委員会は、当該国宝又は重要文化財の所有者に指定書を交付しなければならない。

4 指定書に記載すべき事項その他指定書に關し必要な事項は、委員会規則で定める。

5 第三項の規定により国宝の指定書の交付を受けたときは、所有者は、三十日以内に国宝に指定された重要文化財の指定書を委員会に返付しなければならない。

らない。

(解除)

第二十九条 国宝又は重要文化財が国宝又は重要文化財としての価値を失つた場合その他特殊の事由があるときは、委員会は、国宝又は重要文化財の指定を解除することができる。

2 前項の規定による指定の解除は、その旨を官報で告示するとともに、当該国宝又は重要文化財の所有者に通知してする。

3 第一項の規定による指定の解除には、前条第二項の規定を準用する。

4 第二項の通知を受けたときは、所有者は、三十日以内に指定書を委員会に返付しなければならない。

5 第一項の規定により国宝の指定を解除した場合において当該有形文化財につき重要文化財の指定を解除しないときは、委員会は、直ちに重要文化財の指定書を所有者に交付しなければならない。

第二款 管理

(管理方法の指示)

第三十条 委員会は、重要文化財の所有者に対し、重要文化財の管理に關し必要な指示をすることができる。

(所有者の管理義務及び管理責任者)

第三十一条 重要文化財の所有者は、この法律並びにこれに基いて発する委員会規則及び委員会の指示に従い、重要文化財を管理しなければならない。

2 重要文化財の所有者は、特別の事情

があるときは、適當な者をもつばら自己に代り当該重要文化財の管理の責に任ずべき者（以下この節及び第六章において「管理責任者」という。）に選任することができる。

3 前項の規定により管理責任者を選任したときは、重要文化財の所有者は、委員会規則の定める事項を記載した書面をもつて、当該管理責任者と連署の上二十日以内に委員会に届け出なければならない。管理責任者を解任した場合は同様とする。

4 管理責任者には、前条及び第一項の規定を準用する。

(所有者又は管理責任者の変更)

第三十二条 重要文化財の所有者が変更したときは、新所有者は、委員会規則の定める事項を記載した書面をもつて、且つ、旧所有者に対し交付された指定書を添えて、二十日以内に委員会に届け出なければならない。

2 重要文化財の所有者は、管理責任者を変更したときは、委員会規則の定める事項を記載した書面をもつて、新管理責任者と連署の上二十日以内に委員会に届け出なければならない。この場合には、前条第三項の規定は、適用しない。

3 重要文化財の所有者又は管理責任者は、その氏名若しくは名称又は住所を変更したときは、委員会規則の定める事項を記載した書面をもつて、二十日以内に委員会に届け出なければならない。

い。氏名若しくは名称又は住所の変更が重要文化財の所有者に係るときは、届出の際指定書を添えなければならぬ。

(管理団体による管理)

第三十二条の二 重要文化財につき、所有者が判明しない場合又は所有者若しくは管理責任者による管理が著しく困難若しくは不適当であると明らかに認められる場合には、委員会は、適当な地方公共団体その他の法人を指定して、当該重要文化財の保存のため必要な管理(当該重要文化財の保存のため必要な施設、設備その他の物件で当該重要文化財の所有者の所有又は管理に属するものの管理を含む)を行わせることができる。

2 前項の規定による指定をするには、委員会は、あらかじめ、当該重要文化財の所有者(所有者が判明しない場合を除く)及び権原に基づく占有者並びに指定しようとする地方公共団体その他の法人の同意を得なければならない。

3 第一項の規定による指定は、その旨を官報で告示するとともに、前項に規定する所有者、占有者及び地方公共団体その他の法人に通知してする。

4 第一項の規定による指定には、第二十八條第二項の規定を準用する。

5 重要文化財の所有者又は占有者は、正当な理由がなくて、第一項の規定による指定を受けた地方公共団体その他の法人(以下この節及び第六章において

「管理団体」という)が行う管理又はその管理のため必要な措置を拒み、妨げ、又は忌避してはならない。

6 管理団体には、第三十條及び第三十條第一項の規定を準用する。

第三十二条の三 前条第一項に規定する事由が消滅した場合その他特殊の事由があるときは、委員会は、管理団体の指定を解除することができる。

2 前項の規定による解除には、前条第三項及び第二十八條第二項の規定を準用する。

第三十二条の四 管理団体が行う管理に要する費用は、この法律に特別の定めのある場合を除いて、管理団体の負担とする。

2 前項の規定は、管理団体と所有者との協議により、管理団体が行う管理により所有者の受ける利益の限度において、管理に要する費用の一部を所有者の負担とすることを妨げるものではない。

(滅失、き損等)

第三十三条 重要文化財の全部又は一部が滅失し、若しくはき損し、又はこれを亡失し、若しくは盗み取られたときは、所有者(管理責任者又は管理団体がある場合は、その者)は、委員会規則の定める事項を記載した書面をもつて、その事実を知つた日から十日以内に委員会に届け出なければならない。

(所在の変更)

第三十四条 重要文化財の所在の場所を

変更しようとするときは、重要文化財の所有者(管理責任者又は管理団体がある場合は、その者)は、委員会規則の定める事項を記載した書面をもつて、且つ、指定書を添えて、所在の場所を変更しようとする日の二十日前までに委員会に届け出なければならない。但し、委員会規則の定める場合には、届出を要せず、若しくは届出の際指定書の添附を要せず、又は委員会規則の定めるところにより所在の場所を変更した後届け出ることをもつて足りる。

第三款 保護

(修理)

第三十四条の二 重要文化財の修理は、所有者が行うものとする。但し、管理団体がある場合は、管理団体が行うものとする。

(管理団体による修理)

第三十四条の三 管理団体が修理を行う場合は、管理団体は、あらかじめ、その修理の方法及び時期について当該重要文化財の所有者(所有者が判明しない場合を除く)及び権原に基づく占有者の意見を聞かなければならない。

2 管理団体が修理を行う場合には、第三十二条の二第五項及び第三十二条の四の規定を準用する。

(管理又は修理の補助)

第三十五条 重要文化財の管理又は修理につき多額の経費を要し、重要文化財の所有者又は管理団体がその負担に堪えない場合その他特別の事情がある場

合には、政府は、その経費の一部に充てさせるため、重要文化財の所有者又は管理団体に対し補助金を交付することができる。

2 前項の補助金を交付する場合には、委員会は、その補助の条件として管理又は修理に關し必要な事項を指示することができる。

3 委員会は、必要があると認めるときは、第一項の補助金を交付する重要文化財の管理又は修理について指揮監督することができる。

(管理に関する命令又は勧告)

第三十六条 重要文化財を管理する者が不適任なため又は管理が適当でないため重要文化財が滅失し、き損し、又は盗み取られる虞があると認めるときは、委員会は、所有者、管理責任者又は管理団体に対し、重要文化財の管理をする者の選任又は変更、管理方法の改善、防火施設その他の保存施設の設置その他管理に關し必要な措置を命じ、又は勧告することができる。

2 前項の規定による命令又は勧告に基いてする措置のために要する費用は、委員会規則の定めるところにより、その全部又は一部を国庫の負担とすることができる。

3 前項の規定により国庫が費用の全部又は一部を負担する場合には、前条第三項の規定を準用する。

(修理に関する命令又は勧告)

第三十七条 委員会は、国宝がき損して

いる場合において、その保存のため必要があると認めるときは、所有者又は管理団体に対し、その修理について必要な命令又は勧告をすることができ

る。
2 委員会は、国宝以外の重要文化財が、損している場合において、その保存のため必要があると認めるときは、所有者又は管理団体に対し、その修理について必要な勧告をすることができ

る。
3 前二項の規定による命令又は勧告に基いてする修理のために要する費用は、委員会規則の定めるところにより、その全部又は一部を国庫の負担とすることができ

る。
4 前項の規定により国庫が費用の全部又は一部を負担する場合には、第三十五條第三項の規定を準用する。
(委員会による国宝の修理等の施行)

第三十八條 委員会は、左の各号の一に該当する場合においては、国宝につき自ら修理を行い、又は滅失、き損若しくは盗難の防止の措置をすることができ

る。
一 所有者、管理責任者又は管理団体が前二條の規定による命令に従わな

いとき。
二 国宝がき損している場合又は滅失し、き損し、若しくは盗み取られる虞がある場合において、所有者、管理責任者又は管理団体に修理又は滅失、き損若しくは盗難の防止の措置

をさせることが適當でない認められるとき。

2 前項の規定による修理又は措置をしようとするときは、委員会は、あらかじめ、所有者、管理責任者又は管理団体に對し、当該国宝の名称、修理又は措置の内容、着手の時期その他必要と認める事項を記載した古書を交付するとともに、権原に基づく占有者にこれらの事項を通知しなければならない。
第三十九條 委員会は、前條第一項の規定による修理又は措置をするときは、その職員のうちから、当該修理又は措置の施行及び当該国宝の管理の責に任

ずべき者を定めなければならない。
2 前項の規定により責に任ずべき者と定められた者は、当該修理又は措置の施行に當るときは、その身分を証明する証票を携帯し、関係者の請求があつたときは、これを示し、且つ、その正当な意見を十分に尊重しなければならない。

3 前條第一項の規定による修理又は措置の施行には、第三十二條の二第五項の規定を準用する。
第四十條 第三十八條第一項の規定による修理又は措置のために要する費用は、国庫の負担とする。

2 委員会は、委員会規則の定めるところにより、第三十八條第一項の規定による修理又は措置のために要した費用の一部を所有者(管理団体がある場合は、その者)から徴収することができ

る。但し、同條第一項第二号の場合には、修理又は措置を要するに至つた事由が所有者、管理責任者若しくは管理団体の責に歸すべきとき、又は所有者若しくは管理団体がその費用の一部を負担する能力があるときに限る。
3 前項の規定による徴収については、行政代執行法(昭和二十三年法律第四十三号)第五條から第七條までの規定を準用する。
第四十一條 第三十八條第一項の規定による修理又は措置によつて損害を受けた者に対しては、政府は、その通常生

ずべき損害を補償する。
2 前項の規定による補償額に不服のある者は、訴をもつてその増額を請求することができる。但し、前項の補償の決定の通知を受けた日から六箇月を経過したときは、この限りでない。
(補助等に係る重要文化財譲渡の場合の納付金)

第四十二條 国が修理又は滅失、き損若しくは盗難の防止の措置(以下この条において、「修理等」という。)につき第三十五條第一項の規定により補助金を交付し、又は第三十六條第二項、第三十七條第三項若しくは第四十條第一項の規定により費用を負担した重要文化財のその当時における所有者又はその相続人、受遺者若しくは受贈者(第二次以下の相続人、受遺者又は受贈者を含む。以下この条において同じ。)(以下この条において、「所有者等」とい

う)は、補助又は費用負担に係る修理等が行われた後当該重要文化財を有償で譲り渡した場合においては、当該補助金又は負担金の額(第四十條第一項の規定による負担金については、同條第二項の規定により所有者から徴収した部分を控除した額をいう。以下この条において同じ)の合計額から当該修理等が行われた後重要文化財の修理等のため自己の費した金額を控除して得た金額(以下この条において、「納付金額」という。)を、委員会規則の定めるところにより国庫に納付しなければならない。

2 前項に規定する「補助金又は負担金の額」とは、補助金又は負担金の額を、補助又は費用負担に係る修理等を施した重要文化財又はその部分につき委員会が個別的に定める耐用年数で除して得た金額に、更に当該耐用年数から修理等を行つた時以後重要文化財の譲渡の時までの年数を控除した残余の年数(一年に満たない部分があるときは、これを切り捨てる。)を乗じて得た金額に相当する金額とする。
3 補助又は費用負担に係る修理等が行われた後、当該重要文化財が所有者等の責に歸することのできない事由により著しくその価値を減じた場合又は当該重要文化財を国に譲り渡した場合に

は、委員会は、納付金額の全部又は一部の納付を免除することができる。
4 委員会の指定する期限までに納付金

額を完納しないときは、国税滞納処分
の例により、これを徴取することがで
きる。

5 納付金額を納付する者が相続人、受
遺者又は受贈者であるときは、第一号
に定める相続税額又は贈与税額と第二
号に定める額との差額に相当する金額
を第三号に定める年数で除して得た金
額に第四号に定める年数を乗じて得た
金額をその者が納付すべき納付金額か
ら控除するものとする。

一 当該重要文化財の取得につきその
者が納付した、又は納付すべき相続
税額又は贈与税額

二 前号の相続税額又は贈与税額の計
算の基礎となつた課税価格に算入さ
れた当該重要文化財又はその部分に
つき当該相続、遺贈又は贈与の時ま
で行つた修理等に係る第一項の補
助金又は負担金の額の合計額を当該
課税価格から控除して得た金額を課
税価格として計算した場合に当該重
要文化財又はその部分につき納付す
べきこととなる相続税額又は贈与税
額に相当する額

三 第二項の規定により当該重要文化
財又はその部分につき委員会が定め
た耐用年数から当該重要文化財又は
その部分の修理等を行つた時以後当
該重要文化財の相続、遺贈又は贈与
の時までの年数を控除した残余の年
数（一年に満たない部分があるとき
は、これを切り捨てる。）

四 第二項に規定する当該重要文化財
又はその部分についての残余の耐用
年数

6 前項第二号に掲げる第一項の補助金
又は負担金の額については、第二項の
規定を準用する。この場合において、
同項中「譲渡の時」とあるのは、「相続、
遺贈又は贈与の時」と読み替えるもの
とする。

7 第一項の規定により納付金額を納付
する者の同項に規定する譲渡に係る所
得税法（昭和二十二年法律第二十七号）
第九条第八号に規定する譲渡所得の計
算については、第一項の規定により納
付する金額は、同法第九条第八号に規
定する譲渡に関する経費とする。
（現状変更の制限）

第四十三条 重要文化財の現状を変更し
ようとするときは、委員会の許可を受
けなければならない。但し、その維持
の措置をする場合は、この限りでな
い。

2 前項但書に規定する維持の措置の範
囲は、委員会規則で定める。

3 委員会は、第一項の許可を与える場
合において、その許可の条件として同
項の現状の変更に関し必要な指示をす
ることができる。

4 第一項の許可を受けた者が前項の許
可の条件に従わなかつたときは、委員
会は、許可に係る現状の変更の停止を
命じ、又は許可を取り消すことができ
る。

（修理の届出等）
第四十三条の二 重要文化財を修理しよ
うとするときは、所有者又は管理団体
は、修理に着手しようとする日の三十
日前までに、委員会規則の定めるところ
により、委員会にその旨を届け出な
なければならない。但し、前条第一項の
規定により許可を受けなければならない
場合その他委員会規則の定める場合
は、この限りでない。

2 重要文化財の保護上必要があると認
めるときは、委員会は、前項の届出
に係る重要文化財の修理に関し技術的
な指導と助言を与えることができる。
（輸出の禁止）
第四十四条 重要文化財は、輸出しては
ならない。但し、委員会が文化の国際
的交流その他の事由により特に必要と
認めて許可した場合は、この限りでな
い。

（環境保全）
第四十五条 委員会は、重要文化財の保
存のため必要があると認めるときは、
地域を定めて一定の行為を制限し、若
しくは禁止し、又は必要な施設をする
ことを命ずることができる。

2 前項の規定による処分によつて損害
を受けた者に対しては、政府は、その
通常生ずべき損害を補償する。

3 前項の場合には、第四十一条第二項
の規定を準用する。
（国に対する売渡の申出）
第四十六条 重要文化財を有償で譲り渡

そうとする者は、譲渡の相手方、予定
対価の額（予定対価が金銭以外のもの
であるときは、これを時価を基準とし
て金銭に見積つた額。以下同じ。）その
他委員会規則で定める事項を記載した
書面をもつて、まず委員会に国に対す
る売渡の申出をしなければならぬ。
但し、当該譲受人に対して特に譲り渡
したい特別の事情がある場合において
委員会の承認を受けたときは、この限
りでない。

2 前項の規定による売渡の申出のあつ
た後三十日以内に委員会が当該重要文
化財を国において買い取るべき旨の通
知をしたときは、前項の規定による申
出書に記載された予定対価の額に相当
する代金で、売買が成立したものとみ
なす。

3 第一項に規定する者は、前項の期間
（その期間内に委員会が当該重要文化
財を買い取らない旨の通知をしたとき
は、その時までの期間）内は、当該重
要文化財を譲り渡してはならない。

4 委員会が第一項但書の規定による承
認をしない旨の処分をした場合におい
て、その処分に不服のある者は、委員
会に対し、異議の申立をすることがで
きる。

（管理又は修理の受託又は技術的指導）
第四十七条 重要文化財の所有者（管理
団体がある場合は、その者）は、委員
会の定める条件により、委員会に重要
文化財の管理（管理団体がある場合を

除く。)又は修理を委託することができ
る。

2 委員会は、重要文化財の保存上必要
があると認めるときは、所有者(管理
団体がある場合は、その者)に対し、
条件を示して、委員会にその管理(管理
団体がある場合を除く。)又は修理を委
託するように勧告することができる。

3 前二項の規定により委員会が管理又
は修理の委託を受けた場合には、第三
十九条第一項及び第二項の規定を準用
する。

4 重要文化財の所有者、管理責任者又
は管理団体は、委員会規則の定めると
ころにより、委員会に重要文化財の管
理又は修理に関し技術的指導を求め
ることができる。

第四款 公開

(公開)

第四十七条の二 重要文化財の公開は、
所有者が行うものとする。但し、管理
団体がある場合は、管理団体が行うも
のとする。

2 前項の規定は、所有者又は管理団体
の出品に係る重要文化財を、所有者及
び管理団体以外の者が、この法律の規
定により行う公開の用に供することを
妨げるものではない。

3 管理団体は、その管理する重要文化
財を公開する場合には、当該重要文化
財につき観覧料を徴収することができる。
(委員会による公開)

第四十八条 委員会は、重要文化財の所
有者(管理団体がある場合は、その者)
に対し、一年以内の期間を限つて、国
立博物館その他の施設において委員会
の行う公開の用に供するため重要文化
財を出品することを勧告することがで
きる。

2 委員会は、国庫が管理又は修理につ
き、その費用の全部若しくは一部を負
担し、又は補助金を交付した重要文化
財の所有者(管理団体がある場合は、そ
の者)に対し、一年以内の期間を限つ
て、国立博物館その他の施設において
委員会の行う公開の用に供するため当
該重要文化財を出品することを命ず
ることができる。

3 委員会は、前項の場合において必要
があると認めるときは、一年以内の期
間を限つて、出品の期間を更新するこ
とができる。但し、引き続き五年をこ
えてはならない。

4 第二項の命令又は前項の更新があつ
たときは、重要文化財の所有者又は
管理団体は、その重要文化財を出品し
なければならぬ。但し、委員会が所
有者又は管理団体の申請によりやむ
を得ない事由があるものと認める場合
は、この限りでない。

5 前四項に規定する場合の外、委員会
は、重要文化財の所有者(管理団体が
ある場合は、その者)から国立博物館そ
の他の施設において委員会の行う公開
の用に供するため重要文化財を出品し

たい旨の申出があつた場合において適
当と認めるときは、その出品を承認す
ることができる。

第四十九条 委員会は、前条の規定によ
り重要文化財が出品されたときは、第
百条に規定する場合を除いて、国立博
物館所属の職員その他委員会の職員の
うちから、その重要文化財の管理の責
に任ずべき者を定めなければならない。

第五十条 第四十八条の規定による出品
のために要する費用は、委員会規則の
定める基準により、国庫の負担とする。
2 政府は、第四十八条の規定により出
品した所有者又は管理団体に対し、委
員会規則の定める基準により、給与金
を支給する。

(所有者等による公開)
第五十一条 委員会は、重要文化財の所
有者又は管理団体に対し、三箇月以内
の期間を限つて、重要文化財の公開を
勧告することができる。

2 委員会は、国庫が管理又は修理につ
き、その費用の全部若しくは一部を負
担し、又は補助金を交付した重要文化
財の所有者又は管理団体に対し、三箇
月以内の期間を限つて、その公開を命
ずることができる。

3 前項の場合には、第四十八条第四項
の規定を準用する。

4 委員会は、重要文化財の所有者又は
管理団体に対し、前三項の規定による
公開及び当該公開に係る重要文化財の

管理に関し必要な指示をすることがで
きる。

5 重要文化財の所有者、管理責任者又
は管理団体が前項の指示に従わない場
合には、委員会は、公開の停止又は中
止を命ずることができる。

6 第二項及び第三項の規定による公開
のために要する費用は、委員会規則の
定めるところにより、その全部又は一
部を国庫の負担とすることができる。

7 前項に規定する場合の外、重要文化
財の所有者又は管理団体から、その所
有又は管理に係る重要文化財を国庫の
費用負担において公開したい旨の申出
があつた場合において、委員会が適当
と認めてこれを承認したときは、委員
会規則の定めるところにより、その公
開のために要する費用の全部又は一部
を国庫の負担とすることができる。こ
の場合には、第四項及び第五項の規定
を準用する。

第五十一条の二 前条の規定による公開
の場合を除き、重要文化財の所在の場
所を変更してこれを公衆の観覧に供す
るため第三十四条の規定による届出が
あつた場合には、前条第四項及び第五
項の規定を準用する。

(損害の補償)
第五十二条 第四十八条又は第五十一
条の規定により出品し、又は公開したこ
とに起因して当該重要文化財が滅失
し、又はき損したときは、政府は、そ
の重要文化財の所有者に対し、通常生

の重要文化財の所有者に対し、通常生

すべき損害を補償する。但し、重要文化財が所有者、管理責任者又は管理団体の責に帰すべき事由によつて滅失し、又はき損した場合は、この限りでない。

2 前項の場合には、第四十一条第二項の規定を準用する。

(所有者等以外の者による公開)

第五十三条 重要文化財の所有者及び管理団体以外の者がその主催する展覧会その他の催しにおいて重要文化財を公衆の観覧に供しようとするときは、委員会の許可を受けなければならない。但し、あらかじめ、委員会の承認を受けた博物館その他の施設において、委員会以外の国の機関又は地方公共団体が主催する場合は、委員会に届け出ることをもつて足りる。

2 委員会は、前項の許可を与える場合において、その許可の条件として、許可に係る公開及び当該公開に係る重要文化財の管理に關し必要な指示をすることが出来る。

3 第一項の許可を受けた者が前項の許可の条件に従わなかつたときは、委員会は、許可に係る公開の停止を命じ、又は許可を取り消すことができる。

第五款 調査

(保存のための調査)

第五十四条 委員会は、必要があると認めるときは、重要文化財の所有者、管理責任者又は管理団体に対し、重要文化財の現状又は管理、修理若しくは環

境保全の状況につき報告を求めることが出来る。

第五十五条 委員会は、左の各号の一に該当する場合において、前条の報告によつてもなお重要文化財に關する状況を確認することができず、且つ、その確認のため他に方法がないと認めるときは、調査に當る者を定め、その所在する場所に立ち入つてその現状又は管理、修理若しくは環境保全の状況につき実地調査をさせることができる。

一 重要文化財の現状変更の許可の申請があつたとき。

二 重要文化財がき損しているとき又はその現状若しくは所在の場所につき変更があつたとき。

三 重要文化財が滅失し、き損し、又は盗み取られる虞のあるとき。

四 特別の事情によりあらためて国宝又は重要文化財としての価値を鑑査する必要があるとき。

2) 前項の規定により立ち入り、調査する場合においては、当該調査に當る者は、その身分を証明する証票を携帯し、関係者の請求があつたときは、これを示し、且つ、その正当な意見を十分尊重しなければならない。

3 第一項の規定による調査によつて損害を受けた者に対しては、政府は、その通常生ずべき損害を補償する。

4 前項の場合には、第四十一条第二項の規定を準用する。

第六款 雜則

(所有者変更等に伴う権利義務の承継)

第五十六条 重要文化財の所有者が変更したときは、新所有者は、当該重要文化財に關しこの法律に基いてする委員会の命令、勧告、指示その他の処分による旧所有者の権利義務を承継する。

2 前項の場合には、旧所有者は、当該重要文化財の引渡と同時にその指定書を新所有者に引き渡さなければならない。

3 管理団体が指定され、又はその指定が解除された場合には、第一項の規定を準用する。但し、管理団体が指定された場合には、もつぱら所有者に属すべき権利義務については、この限りでない。

第二節 重要文化財以外の有形文化財

(技術的指導)

第五十六条の二 重要文化財以外の有形文化財の所有者は、委員会規則の定めるところにより、委員会に有形文化財の管理又は修理に關し技術的指導を求めることが出来る。

第三章の二 無形文化財

(重要無形文化財の指定等)

第五十六条の三 委員会は、無形文化財のうち重要なものを重要無形文化財に指定することができる。

2 委員会は、前項の規定による指定をするに當つては、当該重要無形文化財の保持者を認定しなければならない。

3 第一項の規定による指定は、その旨

を官報で告示するとともに、当該重要無形文化財の保持者として認定しようとする者に通知してする。

4 委員会は、第一項の規定による指定をした後においても、当該重要無形文化財の保持者として認定するに足りる者があると認めるときは、その者を保持者として追加認定することができる。

5 前項の規定による追加認定には、第三項の規定を準用する。

(重要無形文化財の指定等の解除)

第五十六条の四 重要無形文化財が重要無形文化財としての価値を失つた場合その他特殊の事由があるときは、委員会は、重要無形文化財の指定を解除することができる。

2 保持者が心身の故障のため保持者として適当でなくなつたと認められる場合その他特殊の事由があるときは、委員会は、保持者の認定を解除することができる。

3 第一項の規定による指定の解除又は前項の規定による認定の解除は、その旨を官報で告示するとともに、当該重要無形文化財の保持者に通知してする。

4 保持者が死亡したときは、保持者の認定は解除されたものとし、保持者のすべてが死亡したときは、重要無形文化財の指定は解除されたものとする。この場合には、委員会は、その旨を官報で告示しなければならない。

(保持者の氏名変更等)

第五十六条の五 保持者が氏名若しくは住所を変更し、又は死亡したとき、その他委員会規則の定める事由があるときは、保持者又はその相続人は、委員会規則の定める事項を記載した書面をもつて、その事由の生じた日(保持者の死亡に係る場合は、相続人がその事実を知つた日)から十日以内に委員会に届け出なければならない。

(重要無形文化財の保存)

第五十六条の六 委員会は、重要無形文化財の保存のため必要があると認めるときは、重要無形文化財について自ら記録の作成、伝承者の養成その他その保存のため適当な措置を行い、又は保持者若しくは地方公共団体その他その保存に当ることを適当と認める者に対し、その保存に要する経費の一部を補助することができる。

2 前項の規定により補助金を交付する場合には、第三十五条第二項及び第三項の規定を準用する。

(重要無形文化財の公開)

第五十六条の七 委員会は、重要無形文化財の保持者に対し重要無形文化財の公開を、重要無形文化財の記録の所有者に対しその記録の公開を勧告することができる。

2 重要無形文化財の所有者又は重要無形文化財の記録の所有者から、重要無形文化財又は重要無形文化財の記録を国庫の費用負担において公開したい旨

の申出があつた場合には、第五十一条第七項の規定を準用する。

3 前項の規定により公開したことに起因して当該重要無形文化財の記録が滅失し、又はき損した場合には、第五十二条の規定を準用する。

(重要無形文化財の保存に関する助言又は勧告)

第五十六条の八 委員会は、重要無形文化財の保持者又は地方公共団体その他その保存に当ることを適当と認める者に対し、重要無形文化財の保存のため必要な助言又は勧告をすることができる。

(重要無形文化財以外の無形文化財の記録作成等)

第五十六条の九 委員会は、重要無形文化財以外の無形文化財のうち特に必要のあるものを選択して、自らその記録を作成し、保存し、若しくは公開し、又は適当な者に対し、当該無形文化財の公開若しくはその記録の作成、保存若しくは公開に要する経費の一部を補助することができる。

2 前項の規定により補助金を交付する場合には、第三十五条第二項及び第三項の規定を準用する。

第三章の三 民俗資料

(重要民俗資料の指定)

第五十六条の十 委員会は、有形の民俗資料のうち特に重要なものを重要民俗資料に指定することができる。

2 前項の規定による指定には、第二十

八条第一項から第四項までの規定を準用する。

(重要民俗資料の指定の解除)

第五十六条の十一 重要民俗資料が重要民俗資料としての価値を失つた場合その他特殊の事由があるときは、委員会は、重要民俗資料の指定を解除することができる。

2 前項の規定による指定の解除には、第二十九条第二項から第四項までの規定を準用する。

(重要民俗資料の管理)

第五十六条の十二 重要民俗資料の管理には、第三十条から第三十四条までの規定を準用する。

(重要民俗資料の保護)

第五十六条の十三 重要民俗資料の現状を変更し、又はこれを輸出しようとする者は、現状を変更し、又は輸出しようとする日の二十日前までに、委員会規則の定めるところにより、委員会にその旨を届け出なければならない。但し、委員会規則の定める場合は、この限りでない。

2 重要民俗資料の保護上必要があると認めるときは、委員会は、前項の届出に係る重要民俗資料の現状変更又は輸出に關し必要な事項を指示することができる。

第五十六条の十四 重要民俗資料の保護

には、第三十四条の二から第三十六条まで、第三十七条第二項から第四項まで、第四十二条、第四十六条及び第四

十七条の規定を準用する。

(重要民俗資料の公開)

第五十六条の十五 重要民俗資料の所有者及び管理団体(第五十六条の十二で準用する第三十二条の二第一項の規定による指定を受けた地方公共団体その他の法人をいう。以下この章及び第六章において同じ。)以外の者がその主催する展覧会を公衆の観覧を供しようとするときは、委員会規則の定める事項を記載した書面をもつて、観覧に供しようとする最初の日の三十日前までに、委員会に届け出なければならない。

2 前項の届出に係る公開には、第五十一条第四項及び第五項の規定を準用する。

第五十六条の十六 重要民俗資料の公開には、第四十七条の二から第五十二条までの規定を準用する。

(重要民俗資料の保存のための調査及び所有者変更等に伴う権利義務の承継)

第五十六条の十七 重要民俗資料の保存のための調査には、第五十四条の規定を、重要民俗資料の所有者が変更し、又は重要民俗資料の管理団体が指定され、若しくはその指定が解除された場合には、第五十六条の規定を準用する。

(無形の民俗資料の記録作成等)

第五十六条の十八 無形の民俗資料には、第五十六条の九の規定を準用す

る。

第四章 埋蔵文化財

(発掘に関する届出、指示及び命令)

第五十七条 土地を発掘して埋蔵物である文化財(以下「埋蔵文化財」という。)について調査しようとする者は、委員会規則の定める事項を記載した書面をもつて、発掘に着手しようとする日の三十日前までに委員会に届け出なければならぬ。但し、委員会規則の定める場合は、この限りでない。

2 埋蔵文化財の保護上特に必要があると認めるときは、委員会は、前項の届出に係る発掘に關し必要な事項を指示し、又はその発掘の禁止、停止若しくは中止を命ずることができる。

第五十七条の二 土木工事その他埋蔵文化財の調査以外の目的で、貝づか、古墳その他埋蔵文化財を包蔵する土地として周知されている土地を発掘しようとする場合には、前条第一項の規定を準用する。

2 埋蔵文化財の保護上特に必要があると認めるときは、委員会は、前項で準用する前条第一項の届出に係る発掘に關し必要な事項を指示することができる。

(委員会による発掘の施行)

第五十八条 委員会は、埋蔵文化財について調査する必要があると認めるときは、自ら埋蔵文化財を包蔵すると認められる土地の発掘を施行することができる。

2 前項の規定により発掘を自ら施行しようとするときは、委員会は、あらかじめ、当該土地の所有者及び権原に基

づく占有者に対し、発掘の目的、方法、着手の時期その他必要と認められる事項を記載した令書を交付しなければならない。

3 第一項の場合には、第三十九条及び第四十一条の規定を準用する。

第五十九条 前条第一項の規定による発掘により文化財を発見した場合において、委員会は、当該文化財の所有者が判明しているときはこれを所有者に返還し、所有者が判明しないときは、遺失物法(明治三十二年法律第八十七号)第十三条で準用する同法第一条第一項の規定にかかわらず、警察署長にその旨を通知することをもつて足りる。

2 前項の通知を受けたときは、警察署長は、直ちに当該文化財につき遺失物法第十三条で準用する同法第一条第二項の規定による公告をしなければならない。

(提出)

第六十条 遺失物法第十三条で準用する同法第一条第一項の規定により、埋蔵物として差し出された物件が文化財と認められるときは、警察署長は、直ちに当該物件を委員会に提出しなければならぬ。但し、所有者の判明している場合は、この限りでない。

(監査)

第六十一条 前条の規定により物件が提出されたときは、委員会は、当該物件が文化財であるかどうかを鑑査しなければならない。

2 委員会は、前項の鑑査の結果当該物件を文化財と認めるときは、その旨を警察署長に通知し、文化財でないと思

めたときは、当該物件を警察署長に差し戻さなければならない。

(引渡)

第六十二条 第五十九条第一項又は前条第二項に規定する文化財の所有者から、警察署長に対し、その文化財の返還の請求があつたときは、委員会は、当該警察署長にこれを引き渡さなければならない。

(国庫帰属及び報償金)

第六十三条 第五十九条第一項又は第六十一条第二項に規定する文化財でその所有者が判明しないものの所有権は、国庫に帰属する。この場合において、委員会は、当該文化財の発見者及びその発見された土地の所有者にその旨を通知し、且つ、その価格に相当する額の報償金を支給する。

2 前項に規定する発見者と土地所有者とが異なるときは、前項の報償金は、折半して支給する。

3 前二項の場合には、第四十一条第二項の規定を準用する。

(譲与等)

第六十四条 政府は、前条第一項の規定により国庫に帰属した文化財の保存のため又はその効用から見て国が保有する

必要がある場合を除いて、当該文化財の発見者又はその発見された土地の所有者に、その者が前条の規定により受けるべき報償金の額に相当するものの範囲内でこれを譲与することができる。

2 前項の場合には、その譲与した文化財の価格に相当する金額は、前条に規定する報償金の額から控除するものとする。

3 政府は、前条第一項の規定により国庫に帰属した文化財の保存のため又はその効用から見て国が保有する必要がある場合を除いて、当該文化財の発見された土地を管轄する地方公共団体に

対し、その申請に基づき、当該文化財を譲与し、又は時価よりも低い対価で譲渡することができる。

(遺失物法の適用)

第六十五条 埋蔵文化財に關しては、この法律に特別の定のある場合の外、遺失物法第十三条の規定の適用があるものとする。

第六十六条から第六十八条まで 削除

第五章 史跡名勝天然記念物

(指定)

第六十九条 委員会は、記念物のうち重要なものを史跡、名勝又は天然記念物(以下「史跡名勝天然記念物」と總称する。)に指定することができる。

2 委員会は、前項の規定により指定された史跡名勝天然記念物のうち特に重要なものを特別史跡、特別名勝又は特

別天然記念物(以下「特別史跡名勝天然記念物」と総称する。)に指定することができる。

3 前二項の規定による指定は、その旨を官報で告示するとともに、当該特別史跡名勝天然記念物又は史跡名勝天然記念物の所有者及び権原に基く占有者に通知してする。

4 前項の規定により通知すべき相手方が著しく多数で個別に通知し難い事情がある場合には、委員会は、同項の規定による通知に代えて、その通知すべき事項を当該特別史跡名勝天然記念物又は史跡名勝天然記念物の所在地の市町村の事務所又はこれに準ずる施設の掲示場に掲示することができる。この場合においては、その掲示を始めた日から二週間を経過した時に前項の規定による通知が相手方に到達したものとみなす。

5 第一項又は第二項の規定による指定は、第三項の規定による官報の告示があつた日からその効力を生ずる。但し、当該特別史跡名勝天然記念物又は史跡名勝天然記念物の所有者又は権原に基く占有者に対しては、第三項の規定による通知が到達した時又は前項の規定によりその通知が到達したものとみなされる時からその効力を生ずる。

(仮指定)

第七十条 前条第一項の規定による指定前において緊急の必要があると認めるときは、都道府県の教育委員会は、史

跡名勝天然記念物の仮指定を行うことができる。

2 前項の規定により仮指定を行ったときは、都道府県の教育委員会は、直ちにその旨を委員会に報告しなければならない。

3 第一項の規定による仮指定には、前条第三項から第五項までの規定を準用する。

(所有権等の尊重及び他の公益との調整)

第七十条の二 委員会又は都道府県の教育委員会は、第六十九条第一項若しくは第二項の規定による指定又は前条第一項の規定による仮指定を行うに当つては、特に、関係者の所有権、鉱業権その他の財産権を尊重するとともに、国土の開発その他の公益との調整に留意しなければならない。

(解除)

第七十一条 特別史跡名勝天然記念物又は史跡名勝天然記念物がその価値を失つた場合その他特殊の事由のあるときは、委員会又は都道府県の教育委員会は、その指定又は仮指定を解除することができる。

2 第七十条第一項の規定により仮指定された史跡名勝天然記念物につき第六十九条第一項の規定による指定があつたとき、又は仮指定があつた日から二年内に同条同項の規定による指定がなかつたときは、仮指定は、その効力を失う。

3 第七十条第一項の規定による仮指定が適当でないと認めるときは、委員会は、これを解除することができる。

4 第一項又は前項の規定による指定又は仮指定の解除には、第六十九条第三項から第五項までの規定を準用する。

(管理団体による管理及び復旧)

第七十一条の二 史跡名勝天然記念物につき、所有者がない若しくは判明しない場合又は所有者若しくは第七十四条第二項の規定により選任された管理の責に任すべき者による管理が著しく困難若しくは不適當であると明らかに認められる場合には、委員会は、適当な地方公共団体その他の法人を指定して、当該史跡名勝天然記念物の保存のため必要な管理及び復旧(当該史跡名勝天然記念物の保存のため必要な施設、設備その他の物件で当該史跡名勝天然記念物の所有者の所有又は管理に属するものの管理及び復旧を含む。)を行わせることができる。

2 前項の規定による指定をするには、委員会は、あらかじめ、指定しようとする地方公共団体その他の法人の同意を得なければならない。

3 第一項の規定による指定は、その旨を官報で告示するとともに、当該史跡名勝天然記念物の所有者及び権原に基く占有者並びに指定しようとする地方公共団体その他の法人に通知してする。

4 第一項の規定による指定には、第六

十九条第四項及び第五項の規定を準用する。

第七十一条の三 前条第一項に規定する事由が消滅した場合その他特殊の事由があるときは、委員会は、管理団体の指定を解除することができる。

2 前項の規定による解除には、前条第三項並びに第六十九条第四項及び第五項の規定を準用する。

第七十二条 第七十一条の二第一項の規定による指定を受けた地方公共団体その他の法人(以下この章及び第六章において「管理団体」という。)は、委員会規則の定める基準により、史跡名勝天然記念物の管理に必要な標識、説明板、境界標、囲さくその他の施設を設置しなければならない。

2 史跡名勝天然記念物の指定地域内の土地について、その土地の所在、地番、地目又は地積に異動があつたときは、管理団体は、委員会規則の定めるところにより、委員会にその旨を届け出なければならない。

3 管理団体が復旧を行う場合は、管理団体は、あらかじめ、その復旧の方法及び時期について当該史跡名勝天然記念物の所有者(所有者が判明しない場合を除く。)及び権原に基く占有者の意見を聞かなければならない。

4 史跡名勝天然記念物の所有者又は占有者は、正当な理由がなくて、管理団体が行う管理若しくは復旧又はその管理若しくは復旧のため必要な措置を拒

み、妨げ、又は忌避してはならない。

第七十二条の二 管理団体が行う管理及び復旧に要する費用は、この法律に特別の定めのある場合を除いて、管理団体の負担とする。

2 前項の規定は、管理団体と所有者との協議により、管理団体が行う管理又は復旧により所有者の受ける利益の限度において、管理又は復旧に要する費用の一部を所有者の負担とすることを妨げるものではない。

3 管理団体は、その管理する史跡名勝天然記念物につき観覧料を徴収することができる。

第七十三条 管理団体が行う管理又は復旧によつて損害を受けた者に対しては、当該管理団体は、その通常生ずべき損害を補償しなければならない。

2 前項の場合には、第四十一条第二項の規定を準用する。

第七十三条の二 管理団体が行う管理には、第三十条、第三十一条第一項及び第三十三条の規定を、管理団体が行う管理及び復旧には、第三十五条及び第四十七条の規定を、管理団体が指定され、又はその指定が解除された場合には、第五十六条第三項の規定を準用する。

(所有者による管理及び復旧)

第七十四条 管理団体がある場合を除いて、史跡名勝天然記念物の所有者は、当該史跡名勝天然記念物の管理及び復旧に当るものとする。

2 前項の規定により史跡名勝天然記念物の管理に当る所有者は、特別の事情があるときは、適当なる者をもつば自己に代り当該史跡名勝天然記念物の管理の責に任ずべき者(以下この章及び第六章において「管理責任者」という)に選任することができる。この場合には、第三十一条第三項の規定を準用する。

第七十五条 所有者が行う管理には、第三十条、第三十一条第一項、第三十二条、第三十三条並びに第七十二条第一項及び第二項(同条第二項については、管理責任者がいる場合を除く)の規定を、所有者が行う管理及び復旧には、第三十五条及び第四十七条の規定を、所有者が変更した場合の権利義務の承継には、第五十六条第一項の規定を、管理責任者が行う管理には、第三十条、第三十一条第一項、第三十二条第三項、第三十三条、第四十七条第四項及び第七十二条第二項の規定を準用する。

(管理に関する命令又は勧告)

第七十六条 管理が適当でないため史跡名勝天然記念物が滅失し、き損し、喪失し、又は盗み取られる虞があるとき、認めるときは、委員会は、管理団体、所有者又は管理責任者に対し、管理方法の改善、保存施設の設置その他管理に關し必要な措置を命じ、又は勧告することができる。

2 前項の場合には、第三十六条第二項

及び第三項の規定を準用する。

(復旧に関する命令又は勧告)

第七十七条 委員会は、特別史跡名勝天然記念物がき損し、又は喪失している場合において、その保存のため必要があると認めるときは、管理団体又は所有者に対し、その復旧について必要な命令又は勧告をすることができる。

2 委員会は、特別史跡名勝天然記念物以外の史跡名勝天然記念物が、き損し、又は喪失している場合において、その保存のため必要があるときは、管理団体又は所有者に対し、その復旧について必要な勧告をすることができる。

3 前二項の場合には、第三十七条第三項及び第四項の規定を準用する。

(委員会による特別史跡名勝天然記念物の復旧等の施行)

第七十八条 委員会は、左の各号の一に該当する場合においては、特別史跡名勝天然記念物につき自ら復旧を行い、又は滅失、き損、喪失若しくは盗難の防止の措置をすることができる。

一 管理団体、所有者又は管理責任者が前二条の規定による命令に従わな

いとき。

二 特別史跡名勝天然記念物が、き損し、若しくは喪失している場合又は滅失し、き損し、喪失し、若しくは盗み取られる虞のある場合において、管理団体、所有者又は管理責任者に復旧又は滅失、き損、喪失若し

くは盗難の防止の措置をさせることが適当でないとき。

2 前項の場合には、第三十八条第二項及び第三十九条から第四十一条までの規定を準用する。

(補助等に係る史跡名勝天然記念物譲渡の場合の納付金)

第七十九条 国が復旧又は滅失、き損、喪失若しくは盗難の防止の措置につき第七十三条の二及び第七十五条で準用する第三十五条第一項の規定により補助金を交付し、又は第七十六条第二項で準用する第三十六条第二項、第七十七条第三項で準用する第三十七条第三項若しくは前条第二項で準用する第四十条第一項の規定により費用を負担した史跡名勝天然記念物については、第四十二条の規定を準用する。

(現状変更等の制限及び原状回復の命令)

第八十条 史跡名勝天然記念物に關しその現状を変更し、又はその保存に影響を及ぼす行為をしようとするときは、委員会の許可を受けなければならない。但し、現状変更については維持の措置をする場合、保存に影響を及ぼす行為については影響の軽微である場合は、この限りでない。

2 前項但書に規定する維持の措置の範囲は、委員会規則で定める。

3 第一項の規定による許可を与える場合には、第四十三条第三項の規定を、第二項の規定による許可を受けた者には、同条第四項の規定を準用する。

4 委員会又はその権限の委任を受けた都道府県の教育委員会の第一項の規定による処分には、第七十条の二の規定を準用する。

5 第一項の規定による許可を受けず、又は第三項で準用する第四十三条第三項の規定による許可の条件に従わないで、史跡名勝天然記念物の現状を変更し、又はその保存に影響を及ぼす行為をした者に対しては、委員会は、原状回復を命ずることができ、この場合には、委員会は、原状回復に必要なる指示をすることができ、(復旧の届出等)

第八十条の二 史跡名勝天然記念物を復旧しようとするときは、管理団体又は所有者は、復旧に着手しようとする日の三十日前までに、委員会規則の定めるところにより、委員会にその旨を届け出なければならぬ。但し、前条第一項の規定により許可を受けなければならぬ場合その他委員会規則の定めるところは、この限りでない。

2 史跡名勝天然記念物の保護上必要があると認めるときは、委員会は、前項の届出に係る史跡名勝天然記念物の復旧に関し技術的な指導と助言を与えることができる。

(環境保全)

第八十二条 委員会は、史跡名勝天然記念物の保存のため必要があると認めるときは、地域を定めて一定の行為を制限し、若しくは禁止し、又は必要な施設

設をすることを命ずることができる。

2 前項の規定による処分によつて損害を受けた者に対しては、政府は、その通常生ずべき損害を補償する。

3 第一項の規定による制限又は禁止に違反した者には、第八十条第五項の規定を、前項の場合には、第四十一条第二項の規定を、準用する。

(保存のための調査)

第八十二条 委員会は、必要があると認めるときは、管理団体、所有者又は管理責任者に対し、史跡名勝天然記念物の現状又は管理、復旧若しくは環境保全の状況につき報告を求めることができる。

第八十三条 委員会は、左の各号の一に該当する場合において、前条の報告によつてもなお史跡名勝天然記念物に関する状況を確認することができず、且つ、その確認のために他に方法がないと認めるときは、調査に当る者を定め、その所在する土地又はその隣接地に立ち入つてその現状又は管理、復旧若しくは環境保全の状況につき実地調査及び土地の発掘、障害物の除去その他調査のため必要な措置をさせることができる。但し、当該土地の所有者、占有者その他の関係者に対し、著しく損害を及ぼす虞のある措置は、させてはならない。

一 史跡名勝天然記念物に関する現状変更又は保存に影響を及ぼす行為の許可の申請があつたとき。

二 史跡名勝天然記念物が損し、又は

は喪失しているとき。

三 史跡名勝天然記念物が滅失し、き損し、喪失し、又は盗み取られる虞のあるとき。

四 特別の事情によりあらためて特別史跡名勝天然記念物又は史跡名勝天然記念物としての価値を調査する必要があるとき。

2 前項の規定による調査又は措置によつて損害を受けた者に対しては、政府は、その通常生ずべき損害を補償する。

3 第一項の規定により立ち入り、調査する場合に、第五十五条第二項の規定を、前項の場合には、第四十一条第二項の規定を準用する。

(遺跡発見の届出)

第八十四条 土地の所有者又は占有者が貝づか、住居跡、古墳その他遺跡と認められるものを発見したときは、その現状を変更することなく、委員会規則の定める事項を記載した書面をもつて、発見の日から十日以内に委員会に届け出なければならない。但し、第五十七条第一項の規定による届出をした場合は、この限りでない。

2 前項の規定による届出があつた場合には、委員会は、当該遺跡の保護上必要な事項を指示することができる。

第六章 補則

第一節 聴聞及び異議の申立

(聴聞)

第八十五条 委員会が左に掲げる処分又

は措置を行おうとするときは、関係者又はその代理人の出頭を求めて、公開による聴聞を行わなければならない。

一 第三十八条第一項又は第七十八条第一項の規定による修理若しくは復旧又は措置の施行

二 第四十三条第四項(第八十条第三項で準用する場合を含む。又は第五十三条第三項の規定による許可の取消)

三 第四十五条第一項又は第八十一条第一項の規定による制限、禁止又は命令で特定の者に対して行われるもの

四 第五十一条第五項(同条第七項(第五十六条の七第二項で準用する場合を含む。第五十一条の二、第五十六条の十五第二項、及び第五十六条の十六で準用する場合を含む。))の規定による公開の中止命令

五 第五十五条第一項又は第八十三条第一項の規定による立入調査又は調査のため必要な措置の施行

六 第五十七条第二項の規定による発掘の禁止又は中止命令

七 第五十八条第一項の規定による発掘の施行

八 第八十条第五項(第八十一条第三項で準用する場合を含む。))の規定による原状回復の命令

2 委員会は、前項の聴聞を行おうとするときは、前項各号に規定する処分又は措置を行おうとする理由、その処分

第二節 国に関する特例

(国に関する特例)

第八十六条 国又は国の機関に対しこの法律の規定を適用する場合において、この節に特別の規定のあるときは、その規定による。

第八十七条 重要文化財、重要民俗資料又は史跡名勝天然記念物が国有財産法(昭和二十三年法律第七十三号)に規定する国有財産であるときは、そのものは、文部大臣が管理する。但し、そのものが文部大臣以外の者が管理している同法第三条第二項に規定する行政財産であるときその他文部大臣以外の者が管理すべき特別の必要のあるものであるときは、そのものを関係各省各庁の長(同法第四条第二項に規定する各省各庁の長をいう。以下同じ)が管理するか、又は文部大臣が管理するかは、文部大臣、関係各省各庁の長及び大蔵大臣が協議して定める。

2 前項但書の規定により協議する場合には、文部大臣は、委員会の意見を聞かなければならない。

第八十七条之二 前条第一項の規定により重要文化財、重要民俗資料又は史跡名勝天然記念物を文部大臣が管理するため、所屬を異にする会計の間において所管換又は所屬替をするときは、国有財産法第十五条の規定にかかわらず、無償として整理することができる。

ければならない。

(証拠の提示等)

第八十五条の六 第八十五条の四の規定による聴聞においては、異議の申立をした者、処分相手方、処分の通知を受けるべき者及び前条の規定による聴聞に参加した者又はこれらの者の代理人に対し、当該事実について、証拠を提示し、且つ、意見を述べる機会を与えなければならない。

(決定)

第八十五条の七 決定は、文書をもつて行い、且つ、理由を附さなければならない。

(決定)

2 委員会は、決定書の正本を、異議の申立をした者及び聴聞に参加した者に交付しなければならない。但し、申立を却下する決定については、異議の申立をした者に交付すれば足りる。

(決定前の協議等)

第八十五条の八 鉱業又は採石業との調整に関する事案に係る異議の申立については、委員会は、申立を却下する場合を除き、あらかじめ、土地調整委員会に協議した上、決定をしなければならない。

2 関係各行政機関の長は、異議の申立に係る事案について意見を述べることができる。

(手続)

第八十五条の九 前七条に定めるものの外、異議の申立に関する手続は、委員会規則で定める。

にあつては処分のあつたことを知つた日から三十日以内に、委員会規則の定める事項を記載した申立書を委員会に提出して、行わなければならない。

3 正当な事由により前項の期間内に異議の申立をすることができなかつたことを疎明した者は、同項の期間の経過後でも、異議の申立をすることができ

(却下)

第八十五条の三 委員会は、異議の申立が不適当であると認めるときは、申立を却下しなければならない。

(異議の申立のあつた場合の聴聞)

第八十五条の四 異議の申立があつたときは、第八十五条の二第一項第二号の事案に係る場合及び申立を却下する場合を除き、委員会は、申立を受理した日から三十日以内に、公開による聴聞を開始しなければならない。

2 委員会は、前項の聴聞を行おうとするときは、聴聞の期日及び場所をその期日の十日前までに異議の申立をした者に通告し、且つ、事案の要旨並びに聴聞の期日及び場所を公示しなければならない。

(参加)

第八十五条の五 異議の申立をした者の外、当該処分について利害関係を有する者で聴聞に参加して意見を述べようとするものは、委員会規則の定める事項を記載した書面をもつて、委員会にその旨を申し出て、その許可を受けな

又は措置の内容並びに聴聞の期日及び場所をその期日の十日前までに当該関係者に通告し、且つ、その処分又は措置の内容並びに聴聞の期日及び場所を公示しなければならない。

3 聴聞においては、当該関係者又はその代理人は、自己又は本人のために意見を述べ、又は釈明し、且つ、証拠を提出することができる。

4 当該関係者又はその代理人が正当な理由がなくて聴聞に応じなかつたときは、委員会は、聴聞を行わないで第一項に規定する処分又は措置をすることができ

(異議の申立)

第八十五条之二 委員会又はその権限の委任を受けた都道府県の教育委員会がした左に掲げる処分不服のある者は、委員会に対し、異議の申立をすることができ

一 第四十三条第一項又は第八十条第一項の規定による現状変更等の許可又は不許可

二 第四十五条第一項又は第八十一条第一項の規定による制限、禁止又は命令で特定の者に対して行われるもの

三 第七十一条の二第一項の規定による管理団体の指定

2 前項の規定による異議の申立は、処分の相手方及び処分の通知を受けるべき者にあつては処分のあつた日又は処分の通知を受けた日から、その他の者

財又は民俗資料を国宝若しくは重要文化財又は重要民俗資料に指定したときは、第二十八条第一項又は第三項（第五十六条の十第二項で準用する場合を含む。）の規定により所有者に対し行すべき通知又は指定書の交付は、当該有形文化財又は民俗資料を管理する各省各庁の長に対し行ふものとする。この場合においては、国宝の指定書を受けた各省各庁の長は、直ちに国宝に指定された重要文化財の指定書を委員会に返付しなければならない。

2 国の所有に属する国宝若しくは重要文化財又は重要民俗資料の指定を解除したときは、第二十九条第二項（第五十六条の十一第二項で準用する場合を含む。）又は第五項の規定により所有者に対し行ふべき通知又は指定書の交付は、当該国宝若しくは重要文化財又は重要民俗資料を管理する各省各庁の長に対して行ふものとする。この場合においては、当該各省各庁の長は、直ちに指定書を委員会に返付しなければならない。

3 国の所有又は占有に属するものを特別史跡名勝天然記念物若しくは史跡名勝天然記念物に指定し、若しくは仮指定し、又はその指定若しくは仮指定を解除したときは、第六十九条第三項（第七十条第三項及び第七十一条第四項で準用する場合を含む。）の規定により所有者又は占有者に対し行ふべき通知は、その指定若しくは仮指定又は指

定若しくは仮指定の解除に係るものを管理する各省各庁の長に対し行ふものとする。

第八十九条 重要文化財、重要民俗資料又は史跡名勝天然記念物を管理する各省各庁の長は、この法律並びにこれに基いて発する委員会規則及び委員会の勧告に従い、重要文化財、重要民俗資料又は史跡名勝天然記念物を管理しなければならない。

第九十条 左に掲げる場合には、関係各省各庁の長は、文部大臣を通じ委員会に通知しなければならない。

一 重要文化財、重要民俗資料又は史跡名勝天然記念物を取得したとき。

二 重要文化財、重要民俗資料又は史跡名勝天然記念物の所管換を受け、又は所屬替をしたとき。

三 所管に属する重要文化財、重要民俗資料又は史跡名勝天然記念物の全部又は一部が滅失し、き損し、若しくは衰亡し、又はこれを亡失し、若しくは盗み取られたとき。

四 所管に属する重要文化財又は重要民俗資料の所在の場所を変更しようとするとき。

五 所管に属する重要文化財又は史跡名勝天然記念物を修理し、又は復旧しようとするとき（次条第一項第一号の規定により委員会の同意を求めなければならない場合その他委員会規則の定める場合を除く。）

六 所管に属する重要民俗資料の現状

を変更し、又はこれを輸出しようとするとき。

七 所管に属する史跡名勝天然記念物の指定地域内の土地について、その土地の所在、地番、地目又は地積に異動があつたとき。

八 所管に属する土地において貝塚、か、住居跡、古墳その他遺跡と認められるものを発見したとき。

2 前項第一号及び第二号の場合に係る通知には、第三十二条第一項並びに同項を準用する第五十六条の十二及び第七十五条の規定を、前項第三号の場合に係る通知には、第三十三条並びに同項を準用する第五十六条の十二及び第七十五条の規定を、前項第四号の場合に係る通知には、第三十四条及び同条を準用する第五十六条の十二の規定を、前項第五号の場合に係る通知には、第四十三条の二第一項及び第八十条の二第一項の規定を、前項第六号の場合に係る通知には、第五十六条の十三第一項の規定を、前項第七号の場合に係る通知には、第七十二条第二項の規定を、前項第八号の場合に係る通知には、第八十四条第一項の規定を準用する。

3 委員会は、第一項第五号、第六号又は第八号の通知に係る事項に関し必要な勧告をすることができる。

第九十一条 左に掲げる場合には、関係各省各庁の長は、あらかじめ、文部大臣を通じ委員会の同意を求めなければならない。

一 重要文化財又は史跡名勝天然記念物の現状を変更し、又はその保存に影響を及ぼす行為をしようとするとき。

二 所管に属する重要文化財を輸出しようとするとき。

三 所管に属する重要文化財、重要民俗資料又は史跡名勝天然記念物の貸付、交換、売却、譲与その他の処分をしようとするとき。

2 各省各庁の長以外の国の機関が、重要文化財又は史跡名勝天然記念物の現状を変更し、又はその保存に影響を及ぼす行為をしようとするときは、あらかじめ、委員会の同意を求めなければならない。

3 第一項第一号及び前項の場合には、第四十三条第一項但書及び同条第二項並びに第八十条第一項但書及び同条第二項の規定を準用する。

4 委員会は、第一項第一号又は第二項に規定する措置につき同意を与える場合においては、その条件としてその措置に関し必要な勧告をすることができる。

5 関係各省各庁の長その他の国の機関は、前項の規定による委員会の勧告を十分に尊重しなければならない。

第九十二条 委員会は、必要があると認めるときは、文部大臣を通じ各省各庁の長に対し、左に掲げる事項につき必要な勧告をすることができる。

庫に帰属した文化財は、委員会が管理する。但し、その保存のため又はその効用から見て他の機関に管理させることが適当であるときは、これを当該機関の管理に移さなければならない。

第三節 地方公共団体及び教育委員会

(地方公共団体の事務)

第九十八条 地方公共団体は、文化財の管理、修理、復旧、公開その他その保存及び活用を要する経費につき補助することができる。

2 地方公共団体は、条例の定めるところにより、重要文化財、重要民俗資料、重要無形文化財及び史跡名勝天然記念物以外の文化財で当該地方公共団体の区域内に存するもののうち重要なものを指定して、その保存及び活用のため必要な措置を講ずることができる。

3 前項の条例に関する議案の作成及び提出については、教育委員会法(昭和二十三年法律第七十号)第六十一条に規定する事件の例による。

4 第二項に規定する条例の制定若しくはその改廃又は同項に規定する文化財の指定若しくはその解除を行つた場合には、教育委員会は、委員会規則の定めるところにより、委員会にその旨を報告しなければならない。

(権限の委任)

第九十九条 委員会は、必要があると認めるときは、左に掲げる委員会の権限

の一部を都道府県の教育委員会に委任することができる。

一 第三十五条第三項(第三十六条第三項(第五十六条の十四、第七十六条第二項(第九十五条第五項)で準用する場合を含む。及び第九十五条第五項で準用する場合を含む。、第三十七條第四項(第五十六条の十四及び第七十七条第三項)で準用する場合を含む。、第五十六条の六第二項、第五十六条の九第二項(第五十六条の十八)で準用する場合を含む。、第五十六条の十四、第七十三条の二、第七十五条、第九十五条第五項及び第九十五条の三第三項)で準用する場合を含む。の規定による指押監督

二 第四十三條又は第八十条の規定による現状変更又は保存に影響を及ぼす行為の許可及びその取消並びにその停止命令(重大な現状変更又は保存に重大な影響を及ぼす行為の許可及びその取消を除く。)

三 第五十一条第五項(同条第七項)第五十六条の七第二項で準用する場合を含む。、第五十一条の二(第五十六条の十六)で準用する場合を含む。、第五十六条の十五第二項及び第五十六条の十六で準用する場合を含む。の規定による公開の停止命令

四 第五十三条の規定による公開の許可及びその取消並びに公開の停止命令

五 第五十四条(第五十六条の十七及

び第九十五条第五項)で準用する場合を含む。、第五十五条、第八十二条(第九十五条第五項)で準用する場合を含む。又は第八十三条の規定による調査又は調査のため必要な措置の施行

六 第五十七条第二項の規定による発掘の停止命令

2 都道府県の教育委員会が前項の規定による委任に基き同項第二号若しくは第四号に規定する許可の取消又は同項第五号に規定する立入調査若しくは調査のため必要な措置を行う場合には、第八十五条の規定を準用する。

(出品された重要文化財等の管理の委任)

第一百条 委員会は、必要があると認めるときは、都道府県又は地方自治法(昭和二十二年法律第六十七号)第二百五十二条の十九第一項の指定都市の教育委員会に対し第四十八条(第五十六条の十六)で準用する場合を含む。の規定により出品された重要文化財又は重要民俗資料の管理の事務を委任することができる。

2 前項の規定による委任を受けた場合には、都道府県又は前項に規定する市の教育委員会は、その職員のうちから、当該重要文化財又は重要民俗資料の管理の責に任ずべき者を定めなければならない。

(修理等の施行の委託)

第一百一条 委員会は、必要があると認め

るときは、第三十八条第一項又は第九十三条の規定による国宝の修理又は滅失、き損若しくは盗難の防止の措置の施行、第五十八条第一項の規定による発掘の施行及び第七十八条第一項又は第九十三条の規定による特別史跡名勝天然記念物の復旧又は滅失、き損、喪失若しくは盗難の防止の措置の施行につき、都道府県の教育委員会に対し、その全部又は一部を委託することができる。

2 都道府県の教育委員会が前項の規定による委託に基き、第三十八条第一項の規定による修理又は措置の施行の全部又は一部を行つ場合には、第三十九条の規定を、第五十八条第一項の規定による発掘の施行の全部又は一部を行つ場合には、同条第三項で準用する第三十九条の規定を、第七十八条第一項の規定による復旧又は措置の施行の全部又は一部を行つ場合には、同条第二項で準用する第三十九条の規定を準用する。

(重要文化財等の管理等の受託又は技術的指導)

第一百二条 都道府県の教育委員会は、あらかじめ、委員会の承認を得て、所有者(管理団体がある場合は、その者)又は管理責任者の求めに応じ、重要文化財、重要民俗資料又は史跡名勝天然記念物の管理(管理団体がある場合を除く。)、修理若しくは復旧につき委託を受け、又は技術的指導をすることがで

きる。

2 都道府県の教育委員会が前項の規定により管理、修理又は復旧の委託を受ける場合には、第三十九条第一項及び第二項の規定を準用する。

(書類等の経由)

第三百三条 この法律の規定により文化財に関し委員会に提出すべき届書その他の書類及び物件の提出は、都道府県の教育委員会を経由すべきものとする。

2 都道府県の教育委員会は、前項に規定する書類及び物件を受領したときは、意見を具してこれを委員会に送付しなければならない。

3 この法律の規定により文化財に関し委員会が発する命令、勧告、指示その他の処分告知は、都道府県の教育委員会を経由すべきものとする。但し、特に緊急な場合は、この限りでない。

4 この法律の規定により委員会に対してなすべき届出、報告、申出又は指定書の返付は、その届書その他の書類又は指定書が第一項の規定により經由すべき都道府県の教育委員会に到達した時に行われたものとみなす。

(指揮監督及び経費の負担)
第四百四条 委員会は、この法律の規定により都道府県又は第百条第一項に規定する市の教育委員会に行わせる事務につき、その教育委員会を指揮監督することができる。

2 都道府県又は第百条第一項に規定する市の教育委員会が第九十九条から第

百一条までの規定による事務を処理するために要する経費は、国庫の負担とする。

(委員会に対する意見具申)

第四百四条の二 都道府県の教育委員会は、当該都道府県の区域内に存する文化財の保存及び活用に関し、委員会に對して意見を具申することができる。

(教育委員会の文化財専門委員)

第四百四条の三 都道府県の教育委員会に文化財専門委員を置くことができる。

2 文化財専門委員は、文化財の保存及び活用に関し、都道府県の教育委員会の諮問に答え、又は都道府県の教育委員会に意見を具申し、及びこのために必要な調査研究を行う。

2 文化財専門委員に関し必要な事項は、当該都道府県の条例で定める。

4 前項の条例に関する議案の作成及び提出には、第九十八条第三項の規定を準用する。

第七百五条 削除

第七章 罰則

(刑罰)
第四百四条の二 第四十四条の規定に違反し、委員会の許可を受けないで重要文化財を輸出した者は、五年以下の懲役若しくは禁こ又は十万円以下の罰金に処する。

第七百七条 重要文化財を損壊し、棄し、又は隠匿した者は、五年以下の懲役若しくは禁こ又は三万円以下の罰金若しくは科料に処する。

2 前項に規定する者が当該重要文化財の所有者であるときは、二年以下の懲役若しくは禁こ又は一万円以下の罰金若しくは科料に処する。

第七百七条の二 史跡名勝天然記念物の現状を変更し、又はその保存に影響を及ぼす行為をして、これを滅失し、き損し、又は喪失するに至らしめた者は、五年以下の懲役若しくは禁こ又は三万円以下の罰金若しくは科料に処する。

2 前項に規定する者が当該史跡名勝天然記念物の所有者であるときは、二年以下の懲役若しくは禁こ又は一万円以下の罰金若しくは科料に処する。

第七百七条の三 法人の代表者又は法人若しくは人の代理人、使用人その他の従業者がその法人又は人の業務又は財産の管理に関して前三条の違反行為をしたときは、その行為者を罰する外、その法人又は人に対し、各本条の罰金刑を科する。

(行政罰)
第三百九条 第三十九条第一項(第四十七条第三項(第五十六条の十四)で準用する場合を含む)、第七十八条第二項、第一百一条第二項又は第百二条第二項で準用する場合を含む)、第四十九条(第五十六条の十六)で準用する場合を含む)又は第百条第二項に規定する重要文化財、重要民俗資料又は史跡名勝天然記念物の管理、修理又は復旧の施行の責に任すべき者が怠慢又は重大な過失によりその管理、修理又は復旧に

係る重要文化財、重要民俗資料又は史跡名勝天然記念物を滅失し、き損し、喪失し、又は盗み取られるに至らしめたときは、三万円以下の過料に処する。

第九百九条 左の各号の一に該当する者は、三万円以下の過料に処する。

一 正当な理由がなくて、第三十六条第一項(第五十六条の十四及び第九十五条第五項)で準用する場合を含む)又は第三十七条第一項の規定による重要文化財若しくは重要民俗資料の管理又は国宝の修理に関する委員会の命令に従わなかつた者

二 第三十四条の規定に違反して、委員会若しくはその権限の委任を受けた都道府県の教育委員会の許可を受けず、若しくはその許可の条件に従わないう重要文化財の現状を変更し、又は委員会若しくはその権限の委任を受けた都道府県の教育委員会の現状変更の停止の命令に従わなかつた者

三 正当な理由がなくて、第七十六条第一項(第九十五条第五項)で準用する場合を含む)又は第七十七条第一項の規定による史跡名勝天然記念物の管理又は特別史跡名勝天然記念物の復旧に関する委員会の命令に従わなかつた者

四 第八十条の規定に違反して、委員会又はその権限の委任を受けた都道府県の教育委員会の許可を受けず、

美 術 関 係 法 規

若しくはその許可の条件に従わない
で史跡名勝天然記念物の現状を変更
し、若しくはその保存に影響を及ぼ
す行為をし、又は委員会若しくはそ
の権限の委任を受けた都道府県の教
育委員会の現状変更若しくは保存に
影響を及ぼす行為の停止の命令に従
わなかつた者

第一百十条 左の各号の一に該当する者
は、一万円以下の過料に処する。

一 第三十九条第三項(第百一条第二
項で準用する場合を含む。)で準用す
る第三十二条の二第五項の規定に違
反して、国宝の修理又は滅失、き損
若しくは盗難の防止の措置の施行を
拒み、又は妨げた者

二 正当な理由がなく、第四十五条
第一項の規定による制限若しくは禁
止又は施設の命令に違反した者

三 第四十六条(第五十六条の十四で
準用する場合を含む。)の規定に違反
して、委員会に国に対する売渡の申
出をせず、若しくは申出をした後同
条第三項(第五十六条の十四で準用
する場合を含む。)に規定する期間内
に、国以外の者に重要文化財又は重
要民俗資料を譲り渡し、又は同条第
一項(第五十六条の十四で準用する
場合を含む。)の規定による売渡の申
出若しくは同項但書(第五十六条の
十四で準用する場合を含む。)の規定
による承認の申請につき、虚偽の事
実を申し立てた者

四 第五十三条の規定に違反して、委
員会若しくはその権限の委任を受け
た都道府県の教育委員会の許可を受
けず、若しくはその許可の条件に従
わないで重要文化財を公開し、又は
委員会若しくはその権限の委任を受
けた都道府県の教育委員会の公開の
停止の命令に従わなかつた者

五 第七十八条第二項又は第百一条第
二項で準用する第三十九条第三項で
準用する第三十二条の二第五項の規
定に違反して、特別史跡名勝天然記
念物の復旧又は滅失、き損、喪亡若
しくは盗難の防止の措置の施行を拒
み、又は妨げた者

六 正当な理由がなく、第八十一条
第一項の規定による制限若しくは禁
止又は施設の命令に違反した者

第七十一条 左の各号の一に該当する者
は、五千円以下の過料に処する。

一 第二十八条第五項、第二十九条第
四項(第五十六条の十一第二項で準
用する場合を含む。)又は第五十六条
第二項(第五十六条の十七で準用す
る場合を含む。)の規定に違反して、
重要文化財又は重要民俗資料の指定
書を委員会に返付せず、又は新所有
者に引き渡さなかつた者

二 第三十一条第三項(第五十六条の
十二及び第七十四条第二項で準用す
る場合を含む。)、第三十二条(第五
十六条の十二及び第七十五条で準用
する場合を含む。)、第三十三条(第

五十六条の十二、第七十五条及び第
九十五条第五項で準用する場合を含
む。)、第三十四条(第五十六条の十
二及び第九十五条第五項で準用する
場合を含む。)、第四十三条の二第一
項、第五十六条の五、第五十六条の
十三第一項、第五十六条の十五第一
項、第五十七条第一項、第七十二条
第二項(第九十五条第五項で準用す
る場合を含む。)、第八十条の二第一
項又は第八十四条第一項の規定に違
反して、届出をせず、又は虚偽の届
出をした者

三 第三十二条の二第五項(第三十四
条の三第二項(第五十六条の十四で
準用する場合を含む。))及び第五十六
条の十二で準用する場合を含む。又
は第七十二条第四項の規定に違反し
て、管理、修理若しくは復旧又は管
理、修理若しくは復旧のため必要な
措置を拒み、妨げ、又は忌避した者

四 第四十八条第四項(第五十一条第
三項(第五十六条の十六で準用する
場合を含む。))及び第五十六条の十六
で準用する場合を含む。の規定に違
反して、出品若しくは公開をせず、
又は第五十一条第五項(同条第七項
(第五十六条の七第二項及び第五十
六条の十六で準用する場合を含む。))
の十六で準用する場合を含む。及び
第五十六条の十五第二項で準用する
場合を含む。の規定に違反して、委
員会若しくはその権限の委任を受け
た都道府県の教育委員会の公開の停
止若しくは中止の命令に従わなかつ
た者

五 第五十四条(第五十六条の十七及
び第九十五条第五項で準用する場合
を含む。)、第五十五条、第八十二条
(第九十五条第五項で準用する場合
を含む。))又は第八十三条の規定に違
反して、報告をせず、若しくは虚偽
の報告をし、又は当該公務員の立入
調査若しくは調査のため必要な措置
の施行を拒み、妨げ、若しくは忌避
した者

六 第五十七条第二項の規定に違反し
て、委員会又はその権限の委任を受
けた都道府県の教育委員会の発掘の
禁止又は停止若しくは中止の命令に
従わなかつた者

七 第五十八条の規定による発掘の施
行を拒み、又は妨げた者

第一百十二条 削除

附則
第一百十三条 (施行期日)
この法律施行の期日は、公
布の日から起算して三箇月をこえない
期間内において、政令で定める。(昭
和二十五年八月政令第二百七十六号
で、同二十五年八月二十九日から施
行)

第一百十四条 (関係法令の廃止)
左に掲げる法律、勅令及び
政令は、廃止する。

国宝保存法(昭和四年法律第十七号)重要美術品等の保存に関する法律(昭和八年法律第四十三号)

史跡名勝天然記念物保存法(大正八年法律第四十四号)

国宝保存法施行令(昭和四年勅令第二百十号)

史跡名勝天然記念物保存法施行令(大正八年勅令第四百九十九号)

国宝保存会官制(昭和四年勅令第二百十一号)

重要美術品等調査審議会令(昭和二十四年政令第二百五十一号)

史跡名勝天然記念物調査会令(昭和二十四年政令第二百五十二号)

(法令廃止に伴う経過規定)

第百十五条 この法律施行前に行つた国宝保存法第一条の規定による国宝の指定(同法第十一条第一項の規定により解除された場合を除く)は、第二十七条第一項の規定による重要文化財の指定とみなし、同法第三条又は第四条の規定による許可は、第四十三条又は第四十四条の規定による許可とみなす。

2 この法律施行前の国宝の滅失又はき損並びにこの法律施行前に行つた国宝保存法第七条第一項の規定による命令及び同法第十五条前段の規定により交付した補助金については、同法第七条から第十条まで、第十五条後段及び第二十四条の規定は、なおその効力を有する。この場合において同法第九条第二項中「主務大臣」とあるのは、「文化

財保護委員会」と読み替えるものとす

る。

3 この法律施行前にした行為の処罰については、国宝保存法は、第六条及び第二十三条の規定を除く外、なおその効力を有する。

4 この法律施行の際現に国宝保存法第一条の規定による国宝を所有している者は、委員会規則の定める事項を記載した書面をもつて、この法律施行後三箇月以内に委員会に届け出なければならない。

5 前項の規定による届出があつたときは、委員会は、当該所有者に第二十八条に規定する重要文化財の指定書を交付しなければならない。

6 第四項の規定に違反して、届出をせず、又は虚偽の届出をした者は、五千円以下の過料に処する。

7 この法律施行の際現に国宝保存法第一条の規定による国宝で国の所有に属するものを管理する各省各庁の長は、委員会規則の定める事項を記載した書面をもつて、この法律施行後三箇月以内に委員会に通知しなければならない。但し、委員会規則で定める場合は、この限りでない。

8 前項の規定による通知があつたときは、委員会は、当該各省各庁の長に第二十八条に規定する重要文化財の指定書を交付するものとする。

第百十六条 この法律施行の際現に重要美術品等の保存に関する法律第二条第一項の規定により認定されている物件については、同法は当分の間、なおその効力を有する。この場合において、同法の施行に関する事務は、委員会が行ふものとし、同法中「国宝」とあるのは、「文化財保護法ノ規定ニ依ル重要文化財」と、「主務大臣」とあるのは、「文化財保護委員会」と、「国宝保存法第一条ノ規定ニ依リテ国宝トシテ指定シ」とあるのは、「文化財保護法第二十七条第一項ノ規定ニ依リテ重要文化財トシテ指定シ」と読み替へるものとす。

2 文化財専門審議会においては、当分の間、委員会の諮問に応じて重要美術品等の保存に関する法律第一条の規定による輸出及び移出の許可、同法第二条の規定による認定の取消に関する事項その他重要美術品等の保存に関する事項を調査審議し、且つ、これらの事項に關し必要と認める事項を委員会に建議する。

3 重要美術品等の保存に関する法律の施行に關しては、当分の間、第百三条の規定を準用する。

第百十七条 この法律施行前に行つた史跡名勝天然記念物保存法第一条第一項の規定による指定(解除された場合を除く)は、第六十九条第一項の規定による指定(解除された場合を除く)は、第七十条第一項の規定による仮指定とみなし、同法第三条の規定による

許可は、第八十条第一項の規定による許可とみなす。

2 この法律施行前に行つた史跡名勝天然記念物保存法第四条第一項の規定による命令又は処分については、同法第四條及び史跡名勝天然記念物保存法施行令第四条の規定は、なおその効力を有する。この場合において同法第四條中「文部大臣」とあるのは、「文化財保護委員会」と読み替へるものとする。

3 この法律施行前にした行為の処罰については、史跡名勝天然記念物保存法はなおその効力を有する。

第百十八条 委員会の最初の委員の任命については、国会の閉会又は衆議院の解散の場合に限り、第九条第一項の規定にかかわらず、その後最初に召集された国会において両議院の事後の承認を得れば足りる。

2 文部大臣は、前項の規定による両議院の事後の承認が得られないときは、その委員を罷免しなければならない。

(第一回委員会の招集)

第百十九条 この法律に基く第一回の委員会は、第十四条の規定にかかわらず、文部大臣が招集する。

(最初の委員の任期)

第百二十条 この法律により初めて任命される委員会の委員で委員長及びその職務を代理する委員以外のものの任期は、第十条第一項の規定にかかわらず、一人については一年、二人については

二二七

美術関係法規

附則 (昭和二十七年七月三十一日
日法律第二百七十二号抄)

(施行期日)

- 1 この法律は、昭和二十七年八月一日から施行する。但し、附則第三項の規定は、公布の日から施行する。
(東京国立博物館の分館の職員に関する経過規定)

- 2 この法律施行の際現に東京国立博物館の分館の職員である者は、別に辞令を發せられない限り、同一の勤務条件をもつて、奈良国立博物館の職員となるものとする。

附則 (昭和二十八年八月十日
法律第九十四号抄)

- 1 この法律は、公布の日から施行する。

附則 (昭和二十八年八月十五日
日法律第二百十三号抄)

- 1 この法律は、昭和二十八年九月一日から施行する。(後略)
- 2 この法律施行前従前の法令の規定によりなされた許可、認可その他の処分又は申請、届出その他の手続は、それぞれ改正後の相当規定に基いてなされた処分又は手続とみなす。
- 3 この法律施行の際従前の法令の規定により置かれていた機関又は職員は、それぞれ改正後の相当規定に基いて置かれるものとみなす。

附則 (昭和二十九年五月二十
九日法律第三百一十一号抄)

- 1 この法律は、昭和二十九年七月一日から施行する。

2 この法律の施行前にした史跡名勝天然記念物の仮指定は、この法律による改正後の文化財保護法(以下「新法」という)第七十一条第二項の規定にかかわらず、新法第六十九条第一項の規定による指定があつた場合の外、この法律の施行の日から三年以内に同条同項の規定による指定がなかつたときは、その効力を失う。

- 3 この法律の施行前六月以内にこの法律による改正前の文化財保護法第四十三条第一項若しくは第八十条第一項の規定によつてした現状変更等の許可若しくは不許可の処分又は同法第四十五条第一項若しくは第八十一条第一項の規定によつてした制限、禁止又は命令で特定の者に対して行われたものに不服のある者は、この法律の施行の日から三十日以内に委員会に対して異議の申立をすることが出来る。この場合には、第八十五条の二第二項及び第三項並びに第八十五条の三から第八十五条の九までの規定を準用する。
- 4 この法律の施行前にした行為に対する罰則の適用については、なお従前の例による。
- 5 史跡名勝天然記念物を管理すべき団体の指定等に関する政令(昭和二十八年政令第二百八十九号)は、廃止する。

6 旧史跡名勝天然記念物を管理すべき団体の指定等に関する政令(昭和二十九年政令第一号)は、廃止する。

- 1 項の規定により指定を受けた地方公共

団体その他の団体及び同令附則第二項の規定により同令第一条第一項の規定により指定を受けた地方公共団体その他の団体とみなされたもので法人であるものは、新法第七十一条の二第一項又は第九十五条第一項の規定により指定を受けた地方公共団体その他の法人とみなす。

- 7 前項に規定する団体で法人でないものには、新法第七十一条の二、第九十五条又は第九十五条の三の規定にかかわらず、この法律の施行の日から一年間は、新法第七十一条の二第一項、第九十五条第一項又は第九十五条の三第一項に規定する管理及び復旧を行わせることができる。この場合には、新法中第七十一条の二第一項又は第九十五条第一項の規定による指定を受けた法人に関する規定を準用する。

附則 (昭和三十一年六月十二日
日法律第四百八十八号抄)

- 1 この法律は、地方自治法の一部を改正する法律(昭和三十一年法律第四百八十八号)の施行の日から施行する。

文化財保護委員会委員

- 委員長 高橋誠一郎
委員 矢代 幸雄
細川 護立
川北 禎一
内田 祥三

文化財専門審議会令

- (昭和二十五年十月十三日
政令第三百九号)
沿革 昭和二十八年政令第二号

(第一次改正)
昭和二十九年政令第六
十三号(第二次改正)

文化財専門審議会令

内閣は、文化財保護法(昭和二十五年法律第二百十四号)第二十一条第五項の規定に基き、この政令を制定する。
(所掌事務)

- 第一条 文化財専門審議会(以下「審議会」という)は、文化財保護委員会(以下「委員会」という)の諮問に応じ、左に掲げる事項を調査審議し、及び文化財の保存又は活用に関する専門的又は技術的事項に関し必要と認める事項を委員会に建議する。

- 一 文化財保護法(以下「法」という)第二十一条第二項各号に掲げる事項
- 二 法第二十一条第三項の規定により委員会が重要と認めた事項
- 三 法第十六条第二項に規定する重要美術品等の保存に関する重要事項(組織)

- 第二条 審議会は、専門委員九十人以上で組織する。
- 2 特別の事項を調査審議するため必要があるときは、審議会に臨時専門委員を置くことができる。
- 第三条 専門委員及び臨時専門委員は、学識経験のある者のうちから、委員会が任命する。
- 第四条 専門委員の任期は、二年とし、その欠員が生じた場合の補欠専門委員の任期は、前任者の残任期間とする。
- 2 臨時専門委員は、特別の事項の調査

審議が終つたときは、退任するものとする。

3 専門委員及び臨時専門委員は、非常勤とする。

5 第五条 専門委員より会長として互選された者は、審議会の会務を総理する。

2 専門委員により副会長として互選された者は、会長を補佐し、会長に事故があるときは、その職務を代理する。
(分科会)

6 審議会に置かれる分科会は、左表上欄に掲げる通りとし、それぞれ同表下欄に掲げる事項を分掌する。

分科会の名称	分掌事項
第一分科会	建造物以外の有形文化財(埋蔵物であるものを除く)に関する事項
第二分科会	建造物である有形文化財(埋蔵物であるものを除く)に関する事項
第三分科会	記念物、民俗資料及び埋蔵文化財に関する事項
第四分科会	無形文化財に関する事項

2 前項の規定中有形文化財その他文化財に関する用語の定義は、法における用語の定義による。

7 専門委員及び臨時専門委員は、委員会の指名により、前条の分科会のいずれかに分属するものとする。

8 各分科会に属する専門委員により分科会長として互選された者は、各分科会の会務を掌理する。

2 分科会長に事故があるときは、その分科会に属する専門委員のうちから分

科会長があらかじめ指名する者がその職務を代理する。

9 審議会は、その定めるところにより、分科会の議決又は二以上の分科会の合同の議決をもつて、審議会の議決することができる。

(部会)
10 第六条の分科会は、その定めるところにより、部会を置くことができる。

2 部会に属すべき専門委員及び臨時専門委員は、分科会長が指名する。

3 各部会に属する専門委員により部長として互選された者は、各部会の会務を掌理する。

4 分科会は、その定めるところにより、部会の議決又は二以上の部会の合同の議決をもつて、分科会の議決とすることができる。

(議事)
11 審議会は、専門委員及び議事に関係のある臨時専門委員の過半数が出席しなければ、議事を開き議決をすることができない。

2 審議会の議事は、出席した専門委員及び議事に関係のある臨時専門委員の過半数をもつて決し、可否同数のときは、会長の決するところによる。

3 前二項の規定は、分科会又は部会の議事及び二以上の分科会又は部会の合同の議事に準用する。この場合において、二以上の分科会又は部会の合同の議事を整理する会長には、審議会又は

その部会を置いた分科会の定めるところにより、その分科会又は部会の会長のうち一人が当るものとする。

(庶務)
12 審議会の庶務は、委員会事務局において処理する。

(雑則)
13 この政令に定めるもののほか、審議会の議事の手続その他その運営に必要事項は、審議会が定める。

附則
この政令は、公布の日から施行する。

附則(第一次改正の附則)
この政令は、公布の日から施行し、第十二条の改正規定は、昭和二十七年八月一日から適用する。

附則(第二次改正の附則)
この政令は、昭和二十九年七月一日から施行する。

文化財専門審議会議事規則

(昭和三十年三月十五日総会決定)

1 文化財専門審議会令に規定するもののほか、文化財専門審議会(以下「審議会」という。)の議事の手続その他その運営に関し、必要な事項は、この規則の定めるところによる。

2 審議会の会議(以下「会議」という。)は、会長が招集する。

1 一の議案につき、二以上の分科会長が、それぞれ当該分科会の議を経て、議の招集を請求したときは、会長は、

会議を招集しなければならない。

3 会長は、会議の議長となり、議事を整理する。

4 会長及び副会長とともに事故があるときは、あらかじめ会長の指名する委員が会長の職務を代理する。

5 発言しようとする者は、議長の許可を受けなければならない。

6 建議案を提出しようとする者は、案を作り、三人以上の賛成者として、会長に差し出さなければならない。

7 修正の動議を提出しようとする者は、案を作り、議長に差し出さなければならない。ただし、輕易の修正については、口頭で述べることができ

8 動議は、賛成がなければ、議題とすることができない。

9 議事の採決は、起立又は挙手によつてきめる。ただし、議決により、記名投票又は無記名投票によつて行

10 文化財保護委員会の委員及び事務局職員は、会議において、発言をすることができない。

11 第二項第一項、第三項から第五項まで及び第七項から第十項までの規定は、分科会及び部会について準用する。

12 二以上の分科会の合同の議事を整理する会長は、当該二以上の分科会の会長が協議して定める。

第十三条 一の分科会に分属する専門委員は、他の分科会又は他の分科会の部会の会議に出席して意見を述べることができる。

2 前項の場合には、他の分科会又は他の分科会の部会に出席することについて、当該他の分科会又は他の分科会の部会の会長の承認を得なければならぬ。

第十四条 審議会に、幹事及び書記を置く。

第十五条 この規則に定めるもののほか、審議会の運営に関し、必要な事項は、審議会の承認を経て会長が定める。

文化財専門審議会常任委員会設置規則

(昭和三十年三月十五日)
総会 決 定

第一条 文化財専門審議会(以下「審議会」という)に、その能率的かつ一体的運営を期するため、常任委員会を置く。

第二条 常任委員会は、前条の目的を達成するため、左に掲げる事項をつかさどる。

- 一 審議会から附託された事項の調査審議
- 二 審議会から附託された建議案の作成
- 三 審議会から審議会に代つて議決することを附託された事項についての議決

議決

美術関係法規

四 分科会相互間の連絡調整

第三条 常任委員会は、次に掲げる者をもつて組織する。

- 一 審議会会長
- 二 審議会副会長
- 三 審議会副会長代理
- 四 分科会長
- 五 分科会長代理
- 六 部会長

第四条 常任委員会に会長及び副会長を置き、それぞれ審議会の会長及び副会長がこれに当るものとする。

第五条 分科会長である常任委員会の委員は、分科会の分掌事項に関する調査審議の経過及び結果を常任委員会に報告するものとする。

第六条 文化財保護委員会委員並びに議事に関係のある専門委員及び臨時専門委員並びに事務局職員は、常任委員会において発言をすることができる。

第七条 常任委員会の会長は、第二条の事項に関する調査審議の経過及び結果を審議会に報告しなければならない。

第八条 文化財専門審議会議事規則第二条第一項、第三条から第五条まで、第七条から第九条まで及び第十四条の規定は、常任委員会について準用する。

第九条 この規則に定めるもののほか、常任委員会の運営に関し必要な事項は、常任委員会の会長が定める。

文化財専門審議会諮問事項等取扱規則

(昭和三十年三月十五日)
総会 決 定

第一条 文化財専門審議会(以下「審議会」という)に対する文化財保護委員会(以下「委員会」という)の諮問事項及び委員会に対する審議会の建議の取扱については、この規則の定めるところによる。

第二条 審議会に対する委員会の諮問事項で次に掲げるものは、審議会の総会の議決事項とする。

- 一 国宝及び重要文化財の指定基準の制定改廃
- 一 特別史跡名勝天然記念物及び史跡名勝天然記念物の指定基準の制定改廃

三 重要民俗資料の指定基準の制定改廃

四 記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗資料の選択基準の制定改廃

五 重要無形文化財の指定及び保持者の認定の基準の制定改廃

六 記録作成等の措置を講ずべき無形文化財の選択基準の制定改廃

七 前各号に掲げる事項のほか、審議会の会長が総会において議決すべきものと認める事項

第三条 審議会に対する委員会の諮問事項のうち国宝の指定及びその指定の解除に係るものは、第一分科会及び第二分科会の合同の議決事項とする。ただし、前条第七号の適用がある場合を除く。

2 前項の議決事項が第一分科会及び第二分科会以外の分科会の分掌事項に關連する場合には、審議会の会長が第一分科会長及び第二分科会長並びに当該関係分科会長と協議して指定する三以上の分科会の合同の議決事項とする。

第四条 審議会に対する委員会の諮問事項で次に掲げるものは、分科会の分掌事項に於いて、一の分科会の議決事項又は審議会の会長が関係分科会長と協議して指定する二以上の分科会の合同の議決事項とする。ただし、第二十五号を除く各号に掲げる事項については、第二条第七号の適用がある場合を除く。

一 重要文化財の指定及びその指定の解除

- 二 重要文化財(国宝を含む。以下同じ)の管理又は国宝の修理に関する命令
- 三 委員会による国宝の修理又は滅失、き損若しくは盗難の防止の措置の施行
- 四 重要文化財の現状変更の許可
- 五 前号の許可又はその許可の取消の権限の都道府県の教育委員会への委任
- 六 重要文化財の輸出の許可
- 七 重要文化財の環境保全のための制限若しくは禁止又は必要な施設の命令
- 八 重要文化財の買取
- 九 特別史跡名勝天然記念物又は史跡名勝天然記念物の指定及びその指定

- の解除
- 十 史跡名勝天然記念物の仮指定の解除
- 十一 史跡名勝天然記念物（特別史跡名勝天然記念物を含む。以下同じ。）の管理又は特別史跡名勝天然記念物の復旧に関する命令
- 十二 委員会による特別史跡名勝天然記念物の復旧又は滅失、き損、衰亡若しくは盗難の防止の措置の施行
- 十三 史跡名勝天然記念物の現状変更等の許可
- 十四 前号の許可又はその許可の取消の権限の都道府県の教育委員会への委任
- 十五 史跡名勝天然記念物の環境保全のための制限若しくは禁止又は必要な施設の命令
- 十六 史跡名勝天然記念物の無断現状変更等の行われた場合の原状回復の命令
- 十七 重要民俗資料の指定及びその指定の解除
- 十八 重要民俗資料の管理に関する命令
- 十九 重要民俗資料の買取
- 二十 記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗資料の選択
- 二十一 委員会による埋蔵文化財の調査のための発掘の施行
- 二十二 重要無形文化財の指定及びその指定の解除
- 二十三 重要無形文化財の保持者の認

- 定及びその認定の解除
- 二十四 記録作成等の措置を講ずべき無形文化財の選択
- 二十五 前各号に掲げる事項のほか、審議会の会長が分科会において議決すべきものと認める事項
- 第五条 前二条の議決を行う場合において、分科会は、必要と認めるときは、他の分科会又は他の分科会の部会の意見を求めることができる。
- 第六条 委員会に対する審議会の建議は、審議会の総会の議決事項とする。
- 第七条 審議会の総会の議決事項は、関係分科会においてあらかじめ審議するものとする。
- 第一分科会における部会の設置及び議決事項の取扱に関する規程
- (昭和二十九年十一月十九日)
- 第一条 第一分科会に左表上欄に掲げる部会を置き、各部会の分掌事項は、それぞれ同表下欄に掲げるとおりとする。

- 考古部会 考古資料に関する事項
- 第二条 左に掲げる第一分科会の議決事項で第一分科会長が緊急に処理することを要すると認めるもの及び文化財専門審議会の会長が第一分科会において議決すべきものと認めた事項のうち第一分科会長が部会において議決すべきものと認めるものは、部会の分掌事項に於て、一の部会の議決事項又は第一分科会長が部会長と協議して指定する二以上の部会の合同の議決事項とする。
- 一 重要文化財（国宝を含む。以下同じ。）の管理又は国宝の修理に関する命令
- 二 重要文化財の輸出の許可
- 三 重要文化財の環境保全のための制限若しくは禁止又は必要な施設の命令
- 四 重要文化財の買取
- 第三条 第一分科会の議決事項は、関係部会においてあらかじめ審議するものとする。
- 第三分科会における部会の設置及び議決事項の取扱に関する規程
- (昭和二十九年十一月十九日)
- 第一条 第三分科会に左表上欄に掲げる部会を置き、各部会の分掌事項は、それぞれ同表下欄に掲げるとおりとする。

部会の名称	分掌事項
史跡部会	記念物のうち貝塚、古墳、都城跡、城跡、旧宅その他の遺跡に関する事項
名勝部会	記念物のうち庭園、橋り、よら、峡谷、海浜、山岳その他の名勝地に関する事項
天然記念物部会	記念物のうち動物（生息地、繁殖地及び渡来地を含む。）、植物（自生地を含む。）及び地質鉱物（特異な自然の現象の生じている土地を含む。）に関する事項
民俗資料部会	民俗資料に関する事項
埋蔵文化財部会	埋蔵文化財に関する事項

第二条 左に掲げる第三分科会の議決事項で第三分科会長が緊急に処理することを要すると認めるもの及び第三号に掲げる事項でその程度が軽いもの並びに文化財専門審議会の会長が第三分科会において議決すべきものと認めた事項のうち第三分科会長が部会において議決すべきものと認めるものは、部会の分掌事項に於て、一の部会の議決事項又は第三分科会長と協議して指定する二以上の部会の合同の議決事項とする。

(臨) 沼田 政矩
名勝部会
部会長 吉永 義信
部会長代理 辻村 太郎

石井 満吉
関口 鏡太郎
龍居 松之助
谷口 吉郎
堀口 捨巳
沼田 政矩

(兼) 沼田 政矩
(兼) 堀口 捨巳
(臨・兼) 沼田 政矩

天然記念物部会
部会長 本田 正次
部会長代理 渡辺 武男

第四分科会
分科会長 久保田万太郎
分科会長代理 河竹 繁俊
芸能部会
部会長 河竹 繁俊
部会長代理 河竹 繁俊

(兼) 佐竹 義輔
黒田 長礼
黒田 治義
藤本 治義
吉井 義次
辻村 太郎
沼田 政矩

(兼) 藤田 亮策
石田 茂作
梅原 末治
後藤 守一
長谷部 言人
原田 淑人
福山 敏男
八幡 一郎

埋蔵文化財部会
部会長兼代理 藤田 亮策
部会長代理 石田 茂作

民俗資料部会
部会長兼代理 長谷部 言人
部会長代理 岡 正雄

岡 正雄

工芸技術部会
部会長 金田 一京助
部会長代理 今 和次郎

西沢 昂一
野口 真造
水町 和三郎
明石 国助
香取 正彦
藤懸 静也
松田 権六
宮形 武次
溝口 三郎
三矢 宮松

河竹 繁俊
河竹 繁俊
久保田万太郎
久保田万太郎

河竹 繁俊
加藤 成之
久保田万太郎
小宮 豊隆
蘭 広茂
高安 六郎
田辺 尚雄
土岐 善麿
新関 良三
野々村 戒三
花柳 芳三郎
本田 安次
町田 嘉章
三宅 周太郎
西角 井正慶
柳田 国男
吉川 義男
瓜生 順良
内藤 誉三郎

文化財保護委員会事務局内部組織

(文部省組織令抄)

(昭和二十七年八月三十日)
(政令第三百八十七号)

第二章 文化財保護委員会事務局

(事務局の分課)

第四十九条 文化財保護委員会事務局に左の六課を置く。

- 一 庶務課
- 二 会計課
- 三 記念物課
- 四 美術工芸課
- 五 建造物課
- 六 無形文化課

(庶務課)

第五十条 庶務課においては、左の事務をつかさどる。

- 一 文化財保護委員会(以下「委員会」という。)の機密に関すること。

- 二 委員会の公印を制定し、並びに委員長、事務局長及び次長の官印及び委員会印を管守すること。
- 三 委員会の組織及び定員に関すること。
- 四 委員会の職員の職階、任免、給与、分限、懲戒、服務その他の人事並びに教養及び訓練に関すること。
- 五 委員会に関する栄典及び表彰に関すること。
- 六 委員会の所管行政について総合調整を行うこと。
- 七 委員会の所掌事務に関する法令案を作成すること。
- 八 公文書類を審査し、接受し、発送し、編集し、及び保存すること。
- 九 委員会の所掌事務の監察に関すること。
- 十 委員会の政策の普及並びに文化財に関する知識の普及及び理解の徹底その他広報に関すること。
- 十一 委員会の所掌事務に関する会議、研究会その他の催しの主催又はこれらへの参加に関すること。
- 十二 文化財の保存又は活用に関する条約その他の国際約束の実施及び文化財の保存又は活用のための国際的諸活動に関すること。
- 十三 地方公共団体の行う文化財の保存及び活用のための措置に関し、教育委員会の報告を受け、及びこれに対し指導と助言を与えること。
- 十四 都道府県の教育委員会その他の

関係機関に対し、委員会の所掌事務
に關する一般的、共通の事項につい
て連絡し、及び助言すること。

十五 委員会の所掌事務に關する民法
(明治二十九年法律第八十九号)第三
十四条に規定する法人に關する事務
を処理すること。

十六 委員会に対する異議の申立及び
委員会の行方聴聞に關する事務を処
理すること。

十七 委員会の所掌事務に關する事項
の官報掲載に關すること。

十八 委員会及び文化財専門審議会の
会議その他庶務に關すること。

十九 国立博物館及び国立文化財研究
所に關する事務を処理すること。

二十 重要文化財(国宝を含む。以下
第五十四条第一号及び第五十五条第
一号の場合を除き同様とする。)につ
いての国庫補助、国庫負担及び損害
補償に關すること。

二十一 重要無形文化財についての国
庫補助、国庫負担及び損害補償並び
に重要無形文化財以外の無形文化財
についての国庫補助に關すること。

二十二 重要民俗資料についての国庫
補助、国庫負担及び損害補償並びに
無形の民俗資料についての国庫補助
に關すること。

二十三 史跡名勝天然記念物(特別史
跡名勝天然記念物を含む。以下同
じ。)についての国庫補助、国庫負担
及び損害補償に關すること。

二十四 重要文化財及び重要民俗資料
の出品に対する給与金に關するこ
と。

二十五 重要文化財及び重要民俗資料
の買取に關すること。

二十六 委員会による埋蔵文化財の調
査のための発掘の施行に係る損害補
償に關すること。

二十七 埋蔵文化財の発見に対する報
償金に關すること。

二十八 重要文化財、重要民俗資料又
は史跡名勝天然記念物を管理すべき
地方公共団体その他の法人の指定及
びその解除に關すること。

二十九 委員会の権限の委任に關する
事務を処理すること。

三十 文化財の保存及び活用に關する
一般的統計調査に關すること。

三十一 文化財に關する調査研究の委
託に關すること。

三十二 委員会の所掌事務で他の所掌
に属しない事務を処理すること。

第五十一条 削除
(會計課)

第五十二条 會計課においては、左の事
務をつかさどる。

一 委員会の経費及び収入の予算、決
算及び會計並びに會計の監査に關す
ること。

二 行政財産及び物品の管理に關する
こと。

三 国の所有又は占有に属する重要文
化財、重要民俗資料又は史跡名勝天

然記念物の管理について連絡調整す
ること。

四 委員会の管理する事務所等の營繕
に關すること。

五 委員会の職員の衛生、医療その他
福利厚生に關すること。

六 委員会の職員の共済組合に關する
こと。

七 委員会の職員に貸与する国設宿舍
に關する事務を処理すること。

八 庁内の取締に關すること。

九 委員会の所掌事務に關する物資の
割当及びあつ旋その他物資の確保に
ついでに總括に關すること。

(記念物課)
第五十三条 記念物課においては、左の
事務をつかさどる。

一 重要民俗資料、史跡、名勝、天然
記念物、特別史跡、特別名勝又は特
別天然記念物の指定及びその解除に
關すること。

二 無形の民俗資料のうち委員会が記
録を作成すべきもの又は記録の作成
等につき補助すべきものの選択に關
すること。

三 重要民俗資料及び史跡名勝天然記
念物の管理又は修理若しくは復旧に
ついでに命令、勸告、指示及び指揮
監督に關すること。但し、建造物課
の所掌に属するものを除く。

四 特別史跡名勝天然記念物の復旧及
び滅失、き損、盗難又は喪亡の防止
の措置の施行に關すること。

五 重要民俗資料の現状変更及び輸出
についての届出に關すること。

六 史跡名勝天然記念物の現状変更等
の許可及び史跡名勝天然記念物の環
境保全のための制限若しくは禁止
又は必要な施設の命令に關するこ
と。

七 史跡名勝天然記念物についての原
状回復の命令に關すること。

八 重要民俗資料及び史跡名勝天然記
念物についての調査並びに史跡名勝
天然記念物の調査のために必要な措
置の施行に關すること。

九 重要民俗資料及び史跡名勝天然記
念物の管理又は復旧についての届出
に關すること。

十 重要民俗資料の出品又は公開につ
いての命令、勸告、承認及び届出に
關すること。

十一 出品され、又は管理若しくは修
理の委託を受けた重要民俗資料の管
理又は修理に關すること。

十二 管理又は復旧の委託を受けた史
跡名勝天然記念物の管理又は復旧に
關すること。

十三 無形の民俗資料の記録の作成等
の実施に關すること。

十四 遺跡発見の届出に關すること。

十五 埋蔵文化財に係る土地の発掘に
關する届出、指示及び命令に關する
こと。

十六 委員会による埋蔵文化財の調査
のための発掘の施行に關すること。

十七 埋蔵物として委員会に提出された物件の鑑査に關すること。

十八 埋蔵物として委員会に提出された文化財で国庫に帰属したものの譲与及び譲渡に關すること。

十九 国の所有又は占有に屬する重要民俗資料及び史跡名勝天然記念物並びに埋蔵物として委員会に提出された文化財で国庫に帰属したものの管理、修理及び復旧に關すること。

二十 重要民俗資料、選択された無形の民俗資料及び史跡名勝天然記念物に關する台帳の整備に關すること。

二十一 民俗資料、記念物及び埋蔵文化財に關し、専門的、技術的な指導と助言を与えること。

二十二 有形の民俗資料、記念物及び埋蔵文化財に關する記録、写真、複写及び複製に關すること。

(美術工芸課)

第五十四条 美術工芸課においては、左の事務をつかさどる。

一 建造物以外の有形文化財(以下「美術工芸品」という。)としての国宝又は重要文化財の指定及びその解除に關すること。

二 美術品若しくは骨とう品として価値のある火なわ銃式火器又は美術品として価値のある刀剣類の登録に關すること。

三 美術工芸品である重要文化財の管理又は修理についての命令、勧告、指示及び指揮監督に關すること、但

し、建造物課の所掌に屬するものを除く。

四 美術工芸品である国宝の修理及び滅失、き損又は盜難の防止の措置の施行に關すること。

五 美術工芸品である重要文化財の出品又は公開についての、命令、勧告、承認及び許可に關すること。

六 美術工芸品である重要文化財の現状変更及び輸出等の許可並びにその環境保全のための制限若しくは禁止又は必要な施設の命令に關すること。

七 美術工芸品である重要文化財についての調査に關すること。

八 重要文化財の輸出の禁止の確保に關すること。

九 美術工芸品である重要文化財の管理又は修理についての届出に關すること。

十 出品され、又は管理若しくは修理の委託を受けた美術工芸品である重要文化財の管理又は修理に關すること。

十一 国の所有又は占有に屬する美術工芸品である重要文化財の管理又は修理に關すること。

十二 美術工芸品に關し、専門的、技術的な指導と助言を与えること。

十三 美術工芸品である重要文化財の管理及び修理に必要な資料を刊行すること。

十四 美術工芸品に關し、専門的、技

術的な指導と助言を与えること。

十五 文化財保護法(昭和二十五年法律第二百四十四号)第一百六条の規定によりなおその効力を有する旧重要美術品等の保存に關する法律(昭和八年法律第四十三号。以下「旧法」という。)の施行に關する事務のうち美術工芸品に關するものを処理すること。

十六 美術工芸品である重要文化財の管理のための防火施設その他の保存施設に關し、建造物課に対し勧告すること。

第五十五条 建造物課においては、左の事務をつかさどる。

一 建造物としての国宝又は重要文化財の指定及びその解除に關すること。

二 建造物である重要文化財の管理又は修理についての命令、勧告、指示及び指揮監督に關すること。

三 建造物である国宝の修理及び滅失、き損又は盜難の防止の措置の施行に關すること。

四 建造物である重要文化財の出品又は公開についての命令、勧告、承認及び許可に關すること。

五 建造物である重要文化財の現状変更及び輸出の許可並びにその環境保全のための制限若しくは禁止又は必要な施設の命令に關すること。

六 重要文化財・重要民俗資料又は史

跡名勝天然記念物の管理のための防火施設その他の保存施設に關する命令、勧告、指示及び指揮監督並に文化財の防火施設その他の保存施設に關する専門的、技術的な指導と助言に關すること。

七 建造物である重要文化財についての調査に關すること。

八 建造物である重要文化財の管理又は修理についての届出に關すること。

九 出品され、又は管理若しくは修理の委託を受けた建造物である重要文化財の管理又は修理に關すること。

十 国の所有又は占有に屬する建造物である重要文化財の管理又は修理に關すること。

十一 建造物である重要文化財に關する台帳の整備に關すること。

十二 建造物に關し、専門的、技術的な指導と助言を与えること。

十三 建造物に關する記録、写真及び複製に關すること。

十四 旧法の施行に關する事務のうち建造物に關するものを処理すること。

(無形文化課)

第五十六条 無形文化課においては、左の事務をつかさどる。

一 重要無形文化財の指定及びその解除に關すること。

二 重要無形文化財の保持者の認定及びその解除に關すること。

三 重要無形文化財以外の無形文化財のうち委員会が記録を作成すべきもの又は記録の作成等につき補助すべきものの選択に關すること。

四 重要無形文化財の保持者に關する届出に關すること。

五 重要無形文化財についての記録の作成、伝承者の養成その他その保存のための措置の実施に關すること。

六 重要無形文化財の公開及び重要無形文化財の記録の公開についての勸告及び承認に關すること。

七 重要無形文化財の保存に關し、助言と勸告を与えること。

八 無形文化財の記録の作成等の実施に關すること。

九 文化財の修理技術者の養成に關すること。

十 重要無形文化財及び選択された無形文化財に關する台帳の整備に關すること。

附則

1 この政令は、昭和二十七年九月一日から施行する。

2 略

文化財保護委員会事務局

局長 岡田 孝平

次長 清水 康平

庶務課長 西森 馨

会計課長 細川 可賀

記念物課長 平岡 修

美術工芸課長 本岡 順治

建造物課長 関野 克

無形文化課長 佐藤 薫
文化財管理官 武井 貞賢

東京国立博物館組織規程

(昭和二十六年一月三十一日)
文化財保護委員会規則第四号

沿革 昭和二十七年文化財保護委員会規則第二号(第一次改正)

昭和二十七年文化財保護委員会規則第九号(第二次改正)

文化財保護法(昭和二十五年法律第二百十四号)第二十二條第四項の規定に基づき、東京国立博物館組織規程を次のように定める。

東京国立博物館組織規程

(東京国立博物館の組織)

第一条 東京国立博物館(以下「東京博物館」という。)の所掌事務を分掌せしめるため、左の二部を置く。

庶務部
学芸部

(庶務部の分課)

第二条 庶務部に左の三課を置く。

管理課
会計課
普及課

(管理課の所掌事務)

第三条 管理課においては、左の事務をつかさどる。

- 一 機密に關すること。
- 二 別に文化財保護委員会から委任を受けた範囲における、職員的人事に關すること。

三 公文書類の接受、発送、編集及び保存に關すること。

四 公印を管守すること。

五 東京国立博物館評議員會に關すること。

六 警備に關すること。

七 翻訳、通訳その他渉外に關すること。

八 他部課の所掌に属さない事務を処理すること。

九 東京博物館の所掌事務の総合調整に關すること。

(会計課の所掌事務)

第四条 会計課においては、左の事務をつかさどる。

一 予算案の準備等予算に關すること。

二 経費及び収入の決算その他会計に關すること。

三 行政財産及び物品の管理に關すること。

四 營繕に關すること。

五 職員福利厚生に關すること。

(普及課の所掌事務)

第五条 普及課においては、左の事務をつかさどる。

一 この館の事業を行うために必要な美術及び歴史に關する知識の普及に關すること。

二 外国人に対しこの館の事業に關する美術及び歴史資料を解説すること。

三 この館の事業に關する出版物の刊

行及び頒布に關すること。
四 その他この館の事業の普及宣伝に關すること。

2 普及課が前項各号の事務を行うに當つては、学芸部各課の助言を得、又は学芸部各課と連絡して処理するものとする。

(学芸部の分課)

第六条 学芸部に左の四課を置く。

美術課

工芸課

考古課

資料課

(美術課の四室及び所掌事務)

第七条 美術課に、美術課の所掌事務を分掌せしめるため、絵画室、彫刻室、書跡室及び建築室の四室を置く。

2 絵画室、彫刻室、書跡室及び建築室の四室は、それぞれ絵画、彫刻、書跡及び建築に關する陳列品の収集、保管、陳列、鑑査、修理、模写、模造、調査研究及び解説に關する事務をつかさどる。

(工芸課の五室及び所掌事務)

第八条 工芸課に、工芸課の所掌事務を分掌せしめるため、金工室、刀劍室、陶磁室、漆工室及び染織室の五室を置く。

2 金工室、刀劍室、陶磁室、漆工室及び染織室の五室は、それぞれ金工、刀劍、陶磁、漆工及び染織に關する陳列品の収集、保管、陳列、鑑査、修理、模写、模造、調査研究及び解説に關す

る事務をつかさどる。

(考古課の四室及び所掌事務)

第九條 考古課に、考古課の所掌事務を分掌せしめるため、先史室、原史室、有史室及び土俗室の四室を置く。

2 先史室、原史室、有史室及び土俗室の四室は、それぞれ先史考古、原史考古、有史考古及び土俗に関する陳列品の収集、保管、陳列、鑑査、修理、模写、模造、調査研究及び解説に関する事務をつかさどる。

(資料課の五室及び所掌事務)

第十條 資料課に、資料課の所掌事務を分掌せしめるため、庶務室、資料室、図書室及び写真室の四室を置く。

2 庶務室は、学芸部の一般庶務をつかさどる。

3 資料室は、図書以外の資料の収集、整理、保管、閲覧及び調査研究に関する事務をつかさどる。

4 図書室は、図書の収集、整理、保管、閲覧及び調査研究に関する事務をつかさどる。

5 写真室は、写真の作成、収集、整理、保管、閲覧及び調査研究に関する事務をつかさどる。

6 資料課がその所掌事務を行うに当つては、学芸部各課と連絡して処理するものとする。

第十一條 東京博物館に館長及び次長を置く。

2 館長は、館務を総理する。

3 次長は、館長を助けて館務を処理す

る。

(東京国立博物館評議員会)

第十二條 東京博物館に東京国立博物館評議員会(以下「評議員会」といふ)を置く。

2 評議員会は、館長の諮問に応じて、東京博物館の重要事項について調査審議するのほか、東京博物館の重要事項について館長に助言するものとする。

3 評議員会は、二十人以内の評議員で組織する。

4 評議員は、学識経験のあるものの中から、文化財保護委員会が任命する。

5 評議員の任期は、二年とする。

6 この規則に定めるもののほか、評議員会の議事その他運営に関し必要な事項は、評議員会の議を経て、館長が定める。

附則

この規則は、公布の日から施行し、昭和二十五年八月二十九日から適用する。

附則 (第二次改正の附則)

この規則は、昭和二十七年四月一日から施行する。

附則 (第二次改正の附則)

この規則は、公布の日から施行し、昭和二十七年八月一日から適用する。

京都国立博物館組織規程

(昭和二十七年三月二十五日)
文化財保護委員会規則第三号)

文化財保護法(昭和二十五年法律第二百一十四号)第二十二條第四項の規定に基

き、京都国立博物館組織規程を次のように定める。

京都国立博物館組織規程

(京都国立博物館の組織)

第一條 京都国立博物館(以下「京都博物館」といふ)の所掌事務を分掌させるため、左の二課を置く。

管理課
学芸課
(管理課の所掌事務)

第二條 管理課においては、左の事務をつかさどる。

一 機密に関する事。

二 別に文化財保護委員会から委任を受けた範囲における職員の人事に関する事。

三 公文書類の接受、発送、編集及び保存に関する事。

四 公印を管掌すること。

五 京都国立博物館評議員会に関する事。

六 翻訳、その他渉外に関する事。

七 予算案の準備等予算に関する事。

八 経費及び収入の決算その他会計に関する事。

九 行政財産及び物品の管理に関する事。

十 営繕に関する事。

十一 職員福利厚生に関する事。

十二 警備に関する事。

十三 他課の所掌に属さない事務を処理すること。

十四 京都博物館の所掌事務の総合調整に関する事。

(学芸課の五室及び所掌事務)

第三條 学芸課に、所掌事務を分掌させるため、左の五室を置く。

普及室
美術室
工芸室
考古室

2 普及室においては、この館の事業に関する出版物の刊行及び頒布、この館の事業を行うために必要な美術及び歴史に関する知識の普及その他この館の事業の普及宣伝に関する事務をつかさどる。

3 美術室においては、絵画、彫刻、書跡及び建築に関する陳列品の収集、保管、陳列、鑑査、修理、模写、模造、調査研究及び解説に関する事務をつかさどる。

4 工芸室においては、金工、刀剣、陶磁、漆工及び染織に関する陳列品の収集、保管、陳列、鑑査、修理、模写、模造、調査研究及び解説に関する事務をつかさどる。

5 考古室においては、先史考古、原史考古、有史考古及び土俗に関する陳列品の収集、保管、陳列、鑑査、修理、模写、模造、調査研究及び解説に関する事務をつかさどる。

6 資料室においては、写真の作成並び

に図書、写真その他資料の収集、整理、保管、閲覧及び調査研究に関する事務をつかさどる。

(館長及び次長)

第四条 京都博物館に館長及び次長を置く。

2 館長は、館務を総理する。

3 次長は、館長を助けて館務を処理する。

(京都国立博物館評議員会)

第五条 京都博物館に京都国立博物館評議員会(以下「評議員会」といふ)を置く。

2 評議員会は、館長の諮問に応じて、京都博物館の重要事項について調査審議するのほか、京都博物館の重要事項について館長に助言するものとする。

3 評議員会は、十五人以内の評議員で組織する。

4 評議員は、学識経験のあるもののうちから、文化財保護委員会が任命する。

5 評議員の任期は、二年とする。

6 この規則に定めるもののほか、評議員会の議事その他運営に関し必要な事項は、評議員会の議を経て、館長が定める。

附則

この規則は、昭和二十七年四月一日から施行する。

奈良国立博物館組織規程

(昭和二十七年八月十四日)
文化財保護委員会規則第八号)

美術関係法規

文化財保護法(昭和二十五年法律第二百四十四号)第二十二條第四項の規定に基づき、奈良国立博物館組織規程を次のように定める。

奈良国立博物館組織規程

(奈良国立博物館の組織)

第一条 奈良国立博物館(以下「奈良博物館」といふ)の所掌事務を分掌させるため、左の二課を置く。

管理課

学芸課

(管理課の所掌事務)

第二条 管理課においては、左の事務をつかさどる。

一 機密に関する事。

二 別に文化財保護委員会から委任を受けた範囲における職員的人事に関する事。

三 公文書類の接受、発送、編集及び保存に関する事。

四 公印を管掌すること。

五 奈良国立博物館評議員会に関する事。

六 内外文化の交流その他国際文化に関する事。

七 予算案の準備等予算に関する事。

八 経費及び収入の決算その他会計に関する事。

九 行政財産及び物品の管理に関する事。

十 營繕に関する事。

十一 職員福利厚生に関する事。

十二 警備に関する事。

十三 他課の所掌に属さない事務を処理すること。

十四 奈良博物館の所掌事務の総合調整に関する事。

(学芸課の五室及び所掌事務)

第三条 学芸課に、学芸課の所掌事務を分掌させるため、左の五室を置く。

普及室

美術室

工芸室

考古室

資料室

2 普及室においては、この館の事業に関する出版物の刊行及び頒布、この館の事業を行うために必要な美術及び歴史に関する知識の普及その他この館の事業の普及宣伝に関する事務をつかさどる。

3 美術室においては、絵画、彫刻、書跡及び建築に関する陳列品の収集、保管、陳列、鑑査、修理、模写、模造、調査研究及び解説に関する事務をつかさどる。

4 工芸室においては、金工、刀剣、陶磁、漆工及び染織に関する陳列品の収集、保管、陳列、鑑査、修理、模写、模造、調査研究及び解説に関する事務をつかさどる。

5 考古室においては、先史考古、原史考古、有史考古及び土俗に関する陳列品の収集、保管、陳列、鑑査、修理、模写、模造、調査研究及び解説に関する事務をつかさどる。

模写、模造、調査研究及び解説に関する

る事務をつかさどる。

6 資料室においては、写真の複製並びに図書、写真その他資料の収集、整理、保管、閲覧及び調査研究に関する事務をつかさどる。

(館長及び次長)

第四条 奈良博物館に館長を置く。館長は、館務を総理する。

2 奈良博物館に次長を置くことができず。次長は、館長を助けて館務を処理する。

(奈良国立博物館評議員会)

第五条 奈良博物館に奈良国立博物館評議員会(以下「評議員会」といふ)を置く。

3 評議員会は、館長の諮問に応じて、奈良博物館の重要事項について調査審議するのほか、奈良博物館の重要事項について館長に助言するものとする。

3 評議員会は、十五人以内の評議員で組織する。

4 評議員は、学識経験のあるものうちから、文化財保護委員会が任命する。

5 評議員の任期は、二年とする。

6 この規則に定めるもののほか、評議員会の議事その他運営に関し必要な事項は、評議員会の議を経て、館長が定める。

附則

この規則は、公布の日から施行し、昭和二十七年八月一日から適用する。

東京国立文化財研究所組織規程

(昭和二十七年三月二十五日)
文化財保護委員会規則第四号

沿革 昭和二十九年六月二十九日
文化財保護委員会規則第一号(第一次改正)

文化財保護法(昭和二十五年法律第二百十四号)第二十三条第四項の規定に基づき、東京国立文化財研究所組織規程を次のように定める。

東京国立文化財研究所組織規程

(東京国立文化財研究所の組織)

第一条 東京国立文化財研究所の所掌事務を分掌させるため、左の三部及び一室を置く。

- 美術部
- 芸能部
- 庶務室

保存科学部

(美術部の三室及び所掌事務)

第二条 美術部に、美術部の所掌事務を分掌させるため、第一研究室、第二研究室及び資料室の三室を置く。

2 第一研究室においては、わが国の上代、中世及び近世の美術並びに東洋美術の調査研究並びにその結果の公表に關する事務をつかさどる。

3 第二研究室においては、わが国の近代及び現代の美術並びに西洋美術の調査研究並びにその結果の公表に關する事務のほか、黒田記念室に關する事務をつかさどる。

をつかさどる。

4 資料室においては、美術研究資料の作成、収集、整理、保管、公表及び閲覧並びに美術研究資料に関する写真の作成及びその原板の保管並びにエツクス線写真、赤外線写真、紫外線写真その他の特殊写真による美術の研究に關する事務をつかさどる。

(芸能部の三室及び所掌事務)

第三条 芸能部に、芸能部の所掌事務を分掌させるため、演劇研究室、音楽舞踊研究室及び郷土芸能研究室の三室を置く。

2 演劇研究室においては、演劇及びその保存に關する調査研究並びにその結果の公表に關する事務をつかさどる。

3 音楽舞踊研究室においては、音楽及び舞踊並びにその保存に關する調査研究並びにその結果の公表に關する事務をつかさどる。

4 郷土芸能研究室においては、郷土芸能及びその保存に關する調査研究並びにその結果の公表に關する事務をつかさどる。

(保存科学部の三室及び所掌事務)

第四条 保存科学部に、保存科学部の所掌事務を分掌させるため、化学研究室、物理研究室及び生物研究室の三室を置く。

2 化学研究室においては、文化財及びその保存に關する化学及び分析的調査研究並びにその結果の公表に關する事務をつかさどる。

3 物理研究室においては、文化財及びその保存に關する物理学的調査研究並びにその結果の公表に關する事務をつかさどる。

4 生物研究室においては、文化財及びその保存に關する生物学的調査研究並びにその結果の公表に關する事務をつかさどる。

(庶務室の所掌事務)

第五条 庶務室においては、左の事務をつかさどる。

一 別に文化財保護委員会から委任を受けた範囲における職員の人事に関すること。

二 公文書類の接受及び公印の管守その他庶務に關すること。

三 経費及び収入の予算、決算その他会計に關すること。

四 行政財産及び物品の管理に關すること。

五 職員福利厚生に關すること。

附則
1 この規則は、昭和二十七年四月一日から施行する。

2 美術研究所組織規程(昭和二十六年文化財保護委員会規則第五号)は、廃止する。

附則

この規則は、昭和二十九年七月一日から施行する。

奈良国立文化財研究所組織規程

(昭和二十七年三月二十五日)
文化財保護委員会規則第五号

沿革 昭和二十九年六月二十九日
文化財保護委員会規則第一号(第一次改正)

文化財保護法(昭和二十五年法律第二百十四号)第二十三条第四項の規定に基づき、奈良国立文化財研究所組織規程を次のように定める。

奈良国立文化財研究所組織規程

(奈良国立文化財研究所の組織)

第一条 奈良国立文化財研究所の所掌事務を分掌させるため、左の四室を置く。

- 美術工芸研究室
- 建造物研究室
- 歴史研究室
- 庶務室

(美術工芸研究室の所掌事務)

第二条 美術工芸研究室においては、絵画、彫刻、工芸品、書跡その他建造物以外の有形文化財並びに工芸技術に關する調査研究並びにその普及及び活用に關する事務をつかさどる。

(建造物研究室の所掌事務)

第三条 建造物研究室においては、建造物に關する調査研究並びにその結果の普及及び活用に關する事務をつかさどる。

(歴史研究室の所掌事務)

第四条 歴史研究室においては、考古及び史跡に關する調査研究並びにその結果の普及及び活用に關する事務をつかさどる。

(庶務室の所掌事務)

第五条 庶務室においては、左の事務をつかさどる。

- 一 別に文化財保護委員会から委任を受けた範囲における職員の人事に関すること。
- 二 公文書類の接受及び公印の管守その他事務に関する事。
- 三 経費及び収入の予算、決算その他会計に関する事。
- 四 行政財産及び物品の管理に関する事。
- 五 職員の福利厚生に関する事。

附則

この規則は、昭和二十七年四月一日から施行する。

附則

この規則は、昭和二十九年七月一日から施行する。

文部省社会教育局芸術課

文部省組織令(抄)

(昭和二十七年八月三十日)
(政令第三百八十七号)

(社会教育局の分課)

第二十三条 社会教育局に左の五課を置く。

- 一 社会教育課
- 二 体育課
- 三 芸術課
- 四 視聴覚教育課
- 五 著作権課

(芸術課)

第二十七条 芸術課においては、左の事

美術関係法規

務をつかさどる。

- 一 文学、音楽、美術、演劇その他の芸術及び国民娯楽に関し、左に掲げる事務を行うこと。
- イ 情報、資料の収集及び利用に関する事。
- ロ 研究集会、講習会、展示会その他の催しの主催又はこれらへの参加に関する事。
- ハ 向上及び普及のための援助と助言に関する事。
- 二 国立近代美術館及び日本芸術院に関し、予算案の準備その他の他部局に属しない事務を処理すること。
- 三 芸術に関する団体との連絡に関する事。

附則

1 この政令は、昭和二十七年九月一日から施行する。

2 略

国立近代美術館

国立近代美術館関係
文部省設置法抜萃

文部省設置法(抄)

(昭和二十四年五月三十一日)
(法律第一四六号)

第二章 本省

第一節 内部部局

(社会教育局の事務)

第十条 社会教育局においては、左の事務をつかさどる。

- 一 国立科学博物館、国立近代美術館及び日本芸術院に関し、予算案の準備その他の他部局に属しない事務を行うこと。

(以下省略)

第二節 国立の学校その他の機関

(国立の学校等)

第十四条 第二十六条及び第二十七条に規定するもののほか、文部大臣の所轄の下に、国立の学校及び左の機関を置く。

- 日本ユネスコ国内委員会
- 国立教育研究所
- 国立科学博物館
- 国立近代美術館
- 緯度観測所
- 統計数理研究所
- 国立遺伝学研究所
- 国立言語研究所
- 日本芸術院
- (評議員会)

第十五条 前条の機関のうち、国立教育研究所、国立科学博物館、国立近代美術館、統計数理研究所及び国立遺伝学研究所にそれぞれ評議員会を置く。

- 2 評議員会は、それぞれの機関の事業計画、経費の見積、人事その他の運営管理に関する重要事項について、それぞれの機関の長に助言する。
- 3 それぞれの機関の長は、評議員会の推薦により、文部大臣が任命する。
- 4 評議員会は、二十人以上の評議員で組織する。
- 5 評議員は、学識経験のある者のうち

から、文部大臣が任命する。

6 評議員の推薦、任期その他評議員会の組織及び運営の細目については、政令で定める。

(国立近代美術館)

第二十条 国立近代美術館は、近代美術に関する作品その他の資料を収集、保管して公衆の観覧に供し、あわせてこれに関連する調査研究及び事業を行う機関とする。

- 2 国立近代美術館は、東京都に置く。
- 3 国立近代美術館の内部組織は、文部省令で定める。

附則

1 この法律は、昭和二十四年六月一日から施行する。

(以下省略)

文部省設置法施行規則(抄)

(昭和二十八年一月十三日)
(文部省令第二号)

第三章 所轄機関

第四節 国立近代美術館

(館長及び次長)

第四十五条 国立近代美術館に館長及び次長を置く。

- 一 館長は、館務を掌理する。
- 二 次長は館長を助け、館務を整理する。

(内部組織)

第四十六条 国立近代美術館に左の二課を置く。

- 一 庶務課
- 二 事業課

(庶務課)

第四十七條 庶務課においては、左の事務をつかさどる。

- 一 職員の人事に関する事務を処理すること。
- 二 職員の衛生、医療及び福利厚生に関する事務を処理すること。
- 三 公文書類を接受し、発送し、編集し、及び保存すること。
- 四 公印を管守すること。
- 五 国立近代美術館の所掌事務に關し、連絡調整すること。
- 六 国立近代美術館評議員会に關すること。
- 七 予算に關する事務を処理すること。
- 八 経費及び収入の決算その他会計に關する事務を処理すること。
- 九 行政財産及び物品の管理に關する事務を処理すること。
- 十 展示品の保全の爲の警備に關すること。
- 十一 庁内の取締に關すること。
- 十二 前各号に掲げるものの外、他の所掌に屬しない事務を処理すること。

(事業課)

第四十八條 事業課においては、左の事務をつかさどる。

- 一 近代美術に關する作品その他の資料を収集し、保管し、展示し、解説し、及び修理すること。
- 二 前号に掲げる資料を館外で展示すること。

ること。

- 三 近代美術に關し、専門的な調査研究を行うこと。
- 四 近代美術に關する出版物等を作成し、及びこれらを刊行、頒布する等利用に供すること。
- 五 近代美術に關する展覧会、講演会、講習会、映写会、研究会等の催しを企画し、及び実施すること。
- 六 第一号に掲げる資料の利用に關し、内外の美術館、博物館、その他関係団体等と連絡協力して、刊行物、情報の交換等の相互援助を行うこと。

- 1 この省令は、公布の日から施行し、昭和二十八年一月一日から適用する。
- 2 左に掲げる省令は、廃止する。

附則

- 1 この省令は、公布の日から施行し、昭和二十八年一月一日から適用する。
- 2 左に掲げる省令は、廃止する。
- (前略)
- 六 国立近代美術館組織規程(昭和二十七年文部省令第二十一号)(後略)

文部省組織令(抄)

(昭和二十七年八月三十日政令第三百八十七号)

- 第一章 本省の内部部局
- 第四節 社会教育局

(芸術課)

第二十七條 芸術課においては、左の事務をつかさどる。

- 一 (省略)
- 二 国立近代美術館及び日本芸術院に關し、予算案の準備その他の他部局に屬しない事務を処理すること。

- 三 (省略)
- 附則
- 1 この政令は、昭和二十七年九月一日から施行する。
- 2 (省略)

文部省所轄機関評議員会令(抄)

(昭和二十四年七月十八日政令第二百七十四号)

- 第三章 国立近代美術館評議員会(所掌事務)
- 第十二條 国立近代美術館に置かれる評議員会(以下「国立近代美術館評議員会」という。)は、左に掲げる事項に關して審議し、国立近代美術館長に助言する。

- 一 国立近代美術館の行い毎年の事業の計画
- 二 国立近代美術館の行い事業の経費その他国立近代美術館の運営に必要な経費の見積
- 三 国立近代美術館の人事その他の運営管理に關する重要事項

第十三條 国立近代美術館評議員会は、評議員二十人以内で組織する。

(準用規定)

第十四條 第一条第二項から第四項まで、第二条第二項及び第三条から第九条までの規定は、国立近代美術館評議員会に準用する。

附則

- 1 この政令は、公布の日から施行する。(以下省略)
- 国立近代美術館評議員会運営規則
- (昭和二十八年三月二十四日)国立近代美術館評議員会決定
- 第一条 文部省所轄機関評議員会令(昭和二十四年七月十八日政令第二百七十四号)に規定するものの外、国立近代美術館評議員会(以下「評議員会」という。)の議事その他運営に關し必要な事項は、この規則の定めるところによる。
- 第二条 会長は、會議の会長となり、議事を整理する。
- 第三条 発言しようとする者は、議長の許可を受けなければならない。
- 第四条 国立近代美術館長に対する助言の案を提出しようとする者は、案を作り、三人以上の賛成者と連署して、会長に差し出さなければならない。
- 第五条 動議は、賛成者がなければ、議題とすることができない。
- 第六条 議事の採決は、起立又は挙手によつて行い、但し議決により、記名投票又は無記名投票によつて行いことができる。
- 第七条 評議員会に、幹事及び書記を置くことができる。
- 2 幹事及び書記は、国立近代美術館職員のうちから国立近代美術館長が任命する。
- 第八条 この規則に定めるものの外、評

議員会の運営に関し必要な事項は、評議員会の承認を経て、会長が定める。

附則

この規程は、公布の日から施行し、昭和二十七年九月一日から適用する。

国立近代美術館運営委員会規程

(運営委員会)

第一条 国立近代美術館（以下「館」といふ。）の事業運営等について協議するため、館に運営委員会を置く。

(議長)

第二条 運営委員会の議事を掌理するため、運営委員会に議長を置く。

2 議長は、館長をもつてあてる。

3 館長に事故があるときは、次長が議長の職務を代理する。

(運営委員)

第三条 運営委員会に運営委員十五人以上を置く。

2 運営委員は、学識経験ある者のうちから館長が委嘱する。

3 館長は、特に必要と認めるときは、臨時に運営委員を委嘱することができる。

4 次長は、運営委員会に出席して、議事に参加することができる。

(分科会)

第四条 運営委員会は、館の事業運営上、特に必要と認めるときは、運営委員会の下に、分科会を設けることができる。

2 分科会の委員は、運営委員のうちから議長が委嘱する。

3 次長は、分科会の議長となる。

4 次長に事故があるときは、事業課長が議長の職務を代理する。

(資料の提出及び説明)

第五条 運営委員会及び分科会は、議事の必要により、館職員に資料の提出及び説明を求めることができる。

(庶務)

第六条 運営委員会の庶務は、館が掌る。

(その他)

第七条 前各条に規定する事項の外、運営委員会について必要な事項は、館長が運営委員会と協議して定める。

附則

この規程は、昭和二十七年九月一日から適用する。

日本芸術院

明治四十年勅令第二百二十号をもつて美術審査委員会官制が制定され、これに基づき毎年文部省美術展覧会を開催し、美術審査委員会は美術展覧会の出品を審議した。大正八年に本官制が廃止され、新たに勅令第四百十七号をもつて帝国美術院規定が制定された。帝国美術院は文部大臣の管理に属し美術の発達を裨補することを目的とし、文部大臣の諮詢に応じ、美術に関する意見を開申し、その他美術に関する重要事項を建議する機関であつた。

昭和十年勅令第四百十七号をもつて帝国美術院官制が新たに制定され、帝国美術院規定は廃止された。

昭和十二年勅令第二百八十号をもつて帝国芸術院官制が新たに制定され、美術部門の他に文学及び音楽の両部門が加えられ、同時に帝国美術院官制を廃止された。

昭和二十二年政令第二百五十四号をもつて帝国美術院は日本芸術院と名称が変更され、昭和二十四年六月一日政令第二百八十一号をもつて日本芸術院令が制定せられ、日本芸術院官制は廃止されて今日に至っている。

(文部省設置法抜萃)

第二節 国立の学校その他の機関
(国立の学校等)

第十四条 第二十六条及び第二十七条に規程するもののほか、文部大臣の所轄の下に、国立の学校及び左の機関を置く。

日本ユネスコ国内委員会

国立科学博物館

国立近代美術館

緯度観測所

統計数理研究所

国立道伝学研究所

国立国語研究所

日本芸術院

(日本芸術院)

第二十五条 日本芸術院は、芸術上の功績顕著な芸術家を優遇するために置かれる機関とする。

2 日本芸術院会員には、予算の範囲内で、文部大臣の定めるところにより、年金を支給することができる。

3 日本芸術院の内部組織、会員その他職員及び運営については、政令で定める。

附則

1 この法律は、昭和二十四年六月一日から施行する。

2 左の勅令及び政令は廃止する。但し、法律（これに基く命令を含む。）に別段の定がある場合を除くほか、従前の機関及び職員は、この法律に基く相応の機関及び職員となり、同一性をもつて存続するものとする。

文部省官制

(昭和十七年) 勅令第七百四十八号

(昭和十二年) 勅令第二百八十号

日本芸術院令

(昭和二十四年六月一日) 政令第二八一号

内閣は、文部省設置法（昭和二十四年法律第四百十六号）第二十三条第三項の規定に基き、この政令を制定する。

(日本芸術院の目的)

第一条 日本芸術院は、芸術上の功績顕著な芸術家を優遇するための榮譽機関とする。

2 日本芸術院は、芸術に関する重要事項を審議し、芸術の発達に寄与する活動を行い、及び芸術に関する重要事項について文部大臣に建議することができる。

(組織)

第二条 日本芸術院は、院長一人及び会員百人以内で組織する。

2 日本芸術院に左の三部を置く。

第一部 美術

第二部 文芸

第三部 音楽、演劇、舞踊

3 会員は、いずれかの部に分属する。

第三条 会員は、部会が推薦し、総会の承認を経た候補者につき、院長の申出により、文部大臣が任命する。

2 前項の部会の推薦する者は、部会において芸術上の功績顕著な芸術家につき選挙を行い、部会員の過半数の投票を得た者とする。

3 前項の投票において、病氣その他の事故のため出席できない者は、郵便その他の方法により投票することができ

る。

第四条 会員は、終身とする。但し、会員が、退任を申し出た場合には、総会の承認を経てこれを認めることができる。

第五条 院長は、芸術に関し卓越した識見を有する者につき、会員の選挙により過半数の投票を得た者を、文部大臣が任命する。

2 前項の場合において、過半数の得票者のないときは投票の最多数を得た者一人につき、更に会員が投票を行い、多数の得票を得た者をもつて当選者とする。但し、得票数が同数のときは、年長者をもつて当選者とする。

3 第三条第三項の規定は、前一項の選挙に準用する。

4 院長の任期は、三年とする。

5 院長は、非常勤とする。

6 院長は、院務を総理する。

7 院長に事故があるときは、部長のうち最年長者が、その職務を代理する。

第六条 各部に属する会員により部長として互選された者は、各部の部務を掌理する。

2 部長は、三年ごとに改選する。

(会議)

第七条 日本芸術院の会議は、総会、部会及び連合部会とする。

2 総会は、年一回、院長が招集する。但し、必要があるときは、臨時にこれを招集することができる。

3 部会は、部長が招集する。

4 連合部会は、関係する部の部長の申出により、院長が招集する。

5 総会は、会員の過半数が出席しなければ、議決をすることができない。但し、あらかじめ通知した議題について、書面をもつて意思を表示した者は、その議題に限り、出席したものと認めることができる。

6 総会の議決は、出席した会員の多数による。

7 前一項の規定は、部会及び連合部会の会議に準用する。

(職員)

第八条 日本芸術院に事務長一人及びその他の職員五人以内を置く。

2 事務長は、院長の指揮をうけ、日本芸術院に関する庶務を整理し、その他の職員は、上司の指揮をうけ、庶務に従事する。

(雑則)

第九条 この政令の定めるもののほか、日本芸術院の運営に関し必要な事項は、総会の議を経て院長が定める。

附則

この政令は、公布の日から施行し、昭和二十四年六月一日から適用する。

日本芸術院会則

(昭和二十五年五月三十日 総会 議決)

第一条 日本芸術院各部の定員は、左に掲げる通りとする。

第一部 美術 五十名以内

第二部 文芸 三十名以内

第三部 音楽、演劇、舞踊 二十名以内

第二条 各部に左の分科を置く。

第一部 美術
第一分科 日本画
第二分科 洋画
第三分科 彫塑
第四分科 工芸
第五分科 書画
第六分科 建築

第二部 文芸
第七分科 小説、戯曲
第八分科 詩歌
第九分科 評論、翻訳

第三部 音楽、演劇、舞踊
第十分科 洋楽

第十一分科 邦楽(能楽及び雅楽を含む)

第十二分科 演劇(人形劇及び映画を含む)

第十三分科 舞踊(洋舞及び邦舞を含む)

第三条 日本芸術院会員の候補者を選考するため、日本芸術院に日本芸術院会員選考委員会を置く。

2 前項の委員会については、日本芸術院会員選考委員会規則の定めるところによる。

第四条 日本芸術院は卓越した芸術作品と認められるものを製作した者及び芸術の進歩に貢献する顕著な業績ありと認める者に対して賞を授ける。

2 前項の授賞については、日本芸術院授賞規則の定めるところによる。

第五条 院長は、総会及び連合部会の議長となり議事を整理する。

2 部長は、部会の議長となり、議事を整理する。

3 総会、部会又は連合部会の議事が、可否同数のときは、議長の決するところによる。

第六条 一の部において、その部に属する会員の三分の一以上の請求があるときは、その部の部長は部会を招集しなければならぬ。

2 二の部において、それらの部に属する会員の各三分の一以上の請求があるときは、院長は、連合部会を招集しなければならぬ。

第七条 部会または連合部会の議長は、

必要があると認めるときは、他の部に
属する会員中適当な者を指名して部会
または連合部会に出席を求め、その意
見を求めることができる。

第八条 会議を公開するか否かは、その
都度これを定める。

第九条 この会則の改正は、総会の議決
がなければ行ふことができない。

日本芸術院会員選考委員会規則

昭和二十五年五月三十日
総会議決
昭和二十八年五月二十六日
一部改正
昭和二十九年五月二十一日
一部改正

第一条 日本芸術院令（昭和二十四年六
月一日政令第二八一号）第三条第二項
の規定による部会の行ふ選挙の候補者
（以下「候補者」という。）を選考する
ため、日本芸術院に、日本芸術院会員
候補者選考委員会（以下「委員会」とい
う。）を置く。

第二条 委員会は、三十人以内の委員を
もつて組織し、委員の任期は一年とな
る。但し、再選を妨げない。

2 委員に欠員を生じたときは、各部に
おいて予め定めた順位に従い委員を補
充する。

3 補充委員の任期は、前任者の残任期
間とする。

4 委員会に美術、文芸及び芸能の三選
考部会を置く。

第三条 日本芸術院の各部会員はその互
選により、各々十人以内の委員を選出

美術関係法規

する。

第四条 日本芸術院長は、委員会の委員
長として、その会務を総理する。

2 委員長に事故があるときは、出席委
員により、代理委員長として互選され
たものが、委員長の職務を代理する。

第五条 委員会は、委員の過半数が出席
しなければ議事を開き、議決すること
ができない。但し、委員はむを得ない
事情があるときは、自己の属する部
会の他の委員に、議決権を委任するこ
とができる。

2 前項の規定は、部会の議事に準用す
る。

第六条 日本芸術院会員は、その所属す
る部会に属すべき候補者を当該選考部
会に對し推薦することができる。

第七条 選考部会は、推薦された候補者
につき、選考に必要な調査をしなけれ
ばならない。

2 選考部会は、推薦者及び被推薦者に
對し、選考に必要な資料の提出を求め
ることができる。

3 選考部会は、日本芸術院会員、会員
以外の学識経験者等適當なる者から、
候補者の選考に関し、意見を聴取する
ことができる。

第八条 各選考部会は、被推薦者につ
き、その調査にもとづく調査書を作成
し、順位を附して委員会に報告しなけ
ればならない。

2 委員会は、選考部会の報告にもとづ
き、候補者に推薦された者について、
補充すべき会員数だけの無記名連記投

票を行ふ。

3 前項の場合各部の投票数は同数とな
るより取り計い、また候補者が属すべ
き部会の委員の投票は二倍に計算する
ものとする。

第九条 委員会は、前条の選挙により、
出席委員の過半数の得票を得た者を当
選者とする。但し、過半数の得票者が
各部につき、その部にて補充すべき会
員数の二倍をこえるときは、その限度
に達するまで、得票順によつて候補者
を決定する。各部につき、過半数の得
票者のない場合は、最高点者と次点者
につき、決戦投票を行い、過半数を得
た者を当選者とする。

第十条 委員会は、候補者を決定した後
選考部会の報告にもとづいて審査報告
書を作成しなければならない。

2 前項の報告書には各被推薦者につい
て、選考部会の決定した順位及び委員
会の得票数を記載しなければならない。
い。

第十一条 委員会は、前条の規定により
作成した審査報告書を日本芸術院の各
部長に提出するものとする。日本芸術
院の各部は前項の審査報告書に記載さ
れた候補者について選挙を行ふ。

日本芸術院授賞規則

昭和二十五年五月三十日
総会議決
昭和二十八年五月二十六日
一部改正
昭和二十九年五月二十一日
一部改正

第一条 日本芸術院は、卓越した芸術作
品及び芸術の進歩に貢献する顕著な業
績ありと認める者に対して授賞する。

第二条 賞は、恩賜賞及び日本芸術院賞
とする。

2 恩賜賞は、毎年一個とし、もしその
年度内に授与しないときは、繰越して
授与することができる。

第三条 賞は、賞状及び賞金とする。

第四条 賞は、日本芸術院会員でない者
に授ける。但し擬賞の決議があつた後
会員となつた者は此の限りでない。

第五条 授賞は、日本藝術院会員の推薦
による。

2 日本藝術院会員が授賞の推薦をしよ
うとするときは、その所属する分科に
属すべき候補者を毎年十二月その所属
の部会に提議しなければならない。

3 前項の提議のあつた場合は、部会は
各部会員により互選された委員をもつ
て組織する授賞候補者選考委員会（以
下委員会という。）において授賞候補者
又は授賞候補作品の選考審査を行う。

4 委員は、各部より十名以内宛互選す
るものとする。委員の任期は一年とな
る。但し再選は妨げない。

5 委員会は、選考審査につき必要ある
場合は、委員以外の日本藝術院会員又
は学識経験者の意見を徴することがで
きる。

第六条 委員会の議決は多数決による。

第七条 委員会は、選考並びに審査の経
過及び結果を部会に報告しなければな

らなければならない。

る。

日本芸術院会員

院長 昭和二三、八、一一 高橋誠二郎

第一部 会員

昭和二二、六、二四 錦木 健一(清方)

川合芳三郎(玉堂)

昭和二三、一、一 小林 茂(古怪)

昭和二三、一、一 西山卯三郎(翠嶂)

昭和二三、一、一 前田 廉造(青邨)

昭和二三、一、一 松林 篤(桂月)

昭和二三、一、一 結城 貞松(素明)

昭和二三、一、一 安田新三郎(靱彦)

昭和二三、一、一 福田平八郎

昭和二三、一、一 奥村 義三(土牛)

昭和二三、一、一 野田 道三(九浦)

昭和二三、一、一 小野 英吉(竹喬)

昭和二三、一、一 中村 恒吉(岳陵)

昭和二三、一、一 堂本三之助(印象)

昭和二三、一、一 山口 三郎(蓬春)

昭和二三、一、一 有島壬生馬(生馬)

昭和二三、一、一 石井 満吉(柏亭)

昭和二三、一、一 梅原龍三郎

昭和二三、一、一 小杉国太郎(放庵)

昭和二三、一、一 中沢 弘光

昭和二三、一、一 山下新太郎

昭和二三、一、一 和田 英作

昭和二三、一、一 和田 三造

昭和二三、一、一 辻 永

昭和二三、一、一 須田国太郎

昭和二三、一、一 川島理一郎

昭和二三、一、一 中村 研一

昭和二三、六、二四 朝倉 文夫

昭和二三、六、二四 北村 西望

昭和二三、六、二四 斎藤 知雄

昭和二三、六、二四 佐藤 清蔵

昭和二三、六、二四 内藤 伸

昭和二三、六、二四 平橋倅太郎(田中)

昭和二三、六、二四 藤井 浩佑

昭和二三、六、二四 石井 鶴三

昭和二三、六、二四 昭和三〇、一、一 吉田 三郎

昭和二三、六、二四 昭和一二、六、一四 板谷 嘉七(波山)

昭和二三、六、二四 清水 六和

昭和二三、四、一七 松田 権六

昭和二三、二、一五 高村 豊周

昭和二三、一、一 岩田 藤七

昭和二三、一、一 昭和一二、六、二四 尾上 八郎(柴舟)

昭和二三、一、一 昭和一二、七、一四 豊道 慶中(春海)

昭和二三、一、一 昭和二九、一、一 吉田五十八

昭和二三、一、一 昭和三〇、一、一 村野 藤吾

昭和二三、一、一 第二部、第三部 会員略

(昭和三二年現在)

日本美術展覧会

日本美術展覧会運営会規則

第一条 本会は、日本美術展覧会運営会と称し、事務所を日本芸術院(文部省内)に置く。

第二条 本会は、日本芸術院に協力して、日本美術展覧会を開催することを目的とする。

第三条 本会は、日本芸術院第一部会員をもつて組織する。

第四条 本会に左の役員を置く。

会長 一名

第五条 会長は、日本芸術院長をもつてこれに充てる。

会長は、本会を代表し、会務を総理する。

会長は、理事会の議長となる。

第六条 理事は会員の互選によつてこれを定め、理事会を構成する。

理事中若干名を常任理事とし、会長これを依嘱する。

会長事故あるときは、その指定した常任理事これを代理する。

理事の任期を二年とし、毎年その半数を交替する。

第七条 理事会は、会長これを招集する。理事は本会の運営上重要な事項を審議する。

理事会は全員の半数以上出席しなければ議決をなすことができない。但し、会議に出席することができない者は、予め通知された事項について書面をもつて表決をなし、又は委任状を提出することにより他の理事を代理人とすることが出来る。

理事会の議事は出席者の過半数をもつてこれを決する。可否同数のときは、議長が決する。

第八条 本会に参事若干名を置く。

参事は、会長がこれを指名する。

参事は、日本美術展覧会の運営に関し、会長の諮問に應ずる。

参事の任期は二年とする。ただし留任を妨げない。

らない。

第八条 部会における擬賞の議決には、投票総数の過半数の賛成を要する。

第九条 前条の規定によつて擬賞の議決のあつたときは、部長は部会における結果について総会に報告しその承認を得なければならぬ。

第十条 擬賞の議決については、投票は無記名とする。

2 病氣その他の事故で出席することができないものは、封書で投票することが出来る。

第十一条 賞を受けた者は、受賞の目的である作品又は著書にその旨を表示することが出来る。

第十二条 擬賞の議決があつた後、賞を受くべき者が死亡した場合には、日本芸術院は授賞の旨を告示しその者に授くべき賞の処分を定める。

日本芸術院年金支給規則

(昭和二十五年五月三十日)

第一条 年金は区分して六月、九月、十二月、三月の四期にこれを支給する。

第二条 年金を支給する場合は、初年度において、その発令が六月三十日以前にある者は全額を、九月三十日以前にある者はその四分の三を、十二月三十一日以前にある者はその二分の一を、三月三十一日以前にある者はその四分の一を支給する。

2 年金受領者が死亡した場合の支給額は、その月の属する受給期分までとする。

第九条 本会の事務を処理するため事務局を置く。

第十二回日本美術展覧会規則

第一章 総則

第一条 日本美術展覧会は、日本芸術院と日本美術展覧会運営会（以下日展運営会という）が開催する。

第二条 展覧会は、作品の種類に依つて左の五科に分け、各科の総合展覧会とする。

第一科 絵画（日本画）

第二科 絵画（油画、水彩画、パス、テル画、素描、創作版画）

第三科 彫塑

第四科 美術工芸

第五科 書（漢字、仮名、調和体、てん刻）

第三条 陳列する作品は鑑査して決定する。

但し左の各号の一に該当するものの専門技術による作品は、前項の規定にかかわらず、無鑑査で陳列することができる。

専門技術の種類は前条の科別による。但し第四科においては第九条に定める九種類とする。

一、日本芸術院会員

二、日展運営会参事

三、当該年度審査員

四、前年度審査員

五、本展覧会に出品を依頼されたものの

六、前年度特選受賞者

鑑査を経て陳列された作品及び前項第六号に規定する作品については、審査の上特選として授賞することができる。

る。なお、その他の賞を授与することがある。

第四条 鑑査、審査及び陳列のため審査員長及び審査員を置く。

審査員は、日本芸術院会員の一部、日展運営会参事の一部及び本展覧会に出品を依頼された者等の中から日本芸術院会員が選考したものにつき、日本芸術院長がこれを依頼する。審査員の各員数は、第一科十五名、第二科二十四名、第三科十五名、第四科十五名、第五科十七名以内とする。

第五条 審査員は、その専門によつて第一科から第五科に所属し、その属する科の作品について鑑査及び審査を行う。各科の審査員はその互選によつて審査主任を決定する。各科の審査主任はその互選または推薦によつて審査員長を決定する。

第六条 本展覧会に出品を依頼されるものは、日本芸術院会員が特に優秀な作家と認められたものの中から選考したものに、日本芸術院長が指名する。（出品を依頼されるものの指名は、毎年これをおこなう）

その員数は第一科六十名、第二科百六十三名、第三科六十二名、第四科八十七名、第五科三十二名以内とする。

第二章 出品

第七条 出品作品は自己の製作したものに

限る。

出品作品とは無鑑査出品作品及び応募作品をいう。（以下作品と称する）故人（無鑑査）の製作したものはその遺族において、運営会の承認を経てこれを出品することができる。

第八条 第三科の作品で原型製作者と実材製作者とが異なるときは原型製作者をその出品人とする。

第四科の作品で協同製作であるときは、その代表製作者一名を出品人とする。

この場合には、代表製作者は協同製作者の氏名を附記することができる。

第九条 作品は各科ともに一点とする。但し第四科の作品については、種類を異にする場合に限り、二点まで出品することができる。

出品の種類は次の通りとする。

(イ) 漆器、(ロ) 陶器、(ハ) 彫金、(ニ) 鍍金、(ホ) 染織、(ヘ) ガラス、(ト) 木竹、(チ) 人形、(リ) その他。

第十条 作品の大きさ（額とも）および重量の制限を次の通りとする。

第一科は縦十尺、横七尺以内。重量は三十八斤（十貫強）以内とする。

第二科はF百号以内、但し会員、参事審査員、前審、出品依頼についてはF五十号以内とする。

第五科は仕上り寸法（イ）八尺×三尺以内（ロ）六尺×四尺以内（ともに縦・横随意の二種とする）。

第十一条 左に掲げる作品は提出することができない。

一、製作後五年以上経たぬもの

二、既に公募の展覧会に出陳したことがあつたもの

第十二条 作品はすべて所定書式の申込書に所定の手数料五百円を添えて公示の場所に搬入しなければならない。既納の手数料は返付しない。作品に題名及び出品人氏名を明示しなければならない。

第十三条 作品を受理したときは、本展覧会は引換に預り証を交付する。

第十四条 受理された作品は撤回することができない。但し審査員長の許可を得たときはこの限りでない。

第十五条 第一科の作品は額面、屏風、第二科の作品は額面とし、わく椽を附け、第五科の作品はてん刻の外はわく張、屏風、横巻、帖の形式とし、すべて縦八寸、横五寸以内の積文二枚を附けるものとする。積文を添えぬ作品は受理しないことがある。てん刻は印影（台紙寸法縦一尺二寸、横一尺以内）をつける。

てん刻の連作の二箇は一点と見なす。

第十六条 作品の荷造及び運送費はすべて出品人の負担とする。

第十七条 受理した作品の保管については、本展覧会での責任を負う。但し正常な管理のもとにおいて生じた紛失、破損等に対してはその責任を負わない。

第十八条 受理した作品の撮影または模写は、出品人の承諾のあるものに限る。審査員長が許可する。

前項の許可を受けたものが会場で作品の撮影または模写をするときは、許可証を係員に示し、その指図を受けることを要する。日本芸術院または日展運営会は受理した作品を撮影若しくは模写し、またはこれを刊行することがある。

第十九条 本章に掲げた各条項における違反を発見したときは、ただちに出品を取消すことがある。

第三章 鑑査、審査及び陳列

第二十条 鑑査、審査及び陳列の方法は、各科の審査員がこれを決定し審査

員長の承認を得るものとする。

第二十一条 鑑査及び審査の結果は、審査主任から審査員長に報告しその承認を得て決定するものとする。

第二十二條 出品者は鑑査及び審査に對して異議を申し立てることはできない。

第二十三條 陳列作品の位置、配列等に對しては異議を申し立てることはできない。

第四章 売約及び搬出

第二十四條 陳列作品の売約については本会は関与しない。

第二十五條 陳列作品は地方展陳列作品を除き十二月三日より同月七日まで(午前十時から午後四時まで)出品人において預り証を提示するに搬出されることを要する。前項の期間内に搬出されないものは日展運営会で責任を負わない。

第二十六條 陳列することに決定した作品以外のものは、十一月三日より同月七日迄、(午前十時から午後四時まで)出品人において預り証を提示するに搬出することを要する。

前項の期間内に搬出されないものは日展運営会で責任を負わない。

第五章 観覧

第二十七條 観覧時間は開会中毎日午前九時から午後四時までとする。但し都合によつてこれを伸縮または観覧を停止することがある。

第二十八條 観覧者は陳列作品に触れてはならない。観覧者は場内の指示に従わなければならない。

第二十九條 観覧者で、他の観覧人の鑑賞を妨げるおそれがあると認められるものは、入場を禁じまたは退場させることがある。

第三十條 観覧の入場料を百円とする。

第六章 地方日展

第三十一條 東京展終了後、開催希望道府県教育委員会又は、美術館、新聞社、文化団体等と日展運営会との共同主催によつて地方展を開催する。

第三十二條 地方展の開催地、開催期日その他は日展運営会と開催希望地代表者と協議の上定める。

第三十三條 地方展は東京展出陳作品中より選ばれたものをもつて構成する。

今般日本芸術院及び日本美術展覧会運営会において第十二回日本美術展覧会の会場、出品期限その他を次のように定めた。

名 稱 第十二回日本美術展覧会

会 場 東京都台東区上野公園内都美術館

期 昭和三十二年十月二十八日午後一時から十二月一日まで

搬入期日 出品申込み及び作品の受理期間は昭和三十二年十月十日から同月十四日までとする。但し無鑑査者の出品は十月二十三日までとし、前年度特選受賞者は十月十九日までとする。

出品は右期間内毎日午前九時から午後四時まで金五百円の手数料を添えて所定書式の申込書と共に之を会場に搬

入ししなければならない。

事務所 本会の事務所は昭和三十二年十月七日までは日本藝術院事務局内(文部省内)に、十月八日以後は会場に置く。

日本美術展覧会運営会役員

会長及理事(◎印常任理事)

會長 高橋誠一郎

理事 ◎中村 岳陵

◎堂本 印象

山口 蓬春

福田平八郎

◎辻 永

山下新太郎

石井 柏亭

中村 研一

◎藤井 浩佑

◎齋藤 知雄

朝倉 文夫

北村 西望

◎高村 豊周

◎岩田 藤七

◎尾上 入郎(柴舟)

石川寅治、伊原宇三郎、大久保作次郎

鬼頭鍋三郎、木下 孝則、木下 義謙

小糸源太郎、小山 敬三、齋藤 与里

佐竹 徳、鈴木千久馬、寺内万次郎

中野 和高、裕 卯之助、長谷川 昇

三上 知治、耳野伊三郎

第三科(彫塑)一五名

雨宮 治郎、加藤 顕清、北村 正信

国方 林三、古賀 忠雄、後藤 清一

佐々木大樹、沢田 晴広、清水多嘉示

橋本 朝秀、藤野 舜正、堀 進二

松田 尚之、横江 嘉純、吉田 久継

第四科(美術工藝)一九名

飯塚琅珩、大須賀 喬、各務 敏三

香取 正彦、河村 蜻山、岩本 景春

清水六兵衛、楠部 弥次、高野 松山

内藤 春治、二橋 美術、福沢 健一

前 大峰、宮之原 謙、三井 義夫

山鹿 清華、山崎覚太郎、吉田源十郎

吉田醇一郎

第五科(書)一五名

相沢 春洋、安東 聖空、石井 雙石

江川 碧潭、大池 晴嵐、川村 驥山

鈴木 翠軒、園田 湖城、田中 塊堂

辻本 史邑、手島 右卿、中村 蘭台

西川 寧、松本 芳翠、柳田 泰雲

正倉院評議會規程

(昭和二十二年七月十四日)

(宮内府訓令第第八号)

(昭和二十一年六月一日)

改正(宮内府訓令第一号)

正倉院評議會規程

第一条 宮内庁に、正倉院評議會を置

く。

第二条 正倉院評議会は、宮内庁長官の諮問に応じ、正倉院に関する重要事項を審議する。

第三条 正倉院評議会は、会長及び会員で、これを組織する。

第四条 会長及び会員は、宮内庁長官が、これを委嘱する。

第五条 会長は、会務を総理し、正倉院評議会の意見を、宮内庁長官に答申する。

会長に事故があるときは、会長の指名する会員が、会長の事務を代理する。

第六条 正倉院評議会に、幹事及び書記を置く。

第七条 幹事及び書記は、宮内庁職員の中から、宮内庁長官がこれを命ずる。

第八条 幹事は、会長の命を受けて、庶務を整理する。

書記は、幹事の命を受けて、庶務に従事する。

正倉院評議会

- | | |
|----|-------|
| 会長 | 安部 能成 |
| 会員 | 瓜生 順良 |
| | 鈴木 菊男 |
| | 西原 英次 |
| | 原田 淑人 |
| | 細川 護立 |
| | 上野 直昭 |
| | 藤田 亮策 |
| | 小宮 豊隆 |
| | 稲田 周一 |
| | 三井 安弥 |
| | 高橋誠一郎 |
| | 原田 治郎 |
| | 和辻 哲郎 |
| | 安田新三郎 |
| | 浅野 長武 |
| | 黒田 源次 |

美術関係法規

幹事 石田 茂作 高尾 亮一
本郷 定男 和田 軍一

帝室技芸員

帝室技芸員の制度は明治三十三年一〇月我が皇室におかせられて、明治維新以来芸術的に衰退し経済的に困窮していた当時の我が美術界振興の思召しから制定されたもので、帝室技芸員には人格芸術共に後進の師表と仰がれる大家を、特にその為選ばれた委員をして銓衡させ、任命されたものである。

帝室技芸員名簿

拜命年月

- | | |
|-----|---------------|
| 日本画 | 川合 玉堂 大正六年六月 |
| | 横山 大観 昭和六年六月 |
| | 安田 靱彦 昭和九年一二月 |
| | 西山 翠嶂 昭和一九年七月 |
| | 堂本 印象 |
| | 籀木 清方 |
| | 前田 青邨 |
| | 松林 桂月 |
| | 小林 古径 |
| 洋画 | 和田 英作 昭和九年一二月 |
| | 金山 平三 昭和一九年七月 |
| | 中沢 弘光 |
| | 梅原龍三郎 |
| 彫刻 | 朝倉 文夫 |
| | 平櫛 田中 |
| 工芸 | 板谷 波山 昭和九年一二月 |

武力紛争の際の文化財の保護のための条約

武力紛争の際の文化財の保護のための条約

文化財が最近の武力紛争の間に重大な損害を被っていること及び交戦技術の発達のため文化財の破壊の危険が増大していることを認識し、

各国民が世界の文化に貢献しているのであるから、いかなる国民に属する文化財に対する損害も全人類の文化的遺産に対する損害を意味するものであることを確信し、

文化的遺産の保存が世界のすべての国民にとつて多大の重要性を有すること及びこの遺産に国際的保護を与えることが重要であることを考慮し、

千八百九十九年及び千九百七年のヘーグ条約並びに千九百三十五年四月十五日のワシントン条約において確立された武力紛争の間における文化財の保護に関する諸原則を指針とし、

このような保護が、平時にその組織化のための国内的及び国際的措置が執られていない限り、効果的でありえないと認め、

文化財を保護するため可能なすべての措置を執ることを決意し、

次の条項を協定した。

第一章 保護に関する一般規定

第一条 文化財の定義

この条約の適用上、「文化財」とは、その源又は所有者のいかんを問わず、次に掲げるものをいう。

(a) 各国民が受け継ぐべき文化的資産にとつて多大の重要性を有する次のような動産又は不動産

建築上又は歴史上記念すべき物(宗教的であると否とを問わない)。

考古学的遺跡

全体として歴史的又は芸術的に意義のある建物群

美術品

芸術的、歴史的又は考古学的に意義のある書跡、書籍その他の物件

科学的収集、書籍若しくは記録の重要な収集又は前掲の財の複製品の重要な収集

(b) 博物館、図書館、記録保管所その他の建造物であつて(a)に定める動産文化財を保存し、又は展覽することを主要なかつ実効的な目的とするもの及び(a)に定める動産文化財を武力紛争の際に防護するための避難施設

(c) (a)及び(b)に定める文化財が多数所在する集中地区(以下「文化財集中地区」という)。

第三条 文化財の保護

この条約の適用上、文化財の保護とは、文化財を保全し、及び尊重することをいう。

第三条 文化財の保全

締約国は、自国の領域内に所在する文化財を武力紛争による予測される影響に

対して保全することを、適當と認める措置を執ることにより平和時に用意することを約束する。

第四条 文化財の尊重

1 締約国は、武力紛争の際に破壊又は損傷を受ける危険がある目的に自国及び他の締約国の領域内に所在する文化財、その直接の周辺及びその保護のために使用される施設を使用しないようにすることにより、並びにその文化財に向けていかなる敵対行為をも行わないうようにすることにより、その文化財を尊重することを約束する。

2 本条1に定める義務は、真にやむをえない軍事上の必要がある場合にのみ免れることができる。

3 締約国は、また、文化財のいかなる形における窃盗、略奪又は横領及び文化財に対するいかなる野蛮な行為をも禁止し、防止し、及び必要があるときは停止させることを約束する。締約国は、他の締約国の領域内に所在する動産文化財を徴発してはならない。

4 締約国は、文化財に対し復讐手段としていかなる行為をも行つてはならない。

5 締約国は、他の締約国が第三条の保全措置を実施しなかつたという事実を理由として、当該他の締約国に関し、本条に規定する義務を免かれることはできない。

第五條 占領

1 締約国は、他の締約国の領域の全部

又は一部を占領した場合においては、被占領国の文化財の保全及び保存につき、その被占領国の権限のある機関をできる限り援助しなければならぬ。

2 占領地域内にある文化財で軍事行動によつて損傷を受けたものを保存するために措置を執る必要がある場合において、被占領国の権限のある機関がその措置を執ることができないときは、占領国は、できる限り、かつ、その被占領国の機関と密接に協力して、最も必要な保存措置を執らなければならない。

3 締約国であつて。その政府が対敵抵抗運動を行う者によつて正統政府と認められているものは、可能な場合には、この条約の文化財の尊重に関する規定に従ふ義務についてこれらの者の注意を喚起しなければならない。

第六條 文化財の標識の表示
文化財には、その識別を容易にするため、第十六条の規定に従い標識を附することができぬ。

第七條 軍事上の措置

1 締約国は、平和時に、この条約の遵守を確保するような規定を軍事上の規則又は訓令の中に入れること並びにその軍隊の構成員の間にすべての国民の文化及び文化財に対する尊重の精神を育成することを約束する。

2 締約国は、文化財の尊重を確保すること及び文化財の保全につき責任を有する文民機関と協力することを任務とする

する機関又は専門職員を、平和時に、自国の軍隊中に設置し、又はその設置を計画することを約束する。

第二章 特別保護

第八條 特別保護の付与

1 動産文化財を武力紛争の際に防護するための避難施設、文化財集中地区及び他の非常に重要な不動産文化財は、次の要件を満たす場合には、その数を限定して特別保護の下に置くことができる。

(a) 大きい工業地区又は攻撃を受けやすい地点たる重要な軍事目標（たとえば、飛行場、放送局、国防のために使用される施設、比較的重要な港若しくは停車場又は交通幹線）から妥当な距離に所在すること。
(b) 軍事上の目的に使用されていないこと。

2 動産文化財のための避難施設は、爆弾による害を受けるおそれの全くないように造られている場合には、その所在のいかなる問はず、特別保護の下に置くことができる。

3 文化財集中地区は、軍事要員又は軍事資材の移動のため利用される場合においては、通過のため利用されるときでも、軍事上の目的に使用されているものとみなされる。軍事行動、軍事要員の駐留又は軍事資材の生産のいずれかに直接に関係がある活動が文化財集中地区内で行われる場合も、同様とする。

4 特別に権限を付与された武装監視人が本条1に掲げる文化財を警備すること又は公の秩序の維持を通常の任務とする警察隊がその近傍に所在することによつては、その文化財は、軍事上の目的に使用されているものとみなされない。

5 本条1に掲げる文化財が同項にいう重要な軍事目標の近辺に所在する場合においても、保護を要請する締約国が武力紛争の際にその軍事目標を使用しないことを約束するとき、及び特に港、停車場又は飛行場についてはその締約国がすべての運輸を他に転換することを約束し、かつ、その転換を平和時に用意するときは、その文化財を特別保護の下に置くことができる。

6 特別保護は、文化財が「特別保護文化財国際登録簿」に登録されることによりその文化財に対して与えられる。この登録は、この条約の規定に従いかつこの条約の実施規則に定める条件に基づいてのみ行われるものとする。

第九條 特別保護の下にある文化財の不可侵

締約国は、国際登録簿への登録が効力を生ずる時から、特別保護の下にある文化財に向けていかなる敵対行為をも行わないようにすることにより、及び特別保護の下にある文化財又はその周辺を、第八条5に規定する場合を除くほか、軍事上の目的に使用しないようにすることに、その文化財の不可侵を確保すること

とを約束する。

第十条 表示及び管理

特別保護の下にある文化財は、武力紛争の間、第十六条の識別標識により表示されるものとし、かつ、この条約の実施規則に定める国際管理の下に置かれるものとする。

第十一条 不可侵の停止

1 締約国が、特別保護の下にあるいずれかの文化財に関し、第九条に規定する義務に違反したときは、敵対国は、この違反が継続する間、その文化財の不可侵を確保する義務を免かれるものとする。ただし、敵対国は、可能なときは、あらかじめ、その違反行為を相当な期間内に終止するように要請しなければならぬ。

2 本条1に定める場合を除くほか、特別保護の下にある文化財の不可侵は、避けることができぬ軍事上の必要がある例外的な場合にのみ、かつ、その必要が継続する期間においてのみ、停止されるものとする。その必要の有無は、師団以上の大きさの部隊の指揮官のみが認定することができる。事情が許すときは、敵対国は、不可侵を停止する決定について、相当な期間の事前の通告を受けるものとする。

3 不可侵を停止する国は、できる限りすみやかに、この条約の実施規則に定める文化財管理監に対し、その旨を理由を記した書面により通告しなければならぬ。

第三章 文化財の輸送

第十二条 特別保護の下における輸送

1 もつばら文化財を移動するための輸送は、一領域内で行われるものであると他の領域に向けて行われるものであるとを問わず、関係締約国の要請により、この条約の実施規則に定める条件に従つて特別保護の下に行うことができる。

2 特別保護の下における輸送は、前記の実施規則に定める国際的監督の下に行い、かつ、この輸送には、第十六条の識別標識を掲示しなければならぬ。

3 締約国は、いかなる敵対行為をも特別保護の下における輸送に向けて行わないようにしなければならぬ。

第十三条 緊急の場合における輸送

1 締約国が、特に武力紛争の初めに当り、ある文化財の安全のためその移動が必要であり、かつ、事態が緊急であるため第十二条に定める手続によることができないような場合であると認めるときは、すでに第十二条に定める不可侵の要請が行われ、かつ、拒否されている場合を除くほか、その輸送には、第十六条の識別標識を掲示することができぬ。この移動については、できる限り敵対国に通告しなければならぬ。ただし、他国の領域への文化財の輸送には、不可侵が明示的に認めら

れていないときは、識別標識を掲示することができない。

2 締約国は、本条1の輸送であつて識別標識を掲示しているものに向けて敵対行為が行われぬようにするため必要な予防措置をできる限り執るものとする。

第十四条 押収、拿捕及び捕獲からの不可侵

1 次のものに押収、捕獲又は拿捕からの不可侵を認めるものとする。

(a) 第十二条又は第十三条に定める保護の利益を受ける文化財

(b) もつばら文化財を移動するための輸送手段

2 本条の規定は、臨検及び捜索の権利を制限するものではない。

第四章 人員

第十五条 人員

安全保障上の利益に反しない限り、文化財の保護に携わる人員は、文化財の利益のために尊重されるものとし、敵対国の権力内に陥つた場合において、その者が責任を有する文化財も敵対国の権力内に陥つたときは、自己の任務を引き続き遂行することを許されるものとする。

第五章 識別標識

第十六条 条約の標識

1 この条約に定める識別標識は、下方がとがり、かつ、青色面と白色面とで斜め十字に四分された楕形（一角がその楕形の先端を形成する生青色の正方形、その正方形の上方の生青色の三角形及び

び両側にある一個ずつの白色の三角形からなつてゐるもの）の形をしたものとする。

2 この標識は、第十七条に定める条件に基き、一個のみで、又は三個を三角状（一個の楕形を下方に置く）に並べて使用する。

第十七条 標識の使用

1 三個を並べて用いる識別標識は、次のものを証示する手段としてのみ使用することができる。

(a) 特別保護の下にある不動産文化財

(b) 第十二条及び第十三条に定める条件に基く文化財の輸送

(c) この条約の実施規則に定める条件に基く臨時避難施設

2 一個のみの識別標識は、次のものを証示する手段としてのみ使用することができる。

(a) 特別保護の下にない文化財

(b) この条約の実施規則に従い管理の任に当る者

(c) 文化財の保護に携わる人員

(d) この条約の実施規則に定める身分証明書

3 武力紛争の間、この識別標識の使用は、本条1及び2に定める場合を除き禁止され、また、この識別標識に類似する標識の使用は、目的のいかんを問はず禁止される。

4 識別標識は、締約国の権限のある機関が正当に日付を附して署名した証書が同時に掲示されていない場合には、

いかなる不動産文化財に対しても附することができない。

第六章 条約の適用範囲

第十八条 条約の適用

- 1 この条約は、平和時に実施すべき規定のほか、宣戦布告があつた戦争その他締約国の間に生ずる武力紛争の場合において、それらの締約国の一又は二以上が戦争状態を承認しているときとを問わず、適用する。
- 2 この条約は、また、締約国の領域の一部又は全部が占領されたすべての場合について、その占領が武力抵抗を受けることと否とを問わず、適用する。
- 3 紛争当時国の一がこの条約の締約国でない場合にも、締約国である諸国は、その相互の関係においては、この条約によつて拘束されるものとする。

さらに、これらの諸国は、締約国でない紛争当事国の一がこの条約の規定を受諾する旨を宣言してその規定を適用する間、その国との関係においても、この条約によつて拘束されるものとする。

第十九条 国際的性質を有しない紛争

- 1 一締約国の領域内に生ずる国際的性質を有しない武力紛争の場合には、各紛争当事者は、少くとも、この条約の文化財の尊重に関する規定を適用しなければならぬ。
- 2 紛争当事者は、特別の協定により、この条約の他の規定の全部又は一部を

実施することに努めなければならない。

国際連合教育科学文化機関(以下「ユネスコ」といふ)は、その役務を紛争当事者に提供することができる。

- 4 前諸項の規定の適用は、紛争当事者の法的地位に変更を加えるものではない。

第七章 条約の実施

第二十条 条約の実施規則

この条約を実施する手続は、この条約の不可分の一部をなす実施規則に定めらる。

第二十一条 利益保護国

この条約及びその実施規則の適用は、紛争当事国の利益の保全の任に当る利益保護国と協力して行われるものとする。

第二十二条 調停の手続

1 利益保護国は、文化財の利益になると認めらるすべての場合、特にこの条約又はその実施規則の規定の適用又は解釈に關して紛争当事国間で意見が一致しない場合には、仲介をするものとする。

2 このため、各利益保護国は、紛争当事国の一若しくはユネスコ事務局長の要請又は自国の発意により、紛争当事国に対し、適切と認めるときは適当に選ばれた中立の地域で、紛争当事国の代表者、特に文化財の保護につき責任を有する機関が会合するように提案することができる。紛争当事国は、自国

に対する会合の提案に従わなければならない。利益保護国は、中立国に属する者又はユネスコ事務局長の提示する者で前記の会合に議長として参加するように招請されるべきものの氏名を、紛争当事国に提示して、その承認を求めなければならない。

第二十三条 ユネスコの援助

1 締約国は、その文化財の保護を組織化するに當り、又はこの条約若しくはその実施規則の適用から生ずる他のすべての問題に關し、ユネスコに技術的援助を求めらるることができる。ユネスコは、その事業計画及び資力の範囲内でこの援助を与えなければならない。

2 ユネスコは、自己の発意により前記の事項についての提案を締約国に対して行ふ権限を有する。

第二十四条 特別の協定

1 締約国は、別個に規定を設けることが適當であると認めらるすべての事項について特別の協定を締結することができる。

2 この条約が文化財及びその保護に携わる人員に与える保護を減ずるような特別の協定は、締結することができない。

第二十五条 条約の普及

締約国は、平和時であると武力紛争時であるとを問わず、この条約及びその実施規則をできる限り広く自国内に普及させることを約束する。特に締約国は、この条約の原則をすべての住民、特に軍隊

及び文化財の保護に携わる人員に知らせるため、軍隊の教育及びできれば文民の教育の中にこの条約についての学習を取り入れることを約束する。

第二十六条 訳文及び報告

1 締約国は、ユネスコ事務局長を通じて、この条約及びその実施規則の公の訳文を相互に通報するものとする。

2 締約国は、さらに、この条約及びその実施規則の実施に當つて自国政府が執り、用意し、又は考究している措置に關する情報で適當と認めらるものを提供する報告書を、少くとも四年に一回、ユネスコ事務局長に提出しなければならない。

第二十七条 会合

1 ユネスコ事務局長は、ユネスコ執行委員会の承認を得て、締約国の代表者の会合を招集することができる。同事務局長は、締約国の五分の一以上の要請があつたときは、この会合を招集しなければならない。

2 この会合は、この条約及びその実施規則の適用に關する問題を研究し、並びにこれに關して勧告を作成することを目的とする。ただし、この規定は、この条約及びその実施規則によりこの会合に与えられた他のいかなる機能をも害するものではない。

3 この会合は、また、締約国の過半数が代表者を出席させたときは、第三十条の規定に従い、この条約又はその実施規則の改正の手続を執ることがで

きる。

第二十八条 処罰

締約国は、この条約の違反行為を行
い、又は行うことを命じた者を、国籍の
いかんを問わず、追求し、かつ、それら
の者を刑に処し、又は懲戒するため必要
なすべての措置を自国の通常の刑事管轄
権の範囲内で執ることを約束する。

最終規定

第二十九条 用語

1 この条約は、英語、フランス語、ロ
シア語及びスペイン語で作成される。
これらの本文は、ひとしく正文であ
る。

2 ユネスコは、その総会の他の公用語
によるこの条約の訳文が作成されるよ
うに取り計らうものとする。

第三十条 署名

この条約は、千九百五十四年五月十四
日の日付を有し、千九百五十四年四月二
十一日から千九百五十四年五月十四日ま
でヘーグで開催された会議に招請された
すべての国による署名のため千九百五十
四年十二月三十一日まで開放しておく。

第三十一条 批准

1 この条約は、署名国が各自の憲法上
の手續に従つて批准するものとする。
2 批准書は、ユネスコ事務局長に寄託
するものとする。

第三十二条 加入

この条約は、その効力発生の日から、
第三十条の国でこの条約に署名しなかつ
たすべての国及びユネスコ執行委員会に

より加入を招請される他のすべての国に
よる加入のため開放しておく。加入は、
ユネスコ事務局長に加入書を寄託するこ
とによつて行う。

第三十三条 効力の発生

1 この条約は、批准書が五通寄託され
た後三箇月で効力を生ずる。
2 その後は、この条約は、各締約国に
つき、その国の批准書又は加入書の寄
託の後三箇月で効力を生ずる。

3 第十八条又は第十九条に定める事態
に際しては、武力紛争の状態又は占領
の開始の前又は後に紛争当事者によつ
て寄託される批准書又は加入書は、直
ちに効果を生ずる。この場合には、ユ
ネスコ事務局長は、第三十八条の通報
を最も迅速な方法で伝達するものとし
る。

第三十四条 効果的適用

1 この条約の効力発生の日にこの条約
の当事国である各国は、その効力発生
の日の後六箇月の期間内に、この条約
の効果的適用を確保するため必要なす
べての措置を執るものとする。

2 前記の期間は、この条約の効力発生
の日の後に批准書又は加入書を寄託す
る国については、その批准書又は加入
書の寄託の日の後六箇月とする。

第三十五条 条約の適用地域の 拡張

いづれの締約国も、批准若しくは加入
の時に又はその後いつでも、ユネスコ事
務局長にあてた通告書により、自国が国

際関係について責任を有する領域の全部
又は一部にこの条約が適用される旨を宣
言することができる。この通告は、その
受領の日の後三箇月で効力を生ずる。

第三十六条 従前の諸条約との 関係

1 千八百九十九年七月二十九日若しく
は千九百七年十月十八日の陸戦の法規
慣例に関する条約(ヘーグ条約第四号)
又は千九百七年十月十八日の戦時海軍
力をもつてする砲撃に関する条約(ヘー
グ条約第九号)により拘束され、かつ、
この条約の当事国である国の間におい
ては、この条約は、ヘーグ条約第九号
及びヘーグ条約第四号附属の規則を補
足するものであり、この条約及びその
実施規則が識別標識を使用すべきこと
を定める場合においては、この条約の
第十六条の識別標識がヘーグ条約第九
号の第五条に定める記章に代るものと
する。

2 千九百三十五年四月十五日の芸術上
及び科学上の施設並びに歴史的記念物
の保護に関するワシントン条約(レー
リッヒ条約)により拘束され、かつ、
この条約の当事国である国の間におい
ては、この条約は、レーリッヒ条約を
補足するものであり、この条約及びそ
の実施規則が識別標識を使用すべきこ
とを定める場合においては、この条約
の第十六条の識別標識がレーリッヒ条
約の第三条に定める識別旗に代るもの
とする。

第三十七条 廃棄

1 各締約国は、自国のために、又は自
国が国際関係について責任を有する領
域のためにこの条約を廃棄することが
できる。

2 廃棄は、ユネスコ事務局長に寄託さ
れる文書により通告されるものとし
る。

3 廃棄は、廃棄通告書の受領の後一年
で効力を生ずる。ただし、廃棄しよう
とする国が、この期間の満了の時に武
力紛争にまき込まれている場合には、
その廃棄は、武力紛争の状態の終了又
は文化財の送還措置の完了のいずれか
おそい時まで効力を生じない。

第三十八条 通報

ユネスコ事務局長は、第三十一条、第
三十二条及び第三十九条にそれぞれ定め
る批准書、加入書及び受諾の文書並びに
第三十五条及び第三十七条にそれぞれ定
める通告書及び廃棄通告書の寄託を第三
十条及び第三十二条に掲げる国並びに国
際連合に通報するものとする。

第三十九条 条約及び実施規則 の改正

1 いづれの締約国も、この条約又はそ
の実施規則の改正を提案することがで
きる。改正案は、ユネスコ事務局長に
通報するものとし、同事務局長は、そ
の改正案を各締約国に転報するととも
に、次のいずれかを選ぶかを四箇月以内
に回答するように各締約国に要請する
ものとする。

(a) 改正案を審議するための会議の招集を希望すること。

(b) 会議によらずに改正案を受諾することに賛成であること。

(c) 会議によらずに改正案を拒否することに賛成であること。

2 ユネスコ事務局長は、本条1の規定に基いて受領した回答をすべての締約国に転報しなければならない。

3 すべての締約国が、所定の期限までにユネスコ事務局長に対し本条1(b)の規定の趣旨に従つて自国の意見を表明し、かつ、会議によらずに当該改正を受諾することに賛成である旨を同事務局長に通報した場合には、同事務局長は、第三十八条の規定の例により、締約国によるこの決定を通告するものとする。その改正は、この通告の日から九十日の期間が満了した時にすべての締約国について効力を生ずるものとする。

4 ユネスコ事務局長は、三分の一をこえる締約国の要請があつたときは、当該改正案を審議するため締約国の会議を招集しなければならない。

5 前項の規定に従つて行われるこの条約又はその実施規則の改正は、会議に代表者を出した締約国が全会一致で採択し、かつ、各締約国が受諾した後においてのみ効力を生ずるものとする。

6 本条4及び5に定める会議で採択されたこの条約又はその実施規則の改正の締約国による受諾は、ユネスコ事務

局長に正式の文書を寄託することによつて行ふものとする。

7 この条約又はその実施規則の改正が効力を生じた後は、改正後のこの条約及びその実施規則のみを批准又は加入のため開放しておくものとする。

第四十条 登録

この条約は、国際連合憲章第百二条の規定に従い、ユネスコ事務局長の要請により、国際連合事務局に登録されるものとする。

以上の証拠として、正当に委任された下名は、この条約に署名した。

千九百五十四年五月十四日にヘーグで本書一通を作成した。本書は、ユネスコの記録に寄託され、その認証謄本は、第三十条及び第三十二条に掲げるすべての国並びに国際連合に送付される。

武力紛争の際の文化財の保護のための条約の実施規則

第一章 管理

第一条 国際名簿

ユネスコ事務局長は、この条約が効力を生じたときに、文化財管理監の任に当る資格のあるものとして締約国が指名したすべての者の国際名簿を作成するものとする。この名簿は、同事務局長の発意により、締約国が行う要請を基礎として定期的に改定される。

第二条 管理組織

いずれかの締約国が条約第十八条の規定の適用を受ける武力紛争の当事者になつたときは、直ちに、

(a) その締約国は、自国の領域内に所在する文化財のための代表者一人を任命し、また、他国の領域を占領した場合

には、その領域内に所在する文化財のための特別の代表者一人を任命し、

(b) その締約国と紛争の状態にある各国のために行動する利益保護国は、第三条の規定に従い、その締約国への派遣

委員を任命し、

(c) 文化財管理監一人が、第四条の規定に従い、その締約国に対して任命される。

第三条 利益保護国の派遣委員の任命

利益保護国は、その外交職員若しくは領事職員のうちから、又は被派遣国の承認を得てその他の者のうちから、派遣委員を任命するものとする。

第四条 文化財管理監の任命

1 文化財管理監は、被派遣国とその敵対国のために行動する利益保護国との間の合意により、国際名簿から選ばれ

るものとする。

2 前記の諸国は、この選任についての討議の開始の日から三週間以内の合意

に達しないときは、国際司法裁判所長に管理監の任命を要請しなければならない。このようにして任命される管理監

は、被派遣国がその任命を承認するまでは、任務についてはならない。

第五条 派遣委員の職務

利益保護国の派遣委員は、この条約の違反の事実を確認し、違反が生じた事情

を被派遣国の承認を得て調査し、違反の停止を確保するために現地で申入れを行い、及び必要があるときは、違反を文化財管理監に通告しなければならない。利益保護国の派遣委員は、その行動を管理監が絶えず知つておかなければならない。

第六条 文化財管理監の職務

1 文化財管理監は、この条約の適用に

関してその所掌に属させられたすべての事項を、被派遣国の代表者及び関係派遣委員と協力して、処理しなければならない。

2 管理監は、この規則に定める場合において、決定し、及び任命する権能を有する。

3 管理監は、被派遣国の同意を得て、調査を命じ、又はみずから調査を行う権限を有する。

4 管理監は、紛争当事国又はその利益保護国に対し、この条約の適用のため有益と認めるすべての申入れを行わなければならない。

5 管理監は、必要と認められるこの条約の適用に関する報告書を作成し、これを関係紛争当事国及びその利益保護国に送付しなければならない。管理監は、この報告書の写をユネスコ事務局長に送付しなければならない。同事務局長は、その技術的内容のみを利用することができる。

6 利益保護国がないときは、管理監は、条約第二十一条及び第二十二条に

定める利益保護国の任務を行わなければならない。

第七条 監視官及び専門家

1 文化財管理監は、関係派遣委員の要請又はこれとの協議により必要と認めるときは、特定の職務を担当する文化財の監視官となるべき者を被派遣国に提示して、その承認を求めなければならぬ。監視官は、管理監に対してのみ責任を負う。

2 管理監、派遣委員及び監視官は、専門家の役務を用いることができる。これらの専門家についても、また、前項の国に提示して、その承認を求めらるゝとする。

第八条 管理の職務の遂行

文化財管理監、利益保護国の派遣委員、監視官及び専門家は、いかなる場合にもその職務の範囲をこえてはならぬ。これらの者は、特に、被派遣国たる締約国の安全保障上の必要を考慮しなければならず、また、いかなる事情の下においても、その締約国が行う軍事状況上の要求に従つて行動しなければならぬ。

第九条 利益保護国の代理

紛争当事国は、利益保護国の活動により利益を得ないか又は得なくなつた場合には、中立国に対し、第四条に定める手続による文化財管理監の任命に関する利益保護国の任務を引き受けるように要請することができる。このようにして任命される管理監は、必要があるときは、こ

の規則に定める利益保護国の派遣委員が行うべき職務を監視官に委任するものとする。

第十条 費用

文化財管理監、監視官及び専門家の報酬及び費用は、被派遣国が負担するものとする。利益保護国の派遣委員の報酬及び費用については、利益保護国と利益を保護される国との間の合意によるものとする。

第十一章 特別保護

第十一条 臨時避難施設

1 いずれの締約国も、武力紛争の間において、予測されなかつた事情のため臨時避難施設を設けることが必要になり、かつ、その施設を特別保護の下に置くことを希望するときは、自国に派遣された文化財管理監にこれを直ちに通知しなければならない。

2 管理監は、その事情及びその臨時避難施設内に防護される文化財の重要性によりこのような措置を正当と認めるときは、その施設に条約第十六条に定める識別標識を掲示することをその締約国に許可することができる。管理監は、その決定を利益保護国の関係派遣委員に遅滞なく通知しなければならない。これらの派遣委員は、いずれも、標識の即時の撤去を三十日の期間内に命ずることができる。

3 管理監は、当該避難施設が条約第八条に定める条件を満たしていると認める場合において、前記の派遣委員が同

意を表明したときは直ちに、又は関係派遣委員のいずれからも反対がなく三十日の期間が経過したときは、その避難施設を特別保護文化財国際登録簿に登録するようにユネスコ事務局長に要請しなければならない。

第十二条 登録簿

1 「特別保護文化財国際登録簿」が作成されるものとする。

2 ユネスコ事務局長は、この国際登録簿を管理し、その写を国際連合事務総長及び締約国に送付しなければならない。

3 国際登録簿は、締約国名により部別する。各部は、避難施設、文化財集中地区及び他の不動産文化財の各表題を附した三項に分ける。各部の細目は、ユネスコ事務局長が定めるものとする。

第十三条 登録の申請

1 いずれの締約国も、ユネスコ事務局長に対し、自国の領域内に所在する避難施設、文化財集中地区又は他の不動産文化財の国際登録簿への登録の申請書提出することができる。この申請書は、当該文化財の所在地について記述しており、かつ、その文化財が条約

第八条の規定に合致することを証明するものでなければならない。

2 占領の場合には、占領国が前記の申請を行ふ権限を有する。

3 ユネスコ事務局長は、登録の申請書

の写を遅滞なく各締約国に送付しなければならない。

第十四条 異議

1 いずれの締約国も、ユネスコ事務局長に於てた書簡により、文化財の登録について異議を申し立てることができる。この書簡は、同事務局長が登録の申請書の写を送付した日から四箇月以内に同事務局長により受領されなければならない。

2 この異議には、理由が述べられていなければならない。異議が有効であるための根拠は、次のいずれかに限る。

(a) その財が文化財でないこと。

(b) その財が条約第八条に掲げる条件を満たさないこと。

3 ユネスコ事務局長は、異議申立の書簡の写を遅滞なく各締約国に送付しなければならない。同事務局長は、必要がある場合には、記念物、芸術的遺跡、歴史的遺跡及び考古学的発掘物に関する国際委員会の助言を求め、また、適切と認めるときは、適当な他の機関又は人の助言を求めるものとする。

4 ユネスコ事務局長又は登録を申請した締約国は、異議の申立をした締約国に対し、その異議を撤回させるため、必要と認められるいかなる申入れをも行うことができる。

5 平和時に登録を申請した締約国がその登録が行われる前に武力紛争にまぎ込まれたときは、当該文化財は、ユネスコ事務局長により直ちに、国際登録

簿にかりに登録されるものとする。この登録は、異議の申立がある場合においては、その異議の承認、撤回又は否認があるまでの間のものとする。

6 ユネスコ事務局長が、異議申立の書簡を受領した日から六箇月以内に、異議の申立をした国からその異議を撤回した旨の通知を受領しない場合には、登録を申請した締約国は、次項の手続により仲裁裁判を要請することができる。

7 仲裁裁判の要請は、ユネスコ事務局長が異議申立の書簡を受領した日の後一年の期間が経過したときは、行うことができない。紛議の両当事者は、おのの仲裁裁判官一人を任命するものとする。一の登録の申請に対し二以上の異議が申し立てられたときは、異議を申し立てた諸締約国は、共同して一人の仲裁裁判官を任命するものとする。これらの二人の仲裁裁判官は、第一条の国際名簿から首席仲裁裁判官を選定するものとする。これらの仲裁裁判官は、この選定について合意に達しないときは、国際司法裁判所長に首席仲裁裁判官の任命を要請するものとする。この場合には、首席仲裁裁判官は、必ずしも国際名簿から選ばれることを要しない。このようにして構成された仲裁裁判所は、みずからその手続を定めるものとする。その決定は、最終とする。

8 各締約国は、自国が紛議の当事者となつたときは、前項に定める仲裁手続の適用を希望しない旨を宣言することができる。この場合には、登録の申請に対する異議は、ユネスコ事務局長が締約国に付託するものとする。この異議は、投票した締約国の三分の二の多数をもつて異議の承認が決定された場合のみ、承認されたものとする。投票は、同事務局長が条約第二十七条の規定により与えられる権限に基き会合を開催することが必要であると認めない限り、通信によつて行ふものとする。同事務局長は、通信による投票を行う旨を決定したときは、締約国に対し、封をした書状により投票を行うように要請するものとし、締約国は、その要請を受けた日から六箇月以内に同事務局長に投票を送達するものとする。

第十五条 登録

1 ユネスコ事務局長は、第十四条1に定める期間内に異議の申立を受領しなかつたときは、登録の申請がなされた財を一件ごとに整理番号を附して国際登録簿に登録しなければならぬ。

2 異議の申立があつた場合には、ユネスコ事務局長は、その異議が撤回されたとき、又は第十四条7若しくは8に定める手続によりその異議が承認されなかつたときのみ当該財を国際登録簿に登録する。ただし、第十四条5の規定の適用を妨げるものではない。

3 第十一条3の規定の適用がある場合

1 において、文化財管理監の要請があつたときは、ユネスコ事務局長は、当該財を国際登録簿に登録しなければならぬ。

4 ユネスコ事務局長は、遅滞なく、国際登録簿への各登録の認証謄本を、国際連合事務総長及び締約国に送付しなければならず、登録を申請した国の要請があつたときは、条約第三十条及び第三十二条に掲げる他のすべての国にも送付しなければならぬ。登録は、その謄本の発送の日以後三十日で効力を生ずる。

第十六条 登録の消除

1 ユネスコ事務局長は、次の場合には、登録を消さなければならない。

(a) 当該文化財が所在する領域が属する締約国の要請があつた場合

(b) 当該登録を申請した締約国がこの条約を廃棄し、その廃棄が効力を生じた場合

(c) 第十四条5に定める特殊の場合において、第十四条7又は8に定める手続により異議が承認された場合

2 ユネスコ事務局長は、登録の消除の認証謄本を、国際連合事務総長及び当該登録の謄本を受領したすべての国に遅滞なく送付しなければならない。登録の消除は、その謄本の発送の日以後三十日で効力を生ずる。

第三章 文化財の輸送

第十七条 不可侵を得るための手続

1 条約第十二条1の要請は、文化財管理監にあてて行ふものとする。その要請書には、要請の根拠となる理由を記載し、並びに移動すべき物件の概数及び重要性、その現在の所在、その予定移動先、使用すべき輸送手段、予定輸送経路、予定移動期日その他関係がある情報を明記しなければならない。

2 管理監は、適當と認める意見を考慮に入れた上その移動を正当と認める場合には、提案された実施方法について利益保護国の関係派遣委員と協議するものとする。管理監は、この協議の結果に従い、関係紛争当事国にその移動について通告しなければならない。この通告は、すべての有益な情報を含むものでなければならない。

3 管理監は、要請書に記載された財のみが移動されること、その輸送が承認された方法により行われること及びその輸送に識別標識が附されていることを確認すべき一人又は二人以上の監視官を任命しなければならない。監視官は、目的地までその財と同行するものとする。

第十八条 国外輸送

特別保護の下における移動が他国の領域に向けて行われる場合には、その移動については、条約第十二条及びこの規則の第十七条のほか、次の諸項の規定を適用するものとする。

(a) 文化財が他国の領域内にある間、当該他国は、その文化財の保管者とな

り、その文化財に対し、それと同程度の重要性を有するその国の文化財に対すると同様の保管の措置を講じなければならぬ。

(b) 保管国は、紛争状態の終了後においてのみその文化財を返還するものとし、この返還は、それが要請された日から六箇月以内に行われなければならない。

(c) 寄託国及び保管国は、いずれも、当該文化財が移動されている間及び他国の領域内にある間は、これを没収し、及び処分してはならない。ただし、その文化財の安全のため必要があるときは、保管国は、寄託国の同意を得て、かつ、本条に定める条件に従いその文化財を第三国の領域に輸送することができる。

(d) 特別保護の要請書には、自国の領域に向けて文化財が移動される国が本条の規定を受諾する旨を記載しなければならない。

第十九条 占領地域

他の締約国の領域を占領している締約国が文化財を当該領域内の他の場所にある避難施設に移動し、その移動の際第十七条に定める手続に従うことができなかつた場合において、文化財管理監が、平常の管理者と協議の上、その移動が状況上必要であつた旨を書面で証明するとき、その移動は、条約第四条にいう横領とはみなされない。

第四章 識別標識

第二十条 標識の表示

1 識別標識の配置及び識別可能な度合は、各締約国の権限のある当局の裁量に任せるものとする。識別標識は、旗又は腕章に表示することができ、また、物件上に描き、又は他の適当な方法で表示することができる。

2 もつとも、武力紛争の際、条約第十二条及び第十三条に定める場合には、標識は、上空からも地上からも日中明らかに識別することができるよう輸送手段の上に附するものとする。ただし、さらに完全な表示方法によることを妨げない。

識別標識は、武力紛争の際、次の条件に従い地上で識別することができるものでなければならない。

(a) 特別保護の下にある文化財集中地区については、その外周を明らかに示すに足りる規則的間隔を置くこと。

(b) 特別保護の下にある他の不動産文化財については、その入口に置くこと。

第二十一条 身分証明

1 条約第十七条2(b)及び(c)に掲げる者は、権限のある当局が発給しかつその印章を押した腕章であつて識別標識を附したものを着用することができる。

2 これらの者は、識別標識を附した特別の身分証明書を携帯しなければならない。この身分証明書には、少くとも

表面



文化財の保護に携わる人員の身分証明書

姓 _____
 名 _____
 生年月日 _____
 地位又は階級 _____
 職務 _____

上記の者は、千九百五十四年五月十四日の武力紛争の際の文化財の保護のためのヘーグ条約の規定に基づき、この証明書を所持する。

発給年月日 _____ 証明書番号 _____

裏面

所持者の写真

所持者の署名若しくは指紋又はその双方

証明書発給当局の浮出印

身長	眼	頭髪
----	---	----

その他の特徴

.....

所持者の氏名、生年月日、地位又は階級及び職務を記載するものとし、所持者の写真及びその署名若しくは指紋又はその双方を附し、かつ、権限のある当局の浮出印を押さなければならぬ。

3 各締約国は、この規則に例示として附したひな型にならつて自国の身分証明書の様式を定めるものとする。締約国は、自国が採用した様式の見本を相互に送付するものとする。この身分証明書は、できれば、少くとも二通作成し、その一通は、これを発給した国が保管するものとする。

4 前記の者は、正当な理由がない限り、この身分証明書を取上げられることはなく、また、腕章を着用する権利を奪われることはない。

美術関係研究施設

東京大学史料編纂所

東京都文京区本富士町
電 小石川二一六六、三一八五
(内線三三〇一六)

史料編纂所は明治二年三月史料編輯国史校正局を旧和学講談所に設置したのに始まり其後数度の改変を経て明治二八年四月史料編纂掛として帝国大学文科大に置かれ、更に昭和四年七月史料編纂所と改称した。同二五年四月東京大学附置研究所に改組、現在に至つてゐる。本邦に関する史料の研究、編纂及び出版を行

い、第一部(編年史料)第二部(古文書)第三部(古記録)第四部(近世、維新史料)第五部(海外史料)第六部(史料調査)事務部の七部を置く。「所長」坂本太郎、「部長」(第一)吉村茂樹、(第二)宝月圭吾、(第三)川崎庸之、(第四)伊東多三郎、(第五)岡田章雄、(第六)森末義彰

東京大学東洋文化研究所

東京都文京区大塚町五六
電 大塚五〇九、六九八六

東洋文化の総合研究を目的として昭和一六年一月東京帝国大学内に設置された。昭和二三年四月、外務省所管東方文化学院を併合し、研究所を文京区大塚町に移した。設立当初は哲・文・史学部、法・政部、経・商部の三部門であつたが昭和二四年新に三部門を加え、更に二六年二部門を増加し現在、一、哲学・宗教二、文学・言語 三、歴史 四、文化人類学 五、人文地理学 六、美術史・考古学 七、法律・政治 八、経済・商業の八部門に分れてゐる。研究発表は講演会の外、本研究所発行の「東洋文化研究所紀要」或は東洋学会機関誌「東洋文化」を通じて行つてゐる。

〔所長〕 仁井田陞〔教授〕 仁井田陞、飯塚浩二、(兼)山田盛太郎、江上波夫、結城令聞、植田捷雄、米沢嘉圃、(兼)山本達郎、(兼)丸山真男、川野重任、石田英一郎、(兼)辻直四郎

東京国立文化財研究所 美術部

(美術研究所)
東京都台東区上野公園
電 駒込四四八七、一九三三

当所は故黒田清輝子爵の遺志に基き、その遺産を以て開始されたもので、昭和五年開設の準備完了とともに政府に寄附移管された。初め帝国美術院附属として設置されたが昭和一〇年六月帝国美術院改革に伴い、新に美術研究所官制を制定、文部省所管、帝国美術院に附置され、次で昭和一二年六月官制改正の上文部省の直轄研究所となつた。昭和二二年国立博物館官制の成立とともに同館附属の研究所となり、更に昭和二五年八月文化財保護法制定により国立博物館より分離し、美術研究所として文化財保護委員会の附属となつた。次いで同二七年四月文化財保護法の一部改正に伴い東京文化財研究所が設置されるに及んで同研究所の美術部として藝能部 保存科学部と共に新発足し、更に昭和二九年七月文化財保護法の一部改正により、東京国立文化財研究所美術部となつた。現在の内部組織は庶務室(東京国立文化財研究所の人事並びに業務全般の事務的統轄管理及び総合調整を行う)第一研究室(東洋及び日本)の古美術の調査研究を行う)第二研究室(日本の近代及び西洋美術の調査研究を行う)資料室(図書、写真等基礎資料の蒐集の他、特殊写真による光学的研究を行う)となつてゐる。定期刊行物として「美術研究」「日本美術年鑑」が有り、また「美術研究資料」や「研究報告」等を出版、その他随時講演会・特別展観等を開催する。なお所内には黒田記念室を設けその遺作を陳列、毎週木曜日午後公開してゐる。美術研究のために着実な基

礎を提供すると共に文化財の保存活用に貢献してゐる。

〔所長〕 田中一松〔美術部長〕 福山敏男〔室長〕 (庶務室) 小島忠二、(第一研究室) 熊谷宣夫、(第二研究室) 隈元謙次郎、(資料室) 中川千咲(二一〇、二二八、二四〇頁参照)

産業工藝試験所

東京本所 大田区下丸子町三二一
電 蒲田六一四一―一六
東北支所 仙台市二十人町通一〇
電 仙台 七五五、七五九
九州出張所 久留米市津福本町 三六
電 久留米 五三八、五三九

わが国固有の技術である木工・金工・漆工その他各種工芸産業の改善発達を図るため、昭和三年商工省に工芸指導所が設置され仙台市において事業を開始した。其後事業の進展に伴い東京における調査研究の必要を認め、昭和八年五月商工省内に本所出張員事務所を設け常時所員を駐在せしむる事となつた。昭和一二一年八月には官制の改正に依り「木工及金属工品」を「工藝品」に改め職員を増員し、必要と認められる地に支所を置き事務を分掌させることとなつた。昭和一四一年八月に輸出工芸雑貨の中心地である大阪江の子島に関西支所を置き、翌一五年一月には商工省告示を以て工芸指導所本所を東京市に移転、又従来の仙台の施設を東北支所に改め、又従来を強化した。戦時中は研究の方向転換を余儀なくされ、本所、関西支所は戦災焼失した。昭和二三年一月川崎市久地元日本光学工場

を以て開始されたもので、昭和五年開設の準備完了とともに政府に寄附移管された。初め帝国美術院附属として設置されたが昭和一〇年六月帝国美術院改革に伴い、新に美術研究所官制を制定、文部省所管、帝国美術院に附置され、次で昭和一二年六月官制改正の上文部省の直轄研究所となつた。昭和二二年国立博物館官制の成立とともに同館附属の研究所となり、更に昭和二五年八月文化財保護法制定により国立博物館より分離し、美術研究所として文化財保護委員会の附属となつた。次いで同二七年四月文化財保護法の一部改正に伴い東京文化財研究所が設置されるに及んで同研究所の美術部として藝能部 保存科学部と共に新発足し、更に昭和二九年七月文化財保護法の一部改正により、東京国立文化財研究所美術部となつた。現在の内部組織は庶務室(東京国立文化財研究所の人事並びに業務全般の事務的統轄管理及び総合調整を行う)第一研究室(東洋及び日本)の古美術の調査研究を行う)第二研究室(日本の近代及び西洋美術の調査研究を行う)資料室(図書、写真等基礎資料の蒐集の他、特殊写真による光学的研究を行う)となつてゐる。定期刊行物として「美術研究」「日本美術年鑑」が有り、また「美術研究資料」や「研究報告」等を出版、その他随時講演会・特別展観等を開催する。なお所内には黒田記念室を設けその遺作を陳列、毎週木曜日午後公開してゐる。美術研究のために着実な基

を借用し本所の再建を図ると共に同年八月久留米市に九州支所を設置、同二四年四月には布施市に関西支所を新築した。近時工藝指導所の業務内容も発展し、工藝に関する研究指導のほか工業意匠の改善研究、包装に関する研究等を加えて研究諸施設の整備充実を図つてゐる。昭和二六年本所を現在地へ移設、二七年機構を改め、関西支所を廃し、通商産業省工業技術院の管轄の下に名称も産業工藝試験所として新発足した。組織と事務分掌は左の通りである。

〔指導部〕

〔企画課〕—試験研究等の調整、広報事務、(指導課)—技術指導、研究成果の実施、講習・講演・展示・鑑定審査の実施、技術者の養成等(調査課)—内外工藝技術の調査、工藝事情の調査、図書整備、機関紙の編集等

〔意匠部〕

〔工業意匠課〕—工業製品意匠の図案設計の試験・研究等、(雑貨意匠課)—工業製品意匠の図案設計の試験・研究等

〔技術部〕

〔技術第一課〕—木工・塗装を主とする工藝品の工作技術の試験・研究等(技術第二課)—金工を主とする工藝品の工作技術の試験・研究等(試験課)—原材料の品質、規格の試験・研究等

〔包装部〕

〔包装試験課〕—包装原材料・印刷の試験・研究等(包装技術課)—容器包装技術の試験・研究等

〔庶務課〕—庶務・人事・会計・用度等

美術関係学会

〔東北支所〕(指導課)—工藝品の意匠設計の研究・指導、地方工藝技術事情の調査等(漆工課)—漆工品の素地工作・塗装・加飾・金属部分の試験・研究等(試験課)—漆液・漆器素材の原材料の品質・規格の試験・研究等(庶務課)—支所の庶務・人事・会計等

〔九州出張所〕—地方工藝技術の指導・調査、工藝品・工業製品・包装の意匠の設計・研究・指導

〔所長〕—松崎福三郎(部長)

〔指導部〕—藤井左内、(意匠部)豊口克平、(技術部)福岡健太郎、(包装部)福岡和雄、(課長)

〔庶務課〕—池田秀雄、(企画課)伊達信義、(指導課)畑正夫、(調査課)服部茂夫、(工業意匠課)明石一男、(雑貨意匠課)芳武茂介、(技術第一課)船倉敏、(技術第二課)梶尾宗一、(試験課)小松和、(包装試験課)芦原晋、(包装技術課)有吉金太

〔東北支所長〕—安部郁二、(課長)

〔指導部〕—猪狩英一、(漆工課)武田豊太郎、(試験課)鈴鹿清之介、(庶務課)高山得末

〔九州出張所長〕—松田一雄

京都大学人文科学研究所

京都市左京区北白川小倉町五〇

電 吉田四〇五

本研究所は昭和一四年八月、国家に須要なる東亜に関する人文科学の総合研究を行うため設立された京都大学人文科学研究所を中核として、外務省所管東方文化研究所と、財団法人西洋文化研究所を合併して昭和二四年三月新に世界文化に関する人文科学の総合研究を行う研究所として発足した。創立の際は三部門であ

つたが、合併により一部門に増加し、これを日本部、東洋部、西洋部に分け相互に協力して研究を推進している。「京都大学人文科学研究所紀要」其他出版物、講演会によつて研究発表を行い、又常設人文科学講座を開いている。

〔所長〕—塚本善隆(教授(日本部)坂田吉雄(東洋部)安部健夫、貝塚茂樹、水野清一、森鹿三、戴内清、長広敏雄、岩村忍、(西洋部)桑原武夫、清水盛光

奈良国立文化財研究所

奈良市春日野町五〇

電 奈良五五七五

昭和二七年文化財保護法の一部改正が行われ、同法の規定に基き同年四月一日、奈良市に当研究所が設置された。所内の組織は庶務室、及び美術工藝研究室(絵画、彫刻、工藝品の有形文化財並びに工藝技術に関する調査研究を行う)建造物研究室(建造物及庭園遺跡に関する調査研究を行う)歴史研究室(考古及び史跡並びに古文書に関する調査研究を行う)の四室からなつてゐる。

〔所長〕—田沢田(室長)(庶務室)森川幸男、(美術工藝研究室)小林剛、(建造物研究室)森藤、(歴史研究室)田沢田(二一〇、二四〇頁参照)

黒川古文化研究所

芦屋市打出春日町三四

電 芦屋三三九六

本研究所は黒川家歴代の蒐集品を、とくに、理事長黒川幸七が京大教授梅原末治指導の下に昭和二五年一〇月財団法人黒川古文化研究所として設立されたもので

ある。主として東洋古文化の調査研究を目的とし、資料及び研究成果の印刷物刊行、及び公開講演と展覧を行つてゐる。〔理事長〕—黒川幸七(常務理事兼研究員)武藤誠、〔理事〕有光次郎、内田幾助、梅原末治、辰馬悦蔵、江口治郎、石崎喜兵衛、黒川いく子、魚澄惣五郎、(研究員兼務)〔監事〕木村徳兵衛、西川源三

美術関係学会 (五〇音順)

(括弧内は代表者)

京都大学美学会 京都市左京区吉田

京大文学部美学美術史研究室内 電吉田

四一一一学内(九〇)(井島勉)

藝術学会 文京区大塚窪町 東京教育

大学内 電 大塚一八一(三吉正雄)

古文化資料自然科学研究会 台東区上

野公園 東京国立博物館内 電 駒込三

七一一一五内線三八(大賀一郎) 機関誌

「古文化財之科学」発刊

史学会 文京区本富士町東京大学文学

部内(坂本太郎)機関誌「史学雑誌」発刊

デザイン学会 千葉県松戸市岩瀬 千

葉大学工学部工業意匠学教室内 電 松

戸三二六(小池新一)

東方学会 千代田区西神田二ノ二 電

九段一〇六一(宇野哲人) 機関誌「東方

学」年二回刊「東方学論集」不定期刊、

Books and Articles on Oriental

Subjects Published in Japan (年刊)

東洋学会 文京区本富士町 東京大学

東洋文化研究所内 電 小石川二二二

内線二一九六 (工藤松之助) 機関誌「東洋文化」発刊

日本建築学会 中央区銀座西三ノ一 電 京橋一三三三、一三三八、三四四九、四五七二、六〇二〇、(武藤清) 機関誌「建築雑誌」発刊

日本考古学会 台東区上野公園 東京国立博物館内 電 駒込三七一一一五 (原田淑人) 機関誌「考古学雑誌」発刊

日本考古学協会 文京区本富士町 東京大学文学部考古学研究室内(藤田亮策)「日本考古学年報」発行

日本美術教育学会 京都市左京区吉田京大文学部美術史研究室内 電 吉田四一一一学内九〇 (井島勉) 機関誌「美術教育」発刊

日本民俗学会 世田谷区成城町三七七 電 砧八一二六

美学会 文京区本富士町一 東京大学文学部美学研究室内 電 小石川一一二 一内線二三五一 (竹内敏雄) 機関誌「美学」発刊

美術教育学会 台東区上野公園東京藝術大学美術学部内 電 駒込三七六一 (小塚新一郎)

美術史学会 台東区上野公園 東京国立文化財研究所内 電 駒込四四八七 (熊谷直夫) 機関誌「美術史」発刊

仏教史学会 京都市中京区東洞院三条上ル四四九 平楽寺書店内 電 本局一六(禿氏祐祥) 機関誌「仏教史学」発刊

三田藝術学会 港区芝三田二ノ一 慶応義塾大学文学部美術史学研究室内 電 三田五一八一(守屋謙二)

早稲田大学美術史学会 新宿区戸塚町一ノ六四七 早稲田大学大学院文学研究科藝術科研究室内 電 東京御四一四一 内線八二坂崎坦)

東北大学美術史学会 仙台市片平丁 東北大学美術史研究室内 電 仙台(三)二一八一内線(六〇四)二五七、六二四(村田潔)

美術教育施設

(学校)

東京藝術大学美術学部 台東区上野公園 電 駒込三七六一一六

東京芸術大学美術学部の前身東京美術学校は明治二〇年一〇月勅令を以て設置せられ、文部省専門学務局長浜尾新が学校長事務取扱を命ぜられ、同二年二月授業を開始した。同三年浜尾新に代つて岡倉覚三学校長となつたが、同三年退官し、彼と共に教授橋本雅邦以下多数の教授、助教が辞職した。高嶺秀夫、久保田鼎に次いで同三四年正木直彦学校長となり昭和七年和田英作、同一一年芝田徹心、同一五年沢田源一、更に同一九年六月上野直昭が学校長に任ぜられた。

昭和二四年五月三一日法律第百五十号を以て国立学校設置法が公布され、東京美術学校は東京音楽学校と共に新制大学に包括され東京藝術大学美術学部及び東京藝術大学東京美術学校として夫々発足した。初代の学長には上野直昭、美術学部

長には村田良策が任ぜられ、美術学部長は村田良策の兼任となつた。次いで昭和二七年三月三一日旧制課程廃止により東京美術学校及び同校附属工芸技術講習所は廃止された。

美術学部の学科は本科だけとなり旧制師範科は昭和二七年三月三一日官制を以て廃止された。

(本科)

絵画科 (日本画、油画)
彫刻科 (石井教室、菊池教室)
工藝科 (図案計画、金工、漆藝)
建築科
藝術学科
版画研究室
陶磁器研究室

修業年限 四年。授業料 年額九〇〇〇円。

入学資格
(1) 高校卒業者
(2) 通常の課程による一二年の学校教育を修了した者
(3) 文部大臣の指定した者
(4) 大学入学資格検定規程により文部大臣の行う大学入学資格検定に合格した者

(専攻科) 入学資格 本学卒業生
(聴講生) 学生以外の者で本学に於て教授する科目中(実技を除く)一科目若しくは数科目を選び学習しようとするものは教授上差支ない場合に限り聴講を許可する。(四月中に申込むこと)

検定料五〇〇円。入学科五〇〇円。聴講料一単位につき三〇〇円。昭和三一年五月一日に於ける各科学学生数は左の通りである。

(絵画科) 男一七八名、女七七名
(彫刻科) 男七六名、女一一一名
(工藝科) 男二〇六名、女六〇名
(建築科) 男五一名、女二名
(藝術学科) 男四七名、女二五名

以上外国人特別学生を含む
(専攻生) 男四〇名、女二二名
(聴講生) 男八名、女二八名

尚、陳列館と正木記念館があり、随時展覧を行い学生及び一般に公開している。

(学長) 上野直昭 (美術学部長) 小塚新一郎 (教授) 村田良策、脇本十九郎、前田廉造、石井鶴三、丸山義男、松田義之、藤田亮策、岡田捷五郎、吉田五十八、内藤春治、松田権六、林武臣、西田正秋、新規短男、菊池一雄、摩寿意善郎、須藤雅路、伊藤廉、小磯良平、山本豊、加藤一 (併任教授) 谷信一 (助教) 入谷昇、太田栄吉、日下喜一郎、田中文雄、磯矢陽、久保守、内藤四郎、山脇洋二、笹村良紀、吉村順三、三井安蘇夫、宮川ムツ、寺田春式、西本順、小池岩太郎、前田泰次、末田利一、六角頼雄、野口三三三、桜林仁、小口八郎、新村撰吉、後藤年彦 (講師) 菅原安男、村田徳松、須田善二、上原之節、高田正二郎、小山清男、千里茂、田中芳郎、鈴木信一、山本学治、伊藤茂之、山口薫、川合清、牛島憲之、加山四郎、淀井敏夫

〔非常勤講師〕時田宗次、蔵田周忠、黒崎
静男、水谷武彦、佐藤隆三、豊田三郎、
清水正雄、酒井勉、吉川逸治、伊藤要太
郎、石田啓、成川武夫、時岡弘、蔵田蔵、
毛利登、明石龜太郎

京都市立立日吉ヶ丘高等学校

部 京都市上京区北野神
社前

電 西陣三三、三三九

工藝学部 京都市左京区松ヶ崎

御所海道町

電 吉田四四、四四三

繊維学部 京都市北区大將軍坂

田町

電 西陣六三、三三三

明治三十五年三月設置された京都高等工
藝学校は昭和一九年四月官制改正により
京都工業専門学校と改称、更に昭和二四
年五月京都繊維専門学校と合併して京都
工芸繊維大学工芸学部及び繊維学部とな
った。京都工業専門学校は昭和二六年三
月廃止された。

〔工芸学部〕 機械工芸学科、建築工芸
学科、色染工芸学科、窯業工芸学科、意
匠工芸学科〔昭和29年増設〕

〔繊維学部〕 養蚕学科、製糸紡績学科、
繊維化学科

学生定員は工芸学部各学科一二〇名、
繊維学部各学科一六〇名（但し意匠工芸
学科八〇名）とする。

〔学長〕 中沢良夫〔工芸学部長〕 荒
木長次〔繊維学部長〕 山根義寛〔美
術関係教授・講師〕 河本敦夫、土居次
義、福永俊吉、藤原義一、大倉三郎、高

原道夫、白石博三、明石国助、霜鳥正三
郎、松田尚之、石原正雄、福田朝生、相
川浩、松岡理、元井能、赤沢鏡太郎、今
井重季、岩田順三、山田新一、川端弥之
助、野口茂

京都市立美術大学

京都市東山区今熊野日吉町五〇

電 祇園一五八、三二一

明治一三年七月京都御苑内旧准后里御
殿を仮校舎として京都府画学校が開校せ
られ明治二二年二月京都市に移管の上、
京都市立絵画専門学校となり大正一五年
京都市立絵画専門学校となり大正一五年
現地に移転した。昭和二〇年京都市立美術
専門学校と改称、更に昭和二五年新制大
学令により京都市立美術大学となった。
京都市立美術専門学校は昭和二七年三月
廃止された。

〔学部及学科〕

美術学部 日本画科 一二〇名
西洋画科 一二〇名
彫刻科 四〇名
工芸科 一二〇名

図案専攻、陶磁器専攻
塗装専攻、染織図案専攻

専攻科

〔学長〕長崎太郎〔教授〕榊原安造、黒
田重太郎、須田国太郎、久松真一、金子
光介、上野伊三郎、富本憲吉、松原厚、金
尾音美、石村忠次、重久篤太郎、岡本午
一、佐和隆研、上村信太郎、川端弥之助、
中田勇次郎、辻晋堂、平館西一郎、小合
友之助

京都市立日吉ヶ丘高等学校
美術工藝課程

京都市東山区泉湧寺山内町

電 祇園四四、七〇

明治一三年京都府画学校が設立され、
その後同二四年に京都美術学校、二七年
に京都市立美術工芸学校と名称を変えた
が、更に昭和二三年京都市立美術高等学
校となり、同二四年には京都市立日吉ヶ
丘高等学校の総合制の中へ美術課程とし
て併置された。

〔学科〕

日本画科
西洋画科
彫刻科
図案科
漆藝科
陶藝科
服飾科

〔校長〕小林儀三郎〔職員〕勝田哲、天
野大虹、川島浩、松下明治、錦義一郎、
矢野判三、藤庭賢一、安田謙、笠間嘉一
郎、水内平一郎、平石晃祥、中島清、加
藤英子、伊藤久三郎、上村健治、原照夫、
田代誠、山中民子、寺井三三子、武田恒
夫

女子美術大学

杉並区和田本町八六〇

電 中野九一〇

明治三三年本郷弓町に女子美術学校と
して創立された。後菊坂に移り、昭和四
年専門学校に昇格女子美術専門学校と改
称、同一〇年杉並に移転した。昭和二四
年四月新制大学として女子美術大学とな

つた。
〔藝術学部〕

洋画科
日本画科
図案科
工芸科

修業年限 四年。授業料年額一八、〇〇
円。

〔学長〕佐藤達次郎〔主要職員〕加藤成
之、森岡喜三郎、竹中武重、村岡景夫、
沢柳大五郎、西田正秋、坂崎坦、富永惣
一、久野健、後藤守一、秋山謙蔵、真崎
公一、川島理一郎、木下義謙、中山巖、
森田元子、新道繁、佐々木四郎、高須鞆
子、春田安喜子、吉江麗子、奥村土牛、
三谷十糸子、片岡球子、後藤芳仙、大塚
和、麻生秀二、新井泉、乗松巖、福田良
一、由良玲吉、橋本徹郎、河野鷹思、松
井直樹、上原之節、高田力之、桑沢洋子、
柳宗悦、芹沢銈介、柚木沙弥郎、柳悦孝
多摩美術大学
世田谷区玉川上野毛町二二三
電 玉川五六、二二〇六

昭和一〇年九月、北聆吉、牧野虎雄、
杉浦非水、近藤清吾によつて多摩帝国美
術学校が設立され、更に昭和二二年専門
学校令による多摩造形藝術専門学校とな
った。昭和二五年新制大学令に伴い、三
年制の短期大学として多摩美術短期大学
と改称したが、二八年度より四年制の新
制大学となった。

〔学科〕
絵画科〔日本画、油画〕
彫刻科〔塑造、木彫〕

図案科

修業年限 四年。

〔学長〕井上忻治〔学部長〕逸見梅栄
〔職員〕奥村土牛、郷倉千鞆、森白甫、新井勝利、島田訥郎、森田敏平、宮本三郎、林武、鈴木信太郎、鈴木保徳、鈴木誠、大沢昌助、川端実、末松正樹、菊地精二、高橋庸男、長屋勇、佐々木大樹、笠置季男、早川巍一郎、円鏝勝二、杉浦非水、山名文夫、吉田謙吉、剣持勇、今井兼次、芹沢鋳介、木村和一、岩下洋、佐藤次夫、菅井辰夫

武蔵野美術学校

武蔵野市吉祥寺三二〇

電 武蔵野二四七二

昭和四年設立された帝國美術学校は同二二年造型美術学園と改称され、更に同二四年武蔵野美術学校となつた。

〔本科〕

日本画科

西洋画科

彫刻科

デザイン科

以上の入学資格は新制高校、旧制中学卒業者

研究科

本校卒業程度以上

修業年限 四年。学生定員五〇〇名。

授業料年額一六、〇〇〇円。

〔校長〕丸山鶴吉〔教育部長〕名取堯

〔主要職員〕奥村土牛、服部有恒、川崎小虎、福田豊四郎、林武、三雲祥之助、鈴木信太郎、森芳雄、山口長男、山口薫、麻生三郎、高島達四郎、井上長三郎、斎原弘

藤長三、横地康国、内田武夫、藤井令太郎、清水多嘉示、原弘、亀倉雄策、三林亮太郎、石川三友、金原省吾、板垣鷹穂

附設図工科 教員養成科

修業年限二ヶ年(高校卒以上)

〔科長〕名取堯

(中学図工二級免授生)

教職員は本校に同じ。

洋画通信教育部

本科・理論講座、実技講座、デザイン講座

職員は本部に同じ。

日本大学藝術学部

練馬区江古田町

電 落合三三三七

電 三三六九五

昭和六年専門部に藝術専攻科が設置されたのに始まり、昭和二四年新制大学となり、大学院も併置している。

〔藝術学部〕

美術学科

音楽学科

文藝学科

演劇学科

写真学科

映画学科

〔藝術学部長〕渡辺俊平〔美術学部主任〕

教授〕山脇巖〔主要職員〕湯川制、桜林仁、野口弥太郎、山本正、斎藤長三、糸

國和三郎、沢健太郎、柳原義達、深瀬嘉

臣、水谷武彦、三苦正光、富永惣一、吉

田謙吉、田中一松、阿部公正、西川驍、

高橋正年、鈴木太郎、麻生三郎、藤岡一、

原弘

文化学院美術科

千代田区神田駿河台

電 (東京29)三二七四一五

大正一一年西村伊作により一般の学校教育とは異なる自由教育を標榜して設立された。

〔美術科〕

(夜間美術科)

修業年限 二年。授業料年額一〇、〇〇〇円。材料費三、〇〇〇円。

入学資格 旧制中学、新制高校卒業程度。及び同等の実力を持つ者。

〔日曜美術科〕

授業料年額五、〇〇〇円。材料費一五、〇〇〇円。

〔院長〕西村伊作

盛岡短期大学美術工藝科

盛岡市内丸六九

電 盛岡二七一

昭和二三年五月、絵画・彫刻及び工藝の両域に亘つて専門家・美術教育者及び市町村の工芸指導者を養成すると共に藝術を中心としての教養・技術によつて生産・文化に寄与するのを目的として岩手県立美術工藝学校が設立され、昭和二六年四月盛岡短期大学美術工藝科に昇格した。更に翌年従来の美術工藝学校を改組して岩手県立美術工藝高等学校が同地に併置され、初代盛岡短期大学美術工藝科長森口多里が岩手県立美術工藝高等学校を兼任した。

修業年限 三年。学生定員一五〇名。

〔美術工藝科長〕池田桃太郎〔美術工藝科

関係教授〕池田桃太郎、深沢省三、堀江

越、〔助教〕奈知安太郎、佐々木一郎、

三ヶ尻正、〔講師〕森口多里、船越健次郎、

高橋吉雄、橋本八百二、戸田芳鉄、小池

岩太郎、松本総、手塚健二、松原正憲、

深沢紅子、吉川保正

岩手県立美術工藝高等学校

盛岡市内丸六九

盛岡短期大学美術工藝科参照。一般高等学校の学課規程に従い、その他専門学課と専門実習を課す。

〔学科〕

美術科(日本画専修、油絵専修)

工藝科(図案専修、木工専修、漆工専修、

金工専修)

〔校長事務取扱〕加藤英夫〔主要職員〕加

藤英夫、松本総、池田龍甫、三ヶ尻正、

堀江越、海野経、深沢省三、佐々木一郎、

奈知安太郎、杉江康彦、中島喜雄、戸田

芳鉄、照井儀也、菅原圭三、手塚健二、

小関六平

金沢美術工藝大学

金沢市下本多町三番丁九

電 金沢③三五三〇、一

昭和二一年七月金沢美術工藝専門学校

が設立され同一月開校した。同二五年

金沢美術工藝短期大学(三年制)として発

足、同三〇年更に金沢美術工藝大学とな

り初代学長に森田亀之助が任命された。

〔美術工藝学部長〕

美術学(絵画専攻、彫刻専攻)

産業美術学(工業意匠、商業美術)

修業年限四年、入学資格高校卒

〔学長〕森田亀之助〔教授〕野田九浦、和

田三造、高村豊周、小糸源太郎、吉田源十郎、畠山錦成、北出塔次郎、小松芳光、原田太一、高光一也、矩幸成、板垣鷹穂、秋山光夫、五井孝夫、平野謙一、天川維文

【実技研究所】

【東京】

春陽会美術研究所

事務所 文京区関口町一七〇

(木本晴三)

会場 港区赤坂青山南町

小原会館

昭和四年九月創立。春陽会の藝術活動の一翼として純粹美術を研究することを目的とする。実技指導、作品批評、講義講演等。入所資格は主として、春陽会会員、準会員、又は所員の紹介による。入会金三〇〇円。

毎月第四日曜日を研究会とし、午後一時より五時まで、作品批評及講演を行なう。研究生七〇円、臨時聴講者一〇〇円。〔指導者〕水谷清、岡鹿之助、加山四郎、中谷泰、三雲祥之助、南大路一、他春陽会会員及準会員

日月社研究所

会場 上野・桜亭

事務所 板橋区大谷町一

二九ノ一佐藤太清方

昭和二五年創立。日本画の研究所、毎月一回研究会及び講演会を上野桜亭で開く。研究会費は全員年三〇〇円で入所資格は委員推薦による。〔指導者〕伊東深水、兒玉希望、矢野橋村

青山絵画研究所

港区赤坂青山南町六ノ一〇八

電 青山七八五五

昭和二四年一〇月創立。洋画図案の基礎技術の指導と藝大受験を目的とする。種目は石膏・人体クロッキー・油絵・水彩

風景・静物で毎日午前九時—十二時、午後一時—五時、六時—九時、日曜部午前九時—午後五時、研究費は月六〇〇円。(日曜部四〇〇円)。〔指導者〕辻永、小川伝四郎

光風会美術研究所

港区新坂田町一九 光風会館内

電 東京(例)一七三二

昭和二七年創立。光風会会員指導の洋画実技研究所で、油絵、木炭素描の西洋美術史、服飾研究の講習も行う。石膏部(午前)月五〇〇円、人体部(午後)月一〇〇〇円、クロッキー(夜間)六回券三〇〇円。〔指導者〕辻永、中村研一、寺内万治郎、小糸源太郎、野野卯三郎、小寺健吉他光風会会員、〔代表者〕新宿区戸塚諏訪町一八 中沢弘光

第一美術研究所

文京区高田豊川町六〇

石川重信方

電 大塚一五〇一

昭和二二年創立。専門家及び中・小学生を含む洋画の実技研究所。種目はデッサン、油絵、水彩、クレヨンに亘り、毎週土曜日、月謝五〇〇円。〔指導者〕石川重信、高橋亮、谷井喜三郎、村上松次郎、野沢孝作、上原重和、鳩忠

ブルビ美術研究所

(文京絵画研究所改称)

文京区駒込千駄木町七

電 駒込二一七九

行動美術東京研究所

文京区富坂町一ノ二

昭和二一年六月創立。将来美術家を志す人、及び広く美術に親しむ一般の人々に解放し、基礎的研究と新しい美術に対する教養を高めることを目的とする。石膏部は日曜日を除き毎日午前と午後部に分け、各部月謝五〇〇円。人体固定ポーズは月一金夜間、月謝七〇〇円。人体油絵は日曜日午後、クロッキーは土曜日夜間。入会金各組共通五〇〇円。子供部は日曜日午前、月謝三〇〇円。〔指導者〕林是、榎倉省吾、向井潤吉、其他行動美術協会会員

ナガハマ染彩画塾

文京区指ヶ谷町六〇

電 小石川一三八二

昭和二四年九月創立。皮革、布帛の染色全般に亘り本格的染色技術の指導を行う。毎月曜、火曜午前一時—午後四時(二回二〇〇円) 研究料は随時で毎月一五〇〇円。毎金曜午後一時—四時クロッキー研究。〔指導者〕長浜重太郎、中村妙子

日本画院研究会

会場 都美術館を借用

本部 台東区谷中清水町一

望月春江方

電 駒込三八一〇

昭和二四年四月創立。美術に関する教養を高め日本画制作上必要な技術を研究指導することを目的とする。入会資格は日本画の修得を志すもので日本画院同人の推薦を経たる作家、尚研究会は主として下図作品を持ちより之に對し同人の講評、会員の互評を行なう。其他美術に関する専門家の講演、見学並びに美術映画の鑑賞を行う。毎月一回開催。会費毎回五〇〇円。〔指導者〕岩田正巳、服部有恒、川崎小虎、野田九浦、望月春江、他同人

日本水彩画会研究所

研究所 台東区根岸小学校美術教室

事務所 中野区江古田一ノ二五

日本水彩画会 細島方

電 落合六七三三

明治四〇年創立。男女、年齢、職業を問はず水彩画の指導を行う。毎週日曜日、九時—四時。石膏、人体、静物、風景、記名料二〇〇円。会費毎回八〇円。臨時参加一回一〇〇円。〔指導者〕石井鶴三、水野以文他日本水彩画会会員(主任)不破章、竹内梅治郎、〔代表者〕日本水彩画会幹事細島昇一

現代版画研究会

会場 新宿区笹崎町一五

(都立新宿生活館)

電 九段三六六七

事務所 杉並区高円寺三ノ一八〇

日本版画協会

昭和二五年創立。創作版木の普及を目的とし、特に初心者のために実技指導を

国画会美術研究所

杉並区上荻窪二ノ六〇

電 荻窪五七

行つてゐる。大阪を主とし一年間一二回で大要を伝える。以後は随意出席。毎月第一土曜午後一時―四時、研究費一回五〇円、三回一〇〇円。〔指導者〕品川工、北岡文雄、関野準一郎、駒井哲郎、平塚運一、吉田政次、他日本版画協会々員

昭和二六年五月創立。専門家、藝術大受験生及びアマチュアも含めた洋画の実技研究所で美術講義批評等も毎週行ふ。石膏、デッサンは毎日午前九時―一二時、午後一時―四時の二回、月謝各七〇〇円。人体は土曜午前中。(一回五〇円)、月謝七五〇円。入会金一〇〇〇円。〔顧問〕梅原竜三郎〔指導者〕主任、川口軌外の他伊藤廉、大森啓助、松田正平、久保守、土田文雄、原精一等在京国画会員が毎週二名交代で指導。〔責任者〕世田谷区玉川用賀町一ノ一、松田正平

昭和二五年四月創立の三軌会研究所を改称。基本的技術並びに水彩画一般についての指導を行う。石膏(木炭)、人体(木炭・水彩)水彩画研究の科目があり第一、第三の土曜・日曜日。月謝五〇〇円。尚通信指導も行ふ。〔指導者〕互井開一、古郷八郎、前林章司、他同協会々員

光陽会研究所

北区上中里町一ノ二

電 多々羅義雄方

昭和二九年二月、光陽会創立と同時に光陽会研究所を設立。後進美術家養成を目的とする。石膏素描部、水彩・油絵部、人体部があり毎日曜日前九時―一二時、月謝人体部実費負担他は四〇〇円。〔指導者〕多々羅義雄、井口勇、早川芳彦、斎藤武、間所一郎、浅田進

新宿区下落合一ノ五二一
電 落合五三三

昭和二六年五月創立。毎日午前、油彩夜間、裸婦クロッキー、一回七〇円。〔代表者〕神保重義

新設協会研究所
杉並区東荻町六九神津港入方
電 荻窪四四三

昭和二七年二月創立。石膏素描による基礎的写形を指導する。初学者向。毎週日・月・土の午前九時より正午迄。入所資格は一七歳以上の者で創藝協会々員の紹介あるものに限る。月謝七〇〇円。入所登録金一〇〇〇円。〔指導者〕神津港人

昭和二七年一〇月創立、誰にでも絵が描ける様にとりうのが目的で、デッサン、油絵を教える。月・火・水・木曜日、石膏、油、金曜、日曜日、固定ポーズ。土、クロッキー。昼夜二部制月謝五〇〇円、クロッキー一回六〇円、児童部もある。

職・美・協・中央美術研究所

新宿区戸塚町二ノ五四

杉本鷹方

昭和二三年二月創立。年令・資格を問わず一般に開放し、石膏、人体のデッサンから制作の指導に及ぶ。毎日午前は石膏、午後及び夜はモデル、日曜は午前午後ともモデルを使用する。入所費五〇〇円、石膏部三〇〇円、人体部午後部七〇〇円、夜・日曜部五〇〇円。

阿佐ヶ谷洋画研究所(公認阿佐ヶ谷美術学園)
杉並区高円寺三ノ一八四

昭和二二年四月創立。個人的指導により初心者のための実技を主とし併せて専門教育も行ふ。本科は二ヶ年で毎日九時―一五時、月謝一〇〇〇円。他に選科一年、デッサン科、研究科があり、毎日、午前部の月謝八〇〇円。午後の部、夜間部月謝各八〇〇円。日曜部九時―一五時月謝五〇〇円。入所金一〇〇〇円。またクロッキー部を設け毎日曜の午後、及び夜間モデルを使用(一回五〇円)。〔指導者〕土味川独甫、関根弘、飯田庸夫、坂忠雄他、外講師数名

昭和二七年一〇月創立、誰にでも絵が描ける様にとりうのが目的で、デッサン、油絵を教える。月・火・水・木曜日、石膏、油、金曜、日曜日、固定ポーズ。土、クロッキー。昼夜二部制月謝五〇〇円、クロッキー一回六〇円、児童部もある。

〔指導者〕野口弥太郎、井上長三郎、麻生三郎、中谷泰、布施浩、杉本鷹

昭和二二年一月創立。男女年令を問はず随時入所出来、個人的指導を行う。種目はデッサン科、工芸デザイン科、建築デザイン科、日曜科(一般児童)で、(午前部)九時―正午、(午後部)一時―四時、(夜間部)六時―九時。月謝各部八〇〇円。日曜は午前と午後の部に分れ月謝は各四〇〇円、終日五〇〇円、児童部は日曜のみ。工芸家志望者は別教室で行ふ。入所金二〇〇〇円。〔指導者〕三輪孝、上原之節、佐藤功、井手宣通、小山清男、南政善、坪井秀雄、条原宏、福田良一

昭和二二年四月創立。個人的指導により初心者のための実技を主とし併せて専門教育も行ふ。本科は二ヶ年で毎日九時―一五時、月謝一〇〇〇円。他に選科一年、デッサン科、研究科があり、毎日、午前部の月謝八〇〇円。午後の部、夜間部月謝各八〇〇円。日曜部九時―一五時月謝五〇〇円。入所金一〇〇〇円。またクロッキー部を設け毎日曜の午後、及び夜間モデルを使用(一回五〇円)。〔指導者〕土味川独甫、関根弘、飯田庸夫、坂忠雄他、外講師数名

昭和二二年創立。水彩画を専門とし、学童、専門家の別がある。毎土・日曜日、月謝四〇〇円冬期五〇〇円〔指導者〕春日部たすく

〔指導者〕野口弥太郎、井上長三郎、麻生三郎、中谷泰、布施浩、杉本鷹

昭和二二年四月創立。個人的指導により初心者のための実技を主とし併せて専門教育も行ふ。本科は二ヶ年で毎日九時―一五時、月謝一〇〇〇円。他に選科一年、デッサン科、研究科があり、毎日、午前部の月謝八〇〇円。午後の部、夜間部月謝各八〇〇円。日曜部九時―一五時月謝五〇〇円。入所金一〇〇〇円。またクロッキー部を設け毎日曜の午後、及び夜間モデルを使用(一回五〇円)。〔指導者〕土味川独甫、関根弘、飯田庸夫、坂忠雄他、外講師数名

昭和二二年創立。水彩画を専門とし、学童、専門家の別がある。毎土・日曜日、月謝四〇〇円冬期五〇〇円〔指導者〕春日部たすく

昭和二二年創立。水彩画を専門とし、学童、専門家の別がある。毎土・日曜日、月謝四〇〇円冬期五〇〇円〔指導者〕春日部たすく

陶彫会研究所

中野区江古田二ノ九二八

滝川美一方

陶磁彫刻の基礎的な技術の相互研究と併せて有為な陶彫家の育成のための実技指導を行うことを目的とする。クロッキー、塑像、型取、型起、釉薬、焼成。毎週土、日曜日前九時―午後四時。入所金五〇〇円。聴講研究費一日一回一〇〇円。〔指導者〕陶彫会々員

三軌会研究所
杉並区上荻窪一ノ一三五井開一方

昭和二二年四月創立。個人的指導により初心者のための実技を主とし併せて専門教育も行ふ。本科は二ヶ年で毎日九時―一五時、月謝一〇〇〇円。他に選科一年、デッサン科、研究科があり、毎日、午前部の月謝八〇〇円。午後の部、夜間部月謝各八〇〇円。日曜部九時―一五時月謝五〇〇円。入所金一〇〇〇円。またクロッキー部を設け毎日曜の午後、及び夜間モデルを使用(一回五〇円)。〔指導者〕土味川独甫、関根弘、飯田庸夫、坂忠雄他、外講師数名

昭和二二年創立。水彩画を専門とし、学童、専門家の別がある。毎土・日曜日、月謝四〇〇円冬期五〇〇円〔指導者〕春日部たすく

〔指導者〕野口弥太郎、井上長三郎、麻生三郎、中谷泰、布施浩、杉本鷹

昭和二二年四月創立。個人的指導により初心者のための実技を主とし併せて専門教育も行ふ。本科は二ヶ年で毎日九時―一五時、月謝一〇〇〇円。他に選科一年、デッサン科、研究科があり、毎日、午前部の月謝八〇〇円。午後の部、夜間部月謝各八〇〇円。日曜部九時―一五時月謝五〇〇円。入所金一〇〇〇円。またクロッキー部を設け毎日曜の午後、及び夜間モデルを使用(一回五〇円)。〔指導者〕土味川独甫、関根弘、飯田庸夫、坂忠雄他、外講師数名

昭和二二年創立。水彩画を専門とし、学童、専門家の別がある。毎土・日曜日、月謝四〇〇円冬期五〇〇円〔指導者〕春日部たすく

昭和二二年創立。水彩画を専門とし、学童、専門家の別がある。毎土・日曜日、月謝四〇〇円冬期五〇〇円〔指導者〕春日部たすく

〔指導者〕野口弥太郎、井上長三郎、麻生三郎、中谷泰、布施浩、杉本鷹

昭和二二年四月創立。個人的指導により初心者のための実技を主とし併せて専門教育も行ふ。本科は二ヶ年で毎日九時―一五時、月謝一〇〇〇円。他に選科一年、デッサン科、研究科があり、毎日、午前部の月謝八〇〇円。午後の部、夜間部月謝各八〇〇円。日曜部九時―一五時月謝五〇〇円。入所金一〇〇〇円。またクロッキー部を設け毎日曜の午後、及び夜間モデルを使用(一回五〇円)。〔指導者〕土味川独甫、関根弘、飯田庸夫、坂忠雄他、外講師数名

昭和二二年創立。水彩画を専門とし、学童、専門家の別がある。毎土・日曜日、月謝四〇〇円冬期五〇〇円〔指導者〕春日部たすく

昭和二二年創立。水彩画を専門とし、学童、専門家の別がある。毎土・日曜日、月謝四〇〇円冬期五〇〇円〔指導者〕春日部たすく

〔指導者〕野口弥太郎、井上長三郎、麻生三郎、中谷泰、布施浩、杉本鷹

昭和二二年四月創立。個人的指導により初心者のための実技を主とし併せて専門教育も行ふ。本科は二ヶ年で毎日九時―一五時、月謝一〇〇〇円。他に選科一年、デッサン科、研究科があり、毎日、午前部の月謝八〇〇円。午後の部、夜間部月謝各八〇〇円。日曜部九時―一五時月謝五〇〇円。入所金一〇〇〇円。またクロッキー部を設け毎日曜の午後、及び夜間モデルを使用(一回五〇円)。〔指導者〕土味川独甫、関根弘、飯田庸夫、坂忠雄他、外講師数名

昭和二二年創立。水彩画を専門とし、学童、専門家の別がある。毎土・日曜日、月謝四〇〇円冬期五〇〇円〔指導者〕春日部たすく

昭和二二年創立。水彩画を専門とし、学童、専門家の別がある。毎土・日曜日、月謝四〇〇円冬期五〇〇円〔指導者〕春日部たすく

〔指導者〕野口弥太郎、井上長三郎、麻生三郎、中谷泰、布施浩、杉本鷹

昭和二二年四月創立。個人的指導により初心者のための実技を主とし併せて専門教育も行ふ。本科は二ヶ年で毎日九時―一五時、月謝一〇〇〇円。他に選科一年、デッサン科、研究科があり、毎日、午前部の月謝八〇〇円。午後の部、夜間部月謝各八〇〇円。日曜部九時―一五時月謝五〇〇円。入所金一〇〇〇円。またクロッキー部を設け毎日曜の午後、及び夜間モデルを使用(一回五〇円)。〔指導者〕土味川独甫、関根弘、飯田庸夫、坂忠雄他、外講師数名

昭和二二年創立。水彩画を専門とし、学童、専門家の別がある。毎土・日曜日、月謝四〇〇円冬期五〇〇円〔指導者〕春日部たすく

昭和二二年創立。水彩画を専門とし、学童、専門家の別がある。毎土・日曜日、月謝四〇〇円冬期五〇〇円〔指導者〕春日部たすく

(日本画科) 午後六時—九時、月謝五〇円、(デッサン科)午後六時—九時、一回五〇円、(余技)午前九時—一二時、月謝一〇〇〇円、(生活美術部)二時—五時、月謝三〇〇円、(子供の画の勉強会)二時—四時、月謝二〇〇円。〔責任者〕大橋嘉一

桑の実美術研究所

豊島区雑司ヶ谷一ノ三〇二
吉城弘方

昭和二五年創立。一般及び幼児、小学生を含む洋画の実技研究所。種目は幼児部、クレヨン、パステル、水彩。小中学生水彩、油彩、石膏デッサン。一般部、水彩、油彩、石膏デッサン、人体デッサン。研究時間 幼児毎日、小中学生、土曜午後、日曜午前、一般毎日五時—九時、日曜一時—六時。〔指導者〕吉城弘、北野満、田中宗雄、塚元正勝、その他太平洋画会会員、会友

江古田洋画研究所

練馬区小竹町二四四三
服部季彦方

昭和二九年創立。洋画の基礎技術及受験目的の指導を行。種目は石膏デッサン、油画、水彩其他で、本科毎日(除日曜)午前、午後、夜間。日曜科、小学生午前、一般午後〔月謝〕受験科、本科六〇〇円、入所金六〇〇円。日曜科午前二〇〇円、午後三〇〇円、入所金三〇〇円〔指導者〕服部季彦

露麗社研究所

練馬区大泉学園町七一八
平子聖龍方

美術教育施設

昭和二十一年一〇月創立。余技、専門の區別を問わず指導する。種目及び指導者 日本画 平子聖龍、毎日曜、一回一〇〇円。

双台社写真研究所

渋谷区代々木上原一三二〇
電 渋谷一三六〇

基礎技術の訓練に重きをおく。A・Bのクラスがあり、Aは素描、水彩、油絵。Bはクレヨン、パステル、水彩、油絵。Aクラスは高校生以上一般、毎日曜、月謝五〇〇円。Bクラスは小・中学生、毎土曜月謝三〇〇円。〔指導者〕石井柏亭、平塚運一、荒谷直之介、他双台社会員、〔代表者〕石井柏亭

代々木絵画研究所

渋谷区代々木山谷二七七
本宮昭五郎方

昭和二九年八月創立。初心者Aクラスと習熟者のBクラスの二室に分け人体描写の習得に主眼をおく。児童部もある。午前九時—正午、又は午後一時—四時、月謝一〇〇〇円。夜六時—九時、月謝七〇〇円。日曜日午後(アマチュアクラス特設、一ヶ月四〇〇円)日曜夜間(特設クローキークラス、一回五〇〇円)。(指導者)平沢喜之助、秋野克彦

絵の教室

世田谷区松原町三ノ八〇五
昭和二六年八月創立。素人を対象とする。油絵、水彩画、デッサン、クレパス、パステル画を教える。(子供)毎土曜午後毎日曜午前何れか一回月謝五〇〇円。(大人)月謝七〇〇円。〔指導者〕一水

会々員 坂本正春 砧藝術会研究所

世田谷区砧町一三〇
中野秀人方

昭和二十四年一〇月創立。同会の趣旨は絵画を主とし文化一般の理解を高めることにある。人体デッサン、油絵、水彩、パステル。程度は初歩より専門家を含む。毎土・日曜、午後一時より、月謝二五〇円

田園調布純粋美術研究室

世田谷区玉川田園調布二ノ七三
電 田園調布二〇八九

昭和二〇年一〇月創立。洋画の実技を指導する。モデル使用によるデッサン及び油絵の勉強で土曜日以外毎日、午後は固定ポーズ。夜間はクローキークラス(月謝昼夜通し六〇〇円)入会金八〇〇円、土曜日休み。(指導及び代表者)猪熊弦一郎

自由ヶ丘絵画研究所

目黒区自由ヶ丘二八九

昭和一五年四月創立。高校生以上のAクラス。小・中学生のBクラスの別がある。A—油絵、水彩、デッサン。毎日曜午後一時—四時。月謝四〇〇円(石膏)、五〇〇円(人体)。

B—水彩、クレパス等、毎土曜午前九時—午後五時。毎日曜日午前九時—一二時。月謝三〇〇円。〔指導者〕須山計一

近藤吾朗アトリエ

大田区田園調布一ノ一六

昭和二五年創立。一般教養のための絵

画教育を目的としている。種目は油絵、水彩、素描に亘り、毎日曜午後一時—五時、月謝六〇〇円。児童は毎土曜の午後、月謝四〇〇円。〔指導者〕近藤吾朗

斗潮美術研究所

(旧河合美術研究所)
大田区久ヶ原町六四二
河合斗潮方

昭和六年創立。太平洋画会委員河合斗潮他同委員数人の指導による絵画並びに、染色の研究。土曜(夜)日曜(成人、木・金・土曜(午後)児童、月・火・水曜、葛飾部(顧問)熊谷守一

織田石版術研究所

武蔵野市吉祥寺小路一七三七
昭和二十七年一〇月創立。石版術の普及を目的とし、入所資格はデッサンの出来る人。一ヶ月二回(午前九時—午後四時迄)。(指導者)故織田一磨門下生

【地方】

創型会彫塑研究所

浦和市常盤町六ノ二二
中野四郎方
電 浦和五三六七

事務所 世田谷区玉川奥沢町二ノ一四九 森大造方

昭和二六年創立。モデルを使用してクローキークラ、塑像及び基本型体の構成と応用研究。入所資格はデッサン及び石膏像製作に多少経験あるもの。研究日は日曜と春夏冬の休暇。(指導者)中野四郎、その他創型会同人

造形美術研究所

浦和市外与野町大戸四二八
手塚方
電 浦和六九三〇(呼)

昭和二六年一月創立。絵画、彫塑、造形理論、造形教育原理等、各部門に亘る基本的研究。その他、毎週土曜、日曜児童、生徒の実技指導。〔研究所員〕手塚又四郎、田中修、飛岡文一、大坪実、石原英雄、大里光春、岡沢光雄、番匠宇司、染谷英五、星野祐二、磯谷猛、三森一伸、公衆源一郎、高野万年

藏画塾

埼玉縣蕨町土橋四二〇五

昭和二三年四月創立。洋画の基礎教育を行い、デッサン、油絵、彫刻、人体、受験の各科に分れ、午前、午後、夜間(但夜間部は日曜休み)部がある。〔月謝〕五〇〇円、寄宿舎がある。〔指導者〕寺内万治郎、島野重之、金子徳衛、長谷秀雄

茨城綜合美術研究所

茨城県土浦市富士崎町四八六

昭和二六年一〇月創立。〔代表者〕鶴岡義雄、他。(昭和三〇年七月解散)

サロン・ド・ジュワン

名古屋研究所

名古屋市昭和区御器所町
五ノ三〇 真島健三方

昭和二七年三月創立。基本的な理論と技術の指導及び前衛的作品批評を目的とする。人体デッサン及び理論。毎土曜夜間、月謝五〇〇円。記名料三〇〇円。入所資格制限なし。〔指導者〕真島建三

関西美術院

京都市左京区岡崎南御所町四〇

明治三九年三月創立。創立以来一派、

一団体の機関とせず、流派を超えて後進養成に努めている洋画研究機関。研究生が主体となり委員互選で経営を行つてゐる。種目は洋画実技(素描、油絵)と専門学科(美術史、技法史、構図法等)の二つがある。洋画実技、人体は毎日午前九時―一二時。石膏、静物写生は午前九時―午後五時。専門学科は随時研究会を催す。月謝は各科二〇〇円、(燃料費モデル實は別)資格制限なし。〔指導者〕黒田重太郎(研究所代表者)、川端弥之助、津田周平

行動美術京都研究所

京都市左京区川端丸太町下ル

和風書院内
電 吉田二六八四

昭和二〇年六月創立。美術の研究のみならず美術運動を目的とす。夜間部は毎日曜、土曜、午後六時―九時。日曜部は毎日曜午前九時―午後四時、月謝は執れも石膏が三〇〇円、人体四五〇円、クローキ一部は毎月曜午後六時―九時、毎回四五円。他に学生部毎土曜午後二時―五時がある。〔指導者〕伊谷賢蔵、伊藤久三郎、福井勇、飯田清毅、(研究所代表者)保地謙哉

紫野洋画研究所

京都市上京区北大野町六八

山田新一方
電(呼出) 西六五三三

昭和一〇年創立。創設者太田喜二郎の

遺志をつぎ健全な基礎技術の指導を目的とする。石膏、人体デッサン部及びクローキ部一回五〇円、一ヶ月一七〇円。

人体(油絵、水彩)部、午前、午後各六〇円、終日一〇〇円。何れも、日曜午前午後、金、土曜午後、夜間。木曜夜間。入所金五〇〇円。〔指導者〕山田新一、霜鳥之彦、坪井一男、由里明、富士一男
独立美術京都研究所
京都市下京区八条西酢屋町四
昭和八年九月創立。毎日午後六時半―九時半、月謝七〇〇円。少年部は日曜午前及び午後。〔指導者〕須田国太郎、田中佐一郎、今井憲一

大阪市立美術館附設美術研究所

大阪市天王寺区天王寺公園内
市立美術館内
電 天王寺六一〇、四六〇九

昭和二一年五月創立。日本画、洋画、彫塑の三科あり各々初歩指導、美術学校受験者の指導及美術学校等の卒業者の実技研究場所等各種に利用されている。日曜祭日を除き九時―四時。入所金三〇〇円。月謝は洋画人体、彫塑、日本画部各三五〇円。洋画石膏部三〇〇円。〔指導者〕日本画―中村貞以、矢野橋村、菅橋彦、生田花朝也。洋画―須田国太郎、鍋井克之、小磯良平、田村孝之介他。彫塑―保田龍門、上田暁、今村輝久他

本間美術館

山形県酒田市浜知町一二

電 酒田一四二九

昭和二二年五月創立。地方文化に貢献するために旧本間家別邸を美術館として公開した。文書・陶器等東洋美術関係四〇〇点、洋画・版画等西洋美術関係五〇数点を有し、年平均二五回展覧会を開いている。運営は別に組織された酒田美術協会が当つてゐる。

〔館長〕 本間祐介

〔観覧日〕 月曜を除き、毎日午前九時―午後四時半
〔観覧料〕 五〇円

致道博物館

山形県鶴岡市家中新町戊一

電 鶴岡一一九九

昭和二七年三月創立。維新後、藩校致道館廃止と共に、旧藩主酒井家邸内に図書研究所文会堂を設け、各種郷土資料の研究調査公開を行つて来たが、昭和二五年財団法人以文会の設立と同時にこれを継承し、更に同二七年博物館法により財団法人以文会立致道博物館となつた。古文書五六八点、甲冑一〇点、刀劍三四点、書画數一〇点、考古学資料二〇〇〇点、民族資料五〇〇点等を有し、美術展・文化史展等を開き、郷土文化の向上を図り資料の保管陳列等を行つてゐる。

〔館長〕 大塚又太郎

〔観覧日〕 毎日午前九時―午後五時

〔観覧料〕 展覧会の規模に応じて之を定める。

美術観覽施設

〔東北地方〕

上杉神社禊祓殿

山形県米沢市南堀端町三六
電 米沢一七三〇

大正一一年四月創立。上杉神社祭神謙
信公及び鷹山公の遺品を取載。絵画、工
藝品及文書約五〇〇点

〔観覧日〕 希望に応じ随時開館
〔観覧料〕 三〇円

陶磁巧藝館

山形県小松町二九一一

昭和七年四月創立。財団法人組織。学
術参考資料として支那、朝鮮及日本の古
陶磁約五〇〇点を陳列公開する。

〔館長〕 井上庄七

〔観覧日〕 四、五、六、七、九、一〇
の六ヶ月間、毎日午前一〇時―午後三時

〔観覧料〕 無料
〔観覧料〕 無料

岩手県西磐井郡平泉町
電 平泉四

昭和三〇年五月三日竣工開館。一字金
輪仏、大日如来、釈迦・弥陀・薬師の丈
六仏、千手観音等の仏像を始め藤原四代
副葬品及び多数の経巻、工藝品、古文書
類に至る国宝重文を取載展観する。又同
寺境内に金色堂(国宝)、経蔵(重要文化
財)がある。

〔観覧日〕 四月―一〇月(午前八時―
午後五時) 十一月―三月(午前八時半―
午後四時)

斎藤報恩会博物館

仙台市大聖寺裏門通三
電 仙台(2)四七七七

大正一二年二月創立。大正一二年文部

美術観覧施設

省認可となり昭和八年に開館一般公開し
た。昭和二〇年戦災を受けたが三三年修
理再開した。東北地方の自然科学資料、
文化史資料を陳列する。

〔館長〕 斎藤養之助

〔観覧日〕 月曜日を除き毎日
〔観覧料〕 一〇円

茨城県立美術館

水戸市北三ノ丸県立図書館内

昭和二年五月創立。新憲法公布を記
念して設立され、美術思想の普及向上を
図る目的を以て展覧会・講演会等の事業
を行っている。日本画・洋画・彫刻・工
藝の所蔵品がある。昭和三一年右図書館
内に移転。

〔館長〕 小島貞

〔観覧日〕 毎火曜日、年末年始、祝祭
日、毎月未整理日を除き毎日午前九時―
午後四時三十分。

〔観覧料〕 一五円
〔観覧料〕 一五円

茨城県西茨城郡笠間町

佐白山麓公園内
電 笠間四一

創立昭和二五年一月。県内外に存在
する国宝指定の仏像の複製(石膏)を保存
し、且、国宝仏像管理寺院の照会及び参
観視察の便宜を計る。複製仏像の所蔵約
一一点、他に随時絵画展なども行う。

〔館長〕 榎並栄

〔観覧日〕 毎日午前八時半―午後五時
〔観覧料〕 二〇円

〔観覧料〕 二〇円

鹿島神宮宝物館

茨城県鹿島郡鹿島町宮中
電 鹿島九

甲冑・古文書等鹿島神宮の宝物を陳列。
〔観覧日〕 毎日午前八時―午後五時
〔観覧料〕 一般一〇円、学生五円
日光宝物館

栃木県日光市山内
電 日光一四

大正四年五月東照宮三〇〇年祭祀念事
業として建設され、東照宮、二荒山神
社、輪王寺所蔵の宝物類を陳列し、江戸
時代の工藝品が多い。

〔観覧日〕 毎日、四月―一〇月午前八
時―午後五時。十一月―三月午前八時―
午後四時。

〔観覧料〕 二社一寺の殿堂拝観料一〇
〇円中に含まれ、本館のものはない。

〔東京〕

東京国立博物館

台東区上野公園
電 駒込三七一一五

創立は明治五年正院に於ける博覧会事
務局の設置に始まり、其後同局を博物館
と改称し内務省の管轄に付したが同一四
年農商務省へ移管となり、事務所(当時
博物館と称す)を上野の旧寛永寺本坊跡
に移転し翌一五年同所に新築の本館を開
いた。一九年宮内省管理となり二二年帝
国博物館と改められ、歴史、美術、美術工
藝、工藝、天産の五部を設け、三三年帝
室に改められた。天産部は大正一四年文
部省に移管された。大正天皇の御成婚記
念として造営された表慶館は明治四一年
に竣工した。陳列本館は震災に大破し、
其の後表慶館を列品陳列に充て昭和一二
年従来の歴史課、美術課を廃し列品課に
改め、別に学藝課を新設した。今上陛下
の御即位記念事業である帝室博物館復興
翼賛会の復興大工事が昭和一二年に竣工
し、新築本館は同一三年一月開館され
た。昭和二年五月帝室博物館は文部省
国宝調査室、同保存修理室及び美術研究
所と合併し、文部省の管轄の下に国立博
物館として発足した。陳列課、事業課、
調査課、保存修理課、資料課、監理課、
附属美術研究所の六課一所制をとり、奈
良帝室博物館は国立博物館奈良分館と称
することとなった。ついで昭和二五年
八月文化財保護法が制定実施され、さき
に国立博物館に合併された調査課、保存
修理課は文化財保護委員会事務局保存部
に入ることとなり再び博物館から離
れ、美術研究所も分離し、博物館は文化
財保護委員会の附属機関となった。その
内部組織は館長、次長の下に新に庶務、
学藝の二部を設け、庶務部には管理、会
計、普及の三課、学藝部には美術、工
藝、考古、資料の四課をおき、また諮問
機関として国立博物館評議員会を設置
し、奈良分館には分館長の下に庶務、学
藝、普及の三課が置かれたが二七年四月
文化財保護法の一部改正にともない、当
館は東京国立博物館と改称され、更に同
年八月当館附属の奈良分館は奈良国立博
物館となつて東京国立博物館から分離し
た。(二〇九、二二八、二二七頁参照)

建物は地上二階、地下二階、総面積六五二坪、鉄骨鉄筋コンクリート造りの東洋風建築である。

又構内には九条道秀及び益田孝より夫寄贈され、昭和一二年開館された九条館及び応挙館がある。前者はもと京都御所内九条邸にあつたもので伝山楽山雪筆の四季楼閣山水図の画かれた床張付、襖等があり、後者には円山応挙筆の壁張付、襖等がある。その他茶室六窓庵、校倉等の建物がある。

〔館長〕 浅野長武〔次長〕 田内静三
〔部長〕 (庶務) 深見吉之助、(学藝) 石田茂作、(課長) (管理) 山田秀吉、(會計) 出牛清次郎、(普及) 野間清六 (美術) 石沢正男、(工藝) 蔵田蔵、(考古) 矢島恭介、(資料) 岡田謙
〔評議員〕 宇佐美毅、上野直昭、梅原末治、河原春作、小泉信三、小宮豊隆、坂本太郎、沢沢敬三、杉栄三郎、原田淑人、藤懸静也、藤田亮策、三矢宮松、和辻哲郎

〔観覽日〕 月曜日、年末年始を除き、三月一十月午前九時一午後四時半、十一月一二月午前九時一午後四時
〔観覽料〕 大人三〇円、小人一五円
国立近代美術館

中央区京橋三ノ一
電 京橋三三―五、五七六
昭和二十七年八月一日創立、一二月一日開館。建物は旧日活会館を買上げ、建築家前川国男に依頼して改装した。(二四一頁参照)
敷地 一六九坪

建坪 総坪数五〇九坪 (鉄骨鉄筋コンクリート)、各階九四坪 (地上四階、地下一階)
〔観覽日〕 一月四日から一二月二八日迄。午前一〇時一午後五時、毎月曜休館。
〔観覽料〕 大人五〇円。学生三〇円、小人二〇円

〔館長〕 岡部長景〔次長〕 今泉篤男
〔庶務課長〕 原敏夫〔事業課長〕 河北倫明
〔評議員〕 石橋正二郎、細川護立、大谷竹次郎、岡安彦三郎、河原春作、高橋誠一郎、上野直昭、山下新太郎、矢代幸雄、前田廉造、松田権六、藤山愛一郎、浅野長武、齋藤知雄、坂崎坦、岸田日出刀

〔運営委員〕 池田義信、飯島正、富永惣一、和田新、嘉門安雄、吉川逸治、滝口修造、村田良策、牛原彦彦、宇野俊郎、野間清六、隈元謙次郎、山田智三郎、前川国男、清水晶、島崎清彦、土方定一、岡野嘉雄
東京都美術館

台東区上野公園
電 駒込三三―七、四六六
大正一〇年平和博覧会記念事業期成実行会によつて東京に永久的美術館の設立が建議され、佐藤慶太郎の百万円の寄附及び大正一三年皇太子殿下御慶事に際し宮内省より現敷地約四〇〇坪の無償貸与によつて、大正一三年九月起工、同一五年四月竣工した。五月聖徳太子奉讃美術展を開館記念として開催した。昭和四年東京府より約四〇万円を支出して別館

を増築した。昭和一八年旧称東京府美術館を東京都美術館と改めた。
〔館長〕 早川治平〔副館長〕 田中靖孝〔主事〕 柿沼春雄、友部隆治〔顧問〕 川合玉堂、横山大観、鈴木清方、松林桂月、川端龍子、北村西望、奥村十牛、結城素明、安田靉彦、小林吉径、野田九浦、前田青谷、中村彦隆、平橋田中、松田権六、板谷波山、岩田藤七、豊道春海、海野清、藤井浩佑、内藤伸、齋藤知雄、朝倉文夫、佐藤清蔵、小杉放庵、和田三造、山下新太郎、和田英作、石井柏亭、中沢弘光、辻永、有島生馬、梅原龍三郎、石井鶴三、上野直昭、吉田五十八、齋藤隆三、尾上柴舟、川島理一郎、高村豊周、中村研一、山口蓬春、吉田三郎

〔参事〕 兒玉希望、望月春江、森白甫、堅山南風、福田豊四郎、太田聰雨、猪熊弦一郎、東郷青児、中山巍、中野和高、田崎広助、小寺健吉、伊原宇三郎、向井潤吉、栗原信、大久保作次郎、山本豊市、藤野舜正、笠置季男、村田勝四郎、山崎覚太郎、吉田源十郎、香取正彦、内藤春治、柳田泰雲、高塚竹堂、金子鷗亭、平尾孤往、谷信一、野間清六、嘉門安雄、村田良策、隈元謙次郎、河北倫明、滝口修造、富永惣一、土方定一、田近憲三

一、東京都美術館処務規程(略)
二、東京都美術館顧問及び参事規程
第一条 東京都美術館(以下館という)に顧問及び参事若干人を置く。都教育委員会がこれを委嘱する。

第二条 参事の任期は二年とし、再任を妨げない。
第三条 顧問及び参事は館の運営について館長の諮問に応ずる。
第四条 館に常任参事若干人を置くことができる。参事の中から都教育委員会これを委嘱する。

附則 (昭和二十五年教育委員会規則第七号)
この規程は、公布の日から施行する。
この規程は、昭和二十二年四月一日からこれを施行する。
この規程は、公布の日から施行する。
東京都美術館使用条例
第一条 東京都美術館(以下館と称する)は、次の目的を有する者にこの条例によつて使用せしめる。
一、美術についての創作の展覧
二、新古典美術品の陳列
三、その他美術についての事業
前項各号の使用者がない場合に限り藝術等の会に臨時に使用せしめることができる。
第二条 館を使用しようとする者は、別に定める様式によつて、要項を記して館長の承認を受けなければならない。
第三条 前条によつて承認を受けた者は、使用料を前納しなければならぬ。但し、特別な事情があると認めるときは、相当の保証人を付け又は保証金を納めさせた上後納を許すことができる。
第四条 使用料は左の範囲で都教育委員会これが定める。
一、全館(本館地階陳列室を除く)使用

の場合 一日 一万二千円以内

二、一部使用の場合 一分区 一日 四千円以内

三、本館地階陳列室使用の場合 一分区 一日 八百円以内

四、会議室使用の場合 一日 一千円以内

五、小講堂使用の場合 一日 一千円以内

六、備付器具使用の場合 一個 一日 百五十円以内

部屋の模様替その他の設備を必要とするときは、館長の承認を受けてその実費を納めなければならない。

看守、受付、下足等については、使用者がその費用によつてこれを施設しなければならない。

第五条 館の使用の承認を受けた後これを他に転貸することはできない。

第六条 既納の使用料はこれを還付しない。但し左の場合はその一部又は全部を還付することがある。

一、不可抗力によつて指定の場所を使用することができないとき。

二、館の都合によつて使用承認を取消したとき。

第七条 使用者が切符売場その他特別の設備をしようとするときは館長の承認を受けなければならない。

第八条 使用者が館についての諸規定及びこれに基いてする館長の指示を遵守せず又は公安風紀を紊る虞があると認められる場合には、館長は、使用者に対してその使用の承諾を取消することがあ

る。

前項の処分によつて使用者に損害が生ずることがあつても、館は、その賠償の責は負わぬ。

第九条 使用者が使用を終り若くは使用を中止したとき又は使用の承認を取消されたときは、速かに使用の場所を原状に回復し館長の検査を受けなければならない。

第十条 故意又は過失によつて建物及び使用物を汚損し又は毀損した場合は、使用者はその賠償の責を負わなければならない。

第十一条 館長において必要と認めるときは、使用者に対して臨機の指示をなすことができる。

第十二条 この条例施行に必要な細則は都教育委員会が定めることができる。

附 則 (昭和二十七年 条令第二十四号)

この条例は昭和二十七年四月一日から施行する。

東京都美術館使用規則(略)

演劇博物館

(早稲田大学坪内博士記念)

新宿区戸塚町一ノ六四七

早稲田大学内

電 東京(4)二一四一—九

昭和三年一〇月創立。坪内逍遙の古稀の賀及びシニエックスピア全集翻訳完成を記念して学界、藝能界其他有志数千名の拠出により創立、昭和三年一〇月開館した。西洋、日本の演劇に関する参考資料、文献を蒐集陳列して一般の観覧に供

する一方、附屬演劇図書館をもち、演劇研究及び調査の指導並びに受託など演劇文化の向上発展に資するを目的としてい。早稲田大学の管理に属すが公共機関として一般に無料で公開されている。季刊「演劇博物館」を発行。

〔館長〕 河竹繁俊 (「観覧日」) 毎日午前九時—午後四時。休館は毎月曜及び祭日の翌日、年末年始の他八月。

東洋美術陳列館

(早稲田大学附屬、会津博士記念)

新宿区戸塚町、早稲田大学内

電 東京(4)一四〇四

昭和九年会津八一により早稲田大学内恩賜記念館内に創立された。同二〇年戦局非となり、列品の大部分を疎開したが、一部は疎開中戦災に遭つた。二三年図書館内の旧貴賓室に一部を陳列、二九年一〇月学生会館隣設の新館に移り開館した。本学名譽教授会津八一の収集した各種美術品を陳列し、同氏の学藝に対する功績を記念する。中国各時代の明器最も多く、中国、日本の古代瓦・銅鏡・仏像、書道名蹟拓本等を主な収蔵品とする。本大学関係者及び特別希望者のみに無料で観覧させている。

〔観覧日〕 毎週、月・水・金曜日。午前九時—午後四時。

大倉集古館

港区赤坂葵町三

電 赤坂七八一

大正六年八月創立。財団法人大倉集古館は其の土地、建物、蒐集品、維持資金等悉く故大倉喜八郎がその授爵記念とし

て寄附したものである。創立当時土地四八二五坪、建物延一〇六四坪、美術品三六九二点、書籍一五、六〇〇冊であつたが大正二二年の大震災で蒐集品の大部分を焼失、大正一五年再び大倉男の寄附により現在の陳列館を起工、焼失を免れた蔵品を基礎に多数の新収品を加え昭和三年八月開館した。本館は鉄筋コンクリート銅葺屋根延三三七坪の支那風建築である。絵画は毎月陳列替を行い、彫刻、工藝品等は三ヶ月—六ヶ月で陳列替を行う。

〔館長〕 大崎新吉

〔理事長〕 門野重九郎

〔理事〕 大倉喜七郎 大崎新吉

〔評議員〕 門野重九郎 大倉喜七郎 大倉喜六郎 大崎新吉 大倉彦一郎 吉武一雄 藤田武雄 伊藤勇二 横田保 西本直民

〔観覧日〕 四月—九月午前九時より午後四時迄、一〇月—三月午前一〇時より午後四時迄、但毎月曜、天皇誕生日、憲法記念日、勤勞感謝の日、年末年始は休館。

〔観覧料〕 無料

書道博物館

台東区上根岸町一二五

昭和十一年一月創立。財団法人書道博物館は故中村不折が四〇年に亘つて蒐集した書道に関する参考品一二、〇〇〇余点を以て昭和十一年一月開館した。

〔館長〕 中村丙午郎

〔観覧日〕 月曜を除き毎日午前九時—午後四時

〔観覧料〕 八〇円

東洋文庫

文京区駒込上富士前町一四七
電 大塚二二九、六六八

大正六年九月岩崎久弥が前中華民國總統府顧問ジョージ・アーネスト・モリソンより購入したモリソン文庫を核心とし、其後更に東洋に關する諸書の蒐集を行つたもので現在の場所に文庫を新築し大正一三年一月財団法人組織とし東洋文庫と稱した。文庫の敷地、建物、図書其他一切の設備は岩崎の寄附によるものである。終戦後文庫の図書部は国立国会図書館の支那東洋文庫として運営されることとなり、研究部は従前の如く内外の寄附金により財団法人にて経営されている。事業としては前記の如く東洋關係の図書を蒐集し閱覽に供するとともに東洋学の研究上有益なる研究、図書の出版、稀觀書の複製をなし又講演會、展覽會等を行い、欧米東洋学諸学会の国際センターとして活躍し、また欧米少壮洋学者の留學者をも補導している。

〔文庫長〕 岩井大慧〔理事長〕 細川護立〔理事〕 和田清 有光次郎 徳川宗敬 沢沢敬三 小倉正恒 山本達郎〔監事〕 岡東浩〔閱覽日〕 日曜祝祭日以外毎日午前八時半―午後四時半、但毎木曜 午後閉館〔閱覽料〕 無料

日本民藝館

目黒区駒場八六一
電 渋谷五九一

昭和十一年一月創立。民藝品の蒐集並に常置陳列を行い、地方民藝の指導と開発に當るを目的とす。蒐集の事業は大

正一五年に始められたが、昭和十一年一月大原孫三郎の寄附によつて建物完成し、二月財団法人組織となつた。

〔館長〕 柳宗悦〔観覽日〕 月曜日を除き午前一時―午後四時、但八月、一月、二月休館〔観覽料〕 一〇〇円、

根津美術館

港区赤坂青山南町六ノ一一五
電 赤坂二五三六、二五八七

昭和十一年一月創立。根津嘉一郎の蒐集になる東洋美術品と邸宅庭園を、翁の歿後その遺志により寄附を受け財団法人根津美術館として設立し、翌一六年一月開館第一回展を開いた。以後、春秋二季の特別展と年数回の小展覧を行つてきたが第二次大戦により建物焼失したので二八年一月より早大教授内藤多仲、今井兼次の設計による鉄筋コンクリートの和風総坪数一九六の陳列館を新築、三〇年一月八日より常置陳列の美術館として開館、主な収蔵品は仏画、水墨画、写経、茶器、中国古銅器等。

〔館長〕 河西豊太郎〔主事〕 依田太郎〔学藝員〕 酒井千尋 奥田直栄〔観覽日〕 毎月一日より二五日夜、午前一時―午後四時、年末年始、月曜日及祭日の翌日休館。

〔観覽料〕 四〇円、小人二〇円

ブリヂストン美術館

中央区京橋一ノ一
電 京橋六三二七

昭和二十七年一月開館。石橋正二郎によりブリヂストンビルの二階に創設された

常設美術館で、所蔵の西洋及日本近代の油絵、彫刻を主として陳列する。

〔顧問〕 和田英作、細川護立、浅野長武〔参考〕 上野直昭、入岡野武雄、大原総一郎、久保貞次郎、矢代幸雄、松本栄一、福島繁太郎、秋山光夫、今泉篤男、河北倫明〔運営委員長〕 团伊能猪熊三郎、富永惣一、嘉門安雄、谷信一〔主事〕 岩佐新

〔観覽日〕 月曜を除き午前一時―午後五時半。七、八月に限り日曜休館。

牧野記念館

〔駒場高等学校美術館〕
目黒区上目黒八ノ六六〇
都立駒場高校内
電 渋谷二〇〇八

昭和二十五年七月創立。故牧野虎雄の遺作油絵七七点、スケッチブック一〇冊、海外名画複製(一九世紀から現代まで)約四〇点収蔵。春秋二回特別展覧を行い、他は生徒作品展をはじめ内外ポスター、工藝、デザイン、古美術、書及び各美術大学作品展等年間を通じ開催。

〔観覽日〕 希望により随時開館

〔観覽料〕 無料

明治神宮宝物殿

渋谷区代々木外輪町
電 東京(初)一一六、一一七

大正一〇年一月開館。明治神宮儀式課の所管で、明治天皇、昭憲皇太后の御物を保管陳列する。

〔観覽日〕 無休 四月―九月毎日午前

八時半―五時、十一月―三月午前九時―四時

大東急記念文庫

目黒区上目黒七ノ一〇九四 電 渋谷七三三七

東京急行電鉄株式会社取締役会長五島慶太が旧久原文庫を購入し、大東京急行電鉄の一大組織を現在の東京急行・京浜急行・京王帝都・小田急の四電鉄と東横百貨店の五社に分離の際に、その記念事業の一つとして、五社の協力のもとに昭和二十四年四月財団法人組織の本文庫を設立したもの。古板本一万六千数百点を蔵し、すでに国宝・重文に指定されたもの一五点に及ぶ。昭和三〇年四月から一般に無料公開している。なおその一部を同年九月初旬東横百貨店で初公開した。

【神奈川】

金沢文庫

横浜市金沢区金沢町二一七
電 金沢局(七) 九〇六九

昭和五年八月再建。史蹟金沢文庫及び称名寺に収蔵する書籍その他の文化財を襲継し、又図書記録の類を蒐集保存して一般に閱覽させる。金沢文庫は鎌倉中期北条実時が蒐集した和漢書を納れるために創建し、鎌倉末期迄四代に亘つて経営された。その後一時称名寺によつて保管されたが、昭和五年御大典記念事業として神奈川県が現在の文庫を再建した。

〔文庫長〕 熊原政男
〔観覽日〕 毎来日、祝祭日、年末年

始を除き、毎日午前九時—午後四時半

〔観覧料〕 二〇円

神奈川県立近代美術館

神奈川県鎌倉市雪ノ下(二〇五)

電 鎌倉二五〇〇

昭和二六年一月開館。建物は坂倉準

三の設計による。近代美術だけでなく、凡ゆる美術を新しい観点から展覧する。

〔館長〕 村田良策〔副館長〕 土方定

一〔運営委員〕 内山岩太郎、伊東深

水、木下孝則、小山富士夫、中村岳隆、

坂倉準三、佐藤敬、富永愷一、山口蓬

春、吉川逸治、山田智三郎、近藤市太

郎、田辺至、三上次男

〔観覧日〕 毎月曜を除き午前九時—午

後四時、但土、日曜日午後四時半

〔観覧料〕 六〇円、学生四〇円

鎌倉国宝館

神奈川県鎌倉市雪ノ下(二〇三)

電 鎌倉七五三

昭和三年四月創立。主に鎌倉を中心と

する社寺及び個人寄託の古美術品を取蔵

展覧する。年約四回特別展開催。

〔館長〕 渋谷二郎

〔観覧日〕 毎日午前九時—午後四時、

年末十二月二七日—三一日休館

〔観覧料〕 二〇円

鶴岡八幡宮宝物殿

神奈川県鎌倉市雪ノ下(二〇五)

電 鎌倉三一五

鶴岡八幡宮に伝来する神宝・刀剣・武

具・工芸品等社宝の一般展覧をなす。

〔観覧日〕 毎日午前八時—午後五時

〔観覧料〕 二〇円

長尾美術館

本館 鎌倉市鎌倉山

電 鎌倉九二三

分室 東京都品川区北品川六

東研ビル

電 大崎五三〇、五〇〇

昭和二一年五月創立。財団法人組織、

長尾欽弥の蒐集による絵画・陶磁器その

他美術工芸品を保管公開展覧する。毎年

春秋二季特別展覧会を行う。

〔理事長〕 長尾欽弥〔理事〕 草間時

光、村田五郎、太田耕造、井上清一〔監

事〕 清瀬三郎

箱根神社宝物殿

神奈川県足柄下郡箱根町元箱根

電 箱根町三一

明治四〇年六月創立。現在の建物は昭

和九年に新設された。同社所蔵の古美術

品、古文書等を展覧する。

〔観覧日〕 毎日、四月—一〇月午前八

時—午後五時、十一月—三月午前九時—

午後四時

〔観覧料〕 二〇円

箱根美術館

神奈川県足柄下郡宮城野村強羅

電 箱根宮ノ下六二三

昭和二七年六月創立。世界救世教教主

岡田茂吉によつて設立され、財団法人東

明美術保存会箱根美術館として広く美術

品を蒐集し一般に公開する。常設展の他

に毎年各種の特別展並に箱根夏期美術講

座等開催。

〔館長〕 岡田よし子

〔観覧日〕 四月一日—十一月三〇日

迄、午前九時—午後五時 木曜日休館

〔観覧料〕 普通観覧料一〇〇円。

〔中部地方〕

三島大社博物館

静岡県三島市伝馬町一

電 三島一七二

昭和五年三月創立。三島大社所蔵の宝

物を始め郷土出土品等を陳列する。刀剣

三八点、古文書一四二点、工藝四三三

〔館長〕 矢田部盛枝

〔観覧日〕 毎日午前九時—午後四時

〔観覧料〕 二〇円

久能山東照宮宝物館

静岡県根古屋三八九

大正三年三月宝物館を新築し現在に及

んでいる。家康公遺品等徳川歴代將軍の

武器刀剣類四〇〇点を陳列する。

〔観覧日〕 午前八時—午後四時 初穂

料として三〇円以上奉納せる者にのみ拝

観させる。

身延山宝物館

山梨県南巨摩郡身延町

電 身延山二、三

大正一五年五月創立。日蓮宗宗門に關

する歴史考古資料其他を公開する。

〔観覧日〕 毎日午前八時—午後五時

〔観覧料〕 三〇円

上田市立博物館

長野県上田市新参町

昭和四年九月創立の上田徴古館が昭和

二九年四月より市立博物館として新発足

したもの。旧上田城南北、西三基の櫓内

に郷土資料を陳列公開する。

〔館長〕 小林六雄

〔観覧日〕 毎日午前九時—午後四時、

毎月曜休館。

〔観覧料〕 一〇〇円

諏訪市美術館

長野県諏訪市大字上諏訪中浜町

電 諏訪一二一七

昭和二五年八月創立。従来片倉會館の

一部として諏訪湖畔にあり、懐古館と呼

ばれ、諏訪地方出土の考古学参考品を陳

列し、時に応じ各種展覧会場として利用

されてきたが、昭和二五年八月二八日、

片倉家より諏訪市に寄附され、昭和三一

年五月より諏訪市常設美術館として彫

刻、油絵、水彩、版画等を収蔵、展覧し

ている。

〔館長〕 宮坂完一

〔観覧日〕 月曜日を除き毎日

松本市立博物館

長野県松本市二の丸三

電 松本一三三

長野県に關する山岳(日本アルプス)、

自然科学、考古、民俗、歴史、美術に關

する資料を蒐集陳列し地方文化の向上を

計り、学校・社会教育に資する。分館と

して中山考古館、松本城記念館を有す

る。

〔館長〕 下山頼人

善光寺大勸進宝物館

長野市元善町四九二のイ

電 長野二四六〇

明治四〇年創立。大正七年増設、寺宝

約一五〇点を収蔵、参拝者、信徒に拝観

させることを目的とする。

〔館長〕 二宮慶蔵

〔観覧日〕 毎日

〔観覧料〕 一〇円

北方文化博物館

新潟県中蒲原郡横越村大字沢海

電 横越一番甲

昭和二〇年一〇月創立、旧伊藤文吉邸とその所蔵品を基として、財団法人組織により、美術・民俗・考古・郷土資料・農業資料等を展示公開する。尚新潟市に分館を、新発田市に清水園を管理公開している。

〔館長〕 伊藤文吉

〔観覧日〕 毎日午前九時—午後五時

〔観覧料〕 三〇円

高岡市美術館

富山県高岡市古城公園内

電 高岡二六六六

昭和二六年八月創立。主として郷土出身作家の作品を所蔵陳列する外地方展及特別展を開催している。日本画、洋画、工藝、彫刻、書等現代美術約三〇〇点。

〔館長〕 中糸豊治

〔観覧日〕 毎日午前九時—午後五時

〔観覧料〕 無料

徳川美術館

名古屋市東区徳川町

電 東六六二六

昭和六年二月財団法人黎明会により設立され昭和一〇年一月開館。尾州徳川家伝来の美術品、古文書等を保存し展観する。絵画、彫刻、工藝品外約一万点。

〔館長〕 熊沢五六

〔観覧日〕 年末、年始を除き毎日午前

九時—午後四時

〔観覧料〕 五〇円

愛知県文化会館美術館

名古屋市東区久屋町(栄公園内)

電 東五五一—三

昭和二九年二月創立。三〇年二月開館。鉄骨鉄筋コンクリート二階建、展示室一六、計一六四四・四坪。国際美術の消化、国内美術の交流、産業美術の進展及び郷土美術文化の振興を図るを旨とする。各美術団体の地方巡回展、特別展等を開催。

〔文化会館長〕 (事務取扱) 桑原幹

根、〔美術館長〕 太田三郎

〔観覧日〕 午前九時—午後五時

〔観覧料〕 展覧会により異なる

〔近畿地方〕

神宮徴古館

伊勢市倉田山

電 伊勢二六四四

当館は、神宮司庁で経営する歴史・美術博物館で、神宮農業館とともに、はじめ財団法人神苑会によつて設立せられ、明治四四年神宮に献納された。神宮の撤下御装束神宝類をはじめとして、神宮崇敬を物語る歴史参考品及び現代美術を取蔵し、一般に公開する。昭和二〇年震災により焼失したが、同二八年一〇月第五九回神宮式年遷宮附帯事業として同所に新築開館した。

〔館長〕 神宮少宮司 秋岡保治(主幹心得) 西川元泰

〔観覧日〕 一月一日—二月二八日午

前八時半—午後四時半

〔観覧料〕 神宮農業館ともに三〇円

三重県立博物館

津市広明町、津市借菜公園内

電 津二二八三

昭和二八年六月創立。地方総合博物館として考古・民族資料、美術、工藝品の外、自然科学資料、県内産業、物産の紹介展等も行う。

〔館長〕 三輪勇四郎

〔観覧日〕 毎日午前九時—午後四時

〔観覧料〕 一五円

高野山霊宝館

和歌山県伊都郡高野町高野山

電 高野三二二

大正九年九月三日創立。高野山一の宝物を保管し、一般の拝観に供している。

〔館長〕 堀田真快

〔観覧日〕 毎月末及一二月二五日—一月三一日迄を除き毎日、夏季午前八時—午後五時、冬季午前九時—午後三時

〔観覧料〕 五〇円

熊野速玉神社宝物館

和歌山県新宮市新宮

電 五三三三

明治四〇年創立。主として鎌倉より室町に至る美術品数百点を取蔵、展観する。

〔館長〕 上野殖

〔観覧日〕 毎日午前九時—午後四時

〔観覧料〕 五〇円

滋賀県立産業文化館

大津市東浦一番町

電 六一九一

昭和二三年一月創立。開館当初は同一建物内に博物館的な業務と物産陳列所的なものの二様を併設していた。

昭和二九年六月隣接地に滋賀会館が建設されて物産陳列部門は同会館内に移し本館は純美術博物館として内容を充実し、又これと同時に階下の一室に民俗資料室を設けている。鉄筋コンクリート二階建。古画並びに本県出身近代画家の作品、書蹟、工藝品、考古・民俗資料等約一九〇点を収蔵。

〔館長〕 草野文男

〔観覧日〕 年中無休 午前八時半—午後四時半

〔観覧料〕 無料

〔京都〕

京都国立博物館

京都市東山区大和大路通

七条上ル

電 祇園番、一四四、五二〇

明治二二年五月宮内省達を以て図書寮附属博物館が廃止され帝国博物館、帝国奈良博物館と同時に帝国京都博物館が設置された。二五年工事に着手し二八年竣工、三〇年五月開館した。この後官制改革により京都帝室博物館と改称、大正一三年今上陛下の御成婚に際し宮内省より京都市に下賜され、同年二月一日より恩賜京都博物館と改称し、京都市の経営するところとなつたが、昭和二七年文化財保護法の一部改正により同法の規定に基づき四月一日より国立移管をもつて京都国立博物館として新発足をした。内部組織

は館長、次長の下に管理課、学藝課を置き館長諮問機関として京都国立博物館評議員会が設置されている。(二〇九、二二八、二三八頁参照)

〔館長〕 神田喜一郎〔次長〕 富岡益五郎〔課長〕 (管理課) 有本利三郎、(学藝課) 梅津次郎

〔評議員〕 本田親男、堂本三之助、大宮庫吉、岡田戒玉、貝塚茂樹、高山義三、辰馬悦蔵、滝川幸辰、長崎太郎、村田治郎、室谷喜作、上野精一、梅原未治、須田国太郎

〔観覧日〕 月曜日を除き一月四日—二月二十八日及び一月一日—二月二十五日午前九時—午後四時、三月一日—三月三十一日午前九時—午後四時半

〔観覧料〕 大人三〇円、小人一五円
京都市美術館

京都市左京区岡崎法勝寺町
電 吉田四一〇七—八
昭和八年設立。鉄筋コンクリート二階建、一四〇八坪。市主催の美術展を開催する外、一般美術団体に会場を貸与する。所藏品日本画一二〇、洋画六六、工藝三九、彫刻二三。

〔館長〕 重達夫
〔事務長〕 堀馨〔学藝主幹〕 岡部三郎〔学藝員〕 加藤一雄、菅原穰
北野天満宮宝物殿

京都市上京区馬喰町
電 西陣五

昭和二年二月創立。菅原道真公歿後一〇二五年祭(半万燈祭)の記念事業の一つとして設立され、国宝北野天神縁起絵

美術観覧施設

巻を初め絵画、古文書等の宝物類を展示する。

〔観覧日〕 毎月二五日の月次祭当日と春秋二季の臨時開館日 午前九時—午後四時

〔観覧料〕 三〇円
広隆寺靈宝殿

京都市右京区太秦蜂岡町
大正一一年一月創立。聖徳太子一三〇年遠忌記念に創設された。同寺蔵の飛鳥時代弥勒菩薩像を始め多くの仏像、仏画、美術工芸品等を収蔵している。

〔観覧日〕 毎日〔観覧料〕 四〇円
醍醐寺靈宝殿宝聚院

京都市伏見区醍醐東大路町二二
電 醍醐二

昭和一〇年四月開館。醍醐天皇一〇〇〇年遠忌の記念事業として設立された。醍醐寺所蔵の彫しい仏画、一般絵画、彫刻、古文書記録、經典等を保管整理し、又一般に公開する。

〔館長〕 佐和隆研〔主事〕 稚月明
〔観覧日〕 春秋二季(四月—五月、一〇月—十一月) 毎日午前九時—午後四時
〔観覧料〕 三〇円
仁和寺靈宝館

京都市右京区御室仁和寺
電 西陣三八

昭和二年五月竣工開館、聖教三十帖冊子、孔雀明王等仁和寺所蔵の国宝その他宝物を保管し一般に公開する。

〔館長〕 花柳智勝
〔観覧日〕 毎日午前九時—午後四時
〔観覧料〕 三〇円

豊国神社宝物館

京都市東山区大和大路正面
茶屋町 電 祇園三八〇二

大正一四年二月開館。神社宝物、歴史風俗資料を陳列する。

有 鄰 館
京都市左京区岡崎円勝寺町四四
電 上五

大正一五年一月創立。鉄筋コンクリート三階建。藤井善助の寄附行為による財団法人藤井善助の経営。藤井善助の蒐集せる東洋古美術品を保存展観する。

〔代表理事〕 藤井志づ
〔観覧日〕 毎月第一、第三日曜の正午—三時迄開館、但し一月、八月は休館。
〔観覧料〕 無料
陽明文庫

京都市右京区宇多野上ノ谷町一
電 西陣七五〇

昭和一三年一月財団法人組織として設立。旧近衛家文庫古文書一〇万余点、古典籍三万余部を収蔵し、研究者のもとにめに応じ随時閲覧の便を計つている。

〔総裁〕 近衛文隆(在ソ)
〔主事〕 小笹喜三

【奈良】

奈良国立博物館

奈良市登大路町五〇
電 奈良六四二—一三

明治二二年帝國奈良博物館設置せられ同二八年四月開館。三三年官制の改革と共に奈良帝室博物館と改められ、更に昭

和二年五月官制改革により帝室博物館は文部省の管轄の下に国立博物館となるに及んで国立博物館奈良分館と改称された。ついで二五年五月文化財保護法の制定にともない文化財保護委員会の管轄に、又二七年四月東京国立博物館奈良分館に、同年八月文化財保護法一部改正により東京国立博物館より分離し、奈良国立博物館と改められて新発足をした。内部組織は館長の下に次長が置かれ、従前の庶務、学藝、普及の三課は廃されて新たに管理、学藝の二課が置かれ、館長の諮問機関として奈良国立博物館評議員会が設置されている。(二〇九、二二八、二二九頁参照)

〔館長〕 黒田源次〔次長〕 高村峰蔵
〔課長〕 (管理課) 次長併任、(学藝課) 蓮実重康

〔評議員〕 今村荒男、梅原未治、奥田良三、落合太郎、岡田戒玉、岸勇一、佐伯勇、田沢坦、高橋正次、中山正善、橋本癡嵐、春山武松、平岡明海、和田軍一

〔観覧日〕 毎月第一、第三日曜日と年末年始を除き、三月—一〇月午前九時—午後四時半、十一月—二月午前九時—午後四時

〔観覧料〕 大人三〇円
春日大社宝物殿

奈良市春日野町御蓋山一六〇
電 奈良二二六四、五四八六

昭和一〇年四月創立。歴代朝野から献進の宝物を保存し、展覧する。絵画彫刻の他鑑、太刀等工芸品約三〇〇〇点所蔵。

〔観覧日〕 毎日午前九時—午後五時

但し、七、八月は午前八時半―午後四時半

〔観覧料〕 二〇円
天理参考館

奈良県天理市布留
電 天理二、三、四

昭和一三年四月創立。天理大学の創立以来三〇年間に蒐集した海外土俗資料に、更に支那朝鮮の古美術の蒐集を合併し続いて西洋古美術資料、日本の貝塚資料、アイヌ資料、文楽人形等も加え大分附属として公開している。

〔主事〕 福原喜代男
〔観覧日〕 毎日午前九時―午後四時
〔観覧料〕 無料

東洋民俗博物館
奈良市西大寺町あやめ池
電 富雄六九

昭和三年一月創立。財団法人組織。大正六年頃より九十九豊勝が個人として蒐集したものを収蔵し展観する。各国民衆資料、特に比較宗教学に関する資料が多い。

〔館長〕 九十九豊勝〔観覧料〕二〇円
奈良県橿原市大和歴史館

奈良県橿原市欽傍町
電 大和橿原四七八

昭和一五年一月創立の大和国史館を同二四年八月大和歴史館と改称した。主として大和に関する上代の遺品、その他歴史的物事を収集展示し、歴史教育・文化発展に資する。又、一定期間に亘つて特に調査研究を希望するものに資料を閲覧させる特別観覧の制度を設けて

いる。昭和三〇年一月二八日、博物館相当施設としての指定を受けた。

〔館長〕 土井実〔主任〕 小島眞三
〔観覧日〕 毎日午前八時半―午後五時
月曜日午後・火曜日及祝祭日休館
〔観覧料〕 一〇円

〔大阪〕
大阪市立美術館

大阪市天王寺区茶臼山町二一
電 天王寺六一〇、四六〇九

古美術品の常設展観と一般美術展の展観場としての設備を兼ね、昭和一一年五月落成した。同月開館し、古美術の常設展観は同年九月より開始した。絵画、彫刻、美術工藝、考古学資料に亘る同館蒐集保存の古美術品を常設展観し、展覧会室、講堂は一般美術展、講演会等に貸館する。

〔館長〕 望月信成〔事務長〕 樋渡静男
〔観覧日〕 一月六日―二月二八日、午前九時―午後五時〔観覧料〕 二〇円
日本工芸館

大阪市北区堂島上二ノ四六
電 北(四)五二一四

昭和二六年六月創立。堂島の米倉であったものを改増築し、民藝の研究と普及を目的として、財団法人組織により設立された。日本の現代民衆工芸品を主体として現代美術工芸品・版画等を蒐集常時展観する。

〔館長〕 三宅忠一
〔観覧日〕 日曜・祭日を除き午前一〇時―午後五時〔観覧料〕 特別展以外無料

時―午後五時〔観覧料〕 特別展以外無料
観心寺靈宝館

大阪府河内長野市寺元
電 河内長野一三四

靈宝館は明治三十三年に開設され、重文如意輪観音像を始め、仏像、古文書等の寺宝を保管展観する。

〔館長〕 永島行善
〔観覧日〕 毎日午前九時半―午後五時
〔観覧料〕 一〇円

藤田美術館
大阪市都島区網島町四〇
電 堀川四一〇五

昭和二六年三月財団法人設立認可。男爵藤田伝三郎並びに同平太郎に亘つて蒐集された古美術品を主としこれに分家徳次郎の遺品を合わせて創立せられたもの。財団法人設立の認可後、展観室、庭園、事務室の整備に三ヶ年を費し昭和二九年五月に開館式を挙行した。一般公開は現在のところ春秋二期とし研究者には随時展観を行つている。国宝四点、重要文化財二一点を含む絵画、彫刻、工芸、書約三〇〇〇点収蔵している。

〔館長〕 藤田富子〔理事長〕 河上弘一〔理事〕 藤田光一、藤田富子、藤田治子、宮原清、久留島秀三郎、土井清、小川栄一、武井理三郎〔監事〕 坂井隆三、西村圭太郎
〔観覧日〕 春秋二期、午前一〇時―午後四時〔観覧料〕 一〇〇円

市立神戸美術館
神戸市葦合区熊内町一丁目
電 葦合三〇四三

南蛮美術の蒐集で著名な池長美術館(昭和一五年三月創立)が建物・所蔵品共に昭和二六年四月神戸市へ寄附され市立神戸美術館となつた。同年七月より開館。

〔館長〕 荒尾親成
〔観覧日〕 毎月一日より二五日迄、午前九時―午後五時。月曜休館
〔観覧料〕 二〇円

白鶴美術館
神戸市東灘区住吉町落合五丁目
電 (8)六〇〇一

昭和九年五月創立。昭和六年嘉納治兵衛の古稀を記念してその美術工藝品、考古資料の蒐集を永久に保存するため財団法人白鶴美術館を設立した。建物は同九年竣工し、五月から公開した。中国青銅器、陶磁器、鏡、銀器及日本奈良古物等の工芸品、金石類、刀剣類の所蔵品を春秋陳列し、他に特別展を開催する。

〔理事長兼館長〕 嘉納治兵衛〔主事代理〕 三杉隆敏
〔観覧日〕 四、五、九、一〇月の春秋二季展の他に特別展を随時開き、年間一五〇日開館
午前一〇時―午後四時 月曜休館
〔観覧料〕 五〇円

鶴林寺宝物館
兵庫県加古川市加古川町北在家
電 加古川五六三

大正一〇年一〇月聖徳太子一三〇〇年御忌記念として宝物館を建設し、絵画、

工藝美術品、古文書等の什宝を保管し、希望者のある毎に開館する。

【中国地方】

大原美術館

岡山県倉敷市新川町 電 倉敷五

昭和五年一月創立。故洋画家児島虎次郎を記念し、美術の研究発達に資するため絵画及びその他の美術品の蒐集、陳列公開等を行う。大原孫三郎によつて創設され、昭和一〇年三月財団法人となつた。泰西絵画、彫刻、古代エヂプト工藝品等の収蔵品が著名である。

〔館長〕 武内潔真

〔観覧日〕 年末年始、毎月曜日、祭日を除き、毎日午前九時―午後四時

〔観覧料〕 五〇円、

倉敷考古館

岡山県倉敷市前神町 電 倉敷一五四二

昭和二五年一月創立。考古学の研究普及と地方文化の向上を目的として、財団法人組織をとつている。考古学関係資料一五〇〇点を収蔵す。

〔館長〕 鎌木義昌

〔観覧日〕 月曜日、年末年始、祝祭日を除き、午前九時―午後四時

〔観覧料〕 四〇円、

倉敷民藝館

岡山県倉敷市前神町 電 倉敷一六三七

昭和二三年一月創立。岡山県民藝協会の事業の一つとして創設され、のち、

美術観覧施設

財団法人として独立した。古今東西の民藝品の蒐集、展観、普及に當つている。所蔵品約二九〇〇点。附属工藝研究所がある。

〔館長〕 外村吉之介

〔観覧日〕 月曜日、年末年始、祭日を除き、午前九時―午後四時

〔観覧料〕 四〇円、

吉備考古館

岡山県都窪郡山手村 電 総社四三三三

昭和一七年創立。吉備地方を中心とし、県内の考古資料・郷土資料を展観する。

〔館長〕 宮岡清見

〔観覧日〕 毎日。開、閉館時間は不定。

〔観覧料〕 二〇円

厳島神社宝物館

広島県佐伯郡宮島町 電 宮島三六

創立明治三〇年。現在の建物は昭和九年建造され、厳島神社宝物として伝承した藤原時代以後の書蹟・工藝品等を公開する。

〔館長〕 野坂元定

〔観覧日〕 毎日

〔観覧料〕 三〇円

出雲大社宝物殿

鳥根県簸川郡大社町 電 大社四八、六三

大正三年三月創設。絵画、彫刻、工藝品、古文書、考古資料、祭器等を収蔵する。

〔観覧日〕 毎日。午前八時―午後四時

長府博物館

山口県下関市大字豊浦村 電 五五五

昭和八年一〇月創立。当初は故桂弥一が財団法人長府尊攘堂を創設し明治維新前後の志士の遺墨等を収集陳列したものであつた。戦後は財団法人長府博物館と改称、郷土を中心とした文化資料を陳列保管する他各種特別展を行う。

〔館長〕 樗惣一

〔観覧日〕 三、四、五、九、一〇、一

一の各月以外は毎月曜休館、午前九時―午後五時

〔観覧料〕 二〇円

防府天満宮宝物館

(山松崎神社宝物館)

山口県防府市宮市

松崎神社は昭和二七年四月炎上、現在既に本殿幣殿完工、拝殿建設中、同宝物館は災禍を免れたが現在閉鎖中、尚昭和二八年一月二日松崎神社は防府天満宮と改称した。

忌宮神社宝物館

山口県下関市長府町宮の内 電 長府一九三

大正四年三月創立。神社創建以来の古文書其他寄進による絵画、工藝品等を収蔵する。

〔館長〕 磯部稜成雄

〔観覧日〕 無休

〔観覧料〕 二〇円

岩国徴古館

山口県岩国市横山三五八 電 岩国八三七

私立岩国徴古館(昭和一九年四月設立)

が昭和二六年四月岩国市へ移管され、市立となつたもの。郷土に関係ある美術工藝品、歴史資料を蒐集保存し、且公開して文化の向上に資しようとする。藩制時代の地方的美術品、工藝品、同時代の地方史料、大内、毛利、吉川氏に関する古文書等を蔵する。

〔館長〕 瀬川秀雄

〔観覧日〕 午前九時―午後四時半、毎月曜と祭日の翌日は休館。

〔観覧料〕 無料

【四国地方】

高松美術館

香川県高松市栗林公園内 電 高松三二一六

昭和二四年一月開館。昭和二四年高松観光大博覧会を機会にその建物の一部三〇六坪を市立美術館として存置し、日展、県展、各種美術展を開催、地方文化の普及を計つている。

〔館長〕 中村良三

金刀比羅宮博物館

香川県琴平町 電 琴平一

金刀比羅宮博物館は、宝物館、学藝館、金刀比羅宮書院の三施設に分れている。

宝物館は明治三八年創立。金刀比羅宮所蔵の書画、刀剣、古文書等を収蔵展観する。学藝館は昭和三年創立。学藝参考品、標本等の外高橋由一の作品二六点を収蔵展観する。書院には鶴の岡外四室に書かれた応挙の絵(重要文化財)等がある。

る。

〔館長〕 琴陵光重

〔観覧日〕 無休、午前八時—午後四時

〔観覧料〕 二〇円

総本山善通寺宝物館

香川県善通寺市六一五

電 一一一

明治三五年四月創立。善通寺伝来の絵画、仏像、工芸品等約一二〇余点を陳列展覧する。

〔館長〕 亀谷宥英

〔観覧日〕 春、夏、午前八時—午後五時、秋、冬、午前九時—午後四時

〔観覧料〕 一〇円

大山祇神社宝物館

愛媛県越智郡大三島町

電 大三島三二、一六

大正一五年六月創立。鎧、太刀等工芸品一〇〇〇余点を収蔵、展覧する。

〔館長〕 三島安久

〔観覧日〕 無休、春、夏、午前八時—午後五時、秋、冬、午前九時—午後四時

〔観覧料〕 四〇円

愛媛文華館

愛媛県今治市山里通

昭和三〇年三月創立、財団法人組織の陶磁美術館。

〔観覧日〕 年二回の特別展観の折開館

【九州地方】

石橋美術館

福岡県久留米市野中町

石橋文化センター内

昭和三二年四月創立

〔主事〕 河嶋修

〔観覧日〕 年末、年始を除き毎日

〔観覧料〕 四〇円(但し別に石橋文化センター入園料一〇円を必要とする)

市立長崎博物館

長崎市浜口町一九六

長崎国際文化会館内

電 九九九

昭和二六年二月創立。開国史に関係ある郷土資料、主として切支丹関係、中国、オランダ貿易関係の資料を蒐集し展覧する。

〔館長〕 篠瀬義一

〔観覧日〕 毎日、午前九時—午後五時

〔観覧料〕 無料

本妙寺宝物館

熊本県熊本市花園町六

電 六三〇

明治四二年五月創立。明治四二年清正公三〇〇年祭に際し公の威徳顕彰の目的を以て開設した。

〔館長〕 池上義豊

〔観覧日〕 毎日、午前八時—午後五時

〔観覧料〕 一〇円

菊池神社宝物館

熊本県菊池郡隈府町隈府

電 一四九

大正八年一月創立。菊池神社の教化活動の一環として設けたもので、菊池氏の遺品その他関係資料を収蔵、展覧する。

〔館長〕 千種宜夫

〔観覧日〕 午前八時—午後四時

〔観覧料〕 二〇円

宮崎県立博物館

宮崎市神宮町

電 五二三八

昭和二六年四月創立。昭和一五年、紀元二六〇〇年記念事業として奉議会が設立した徴古館を同二六年県立博物館として新発足した。考古資料を主とした博物館。

〔館長〕 日高重孝

〔観覧日〕 午前九時—午後四時半

〔観覧料〕 一〇円

鹿児島市立美術館

鹿児島市山下町一三四

昭和二九年九月一日開館。黒田清輝記念室を設け、その他藤島武二、和田英作等の洋画、木村探元の日本画、新納忠之介、安藤照の彫塑等郷土作家の作品及び薩摩工芸品等を展覧している。又展示会場として四室以上の場合には有料で使用させている。尚今回約一六〇坪の新館と約六〇坪の事務室倉庫が増設された。

〔館長〕 谷口午二〔次長〕 夏迫丸喜

〔観覧日〕 月曜を除き毎日午前九時—午後五時

〔観覧料〕 大人二〇円

全国美術館会議

台東区上野公園

東京都美術館内

昭和27年11月14日発足。第1回27年11月14日於東京都美術館。第2回28年10月22日於京都市美術館。第3回29年8

月5—7日於ブリヂストン美術館。第4回30年11月16—18日於大阪市立美術館

全国美術館会議規約

第一章 総則

第一条 本会は全国美術館会議という。

第二条 本会の事務所は東京都美術館内におく。

第二章 目的及び事業

第三条 本会は美術館相互の連絡提携を図るを以て目的とする。

第四条 本会は前条の目的を達成するために左の事業を行う。

(一) 美術に関する協議会、展覧会、講習会、講演会、研究会等の開催

(二) 美術団体との連絡

(三) 美術館相互の連絡情報及び出版物の交換

(四) 其他本会の目的達成上必要な事業

第三章 組織

第五条 本会は全国的美術館施設を以て組織する。

第六条 本会の会費は年額金壹千円とする。

第四章 役員

第七条 本会に左の役員を置く。

会長一名 副会長一名 幹事若干名

第八条 本会の役員は互選による。会長は本会を代表し、会務を総理する。

副会長は会長を補佐し、会長事故あるときは会長を代理する。

幹事は会務を処理する。

第九条 役員は任期は二年とする。

第五章 会議

第十条 総会は全会員を以て構成し会長

が召集する。

通常総会は毎年一回開く。必要に応じて臨時に総会を開くことができる。

第十一条 総会は会員総員の三分の一以上の出席を以て成立し、其の議事は出席者の過半数を以て決する、可否同数のときは議長が決するところによる。

第六章

第十二条 本会の経費は会費及び寄附金を以てこれにあてる。

第十三条 本会の予算は総会の承認を経なければならぬ。

第十四条 本会の会計年度は毎年四月一日に始まり翌年三月末日終る。

(会長) 東京都美術館長 (副会長) 大阪市立美術館長 (幹事) プリヂストン美術館主事、東京国立博物館長、京都市美術館長、神奈川県立近代美術館長、本間美術館長 (会員) 東京都美術館 (早川治平)、プリヂストン美術館 (岩佐新)、根津美術館 (河西豊太郎)、都立駒場高校美術館 (長坂勝一)、東京国立博物館 (浅野長武)、国立近代美術館 (岡部長景)、京都市美術館 (重達夫)、神奈川県立近代美術館 (村田良策)、高岡市美術館 (中条豊治)、大阪市立美術館 (望月信成)、大原美術館 (武内潔真)、高松美術館 (中村良三)、佐賀県文化館 (錠敏雄)、白鶴美術館 (加納治兵衛)、市立神戸美術館 (荒尾親成)、大阪市天主閣、奈良国立博物館 (黒田源次)、京都国立博物館 (神田喜一郎)、滋賀県立産業文化館 (田中千年)、茨城県立美術館 (名越那珂次郎)、笠間美術館 (根本政太郎)、本間美術館 (本間祐介)、箱根美術

館 (阿部晴三)、天理参考館 (福原喜代男)、大倉集古館 (大崎新吉)、愛知県立名古屋美術館 (太田三郎)、藤田美術館 (藤田富子)

東京画廊一覽

高島屋画廊 中央区日本橋通二ノ五 電 千代田(7)四一一

丸善画廊 中央区日本橋通二ノ六 電 千代田(7)三三二一、二三三五

壹 中居 中央区日本橋通三ノ一 電 千代田(7)一八三六、八九一

三 彩堂 中央区日本橋通三ノ一 電 千代田(7)九六七六

南 画廊 中央区日本橋通二ノ七 電 千代田(7)八六一六

三 越画廊 中央区日本橋室町一ノ七 電 日本橋(2)三三一一

中央公論社 中央区京橋二ノ一 電 京橋五九二一

兼 素洞 中央区京橋三ノ四第百生命館 電 東京(2)二七〇

松坂屋画廊 (銀座店) 中央区銀座六ノ一 電 銀座(7)三一八一

松屋画廊 (上野店) 台東区上野広小路一 電 下谷(3)一一一一

サエグサ 中央区銀座三ノ二 電 京 橋(5)三三五六

ギヤラリー 中央区銀座三ノ二 電 京 橋(5)五三五六

和 光 中央区銀座四ノ一 電 京 橋(5)八四五一

阿部養清堂 中央区銀座西五ノ五 電 銀座(7)二四七一

村松ギヤラ 中央区銀座七ノ一 電 銀座(7)七八〇、八七〇

樺 画廊 中央区銀座七ノ三 電 銀座(7)三四七

数寄屋橋 中央区銀座西六ノ六 鐵道工業ビル一階 電 銀座(7)一八六四

兜屋画廊 中央区銀座西六ノ三 電 銀座(7)六三三一

たくみ 中央区銀座西八ノ三 電 銀座(7)二〇一七

東京画廊 中央区銀座西七ノ五 電 銀座(7)一八〇八

日動画廊 中央区銀座西五ノ一 電 銀座(7)二五五三

松島ギヤラ 中央区銀座三ノ二 電 京 橋(5)七五八七

弥生画廊 中央区西銀座並木通り 電 銀座(7)三二二〇

フォルム 中央区銀座五丁目二川瀬商會二階 電 銀座(7)五〇六

求龍堂画廊 中央区銀座西五ノ五 御幸通り 電 銀座(7)二九一六

ナビス画廊 中央区銀座西一ノ三七 電 京橋(5)二九六二

東京電力 中央区銀座六ノ一 電 銀座(7)八三〇五、一五六

サービステ 中央区銀座西七ノ二 電 銀座(7)一五九二

サトウ画廊 銀座(7)一五九二

草土舎画廊 千代田区神田小川町 電 神田(5)三二四〇

竹見屋画廊 千代田区神田駿河台下 電 東京(2)九二七

三省堂画廊 千代田区神田神保町一ノ一 電 東京(2)一一二六

文房堂画廊 千代田区神田神保町一ノ二 一 電 東京(2)七〇〇一、二

大丸画廊 千代田区丸ノ内鐵道會館 電 丸ノ内(2)一五三一

日比谷画廊 千代田区日比谷公園内 電 千代田(2)七六六五

産経會館 千代田区大手町一ノ三 電 丸ノ内(2)五七一(内線七六〇)

三笠画廊 千代田区有楽町一ノ一四 明和ビル二階 電 東京(2)八九〇

光風會美術 港区芝新桜田町一九 電 東京(2)一七三二

美松書房 港区芝田村町一ノ三 電 東京(2)五五一二

伊勢丹画廊 新宿区新宿三ノ八 電 四谷(5)一一四一

新 宿 新宿区歌舞伎町八七九 電 四谷(5)七六二

西武百貨店 豊島区池袋三丁目 電 池袋(7)一五一

東横百貨店 渋谷区上通二ノ五五 電 渋谷(4)一一八一

上松画廊 渋谷区上通二ノ三九 電 青山(4)二六八六

北莊画廊 豊島区長崎三ノ四〇 電 (9) 六三六〇

名古屋画廊一覽

愛知県文化館 東区久屋町 電 (9) 五五一

美交社画廊 中区栄町四 電 (9) 四四三

松坂屋画廊 中区南大津通り二 電 (2) 一五一

丸栄画廊 中区栄町四 電 (2) 五五一

丸善画廊 中区栄町三 電 (2) 三五三

文天堂画廊 中区栄町六 電 (2) 四二二

米屋画廊 中区南園町 中村区笹島町

トヨタビル 中村区笹島町

オリエンタル 中村区栄町六

桂花堂画廊 中区南園栄町 電 (2) 一八四

京都画廊一覽

京都府 下京区四条通河原町西入

丸善画廊 中央区河原町通蛸薬師上

土橋画廊 下京区四条通堺町東

大丸美術 中京区四条高倉 電 本局

丸物美術 下京区烏丸通七条上 電 下八七二

紙園商会 東山区祇園町南側五六二

大阪・神戸画廊一覽

梅田画廊 北区曾根崎上二ノ三八 電 堀川二六二三

フジカワ 東区瓦町二 フジカワビル 電 (2) 一四九〇一、四四九四一五

美交社画廊 東区南久太郎町四丁目二〇 電 船場二六二四一五

淀屋画廊 東区今橋五ノ三六 電 北浜六〇一八

大阪フォルム画廊 北区真砂町三〇 真和ビル 電 (2) 二五二五

堂島画廊 北区神明町五〇 電 堀川五五一九

福田画廊 北区絹笠町一八 聚嚙ビル 内 電 (3) 一〇六九

丸善美術 北区梅田町四七 新阪神ビル二階 電 福島六六九七

阪急画廊 北区角田町六二 電 福島六四六一

三越画廊 東区高麗橋二ノ六三 電 北浜八五一

大丸画廊 南区心齋橋一 電 南三五

そごう画廊 南区心齋橋一 電 南八四

高島屋画廊 南区難波新地六 電 戎一

松坂屋画廊 浪速区日本橋三ノ四五 電 戎一五三一

近鉄画廊 阿倍野区阿倍野町一ノ一 電 天王寺五二二一

三宮町二丁目電停前 (3) 一五三〇

元町画廊 生田区元町一ノ二六 電 (3) 五五六〇

美術団体一覽(五〇音順)

(あ)

アトリエ・ド・R・ヴァンエック(洋)

目黒区富士見台一五六一 香取忠彦方

昭和29年創立。昭和28年2月に日仏学院に絵画クラスが設けられ、その担当教官としてロジェ・ヴァンエックがあつた

が、29年12月当クラス廃止後も同教官に共鳴して、元絵画クラスの有志でグループを結成した。昭和29年12月第1回グループ展、30年6月第2回展開催。

〔会員〕 ロジェ・ヴァンエック、原武典、早川みな子、片山和子、香取忠彦、小島兼司、小林喜、小久保晴行、楠原昌樹、松田広子、村上晴郎、東海林護、武川昌子、牛窪正

(い)

一采社(日) 世田谷区成城町一二九

高山辰雄方 昭和16年4月創立。同20年戦災のため展覧会を中止したが翌21年より引続き毎年春に展覧会を開き、昭和31年4月第15回展開催。

〔会員〕 大山忠作、加藤東一、加藤茂明、河部貞夫、高山辰雄、中村正義、浦田正夫、野島青枝、山口吉三郎、山田申吾、朝倉撰、我妻碧宇、佐藤園夫、三尾雄次、嶋倉自然、森縁翠、鈴木竹柏、伊藤弘、加倉井和夫、桑原清明

一水会(洋) 練馬区豊玉北町四ノ一五

田崎広助方 (電練馬六六) 昭和11年12月、旧二科会員八名は「会場藝術を非とし、技術を重んじ、高雅なる藝術を尊重することに於て一致」、同会を創立した。同12年12月東京府美術館に第1回公募展を開催し、爾後毎年秋季に展覧会を開き、昭和31年9月第18回展開催。

〔委員〕 石井柏亭、池部鈞、池辺一郎、裕三彩亭、小野末、奥田郁太郎、高橋庸男、高田誠、田崎広助、仲田好江、中村善策、中村琢二、納富進、山下新太郎、深沢紅子、福田新生、小山敬三、高野三三男、有島生馬、安宅麻雄、荒谷直之介、木下孝則、木下義謙、鈴木良三

〔会員〕 一〇七名

一線美術(洋) 渋谷区糞田二ノ六三

石井栄方 昭和25年7月創立。年1回春に展覧会を開き昭和31年3月第6回展開催。

〔委員〕 岩井弥一郎、石川久三郎、石

上駒吉、石井栄、伊藤行雄、伊藤徳衛、長谷川ハツ、新野敏一、別府貫一郎、千木良富士、沖田稔、萩原城舟、河崎千代子、神田房光、横山嘉平、田村満、村瀬真治、上野山清貢、山田新吉、町田文雄、松浦喜久次、児玉勝次、小柳勇児、西東重義、佐々木栄松、紫藤卓三、平田健三、寺田正、饗輪初太郎、宮沢今朝雄、三浦きよ子、木村博之、倉沢康、大黒孝儀、金子文吾、根本清満、山田邁、有馬俊彦、石原実、高橋治男、福岡芳忠、関川富士郎、信沢照子、村上俊郎

一陽会(洋・彫) 台東区上野桜木町三六 野間仁根方(電駒込三四〇〇)
昭和30年7月創立。二科会を脱退した鈴木信太郎、高岡徳太郎、野間仁根を中心とし、同じく二科会を脱退した新団体。昭和30年9月日本橋高島屋に於て第1回公募展開催。昭和31年9月第2回展開催。

〔会員〕(絵画部) 鈴木信太郎、高岡徳太郎、野間仁根、米良道博、山路真護、鱈利彦、荻野康児、丹下富士男、森由太郎、中田豊、山谷鉄一、長谷川三春、棟方寅雄(彫刻部) 浅野孟府、植木力、伊本淳

〔会員〕(挿) 杉並区馬橋二ノ二四四 山本武夫方 昭和24年創立。東京美術学校出身者よりなる挿絵家を主とする集り。

〔会員〕 伊藤文七、富田千秋、織田音也、小川洗二、鴨下晃湖、田中良、竹田

忠丸、山本武夫、梁川剛一、藤形一男、三輪孝、三谷一馬、三輪秀、清水三重三 エスプリ会(洋) 世田谷区若林町四六一 西田信一方 昭和27年11月創立。近代絵画の研究会。

〔会員〕 長谷川三郎、西田信一、脇田和、川端実、村井正誠、山口薫、小松義雄
筵上会(日) 文京区西片町一〇ろ九 四方田草炎方 昭和21年創立。昭和30年6月第4回展開催。

〔会員〕 四方田草炎、岩崎巴人、根本進、相沢一男、土居淳男、上田臥牛、大野正六、野村清六、田代与志、藤田将文、川越康司、田代高之
旺亥会(洋) 板橋区板橋四ノ一三八八 梅野順三方(電池袋三九七〇) 昭和19年解散した牧野虎雄を主宰者とする旺亥社が21年新に旺亥会として発足した。30年2月大久保作次郎、田沢八甲、吉村芳松ら古参会員を含む六名は脱退した。昭和31年6月第10回展開催。

〔委員〕 東一雄、堀田清治、五十嵐祥晃、石黒義一、市川加久一、金井文彦、小林喜代吉、小林猶治郎、小坂橋清、近藤せい子、幸田侑三、皆見鶴三、岡野正樹、酒井嘉久、阪井台松太郎、清水正博、佐藤多持、杉浦勝人、鈴木金平、高野真美、玉の内満雄、田辺嘉重、豊田寿久、梅野順三

岡山県民藝協会 岡山県倉敷市向市場 電倉敷一五四一 昭和21年6月創立、凡ゆる生活用具を健康、簡素、誠実ならしめ、生活に真の美を直結せしめる」こと

を趣旨とし、工藝品の調査、指導、地方民藝館の創設経営、工藝研究所及び図案指導所等の開設を事業目的としている。〔会員〕 個人三五〇名、法人一二団体

華敵美術協会(洋) 京都市上京区北大路新町東入ル(事務代表)京都市上京区塔之段藪ノ下町四二一 中川義憲方 昭和15年6月創立。紀元二六〇〇年を記念して爾歩会を解散、華敵美術協会として再発足した。昭和28年9月第16回展開催。

〔会員〕 赤沢正次、赤松文子、新井完、荒木貞人、居井直胤、伊丹愛子、井垣嘉平、池田治三郎、井上三郎、岩田順三、梅林良子、上田輝七郎、角野判治郎、北川威夫、浦見文雄、小西丘太郎、小林富蔵、小林正雄、島戸繁、霜島之彦、篠崎貞五郎、鈴木昶、関口正夫、武田新太郎、坪井一男、辻川新十郎、中井深、中川義憲、中堀愛作、成田浩子、成瀬十郎、西岡義一、則元醇、原田久之助、伴庄兵衛、富士一男、藤松弁之助、古沢広樹、正木順子、松田藤兵衛、松田淑子、三尾公三、水谷ミヨ、南素行、宮内順三、安江孝治、山尾平、山田新一、山田キミ、由里明

関西水彩画協会(水) 大阪市阿倍野区北畠東一ノ二九 桂龍雄方(電住吉二一四〇) 昭和10年4月創立。関西在住の水彩画家の団結、親睦、普及研究を趣旨とする。機関紙「関西水彩」発行。公募展、講習会開催。

〔会員〕 池島勘次郎、別車博資、桂龍

雄、青野馬左奈、乾一雄、大庭しづ子、田村雅保、芹生政夫、庭田定男、松村豊太郎、大久保正義、赤尾長三、山田一雄、上田素由、栗林忠男、佐野比呂志、溝尻頼吉、水野修造、中川隆史、宮本草一路、青山岩松、大久保三三、北口豊子、中安徹、生田正雄、池上三郎右エ門、村井新治、河村久子、仁科実、大田健一、山野一

衣笠会(日) 京都市北区平野八丁柳町六一 金島桂華方(電西陣三〇一〇) 金島桂華を塾主とした日本画研究団体 昭和25年創立。

九元社(彫) 世田谷区玉川奥沢町二ノ一四九 森大造方 昭和9年創立。昭和18年迄毎年展覧会を開催していたが現在は活動を中止している。

〔会員〕 高橋泰蔵、中野四郎、村井辰夫、鈴木三郎助、長沼孝三、紺谷英儀、石塚貞男、森大造、奥山泰堂、長谷川宏九室会(洋・彫) 杉並区久我山二の六二六 森田信夫方 昭和13年11月創立。二科展の第9室を中心とする新傾向作家の親睦を図り、併せて各自の研究を目的とする。戦時中絶、昭和25年再組織、昭和26年第1回展開催、毎年春期展覧会開催予定。

〔絵画会員〕 阿部金剛、井上寛造、桂ユキ子、桑原実、中原実、野村守夫、岡本太郎、大沢昌助、織田広喜、鷹山宇一、寺田竹雄、鶴岡義雄、山口長男、山本敬輔、吉原治良、伊藤研之、松葉清

吾、安藤幹衛、藤田金之助、萩尾テル、
堀賢三、春田安喜子、長谷川三千春、今
泉六郎、今長谷巖、稲垣克己、因藤寿、
伊勢谷慶子、伊藤静尾、岩田安郎、狩野
守、加藤孝一、加藤正一、木俣滋彦、越
谷繁造、増田勉、森田信夫、中川時之
助、浪江勘次郎、根本茂子、西村千太
郎、能間弘、大淵陽一、織田りら、小川
清、斎藤三郎、神山勝、佐佐木良三、田
川寛三、高橋満州男、田中君子、竹中
清、戸川串田、戸川ふみ子、上田民子、
山本不二夫、山ノ内靖己、吉村勲、吉田
一夫

〔彫塑会員〕 浅野孟府、堀内正和、笠
置季男、栗松巖、上田暁、植木力、野水
信、淀井敏夫、広瀬不可止、飯田艇三、
岩元梶子、水野修道、野口嘉光、関口孝
吉、曾山節雄、植村育子
京都金藝師会(工) 京都市上京区等
持院西町一六 加藤宗巖方 昭和26年5
月創立。京都金藝作家の同志的集り。展
覧会を鏝鏝展という。昭和31年4月第5
回展開催。

〔芸員〕 浅井清太郎、今大路長光、上
田哲三、大久保鼎湖、加藤宗巖、加茂
峯、金谷五良三良、金江宗観、小林尚瑛、
広瀬公舟、野田喜市、村上直行、辻井健
三、五島正広、倉賀野茂樹、田中秀明
京都新彫刻家クラブ(彫) 京都市東山
区五条橋東五ノ四六七 清水礼四郎方
(電祇園三三三三) 昭和27年2月創立。
京都在住の中堅彫刻家によつて組織され
る。昭和28年2月、第2回展開催。

〔芸員〕 伊室重孝、清水礼四郎、藤庭

賢一、藤林重次、河野薫郎、小谷謙、岡
本庄三、山本悟三、三宅五穂
京都陶藝家クラブ(工) 京都市東山区
五条坂八幡前南入 森野嘉光方(電祇園
四三三七) 昭和23年12月創立。京都府
在住の陶藝家及び陶文会、白泥社、黏土
の三陶藝団体で組織される。昭和24年か
ら31年まで京都に於て八回、展覧会を開
催。昭和30年7月東京大丸に於て当クラ
ブ黏土第1回展を開催。

〔顧問〕 清水六和(会長)、清水六兵
衛(副会長) 森野嘉光、河合栄之助
〔総務〕 井上治男、新開寛山(委員)
五名(芸員) 四一名
〔總會(洋)〕 豊島区要町一ノ四八ノ四
梶田英一方 昭和27年10月創立。昭和16
年12月東京美術学校油絵科卒業生の集
団。昭和31年5月第4回展開催。

〔芸員〕 安次嶺金正、綾井秀宜、有海
喜久雄、笠木実、梶田英一、黒沢悟朗、
沢田正太郎、島田美成、清宮實文、田代
利夫、田畔司朗、土屋広倫、弦田英太
郎、富安昌也、中尾良一、細小路真、山
中市郎、袖木祥吉郎、吉原秀夫

黒潮会(日) 京都市左京区岡崎東天王
町八九 細木成実方(電吉田三三〇二)
昭和29年8月創立。京都在住の、各種団
体中、新進、中堅作家が各四、五名宛集
つて成る日本画の団体。新しい日本画の
創造を目的とする。昭和30年4月京都大
丸にて、同年6月東京大丸にて第1回展
開催。

〔芸員〕 宇治山哲平、香月泰男、喜多

〔芸員〕 細木成実、樋口辰志、下保
昭、野々内良樹、木村広吉、猪田青以、
中瀬島、三輪良平、西内利夫、松井章、
稲田和正、桑野博利、海老名正夫、岸田
蒼坪、藤田孝正、利倉群青、大日躬世子
塊土社(彫) 水戸市下金町一五〇四
小鹿尚久方 昭和30年1月創立。昭和24
年以来的彫塑協会が29年末に発展的解散
をして30年初めより新発足したもの。主
に茨城県に在住する彫塑家達による団
体。

〔代表〕 後藤清一、一色五郎、
岩淵忠雄、渡辺卓禰、吉田暁禾、高久茂
雄、中島敦、丹保喜三郎、後藤修、後藤
末吉、小森邦夫、小鹿尚久、安藤春雄、
木内克、島村亮明、森山朝光、山崎猛
グループ(実在者)(洋) 文京区駒込林
町一五四(大島方) 池田満寿夫方 昭和
30年4月創立。昭和31年1・2月第3回
連嶺展開催

〔芸員〕 堀内康司、池田満寿夫、響
〔け〕
形象派美術協会(洋) 愛知県安城市下
小入道 福山進方 昭和28年5月創立。
昭和28年5月第1回創設公募展を岐阜市
公会堂にて開催、31年9月第4回公募展
を愛知県美術館にて開催。
〔芸員〕 二六名
型生派美術家協会(洋) 世田谷区砧町
五八 庫田毅方 国画会中堅会員により
昭和25年結成された。昭和30年5回展
開催。

〔芸員〕 宇治山哲平、香月泰男、喜多

村知、国松登、熊谷九寿、庫田毅、須田
烈太、福井敬一、山崎隆夫、原精一、橋
本三郎
現代工藝協会(工) 京都市東山区上
馬町五五三 原照夫方 昭和31年8月創
立。走坭社、創人社、新匠会、モダンア
ート協会等に属する作家一三人を会員と
し、各分野の理解と協力により新しいク
ラフトを創造することを目標に組織され
た。

〔芸員〕 河合紀、八木一夫、山田光、
鈴木治、林康夫、藤本能道、東端真禰、
熊倉順吉、本野東一、原照夫、叶敏、森
俊三、清水卯一
現代漆藝作家協会(工・漆) 北区豊島
三ノ二五 泉篤彦方 昭和31年8月創
立。東京周辺に住む若い漆藝家三四名に
よつて組織

〔芸員〕 泉篤彦、伊藤隆一、本間学、
大西慶憲、音丸香、渡辺六郎、渡辺道
善、渡辺天四郎、河合匡造、河合久仁
雄、川村忠雄、吉田佐源治、吉田五郎、
高田信吾、田中寿雄、多田保津雄、月尾
正之、工藤喜代志、松浦等、八木一、保
川寿子、山本春雄、松谷春雄、佐竹伊
介、酒井市三郎、木下純寛、木下穆堂、
三浦徳明、宮野光男、三田村秀雄、三村
比呂志、島田文雄、宮樫權也
現代美術協会(洋) 杉並区阿佐ヶ谷三
ノ三二四 宮島資雄方 昭和23年11月、
日本作家協会洋画部、現代美術作家協会、
新派美術家協会の三団体が合同して設
立発足したものである。昭和30年6月第
11回展開催。本年度より構成部を新設。

〔芸員〕 宇治山哲平、香月泰男、喜多

〔委員〕 丘野美、小沢正、佐藤巨宏、
原田雅兆、古川恂、三浦勝治、宮島資雄、
武藤重典

〔會員〕 斎藤森重、鈴木重雄、田中皓
四郎、武藤重典、升胤、照丘晃子、島崎
貞子、相沢謙一、加藤喜男、中野龍次郎、
根来茂、村瀬卓郎、片山利明、佐藤静樹、
橋本公平

(3)

〔工彩会(工)〕 北区中十条二ノ八 会田
富康方(電王子六五五五) 昭和17年研
究団体として発足。昭和24年第1回展を
開く。昭和30年7月第7回展開催その間
地方に於いて移動展を開催する。

〔會員〕 飯塚小玕斎、伊藤隆光、伊藤
鏡一、井上良斎、大谷玲石、大坪重周、
岡本玉水、岡本輝子、山本曠、川上南
甫、加藤嶺男、梶本義英、勝田静璋、竹
内蘭山、高木幾望、武田三千子、中田錦
石、中島珠光、中島実、山本正年、前大
峰、松本佐吉、小林清、後藤九吉、寺井
直次、会田富康、有田利章、天野策地、
桜井一郎、佐藤貞一、三田村秀雄、新村
撰吉、平野利太郎、平田郷陽、宏きよ
子、介川芳秀、中野馨一、市橋敏雄

〔紅土会(洋)〕 新宿区下落合三ノ一八五
九 桜井慶治方 昭和23年6月創立。同
年より毎年展覧会開催。昭和30年8月第
9回展を開いた。

〔會員〕 桜井慶治、上島一司、宮脇憲
三、矢口洋、武内和夫、野本正雄、海老
沢徹夫、花田忠吾、尤道健治、武林敬
吉、篠田喜代志、仲町謙吉、森清治郎、

橋本万寿子、遊馬正(協賛指導者) 寺
内万治郎、渡辺武夫

行動美術協会(洋・彫) 世田谷区弦巻
町一ノ二六ノ一 向井潤吉方(電世田谷
三五六一) 昭和20年11月創立、昭和19年
二科会解散し、翌年8月終戦後二科会は
再結成を圖つたがその際主張の異なる旧二
科会々員の一部を中心として組織され
た。昭和31年9月第11回展開催

〔會員(絵画部)〕 榎倉省吾、福井勇、
古家新、飯田清毅、生沢朗、柏原寛太
郎、三芳節吉、向井潤吉、村田實史雄、
難波香久三、田中忠雄、高橋進、伊藤信
夫、伊谷賢蔵、伊藤久三郎、小林武夫、
小出卓二、西阪修、田川寛一、下高原龍
巳、田辺三重松、坪内節太郎、川原章
二、山中春雄、高井寛二、佐藤真一、斎
藤真成、津高和一、田中勇次郎、河野通
紀、高須国之、全和光、江見絹子、田中
重喜良、大谷久子、辻親造、野尻弘、貝
原六一、玉沢潤一、大場厚(彫塑部) 建
島覚造、中島快彦、向井良吉、板谷慎、
今村輝久、伊勢典賢、林是、阿井正典、
野崎一良

光風会(洋・工) 港区芝新松田町一
九 光風会館内(電東京(一)七三三) 責
任者小寺健吉。明治45年創立。明治44年
白馬会解散後、中沢弘光、山本森之助、
三宅克己、杉浦非水、岡野栄、小林鐘吉、
跡見泰の七氏発起して創立、第1回展を
45年6月上野竹之台陳列館に開催した。
官展系洋画家の団体、毎年春季公募展を
開催、昭和31年4月第42回展を開いた。

〔會員(絵画)〕 石橋武治、井手宣通、

伊藤応九、伊藤第三、伊藤四郎、岩船修
三、伊藤鎧一、井上武、飯田弥生、池野
寿彦、西山真一、西村憲定、西尾善積、
西村俊郎、西村喜久子、西岡義一、星野
正三、遠山清、土佐林豊夫、土橋醇一、
戸塚孝三郎、鳥井昇、中条茂、岡田又三
郎、小川智、大沢海蔵、大河内信敬、緒
方亮平、斧山万次郎、小川博史、奥山
堤、大原省三、大倉克次、大桃寛、渡辺
武夫、和田香苗、和田清、河井清一、梶
原貫五、角野判治郎、笠井忠郎、金子徳
衛、金沢秀之助、米本一郎、田村一男、
高木春太郎、高宮一栄、田中実一、反町
博彦、高橋道雄、高光一也、竹岡良太
郎、高田正二郎、竹沢基、相馬其一、辻
永、辻朗、辻村八五郎、根津莊一、長原
坦、中村研一、中沢弘光、永田精二、名
渡山愛順、中島音次郎、村岡平蔵、宇城
時志、上島一司、野平上、黒田頼綱、黒
田久美子、熊沢欽三、樽松正利、山中清
一、山下忠平、山口猛彦、山喜多二郎
太、山村孝太郎、山本彪一、柳瀬俊雄、
山田新一、牧野司郎、松尾正巳、益山雅
衛、松浦莫章、藤彦右衛門、藤本東一
良、古屋浩蔵、舟木徳重、藤井芳子、藤
江理三郎、小糸源太郎、小林真二、小寺
健吉、小林易夫、江藤純平、寺内万治
郎、安達真太郎、足立真一郎、足代義
郎、朝比奈文雄、有馬三斗技、秋元松
子、荒井邦朝、鮫島利久、笹岡了一、阪
倉宜暢、笹鹿彪、桜井悦、桜田精一、斎
藤齊、坂田虎一、桜井慶治、清原重以
知、鬼頭鍋三郎、木村八郎、北浜淳、幸
鳥重雄、由里明、耳野卯三郎、南政善、

〔常任委員〕 朝倉斯道、大塚銀次郎、
小磯良平、川西英、上田清一、小松益喜、
大石輝一、江田誠郎、三木朋太郎

〔會員〕 宮下貞之介、大石輝一、藤井二
郎、石黒平三郎、根木從之介、伊藤慶之
助、辻愛造、山崎隆夫、上田清一、三木
朋太郎、前田藤四郎、大垣泰治郎、田村
孝之介、岡正一、松田豊、奥村隼人、小
磯良平、小松益喜、青木一夫、中岡恒雄、
江田誠郎、久本弘一、細谷重雄、津谷鹿
市、佐藤篤郎、川西英、角野判治郎、伊
川寛、別車博資、榎井一夫、尾田龍、新
井完、神原浩

水守信雄、三輪孝、溝江勘二、宮脇憲三、
三尾文夫、白石隆一、市ノ木慶治、新道
繁、白川一郎、島野重之、神保和幸、新
保兵次郎、庄司栄吉、日原晃、久本弘一、
森山肇、森田元子、森桂一、守屋千之、
妹尾寿信、瀬戸千代三、杉村悖、鈴木三五
郎、菅谷邦敏、浅井光男、石河彦男、岡
本由郎、千田徹夫、松本正人、森清治郎
(工藝) 一噌元治、西村英夫、大阿久重
治、鷺田うめ子、川合修二、辻光典、中
田満雄、中村俊介、中村董一、夏井清、
上野正之輔、上野誠郎、山形駒太郎、小
林清、佐藤正巳、杉浦非水、三輪智一、
久保駒太郎、松風栄一、福原達朗、武田
信弘

神戸洋画会(洋) 神戸市東灘区本山町
田辺三八、三木朋太郎方(電御影一五二
四) 昭和21年創立。阪神在任の洋画家を
もつて組織、毎年展覧会を開く。

〔常任委員〕 朝倉斯道、大塚銀次郎、
小磯良平、川西英、上田清一、小松益喜、
大石輝一、江田誠郎、三木朋太郎

〔會員〕 宮下貞之介、大石輝一、藤井二
郎、石黒平三郎、根木從之介、伊藤慶之
助、辻愛造、山崎隆夫、上田清一、三木
朋太郎、前田藤四郎、大垣泰治郎、田村
孝之介、岡正一、松田豊、奥村隼人、小
磯良平、小松益喜、青木一夫、中岡恒雄、
江田誠郎、久本弘一、細谷重雄、津谷鹿
市、佐藤篤郎、川西英、角野判治郎、伊
川寛、別車博資、榎井一夫、尾田龍、新
井完、神原浩

光陽会(洋) 北区上中里一ノ二 多々
羅義雄方 昭和29年2月創立。多々羅義

雄、早川芳彦、井口勇、斎藤武の四名が創立委員となつて結成し、民族性を活かした独自の藝術を創作することを目的とする。昭和31年6月第4回展開催。

〔会員〕 多々羅義雄、早川芳彦、井口勇、斎藤武、間所一郎、森田賢、斎藤哲爾、丸山精一、斎藤始雄、吉川俊久、太田宗平、島田良雄、原田繁夫、大川美友、根本和子、西本雅哉、三井良作、若林清、瀨部和代、浅田進、丸山妙子、湯沢明、岡野靖子、長谷川平七、渡辺邦之

〔国画会(絵・版・工・写真)〕 世田谷区松原町三ノ八〇四 前田政雄方 (電松沢三九〇八) 大正7年1月小野竹喬、土田麦穂、村上華岳、野長瀬晚花、榊原紫峰の五名は国画創作協会を設立、爾來毎春東京及京都に於て協会展を開催し、又入江波光はじめ数名の若い作家を同人に推挙したが、同15年梅原龍三郎、川島理一郎の兩名を迎えて第二部を新設し更に富本憲吉、金子九平次を加えて彫刻及び工藝を同部に置いた。その後昭和3年7月解散したが、第二部は存続して国画会と改称し、梅原龍三郎、川島理一郎、大橋幸吉、金子九平次、富本憲吉、山脇信徳の旧会員に新に高村光太郎、椿貞雄、河野通勢の三名が参加し、翌4年

〔第4回国画展〕を公募の上開催した。第6回展に版画部新設、平塚運一が鑑査を担当した。10年梅原龍三郎及び富本憲吉は新帝院会員に任命され、同年6月川島理一郎は同会を脱退した。尚第14回展には写真部を新設し、鑑査には福原信三、野島康三の兩名が当つた。同14年彫

刻部は同会を結束離脱し、清水多嘉示を除いて他の全員が新制作派に合流し彫刻部は解消した。29年理事制を廃し客員制を設けた。昭和31年4月第30回展と同時に30周年記念回顧展開催。

〔名誉会員〕 梅原龍三郎 (客員) 福島繁太郎、浜田庄司、河井寛次郎、西村総左衛門、野島康三、柳宗悦、〔会員〕 (絵画部) 青山義雄、青木達弥、東貞照、伊藤廉、池部貞喜、井上三綱、石井照、石原宏策、宇治山哲平、内堀勉、大森啓助、大谷房吉、大淵武夫、尾田龍、柏木俊一、川口軌外、香月泰男、喜多村知、木内広、国松登、熊谷九寿、久保守、庫田愛、小林邦報、小泉清、沢野岩太郎、里見勝蔵、澁川栄志、島内キミ、杉本健吉、須田勉太、曾宮一念、立石鉄臣、高松健太郎、辻愛造、椿貞雄、土田文雄、中村博、中村好宏、長沼静司、野田好子、長谷川春子、原精一、橋本三郎、南風原朝光、平塚運一、日向裕、福留章太、福井敬一、二見利節、細谷重雄、益田義信、馬越研太郎、真垣武勝、松木満史、松田正平、宮田重雄、三橋健、村上巖、山村誠、山崎隆夫、養田つや子、和田忠志、鈴木正二、小館善四郎、上田清一、田中道久、北村綱義、音部幸司 (版画部)

畦地梅太郎、稻垣知雄、橋本興家、川上澄生、川西英、斎藤清、下沢木鉢郎、品川工、笹島喜平、岡野準一郎、平塚運一、ブブノワ、前田政雄、益田義信、山口源 (写真部) 入江泰吉、小野由行、木村伊兵衛、中居正躬、西山清、錦古里孝治、野島康三、北角玄三、長浜慶三、ハナヤ

勸兵衛、吉川富三、内田美胤、竹見義雄、島田貫一郎 (工藝部) バアナード・リッチ、上田恒次、及川全三、岡村吉右衛門、河井武一、小島恵次郎、後藤清吉郎、佐久間藤太郎、芹沢銈介、鈴木繁男、外村吉之介、広本長子、船木道忠、船木研志、三代沢本寿、森義利、柚木沙弥郎、柳悦幸、柳悦博、安川慶一

〔理事長〕 岩田久利 (理事) 一四名
〔会員〕 五三名
国民文化会議 新宿区四谷一ノ一八 (電四谷三八三〇、三五二) 昭和30年7月創立。正しい国民文化を守り育てるために、国民各層の人々と文化を専門とする人々を結びつづ、我が国の文化の伝統を正しく発展させ、専門家の創造活動を培い、その成果を普及、大衆の文化的要求を満足することを綱領としている。原則として団体会員をもつて構成され、文学、教育、藝術、映画、生活文化、音楽、舞踊、科学技術、言論、美術、演劇の一二部会がある。

〔顧問〕 上原専録、畷伊之助、山田耕筈、市川猿之助、木村伊兵衛、石井漢、町田嘉章、秋田雨雀、徳川夢声 (事務局長) 南博

〔国際アートクラブ (洋・彫・工・建・評論)〕 港区赤坂青山高樹町三 現代藝術研究所内 (電青山四五七九) 昭和28年5月国際アートクラブ日本本部として創立 (通称アートクラブ)。画家、彫刻家、その他の美術家、評論家によつて組織され、各国のアートクラブと連繫し、現代藝術を発展させるための活動を行う。又本会は一切政治に関与しない。各国アートクラブは各々本部を国内に持ち、国際的な中央本部に連繫するが、中央本部は二年毎に国際会議によつて所在を決めることになっている。現在はイタリアのローマ、アートクラブが本部となつている。

〔幹事〕 岡本太郎、鶴岡政男、村井正誠、小松義雄、阿部展也、藤沢典明、長谷川三郎、杉全直、難波田竜起、末松正樹、昆野恒、丹下健三、徳大寺公英、瀬木慎一、滝口修造、植村鷹千代

〔工〕 新宿区新宿町三ノ二九 岩田工藝ガラス店内 (電澁橋二〇七、五〇三) 昭和30年12月創立。伝統を生かしつつ世界的視野に立つた新しい工藝の創造を目的とする。

〔同人〕 井上正喜、羽藤馬佐夫、加藤正信、茅原隆、竹上義治、高木秀男、中

〔同人〕 井上正喜、羽藤馬佐夫、加藤正信、茅原隆、竹上義治、高木秀男、中

〔同人〕 井上正喜、羽藤馬佐夫、加藤正信、茅原隆、竹上義治、高木秀男、中

〔同人〕 井上正喜、羽藤馬佐夫、加藤正信、茅原隆、竹上義治、高木秀男、中

〔同人〕 井上正喜、羽藤馬佐夫、加藤正信、茅原隆、竹上義治、高木秀男、中

〔同人〕 井上正喜、羽藤馬佐夫、加藤正信、茅原隆、竹上義治、高木秀男、中

島久雄、山本甚作、矢島俊一、越次勇、佐藤昌祐、木村昭弥、白石延夫、鈴木堅司、杉原正一、後藤高司、徳本立憲、角田和志郎、横山俊朗、青柳正、安部昭二、西徳二郎、伊藤一鷹、井上実、井上定子、池淵知世、桐生武夫、斎藤敬一、恒任民男、新野一弘、羽藤淑子、山科進作、横山鑑一、了正敬一郎、渡辺貞英、サロン・ド・ジュワン(洋) 豊島区长崎五ノ一二 三水公平方 昭和26年6月創立。昭和30年6月第6回展開催。

〔会員〕 浜田稔、堀田操、大口登、渡辺寛治、米倉寿仁、中島稔、真島健三、三水公平、木谷俊、辻葦夫、盛益子、安部幸毅、伊藤忠義、小野洋、鈴木清、中林松太郎、遠藤敏弥、窪田知矩、宮野進三軌会(水・染色・版画・写真) 杉並区上荻窪一ノ一三 五井剛一方(電菴窪六四六五) 昭和24年2月創立の水彩作家協会を30年1月三軌会と改名。昭和30年3月第7回展開催。

〔会員〕 (水彩・版画部) 姫野正義、古郷一郎、小林新吉、前林章司、滝沢清、五井剛一、増田大豊、大久保寛郎、小倉幹三、田村貫一、三輪田元也、柴原雪子(染色部) 大坪重周、奈良東明子、中村光哉、栗原宏(写真部) 岡田紅陽、植木康次、深沢富造、山田温水、有賀長敏、関清、富岡畔草

3 季会(洋) 大田区調布鶴ノ木町一八六 木内広方 昭和28年6月創立。国画会所属の三〇代作家を主体とする。昭和31年3月第3回展開催。同31年5月解散す。

〔会員〕 石原安策、音部幸司、木内広、野田好子、本田克己、和田忠志、小館善四郎、川村浩章、菊地辰幸、鈴木正二、積田輝士、張替正次、渡辺貞一、東貞美、田宮裕己、水木徳子
三光会(日) 杉並区堀之内一ノ一三一 田中針水方 川合玉堂の塾生により昭和21年11月創立。昭和30年3月第9回展開催。

〔会員〕 井上恒也、田中針水、山下巖
示現金(洋) 中野区鷺ノ宮一ノ四七二 橋原健三方 昭和22年10月創立、昭和31年3月第9回展開催。

〔代表者〕 石川寅治(常任委員) 石川寅治、三上知治、奥瀬英三、光安浩行
〔委員〕 江崎寛友、半田圭治、田原輝夫、水戸敬之助、三井滋雄、松木重雄、中村新次郎、橋原健三、奈良岡正夫、能見三次、大沼静藏、大内田茂士、寺崎善次郎、阿部広司、山田説義(会員) 安西恒男、青木純子、阿部広司、江崎寛友、富士一男、半田圭治、原本虎雄、原本敏子、細梅久弥、細島昇一、石川寅治、伊藤源右衛門、木下克己、木下邦子、工藤靖彦、三上知治、水戸敬之助、三井滋雄、光安浩行、松木重雄、盛忠七、中村新次郎、中村勝美、中谷健次、橋原健三、奈良岡正夫、内藤秀因、能見三次、加藤義雄、奥瀬英三、奥森多可志、大沼静藏、大内田茂士、太田嘉兵衛、織田寅之助、斎藤俊雄、佐野喜太郎、清水敦次郎、関口文雄、芹生政夫、鈴木満、田原輝夫、

武田一郎、玉井力三、寺崎善次郎、戸津文雄、内野英実、飛塚安吉、吉原甲蔵、山川四郎、山田説義、進藤正一郎、佐々木四郎、盛国春、平光軍一、吉田敏夫、波多野光臣、梶一郎、大坪実、木村朱江、佐々木真夫、居関金一、天井隆三、石橋フク、小村平八、長内亮、海野経、三田村武雄、大田黒幸、野生司行正、鳴海健次郎、西野芳丸、三上浩、浅野五郎

四耕会(彫・工・写真) 京都市東山区高台寺辨屋町三四九 宇野三吾方(電祇園二四一一) 昭和23年10月創立。彫刻・工藝・写真等の研究団体。毎年1回公募展開催。

〔会員〕 伊豆藏寿郎、宇野三吾、岡本素六、大西金之助、加藤仁、沼田一三、林康夫、雲雀民雄、藤田作、益田哲、渡辺好章、土本真澄、宇野瑞子
日社(日) 杉並区成宗二ノ七一八 浜田台児方 昭和25年2月創立。官展系日本画家の研究団体、毎年各地で展覧会開催。昭和31年6月第7回展開催。

〔顧問〕 伊東深水、児玉希望、矢野鶴村(客員) 寺島繁明、田中以知庵、池田逸郎(委員) 西野新川、奥田元宋、田中針水、武藤嘉幸、海野旭世、山下巖、牧野雅彦、福子悦夫、白井烟嵩、森正元、佐藤太清、白鳥映雪、浜田台児、渡辺阿以湖、笠原可雄、立石春美、村松乙彦、松本郭南、鈴木由太郎、鈴木石鷗子、松浦満、岡宮正、八幡白帆、直原玉青、大平華泉、川上青山、秋元節朗、北村明道、伊東方耀、水野陽翠、森田邦仁、米重忠夫、陳永森、関根雅雄、三上

巴峽、村山徑、横尾芳月(会員) 一四六名(委員共)
実験工房(綜) 品川区上大崎長者丸三〇〇 鈴木博義方(電大崎三八七四)
美術家、音楽家、文藝家等の集団
〔会員〕 (美術) 北代省三、駒井哲郎、山口勝弘、福島秀子、今井直次、山崎英夫、大辻清司(音楽) 武満徹、鈴木博義、湯浅譲二、園田高弘、佐藤慶次郎(文学) 秋山邦晴

室内構成美術家連盟 目黒区森町一〇
〇 佐々木達三 同年第1回展開催。
昭和26年創立。同年第1回展開催。

〔会員〕 佐々木達三、岩瀬要三、浜中勝、喜多村政良、野口寿郎、奥平貞俊、水谷文平、大泉博一郎、狩野雄一
信濃美術会(綜) 大田区山王一ノ二五 六二 伊川應治方(電大森六九二) 昭和27年3月創立。在京信州美術家及在郷有力美術家による団体。昭和28年6月第2回展開催。

〔会員〕 (日本画) 横尾芳月、町田曲江、江崎孝坪、亀刺隆、藤森善藝、他(洋画) 伊川應治、辻村八五郎、中川紀元、小山敬三、高橋良一郎、小穴隆一、須山計一、小林邦報、宮川仁、矢崎牧広、日向裕、関四郎五郎、志村一男、加藤陽、他(彫塑) 清水多嘉示、瀬戸団治、小林章、小林三郎、長田平治、大和作内、矢崎虎夫、他(工藝) 北原三佳、高橋節郎、山岸堅二、他

示風会(工) 練馬区南町五ノ六七三六 広川青五方(電練馬四四六) 昭和26年2月創立。東京及近県在住の日展出品者

美術団体一覧

〔染・織・織〕の集団。昭和30年7月第4回展開催。昭和31年7月27日解散。

〔会員〕 岩下洋、磯部陽、祝三良、今井輝子、池田和子、般若佑弘、富岡伸吉、十束敏子、河合研二、高久空木、大坪重周、山岸堅二、平野利太郎、二口志保子、青木滋芳、喜多村栄太郎等二十七名

シヤルウル・ラタント美術会〔洋〕 杉並区井荻一ノ一五四 増田宜夫方 昭和29年12月創立。昭和30年7月日本橋丸善画廊にて第1回発表展を開催。

〔会員〕 和田恒、山口道夫、増田宜夫、斎藤支之助、佐藤光右、白岩俊治、渋谷彦二

J・A・N〔洋・写〕 「青年美術家集団」千代田区神田駿河台二ノ一一 五味秀夫方〔電東京四五六〕昭和9年創立。昭和30年3月J・A・N・現代フランス、クリテック賞絵画展開催。年一回作品発表、月一回研究会。

〔会員〕 荒木剛、井上孟、加藤文生、武藤久、村瀬静孝、藤井令太郎、浜谷次郎、横地康国、福井敏一、斎藤正夫、田中岑、五味秀夫、松村禎夫、藤本四八、秋山正太郎、笹岡了一、中村道他一六名
自由美術家協会〔洋・彫・版〕 新宿区矢来町七四〔電東京四八六三〇〕 保守的な形式主義、形式模倣を超越し、自由に新しい前衛藝術を作ろうと云う主張で結ばれている。昭和11年7月創立。昭和12年第1回展を開催。戦時中昭和16年第5回展より美術創作家協会と改称したが昭和21年第9回展〔大阪〕よと旧称に復活、昭和31年10月第20回展開催。

〔会員〕 麻生三郎、中条顕、長谷川三郎、浜口陽三、堀内規次、今井繁三郎、井上長三郎、井上照子、池田淑人、井沢元一、糸園和三郎、稲田三郎、久保田久一、木ノ内岬、昆野恒、小林良曹、小山田二郎、小谷博真、小谷良徳、小林邦二、松本正子、三井滋夫、三木弘、水谷武彦、森芳雄、難波田龍起、中野淳、広田嘉子、長野誠之助、野見山晴治、大野五郎、佐田勝、佐藤美代子、沢野井信夫、清希卓、蘭田猛、末松正樹、田中健三、竹中三郎、手塚益雄、清水七太郎、寺田球一、富成忠夫、登崎太三郎、富山妙子、鶴岡政男、寺田政徳、山口英哉、山口正城、山田光春、吉井忠、小野里利信、中島保彦、清水正策、西田信一、藤岡清、峰孝、新田実、西村保史郎、塚谷政義、山内豊喜、吉本時昌、鬼頭暉、浜田知明、藤沢友一、渡力敷唯信、菊地又男、川口精六、倉石隆、中山一郎、文狭克明、田勇二、荒木道夫、小野忠弘、豊田一男、松本忠義、上原二郎、川合喜一郎、松永浩二郎、中村健一郎、加納敬次、野崎南海雄、矢島甲子夫、小菅徳二、中本達也、八獄四郎、上野省策、島鉄生、西良三郎、前川博人、鈴木福男、森川昭、森堯茂、乙葉統、小山寿男、八幡健二、比田井仁史、石寿星、峰村リツ子、灰谷正男、井上信道、奈知安太郎、香山逸人、江見崇、根岸正、賀川孝、柿手春三、境野一之、杉原清司、田中朝吉

主潮社〔日〕 大阪府豊中市麻田一〇九四ノ九 矢野橋村方〔電石橋三四二〕 昭和22年1月創立、矢野橋村を会長とする日本画塾。〔委員長〕 福与悦夫

出版美術家連盟 新宿区下落合四ノ二 一一一 林唯一方〔電落合二三五四〕 昭和25年10月創立。戦前の日本挿絵画家協会を戦後改称したもの。〔理事長〕 岩田専太郎〔専務理事〕 鴨下晃湖

朱葉会〔洋〕 新宿区下落合二ノ六六七 吉田ふじを方〔電落合四三三七〕 大正7年創立。女流洋画家の団体、昭和31年6月第8回連立展内第36回朱葉会展開催。

〔会員〕 友田みね子、吉田ふじを、山田文子、大久保為世子、赤津捨子、岩村芳子、水沢順子、南桂子、吉田千鶴子、森野照子、石川よし子、仲敬子、直井澄子、梅川慶子、重松京子、改井貞子、村田米子、宗久恭子等四四名
青甲社〔日〕 京都市東山区八坂通東大路西入 西山翠嶂方〔電祇園一六八四〕 西山翠嶂を塾主とした日本画研究団体。大正10年1月創立。

〔総務〕 西山英雄〔幹事〕 樋口富麻呂
春泥会〔日〕 大阪市住吉区帝塚山中三ノ二六 中村貞以方 中村貞以の主催する日本画の画塾。昭和11年5月創立。昭和30年6月第14回展開催。
春陽会〔洋・舞台装置〕 杉並区和田本町八三三 水谷清方〔電中野六三七八〕 大正9年秋日本美術院洋画部を脱退した小杉未醒、山本鼎、倉田白羊、森田恒友、長谷川昇、足立源一郎の六名は同11年1月、新帰朝の梅原龍三郎を加え、更に九名の客員を迎えて同会を創立。「春陽

会は従来賑々見たる如き既成会への社会的対抗として興らず、単なる藝術家の心を以て因縁相熟したるものとす」と声明した。翌年5月上野竹之台陳列館に第1回展を開き、爾後毎年春季に公募展を開催し、又東京開催後大阪、名古屋等に地方展を催している。昭和29年から舞台美術部を設けた。昭和31年4月第33回展開催。尚春陽会研究所は昭和4年開設、現在に及んでいる。

〔会員〕 石井鶴三、石井光楨、伊藤慶之助、岩田栄之助、伊川慶治、今竹七郎、岩崎又二郎、伊藤善、原田武男、原田平治郎、本莊越、豊泉恵三、友田みね子、岡鹿之助、小穴隆一、鬼塚金華、小栗哲郎、大沢鉦一郎、小川マリ子、嶺政寛、小川緑、若山為三、加山四郎、川端弥之助、加賀孝一郎、川隅路之助、川上尉平、川島昇太郎、加藤秀夫、横堀角次郎、吉田達磨、高田力蔵、高橋辰雄、田中寿太郎、田川勤次、田辺謙輔、田中岑、土屋義郎、中川一政、南城一夫、中谷泰、中村徳三郎、村山密、上野春香、上原敏二、魚津良吉、野村千春、栗田雄、倉田三郎、山川清、藤野龍、藤井令太郎、小杉放庵、小泉倫之助、遠藤典太、足立源一郎、秋口保波、荒木市三、佐藤篤郎、佐藤昌胤、木村荘八、水谷清、三雲祥之助、南大路一、宮田武彦、宮脇晴、三井永一、志村一男、森川鏡、角南松生、木本晴三、福田庸一、笠木実、小柳秀太郎、中山爾郎、高木勇次、関四郎五郎、市川晃〔版画〕 長谷川潔、前田藤四郎、古川龍生、駒井哲郎、北岡文雄

る日本画塾。〔委員長〕 福与悦夫

〔総務〕 西山英雄〔幹事〕 樋口富麻呂

春泥会〔日〕 大阪市住吉区帝塚山中三ノ二六 中村貞以方 中村貞以の主催する日本画の画塾。昭和11年5月創立。昭和30年6月第14回展開催。

春陽会〔洋・舞台装置〕 杉並区和田本町八三三 水谷清方〔電中野六三七八〕 大正9年秋日本美術院洋画部を脱退した小杉未醒、山本鼎、倉田白羊、森田恒友、長谷川昇、足立源一郎の六名は同11年1月、新帰朝の梅原龍三郎を加え、更に九名の客員を迎えて同会を創立。「春陽

会は従来賑々見たる如き既成会への社会的対抗として興らず、単なる藝術家の心を以て因縁相熟したるものとす」と声明した。翌年5月上野竹之台陳列館に第1回展を開き、爾後毎年春季に公募展を開催し、又東京開催後大阪、名古屋等に地方展を催している。昭和29年から舞台美術部を設けた。昭和31年4月第33回展開催。尚春陽会研究所は昭和4年開設、現在に及んでいる。

〔舞台美術〕 伊藤薫朗、吉田謙吉、織田音也、河野国夫、北川勇

上彩会(綜) 千代田区立今川小学校内(電茅場町七八〇九)代表者 藤沢典明、昭和22年創立。東京都小学校在職者にて終戦後東京都学術派遣生として東京美術学校に派遣された二六名にて結成する。

女流画家協会(洋) 三鷹市下連雀三〇五 桜井浜江方、昭和21年11月創立。女流画家相互の研究と新人の登龍門としてアンデパンダン形式の展覧会を開催する。昭和30年6月第9回展開催。

〔会員〕 一二〇余名
新工人会(工) 文京区小日向台町一ノ二 水口俊雄方(電大塚四九三四) 昭和26年12月創立。若い工藝家の新作発表機関、昭和30年9月第7回展開催。

〔会員〕 林尚月斎、辻清明、松浦昭、近藤美、辻協子、梅田総太郎、近藤昭弥、水口俊雄、江頭源一、古田重郎、三上修一郎

新構造社(綜) 北多摩郡小金井町小金井四四八 三村英一方、昭和10年6月構造社有志幹事会は絵画部の解消を決議したが同部は翌月構造社総会を招集、絵画部の存続を決議し同年11月第9回構造社絵画展を公募の上開催した。11年7月彫塑団体十七会の加盟により名を新構造社と改称、更に工藝部を新設した。昭和24年から太平洋画会、新構造社、朱葉会、創造美術会の四団体による自主連立展を開催し、3回展を了えて太平洋画会が退会、三団体による連立展を運営している。毎年1回展覧会開催。昭和31年6月

第8回連立展開催。

〔会員〕 (絵画) 新井時厚、本目勇市、市川兼治、改井貞子、何徳来、清浦正風、楠本繁、北沢博生、小祝嘉一郎、斎藤六郎、斎藤慶一、三村英一、岡田洋采、岡本寿一郎、岡義長、中川安一、南部一信、難波魁、大野元明、大沢康之、太田友一、及川康雄、小田福丸、小口一郎、島太郎、三枝惣太郎、上松二郎、竹沢要作、寺中靖直、徳山巖、多比羅栄一、山本好信、山中馨、何之沢、福崎精哉、内山

襲、外山準一、(彫刻) 浜田三郎、思田忠一、鍋元治、寺畑助之丞、山名常人(写真) 秋山青磁、岩間俱久、則松皓一、天野光章、熊谷辰男、長口宮吉、仙波巖、八木治、三溝貞之助、立花浩二、山田広次、茶谷弘

再興新興美術院(日) 豊島区目白三ノ三五五九(電池袋八九七二) 昭和12年9月日本美術院を脱退した元院友一二名を以て結成、戦争中一時中絶していたが昭和25年旧新興美術院同人六名に他二名を加え再興新興美術院として発足、毎年春秋2回展覧会を開催。昭和30年8月第5回秋季展開催。

〔会員〕 茨木杉風、横田仙草、岡田魚降森、小林果居人、鬼原素俊、芝垣興生、高島祥光、林郁圭宰、岡田録石、倉持晋一、松永光玉、岩崎巴人、上田臥牛、安孫子荻声、箱山精一、花岡朝生、養父清道、谷口正春、大路孫三郎、根本正、服部尚恭

新樹会(洋・彫・版) 台東区谷中清水町三 大河内信敬方(電駒込四八八七)

昭和22年3月創立。昭和31年8月第10回展開催。

〔会員〕 井手宣通、原勝郎、浜口陽三、大河内信敬、大久保泰、山本豊市、朝井閑右衛門、斎藤愛子、木内克、南政善、清水多嘉示

新樹会(工) 京都市上京区北野紅梅町三二 黒田暢方(電西陣六八二八) 昭和23年5月創立。昭和28年の京都絵画専門学校卒業生を中心に結束した染織研究団体。昭和28年6月大阪松坂屋で展覧会開催。

〔会員〕 伊藤逸平、横山英明、中島正三郎、黒田暢、寺石正作、齋田あさ、来野月乙、日高祥三郎、杉田博美、鈴鹿雄次郎

新匠会(工) 京都市右京区川島北裏町五七 稲垣稔次郎方(電桂三三三乙) 昭和22年新匠工芸会として第1回展を開催。昭和26年第5回展より新匠会と改め、昭和27年在野団体として新発足。昭和31年第11回展開催。

〔会員〕 陶福田力三郎、藤本能道、近藤修三、鈴木清、富木憲吉、徳力孫三郎、徳力牧之助、山田岳、安田茂郎、谷村恒四郎、(染) 稲垣稔次郎、河合隆三、暮田延美、鈴木照次、(漆) 山永光甫、古山英司、(金) 増田三男

森々会(日) 杉並区阿佐ヶ谷三ノ五二八 川崎小虎方(電荻窪一〇七七) 昭和25年7月川崎小虎塾有志により結成。昭和30年4月第5回展開催。

〔顧問〕 川崎小虎、東山魁夷 (会員) 石曾根貞亀、石田重子、大田歳夫、奥山

芳泉、小倉芳司、小沢春子、川崎鈴彦、川崎春彦、田中千恵、永山十志夫、奈良裕功、小関きみ子、佐藤永芳、三河義太郎、山本瑛幾、大島秀信、小野茂明、石倉正富、斎藤俊雄

新世紀美術協会(洋) 中野区鷺宮一ノ三七四 松本富太郎方(電荻窪六〇〇三) 昭和30年4月創立。無所属、藝術院会員中の和田三造、川島理一郎を名誉会員として迎え、旺文会離脱の大久保作次郎、吉村芳松、長屋勇等他一七名に、東光会より松本富太郎、横山義雄、境保博等、無所属の柚木久太、草光信成、創元会より東海林広等が参加して結成された日展系の団体。昭和30年7月日本橋高島屋に於て創立記念会員展を開催。31年5月第1回公募展開催。

〔名譽会員〕 和田三造、川島理一郎
〔会員〕 荒木稔雄、藤川光次、金子保、草光信成、松本富太郎、長屋勇、大久保作次郎、東海林広、田沢八甲、横山義雄、柚木久太、吉村芳松、他三一名。

新制作協会(日・洋・彫・建) 港区赤坂青山南町六ノ四 角浩方(電青山七二六〇) 昭和11年7月、第二部会が文展に参加するに及び猪熊弦一郎、内田巖、佐藤敬、中西利雄、小磯良平、三田康の六名は同会を離脱、脇田和、伊勢正義、鈴木誠の三名とともに新制作派協会を設立、同14年7月国画会の彫刻部を脱退した本郷新、佐藤忠良、山内壮夫、柳原義達、吉田芳夫、舟越保武、明田川孝によつて彫刻部を設けた。同24年には建築部を新設、26年には日本画在野団体創造美術と

合流し新に日本画部を設け新制作協会と改称した。展覧会回数は従来の回数を追うことになった。昭和31年9月第20回展覧會。

〔会員〕 (油絵部) 伊藤慈郎、猪熊弦一郎、石川滋彦、伊勢正義、西田勝、萩

太郎、荻須高德、太田忠、脇田和、角浩、川端実、風間完、竹谷富士雄、田中修、田中田鶴子、玉置正敏、村尾隆栄、内田武夫、桑田道夫、小磯良平、小松益喜、古茂田守介、佐藤敬、坂井範一、三田康、三岸節子、瀬島好正、鈴木誠、鈴木新夫、(日本画部) 岩崎鐸、堀文子、奥村厚一、吉岡堅二、高橋周桑、向井久万、上村松篁、山本丘人、福田豊四郎、朝倉拱、麻田鷹司、秋野不矩、沢宏毅、菊池隆志、信太金昌、広田多津、裨田一穂、(彫刻部) 伊東徳、早川巍一郎、西

常雄、本郷新、岡本庄三、吉田芳夫、田畑一作、武次郎、村田勝四郎、久保孝雄、柳原義達、山内壮夫、山本常一、山本悟二、舟越保武、明田川孝、芥川永、佐藤忠良、菊池一雄、菅原安男(建築部) 池辺陽、岡田哲郎、吉村順三、谷口吉郎、丹下健三、山口文象、前川国男、劍持勇

新世代(洋) 品川区大井原町五二〇〇原小学校内(電大森八九四) 代表東俊二 昭和17年創立。教職にあるものでモダンアートの傾向に立つ作家の集り、昭和28年7月第1回展覧會。

〔会員〕 東俊二、勝田寛一、藤沢典明等二十五名 農鳥社(日) 京都市上京区北野紅梅町

三三ノ一 山口華揚方 明治45年創立の西村五雲農鳥社は昭和13年9月五雲の逝去により解散、同年11月6日旧塾生の総意に依り新たに農鳥社を結成した。現在山口華揚が主宰する。

新美術協会(日・彫) 兵庫県芦屋市西芦屋町四一 山田皓斎方(電芦屋四五二九) 東京事務所 杉並区井荻三ノ一〇二 田所量司方 昭和29年3月創立。各自、自由な立場で制作をつづけるため

の集団年一回会員展と公募展を行う。昭和31年3月東京展同6月第3回公募展(大阪) 〔顧問〕 青木大乗

〔会員〕 荒木賢治、荒尾昌朗、厚美青磁、聖蕃多、伊東種、小宮山俊、前田晃邦、丸田良平、松本雅山、諸永青景、長浜虎雄、大橋良三、沖中陽明、田所量司、立脇泰山、山田皓斎

水彩聯連(水) 世田谷区玉川奥沢町三ノ一七五 上田哲農方 昭和15年5月創立。昭和31年2月第15回展覧會。

〔会員〕 荒谷直之介、春日部たすく、小堀進、長沢節、上田哲農、古川弘、海老原省象、山本彪一、牧原方之助、仁戸田秀吉、中村忠二、酒泉淳、増永直樹、坂上明司、寺居健一、加治屋隆、三橋兄弟治、新井邦雄、藤井九郎、田中実、渡部百合子、伴敏子、青野馬左奈、サイタ亨(スタイル画部) 原雅夫、宮内裕、中原淳一

生活工藝集團(工) 台東区谷中初音町三ノ三八 北村一朗方(電駒込七五二二) 型々工藝集團とコ工藝が合体、同時に同志を糾合して昭和26年発足した。昭和30年12月第3回展覧會。

〔会員〕 浅野陽、磯矢阿伎良、緒方正祥、小倉紘梧、北村一朗、後藤年彦、岡谷四郎、田村耕一、内藤四郎、林二郎、矢部連光、牧田良一、林卯太郎、堀恒治、河津直武、大泉博一郎、小笠原隆光、井上秀雄、平野和子、大熊喜英、岩倉康二、黒木麴子

菁莪会(日) 京都市北区上賀茂坂口町二 水田竹圃方(電上七二八二) 水田竹圃の主筆する日本画塾。

青委会(洋) 淀橋区西落合一ノ三〇三 村岡平蔵方 昭和22年創立。年一回展覧會開催。

〔会員〕 森田元子、鬼頭鍋三郎、幸島重雄、土佐林豊夫、田村一男、大沢海蔵、小林博史、高光一也、板井悦、村岡平蔵、朝比奈文雄、新保兵次郎、新道繁

青丘会(洋) 新宿区下落合四ノ一五八 入 高木紀重方 日展所属各団体の中堅作家各二名よりなる研究団体。昭和25年9月創立。

〔会員〕 西尾善積、渡辺武夫、楡原健三、高田誠、広瀬功、森田茂、山本日子士良、伊藤清水、平松護、小野彦三郎(在仏会員 大内田茂士、館慶二) 青晴会(洋) 中央区日本橋蛸殻町三ノ一八 川越昭子方 国画会の在京女流出

品者により昭和26年結成された。〔会員〕 田中美知子、土田次枝、野田好子、川越昭子

青陶会(陶) 京都市東山区五条橋東三丁目 市川通三方 昭和28年6月創立。楠部弥武を中心とする陶藝研究会。

〔会員〕 二〇余名。青塔社(日) 京都市左京区下鴨中川原町七一 池田遙邨方(電上六六六〇) 昭和28年創立。池田遙邨を指導者とする日本画研究所。

青龍社(日) 大田区新井宿四ノ一〇五三 川端龍子方(電大森三三二) 昭和3年、日本美術院を脱退した川端龍子が、龍子及び御形塾員の製作発表の機関として同4年6月同社を創立した。同年

東京府美術館に第1回展覧會開催。同31年8月第28回展覧會。尚秋期本展覧會に対して毎年「春の青龍社展」を開催する。春期展は秋期展に於ける入選者を出品資格者として鑑別の上陳列する。「健剛なる会場芸術」を唱え、在野団体として官展には参加しない。

〔主宰〕 川端龍子〔社人〕 加納三葉輝、山崎豊、市野亨、安西啓明、小島鼎子、時田直善、亀井玄兵衛、琴塚英一、松宮左京、佐藤土筆、佐々木邦彦、結城天童、大塚香緑、竹内未明、渡辺不二根

織維デザイン創作集團(工) 中央区兜町三ノ五 米山ビル(電兜町六五六三、七七七六) 昭和30年4月創立。織維デザインナーの創作団体として結成された。

〔委員長〕 河野鷹思〔委員〕 松川照二、由良玲吉〔会員〕 前沢賢治、渡辺

万治、田中正明、藤田栄一、荻野茂、今洋子〔評議員〕須藤雅路、新井泉〔顧問〕和田三造、今和次郎

前衛美術会(洋・日・彫・版・建) 豊島区千川町二ノ一 山下菊二方(電落合五一七六呼) 昭和22年5月創立。戦後、美術文化協会より分れ、佐田勝、赤松俊子、丸木位里、大塚陸、入江弘、井手則雄、吉井忠、山下菊二、箕田源二郎等

新居広治、尾藤豊、島田澄也等が加わり発足。昭和30年第3回ニッポン展開催。〔会員〕(絵画) 赤松俊子、尾藤豊、福田恒太、穂積肇、入野達弥、岩原正男、桂川寛、木村成敏、小島直、今野新一、丸木位里、箕田源二郎、宮城泰介、中野秀人、中谷貞彦、新居広治、小笠原直春、小川広、大野斉治、大塚陸、桜井誠、島田澄也、菅野陽、鈴木賢二、高山良策、滝津三、滝平二郎、勅使河原宏、山下菊二、山内衛、寄木麟二、吉村二三生(彫刻) 林原英世、井手則雄、入江弘(建築) 武内芳夫

全日本工藝美術家協会(工) 千代田区有楽町二ノ五 東京都商工指導所内 梨谷静山(電和田倉三二八六) 昭和26年10月創立。〔会長〕 徳川宗敬 〔副会長〕 高村豊周

〔事務局長〕 梨谷静山 (七)

創製会(彫) 世田谷区玉川奥沢町二ノ一四九 森大造方(電田園調布三二八〇) 九元社の会員有志により結成。昭和26年

11月創立。昭和31年6月第5回展開催。〔同人〕 森大造、中野四郎、村井辰夫、奥山泰堂、大田重範、法元六郎、金城真輔、奏紹世、阿部晃工

創製協会(洋・彫・工・写) 杉並区東荻町六九 神津港人方(電荻窪四四三) 昭和25年3月創立。昭和24年6月緑巷会第10回展終了後、解体再編成を行い、創製協会として再発足したもので緑巷会を継承している。昭和31年5月第7回展開催。〔会員〕 神津港人、金沢茂元、佐藤利平、田島長齡、中森遊、平井為成、山下鉄之輔、広田剛郎、中村博英、岡田早苗、新関国臣、牧島如鳩、佐藤潤四郎、杉三郎、大沢邦雄

造形版画協会(版) 台東区金杉一ノ六 清水正博方(電浅草一九〇) 昭和7年新版画集団として創立。11年第6回展を経て組織変更、12年3月造形版画協会と改称、版画の純粹なる絵画的造型性の確立を目的とす。戦時中一時展覧会を休止し、24年再出発して30年5月第14回展開催。

〔会員〕 松下芳太郎、水船六洲、武藤六郎、小野忠重、柴秀夫、清水正博、後藤忠光、森本宏、小口益一

創元会(洋) 港区麻布本村町一四五 木下幹一方(電三田八八〇) 昭和16年3月創立。昭和30年4月第14回展開催。〔会員〕 井上自助、石塚三郎、長谷川龍甫、戸田郁郎、戸谷賀一、橋本はな子、金沢重治、川口雄男、川口四郎、河本一男、柏木治子、田中繁吉、高橋北修、館慶一、中野和高、名村定志、内田一郎、

小野彦三郎、恩田孝徳、倉員辰雄、安武芳男、深谷敏、手島貴、出口龍一、青地秀太郎、安藤信哉、洗春海、坂本幹男、木下幹一、三浦遠爾、樋口一郎、広本季与丸、罇龍之助、鈴木千久馬、赤津実、塚本張夫、三島利正、井上和、氏家秀之進、高島常雄等一六六名

創作工藝協会(工) 大田区西六郷一ノ七 各務クリスタル製作所内(電蒲田三三一〇) 昭和27年6月創立。モダンアート・クラフトとしての造型活動に併せて産業工芸に於けるデザインの水準を高めるために積極的な活動を行う。昭和30年5月第4回展開催。〔会員〕 高橋節郎、吉田丈夫、佐治正、佐藤潤四郎、染川鉄之助、芳武茂介、青木滋芳、蓮田修吾郎、山脇洋二、安原喜明、三輪智一、各務満、槻尾宗一、鈴木貫爾

創人社(工) 京都市左京区浄土寺南田町一〇三 番浦省吾方(電吉田三〇四九) 昭和21年1月創立。創立以来毎年京都及び東京に於て展覧会開催。工藝的新造型性の確立と後進の育成を趣旨とする。〔会員〕 番浦省吾、黒田辰秋、久保金平、東端真篠、平石晃祥、上原清、中清太郎、竹中微風

創造美術会(洋・彫・美) 文京区関口水道町四〇 木村康三方 昭和22年創立。同31年6月第8回連立展開催。〔会員〕(絵画部) 保科米三、山村勝人、松本茂雄、青樹宮三、坂口辰己、国分治、下田範次、福島長二郎、小泉鉄太郎、渡辺喜一、小栗慶太郎、金沢俊夫、

成瀬憲、鈴木孝之、佐藤文雄(応用美術部) 木村康三、辻基、小田中久良子 創造美術協会(洋・日・彫) 大阪市天王寺区木野町二〇 久保晃方 昭和10年創立の洋画団体セクションダールが同15年創造美術協会と改称、関西在住の各派美術家により組織されたもの。昭和29年第15回会員展、同30年9月第8回公募展を開催。

〔常任委員〕 上嶋龍、川原章二、田中阿喜良、久保晃

〔委員〕 西阪修、玉沢潤一、小林武夫、下高原龍巳、高須国之、河野通紀、山田千秋、荒井秀宜、藤田重夫、陰山光義、荒木由三、貝原六一、伊藤才夫、斎藤正治、村尾克巳、森崎幸(以上絵画) 白石正義、村上龍起、仲真弘(以上彫刻)

双台社(洋) 世田谷区玉川奥沢町一ノ三八四 鍋谷伝一郎方 昭和16年創立、昭和31年7月第15回展開催。

〔同人〕 石井柏亭、荒谷直之介、上田哲農、岡田行一、大兼実、刑部人、林鶴雄、堀忠義、細島昇一、下沢木鉢郎、鈴木良三、鈴木信太郎、須山計一、田坂乾、滝川太朗、近藤吾朗、高橋庸男、近岡善次郎、千ヶ崎徳六、斎藤州外、平塚運一、鍋谷伝一郎、納富進、真下慶治、松村三冬、他

蒼野社(日) 神奈川県逗子市山ノ根四二三 中村岳陵方(電逗子三三七九) 中村岳陵の主筆する日本画塾。

(た)

第一美術協会(洋・工)〔事務局〕 文

二八七

二八七

二八七

二八七

京区高田豊川町六〇 石川方 (電大塚一五〇一) 昭和4年5月創立。毎年展覽會開催、昭和30年7月第26回展開催。

〔委員長〕 石川重信、〔副委員長〕 高橋亮、岡登貞治

〔委員〕 石川重信、高橋亮、岡登貞治、谷井喜三郎、村上松次郎、細井繁誠、任補豊丸、横山群、竹野谷仁重、上原重和、野次孝作、山口美勇、岡所春、斎藤茂、青木武

対象(上) 板橋区常盤台二ノ二二 蓮田脩吾方 (電板橋四二四八) 昭和29年5月創立。新しい世代の認識のもとに生れる工藝の研究発表機関。昭和31年11月第3回展開催予定。

〔主宰〕 高村豊周 (会員) 蓮田脩吾郎、西大由、染川鉄之助、岸沢武雄、伊藤豊、板坂辰治

第二紀会(洋・彫) 杉並区下高井戸四ノ八五九 栗原信方(電松沢四四九三)

二科会は昭和19年第30回展後解散し戦後再結成を図つたが、旧二科会員黒田重太郎、栗原信、田村孝之介、中川紀元、鍋井克之、正宗得三郎、宮本三郎、横井礼市の九名は参加せず旧二科会の活動を第一期とし、戦後新しく第二の紀会を劃するの目的を以て昭和22年5月第二紀会を創立した。昭和31年10月第10回展開催。

〔委員〕 (絵画) 黒田重太郎、栗原信、田村孝之介、中川紀元、鍋井克之、正宗得三郎、宮本三郎、横井礼以、佐野繁次郎、橋本徹郎、峰岸義一、宮川仁、藪野正雄、成井弘文、大兼実、大石俊彦、佐佐木孔、秋保正三、高山道雄、森英、津

田周平、中野安次郎、井上安男、佐伯米子、土岐国彦、近藤嘉男、島岡実、鳥取敏、兒玉幸雄、青木寿、金田辰弘、森本健二、中西勝、山口操助等二二九名(彫刻) 菅沼五郎、中川為延、松村外次郎、八柳恭次

太平洋画会(洋・彫・染・写) 文京区白山御殿町一〇〇 布施信太郎方 明治22年創立の明治美術会を同34年組織を一新し翌年1月太平洋洋画会と改称、第1回展を上野公園五号館に開催した。同37年洋画研究所を開設昭和4年太平洋美術学校と改称し同20年戦災校舎焼失迄経営す。毎年展覽会を開催し昭和31年7月第52回展を開催した。

〔絵画部委員〕 (代表) 布施信太郎

浅川恒明、尼谷良、秋葉洋治、青山清、石井明、石井弥一郎、市川光雄、一井増郎、円城寺邦夫、大木卓、大宮松太郎、大森商二、小柳津経広、河合斗湖、川村信雄、近藤洋二、小坂健三、近馬勤吾、小宮惣太郎、小泉秀松、小島清、沢村みちる、鳥添鶴雄、爾見信郎、砂田正巳、鈴木武志、高橋虎之助、多田栄二、武田好文、竹内栄蔵、佃武昭、椿悦三、野村覚、原正俊、原ツマ子、菱沼藤男、広島八重子、藤田親家、藤田実、堀潔、本目豊吉、真木孝之、丸毛利久、牧田実、三浦金之進、山田武、山口美好、梅原英子、長岡忠三郎、深水正策、山田稔、宇佐見昭二、岩崎英子、行友巖、永島吉太郎、仲田頼、蒲生栄一、慶伊安次郎、後藤泰作、(彫刻部) 藤井浩佑、沢田晴広、山本豊市、中野桂樹、石井明、吉田陽

悦、(染織部) 野口道方、溝留満、野田智之、仁科十郎、河合斗湖(写真部) 金丸重嶺、渡辺義雄、魚住助、田中清隆、大東元、相浦勝、吉田專造、船山克、中俣正義

匠(工・染) 京都市左京区下鴨東本町三二 皆川泰蔵方 (電上六二二三) 昭和23年4月創立。染色美術家の集り、毎年一回京都市にて展覽会開催。

〔委員〕 皆川泰蔵、今西良雄、春日井秀雄、三浦景雄、山出守二

竹杖会(日) 京都市上京区等持院西町三五 徳岡神泉方 明治28年故竹内栖鳳塾生にて創立。昭和30年7月第7回展を京都で開催。

〔委員〕 西山翠嶂、小野竹喬、徳岡神泉、金鳥桂華、池田遙邨、浜田観、伊藤小坡、中田晃陽、森月城、池田虹影、大村広陽、榊原苔山、山本紅雲、東原方徳、三木翠山、青木生沖、大矢峻嶺、川口具川、山本朝光、稲葉春生、佐藤寛山、伊藤石華、小豆島甘兆

中央美術協会(洋・日・彫) 杉並区善福寺町四八 郡山三郎方 昭和27年5月創立。中央美術学園の指導者と卒業生をもつて組織する。昭和31年1月第5回展開催。機関誌「中美」発行。

〔参予〕 今泉篤男等一四名 (会員) 新倉政英等六一名

中部在野美術連盟 名古屋市中区栄町六ノ八 文天堂画廊内(会務代表者) 岐阜市三里清旭丘 坪内節太郎 昭和30年

2月創立。中部地方における在野美術団体の連合体でこの地方に新鮮な美術文化を確立し、努めて広範な造型面の実践に寄与することを目的とする。

〔委員〕 二科、行動、国画、春陽、新制作、モダンアート、自由、独立、美術文化、第二紀の各団体に所属する作家を以て組織され、約四〇〇名。

(七)

デッサン社 品川区西中延五ノ一二五 一 旭方 大正15年創立。毎年一回現代名家作品展を定期開催。昭和31年第21回展、機関誌「デッサン」発行。

〔特別賛助員〕 小林古径、梅原龍三郎 中川一政、石井鶴三 (主宰) 旭正秀 デモクラート美術家協会(洋) 中野区川島町都営アパート三〇八 森啓方 昭和26年創立の前衛的な作家の集り。昭和30年9月第5回展開催。

〔委員〕 青原俊子、アイオウ、瑛九、泉茂、加藤正、菊地秀行、森啓、森泰子、生島笑子、三木登、小笠原健一、杉村恒、高井義博、吉田利次、一ノ瀬俊一、中塚純二、オノサト・トモコ、坂井正胤、織田繁、内海柳子、織田玲子、津志本貞、山中嘉一、永井マコ

天香画塾(日) 世田谷区深沢町四ノ一二 松林桂月方 (電玉川七一七) 松林桂月の主宰する日本画塾。塾長 吉田登毅

点々会(日・洋) 世田谷区経堂町四二六 村雲大樸子方 (電世田谷八五六) 昭和30年1月創立。昭和30年6月銀座松

屋に於て第1回展開催。

〔会員〕 別府貫一郎、後藤禎二、石垣栄太郎、村雲大樸子、岡本唐貴、寺島貞志、山上嘉吉

(と)

稲花会(工) 杉並区久我山三ノ一一三三田村自芳方 大正15年1月創立。故赤塚自得の社中を以て組織し、社中間の親睦を図り常に漆工藝研究の向上に務める。随時展覽會開催。

〔同人〕 三田村自芳、太田自適、岡本昇三、吉岡郁三、月尾慶水、村田義忠、井沢徹二、工藤喜代志、山浦等、三田村秀雄、魚野自醒、石川古堂、小沢裕、南忠

東丘社(日) 京都市北区平野桜木町二八(電西陣九六八) 堂本印象の主宰する画塾で毎年京阪神で展覽會を開催する。昭和31年5月第13回展開催。

〔総務〕 三輪晃勢、山本倉丘
東京展 世田ヶ谷区北沢五ノ八六一
竹上義治方 昭和29年2月創立。新しい写真と真面目な藝術活動を目的とする。

〔会員〕 羽藤馬佐夫、加藤正信、鈴木堅司、竹上義治、佐藤昌祐、白石延夫、井上正喜、山本甚作、西徳三郎、矢島俊一、木村昭弥、荒井一男、徳本立憲
東京美術文化協会 台東区上根岸町四四(電浅草三〇一、三四五六) 小中学及高校の図画教育の振興のため昭和21年財団法人として創立。毎年展覽會開催。研究雑誌「美術教室」を年4回発行。

東京民藝協会 中央区銀座西八ノ三

たくみ内(電銀座二九〇・二〇一七・二〇七一) 昭和29年3月創立。日本民藝協会の東京地方支部として、民藝運動の振興に尽力し、会員相互の親睦をはかる。30年1月より機関誌「民藝」を発刊。毎月講演会、見学会、研究会、鑑賞会を行う。入会隨意。

〔会長〕 松方三郎 〔会員〕 二八〇名
東光会(洋) 豊島区椎名町一ノ一八七三 森田茂方 (電落合一六六四) 昭和7年創立。昭和31年5月第22回展開催。

〔会員〕 岩下三四、石本秀雄、家永暎三郎、西川高次、大和田富子、渡辺浩三、河井達海、河原修平、田代順七、辻利平、桑原福保、胡桃沢源人、熊岡正夫、山本日士良、山崎修二、柳田久、松永敏太郎、松岡正、小早川篤四郎、斎藤与里、佐藤一章、水野一好、三田村築、江藤哲、平通武男、森田茂、関真等一五六名

東陶会(工・陶) 中野区川添町一六森方 昭和2年創立。年一回、同人展及全国陶藝展開催。昭和30年11月第6回全国陶藝展第30回東陶会展開催。

〔会長〕 板谷波山(会員) 安原喜明、宮之原謙、井上良章、土肥刀泉、唐杉澹光、大森信比古、中静昭平、館野善次郎、古宇田正雄、城戸夏男、板谷梅樹、水野一善、磯谷丹舸春、横山朝陽、山本正年、中野馨一、杉田栄助、林茂松

読画会(日) 板橋区常盤台一ノ二九西沢笛歌方 (電板橋二二〇一) 明治41

年故荒木寛歌及十歌の門下を主体として発足、毎年展覽會を開催。展覽會名を一新社展と改め昭和26年第3回展開催。

其後日本伝統花鳥画研究のため毎月研究会を開催。
〔委員〕 西沢笛歌、森白甫、永田春水、朝井觀波、田口黄葵、木本大果、温原柳歌、亀割隆

独立美術協会(洋) 台東区谷中初音町四ノ一七 島村三七雄方(電駒込二二六二) 昭和5年11月創立。里見勝蔵、児島善三郎、林重義、林武等二科会の会員会友及び同会出品者一名に国画会の高島達四郎、春陽会の三岸好太郎を加え、我々は既設の団体より絶縁し新時代の美術の確立を期す」と宣言、独立美術協会を創立した。翌年1月第1回展を開き新歸朝の福沢一郎も第1回展から会員として参加した。昭和31年11月第24回展開催。

〔会員〕 青柳暢夫、赤星孝、赤堀佐兵、足立襄、池島勘治郎、今井憲一、伊藤彪、宇根元警、海老原喜之助、江川平三、大久保泰、岡部文之助、岡村芳男、小原雄二、片山公一、加藤陽、菊地精二、木村忠太、久保一雄、熊谷登久平、小出三郎、児島善三郎、小島善太郎、小林和作、齋田武夫、齋藤長三、齋藤求、桜井浜江、坂本善三、佐川敏子、島村三七雄、清水鎌徳、志村計介、末永胤生、菅野恵介、鈴木保徳、鈴木重夫、須田国太郎、妹尾正彦、妹尾正雄、高島達四郎、田中行一、高橋忠弥、高岡惣七、田中佐一郎、島海青見、鉄指公蔵、鳥居敏文、中尾彰、中津瀬忠彦、中岡冊夫、中

村節也、中村善種、中山巖、鳩川誠一、西田藤次郎、野口弥太郎、狭間二郎、林武、樋口加六、藤岡一、堀之内一誠、斑目秀雄、松崎真一、松島一郎、松島正幸、松島鈴子、緑川広太郎、宮崎精一、宮島佐一郎、水島清、李田たけを、矢崎牧広、山田栄二、山道栄助、山本正、横地康国、吉川清

土曜会(工) 大阪市天王寺区逢坂上ノ町一四一 柴崎風神方 昭和27年1月創立。京阪在住の官展系工藝作家の有志の集り。

〔会員〕 平松宏春、角谷一圭、森崎静亮、小林美春、川端三義、田辺竹雲齋、中島保美、龜山竹司、米沢蘇峰、楠田撫泉、伊東翠壺、宮下善寿、堂本漆軒、中村鶴生、勝尾青龍洞、森野嘉光、柴崎風岬

二科会(洋・彫・理・漫・商業美術・写) 杉並区久我山二ノ五九〇 東郷青兒方(電荻窪五二四) 大正3年文展第二部に二科設置運動が起つたが、当局に容れられず、同年10月ついに文展より分離して、上野竹之台陳列館に二科美術展覽會を開催した。同展開催の際の鑑査員一名は翌年そのまま会員となり在野団体として独立した。爾来同会は新進流派の作家を包容して我洋画史上に啓蒙的功績を挙げている。大正8年藤川勇造会員に推され初めて彫刻部の加入をみた。其後昭和5年児島善三郎、里見勝蔵等は退会し独立美術協会を創立、更に石井柏亭、有島

生馬、山下新太郎、安井會太郎等の名譽會員辭退があり、會員の移動はあつたが在野として行動を続け昭和18年第30回展を開催した。翌19年は情報局の指令により展覧会は中止となり更に諸般の事情により同年10月ひとまず解散した。同20年終戦となり再結成を図つたが旧會員中、向井潤吉、古家新等は行動美術協會を、又、正宗得三郎、熊谷守一等は第二紀念会を結成して離脱した。昭和20年新に工藝部、理論部を、同26年漫画部、商業美術部、同28年写真部を設けた。同30年7月鈴木信太郎、高岡徳太郎、野間仁根は退会を聲明、一陽会を結成するに當り、米良道博、荻野康兒、鱸利彦、山路真護、浅野孟府、植木力等繪画部並びに彫刻部の會員は行動を共にした。昭和31年9月第41回展開催。

〔會員〕(繪画部)阿部金剛、青山龍水、藤井二郎、藤川栄子、福島金一郎、服部正一郎、伊庭伝治郎、井上賢三、井上寛造、伊藤研之、加治屋隆二、北川民次、小林喜一郎、桑原実、桂ユキ子、松本弘二、松井正、松葉清吾、中原実、錦義一郎、野村守夫、岡本太郎、岡田謙三、大沢昌助、織田広喜、佐藤吉五郎、清水刀根、鷹山宇一、寺田竹雄、東郷青兒、鶴岡義雄、山口長男、山尾薫明、山本敬輔、吉井淳二、吉原治良、安藤幹衛、伊藤静尾、斎藤三郎、吉村勲、佐々木良三、多ヶ谷伊徳(彫塑部)笠置季男、上田暁、大西金次郎、安藤菊男、堀内正和、乗松巖、妹尾健太郎、野水信、淀井敏夫、広瀬不可止(理論部)鈴木崧、山中散生、

菊岡久利(漫画部)近藤日出造、清水崑(写真部)大竹省三、秋山庄太郎、早田雄二、林忠彦、緑川洋一、植田正治(商業美術部)河村運平、西島伊三雄、赤羽喜一、石川茂

〔役員〕Paul Aizpuri, Raymond Guérier Roger Montané, André Mihaux, Jean Louis Vinay, 里見明正、寺田春式、矢口洋、深谷徹、小野末、関口俊吾、山本豊市

日本アプストラクト・アート・クラブ(洋・版・彫・評)世田谷区若林町四六一 西田信一方(電世田谷一五八七) 昭和28年6月創立。アプストラクト・アートの国際交流を目的として結成した集団。

〔役員〕西田信一、川口軌外、末松正樹、山口長男、植木茂、山口正城、長谷川三郎、吉原治良、村井正誠、植村鷹千代、滝口修造

日本インダストリアル・デザイナー協会(工) 港区麻布覆町二二(電赤坂五一) 昭和27年10月創立。

〔会長〕加納久朗(理事長) 佐々木達三(理事) 明石一男、小杉二郎、豊

口克平、金子徳次郎、小池岩太郎、真野善一、皆川正、柳宗理、渡辺力(監事) 知久篤、鈴木富久治

日本浮世繪協會 港区麻布市兵衛町二ノ一 国華社内(電赤坂一七五二) 旧日本浮世繪協會とその後設立された浮世繪同好会が合体して昭和16年に創立されたもの。不定期に浮世繪に関する講演会を開催又展覧会を指導する。

〔役員〕浅野長武(理事長) 藤懸静也(常任理事) 橋崎宗重、金田信武、渡辺庄三郎

日本漆工藝会(工) 杉並区成宗二ノ七一八 山浦等方 昭和21年5月創立。漆工藝作家及之に關する学者者、評論家として組織し、會員相互の親睦協和により漆工藝の振興を図り作家の向上発展を目的とする。春秋展覧会開催。

〔委員〕(長) 吉田源十郎。太田白道、河合秀甫、河合久仁雄、河合匠造、工藤喜代志、佐藤陽雲、佐治正、三田村秀雄、山浦等、吉田左源二、渡辺道善(地方委員) 小松芳光、張間麻佐緒、彼谷芳水、中野謙二、稲塚芳郎、武石勇

〔役員〕(理事長) 西沢富敏(理事) 加藤土師前、松田権六 以上常務。明石国助、荒川豊蔵、石黒宗磨、磯井如真、香取正彦、加藤唐九郎、木村雨山、玉井敬泉、中村勝馬、平田郷陽、水町和三郎(監事) 野口真造

〔役員〕第一次正會員は、重要無形文化財認定者並びに旧指定者を中心とする五九名。

日本山林美術協會(繪・彫・工・写) 豊島区要町二ノ三三 鶴田吾郎方(電落

合二三五七) 昭和29年5月創立。山林による凡ゆる面に対しての美術創作と活動を行う。昭和31年8月第2回展開催。

〔委員〕 鶴田吾郎、光安浩行、古賀忠雄、安達真太郎、清水敦次郎、刑部人、松田文雄、二口善雄、太田洋愛、桑原宏、小原工藝会、光安鶴子、二口志保子、小島三郎、高木周平、白尾之男、山畑阿利一、宮本光庸、滝川美一、宮地寅彦、村井辰夫、奥山泰堂、林二郎

〔代表者〕 幹事 細島昇一
〔委員〕 相沢光朗、不破章、細島昇一、石川達三、牧野正吉、増田喜恵蔵、水野以文、水平讓、水谷景房、内藤秀因、岡崎祇容、野沢潤次郎、竹内梅治郎、丹野良輔、富田通雄、渡辺義一、渡部文雄、山中心太郎、山崎政太郎、大和屋藏

〔委員〕 阿部広司、相沢光朗、青津清喜、荒木芳男、荒木茂喜、安藤信哉、別車博資、千ヶ崎悌六、淵上政夫、藤江志津、藤田薫、福田四郎、古川盛雄、不破章、早川国彦、橋口竹夫、林義勇、萩原実、星野正三、細島昇一、細島幸吉、本多信彦、平沼溪水、平島武夫、日野九州男、飯島公夫、飯島敏三、池尻一朗、井

上安男、石井柏亭、石井鶴三、石川達三、石川新一、板倉贊治、池部鈞、甲斐栄一郎、梶谷保、木島工、小山周次、小山良修、小泉政孝、今野五郎、桂龍雄、真野紀太郎、町田源三郎、牧野正吉、岡宮勇、丸山東美男、増田喜恵蔵、松木寿雄、松本慎三、三浦巖、水野以文、水平讓、水木伸一、水谷景房、水田荘介、三上信次、三上知治、宮島羊郎、宮部進、宮崎信吉、森寅雄、村上鉄太郎、宮地茂、中田早、中沢弘光、内藤秀因、名柄正之、西尾武夫、丹羽美智子、野沢潤次郎、野村英夫、野村開一、沼尾松三、野津佐吉、小原博司、太田黒幸、岡田正二、岡崎祇容、恩田孝徳、小川俊郎、納直次、斎藤大太郎、坂江重雄、関晴風、白滝幾之助、白山卓吉、繁野三郎、篠原新三、柴山英雄、菅沼金六、坂坂ゆたか、高木重雄、財保、高山長一郎、竹野谷仁重、竹内梅治郎、竹内栄三郎、滝沢邦行、滝沢清、丹野良輔、富田通雄、富安昌也、鳥井三郎、高野浩、谷俊男、有働観美、海野正男、牛尾弘、漆畑広作、渡辺偉、渡辺義一、渡部文雄、八木敏羊、山本不二夫、山森元龟、山村秀一、山中心太郎、山崎政太郎、大和屋藏、吉田豊、吉田四郎、吉松真司 一三三名

〔代表者〕 幹事 細島昇一
〔委員〕 相沢光朗、不破章、細島昇一、石川達三、牧野正吉、増田喜恵蔵、水野以文、水平讓、水谷景房、内藤秀因、岡崎祇容、野沢潤次郎、竹内梅治郎、丹野良輔、富田通雄、渡辺義一、渡部文雄、山中心太郎、山崎政太郎、大和屋藏

〔委員〕 阿部広司、相沢光朗、青津清喜、荒木芳男、荒木茂喜、安藤信哉、別車博資、千ヶ崎悌六、淵上政夫、藤江志津、藤田薫、福田四郎、古川盛雄、不破章、早川国彦、橋口竹夫、林義勇、萩原実、星野正三、細島昇一、細島幸吉、本多信彦、平沼溪水、平島武夫、日野九州男、飯島公夫、飯島敏三、池尻一朗、井

〔委員〕 阿部広司、相沢光朗、青津清喜、荒木芳男、荒木茂喜、安藤信哉、別車博資、千ヶ崎悌六、淵上政夫、藤江志津、藤田薫、福田四郎、古川盛雄、不破章、早川国彦、橋口竹夫、林義勇、萩原実、星野正三、細島昇一、細島幸吉、本多信彦、平沼溪水、平島武夫、日野九州男、飯島公夫、飯島敏三、池尻一朗、井

素雅を基調とする国民美術の確立を期するを趣旨としている。昭和31年9月第7回展開催。

〔委員〕 渡辺聖空、小松均、村雲大模子、田村永潤、中村雅登、山喜多二郎太、津田青楓、近藤雲草、渡辺英明等二〇名
〔代表者〕 稲垣稔次郎、飯田真弓、二科十郎、雲出雪枝、長浜重太郎、中村妙子、長滝澄、野口道方、暮田延美、栗原安、矢部連光、古田重郎、木村和一、鈴田照次、菊沢草履路、中川啓子、山内安芸

〔代表者〕 稲垣稔次郎、飯田真弓、二科十郎、雲出雪枝、長浜重太郎、中村妙子、長滝澄、野口道方、暮田延美、栗原安、矢部連光、古田重郎、木村和一、鈴田照次、菊沢草履路、中川啓子、山内安芸

〔代表者〕 稲垣稔次郎、飯田真弓、二科十郎、雲出雪枝、長浜重太郎、中村妙子、長滝澄、野口道方、暮田延美、栗原安、矢部連光、古田重郎、木村和一、鈴田照次、菊沢草履路、中川啓子、山内安芸

田村晃(大阪)・中山文孝(九州)・橋本徹郎(東京)・早川良雄(大阪)・原弘(東京)・堀田能雄(名古屋)・山城隆一(東京)・山名文夫(東京)

〔代表者〕 稲垣稔次郎、飯田真弓、二科十郎、雲出雪枝、長浜重太郎、中村妙子、長滝澄、野口道方、暮田延美、栗原安、矢部連光、古田重郎、木村和一、鈴田照次、菊沢草履路、中川啓子、山内安芸

〔代表者〕 稲垣稔次郎、飯田真弓、二科十郎、雲出雪枝、長浜重太郎、中村妙子、長滝澄、野口道方、暮田延美、栗原安、矢部連光、古田重郎、木村和一、鈴田照次、菊沢草履路、中川啓子、山内安芸

〔代表者〕 稲垣稔次郎、飯田真弓、二科十郎、雲出雪枝、長浜重太郎、中村妙子、長滝澄、野口道方、暮田延美、栗原安、矢部連光、古田重郎、木村和一、鈴田照次、菊沢草履路、中川啓子、山内安芸

〔委員〕 武井武雄、初山滋、林義雄、黒崎義介、斎藤長三、久米宏一、市川禎男、中尾彰、安泰、松山文雄、井口文秀、鳥居敏文、由良玲吉、松井未雄

日本陶磁協会 中央区東銀座二ノ一 日本医事新報社 梅沢彦太郎方(電京橋八一五〇) 昭和20年1月創立。社団法人。毎月研究会、講演会並びに春秋二回古陶磁の展覧、講演会等を行ふ。機関誌「陶説」毎月発行。

〔役員〕 (顧問) 尾崎河盛、小林一三、団伊能、松永安左衛門、細川護立、畠山一清 (理事長) 梅沢彦太郎 (理事) 磯野信威、大屋敦、小田栄作、加藤唐九郎、加藤士師前、久志卓真、黒田領治、小山富士夫、小森新一、佐藤進三、陶守三思郎、瀬川昌世、瀬津伊之助、田中作太郎、鷹巢豊治、内藤匡、中村一雄、中本守、広田熙、堀口捨巳、藤山順吉、満岡忠成、森村義行、保田憲三、田山信郎、武田正泰、田中丸善八

〔会員〕 二五〇〇名
日本陶彫会 中野区江古田二ノ九二八 滝川美一方 昭和26年創立。

〔会長〕 沢田晴広 (副会長) 古賀忠雄 (会員) 雨宮治郎、安藤士、荒井徳亮、赤堀信平、〇円鏝勝二、船津英治、長谷川地記、長谷川義起、〇伊奈重孝、〇伊藤芳雄、片山辰之助、〇唐杉清光、木下繁、〇清水礼四郎、久保駒太郎、真鍋知道、松村秀太郎、三沢寛、〇三井高義、森豊一、宮本光庸、水船六洲、松岡正雄、長野隆業、〇長沼孝三、中川為延、中島浩、中村直人、中野五一、沼田喜代

子、野口嘉光、大内青圃、大野信蔵、柴田佳石、菅野操子、菅原安男、〇多田瑞穂、〇滝川美一、滝一夫、竹下恵一、竹林薫、津上昌平、〇分部順治、〇安田周三郎、藤野舜正、片岡静観、柴山清風、杉江瀧軒、坂上政克、佐々木大樹、富永直樹、〇山畑阿利一、中野桂樹、浅井行雄、仏子泰夫、井上美邦、〇加藤土師前、坂田芳信、鈴木賢二、林茂松(〇委員)

日本銅版画協会(版) 杉並区高円寺三ノ一八〇 関野準一郎方(電中野九〇二七) 昭和28年7月創立。関野、浜田、駒井等の中堅作家が発起人となつて銅版画家の全国的な集団をつくつた。

〔理事長〕 関野準一郎 (理事) 浜田知明、駒井哲郎、浜口陽三 (経理) 田河水泡 (会員) 一〇〇〇名

日本都市美術推進連盟 財団法人、大阪市北区堂島上一ノ三二(電大阪四六七〇五、六七〇六) 昭和27年5月創立。市街地の人々に潤いを与え文化の向上に寄与する為、希望と秩序のある美しい街「都市美」を推進すると共に美術文化の顕揚発展を期してその健全な育成を図ることを目的としている。都市美に関する研究、啓蒙、宣伝、測量、設計、製作、施行、美術講演会、出版物の刊行、その他目的達成上必要と認められた事業を行ふ。機関紙「都市美」毎月発行。

〔顧問〕 和田英作、山下新太郎、石井柏亭、金山平三、有島生馬(相談役) 杉山司七、望月信成、村野藤吾 (理事長) 美津島 一 (理事)(常務) 和田新、中

山一男、木下孝則、石川滋彦、小山敬三、吉田久藏、山下登、真野紀太郎(会員) 六〇名、各府県知事、市長、商工会議所会頭は協力会々員

日本板画院(版) 杉並区荻窪四ノ五七 棟方志功方(電荻窪五三〇一) 昭和27年5月創立。同30年9月第5回展開催。〔顧問〕 裕伊之助、富本憲吉、梅原龍三郎、藤懸静也、森口多里、植村鷹千代、石井雙石、富永憲一、滝口修造、今泉篤男、式場隆三郎、平橋田中、河北倫明、秋田雨雀

〔会員〕 棟方志功、棟方未華、大沢竹胎、ブブノワ、笹島喜平、北川民次、下沢木鉢郎、長谷川富三郎、金守世志夫、木内克、永瀬義郎、沢田晴広、岡村吉右衛門、芹沢銚介、セリサワ・スイラ、レオンゴールデン、野村候三、山本道子、斎藤徳三郎、永礼孝二、森本木羊子、河村俊子、萩原吉二、高田一夫、松尾少輔、佐藤米次郎

日本版画協会(版) 杉並区高円寺三ノ一八〇 関野準一郎方(電中野九〇二七) 大正7年創立の日本創作版画協会が昭和6年版画家の大同団結をはかり改組したものの、昭和31年4月第24回展開催。

〔会長〕 石井鶴三 (常務委員) 畦地梅太郎、前田政雄、品川工、北岡文雄、関野準一郎、駒井哲郎、斎藤清、吉田遠志、吉田政次 (会務委員) 前川千帆、武井武雄、初山滋、平塚運一、橋本興家、若山八十氏、稲垣知雄、塚本哲、川西英 (会員) 織田一鷹、川上澄生、前田藤四郎、ブブノワ、吉田穂高、浜田知

明、浜口陽三他一〇〇余名
日本美術院(日・彫) 台東区谷中上三崎南町五二(電駒込四五一〇) 明治31年10月、当時東京美術学校長を退いた岡倉覚三を盟主とし、橋本雅邦以下二十六名を正員として結成。「新時代における東洋美術の維持並開發」が創立に際しての二大主張であつた。同年10月第1回展を開催、研究所を下谷中初音町に設置して後進の養成に努め雑誌「日本美術」を発刊、

同39年12月に至り一時東京の研究所を撤廃、同人四名は岡倉覚三と共に常陸の五浦に退去し専念研鑽に努めたが、大正2年岡倉覚三病歿するに及び、直ちに院の再興を画し新に院舎を谷中上三崎南町に起し翌3年9月開院式を挙行、10月再興第1回展を開催した。再興に當つたのは横山大観、下村観山、木村武山、安田靉彦、今村紫紅、小杉未醒、辰沢延次郎、笹川種郎、斎藤隆三等で其中実技者六名を以て同人とした。再興美術院には彫

刻部並に洋画部を設けたが洋画部は大正9年小杉未醒、山本鼎、倉田白羊等の脱退と共に消滅した。毎年秋期に公募展を開き、又春季には内部の試作展を開く。大正10年米國クリブランド美術館の要請に応じ、同国主要都市六箇所に巡回展を開き、以後日本美術の海外紹介にも努めた。昭和10年帝院改組に際して、同人合議の上新帝院への参加を声明し、横山

大観、安田靉彦、小林古径、前田青邨、富田溪仙、平橋田中、佐藤朝山、藤井浩佑の八名が会員に就任した。昭和31年9月第41回展開催。

〔経営者・同人〕 横山大観、安田靉彦、小林古徑、前田青邨、大智勝麿、平櫛田中〔経営者幹理〕 斎藤隆三〔同人〕 佐藤清蔵、石井鶴三、保田龍門、真道黎明、郷倉千穂、堅山南風、酒井三良、富取風堂、喜多武四郎、新海竹蔵、大内青圃、奥村土牛、小倉遊亀、田中青坪、山本豊市、太田聰雨、中村貞以、中村直人、宮本重良、松原松造、村田徳次郎、関谷充、新井勝利、北沢映月、辻晋堂、小谷津任牛、小松均、古藤正雄、中島清、片岡球子、中島多茂都、岩橋英速、桜井祐一、田中太郎、千野茂、基俊太郎、

日本美術会 新宿区上落合二ノ六三〇
箕田源二郎方 昭和21年創立。日本美術の自由で民主的な発展と、その新しい価値の創造を目的とする広汎な美術家の自主的なあつまりである。毎年アンデパンダン展開催。同31年第9回展開催。機関誌「美術運動」を発行。国民美術運動の推進を目的とする。

〔常任委員〕 井上長三郎、永井潔、箕田源二郎、新海覚雄、吉井忠、高柳博也、金野新一、中谷泰、佐田勝、須山計一、佐藤忠良、朝倉撰、小野忠重、鳥居敏、尾藤豊、中山正、藪田猛、桜井誠、飯島俊一、小室寛、中島保彦、大塚陸、中村宏、桂川寛、森田信夫、天野三郎、中神潔、高井寛二、渋谷草三郎、池田龍雄、針生一郎

日本美術家連盟 台東区上野公園東京都美術館内〔電駒込三七二六―七、六二九五〕昭和24年6月創立。美術家の個人加盟によって組織し美術家の職能組合として権益の擁護、相互扶助、其他文化に寄与するための諸事業を行う。

〔会長〕 前田青邨〔委員長〕 伊原宇三郎〔委員〕 六〇名〔正会員〕 一〇〇二名
日本美術協会 台東区上野公園桜ヶ丘〔電駒込二九一〇〕明治12年創立の龍池会を同20年日本美術協会と改称し財団法人組織とした。毎年展覧会を継続して太平洋戦争までに一四五回に及んだ。本邦美術の振興をはかるを以て目的とし、戦後組織を新たに各流各派を綜合融和した方針を以て絵画展を東京並びに各地で開催している。昭和30年第8回展開催。

〔総裁〕 高松宮宣仁親王〔顧問〕 細川護立、浅野長武、岡部長景、横山大観、川合玉堂、他一五名〔理事〕 島山一清、長尾欽弥、团伊能、秋山光夫〔会頭〕 团伊能〔専務理事〕 秋山光夫〔常任委員長〕 松林桂月〔常任委員〕 二二名〔委員〕 四七名

日本木彫会〔影〕 北区上十条五ノ九ノ二 三回慶一方 昭和4年創立。昭和30年4月第15回展開催、31年6月創立25周年記念展開催。

〔会員〕 石井滋、長谷川昂、西田明史、岡正敏、内藤伸、内藤四郎、中野桂樹、熊谷幸太郎、日下寛治、山脇敏男、山脇正司、山口伊之助、古川武治、佐々木大樹、木村威夫、三國慶一、水島弘一、清水源可、森野円象、大島駒蔵

人形玩具文化の会 板橋区常盤台一ノ二九 西沢笛方〔電板橋二二〇一〕

昭和11年創立。同25年財団法人となる。近時欧米人の日本人形に対する関心が深いので、特に蒐集の古代人形参考品を研究所内に陳列観賞に供している。

〔会長〕 金森徳次郎〔理事長〕 西沢笛方〔理事〕 板谷波山、团伊能、佐藤達夫、鈴木隆夫、品田豊治

能彫会〔影〕 目黒区下目黒三ノ六五七 後藤良方 昭和22年創立。戦前能美会として出発したが発表展を九回継続して20年に中止、戦後新たに再出発した。流派を問わず能の真髓を彫刻によつて表現しようとする同好の士の集りである。毎年一回展覧会を行う。昭和31年10月第10回展開催。

〔会員〕 石井鶴三、入江美法、畑正吉、花岡幸雄、花里金典、綿引司郎、吉田満、吉田晴禾、横山正三、中野素島、梅田修、藤野舜正、後藤良、後藤光行、紺谷英儀、北村治禎、宮本光庸、柴田佳石、昼間弘、門伝正衛、毛利教武、関谷充、須賀東葉、鈴木仁亮

白鳥会〔洋〕 豊島区高松町一ノ六 伊藤彰方 昭和27年7月創立。昭和30年9月第3回展開催。

〔会員〕 熊谷守一、藤田鶴夫、多田栄二、鳥居敏文、島津純一、賀茂牛之輔、伊藤彰、江川平三、福島金一郎、志村一男、千葉健作、坂本益夫、清川泰次、小林森次

白日会〔洋・彫〕 杉並区成宗一ノ二七 八 伊藤清永方 大正13年創立。昭和30年3月第31回展開催。

〔会員〕〔絵画部〕 千葉精三、福田義之助、古川弘、灰野文一郎、平松讓、広本了、堀英治、伊藤清永、伊藤利行、岩月光金、石崎五郎、東理次良、川口栄、川村精一郎、川島英、小堀進、小林一雄、間部時雄、牧野萬之助、水野富美夫、村上鉄太郎、森谷重夫、長井幸一、中沢弘光、大崎善生、酒泉淳、島田四郎、篠原薫、坂上明司、笹口淳、富山芳男、内山又輔、渡部百合子、山本道乗、吉田比古蔵、柳沢淑郎、青木春見、宮島武男、田中君江、山田鶴左久、難波栄子、柴田祐作、西田耕作、町田源三郎、安井藤三郎、中兼久偉、藤井幾太郎〔彫刻部〕 星野宣、伊奈重孝、伊藤五百亀、木村珪二、菊岡義政、兒島正典、小池藤雄、坂手讓、笹野恵三、富田匠美、内堀功、吉田三郎

白申社〔日〕 京都市北区北野白梅町三三 宇田我郎方〔電西陣二二四六〕宇田我郎の主宰する日本画塾

白鳳会〔洋〕 中野区沼袋五六〇 篠窪亮方 昭和15年創立。昭和29年10月第12回展開催。昭和16年東京美術学校油画科藤島教室を卒業した一〇名に依り創設した。

〔会員〕 井上慎、加藤長一、北岡文雄、小泉富司、吳天華、鮫島宗明、篠窪亮、富田肇三、高田久、松永敏太郎、松永和夫、安田寛、吉野広行、吉田政次、原良次、友沢泰男、浅井忠男、大里光春

啓、宮崎利行、岩倉正仁、加藤一夫、土井俊生、村上馨、香川勇、戸川金雄、村岡和雄、入来天、川元進、内藤健一、森宏平、宇佐美晴海、近藤正治、羽坂清、山崎貴英子、内田慎蔵、島津純一、長谷川望、山田武彦、太田一男、白木正一、早瀬龍江、大和秋平、大野英一、須賀卯夫、原田圭司、岡田徹、竹村文男、福沢一郎、幸寿、多田雄蔵、藤田鶴夫、吉田隆、尾崎喜久雄、竜山恭輔、増田彰、加藤承、清川泰次、井上市三郎、内山牛松、石井国義、米田三男之助、田中重木男、佐伯和美、千田健二、笹川由為子、石井玲一、庭田定男、池原正男、野村基義、伊藤直介、中村博、千葉健作

崎栄伸、鈴木信春、野坂法山、西川宗舟、萩原雅春

年5月第10回展開催。
〔主宰者〕 平子聖龍

〔同社(日)〕 世田谷区玉川奥沢町三ノ一四二 上野泰郎方 昭和28年8月創立。新制作、院展、日展に出品している新進日本画家達の集り。昭和31年7月第3回展開催。

〔主宰者〕 平子聖龍

〔同社(日)〕 世田谷区玉川奥沢町三ノ一四二 上野泰郎方 昭和28年8月創立。新制作、院展、日展に出品している新進日本画家達の集り。昭和31年7月第3回展開催。

〔主宰者〕 平子聖龍

〔同社(日)〕 世田谷区玉川奥沢町三ノ一四二 上野泰郎方 昭和28年8月創立。新制作、院展、日展に出品している新進日本画家達の集り。昭和31年7月第3回展開催。

〔主宰者〕 平子聖龍

〔同社(日)〕 世田谷区玉川奥沢町三ノ一四二 上野泰郎方 昭和28年8月創立。新制作、院展、日展に出品している新進日本画家達の集り。昭和31年7月第3回展開催。

〔主宰者〕 平子聖龍

〔同社(日)〕 世田谷区玉川奥沢町三ノ一四二 上野泰郎方 昭和28年8月創立。新制作、院展、日展に出品している新進日本画家達の集り。昭和31年7月第3回展開催。

〔主宰者〕 平子聖龍

〔同社(日)〕 世田谷区玉川奥沢町三ノ一四二 上野泰郎方 昭和28年8月創立。新制作、院展、日展に出品している新進日本画家達の集り。昭和31年7月第3回展開催。

〔主宰者〕 平子聖龍

俊子、辻茂

(九)

レアル美術会(洋) 世田谷区赤堤町一

ノ一三 野崎利喜男方 昭和27年9月創立。一水会々員一三名により設立。昭和28年3月第1回展開催。昭和30年解散。

〔会員〕 福田新生、林鶴雄、池辺一郎、金丸直衛、中畑岬人、中川力、野崎利喜男、尾崎正章、高橋貞一郎、高森捷三、筒井広道、矢野雄蔵

黎明美術研究会(洋) 目黒区中目黒四

ノ一三二二 松村禎夫方 昭和18年4月創立。基礎理論の徹底、新技法の習得、構図学の研究等を目的とする。月一回例会、会報レイメイを発行している。

〔会長〕 柳亮〔会員〕 二六三名

連袖会(洋) 大田区馬込東一ノ一〇六

○ 山川勇一郎方 昭和12年安井會太郎の門下を以て組織、昭和31年月第18回展開催。

〔会員〕 広瀬功、本郷惺、金子博信、狩野寿一、加藤水城、木村辰彦、児島三吉、中村琢二、二宮雪夫、丸野豊司、三浦俊輔、岡本半三、小野末、大津鎮雄、竹中恵美子、菅野矢一、高田誠、高見耿太郎、寺田春弼、幸雅二、山川勇一郎、松本恵子、皆吉志郎、内田如風、生野雅三

(三)

六窓会(綜) 世田谷区等々力三ノ七五

三 黒田嘉治方 東京美術学校昭和6年

卒業の同窓を以て昭和25年創立。昭和29年4月第5回展開催。昭和30年度の展覧会は休み、以後展覧会は毎年開催とせず随時開催とする。

〔会員(日本画)〕 橋本明治、加藤栄三、山田申吾、東山魁夷、(洋画) 伊勢正義、大貫松三、佐藤敬、須田寿、(彫刻) 長沼孝三、野々村一男、大須賀力、黒田嘉治 (建築) 吉村順三 (工藝) 内藤四郎
 朗筆画塾(日) 鎌倉市山の内瓜ヶ谷一
 ○三四 伊東深水方 (電鎌倉二四六三)
 伊東深水の主宰する日本画塾 会務代表者 杉並区成宗二ノ七一八 浜田台児

美術家及美術関係者名簿

昭和三十一年一〇月現在

凡 例

一、本名簿にのせた美術家及美術関係者の数は一六二九名である。我が国において、美術家として社会的地位を有する人々を採録した。不備の点は次年度に補いたい。

一、名簿は氏名の頭文字の発音により五〇音順に記載した。発音の同じ場合は字劃の少ないものを先にし、頭文字の同じものは二字目の発音により、その発音の同じ場合は字劃の少ないものを先に掲げた。但し同字は訓音の異なるものもなるべく一箇所に集めた。安宅、安達、安西、安藤等を同一箇所に掲げた如くである。

一、名簿に用いた略語は左の通りである。

- (日) 日本画 (洋) 洋画 (挿) 挿画 (版) 版画 (漫) 漫画 (彫) 彫塑
- (工) 工藝 (漆) 漆工藝 (陶) 陶磁 (金) 金工藝 (染) 染色 (織) 織物
- (繡) 刺繡 (硝) 硝子工藝 (建) 建築 (写) 写真 (記) 美術記者 (文) 文化財事務局 文化財保護委員会事務局 (文化財専審委) 文化財専門審議会 専門委員 (日展) 日本美術展覧会 (日展無) 日本美術展覧会無鑑査 (日展依) 日本美術展覧会出品依頼者 (日展審) 日本美術展覧会審査員 (日展参事) 日本美術展覧会運営会参事 (日展理事) (日展常任理事) 日本美術展覧会運営会理事、同常任理事 (東京藝大) 東京藝術大学 (東美校) 東京美術学校 (京都美術大) 京都市立美術大学 (京都絵専校) 京都市立絵画専門学校 (京都美専校) 京都市立美術専門学校 (女子美大) 女子美術大学 (女子美校) 女子美術学校・女子美術専門学校 (帝国美校) 帝国美術学校 (日美校) 日本美術学校 (大阪美術校) 大阪美術学校 (東京高工藝校) 東京高等工藝学校 (東京高工業校) 東京高等工業学校 (京都高工藝校) 京都高等工藝学校 (名古屋工業校) 名古屋高等工業学校 (京都美工藝校) 京都市立美術工藝学校、其他これに準じた。
- 一、日展依、日展審は昭和三二年第一二回日本美術展覧会の出品依頼者、審査員を示す。元日展審は日本美術展覧会運営会、日本藝術院共催による昭和二四年第五回日展から昭和三〇年第一一回日展迄の間の審査員を示す。
- 一、住所中東京都のみは都名を略して区名を以て始めた。

「美術家及美術関係者名簿」 ページ (298～334 ページ)

個人情報保護のため非公開

Pages of the list of Artists and Experts in Art (pp.298-334)

Cut for protection of the personal information

美術関係定期刊行物一覽 (五〇音順)

ア ト リ エ 月刊、編輯北原義雄、発行アトリエ出版社、千代田区神田
神保町三ノ一三、電九段二五七五・二五七六

季刊文化財 月刊、発行文化財保護委員会、千代田区霞ヶ関三ノ四
編輯金丸重嶺、発行日本藝術学会、文京区本富士町東大文
学部美術史研究室内

藝術新報 月刊、編輯佐藤義夫、発行新潮社、新宿区矢来町七一、電
3471-1171-119

建築史研究 月刊、編輯建築史研究会(藤島亥治郎)、発行彰国社、千代
田区平河町二ノ一一、電九段二九三・二八五一・四五二三・
一七四五

建築雜誌 月刊、編輯北村正雄、発行日本建築学会、中央区銀座西三
ノ一、電京橋一二三三・一二三八・四五七二

建築文化 月刊、編輯金春国雄、発行彰国社、千代田区平河町二ノ一
一、電九段二九三・二八五一・四五二三

工藝研究 月刊、編輯工藝学会編集委員会、発行財団法人工藝学会、
港区麻布三河台町二四、電赤坂一〇三四

工藝ニュース 月刊、編輯通商産業省産業工藝試験所、発行丸善株式会社
出版部、中央区日本橋、電千代田二三一一・三三五一・二三
六一

考古學雜誌 月刊、編輯日本考古学会(原田淑人)、発行日本考古学会、
台東区上野公園東京国立博物館内、電駒込三七七一・三三七
一五

國華 月刊、編輯藤懸静也、発行国華社、港区麻布市兵衛町二ノ
一、電赤坂一七五二

國際建築 月刊、編輯國際建築協会(小山正和)、発行美術出版社、新
宿区市ヶ谷木村町一五、電九段五五一・一四

國立近代美術館ニュース(現代の眼) 月刊、編輯原敏夫、発行近代美術協会、中央区京橋三ノ一
一、電京橋八二三・一五

國立博物館ニュース 月刊、編輯野間清六、発行國立博物館、台東区上野公園、
電駒込三七一一・三三七五

古文化財之科学 編輯大賀一郎、発行古文化資料自然科学研究会、台東区上
野公園 東京国立博物館研究室内

三彩 月刊、編輯藤本昭三、発行美術出版社、新宿区市ヶ谷木村
町一五、電九段五五一・一四

史迹と美術 月刊、編輯川勝政太郎、発行史迹美術同致会、京都市北区
紫野下柳町一四、電西陣五九五六

秀作美術 年二回刊、編輯田島敬助、発行秀作美術社 台東区西黒門
町二一、電下谷六八九〇

書品 月刊、編輯庄司一夫、発行東洋書道協会、中央区京橋二ノ
三 電京橋三〇四・二七八一・三八五六

新建築 月刊、編輯吉岡保五郎、発行新建築社、中央区宝町一ノ六
電京橋四七五二・四三〇六

染色美術 編輯本吉春三郎、発行日本染織美術協会、世田ヶ谷区上馬
町一ノ六〇七、第一四号(一七年七月発行)以降休刊

日本工藝 月刊、編輯工藝研究会、発行芸艸堂、京都市中京区寺町二
条南入、電上三六一三、文京区湯島一ノ一、電神田五八四
〇

造型 月刊、編輯井手義男、発行造形同人会、豊島区池袋四ノ三
九一、電池袋三八一四

淡交 月刊、編輯千嘉治、発行淡交社、京都市上京区堀川通寺ノ
内上ル、電西陣一五〇七・一五〇八

彫塑 編輯沢田晴広、発行日本彫塑家俱樂部、台東区谷中初音町
三ノ五

刀劍美術 編輯宮崎芳樹、発行日本刀劍美術保存協会、台東区上野公
園 東京国立博物館内

陶說 月刊、編輯梅沢彦太郎、発行日本陶磁協会、中央区東銀座
二ノ一一、電(東京54)八一五〇

東邦美術 月刊、編輯小野修三、発行東邦美術社、豊島区千早町二ノ
三、電落合五二六九

都市美術 月刊、発行財団法人日本都市美術推進連盟、大阪市北区堂島
上一ノ三二、電大阪3467・五一一六

印刷 昭和32年1月17日

発行 昭和32年2月25日

日本美術年鑑

—昭和31年版—

編集者 東京国立文化財研究所美術部
(美術研究所)

印刷所 大蔵省印刷局
東京都新宿区市谷本村町15
電話(調) 531~9

発行所 東京国立文化財研究所
東京都台東区上野公園
電話 駒込 4487. 1923
